千葉県文化財センター調査報告第468集

千葉東南部ニュータウン30

── 千葉市伯父名台遺跡 ──

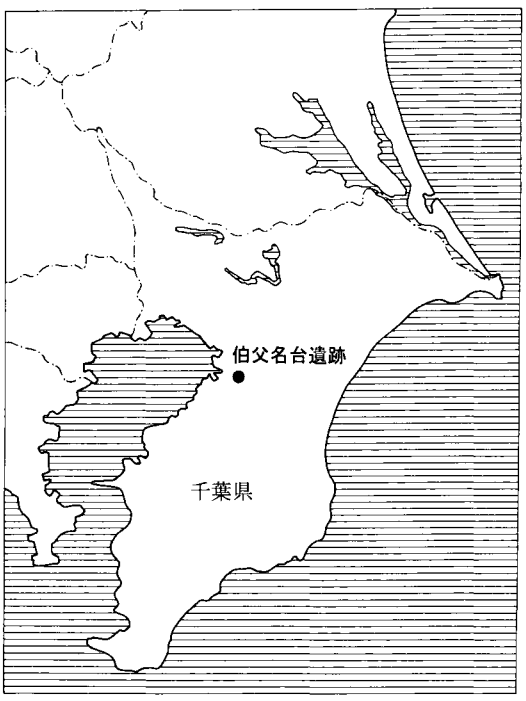
平成16年３月

都　市　基　盤　整　備　公　団

財団法人　千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン30

── 千葉市伯父名台遺跡 ──



序　　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第468集として，都市基盤整備公団の千葉東南部地区土地区画整理事業に伴って実施した千葉市伯父名台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，古墳時代から平安時代にかけての集落跡のほか，中世の村落や堀跡が発見されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際しご指導，ご協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年３月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　清水新次

凡　　例

1　本書は，都市基盤整備公団千葉地域支社による千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉市緑区おゆみ野南１丁目６番地他（旧千葉市緑区椎名崎町312-1）に所在する伯父名台遺跡（遺跡コード 201-105）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，都市基盤整備公団千葉地域支社の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織，担当者及び実施期間は，第１章に記載した。

5　本書の編集・執筆は，第１章から第６章を関口達彦，附章を西野雅人が担当した。

6　中世陶磁器については，房総風土記の丘資料館　井上哲朗氏に御教示いただいた。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，都市基盤整備公団千葉地域支社，千葉市教育委員会ほか多くの方々から御指導，御協力を得た。

8　本書で使用した周辺航空写真は，京葉測量株式会社による昭和47年に撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。座標系は，日本測地系を使用した。

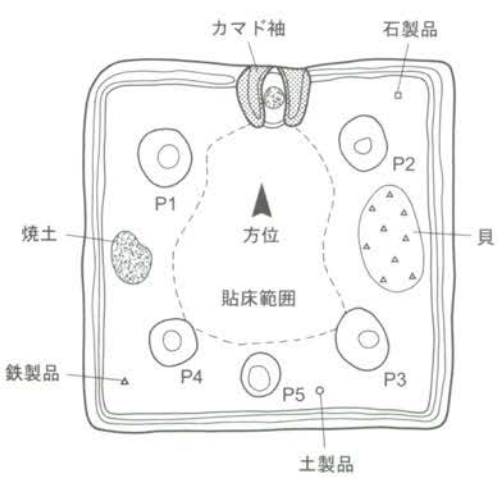
10　本書の遺構及び遺物の縮尺は，以下を基準とするが，作図の都合で統一されなかったものもある。

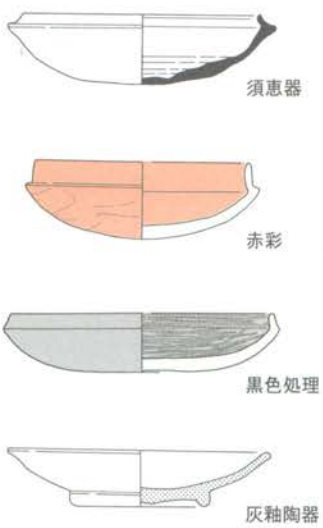
　竪穴住居跡・掘立柱建物跡　1/80　　カマド　1/40　　陥穴・炉穴・地下式坑・土坑　1/60

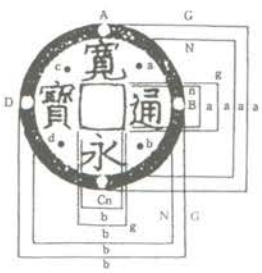
　小鍛冶遺構　1/40・1/20　　古墳・台地整形区画・溝状遺構　1/200　　周溝遺構　1/100

　土器・支脚　1/4　　石製品・金属製品・玉類　1/2　　拓影　1/3・1/1

11　本書の挿図の用例は，次のとおりである。







※銭貨の各計測点については以下のとおり。

外縁外径 $G = \frac{Ga + Gb}{2}$

外縁内径 $N = \frac{Na + Nb}{2}$

内郭外径 $g = \frac{ga + gb}{2}$

内郭内径 $n = \frac{na + nb}{2}$

外縁厚 $T = \frac{A + B + C + D}{4}$

文字面厚 $t = \frac{a + b + c + d}{4}$

本文目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
　第３節　調査の方法と経過 …… 5
第２章　縄文時代 …… 11
　第１節　竪穴住居跡 …… 11
　第２節　陥穴 …… 11
　第３節　炉穴 …… 13
　第４節　土坑 …… 20
第３章　古墳時代 …… 21
　第１節　竪穴住居跡 …… 21
　第２節　古墳 …… 89
　第３節　土坑 …… 92
第４章　奈良・平安時代 …… 94
　第１節　竪穴住居跡 …… 94
　第２節　掘立柱建物跡 …… 108
　第３節　土坑 …… 111
　第４節　円形周溝 …… 119
第５章　中　世 …… 121
　第１節　概要 …… 121
　第２節　道路状遺構 …… 122
　第３節　台地整形区画 …… 122
　第４節　堀跡，溝状遺構 …… 174
　第５節　出土遺物 …… 181
第６章　まとめ …… 193
附　章　貝サンプルの分析結果 …… 249
報告書抄録

挿図目次

第１図　千葉東南部地区事業範囲位置図 …… 3
第２図　千葉東南部地区遺跡分布図 …… 4
第３図　調査区及び周辺の地形 …… 6
第４図　小グリッド分割図 …… 7
第５図　遺跡全体図 …… 9･10
第６図　ＳＢ-049及び出土遺物 …… 11
第７図　陥穴 …… 12
第８図　炉穴（１） …… 14
第９図　炉穴（２） …… 16
第10図　炉穴（３） …… 17

第11図　炉穴(4) …… 18
第12図　炉穴(5) …… 19
第13図　SK-024及び出土遺物 …… 20
第14図　SB-001 …… 21
第15図　SB-006 …… 23
第16図　SB-006出土遺物 …… 24
第17図　SB-009及び出土遺物 …… 25
第18図　SB-012及び出土遺物 …… 26
第19図　SB-013及び出土遺物 …… 27
第20図　SB-014及び出土遺物 …… 28
第21図　SB-015及び出土遺物 …… 29
第22図　SB-018及び出土遺物 …… 31
第23図　SB-021及び出土遺物 …… 32
第24図　SB-022・SB-023及び出土遺物 …… 33
第25図　SB-024及び出土遺物(1) …… 35
第26図　SB-024出土遺物(2) …… 36
第27図　SB-025 …… 37
第28図　SB-025出土遺物 …… 38
第29図　SB-027及び出土遺物(1) …… 39
第30図　SB-027出土遺物(2), SB-029
及び出土遺物 …… 40
第31図　SB-030 …… 42
第32図　SB-030出土遺物 …… 43
第33図　SB-031及び出土遺物(1) …… 44
第34図　SB-031及び出土遺物(2) …… 45
第35図　SB-032及び出土遺物 …… 47
第36図　SB-033 …… 48
第37図　SB-033出土遺物 …… 49
第38図　SB-034及び出土遺物 …… 50
第39図　SB-035及び出土遺物(1) …… 51
第40図　SB-035出土遺物(2) …… 52
第41図　SB-036及び出土遺物(1) …… 53
第42図　SB-036出土遺物(2) …… 54
第43図　SB-037及び出土遺物(1) …… 55
第44図　SB-037出土遺物(2) …… 56
第45図　SB-038及び出土遺物 …… 57
第46図　SB-039及び出土遺物 …… 59
第47図　SB-040及び出土遺物(1) …… 60
第48図　SB-040出土遺物(2) …… 61
第49図　SB-041及び出土遺物(1) …… 62
第50図　SB-041出土遺物(2) …… 63
第51図　SB-042・SB-043及び出土遺物 …… 64
第52図　SB-044及び出土遺物 …… 65
第53図　SB-045及び出土遺物 …… 66
第54図　SB-048 …… 68
第55図　SB-048出土遺物 …… 69
第56図　SB-051及び出土遺物 …… 70
第57図　SB-052及び出土遺物 …… 71
第58図　SB-054及び出土遺物 …… 72
第59図　SB-055及び出土遺物 …… 73
第60図　SB-056及び出土遺物(1) …… 74
第61図　SB-056出土遺物(2) …… 75
第62図　SB-057・SB-058及び出土遺物 …… 76
第63図　SB-059及び出土遺物 …… 77
第64図　SB-060 …… 78
第65図　SB-061及び出土遺物 …… 79
第66図　SB-062及び出土遺物 …… 80
第67図　SB-064及び出土遺物 …… 81
第68図　SB-065及び出土遺物 …… 82
第69図　SB-066及び出土遺物 …… 83
第70図　SB-067及び出土遺物(1) …… 84
第71図　SB-067出土遺物(2) …… 85
第72図　SB-068 …… 86
第73図　SB-071及び出土遺物 …… 87
第74図　SB-075及び出土遺物 …… 88
第75図　SB-076 …… 89
第76図　SD-004 …… 90
第77図　SD-004出土遺物, SD-006 …… 91
第78図　SK-002・SK-207・SK-214
及び出土遺物 …… 93
第79図　SB-002・SB-003及び出土遺物 …… 95
第80図　SB-004・SB-005及び出土遺物 …… 97
第81図　SB-007・SB-008及び出土遺物,
SB-010 …… 98
第82図　SB-010出土遺物, SB-011及び
出土遺物 …… 99

第83図　ＳＢ-016・ＳＢ-017及び出土遺物 ‥‥101
第84図　ＳＢ-019・ＳＢ-020及び出土遺物‥‥ 103
第85図　ＳＢ-026・ＳＢ-046及び出土遺物‥‥ 104
第86図　ＳＢ-047・ＳＢ-050・ＳＢ-073
及び出土遺物‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 105
第87図　ＳＢ-077・ＳＢ-078及び出土遺物‥‥ 107
第88図　ＳＢ-053・ＳＢ-074及び出土遺物‥‥ 109
第89図　ＳＢ-070及び出土遺物‥‥‥‥‥‥‥ 110
第90図　平安時代土坑分布図‥‥‥‥‥‥‥‥ 112
第91図　平安時代土坑（１）‥‥‥‥‥‥‥‥ 113
第92図　平安時代土坑（２）‥‥‥‥‥‥‥‥ 114
第93図　平安時代土坑（３）‥‥‥‥‥‥‥‥ 115
第94図　平安時代土坑（４）‥‥‥‥‥‥‥‥ 116
第95図　平安時代土坑（５）‥‥‥‥‥‥‥‥117
第96図　ＳＸ-013及び出土遺物，ＳＫ-296‥‥ 119
第97図　ＳＤ-014及び出土遺物 ‥‥‥‥‥‥120
第98図　第１整形区画と周辺‥‥‥‥‥ 123･124
第99図　第１整形区画，ＳＤ-025・035・036
土層断面図‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 126
第100図　第１・掘立柱建物跡（１）
及び柵列（１）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 129
第101図　第１・掘立柱建物跡（２）‥‥‥‥ 130
第102図　第１・掘立柱建物跡（３）‥‥‥‥ 131
第103図　第１・掘立柱建物跡（４）
及び柵列（２）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 132
第104図　第１・掘立柱建物跡（５）
及び柵列（３）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 134
第105図　第１・ＳＣ-005 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 135
第106図　第１・方形竪穴遺構（１）‥‥‥‥ 137
第107図　第１・方形竪穴遺構（２）
及び土坑（１）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 138
第108図　第１・方形竪穴遺構（３）
及び土坑（２）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 140
第109図　第１・方形竪穴遺構（４）
及び土坑（３）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 141
第110図　第１・土坑（４）‥‥‥‥‥‥‥‥ 142
第111図　第１・土坑（５）‥‥‥‥‥‥‥‥ 143
第112図　第１・ＳＢ-063・ＳＢ-072
及び出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 144
第113図　第１・大型不整形竪穴 ‥‥‥‥‥‥ 145
第114図　第１・ＳＫ-226 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 146
第115図　第１・地下式坑（１）‥‥‥‥‥‥‥ 147
第116図　第１・地下式坑（２）‥‥‥‥‥‥‥ 148
第117図　第１・ＳＫ-177 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 149
第118図　第２整形区画と周辺 ‥‥‥‥‥‥‥ 150
第119図　第２・掘立柱建物跡（１）‥‥‥‥ 152
第120図　第２・掘立柱建物跡（２）
及び柵列 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 153
第121図　第２・土坑 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 154
第122図　第２・ＳＫ-194 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 155
第123図　第２・ＳＫ-189 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 155
第124図　第３整形区画と周辺 ‥‥‥‥‥‥‥ 157
第125図　第３・掘立柱建物跡（１）
及び柵列 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 158
第126図　第３・掘立柱建物跡（２）‥‥‥‥ 159
第127図　第３・方形竪穴遺構及び土坑（１）‥ 161
第128図　第３・土坑（２）‥‥‥‥‥‥‥‥‥162
第129図　第３・地下式坑（１）‥‥‥‥‥‥‥ 163
第130図　第３・地下式坑（２）‥‥‥‥‥‥‥ 164
第131図　第４整形区画と周辺及び出土遺物 ‥ 165
第132図　第４・方形竪穴遺構（１）及び土坑（１），
ＳＫ-166 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 167
第133図　第４・方形竪穴遺構（２）
及び土坑（２）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 168
第134図　第４・ＳＸ-008及び出土遺物 ‥‥‥169
第135図　第５整形区画及び出土遺物 ‥‥‥‥ 171
第136図　第６整形区画及び出土遺物 ‥‥‥‥ 172
第137図　第７整形区画及び出土遺物 ‥‥‥‥173
第138図　堀跡，溝状遺構（１）‥‥‥‥‥‥‥176
第139図　溝状遺構（２）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 177
第140図　溝状遺構（３）‥‥‥‥‥‥‥‥‥178
第141図　溝状遺構（４）‥‥‥‥‥‥‥‥‥179
第142図　溝状遺構（５）‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 180
第143図　貿易陶磁器 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 181
第144図　瀬戸･美濃 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥182

第145図　常滑 …… 183
第146図　土器 …… 184
第147図　鉄製品 ……186
第148図　石製品(1) …… 187
第149図　石製品(2) ……188
第150図　石製品(3)，土錘 ……189
第151図　銭貨 ……190
第152図　中世陶磁器組成 ……201
第153図　中世陶磁器・遺構出土分布図 ‥ 208･209
第154図　中世陶磁器・グリッド出土分布図 ‥ 210
第155図　貝種組成 …… 252
第156図　貝類計測値分布 …… 254

表　目　次

第１表　陥穴一覧 …… 13
第２表　平安時代土坑一覧…… 118
第３表　砥石計測表 ……191
第４表　土錘計測表 ……191
第５表　銭貨計測表…… 192
第６表　中世陶磁器遺構別組成表(1)～(3)‥ 202
第７表　中世陶磁器破片組成表・遺跡全体 ‥‥211
第８表　中世陶磁器破片組成表・
　　第１整形区画…… 211
第９表　古墳時代竪穴住居跡一覧…… 212
第10表　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧…… 213
第11表　土器観察表(1)～(28)…… 214
第12表　中世土坑一覧(1)～(2) ……242
第13表　中世陶磁器・土器観察表(1)～(4)‥ 244
第14表　貝サンプル一覧…… 249
第15表　貝類種名一覧…… 249
第16表　貝類同定結果…… 252
第17表　付着痕分類別のSK-062マガキ殻長‥‥ 255

図版目次

附図版　ＳＫ-062出土フジツボ類
図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　遺跡全景(東から・平成６年度)
図版３　ＳＢ-049，ＳＫ-023・027・028・029・030・040・041・062・063
図版４　ＳＢ-001・006・009・012・013・014・015
図版５　ＳＢ-018・021・022・024・025・027・029
図版６　ＳＢ-030・032・034・035・036・037・039・041
図版７　ＳＢ-042・044・052・054・055・056・058・061
図版８　ＳＢ-064・065・066・067・068・071・075・002・004
図版９　ＳＢ-005・007・008・010・011・016・017・019・020
図版10　ＳＢ-026・046・047・073・077・078・053・074，ＳＫ-212
図版11　ＳＫ-022・037・039・045・051・052・079・090・157
図版12　中世・台地整形区画航空写真
図版13　第３整形区画全景
図版14　第１整形区画全景(西側)
図版15　第１整形区画全景(東側)
図版16　第２整形区画全景
図版17　遺跡北西部(南東から)
　　遺跡北西部(北から)
図版18　ＳＤ-001・003全景
　　ＳＤ-001土層断面
図版19　第５整形区画(南東から)
　　第６整形区画(南から)
図版20　第７整形区画(東から)
　　第７整形区画(南から)

図版21　ＳＢ-063・072,　ＳＫ-115・175
図版22　ＳＫ-177・191・194・189・209・208
図版23　ＳＸ-005・008,　ＳＫ-001・010・011
図版24　縄文土器（１）
図版25　縄文土器（２）
図版26　古墳時代出土土器（１）
図版27　古墳時代出土土器（２）
図版28　古墳時代出土土器（３）
図版29　古墳時代出土土器（４）
図版30　古墳時代出土土器（５）
図版31　古墳時代出土土器（６）
図版32　古墳時代出土土器（７）
図版33　古墳時代出土土器（８）
図版34　古墳時代出土土器（９）
図版35　古墳時代出土土器(10)
図版36　古墳時代出土土器(11)
図版37　古墳時代出土土器(12)
図版38　古墳時代出土土器(13)
図版39　古墳時代出土土器(14)
図版40　古墳時代出土土器(15)
図版41　奈良・平安時代出土土器（１）
図版42　奈良・平安時代出土土器（２）
図版43　奈良・平安時代出土土器（３）
　　平安時代土坑
図版44　中世陶磁器・土器
図版45　貿易陶磁器
　　瀬戸･美濃（１）
図版46　瀬戸･美濃（２）
　　常滑
図版47　石製紡錘車
　　硯
　　玉類
　　土錘
図版48　土玉
　　鉄製品（１）
図版49　鉄製品（２）
図版50　鉄製品（３）
　　砥石（１）
図版51　砥石（２）
　　石製品
図版52　砥石（３）
　　銭貨

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

住宅・都市整備公団（現　都市基盤整備公団）は，首都圏の人口増加に対応するため，千葉東南部地区土地区画整理事業として大規模な宅地造成を計画した。このため，千葉県教育委員会では昭和46年に実施した事業地内の遺跡分布調査の結果に基づき，所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議を重ねてきた。その結果，可能な限り公園や緑地として現状保存をはかる一方，やむを得ず現状保存が困難な遺跡については記録保存の措置を講ずることとなり，財団法人千葉県文化財センターが住宅・都市整備公団から委託を受け，発掘調査を実施してきた。

今回報告する伯父名台遺跡は，記録保存の措置を講ずることで協議が整い，19,700㎡を対象に当文化財センターが平成５・６年度の２次にわたって発掘調査を実施した遺跡である。調査の結果，縄文時代の竪穴住居跡１軒・陥穴７基・炉穴14基，古墳時代の竪穴住居跡51軒・古墳２基・土坑３基，奈良･平安時代の竪穴住居跡19軒・掘立柱建物跡３棟・小鍛治遺構１基・土坑33基，中世の台地整形区画７か所・道路状遺構１条・溝状遺構35条・地下式坑７基・火葬施設３基や多数の土坑などの遺構を検出した。なかでも，中世の村落の様相を明らかにすることができたことは，大きな成果といえよう。

平成７年度に水洗・注記を行い，平成９年度からは本格的な整理作業が開始され，平成15年度をもって報告書刊行の運びとなった。発掘調査及び整理作業の各年度の実施期間，組織及び作業内容は下記のとおりである。

発掘調査

平成５年度

期　　間　　平成５年４月６日から平成５年９月６日（１次）
　　平成６年１月６日から平成６年３月29日（２次）

組　　織　　千葉調査事務所長　深澤克友
　　担当職員　主任技師　菅原　修，主任技師　小高春雄

内　　容　　確認調査　上層1,970㎡　下層112㎡，本調査 上層3,660㎡　下層0㎡（１次）
　　本 調 査　上層5,890㎡（２次）

平成６年度

期　　間　　平成６年４月１日から平成６年８月12日

組　　織　　千葉調査事務所長　田坂　浩
　　担当職員　副所長　関口達彦，主任技師　菅原　修，技師　百瀬幸徳

内　　容　　確認調査　上層－㎡　下層348㎡，本調査 上層8,700㎡　下層0㎡

整理作業

平成９年度

期　　間　　平成９年７月１日から平成９年８月29日

組　　織　　中央調査事務所長　藤崎芳樹
　　担当職員　主任技師　山田貴久

内　　容　　記録整理の一部

平成１０年度

期　　間　　平成10年５月１日から平成10年８月31日，平成10年11月２日から平成11年３月31日

組　　織　　中央調査事務所長　石田廣美

担当職員　主任技師　四柳　隆

内　　容　　記録整理の一部から復元まで

（重点遺跡整理促進事業）

期　　間　　平成10年７月１日から平成11年３月31日

組　　織　　整理課長　佐久間　豊

担当職員　主任技師　渡邉修一　　整理技術員　木島桂子，大久保奈奈

内　　容　　実測から写真撮影の一部

平成１１年度

期　　間　　平成11年４月１日～平成11年６月30日

組　　織　　中央調査事務所長　石田廣美

担当職員　主任技師　四柳　隆

内　　容　　挿図・図版作成の一部

平成１２年度

期　　間　　平成13年４月１日から平成13年６月30日

組　　織　　中央調査事務所長　三浦和信

担当職員　研究員　四柳　隆

内　　容　　挿図・図版作成の一部から原稿執筆の一部

平成１５年度

期　　間　　平成15年４月１日から平成15年９月30日

組　　織　　中央調査事務所長　谷　旬

担当職員　上席研究員　関口達彦

内　　容　　原稿執筆の一部から報告書刊行

第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡

１　遺跡の位置（第１図）

伯父名台遺跡は，千葉市緑区おゆみ野南１丁目６番地他に所在する。

緑区は千葉市の東南部に位置し，南は村田川を境として市原市と接し，ＪＲ外房線や千葉東金道路，千葉外房有料道路などが通っている。本遺跡の所在する千葉東南部地区は，ＪＲ外房線鎌取駅の南側に広がり，現在も「おゆみ野」として新しい街づくりが展開している地域である。

千葉市は千葉県の北東部に位置し，東京湾を西に臨み，内陸には房総半島の北部一帯を占める広大な下総台地が展開している。この台地は無数の小支谷によって開析され，東京湾岸には海岸平野，三角州などの沖積低地が形成されている。千葉東南部地区は，千葉市と市原市の境を流れ東京湾に流入する村田川の

第１図　千葉東南部地区事業範囲位置図（1/80,000）

下流域右岸に位置し，台地はこの村田川に注ぎ込む支谷によって樹枝状に複雑に開析されている。

伯父名台遺跡は，このような支谷の一つである通称泉谷支谷から分岐した小支谷と海岸平野から延びた短い支谷に挟まれ，海岸平野を広く臨む舌状台地上に位置している。台地は東西240m，南北150mの広さをもち，東側に延びる細尾根に連なっている。台地上はほぼ平坦で標高は24m～25m，谷部との高低差は約15mである。遺跡の東側の細尾根には，古墳時代前期と奈良・平安時代の竪穴住居跡を検出した椎名神社遺跡が存在し，さらにその奥には今台遺跡が連なっている。また，谷津を挟んだ北側の台地上には古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡である椎名崎遺跡が展開している。中世では，北西0.9kmに小弓城，2.2kmに生実城，西北西2.9kmには港町として開けていた浜野がそれぞれ位置している。

２　周辺の遺跡（第２図）

千葉東南部地区内の遺跡の多くは，旧石器時代から中・近世までの遺構・遺物を複合的に伴っており，特定の時期に限られた単純な遺跡はきわめて少ない。なかでも，縄文時代の大型貝塚や古墳時代後期の集落跡や古墳群，奈良・平安時代の集落跡などが密集しているのが特徴的である。

第２図　千葉東南部地区遺跡分布図

旧石器時代の遺物は，地区内で調査されたほとんどの遺跡から出土している。規模が比較的大きなものとしては，有吉城跡，太田法師遺跡，椎名崎古墳群Ｂ支群，神明社裏遺跡などがあげられる。なかでも神明社裏遺跡からは，ナイフ形石器・掻器・石核・尖頭器・剥片などが多量に出土している。

縄文時代には，中期から晩期の大型貝塚の他にも各時期にわたって各種の遺構や遺物が数多く検出されている。早期の炉穴は御塚台遺跡など，多数の遺跡から検出されている。前期では，地区内の北西に位置する南二重堀遺跡，鎌取遺跡，有吉城跡で竪穴住居跡が若干検出されている。中期には，ほとんどの遺跡に遺物の散布がみられ，特に上赤塚貝塚，有吉北貝塚，有吉南貝塚など大規模な貝塚が集中してみられ，多数の竪穴住居跡や土坑群を伴う大集落が形成されている。後期には，木戸作貝塚，小金沢貝塚，六通貝塚等，引き続き大規模貝塚が形成されているが，中期ほどの厖大な遺構を伴う大集落は形成されなくなる。晩期には，遺跡数は激減するが，六通貝塚などで良好な遺物包含層等が検出されている。また，高沢遺跡では遺構は確認されなかったが，晩期終末の荒海式土器がまとまって検出されており注目される。

弥生時代は，地区内の遺跡が極端に少なくなる。有吉遺跡やバクチ穴遺跡などで遺構が検出されているにすぎず，遺物の出土も極めて少ない。市原市草刈遺跡などの大規模集落群に，周辺地域の小集落が集約されることもその原因の一つと考えられる。また，村田川下流域の海岸平野の低地一帯に集落が展開している可能性も考慮される。

古墳時代に入ると新たな集落跡が展開する。前期から中期の遺跡は，地区北西側に集中していることが特徴的である。なかでも，南二重堀遺跡，城ノ台遺跡，鎌取遺跡，馬ノ口遺跡などで竪穴住居跡が検出されている。後期では，有吉遺跡，高沢遺跡，有吉北貝塚，城ノ台遺跡で多くの竪穴住居跡が検出されるなど，大規模集落が展開するようになる。古墳は，地区内において約290基が確認されている。前・中期の古墳では，石枕などが出土した上赤塚１号墳や馬ノ口遺跡の方墳と椎名崎古墳群Ｃ支群の円墳などが検出されている。後期になると，上赤塚古墳群及び有吉遺跡，生浜古墳群，南二重堀遺跡などでは，有吉遺跡と高沢遺跡の大集落と重複せずに明らかな墓域として大規模古墳群が営まれる。さらに，椎名崎古墳群のように人形塚古墳をはじめとする，地区内で最も大規模な古墳群が造営されようになる。

奈良・平安時代の遺跡は，古墳時代後期から連続する大規模な集落が多い。特に，地区北西部に位置する有吉遺跡，高沢遺跡，椎名崎遺跡では古墳時代より集落の規模は大きくなる。鉄製品の保有率も高く，それぞれの遺跡に特徴的な墨書土器なども出土している。また，大金沢支谷の太田法師遺跡では，砂鉄などの原料に恵まれた立地条件のため，鍛治関連遺構が多数検出されている。伯父名台遺跡の周辺では，有吉城跡，今台遺跡など，小鍛治遺構を伴う遺跡もわずかながら存在している。

中世以降では，伯父名台遺跡のほか有吉城や城ノ台遺跡，有吉北貝塚などから，台地整形区画・土坑墓・火葬墓・地下式坑などが検出されている。周辺には小弓城などもあり，中世では軍事，交通の上で要衝の地域であったことが窺える。

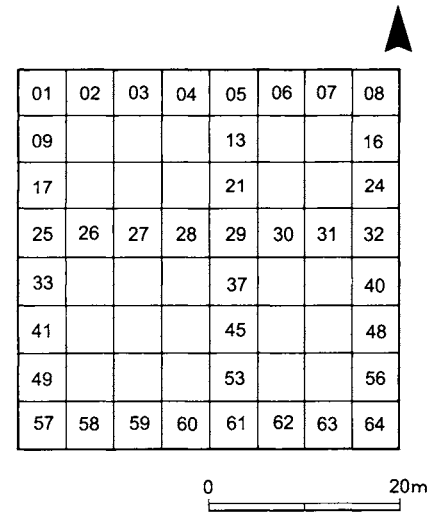
第３節　調査の方法と経過（第３図）

発掘調査に先行して，公共座標（第Ⅸ系）を基準に，調査対象範囲全域に40ｍ×４０ｍの方眼網を設定し基準点測量を行った。これを大グリッドとし，北西に起点を置いて，東西のＹ軸は西から順にＡ，Ｂ，・・・・Ｆ，南北のＸ軸は北から順に１，２，３，４と付した。さらに，この大グリッドを５ｍ×５ｍの小グリッド64区画に分割し，北西隅を起点に01，02と順に付し南東隅を64とした。従って小グリッドの呼称は，例

第３図　調査区及び周辺の地形

えばＢ１-25などとなる（第４図）。

平成５年度は19,700㎡を対象に，上層の確認調査を平成５年４月６日から５月14日まで行った。対象面積の10％について，幅２ｍの確認トレンチを設定し重機による表土除去を行った後，遺構・遺物の検出状況を確認した。その結果，調査区の東側を除く範囲から，古墳，古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡や中世の台地整形区画，溝状遺構などが密集して確認された。本調査は，遺構の検出されなかった東側を除く18,250㎡を対象に実施することとなり，調査区の西側3,660㎡について平成５年５月17日から９月６日まで行った。また，下層の確認調査は，上層の本調査に並行して平成５年８月25日から９月６日まで行った。上層調査区の約４％について，調査区域全域に２ｍ×２ｍのグリッドを設定し，立川ローム層下部まで人力で掘削し，石器等の有無を確認した。その結果，遺物の出土はなかった。さらに，上層の本調査を調査区中央部の5,890㎡を対象に，平成６年１月６日から３月29日まで行った。



第４図　小グリッド分割図

平成６年度は，調査区の東側8,700㎡を対象に，平成６年４月１日から８月12日まで本調査を実施した。下層は上層調査区を対象に確認調査を行ったが，遺物は検出されなかった。

なお，遺跡の範囲が台地縁辺部まで広がっているが，台風による土砂災害を防ぐ防災上の判断から，急斜面に近い一部の区域は調査前に削平している。

遺構番号は，発掘調査時の番号を極力使用することにした。遺構の内容により，ＳＢ(竪穴住居跡・掘立柱建物跡など)，ＳＫ(炉穴・陥穴・土坑・竪穴遺構・地下式坑・火葬施設など)，ＳＤ(溝状遺構)，ＳＸ(台地整形区画など)と付してあるが，必ずしも遺構の内容と一致しないものもある。それらの遺構については，整理作業の際に新たに番号を付したり，欠番にするなどの変更を一部行っている。また，想定復原した中世の掘立柱建物跡と柵列については，それぞれＳＡ・ＳＣの記号を付した。

参考文献

（財）千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン１－椎名崎古墳群(第１次)－』
（財）千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン２－木戸作遺跡(第１次)－』
（財）千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン３－有吉遺跡(第１次)－』
（財）千葉県文化財センター1977『千葉東南部ニュータウン４－生浜古墳群－』
（財）千葉県文化財センター1978『千葉東南部ニュータウン５－有吉遺跡(第２次)－』
（財）千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン６－椎名崎遺跡－』
（財）千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン７－木戸作遺跡(第２次)－』
（財）千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン８－ムコアラク遺跡・小金沢古墳群－』
（財）千葉県文化財センター1980『千葉東南部ニュータウン９－六通遺跡・御塚台遺跡－』
（財）千葉県文化財センター1982『千葉東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』
（財）千葉県文化財センター1981『千葉東南部ニュータウン11－六通金山遺跡－』
（財）千葉県文化財センター1983『千葉東南部ニュータウン12－南二重堀遺跡－』
（財）千葉県文化財センター1982『千葉東南部ニュータウン13－上赤塚１号墳・狐塚古墳群－』
（財）千葉県文化財センター1983『千葉東南部ニュータウン14－バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第３次)・有吉南遺跡－』

(財) 千葉県文化財センター1984『千葉東南部ニュータウン15－馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1985『千葉東南部ニュータウン16－大膳野北遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1990『千葉東南部ニュータウン17－高沢遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1993『千葉東南部ニュータウン18－鎌取遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター1998『千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚１－』
(財) 千葉県文化財センター1998『千葉東南部ニュータウン20－千葉市有吉北貝塚２－』
(財) 千葉県文化財センター1999『千葉東南部ニュータウン21－千葉市有吉遺跡(第４次)・高沢古墳群－』
(財) 千葉県文化財センター1999『千葉東南部ニュータウン22－鎌取場台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター2001『千葉東南部ニュータウン23－千葉市太田法師遺跡２－』
(財) 千葉県文化財センター2002『千葉東南部ニュータウン24－千葉市富岡古墳群・富岡古墳群Ｂ支群－』
(財) 千葉県文化財センター2002『千葉東南部ニュータウン25－千葉市有吉城Ｉ－』
(財) 千葉県文化財センター2003『千葉東南部ニュータウン26－千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡－』
(財) 千葉県文化財センター2003『千葉東南部ニュータウン27－千葉市春日作遺跡－』

Y=+29880
Y=+29960
15.0m
20.0m
X=−50080
X=−50120
第５整形区画
第６整形区画
第７整形区画
第４整形区画
第３整形区画
第１整形区画
第２整形区画
推定中世整形区画
B3-01
C2-01
C3-01
D2-01
E2-01
0
(1/500)
20m

第５図　遺跡全体図

第２章　縄文時代

縄文時代の遺構は，竪穴住居跡１軒・陥穴７基・炉穴14基・土坑１基である。早期後半から後期までの土器片が出土しており，本来は台地上に広く展開していたと考えられるが，古墳時代後期から中世の遺構に大半は削平され，比較的掘り込みが深かった陥穴や炉穴などの遺構が散漫に遺存しているにすぎない。

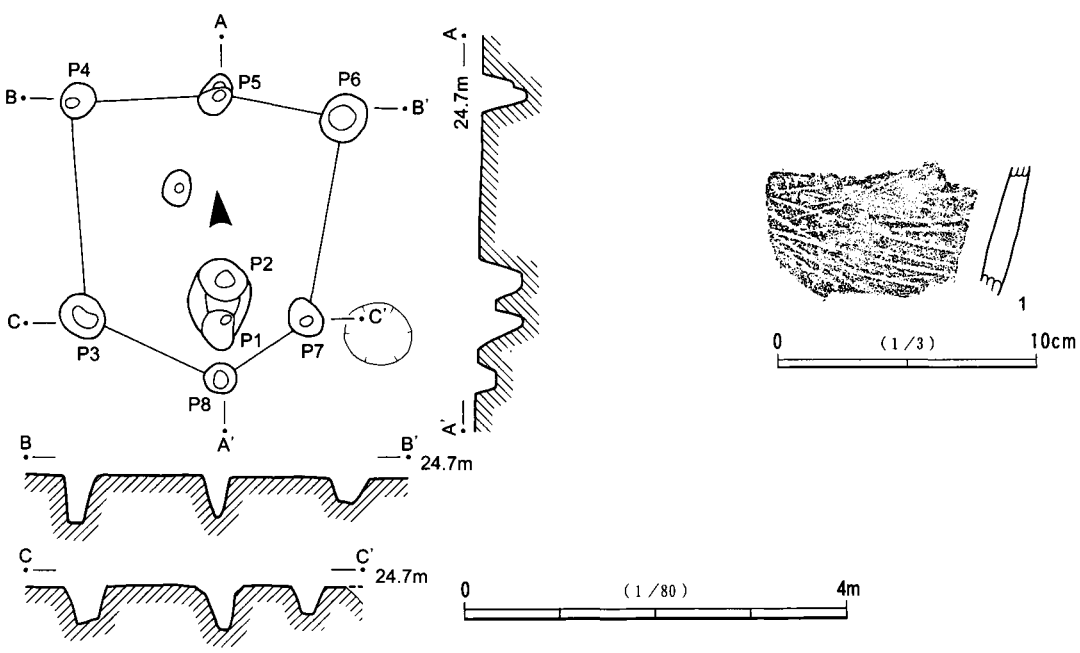
第１節　竪穴住居跡

ＳＢ-049（第６図，図版３・24）

調査区の中央やや西側，Ｂ２グリッドに位置する。上面を大きく削平されており，遺存していた柱穴の配列や，柱穴内から出土した土器片から縄文時代前期の住居跡であると判断した。

平面形態・規模等は不明であるが，一辺４ｍ前後と推定される。ピットは８基検出され，P3からP8は五角形に配置されており柱穴と考えられる。径30cm～52cm，深さは20cm～51cmと規模は一定していない。東側の柱穴であるP6～P8の深さは，20cm～27cmと浅くなっている。P1・P2は連続したピットで深さはそれぞれ48cm・45cmと比較的深く掘り込まれている。炉跡は確認できなかった。

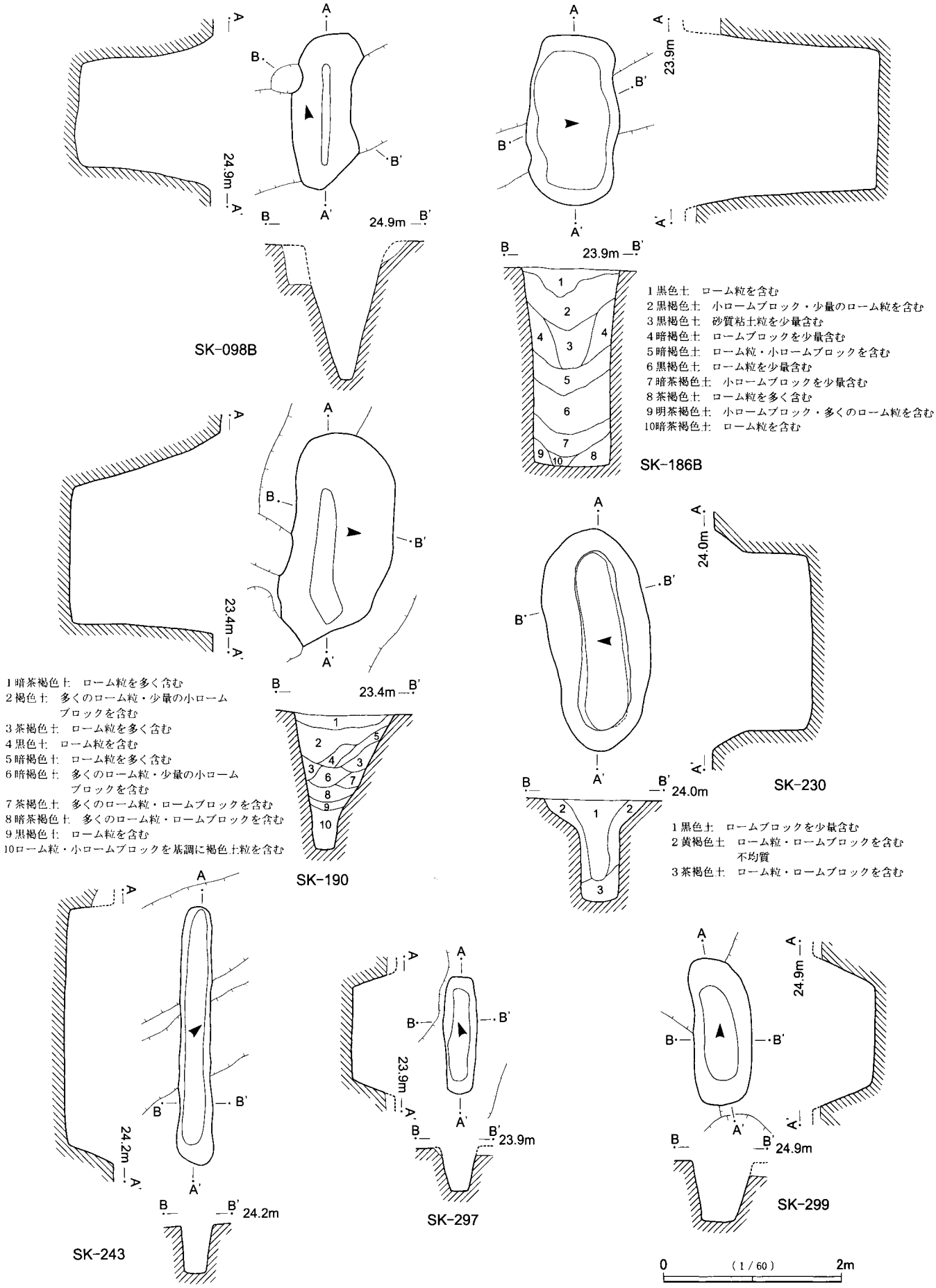
遺物は，P5から１の土器片が出土したのみである。前期諸磯ｂ式か浮島Ｉ式であろう。



第６図　ＳＢ-049及び出土遺物

第２節　陥穴

７基の陥穴を検出した（第７図，第１表）。時期を確定できる出土遺物はないが，平面形態などから縄文時代草創期から早期にかけての時期が考えられる。分布は散漫で，台地縁辺部よりも台地中央から多く検出されている。平面形態は長楕円形を基本としているが，上面がすでに削平されている陥穴も多く，正確な形態や規模等は判然としない。断面形態がＶ字形の陥穴(SK-098B，SK-190)や，垂直に掘り込まれ底


SK-098B
24.9m
SK-186B
23.9m
1黒色土　ローム粒を含む
2黒褐色土　小ロームブロック・少量のローム粒を含む
3黒褐色土　砂質粘土粒を少量含む
4暗褐色土　ロームブロックを少量含む
5暗褐色土　ローム粒・小ロームブロックを含む
6黒褐色土　ローム粒を少量含む
7暗茶褐色土　小ロームブロックを少量含む
8茶褐色土　ローム粒を多く含む
9明茶褐色土　小ロームブロック・多くのローム粒を含む
10暗茶褐色土　ローム粒を含む
SK-190
23.4m
1暗茶褐色土　ローム粒を多く含む
2褐色土　多くのローム粒・少量の小ロームブロックを含む
3茶褐色土　ローム粒を多く含む
4黒色土　ローム粒を含む
5暗褐色土　ローム粒を多く含む
6暗褐色土　多くのローム粒・少量の小ロームブロックを含む
7茶褐色土　多くのローム粒・ロームブロックを含む
8暗茶褐色土　多くのローム粒・ロームブロックを含む
9黒褐色土　ローム粒を含む
10ローム粒・小ロームブロックを基調に褐色土粒を含む
SK-230
24.0m
1黒色土　ロームブロックを少量含む
2黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む不均質
3茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
SK-243
24.2m
SK-297
23.9m
SK-299
24.9m
0
(1/60)
2m

第7図　陥穴

面の広い陥穴(SK-186B)もある。底面にピットをもつ陥穴はない。覆土は，黒色土・黒褐色土系や褐色土・暗褐色土系を主体に，黄褐色土や茶褐色土が混在しているが，いずれの層もローム粒やローム・ブロックを多く含んでいるのが特徴的である。

第１表　陥穴一覧

遺構番号	グリッド	平面形態	長軸方位	長軸長×短軸長(m)	深さ(m)	備　　考
SK-098B	B2－12	楕円形	N-17°-E	1.77 × 0.73	1.53	
SK-186B	E2－57	楕円形	W-2°-N	1.94 × 1.06	2.23	
SK-190	D2－29	楕円形	W-1°-S	〈2.15〉 × 1.17	1.53	長軸長は現存値
SK-230	C3－71	長楕円形	E-4°-N	2.48 × 1.16	1.13	
SK-243	C2－54	長楕円形	N-47°-E	2.86 × 0.35	0.55	
SK-297	D1－48	長楕円形	N-20°-E	1.31 × 0.38	0.49	
SK-299	B2－01	長楕円形	N-11°-W	1.66 × 0.65	0.68	

第３節　炉穴

ＳＫ-023（第８図，図版３・25）

調査区の西側，Ｂ２グリッドに位置する。中世土坑と一部重複する。

平面形態は不整方形で，長軸長2.45m，短軸長1.9m，深さは20cm～25cmを測る。他の炉穴と形態が異なり，方形の広く平坦な足場と考えられるテラスが設けられている。炉床(66cm×70cm)は東側に偏在し，焼土の厚さは9cmである。1～4は茅山下層式土器である。

ＳＫ-027（第８図，図版３・24）

調査区の北西部，Ｂ１グリッドに位置する。南側を一部削平されている。

平面形態は楕円形で，長軸長1.78m，短軸長は推定で1.0m，深さは12cmを測る。炉床(60cm×70cm)は西側に偏在し，焼土の厚さは12cmである。5・6は茅山下層式土器である。

ＳＫ-028・029（第８図，図版３・24）

調査区の北西部，Ｂ１グリッドに位置する。２基の炉穴が対向するように複合し，SK-029がSK-028の炉床を削平している。

平面形態はともに楕円形である。SK-028は，長軸長は現存値で1.4m，短軸長0.98m，深さは30cmを測る。炉床(36cm×53cm)は南側に偏在し，焼土の厚さは11cmで，北側にほぼ平坦な足場を設けている。

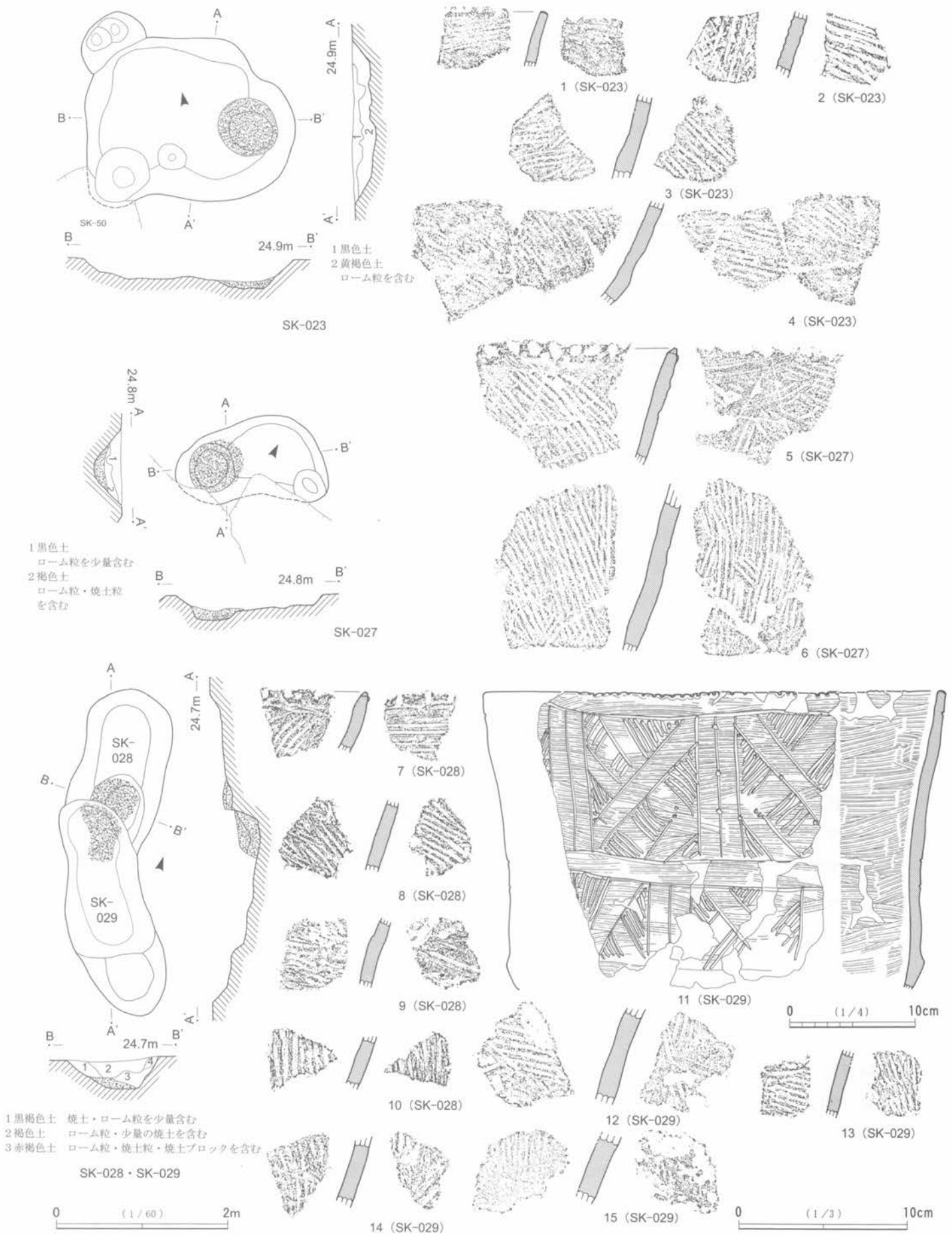
SK-029は，長軸長2.6m，短軸長0.83m，深さは40cmを測る。SK-028とは逆に，炉床(40cm×68cm)は北側に偏在し，焼土は25cmと厚く堆積している。南側に設けられた足場は，浅く掘り込まれた後，さらに一段掘り下げられている。

SK-028からは７～10が出土している。ともに茅山下層式土器である。11～15はSK-029から出土した。11は鵜ガ島台式土器である。

ＳＫ-030（第９図，図版３・25）

調査区の北西部，Ｂ１グリッドに位置する。２基の土坑を削平して構築されている。

平面形態は楕円形で，長軸長2.53m，短軸長0.92m，深さは30cmを測る。炉床(58cm×65cm)は中央よりやや西側に位置し，焼土の厚さは15cmである。東側に設けられた足場はほぼ平坦で，立ち上がりも緩やかである。16～19は茅山下層式土器である。


SK-50
24.9m
1 黒色土
2 黄褐色土
ローム粒を含む
SK-023
1 (SK-023)
2 (SK-023)
3 (SK-023)
4 (SK-023)
24.8m
1 黒色土
ローム粒を少量含む
2 褐色土
ローム粒・焼土粒
を含む
SK-027
5 (SK-027)
6 (SK-027)
SK-028
SK-029
24.7m
1 黒褐色土　焼土・ローム粒を少量含む
2 褐色土　ローム粒・少量の焼土を含む
3 赤褐色土　ローム粒・焼土粒・焼土ブロックを含む
SK-028・SK-029
7 (SK-028)
8 (SK-028)
9 (SK-028)
10 (SK-028)
11 (SK-029)
12 (SK-029)
13 (SK-029)
14 (SK-029)
15 (SK-029)
0 (1/60) 2m
0 (1/4) 10cm
0 (1/3) 10cm

第8図　炉穴(1)

ＳＫ-040（第９図，図版３・24）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。SD-001に南東側を大きく削平され，炉床部が遺存していた。南側の３基の炉穴（Ａ～Ｃ）は複合しているが，北側の炉床（Ｄ）は単独で存在すると考えられるが，ここでは一連の炉穴として報告する。いずれも足場部分も失われ，本来の形態や規模等は不明である。

炉穴（Ａ～Ｃ）の遺存している長さは2.3m，幅0.57m～0.98m，深さ18cm～24cmを測る。炉床は北西側に設けられ，ＢとＣは接合している。Ｄは炉床（73cm×95cm）のみが遺存しており，焼土の厚さは20cmである。出土遺物は少なく，20の茅山下層式土器が出土したのみである。

ＳＫ-041（第９図，図版３）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。北側の一部をSB-003に削平されている。

平面形態は不整楕円形で，長軸長1.3m，短軸長は推定で0.9m，深さは18cmを測る。炉床（50cm×77cm）は西側に偏在し，焼土の厚さは18cmである。足場は狭く平坦ではない。遺物は出土していない。

ＳＫ-061（第９図，図版24）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で，長軸長1.85m，短軸長1.02m，深さは16cmを測る。炉床は東側に偏在し，掘り込みは浅く，焼土の厚さは10cmである。足場は西側に設けられ平坦である。21～23は茅山下層式土器である。

ＳＫ-062・063（第10図，図版３・24）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。２基が重複し，さらに東西をそれぞれSD-003・015に削平されている。SK-063は中央部に攪乱を受けている。

SK-062の平面形態は不整方形で，長軸長2.08m，短軸長1.35m，深さは63cmを測る。西側に天井部を残す施設が設けられている。炉床と思われるが焼土の堆積はほとんどなく，あまり使用されずに北側に移行したと考えられる。北側の炉床は掘り込みはなく，焼土が63cm×78cmの範囲に堆積していた。足場は平坦で，ほぼ垂直に掘り込まれている。覆土中に貝が堆積している。出土した24～25は茅山上層式土器である。

SK-63は複数の炉床をもつ不整形で，現存値で東西長2.3m，南北長2.75m，深さは14cmと浅い。炉床は４か所から検出されたが，掘り込みは浅く焼土が薄く堆積していた。27～31は茅山下層式土器である。

ＳＫ-064（第11図）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。北西側の一部を土坑に削平されている。

平面形態は楕円形で，長軸長1.4m，短軸長0.83m，深さは16cmを測る。炉床（47cm×53cm）は，浅く掘り込まれている。東側に偏在し，焼土の厚さは10cmである。足場は西側に設けられ，西側はさらに一段低くなる。遺物の出土はない。

ＳＫ-067（第11図，図版24・25）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。東側をSD-001に削平されている。

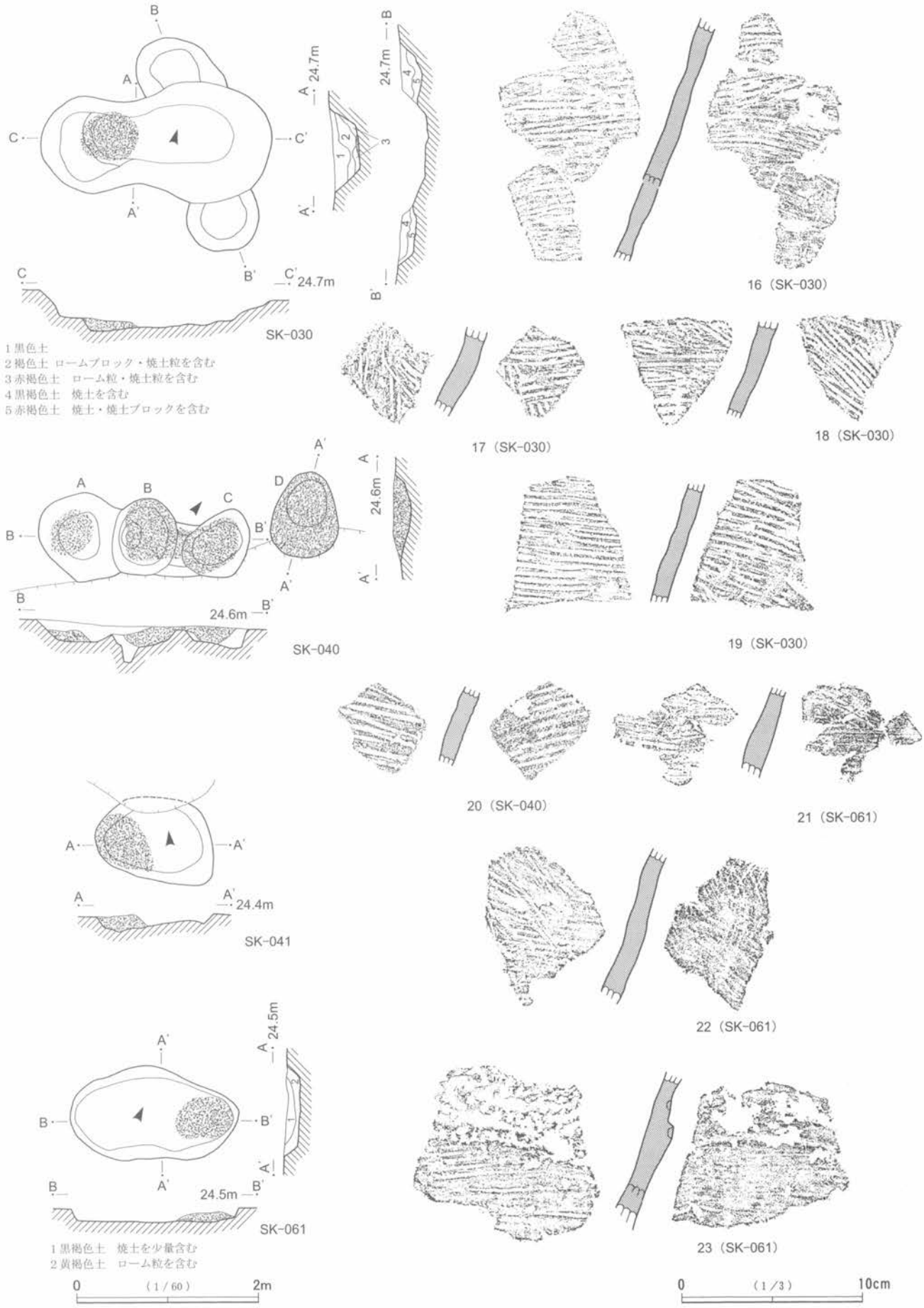
平面形態は楕円形で，長軸長1.43m，短軸長は現存値で0.58m，深さは21cmを測る。炉床は南側に偏在して設けられていたと考えられるが，焼土等は認められない。足場は北側に設けられ，底面は平坦である。

遺物の出土は多く，ほとんどが茅山下層式土器であるが，33・36は鵜ガ島台式土器であろう。

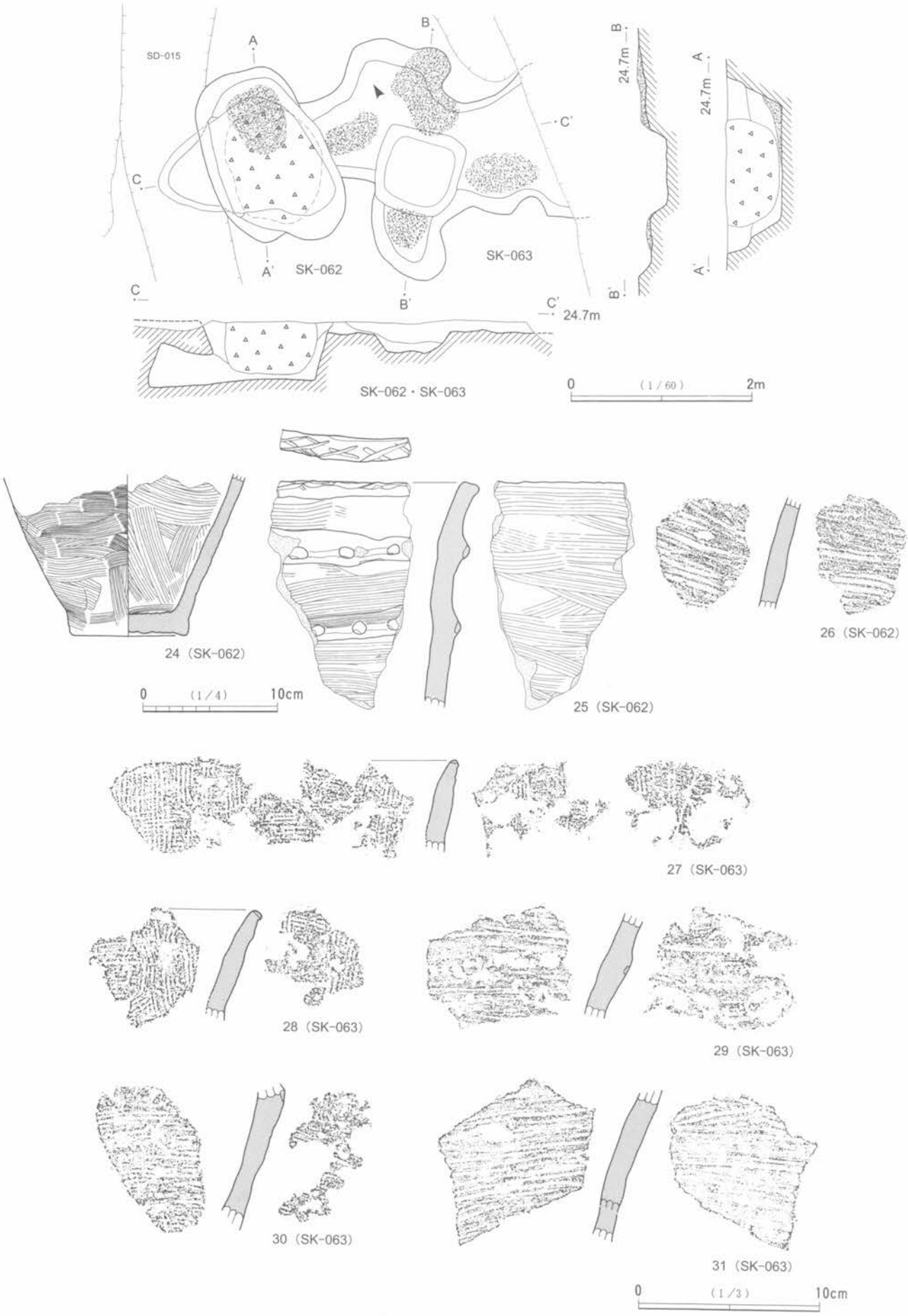
ＳＫ-097（第12図，図版24）

調査区の西端，Ａ２グリッドに位置する。SD-005に一部削平されている。２基の炉穴が複合している。

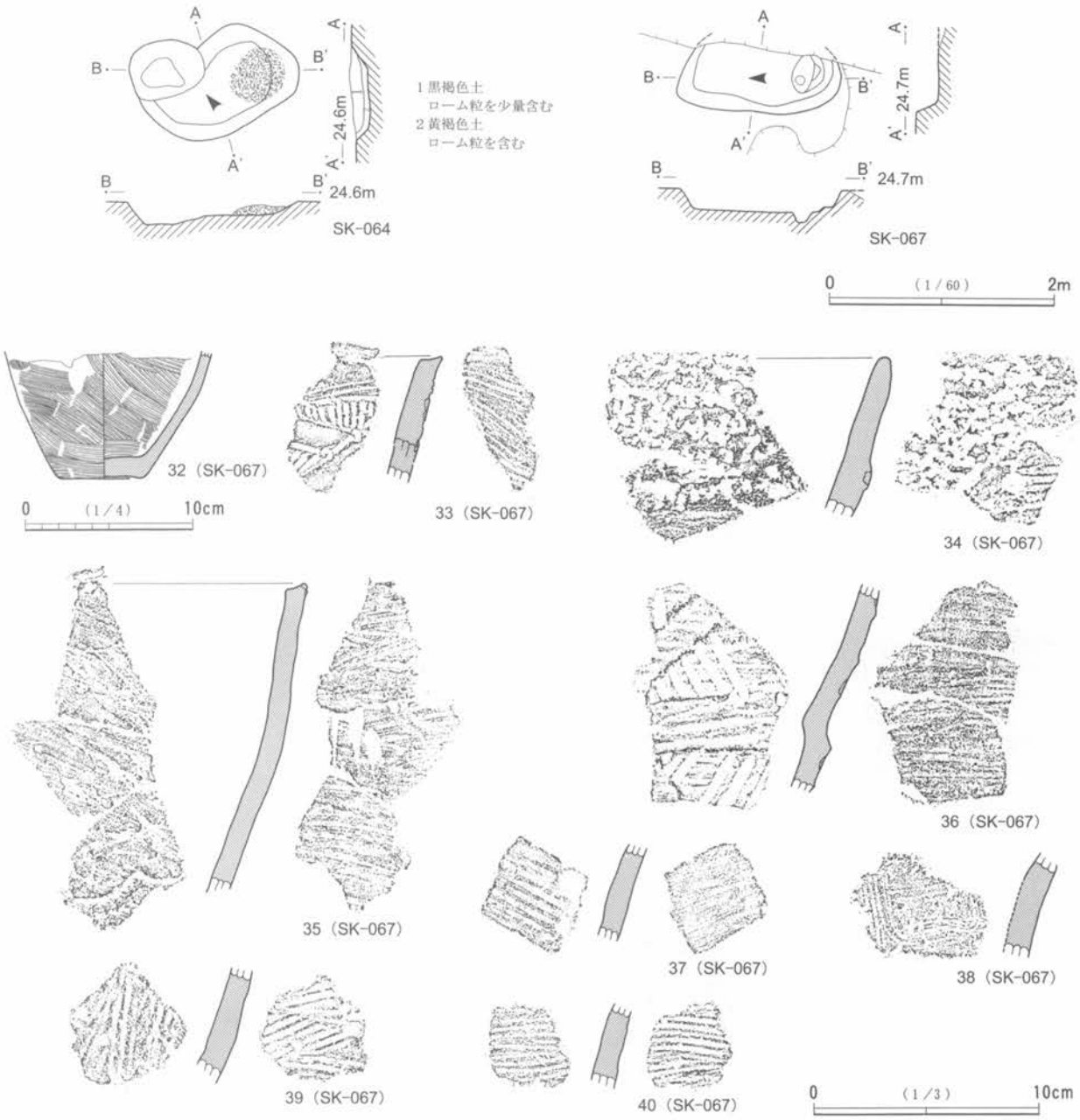
平面形態はともに楕円形で，Ａは長軸長2.32m，短軸長1.08m，深さは35cmを測る。炉床は北側に偏在


SK-030
1 黒色土
2 褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む
3 赤褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
4 黒褐色土 焼土を含む
5 赤褐色土 焼土・焼土ブロックを含む
16 (SK-030)
17 (SK-030)
18 (SK-030)
SK-040
19 (SK-030)
20 (SK-040)
21 (SK-061)
SK-041
22 (SK-061)
SK-061
1 黒褐色土 焼土を少量含む
2 黄褐色土 ローム粒を含む
23 (SK-061)
0 (1/60) 2m
0 (1/3) 10cm

第9図 炉穴(2)


SD-015
A
A'
B
B'
C
C'
SK-062
SK-063
24.7m
SK-062・SK-063
0
(1/60)
2m
24 (SK-062)
25 (SK-062)
26 (SK-062)
0
(1/4)
10cm
27 (SK-063)
28 (SK-063)
29 (SK-063)
30 (SK-063)
31 (SK-063)
0
(1/3)
10cm

第10図　炉穴(3)



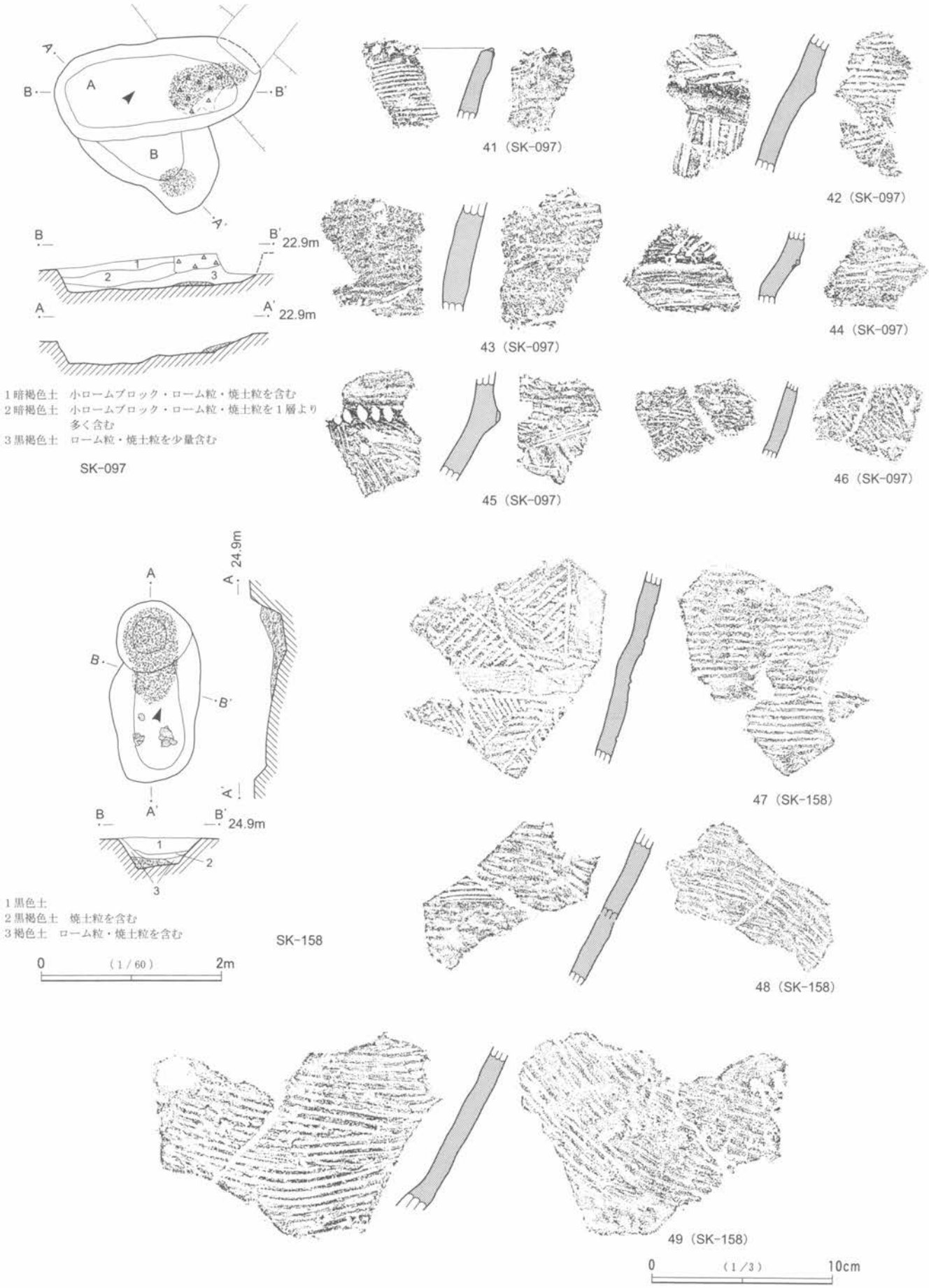
第11図　炉穴(4)

している。掘り込みはないが，焼土の厚さは4cmである。覆土上面には貝が堆積している。Bは現存値で長軸長0.96m，短軸長1.1m，深さは20cmである。炉床は東側に偏在している。掘り込みはなく，焼土がわずかに堆積していた。茅山下層式土器が多いが，42・44は鵜ガ島台式土器であろう。

SK-158（第12図，図版25）

調査区の中央西側，B2グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で，長軸長2.0m，短軸長1.0m，深さは40cmを測る。炉床(78cm×85cm)は北側に偏在している。焼土は24cmも堆積し，足場の方まで広がっている。足場は南側に設けられ，炉床から徐々に浅くなっている。鵜ガ島台式土器が出土している。


A
B
B'
A'
22.9m
1
2
3
1暗褐色土　小ロームブロック・ローム粒・焼土粒を含む
2暗褐色土　小ロームブロック・ローム粒・焼土粒を1層より多く含む
3黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む
SK-097
41（SK-097）
42（SK-097）
43（SK-097）
44（SK-097）
45（SK-097）
46（SK-097）
24.9m
1黒色土
2黒褐色土　焼土粒を含む
3褐色土　ローム粒・焼土粒を含む
SK-158
0
（1/60）
2m
47（SK-158）
48（SK-158）
49（SK-158）
0
（1/3）
10cm

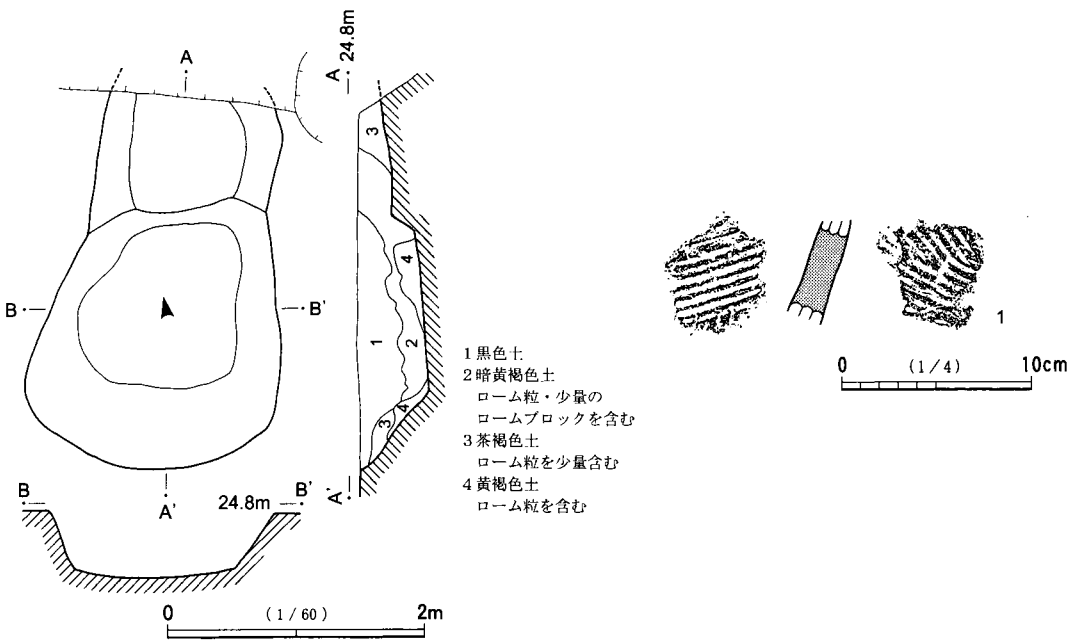
第12図　炉穴(5)

第４節　土坑

ＳＫ-024（第13図，図版25）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。北側の一部をSB-077に削平されている。

平面形態は楕円形で，２基の土坑が複合したような形態である。比較的規模は大きく，長軸長は現存値で2.88m，短軸長1.8m，深さは北側で27cm，南側では55cmを測る。緩やかに掘り込まれ，底面はともに平坦である。遺物は１の茅山下層式の土器片が出土している。



第13図　ＳＫ-024及び出土遺物

第３章　古墳時代

古墳時代は，竪穴住居跡51軒・古墳２基・土坑３基で構成されている。中世遺構群と重複している遺構も多く，本来は台地全体に分布していた可能性が高い。集落は出土土器からみると，５世紀前半に１軒の竪穴住居跡が確認されているが，６世紀中頃まで集落は途絶える。本格的に集落が形成されるのは，６世紀中頃からである。その後，７世紀中頃まで集落は継続している。古墳はすでに大きく削平されており，主体部も確認できず，周溝のみが遺存しているにすぎない。

第１節　竪穴住居跡

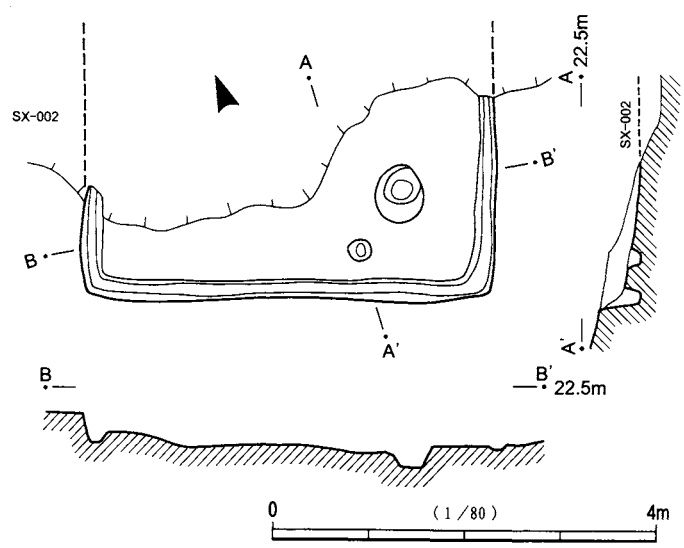
竪穴住居跡は，台地南東部を除いてほぼ全域に分布している。この南東部には，大規模な中世の台地整形が存在しているために検出されなかったことも考えられ，本来は台地全域に集落が展開していたと思われる。現状の分布では，大きく東側と西側の一群に分けることができる。東側は集中して配置されているが，西側の一群は分布状況からさらに細分できるようである。比較的大型の遺構が多く，出土遺物も豊富である。

ＳＢ-001（第14図，図版４）

調査区の北西端，Ｂ１グリッドに位置する。南側の一部を残して中世の第５整形区画(SX-002)に大半を削平されている。

平面形態は方形になると考えられ，規模は現存で2.1m×4.3mである。壁は遺存する南壁部分ではほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は現存で19cm～31cmを測る。床面は全体に凹凸があり，壁溝(幅15cm，深さ2cm～8cm)は遺存部分で全周する。柱穴は南東側で１本検出されている。覆土は黒褐色土が堆積していた。

出土遺物は少なく，柱穴内や覆土中から土師器片が出土しているが，図示できるものはなかった。



第14図　ＳＢ-001

ＳＢ-006（第15・16図，図版４・26）

調査区の北西端，Ｂ１グリッドに位置する。SB-001のすぐ南側で，平安時代の溝や土坑と重複し，一部削平されている。外側に住居を一旦掘り込みカマドを設けた後，内側を掘り込んで新たな住居を縮小してつくっている。柱穴は，位置から判断して，内側の住居にあわせて掘り込まれているが，出入り口施設に

伴うピットは作り替えている。旧住居は南西壁側を除いて，テラス状に遺存している。

平面形態は方形で，規模は外側で6.60m×6.26m，内側では5.70m×5.80mを測る。主軸方位はN-54°-Wである。壁は新旧とも垂直に掘り込まれ，壁高は20cm～35cm(旧)，南西壁側で50cm～60cmである。床面はカマドから出入り口ピットまでの中央部がよく踏み固められている。壁溝(幅20cm，深さ3cm～6cm)は新住居につくられ，北壁コーナー付近とカマド部分を除いて巡っている。４本の柱穴と出入り口施設に伴うピット(P5)を検出した。P6は旧住居に伴い，新住居の南東壁に一部削平されている。覆土は主に黒色土が堆積していた。

カマドは北西壁のほぼ中央に設けられている。旧住居の壁を15cm掘り込み，緩やかに立ち上がる煙道部を形成している。天井部はすでに崩落していたが，袖部が良く遺存状態していた。袖部の内側は被熱していたが，火床の掘り込みはわずかであった。

遺物の出土量はかなり多く，ほぼ全体から出土している。特に，カマド周辺や南東壁側で土師器杯がまとまっている。13は大型の杯で，盤のような形態である。21は滑石製の紡錘車で，径は上面4.05cm・下面2.7cm，孔径0.7cm，厚さ2.1cmを測る。22は軽石，23は土玉，24・25は支脚，26は羽口の破片である。

ＳＢ-009（第17図，図版４・26）

調査区の西側，Ｂ２グリッドに位置する。同時期のSB-013・015と重複する。SD-012に北壁の一部を削平されているが，遺存状態は良好である。

平面形態は正方形で，規模は5.20m×5.20mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ，壁高は38cm～50cmである。床面はほぼ平坦で，中央部全体が広い範囲でよく踏み固められている。壁溝(幅16cm～20cm，深さ5cm～7cm)は，カマド部分を除いて全周する。主柱穴は４本検出された。出入り口施設に伴うピットは２基検出され，その周囲は半円に土手状の高まりをもつ。覆土は黒褐色土を主体に，ローム粒を含む褐色土が混入していた。

カマドは北壁中央に設けられ，遺存状態は良好である。壁をわずかに掘り込み，ほぼ垂直に立ち上がる煙道部を形成する。煙道部下の底面は5cm掘り窪められている。袖部の内側は良く被熱しているが，火床の掘り込みは浅い。

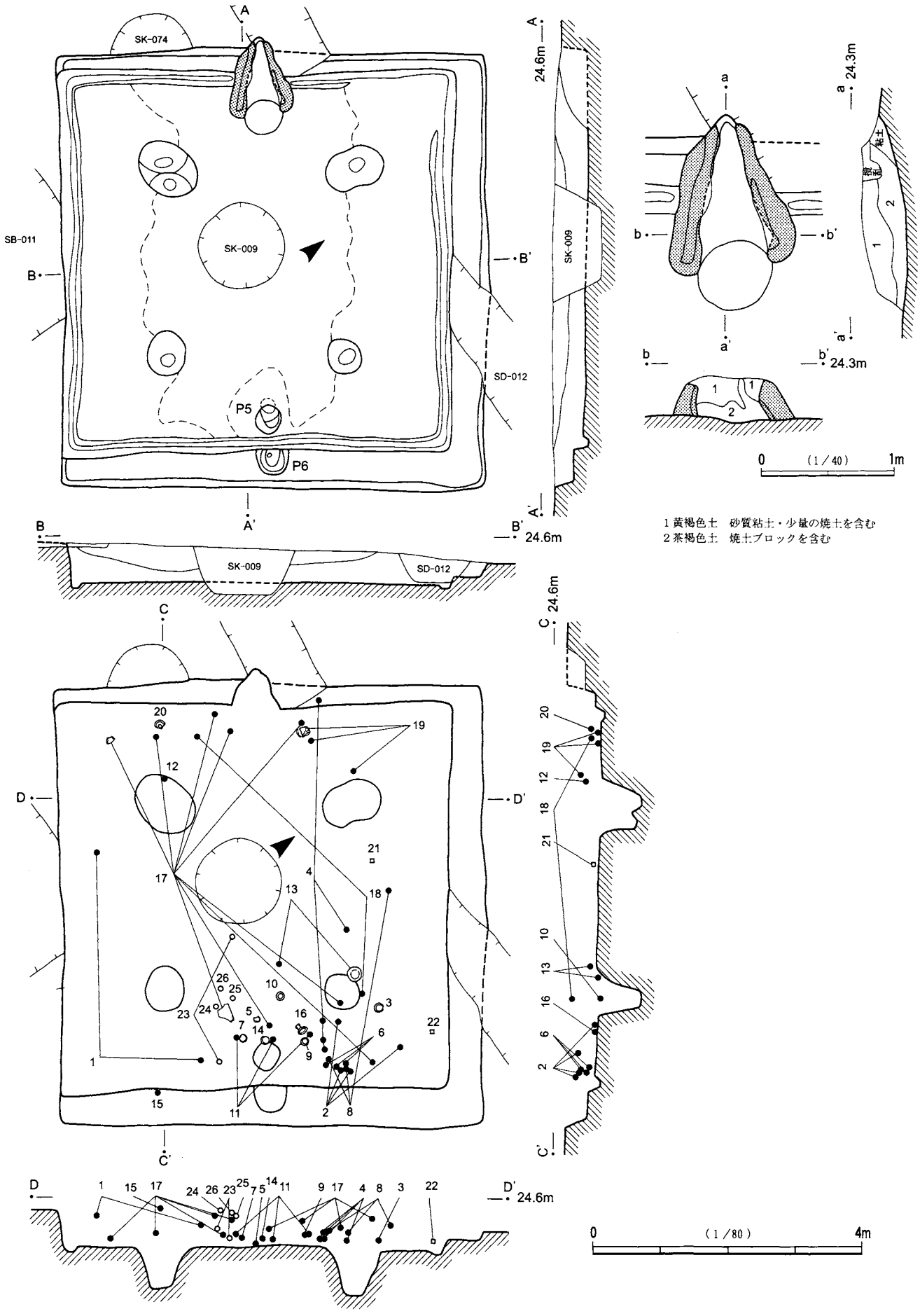
遺物の出土量は多く，ほぼ全体から出土しているが，図示できるものは少ない。５は瑪瑙製の勾玉で，全体に丁寧なつくりである。全長2.7cm，幅0.85cm，厚さ0.7cm，孔径0.25cmを測る。重量は5.0ｇである。６は土玉，７は支脚である。

ＳＢ-012（第18図，図版４・26・27）

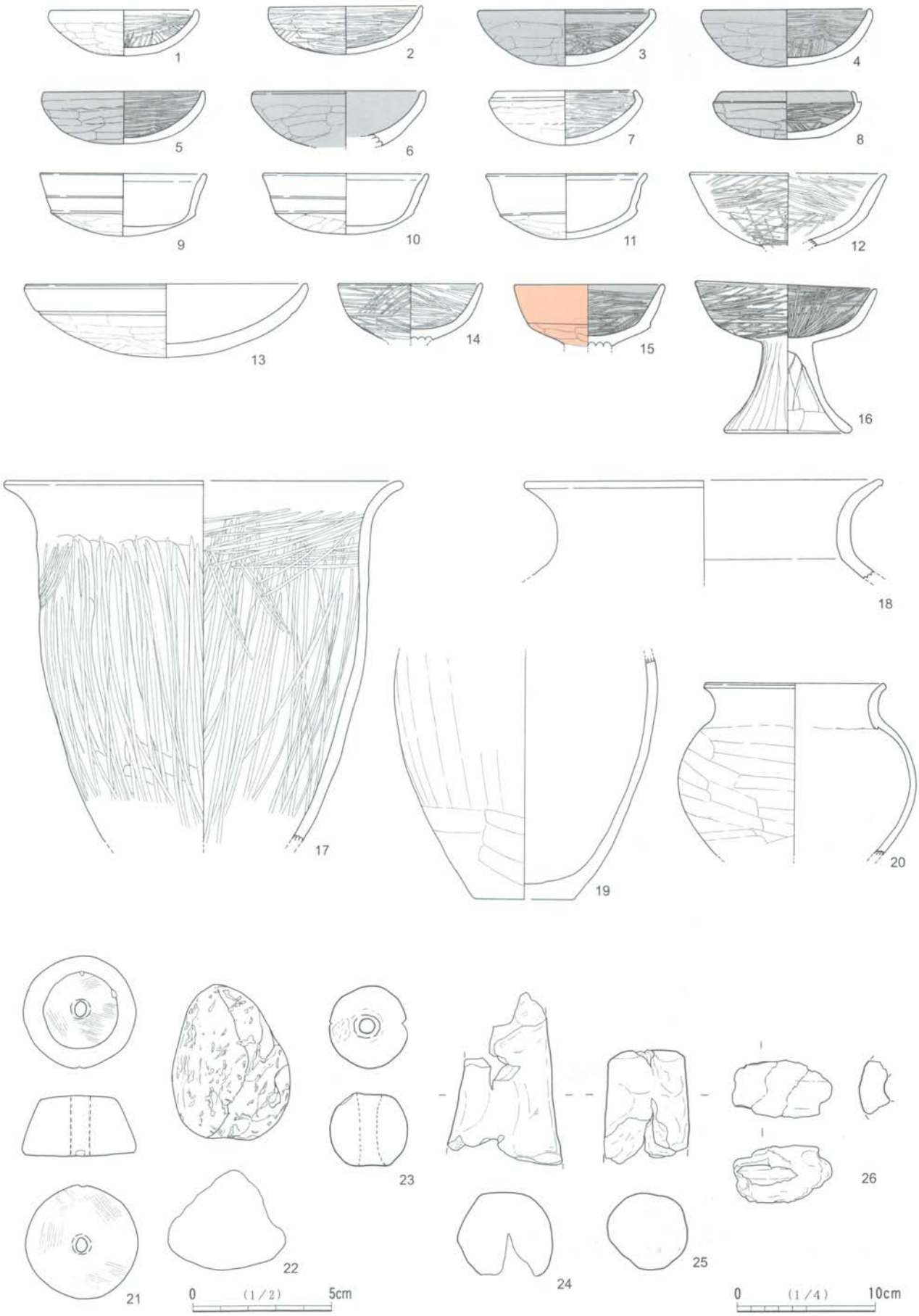
調査区の中央北端，Ｂ１グリッドに位置する。中央部にSD-016が南北に走り，上面を一部削平されている。斜面に位置しているため，北東側に進むに従い壁高が低くなっている。

平面形態は正方形で，規模は6.68m×6.64mを測る。主軸方位はN-12°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ，壁高は北壁側で8cm～10cm，南壁では東側42cm・西側76cmを測る。床面はほぼ平坦で，西壁側を除いてやや硬化した面がみられた。主柱穴４本と出入り口施設に伴うピットが検出された。壁溝(幅12cm～20cm，深さ5cm～8cm)は北東コーナー付近とカマド部分を除いて全周する。また，カマドの東側に貯蔵穴(径50cm×54cm，深さ40cm)が付設されている。覆土は，ローム粒を含む黒色土・黒褐色土を主体に，黄褐色土が混在する。

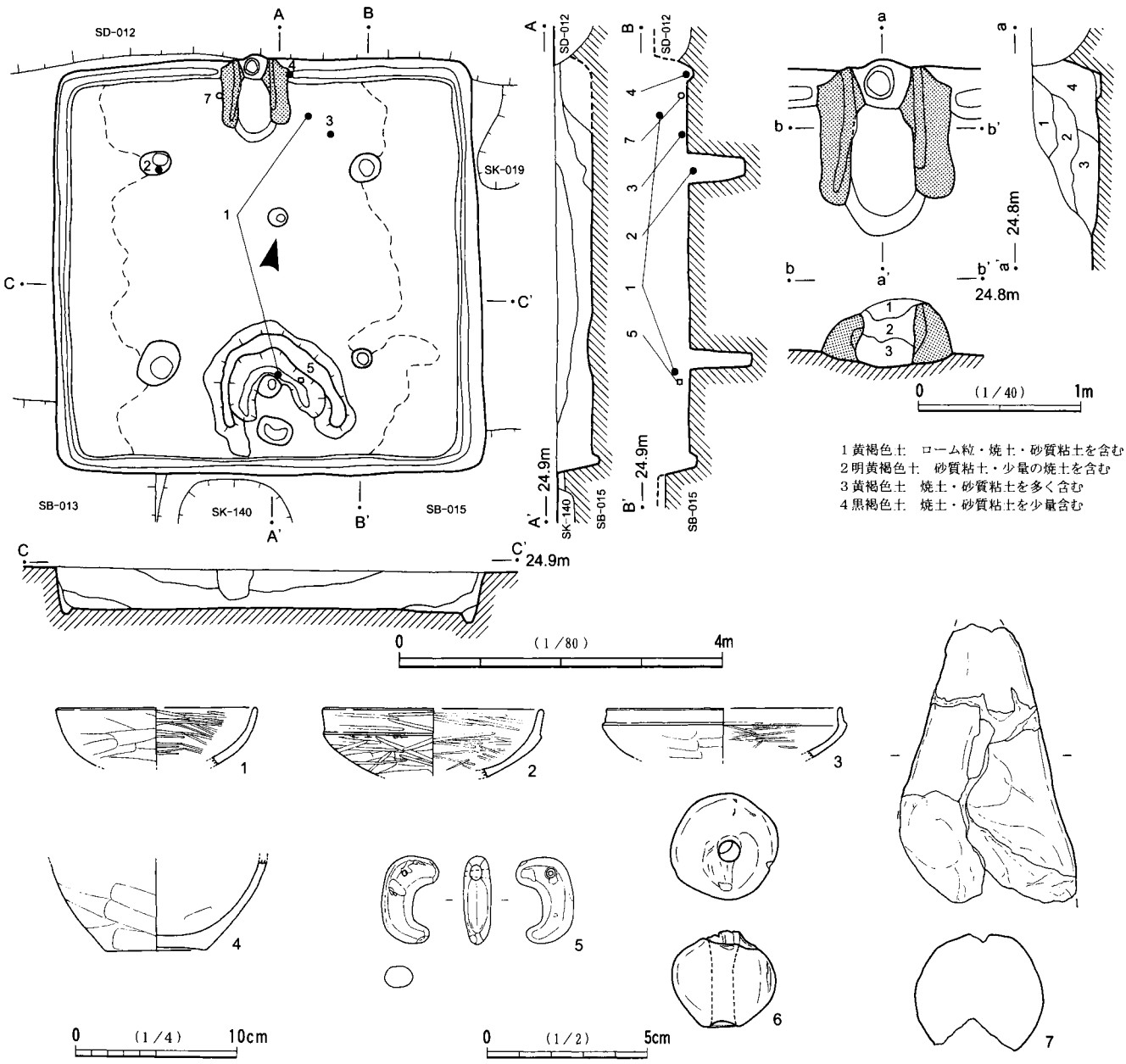
カマドは北壁中央付近に設けられ，壁を20cm掘り込んでいる。全体に遺存状態は悪く，袖部の砂質粘土


SK-074
SK-009
SB-011
SD-012
P5
P6
24.6m
24.3m
1 黄褐色土　砂質粘土・少量の焼土を含む
2 茶褐色土　焼土ブロックを含む
0　(1/40)　1m
0　(1/80)　4m

第15図　ＳＢ-006



第16図　ＳＢ-006出土遺物



第17図　ＳＢ-009及び出土遺物

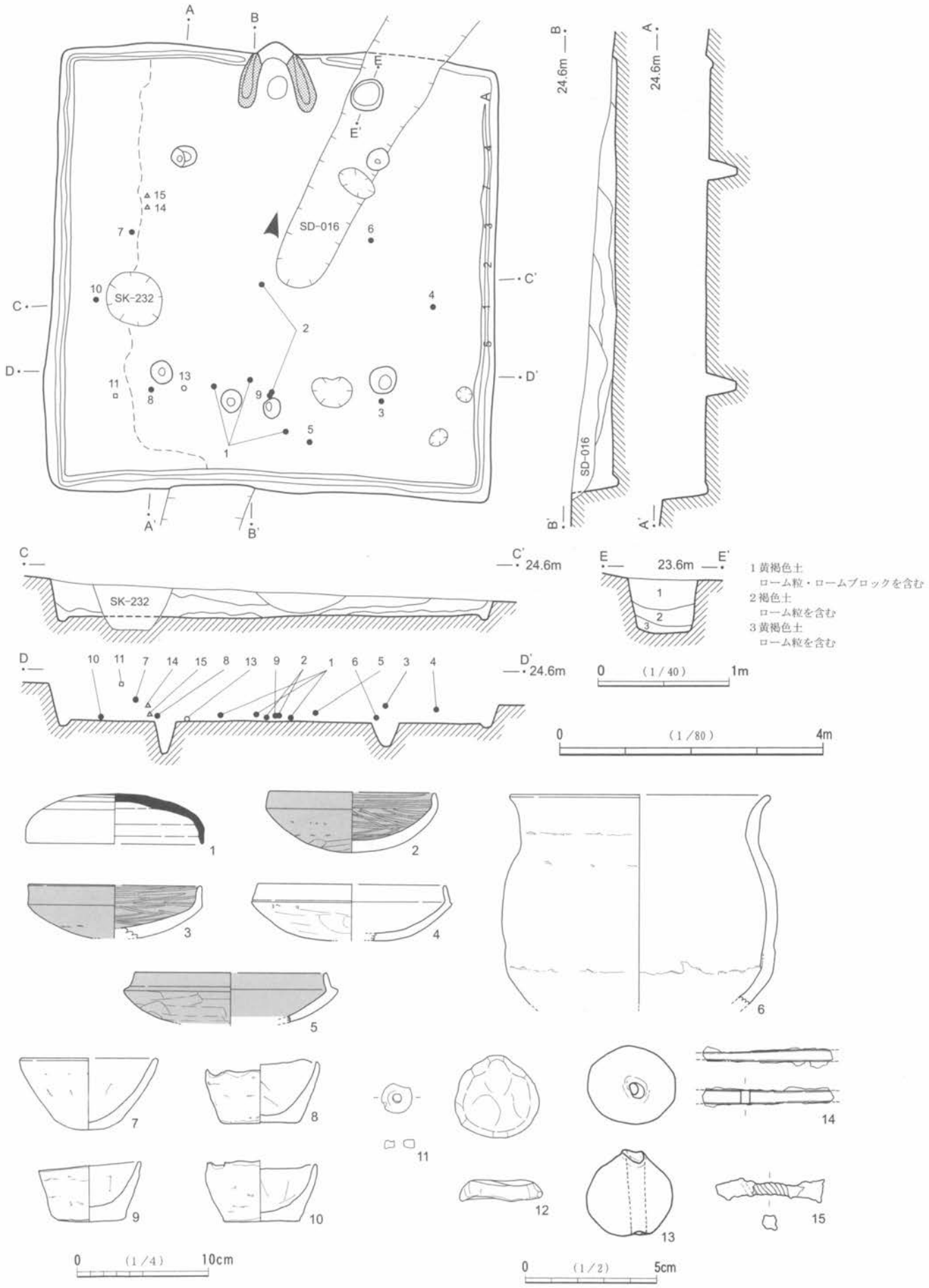
がわずかに遺存していた。

遺構の遺存状態はあまり良くないが，遺物の出土量は比較的多い。11は滑石製の臼玉である。12は土製円板(径3.1cm×3.2cm)，13は土玉である。14は棒状の鉄製品で，現存長5.0cm，断面は方形(3.0mm×5.5mm)である。鉄鏃や鉄釘の一部であろう。15は中央部が捻れている鉄製品である。現存長4.15cm，厚さは0.45cmを測る。

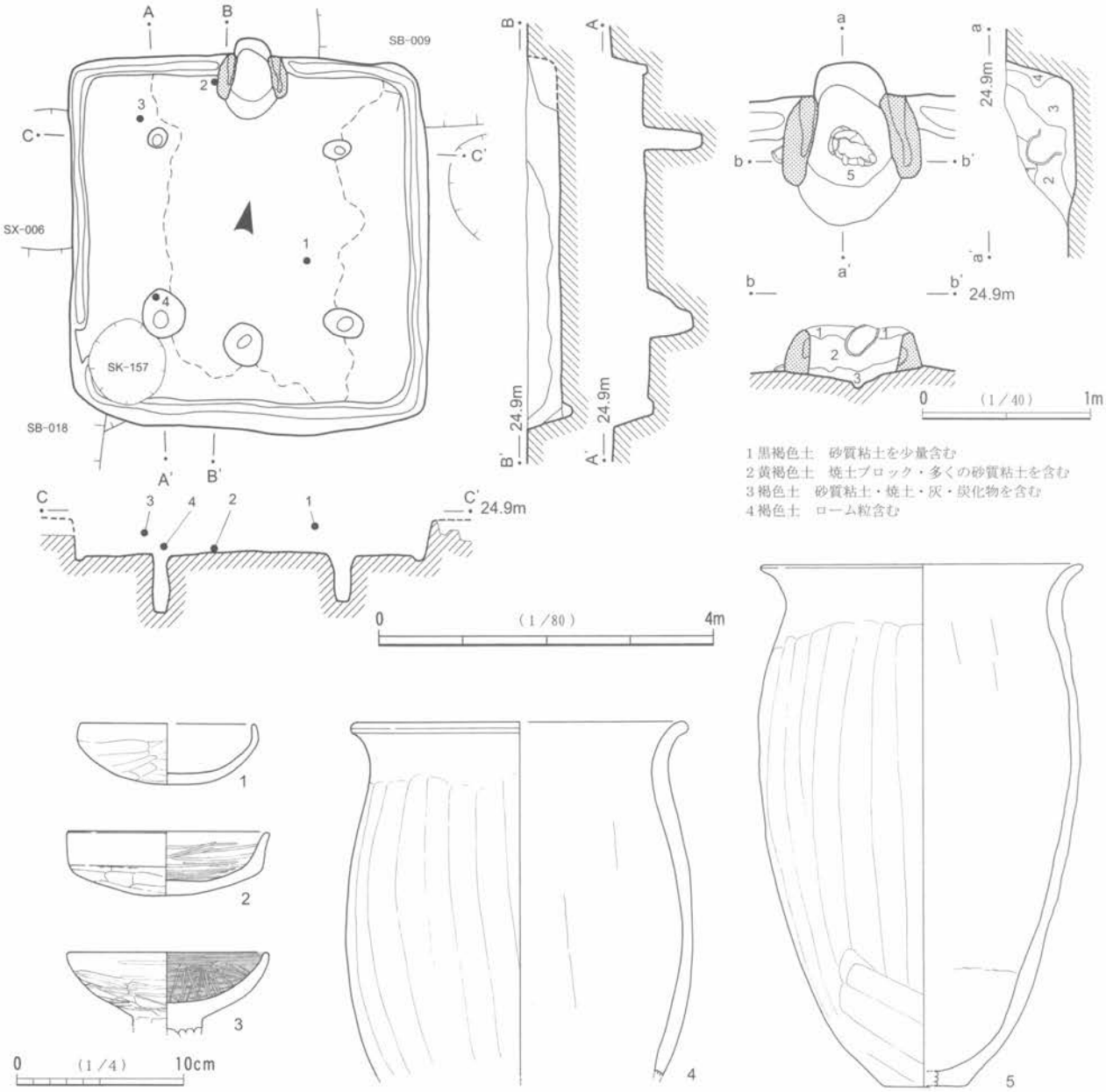
ＳＢ-013（第19図，図版４・27）

調査区の西側，Ｂ２グリッドに位置する。SB-009・078，SK-157に一部削平されている。

平面形態は方形で，規模は4.48m×4.20mを測る。主軸方位はN-14°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は遺存状態の良い東壁・南壁側で42cmである。床面は全体に凹凸があり，中央部が広く踏み



第18図　ＳＢ-012及び出土遺物



第19図　ＳＢ-013及び出土遺物

固められている。壁溝(幅10cm～22cm，深さ4cm～7cm)は一部を除いて全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は黒色土・黒褐色土が堆積していた。

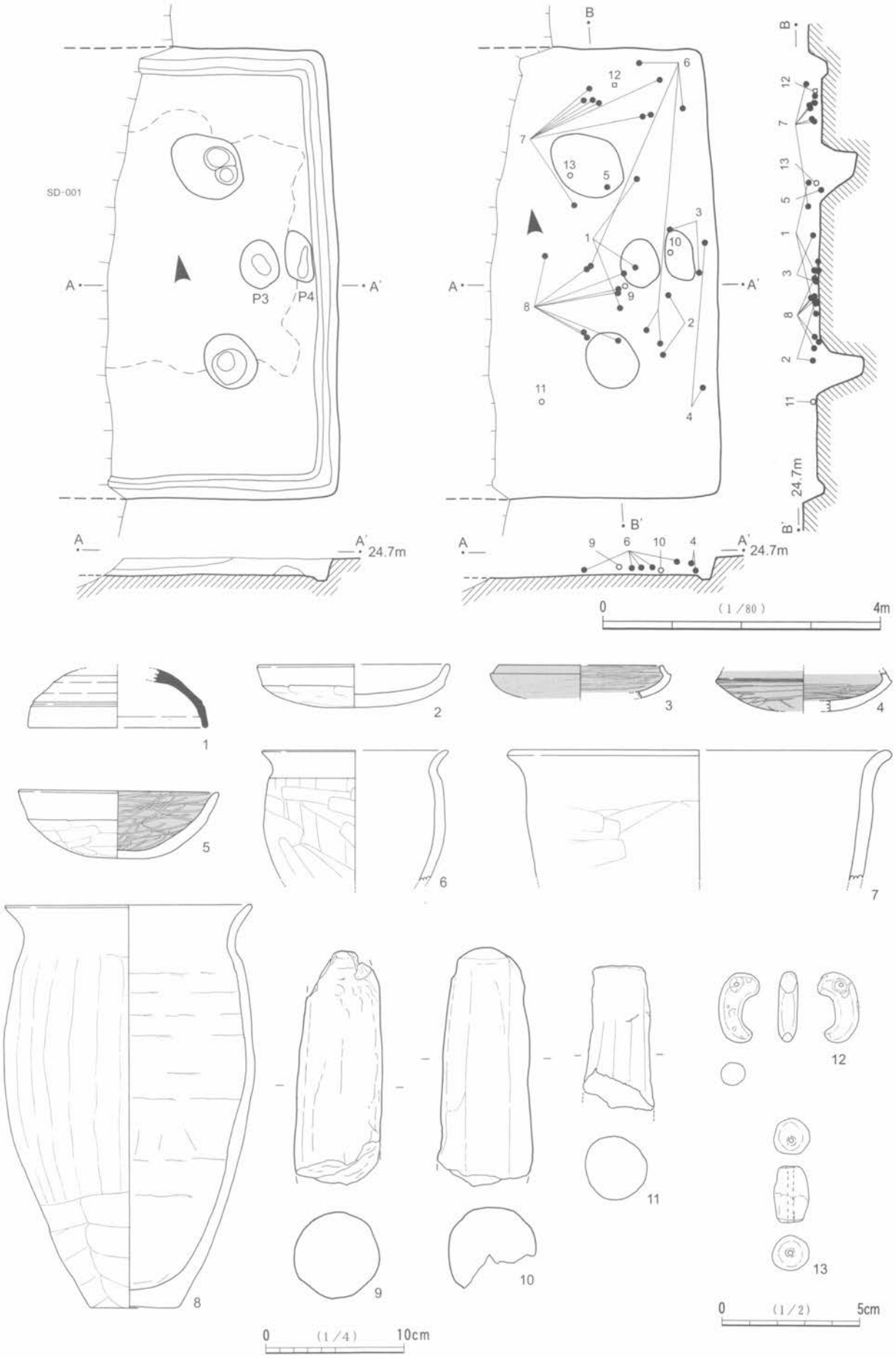
カマドは北壁中央に設けられている。壁を20cm掘り込み，垂直に立ち上がる煙道部を形成している。天井部はすでに崩落していたが，袖部が良く残っていた。カマド内からは５の甕が出土している。

出土遺物は北東側に多く，土師器杯などが出土した。

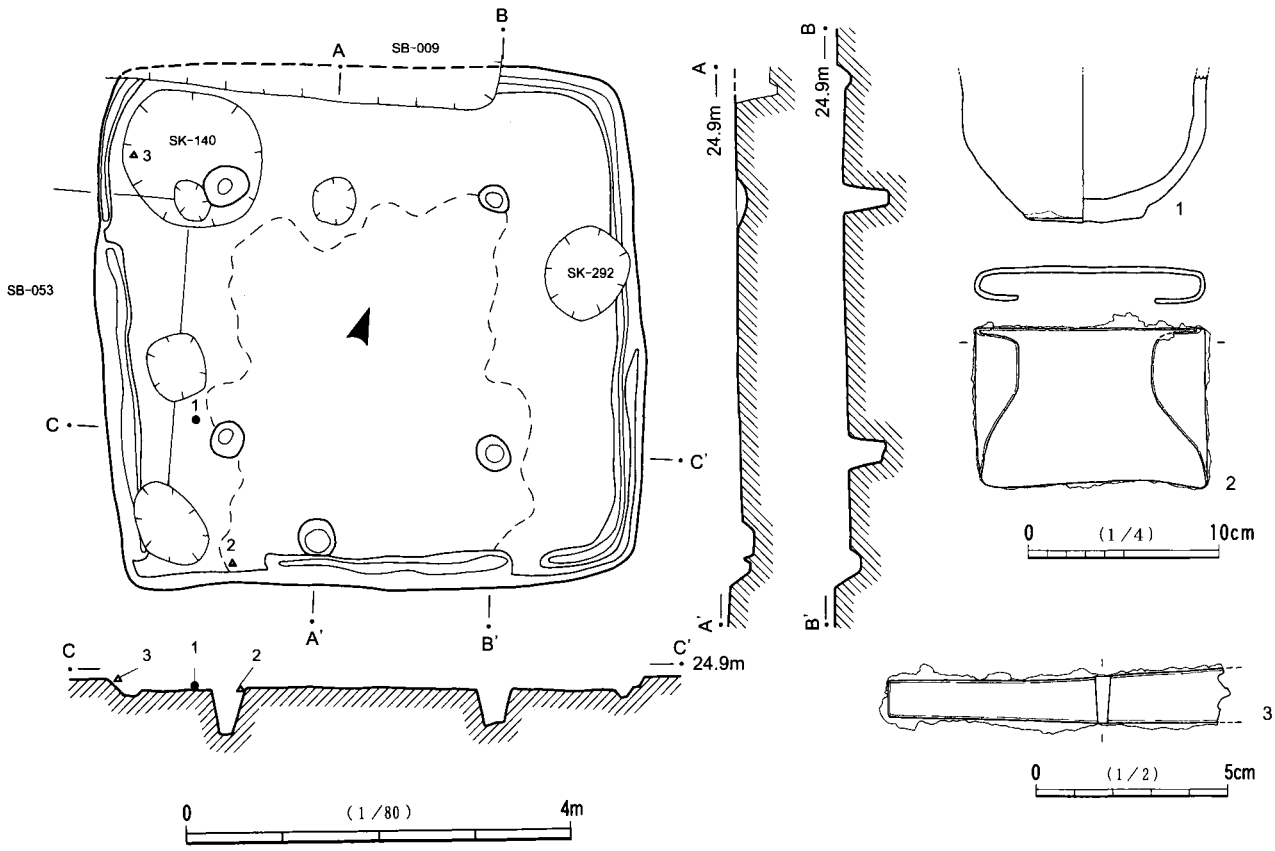
ＳＢ-014（第20図，図版４・27）

調査区の西端，Ｂ１グリッドに位置する。西側の大半をすでにSD-001に削平されている。

平面形態は方形と考えられ，規模は東壁長6.48m，南壁は現存で3.3mを測る。出入り口施設に伴うピットの位置から判断して，カマドは西壁に設けられ主軸方位はW-5°-Nと推定される。壁は垂直に掘り込ま



第20図　ＳＢ-014及び出土遺物



第21図　ＳＢ-015及び出土遺物

れ，壁高は21cm～30cmで，北側が低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝(幅20cm，深さ9cm)は，遺存している範囲では全周する。２本の柱穴と出入り口施設に伴うピット２基(P3径60cm×66cm・深さ42cm，P4径40cm×80cm・深さ8cm)を検出した。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを多く含む褐色土が主体である。

遺物は，遺存している範囲のほぼ全面から出土している。12は瑪瑙製の勾玉である。全長2.5cm，幅0.85cm，厚さ0.7cm，孔径0.3cm，重量3.47ｇを測る。13は土製の切子玉である。全長2.0cm，最大径1.3cm，孔径1.5mmを測る。９～11は支脚である。

ＳＢ-015（第21図，図版４・48）

調査区の西側，Ｂ２グリッドに位置する。SB-009に北壁側を削平され，平安時代の土坑とも重複し，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は現存で4.90m×5.64mを測る。主軸方位はN-23°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は8cm～17cmで北側がやや低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部に硬化面が広がる。壁溝(幅15cm，深さ4cm～9cm)は，南壁の一部で途切れながら巡っている。主柱穴４本と出入り口施設に伴うピットを検出した。

炉(径46cm×50cm，深さ12cm)は，P1とP2の間に床面を掘り込んで設けられている。

出土遺物は少ないが，２の鉄製方形鋤・鍬先が南壁際の床面から出土している。長方形の鉄板の両端を折り曲げて着装部をつくりだす。刃部幅11.85cm，着装部幅12.5cm，縦幅8.3cm，厚さ3mm，重量312.7ｇを

測る。３は刀子の茎部である。現存長9.16cm，幅0.73cm，厚さ0.28cm～0.4cmを測る。

ＳＢ-018（第22図，図版５・27）

調査区の西側，Ｂ２グリッドに位置する。平安時代の竪穴住居跡や土坑と重複し一部削平されているが，遺存状態は比較的良好である。

平面形態は方形で，規模は現存で4.6m×4.2mを測る。主軸方位はW-5°-Ｓである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は38cm～42cmを測る。床面はほぼ平坦で，中央部が広く踏み固められている。壁溝(幅24cm～30cm，深さ3cm～9cm)は遺存している範囲では，カマド部分を除いて全周する。４本の柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム粒・焼土粒を含む黒褐色土が主体である。

カマドは西壁に設けられ，壁を30cm掘り込み煙道部を形成する。袖部の遺存状態は良好で，焚き口付近からは，ほぼ完形の土師器甕や支脚などがまとまって出土した。火床の掘り込みは浅いが，袖部の内側はよく被熱している。

遺物は，カマド前面の床面を中心に出土している。７は支脚である。

ＳＢ-021（第23図，図版５・28）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。平安時代の竪穴住居跡，土坑や溝によって一部削平され，カマドはすでに失われている。全体に遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は4.86m×5.06mを測る。主軸方位はN-39°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は19cm～38cmで東側が低くなっている。床面はやや凹凸があり，全体に硬化面がみられるが，特に中央部はよく踏み固められている。壁溝(幅15cm，深さ2cm～5cm)は，南東壁のコーナー付近で途切れながら巡っている。床面からは多数のピットが検出されたが，P1～P4は主柱穴，P5は出入り口施設に伴うピットである。P5の周囲は半円に土手状の高まりと溝が囲んでいる。円形の土坑がカマド前面や南コーナー付近の床面から検出されたが，浅い落ち込みである。覆土は黒褐色土を主体に黒色土が混在する。

カマドは残存する砂質粘土や火床から，北西壁中央に設けられていたと考えられる。

遺物は南東壁側の床面からまとまって出土している。11は支脚，12は土玉である。

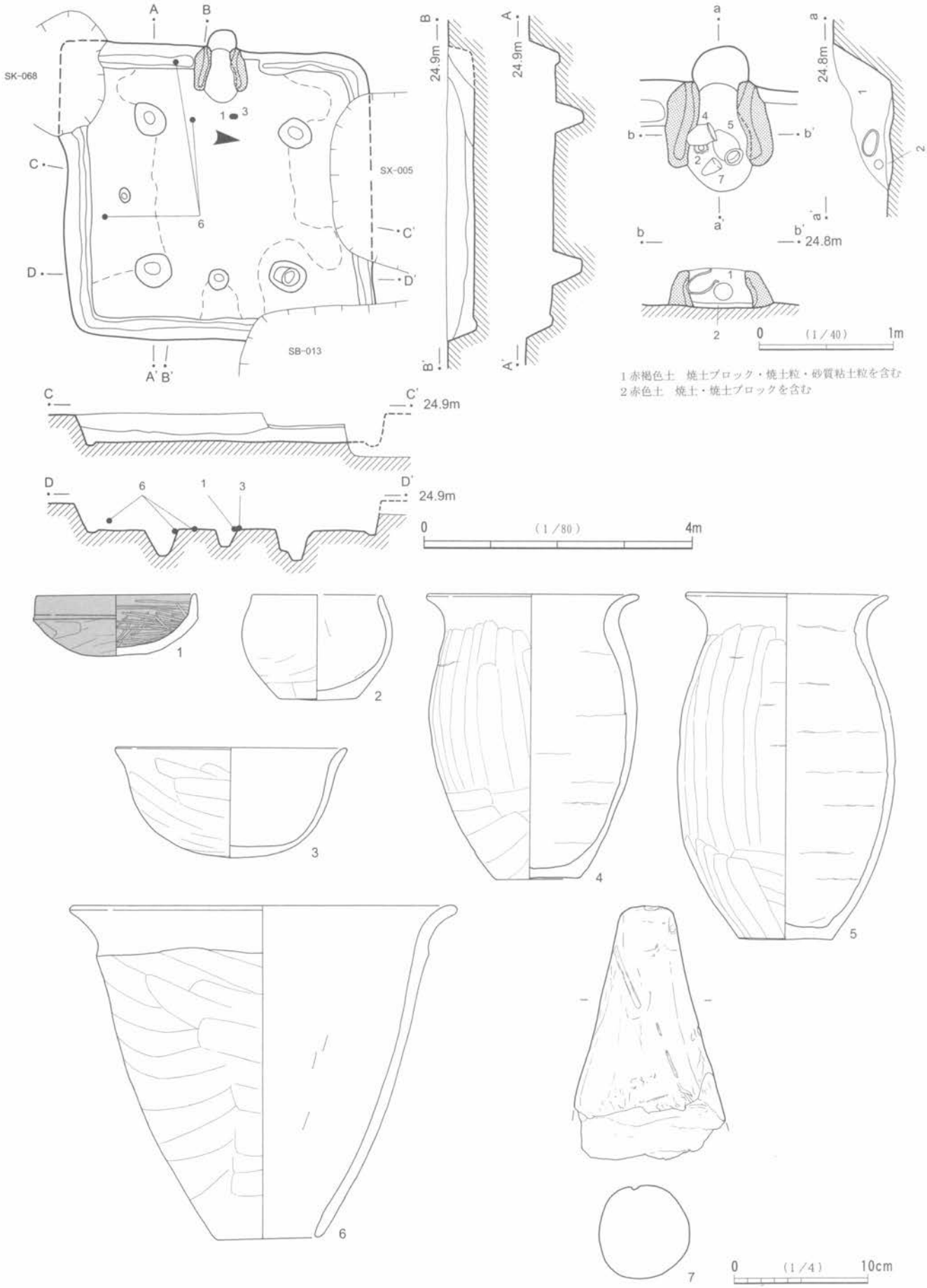
ＳＢ-022（第24図，図版５・28）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。SB-023・024と重複し，SB-024に東側を削平されている。上面の一部をSD-016が走る。

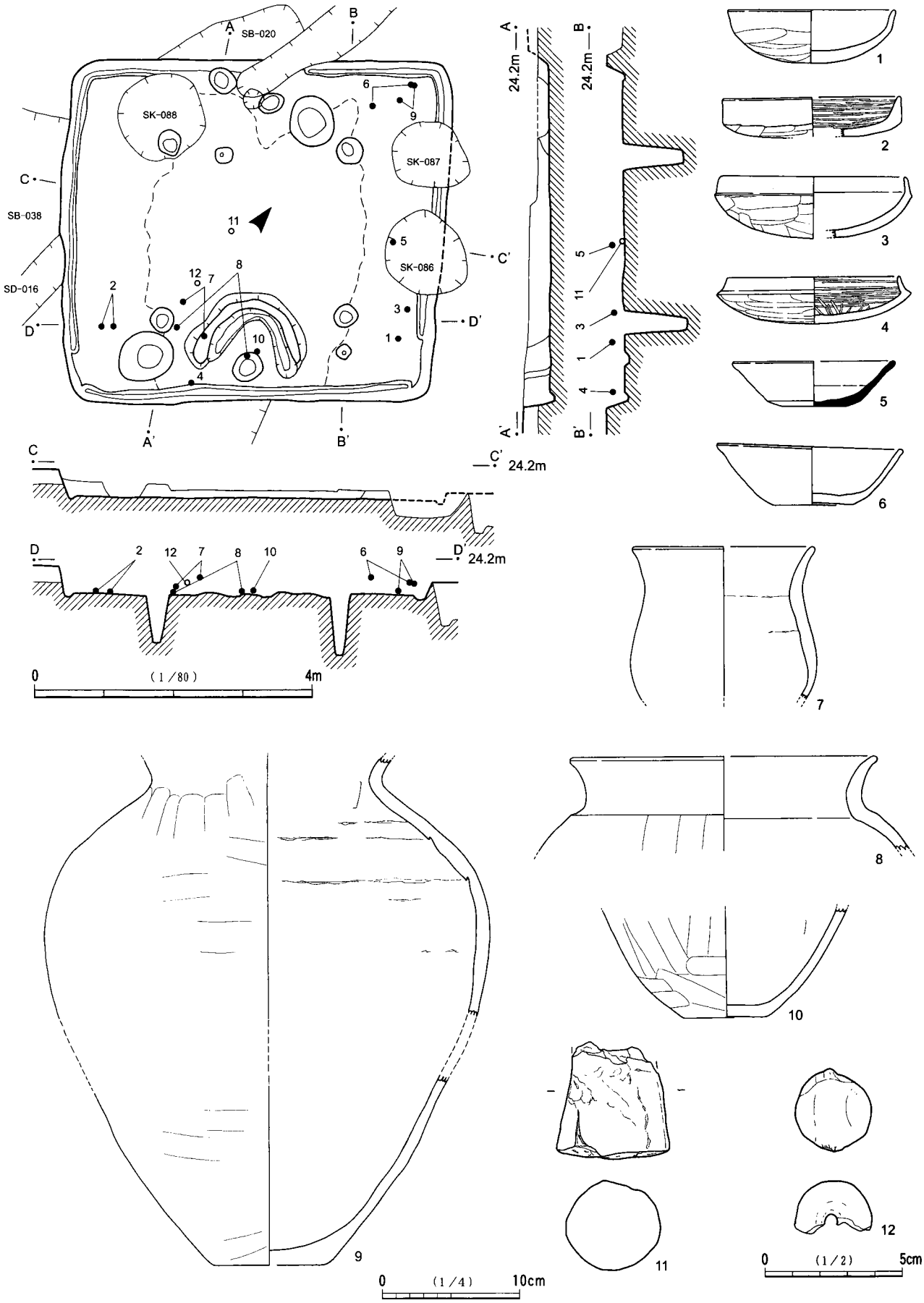
平面形態は方形で，規模は現存で4.8m×4.94mを測る。主軸方位はN-66°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は30cm～50cmで北側が低くなっている。床面は全体に軟弱であるが，中央部がやや踏み固められている。壁溝(幅20cm，深さ5cm～10cm)は，遺存している範囲では，カマド部分と貯蔵穴を除いて巡っている。主柱穴は４本検出した。貯蔵穴(径58cm×76cm，深さ45cm)は北コーナーに設けられている。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黒褐色土が主体である。

カマドは西壁中央より南寄りに設けられ，壁を16cm掘り込んでいる。遺存状態は良好ではなく，袖部がわずかに残っていたが，袖部内側，火床ともよく被熱していた。

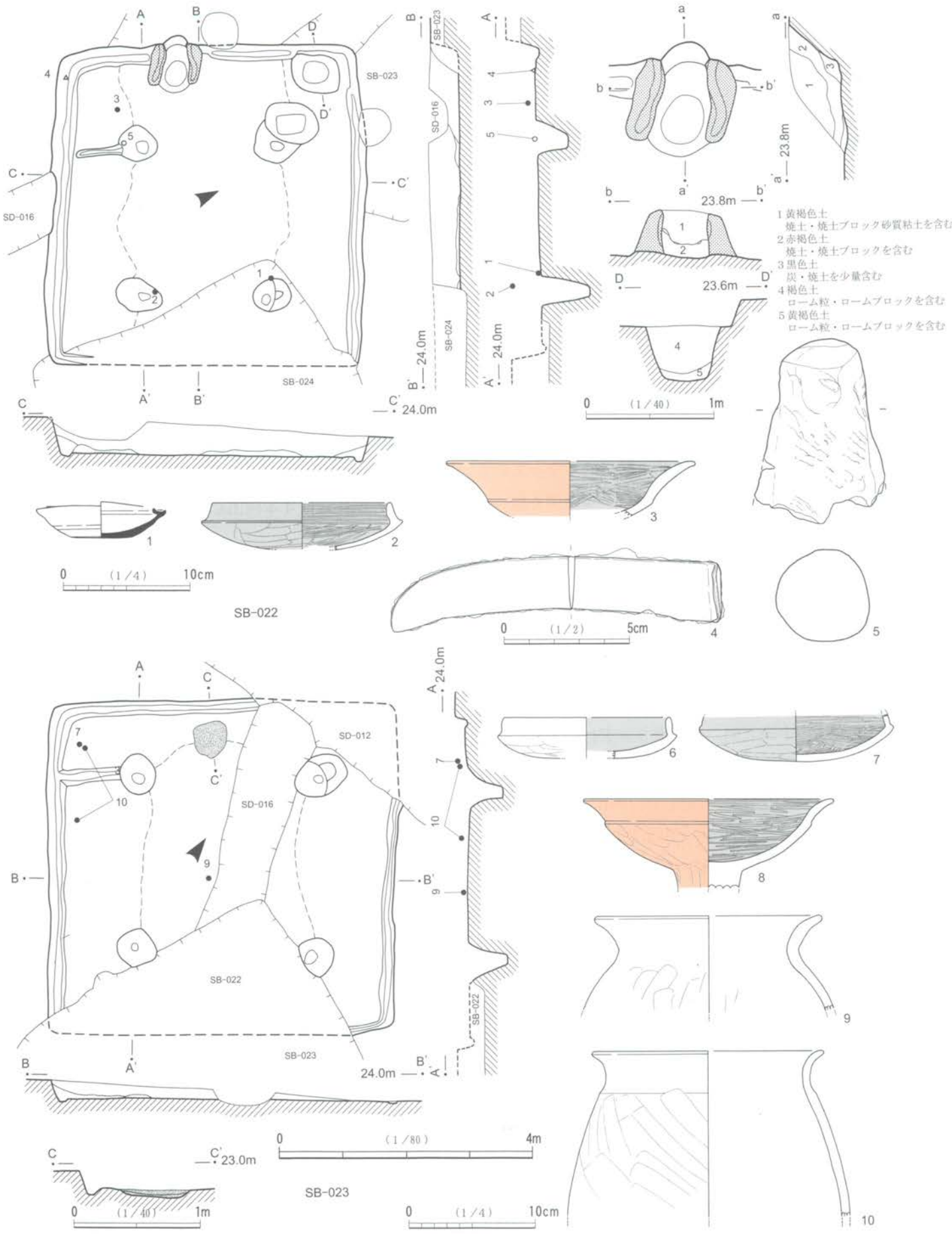
遺物の出土量は少なく，４の鎌は西コーナー付近の壁溝上から出土した。刃部が内彎し，先端を欠損している。現存長18.45cm，刃部は中央部で幅2.45cm・厚さ0.25cmを測る。基端部に高さ0.85cmの折り返しをもつ。５は支脚である。



第22図　ＳＢ-018及び出土遺物



第23図　ＳＢ-021及び出土遺物



第24図　ＳＢ-022・ＳＢ-023及び出土遺物

ＳＢ-023（第24図，図版28）

調査区の中央北側，Ｂ１グリッドに位置する。SB-022，SD-012･016と重複し，上面も全体に削平され遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は現存で4.9m×5.5mを測る。主軸方位はN-37°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は遺存の良い西壁で30cmを測る。床面はほぼ平坦で，中央部に硬化面が残る。壁溝(幅10cm～20cm，深さ4cm)は，遺存している範囲では全周する。４本の主柱穴を検出した。P1と壁溝の間には根太痕跡が検出された。覆土は黒褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられていたと考えられるが，すでに失われ火床がわずかに残っていた。

遺物の出土は少なく，土師器杯・高杯・甕が覆土や床面から出土した。

ＳＢ-024（第25・26図，図版５・28・29）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。SB-022･048を一部削平しているが，SB-019に北西コーナーを削平され，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は4.90m×4.30mを測る。主軸方位はN-2°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は5cm～20cmで北西側が低くなっている。床面は全体に軟弱で，硬化面は認められない。壁溝(幅15cm～20cm，深さ6cm～9cm)は，東壁側を除いて巡っている。主柱穴は４本検出した。覆土は，黒色土，黒褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を10cm掘り込み，垂直に立ち上がる煙道部を形成する。天井部はすでに崩落していたが，袖部が遺存し内側はよく被熱していた。火床は6cm程皿状に掘り窪められ，底面は焼土ブロックが堆積していた。

多くの遺物が覆土や床面から出土している。

ＳＢ-025（第27・28図，図版５・29）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。北壁の一部が攪乱を受けているが，本遺跡内では壁の掘り込みが最も深く，全体に遺存状態は良好である。

平面形態は方形で，規模は6.08m×5.94mを測る。主軸方位はN-18°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は94cm～110cmとかなり深くなっている。床面は，やや凹凸があるが広く踏み固められている。壁溝(幅10cm，深さ9cm)は，カマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と不整形の出入り口施設に伴うピット(P5径60cm×104cm，深さ40cm)を検出した。覆土は，わずかにローム粒を含む黒色土を主体に，黒褐色土が流れ込んでいる。

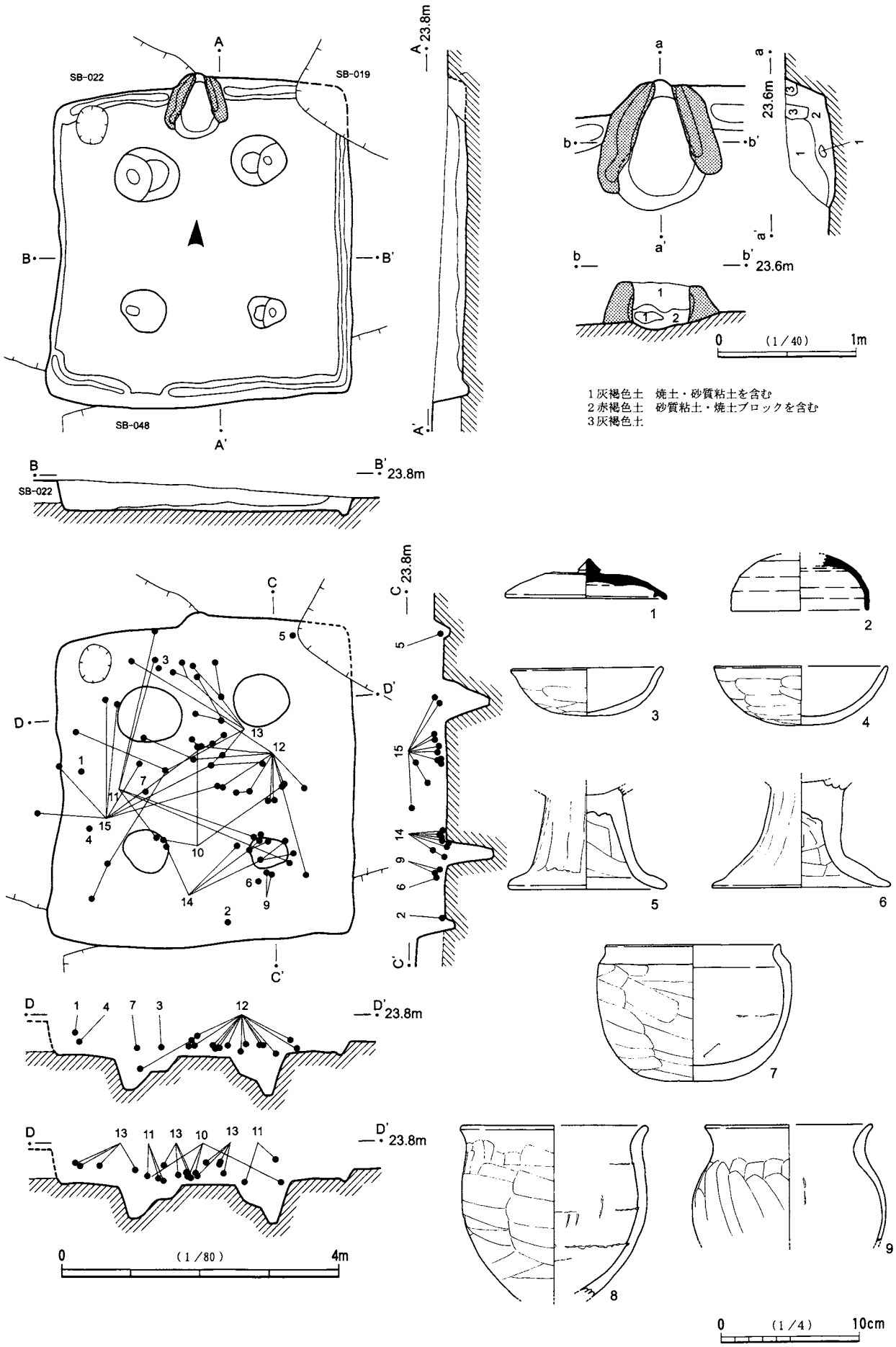
カマドは北壁中央に設けられ，壁をわずかに掘り込んでいる。遺存状態は良好で，煙道部がよく遺存し被熱している。火床はわずかに掘り窪められているが，底面はよく被熱していた。

覆土や床面から多くの遺物が出土している。31は土錘で，下部を欠損する。現存長4.3cm，孔径0.4cmを測る。32は鉄製品で，薄い鉄板を折り曲げて筒状につくる。現存長3.1cm，径0.83cm×1.15cm，厚さ0.5mmを測る。29・30は支脚である。

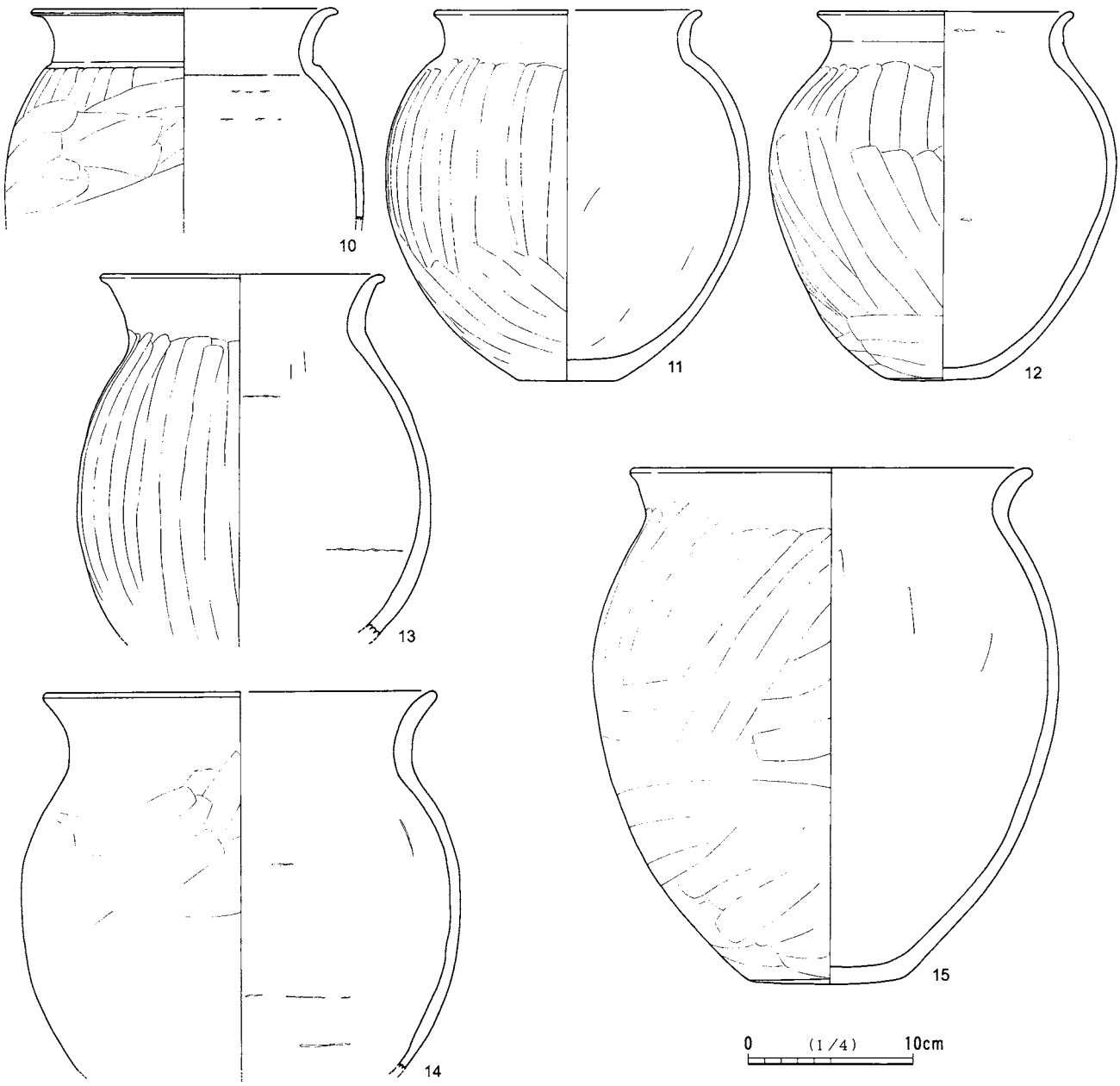
ＳＢ-027（第29・30図，図版５・29・30）

調査区の中央やや北側，Ｂ１グリッドに位置する。平安時代のSB-026と重複，西壁から南壁にかけてSD-024に一部削平されている。

平面形態は方形で，規模は5.80m×5.60mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り



第25図　ＳＢ-024及び出土遺物(１)

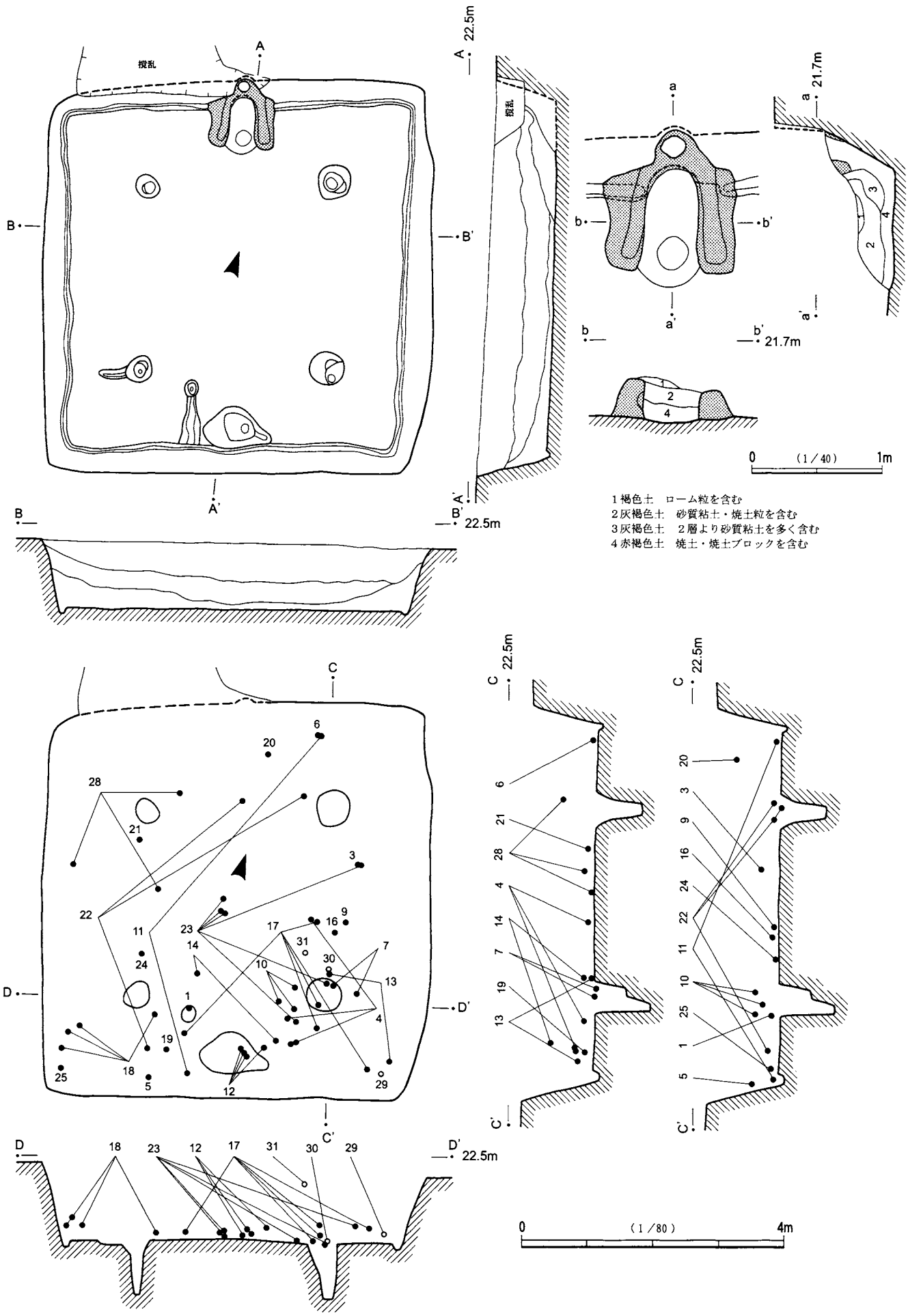


第26図　ＳＢ-024出土遺物(２)

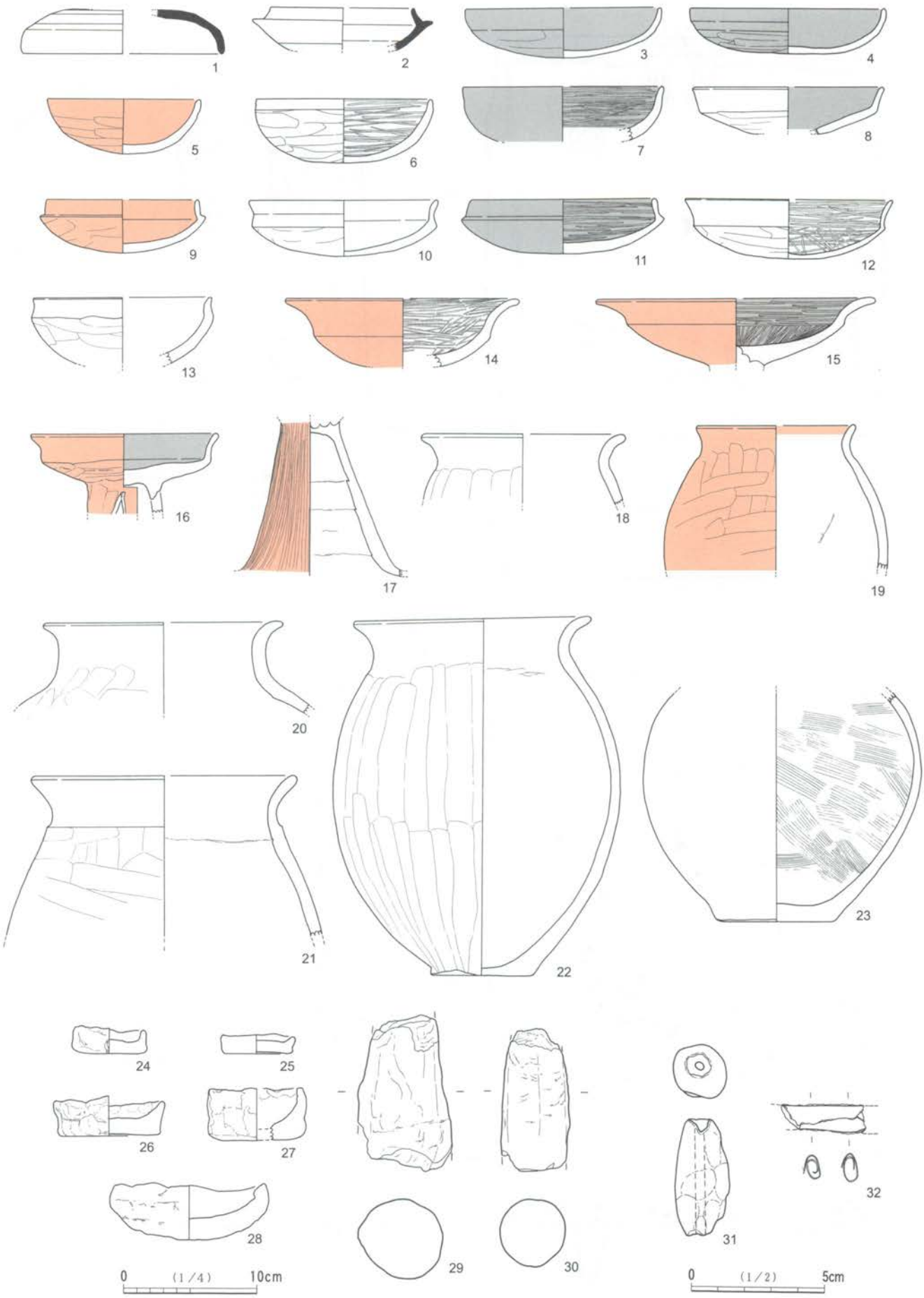
込まれ，壁高は38cm～42cmを測る。床面は中央部が広く踏み固められている。壁溝(幅24cm，深さ6cm～12cm)は，カマド部分を除いて全周する。主柱穴は４本検出した。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を20cm掘り込み，緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。右袖部に比べて左袖部の遺存状態は悪く，人為的に壊された可能性もある。３の杯は左袖部から出土した。火床は皿状に6cmほど掘り窪まれ，煙道部にかけて焼土がよく残っていた。

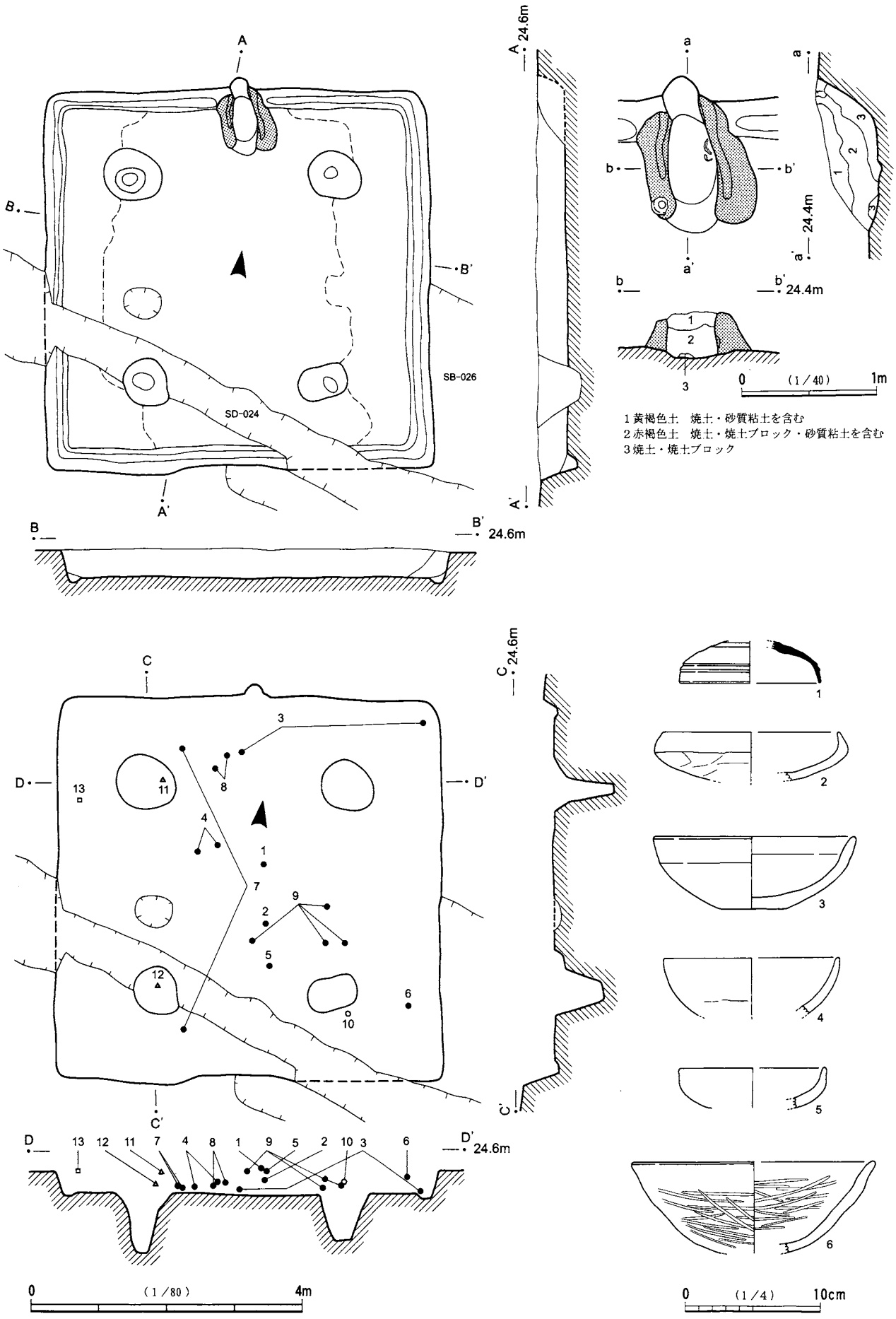
遺物は，覆土や床面から数多く出土している。11は蛇紋岩製の臼玉である。12・13は鉄鏃である。12は逆刺をもち，鏃身の先端部と篦被の下部を欠損する。現存長4.15cm，鏃身長2.0cm・幅1.7cm・厚さ0.18cm，篦被幅0.68cmを測る。13は鏃身と茎部の一部が遺存している。現存長3.7cm，鏃身幅1.03cm，茎部幅0.55cm・厚さ0.2cmを測る。10は支脚である。


撹乱
A
A' 22.5m
B
B'
B' 22.5m
a
a' 21.7m
b
b'
b' 21.7m
0 (1/40) 1m
1褐色土　ローム粒を含む
2灰褐色土　砂質粘土・焼土粒を含む
3灰褐色土　2層より砂質粘土を多く含む
4赤褐色土　焼土・焼土ブロックを含む
C
C' 22.5m
D
D' 22.5m
0 (1/80) 4m

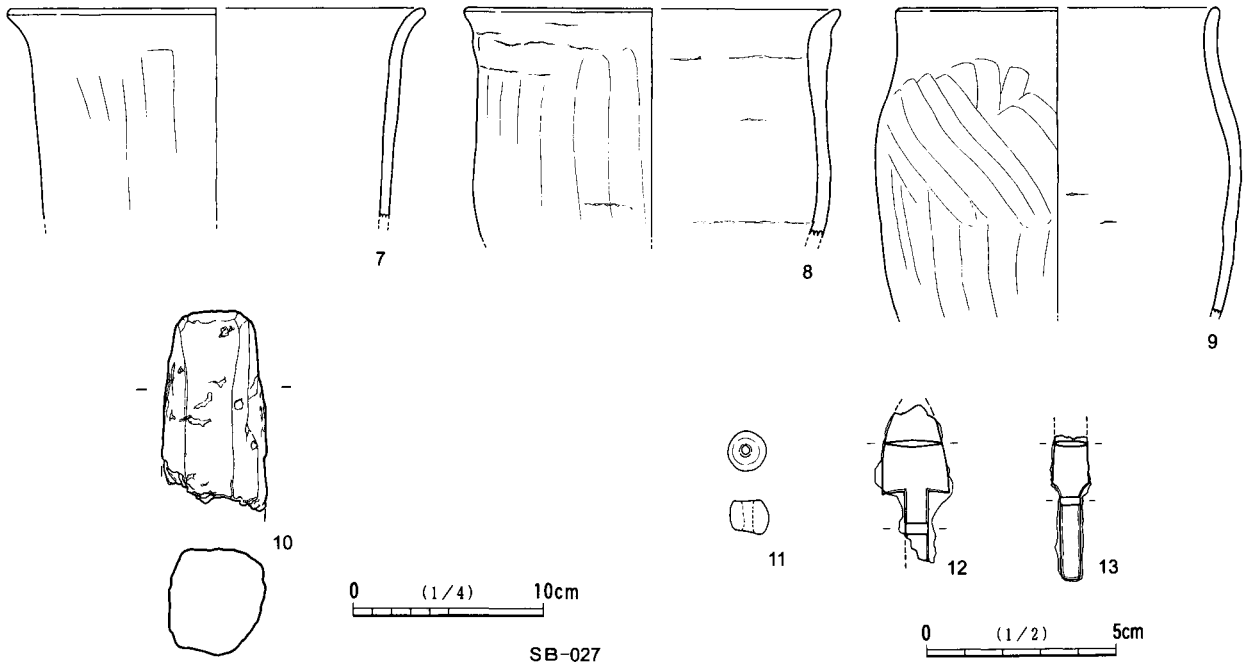
第27図　ＳＢ-025

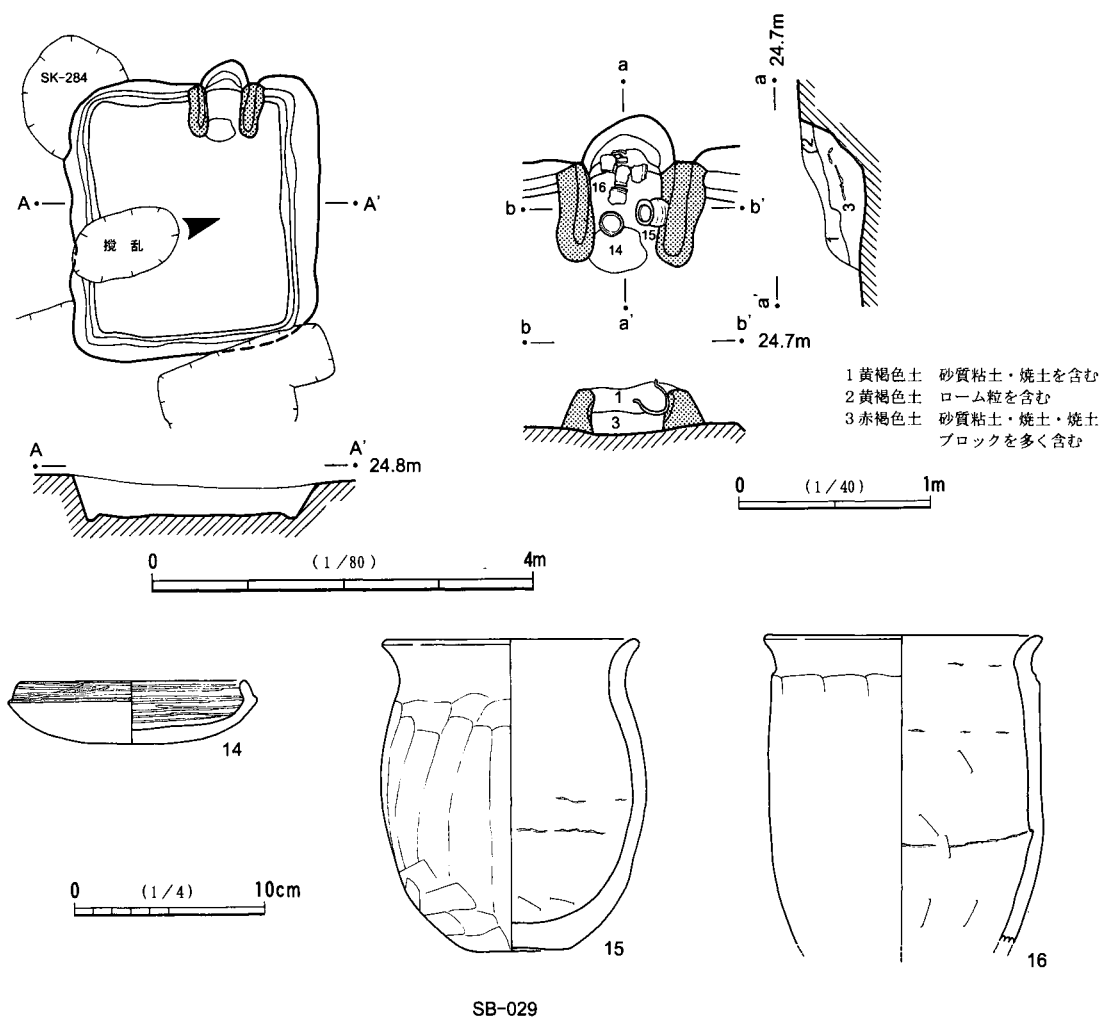


第28図　ＳＢ-025出土遺物



第29図　ＳＢ-027及び出土遺物（１）





第30図　ＳＢ-027出土遺物(２)，ＳＢ-029及び出土遺物

ＳＢ-029（第30図，図版５・30）

調査区西側，Ｂ２グリッドに位置する。土坑と重複し，攪乱も受け遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は2.98m×2.58mを測る。主軸方位はN-78°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は30cm～40cmで北側が低くなっている。床面は全体に軟弱である。壁溝(幅10cm，深さ4cm～7cm)は，カマド部分を除いて全周する。主柱穴は検出されていない。覆土には黒褐色土が堆積していた。

カマドは，西壁中央北寄りに設けられている。壁を24cm掘り込み，緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。天井部はすでに崩落していたが，袖部の遺存状態は良好で，土師器杯と２点の甕が焚き口付近からまとまって出土した。火床の掘り込みは浅い。

遺物は，カマド以外は覆土からわずかに土師器片が出土している。

ＳＢ-030（第31・32図，図版６・30）

調査区中央，Ｃ２グリッドに位置する。SD-024にカマドから東壁にかけて一部を削平されている。

平面形態は方形で，規模は7.14m×6.94mを測る。主軸方位はN-28°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は26cm～48cmで北東側が低くなっている。床面は，四隅の根太痕跡に囲まれた範囲を除いて，全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～20cm，深さ4cm～9cm)はカマド部分を除いて全周する。主柱穴は４本検出され，根太痕跡の溝が柱穴と壁溝を結んでいる。主柱穴のうちP1・P3では，柱痕跡が確認された。貯蔵穴(56cm×66cm，深さ58cm)は方形で，北東コーナー付近に設けられている。出入り口施設に伴うピットは南壁際に穿たれ，その北東側には浅い溝が弧状に巡っている。覆土は，ローム粒や小ローム・ブロックを多く含む暗褐色土を主体に，黒褐色土や茶褐色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられているが，SD-024に2/3を壊され，左袖部の一部がわずかに遺存している。火床は皿状に9cmほど掘り窪まれ，底面はよく被熱している。

遺物は，覆土や床面から数多く出土している。19は土製紡錘車である。径は上面2.6cm・下面4.3cm，厚さ2.65cm，孔径0.7cmを測る。21は不明鉄製品で，先端が折れ曲がっている。20は土玉，18は支脚である。

ＳＢ-031（第33・34図，図版30）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。SK-186に東壁の一部を削平されている。

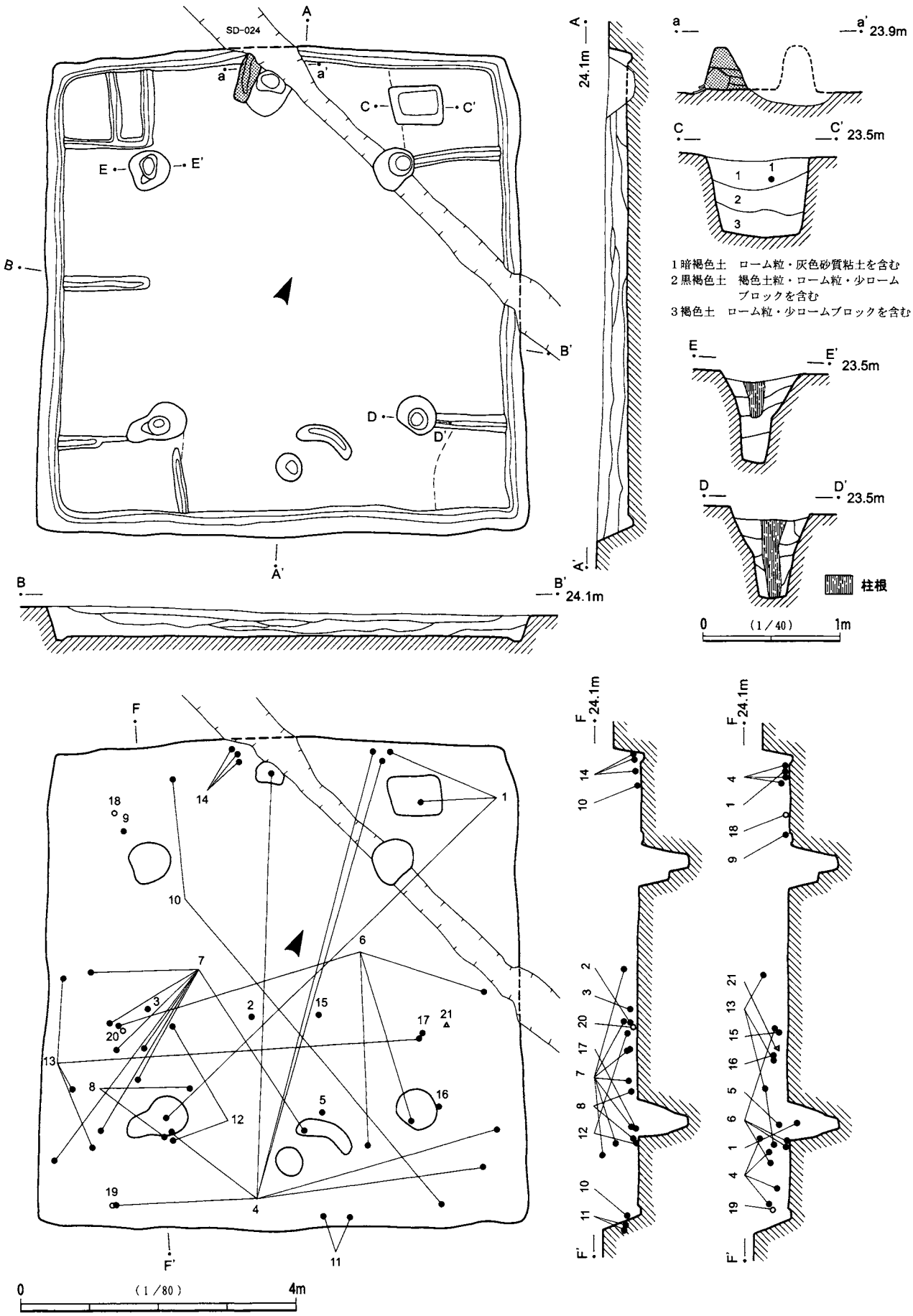
平面形態は方形で，規模は7.90m×7.70mを測る。主軸方位はN-28°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は26cm～40cm東側が低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部に広く硬化面が広がる。壁溝(幅14cm～20cm，深さ4cm～6cm)はカマド部分を除いて全周する。主柱穴４本と出入り口施設に伴う２基のピットを検出した。貯蔵穴(径70cm×86cm，深さ90cm)は，カマドの東側でP2に接して設けられている。覆土２層はローム・ブロックを含む褐色土で，人為的に埋め戻された可能性が高い。住居覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黒褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を15cm掘り込み，緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は比較的良好である。火床の掘り込みは浅いが，焼土粒が堆積していた。

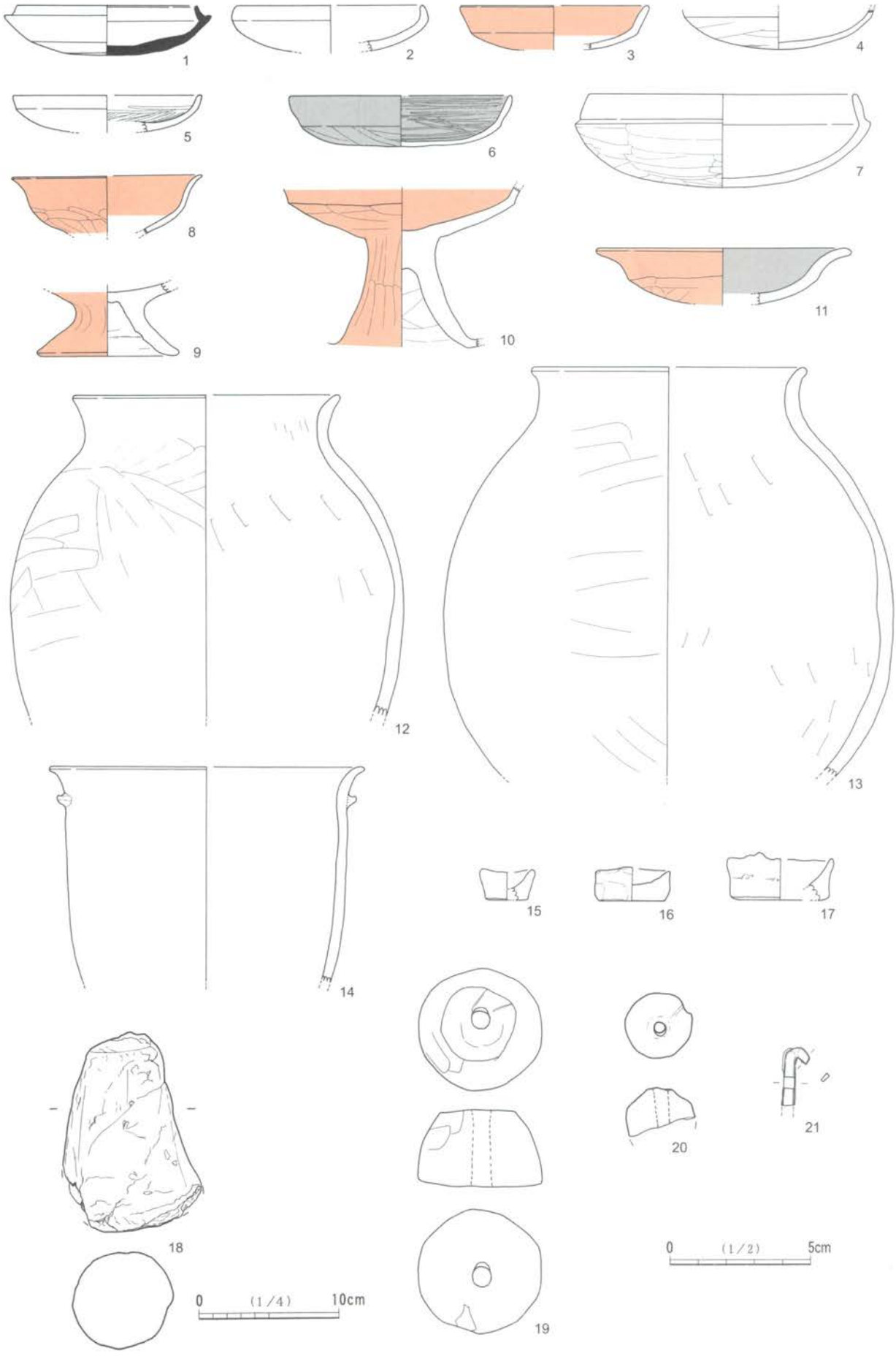
遺物は，南壁際を中心に土師器杯などが出土している。16は駿東型の甕である。22は土製勾玉である。全長2.8cm，幅0.85cm，厚さ0.8cm，孔径0.2cmを測る。

ＳＢ-032（第35図，図版６・31）

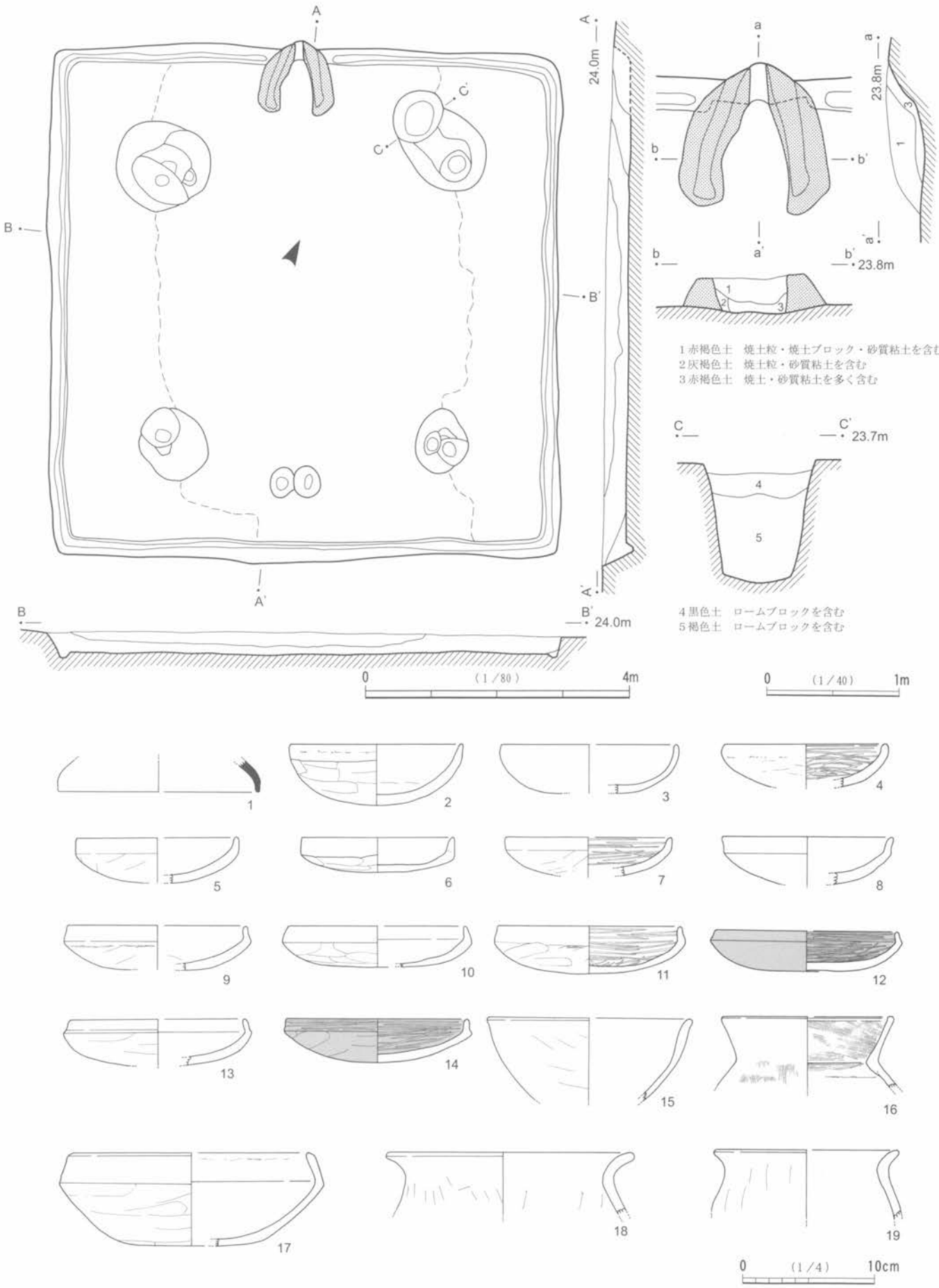
調査区の中央，Ｂ２グリッドに位置する。SK-026に東壁の一部を削平されているが，遺存状態は良好である。


SD-024
A
A'
a
a'
C
C'
E
E'
B
B'
D
D'
24.1m
23.9m
23.5m
1 暗褐色土　ローム粒・灰色砂質粘土を含む
2 黒褐色土　褐色土粒・ローム粒・少ローム
ブロックを含む
3 褐色土　ローム粒・少ロームブロックを含む
柱根
0　(1/40)　1m
F
F'
0　(1/80)　4m

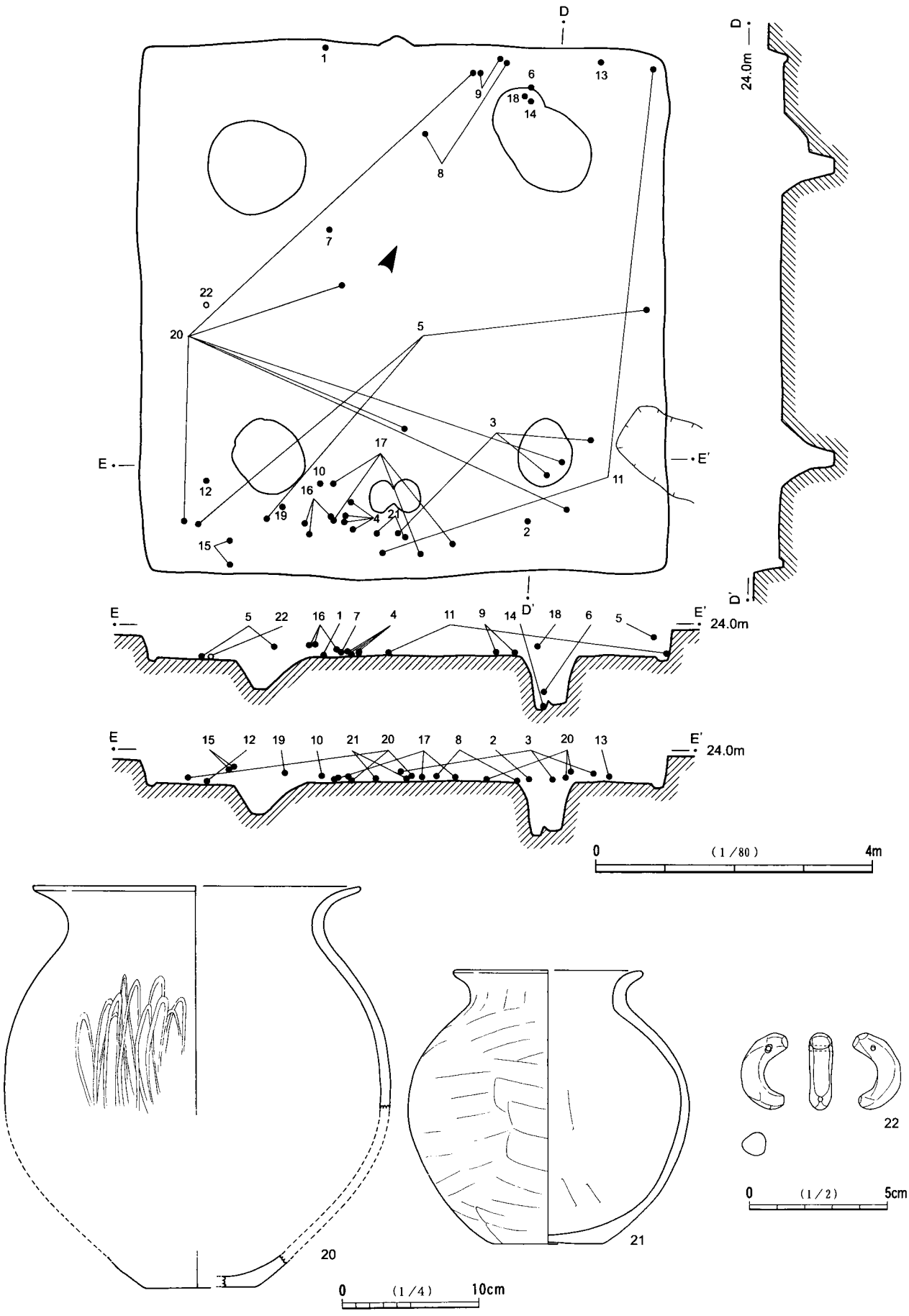
第31図　ＳＢ-030



第32図　ＳＢ-030出土遺物



第33図　ＳＢ-031及び出土遺物(１)



第34図　ＳＢ-031及び出土遺物(２)

平面形態は正方形で，規模は5.46m×5.50mを測る。主軸方位はN-23°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は38cm～64cmで東側が低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部がよく硬化している。壁溝(幅20cm～24cm，深さ6cm～12cm)は，カマド部分を除いて全周する。主柱穴は４本検出されたが，いずれも建て替えの痕跡が認められる。出入り口施設に伴うピットは，小規模で周囲にやや高まりがみられる。覆土は，ローム・ブロックやローム粒を多く含む黒色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられ，壁を24cm掘り込んでいる。煙道部はほぼ垂直に立ち上がる。遺存状態は悪く，左袖部が残存しているにすぎない。火床は皿状に9cm掘り窪まれ，底面はよく被熱している。

遺物は，土師器杯・甕や須恵器杯蓋などが，カマド前面から多く出土している。８は土製勾玉である。先端部を欠損する。現存長3.2cm，幅1.1cm，厚さ0.9cmを測る。９は土製，10は滑石製の紡錘車である。９は径上面1.6cm・下面4.0cm，厚さ2.8cm，孔径0.7cmを測る。10は大きく欠損している。

ＳＢ-033（第36・37図，図版31・32）

調査区の東側，Ｄ２グリッドに位置する。全体に上面を削平され，さらにSB-034と重複し上面の一部を削平されているが，遺存状態は良好である。

平面形態は方形で，規模は7.44m×7.28mを測る。主軸方位はN-28°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は10cm～20cmで南側が低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部が広く硬化している。壁溝(幅12cm～15cm，深さ5cm～10cm)は，カマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。このピットの北側は土手状の高まりと浅い溝が巡っている。方形の貯蔵穴(132cm×164cm，深さ52cm)は，周囲にやや高まりをもち北東コーナー付近に設けられている。P2とP3と壁溝を結んでいる。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む暗褐色土が主体である。

カマドは西壁中央に設けられていたが，天井部・袖部ともすでに失われ，火床が一部遺存していた。

遺物は，カマド前面と貯蔵穴の周辺から，土師器杯・甕などが多く出土している。24～27は土玉である。28は土製紡錘車であるが，欠損している。29・30は支脚である。

ＳＢ-034（第38図，図版６）

調査区の東側，Ｄ２グリッドに位置する。SB-033と重複し，一部がその上面に構築されている。上面を大きく削平されており，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は5.54m×5.40mを測る。主軸方位はN-73°-Ｅである。壁の掘り込みはほとんど残っていない。床面はやや凹凸があるが，中央部分が広く踏み固められている。壁溝(幅12cm，深さ3cm)は，カマド部分と北東コーナー付近を除いて巡っている。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。

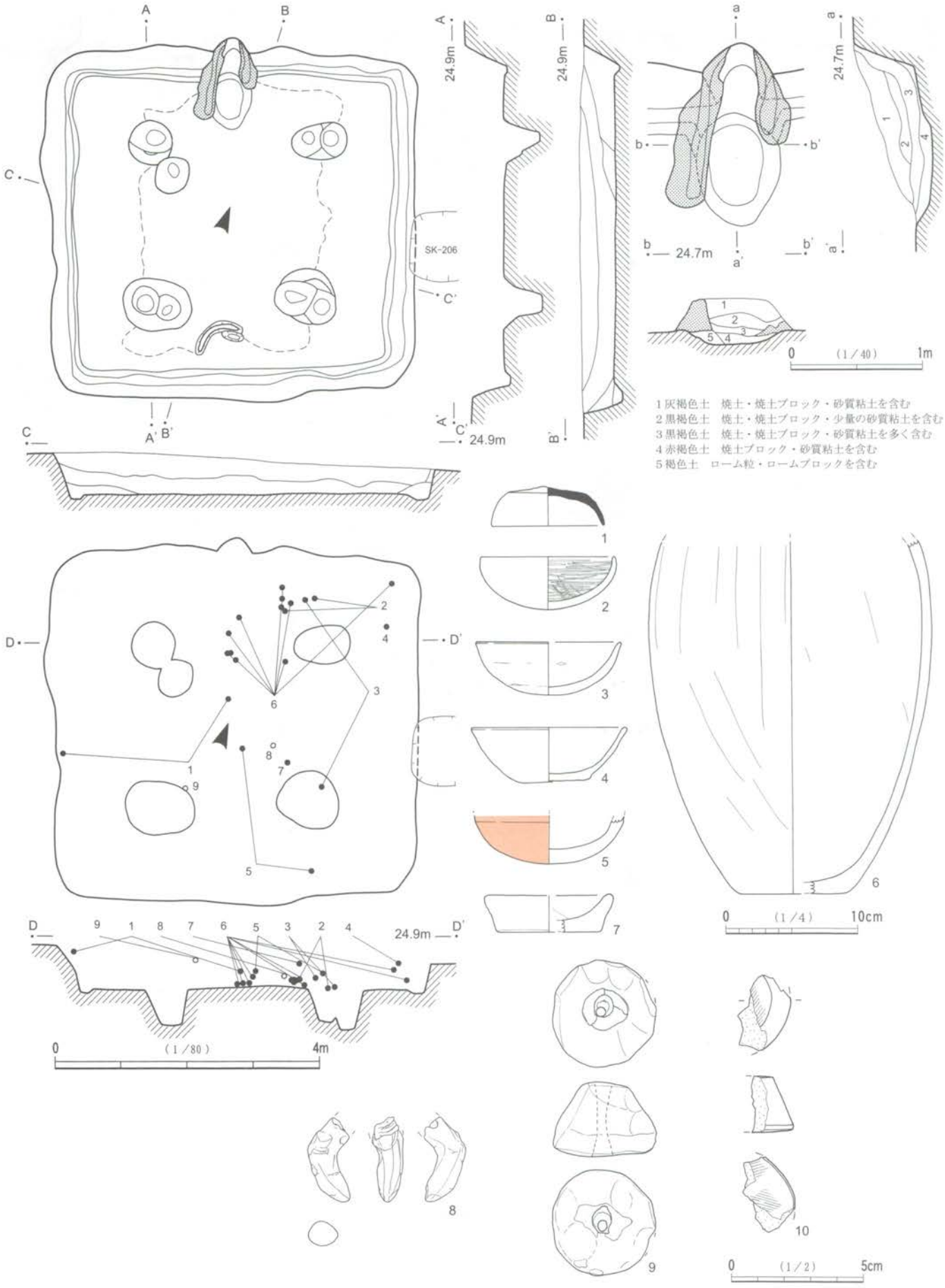
カマドは壁をわずかに掘り込み，北壁中央に設けられていた。上面を大きく削平され，袖部が一部遺存しているにすぎない。

出土遺物は少ない。図示できたのは３点のみである。３は土玉である。

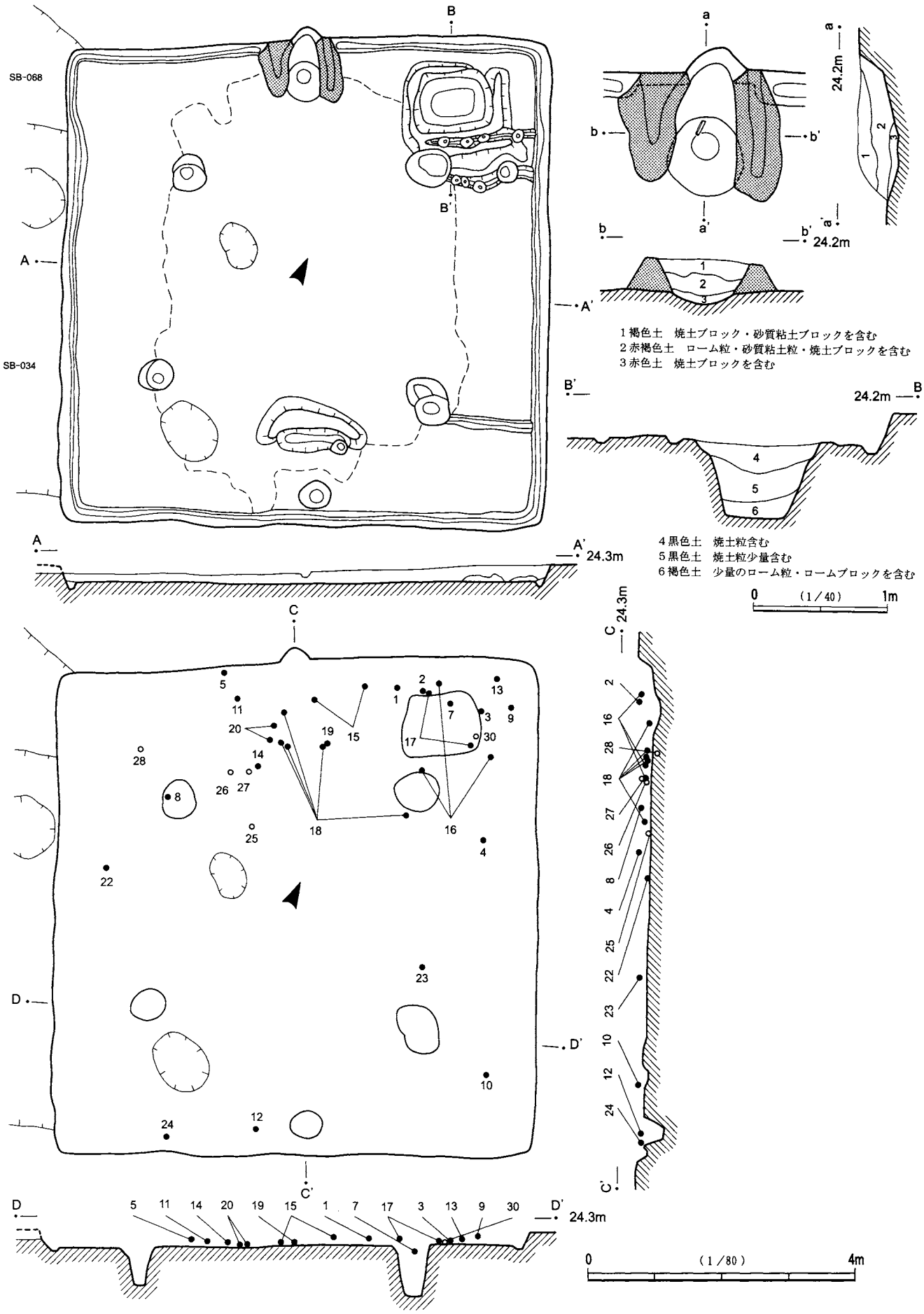
ＳＢ-035（第39・40図，図版６・32）

調査区の中央，Ｃ２グリッドに位置する。南側にSB-054・055が隣接する。中央部に一部攪乱を受けているが，遺存状態は良好である。

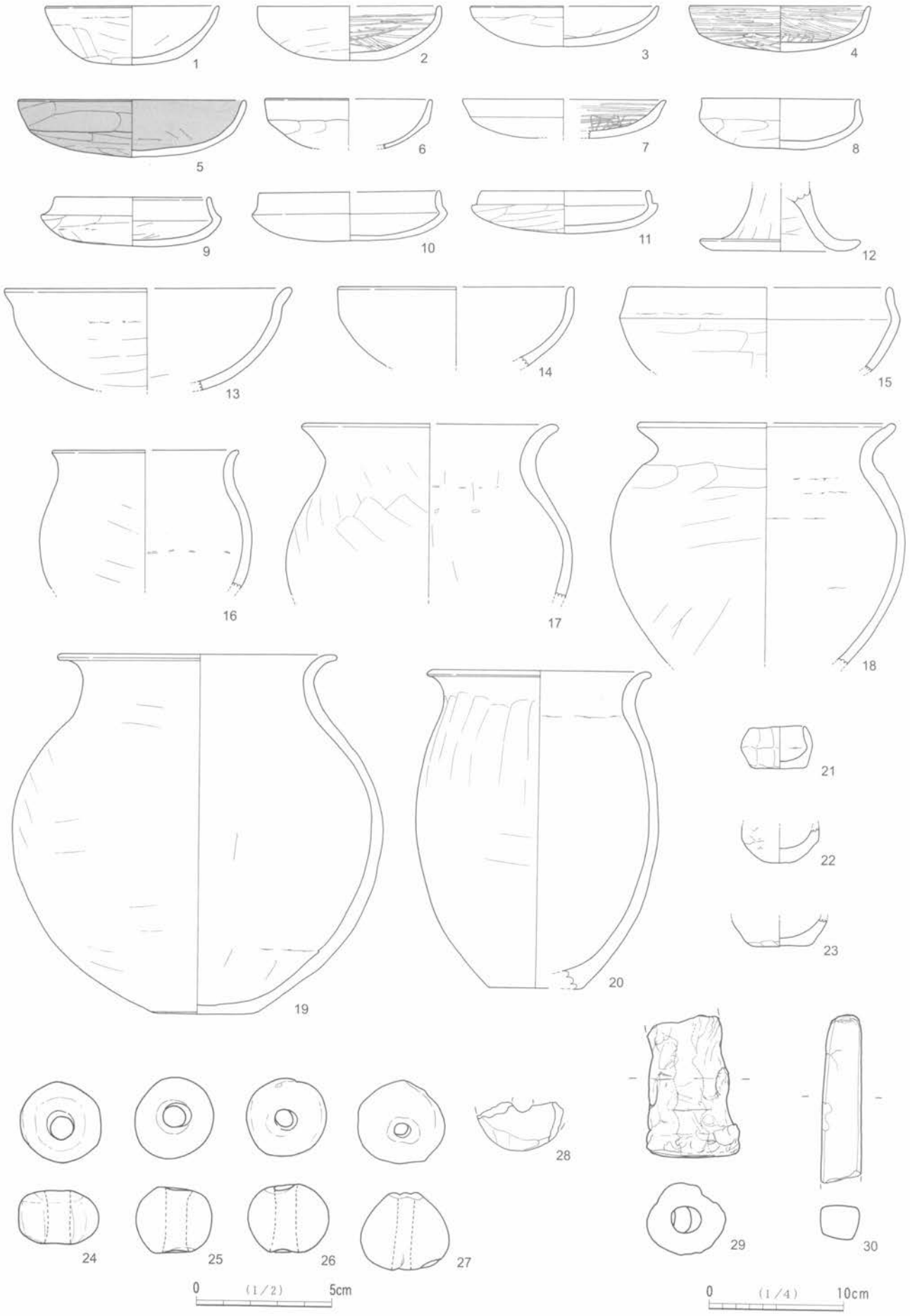
平面形態は方形で，規模は6.08m×6.40mを測る。主軸方位はN-14°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は22cm～32cmで，東側がやや低くなっている。床面は中央部に硬化面が広がっているが，全体



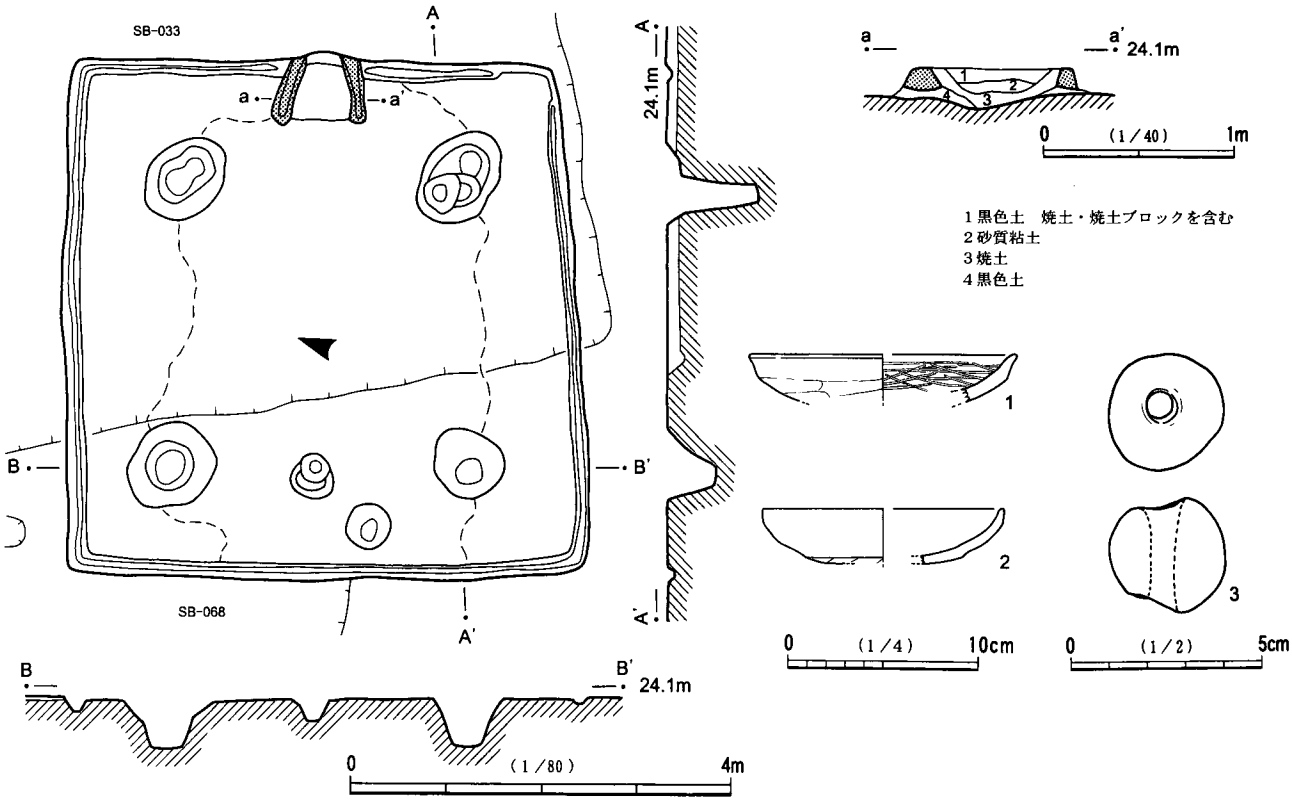
第35図　ＳＢ-032及び出土遺物


SB-068
SB-034
A
A'
B
B'
a
a'
b
b'
24.2m
24.3m
1 褐色土　焼土ブロック・砂質粘土ブロックを含む
2 赤褐色土　ローム粒・砂質粘土粒・焼土ブロックを含む
3 赤色土　焼土ブロックを含む
4 黒色土　焼土粒含む
5 黒色土　焼土粒少量含む
6 褐色土　少量のローム粒・ロームブロックを含む
0　(1/40)　1m
C
C'
D
D'
0　(1/80)　4m

第36図　ＳＢ-033



第37図　ＳＢ-033出土遺物



第38図　ＳＢ-034及び出土遺物

に凹凸がみられる。壁溝(幅10cm～16cm，深さ3cm～5cm)は，一部途切れながら巡っている。主柱穴は４本検出され，出入り口施設に伴うピットの北側床面がやや高くなっている。方形の貯蔵穴(98cm×104cm，深さ65cm)は南壁際，P3のすぐ南側に設けられている。覆土は，ローム・ブロックを多量に含む褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられ，壁を13cm掘り込んで煙道部は緩やかに立ち上がる。袖部は上面がやや削平されているが，内側はよく被熱している。火床の掘り込みは浅く，焼土や炭化粒が堆積していた。カマド内からは，甕が出土している。９の甕は倒置され，支脚として利用されている。

遺物は，土師器杯・甕・甑などが，カマド前面や南壁際からまとまって出土している。

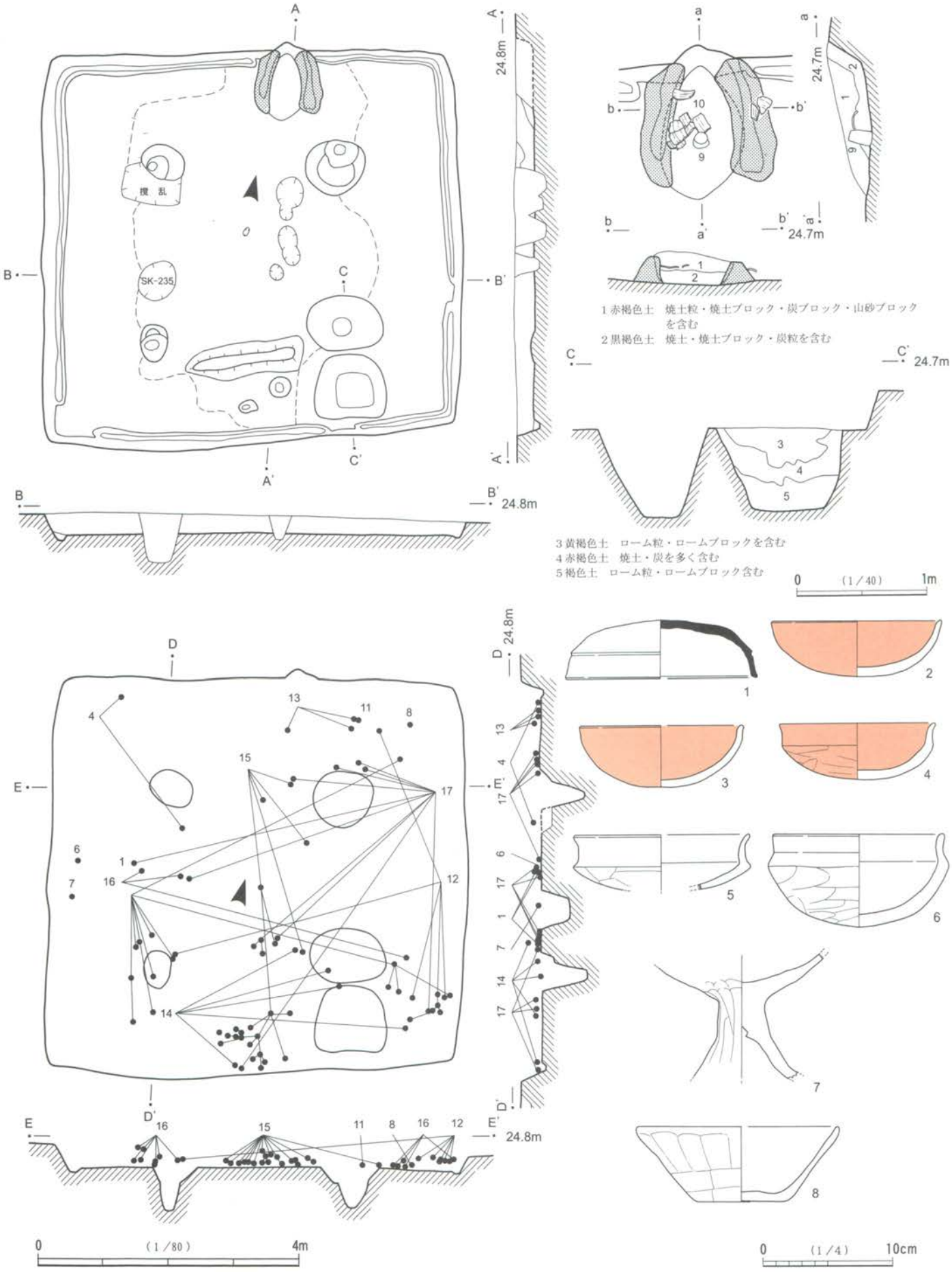
ＳＢ-036（第41・42図，図版６・32・33）

調査区の東側，Ｄ２グリッドに位置する。SB-042・062と重複し，一部を削平している。遺存状態は比較的良好である。

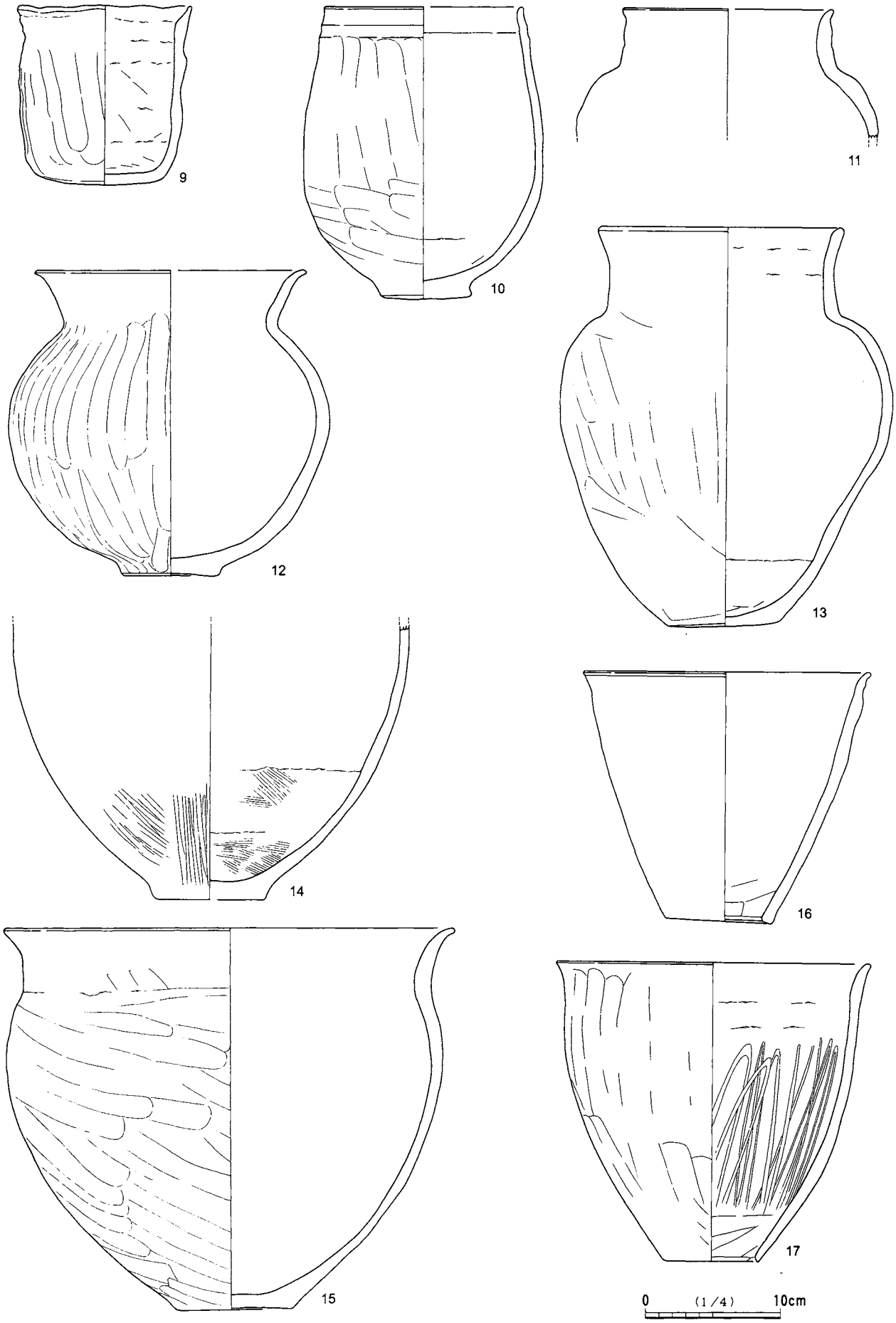
平面形態は方形で，規模は5.20m×5.34mを測る。主軸方位はN-43°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は40cm～46cmを測る。床面はやや凹凸があるが，全体に堅緻で特に中央部は広く踏み固められている。壁溝(幅18cm～24cm，深さ4cm～12cm)は，カマド部分と西壁の一部を除いて全周する。４本の主柱穴と，不整形の出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム・ブロックを含む黒褐色土と黒色土が主体である。

カマドは，北壁中央に壁を26cm掘り込んで構築されている。遺存状態は良好である。煙道部はやや緩やかに立ち上がる。火床の掘り込みは浅いが，底面はよく被熱していた。

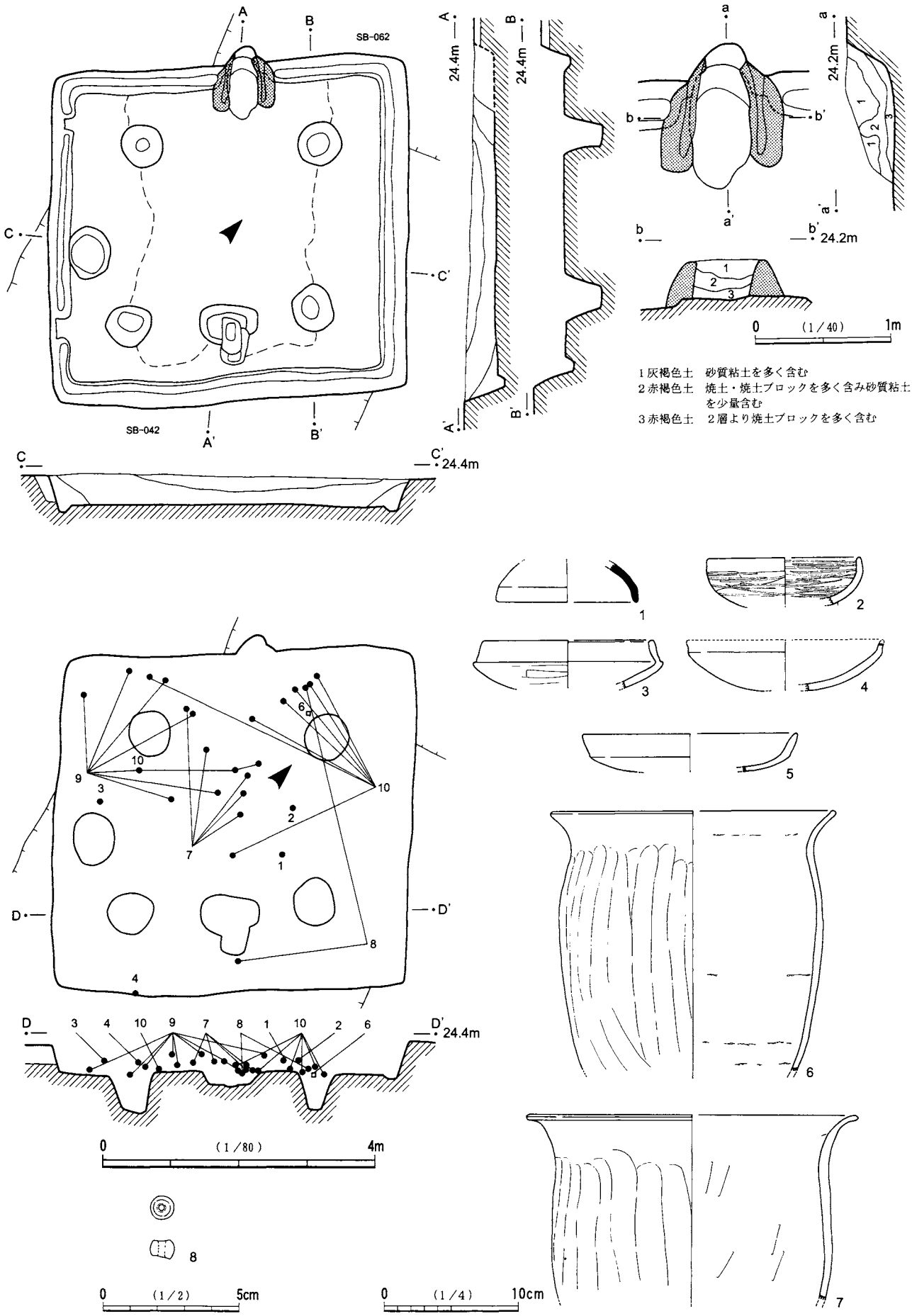
遺物は，土師器杯・甕がカマド周辺の床面から出土している。８は滑石製の臼玉である。



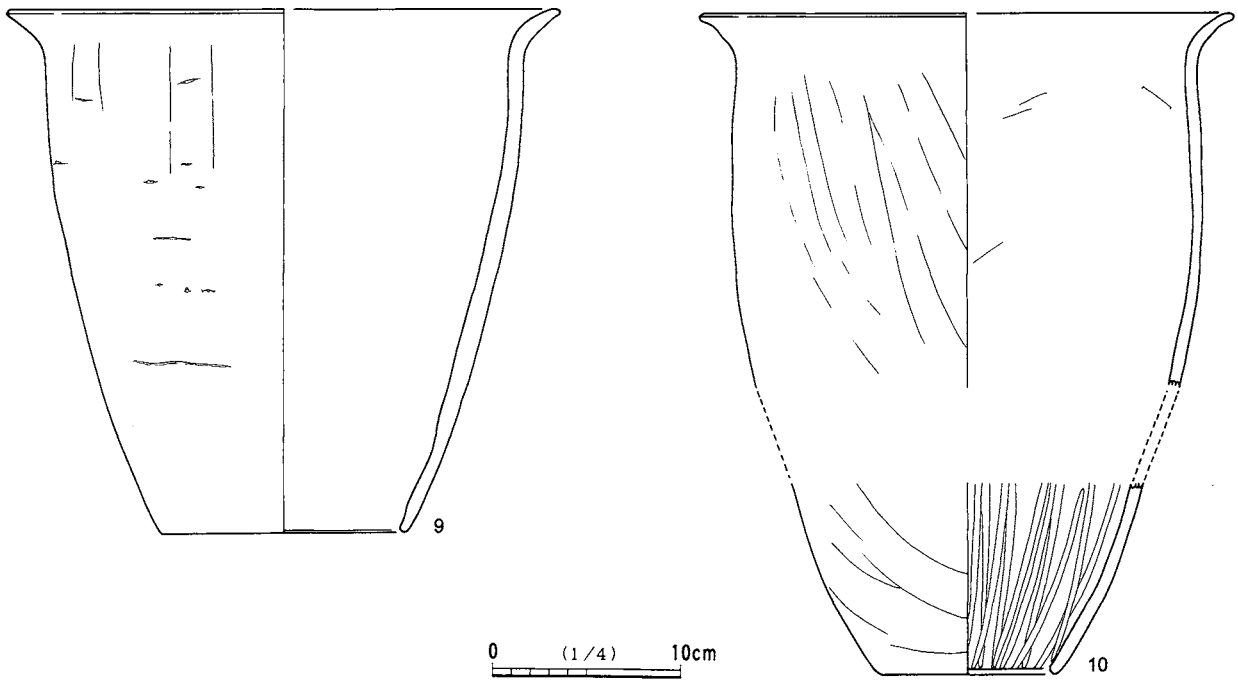
第39図　ＳＢ-035及び出土遺物(１)



第40図　ＳＢ-035出土遺物（２）



第41図　ＳＢ-036及び出土遺物(１)



第42図　ＳＢ-036出土遺物(２)

ＳＢ-037（第43・44図，図版６・33・34）

調査区の東側，Ｄ２グリッドに位置する。SB-068と重複し，北西コーナーをSD-037に削平されている。さらに上面も全体に削平されており，遺存状態はあまり良好ではない。

平面形態は正方形で，規模は7.04m×6.96mを測る。主軸方位はN-12°-Wである。壁の遺存状態は悪く，現存で3cm～10cm程度である。床面はほぼ平坦で，中央部に広く硬化面が広がっている。壁溝(幅18cm，深さ3cm～8cm)はカマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と，２基の出入り口施設に伴うピットを検出した。貯蔵穴(82cm×160cm，深さ40cm)は左右にテラスをもつ長楕円形の形態で，カマド西側に設けられている。

カマドは北壁中央に設けられ，壁をわずかに掘り込んでいる。上面を大きく削平されており，袖部が遺存していたが，遺存状態はあまり良好ではない。

遺物は，土師器杯・甕などが，カマドや貯蔵穴周辺からまとまって出土している。27は支脚，28は土玉である。

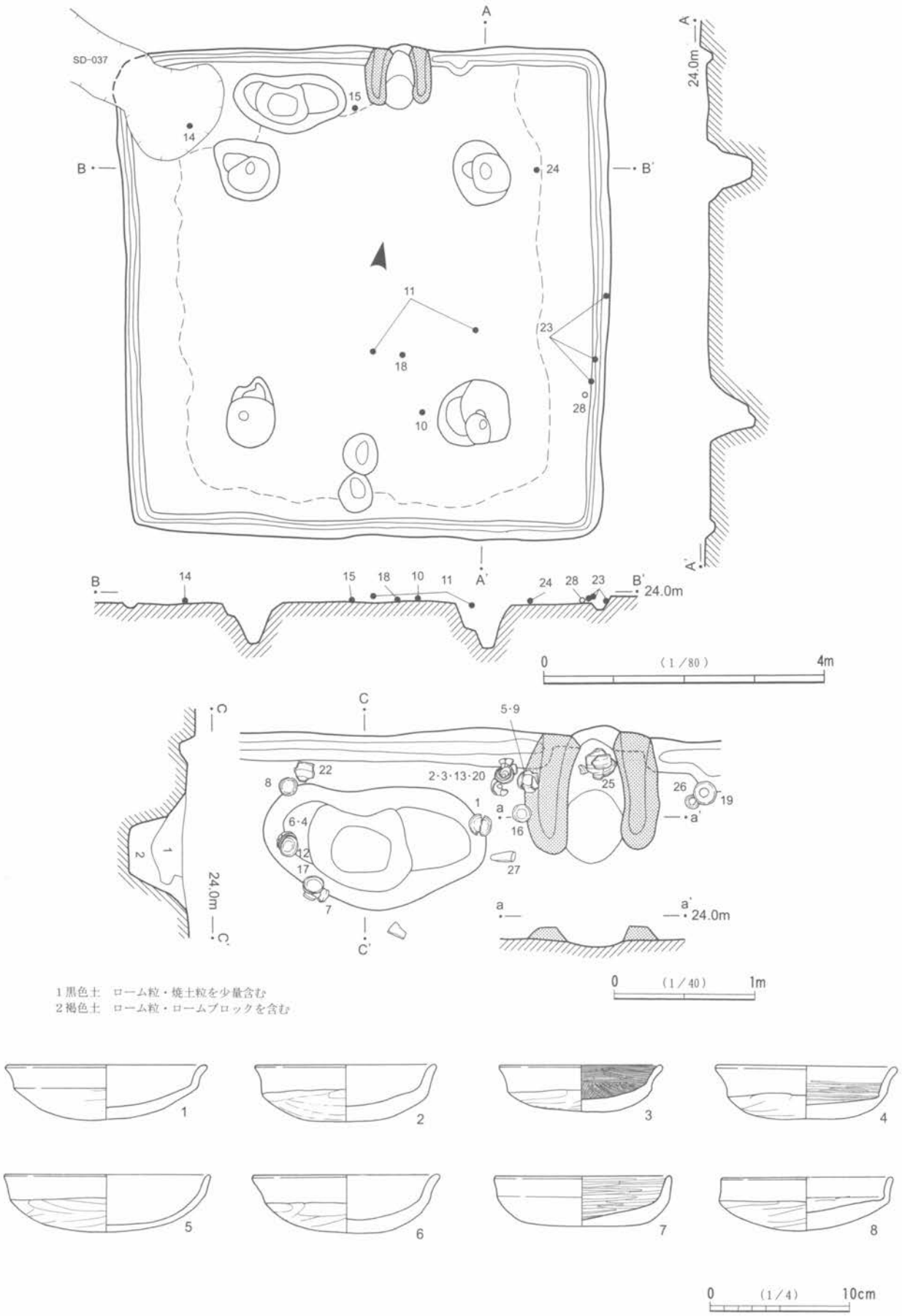
ＳＢ-038（第45図，図版34）

調査区の中央やや北側，Ｂ１グリッドに位置する。SB-021にカマドを含む北東側1/4を，SD-024に南西コーナー付近をそれぞれ削平されており，遺存状態は悪い。

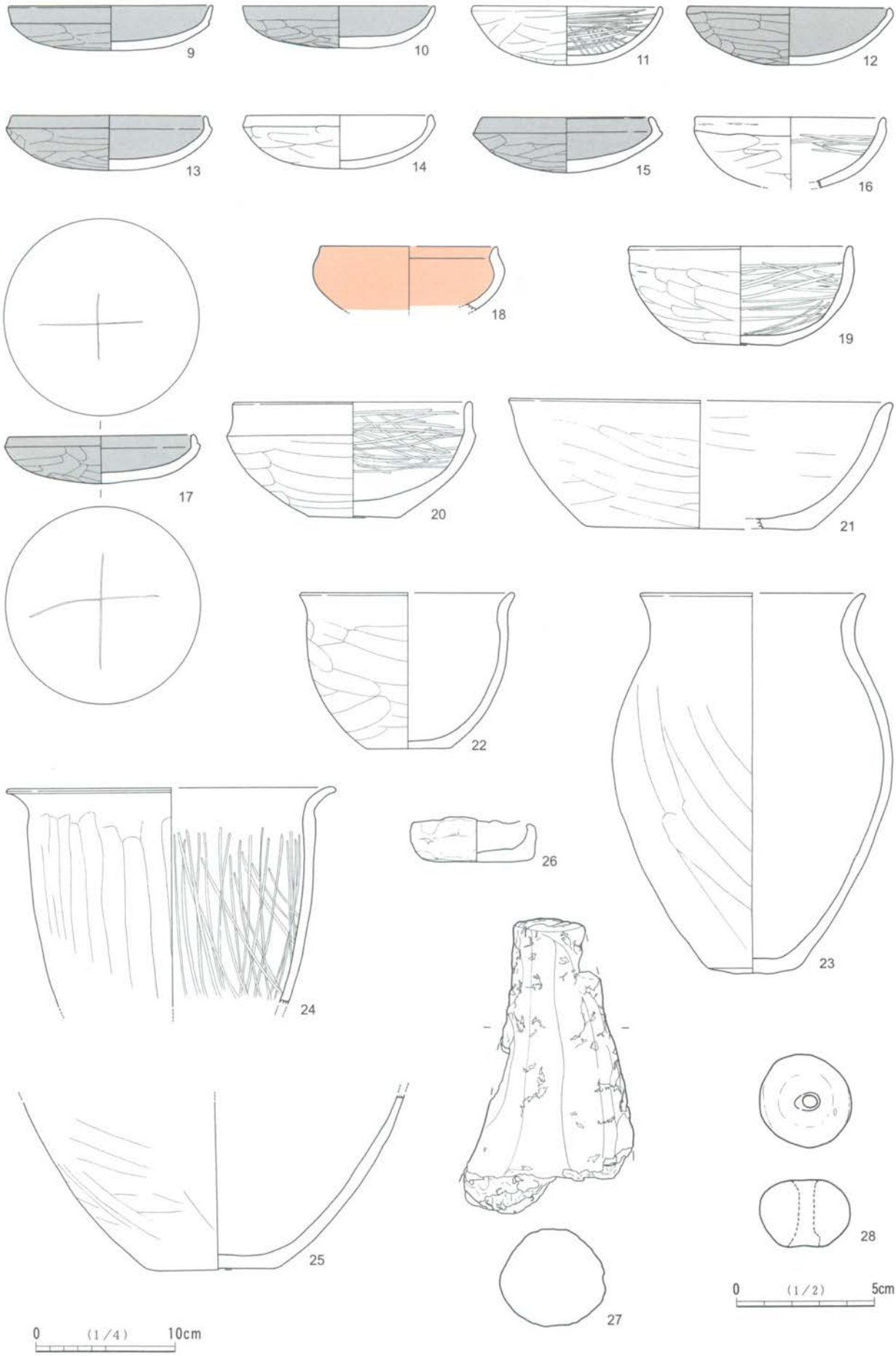
平面形態は方形で，規模は6.40m×6.10mを測る。主軸方位はN-19°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は18cm～34cmで北側が低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部に硬化面が残る。壁溝(幅20cm～30cm，深さ4cm～7cm)は遺存範囲では全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黒色土が主体である。

カマドは，北壁に設けられていたと考えられるが，完全に削平されている。

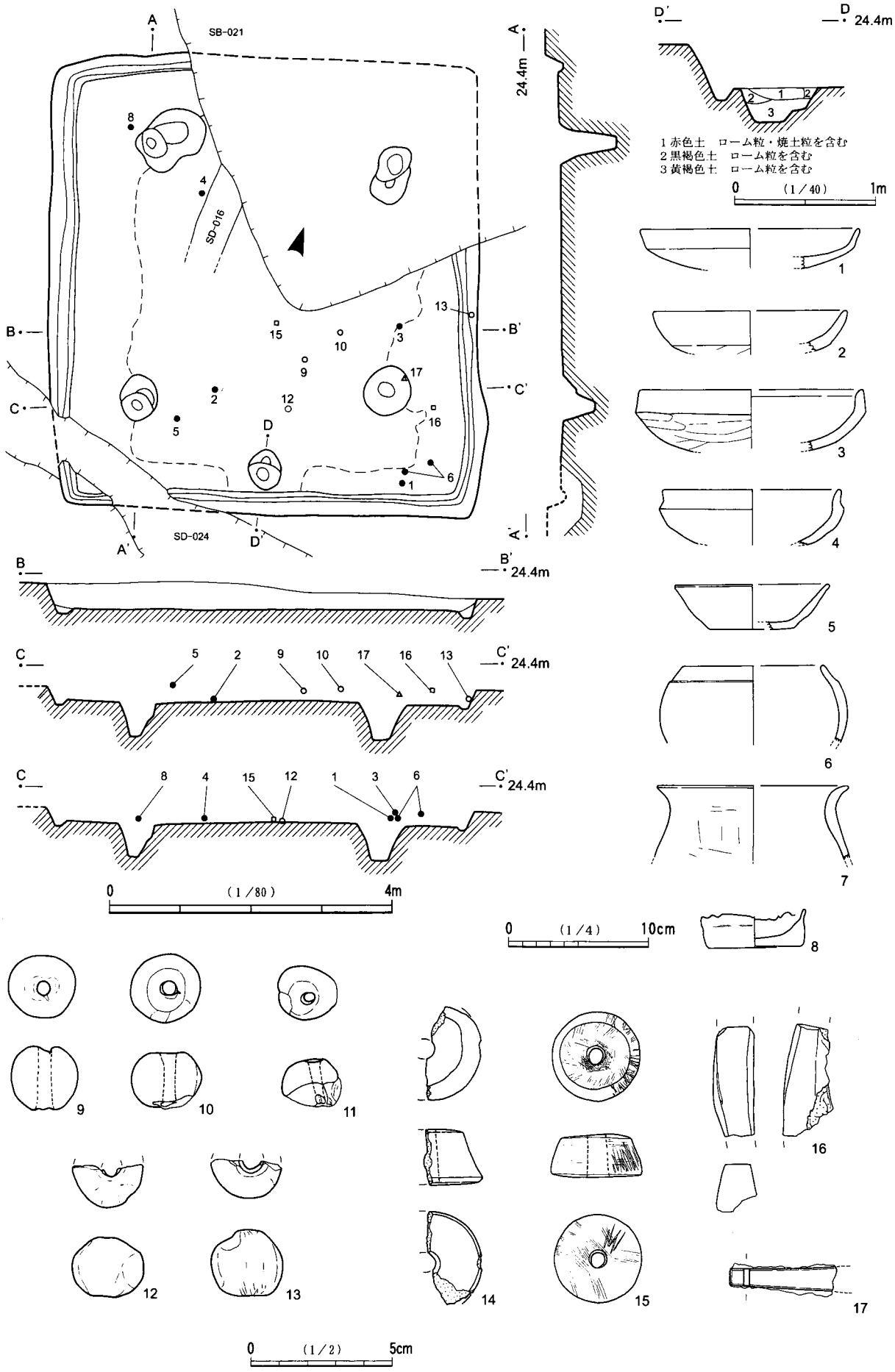
遺物は，土師器杯・甕や土玉，石製紡錘車などが覆土中から出土している。９～13は土玉である。14は



第43図　ＳＢ-037及び出土遺物(１)



第44図　ＳＢ-037出土遺物（２）



第45図　ＳＢ-038及び出土遺物

土製，15は蛇紋岩製の紡錘車である。15は径上面2.5cm・下面3.1cm，厚さ1.5cm，孔径0.65cmを測る。全体に丁寧に研磨されている。16は凝灰岩製の砥石の破片である。最大長3.9cm，最大幅1.4cm，最大厚1.7cm，重量12.53gを測る。17は刀子の茎部で，現存長3.8cm，幅0.9cm，厚さ0.3cmである。

ＳＢ-039（第46図，図版６・34）

調査区の東側，Ｅ１グリッドに位置する。南東壁の一部がSB-067と重複するが，遺存状態は比較的良好である。

平面形態は正方形で，規模は4.66m×4.60mを測る。主軸方位はN-36°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，壁高は22cm～33cmで北側が低くなっている。床面は全体に堅緻でやや凹凸があり，中央部はさらに硬化面が広がる。壁溝(幅12cm～20cm，深さ4cm～7cm)はカマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。貯蔵穴(60cm×72cm，深さ50cm)は，北東コーナーに付設されている。覆土は，焼土粒を含む暗茶褐色土がまず堆積し，その上に暗褐色土・暗黄褐色土が堆積している。

カマドは北西壁中央に設けられ，壁を24cm掘り込みほぼ垂直に立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は良好で，天井部はすでに崩落していたが袖部はよく残っていた。火床は浅く6cm掘り窪められている。

出土遺物は少なく，土師器杯・高杯が覆土中から出土している。

ＳＢ-040（第47・48図，図版34）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。南壁の一部をSD-037に削平されている。上面を全体に削平されており，遺存状態はあまり良好ではない。

平面形態は方形で，規模は推定で9.1m×8.4mを測る。主軸方位はN-16°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は比較的遺存の良い東壁側で20cmを測る。床面は全体に軟弱で，南壁側が一部硬化している。壁溝(幅20cm，深さ3cm～5cm)は，南壁側の一部とカマド部分を除いて巡っている。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。方形の貯蔵穴(86cm×88cm，深さ52cm)は，カマドと北東コーナーの中間に設けられている。覆土は黒色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられ，壁への掘り込みはない。遺存状態は悪く，袖部と火床が残存していた。

遺物は比較的多く，須恵器杯，土師器杯・高杯・甕，土製紡錘車などが出土している。20は土製小玉，21は土玉である。22は土製紡錘車で，径上面2.6cm・下面4.9cm，厚さ2.45cm，孔径0.7cmを測る。

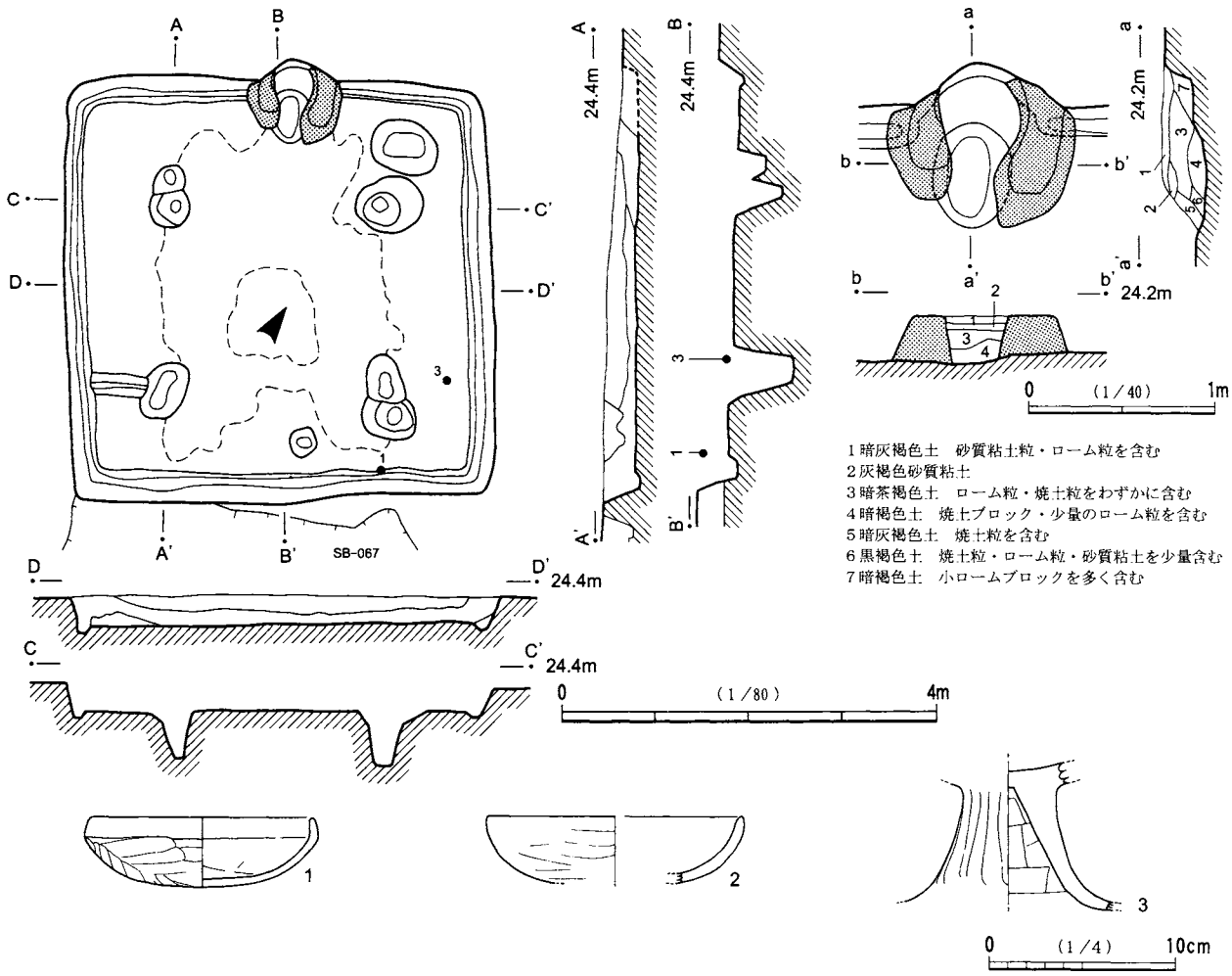
ＳＢ-041（第49・50図，図版６・34・35）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。東壁側でSB-052を削平している。

平面形態は方形で，規模は5.54m×5.26mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は14cm～32cmで南側が低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部に硬化面が広がる。壁溝(幅20cm～24cm，深さ3cm～11cm)は，東壁から南壁の一部とカマド部分を除いて巡っている。４本の主柱穴と，楕円形の出入り口施設に伴うピット(径70cm×80cm，深さ36cm)を検出した。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黒色土・黒暗褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を30cm掘り込み垂直に立ち上がる煙道部を形成する。構築材にスサを使用しており，遺存状態は比較的良好で，長く張り出す袖部が残っていた。火床は20cm掘り窪まれ，焼土が堆積していた。

遺物は，カマド前面や東側床面から，土師器杯・甕などが出土している。12の刀子は，刃部から茎部の遺存で，茎部には木質が付着していた。現存長8.8cm，刃部長5.8cm・幅1.48cm，茎長3.0cmを測る。13は



第46図　ＳＢ-039及び出土遺物

鉄釘で頭部を欠損する。現存長4.3cm，脚部は断面方形(0.3cm×0.3cm)である。

ＳＢ-042（第51図，図版７・35）

調査区の東側，Ｄ２グリッドに位置する。SB-036に北半を削平され，遺存状態は悪い。

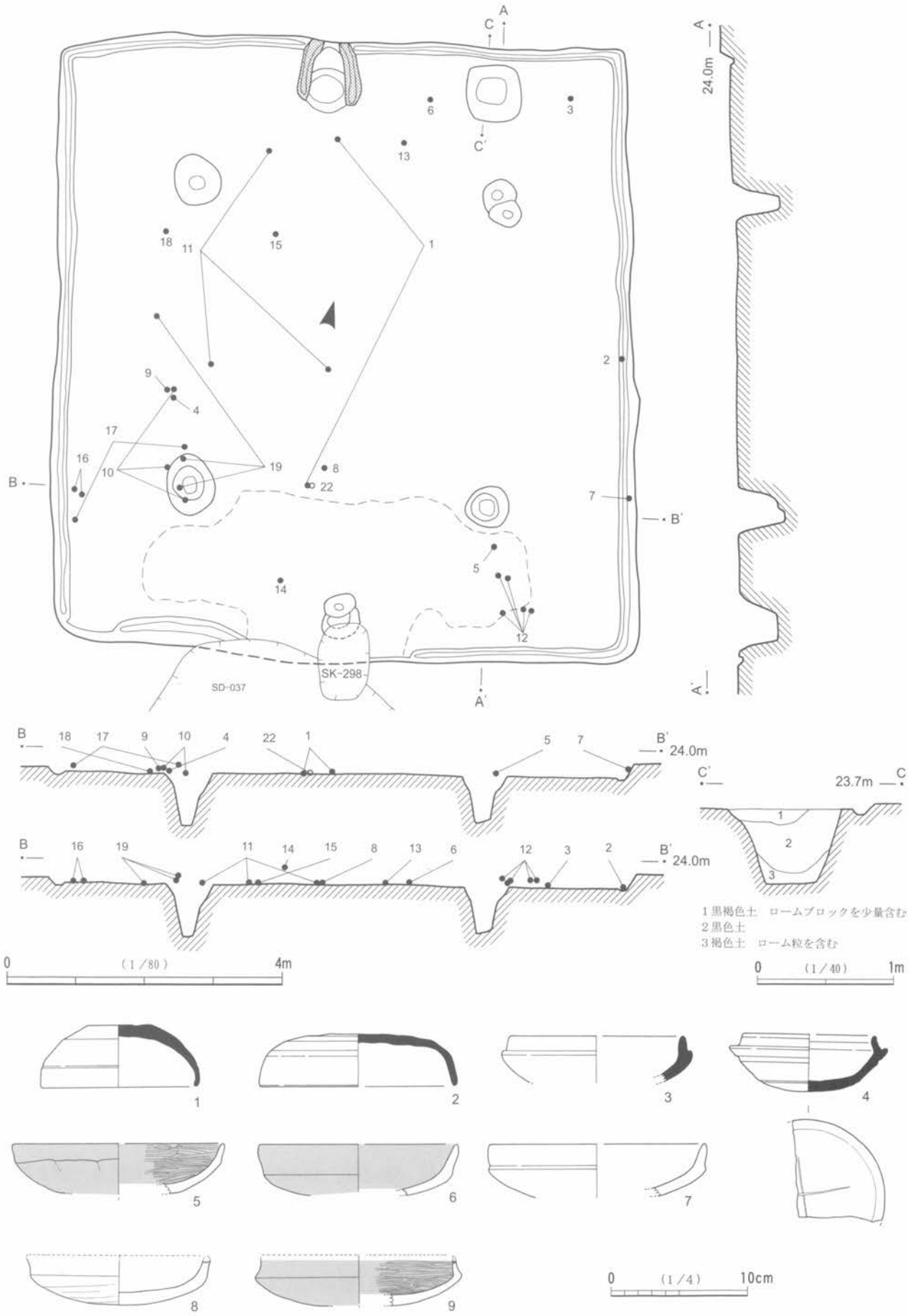
平面形態は方形で，規模は現存で4.9m×5.54mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は20cm～33cmで南壁側が低くなっている。床面は全体に軟弱で，硬化面は認められない。壁溝(幅18cm～25cm，深さ5cm～11cm)は遺存している範囲では全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム粒や小ローム・ブロックを含む暗褐色土を主体に，黒褐色土，暗茶褐色土が混在している。

出土遺物は少なく，P2周辺の床面や覆土中から，土師器杯などが出土している。

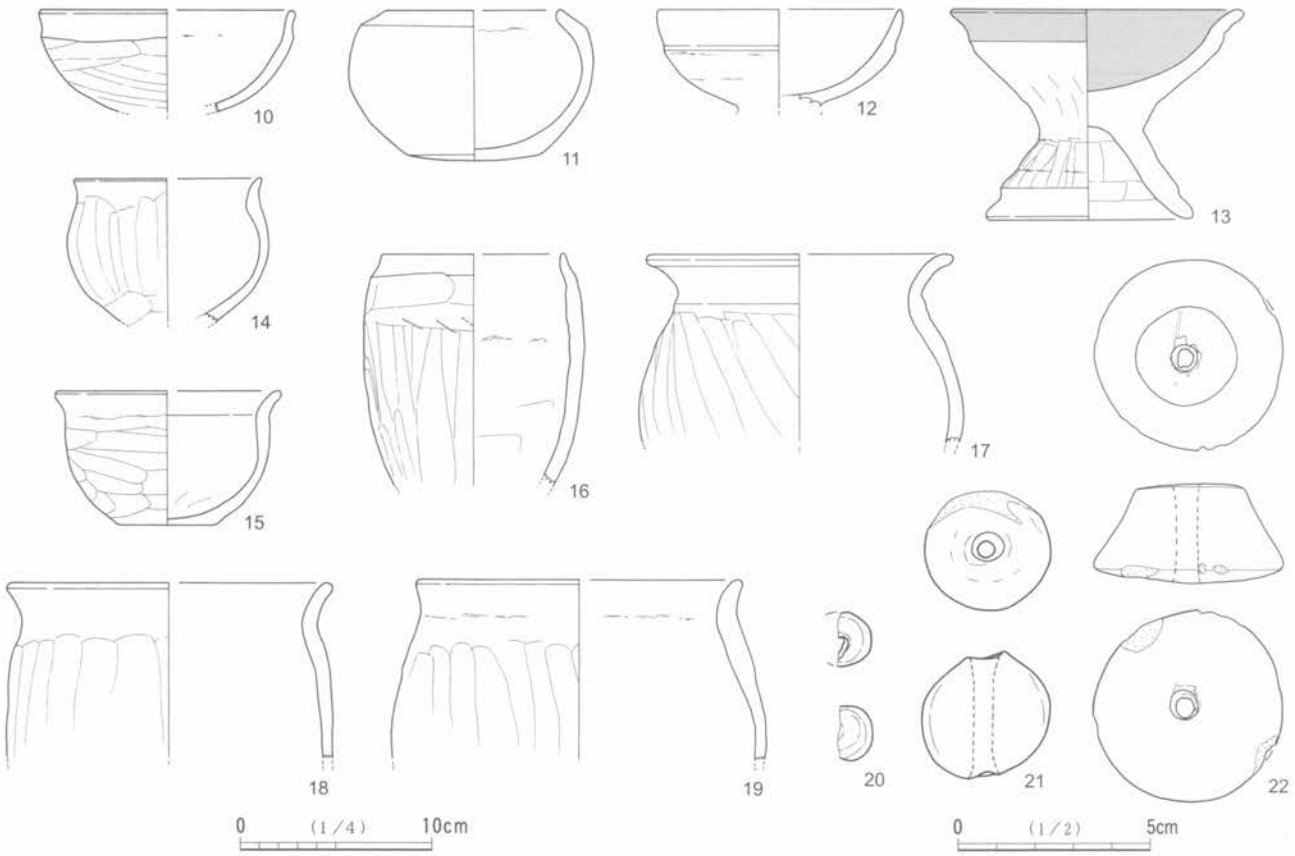
ＳＢ-043（第51図）

調査区の中央南側，Ｂ２グリッドに位置する。SB-044，SK-168，SD-020と重複し，北東側の一部を残して大きく削平されており，遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は現存で2.5m×4.56mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。壁はわずかに残り，東壁で壁高は17cmを測る。床面も大半が削平されている。壁溝(幅24cm，深さ7cm)は，遺存範囲ではカマド部分を除いて全周している。床面からは多数のピットが検出されたが，主柱穴は不明である。



第47図　ＳＢ-040及び出土遺物(１)



第48図　ＳＢ-040出土遺物(２)

カマドは北壁中央に設けられている。壁を18cm掘り込み，垂直に立ち上がる煙道部を形成する。天井部と袖部の一部が遺存していたが，全体に遺存状態は悪い。火床は浅く，焼土の堆積もない。

遺物は土師器片等がわずかに出土している。

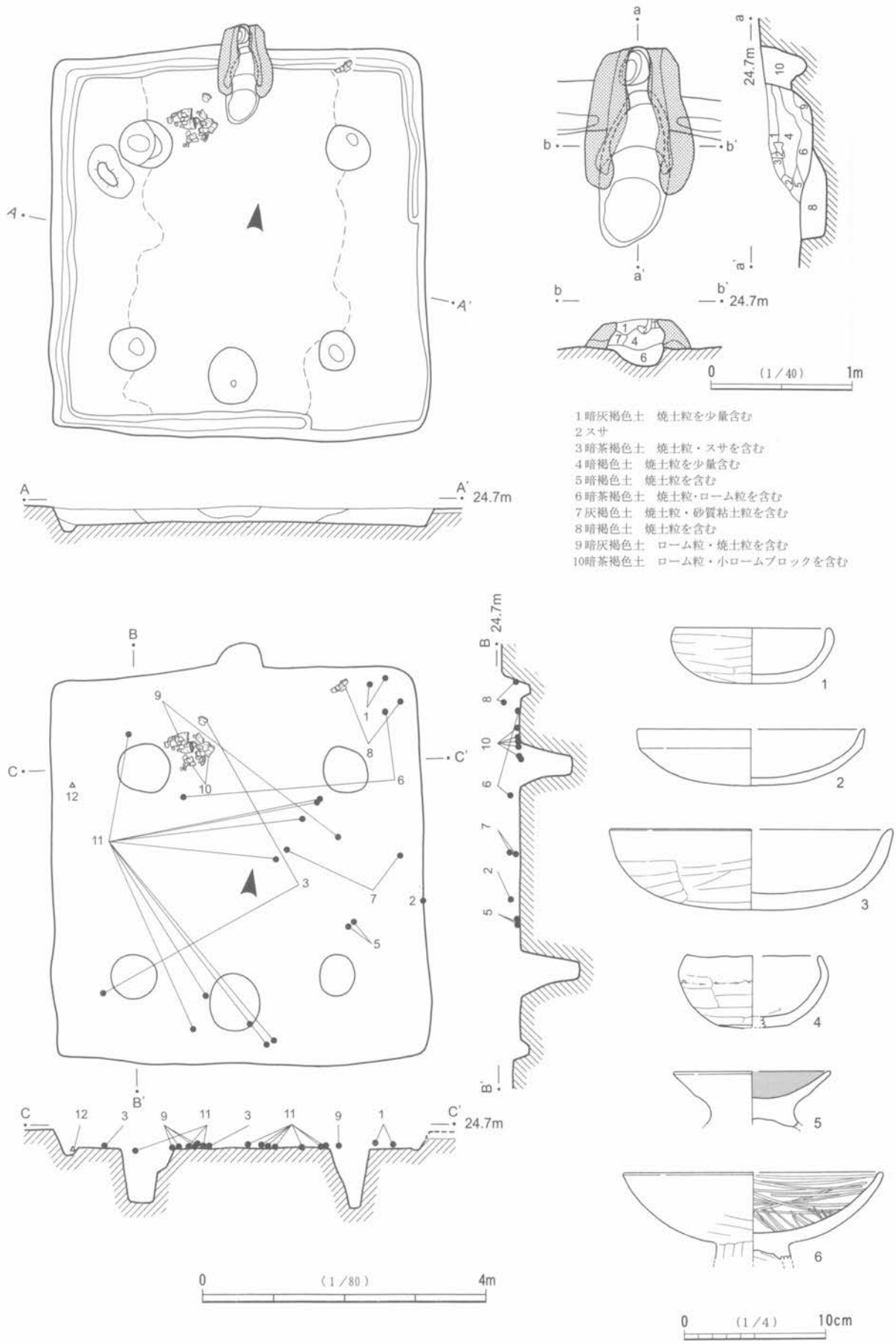
ＳＢ-044（第52図，図版７・35）

調査区の中央南側，Ｂ３グリッドに位置する。SB-043と重複し，SD-020，SK-211に一部削平されている。上面も全体に削平されており，遺存状態は良好ではない。柱穴やカマドの状況から，建て替えが行われていたと考えられる。

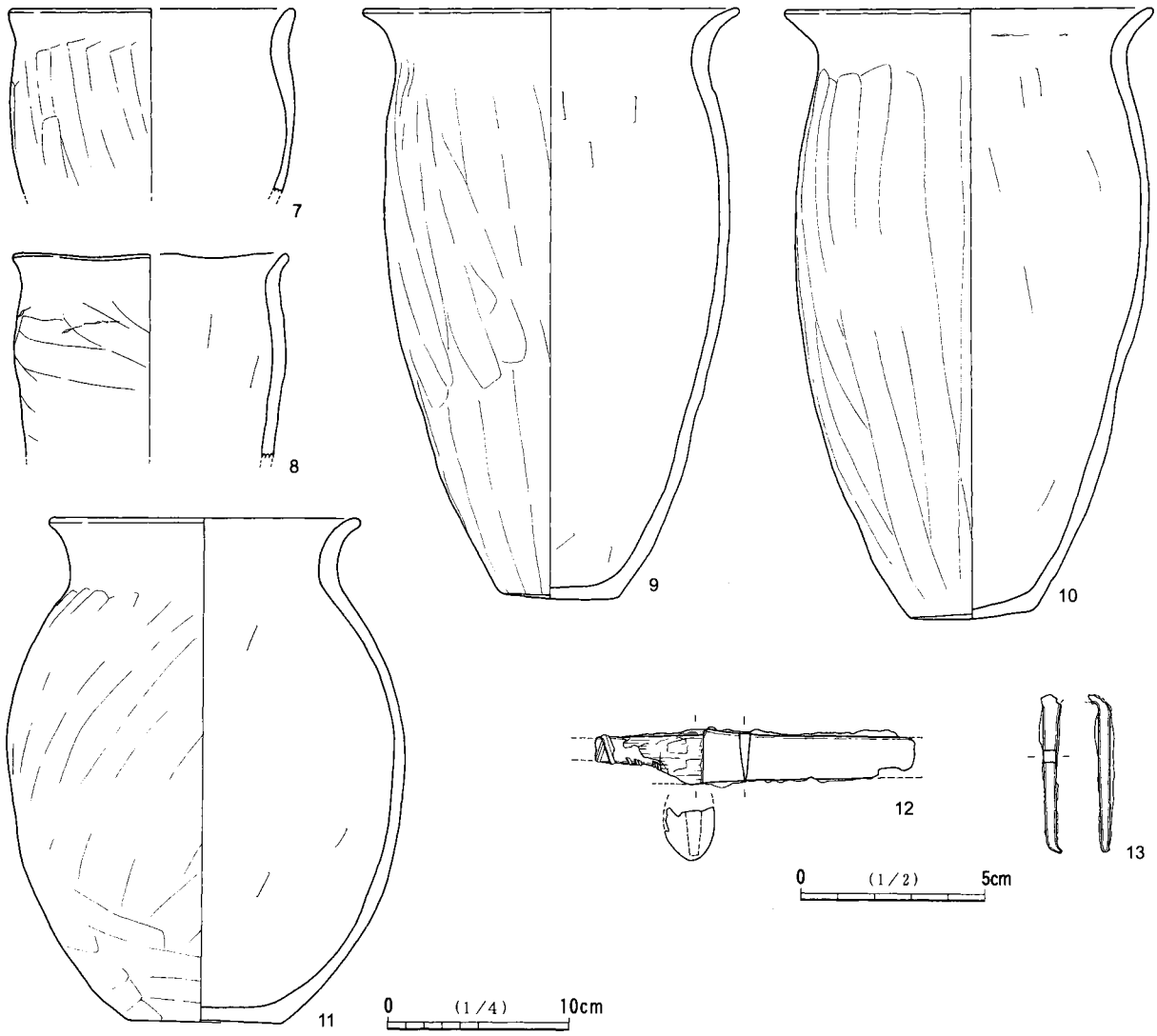
平面形態は正方形で，規模は6.14m×6.08mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれている。壁高は2cm～26cmを測り，西側が低くなっている。床面は，凹凸はあるが全体に堅緻で，特に主柱穴で囲まれた範囲はよく踏み固められている。壁溝(幅14cm～24cm，深さ4cm～12cm)は，カマド部分を除いて遺存範囲では全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。柱穴から判断して，建て替えが行われ，当初の柱穴は外側に，新たな柱穴は内側に配置されていたと考えられる。覆土には，ローム粒やローム・ブロックを含む黒色土が堆積していた。

カマドは北壁中央に設けられ，壁を大きく48cm掘り込んでいる。住居の建て替えに伴い，カマドも作り替えられている。上面を削平されており，遺存状態はあまり良好ではない。新しい火床は浅く，焼土の堆積もほとんどない。刀子が右袖部の上面から出土している。

遺物の出土は少なく，土師器甕・甑が床面中央から出土している。４は土錘で先端部を欠損し，現存長



第49図　ＳＢ-041及び出土遺物(１)



第50図　ＳＢ-041出土遺物(２)

3.5cmを測る。５は刀子で，刃部先端を欠損する。両関である。現存長12.1cm，刃部長6.03cm・幅1.22cm・厚さ0.2cm，茎長6.07cm・幅1.0cm・厚さ0.3cmを測る。

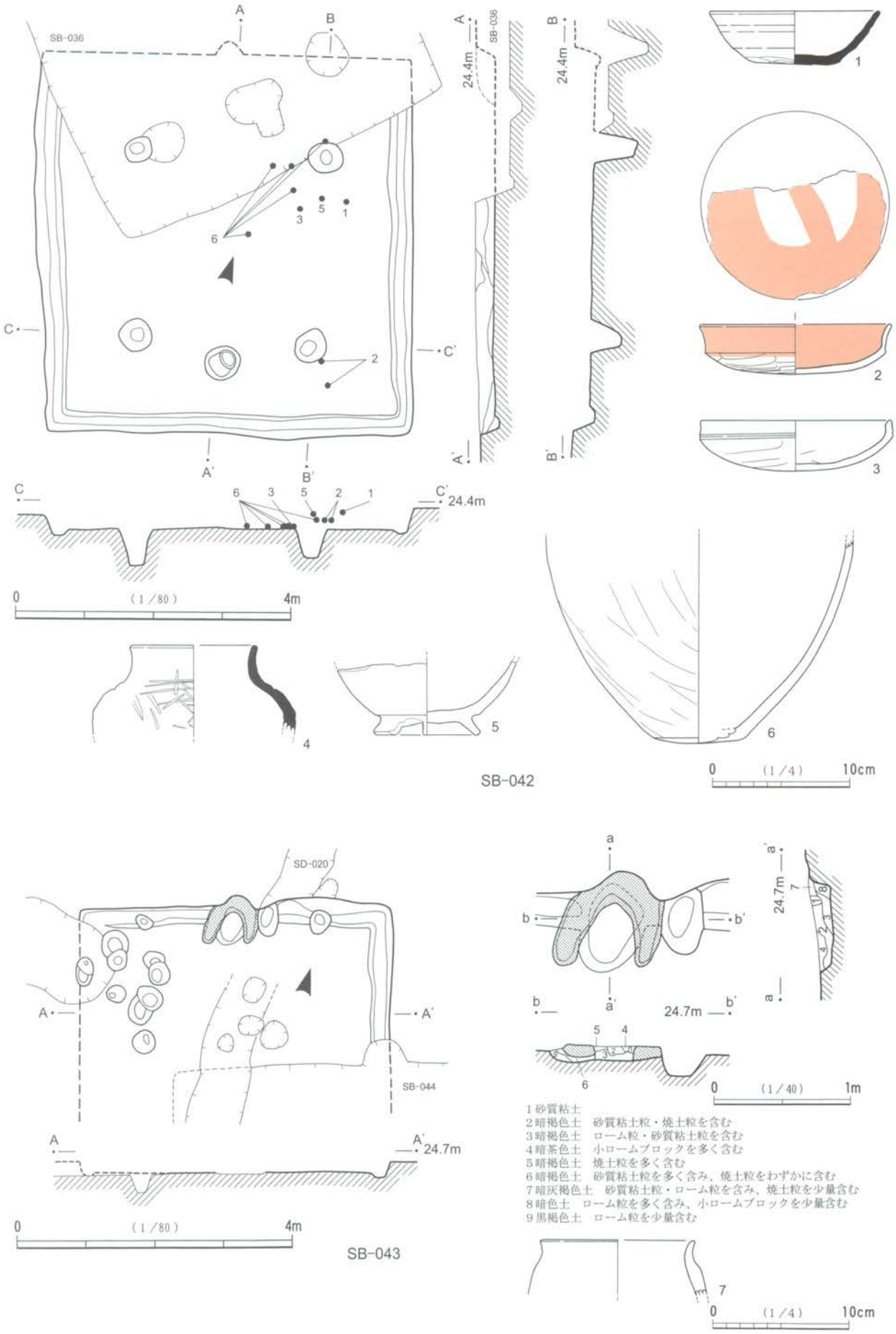
ＳＢ-045（第53図，図版35・36）

調査区のほぼ中央，Ｂ２グリッドに位置する。北壁側をSD-024に削平されているが，遺存状態は比較的良好である。

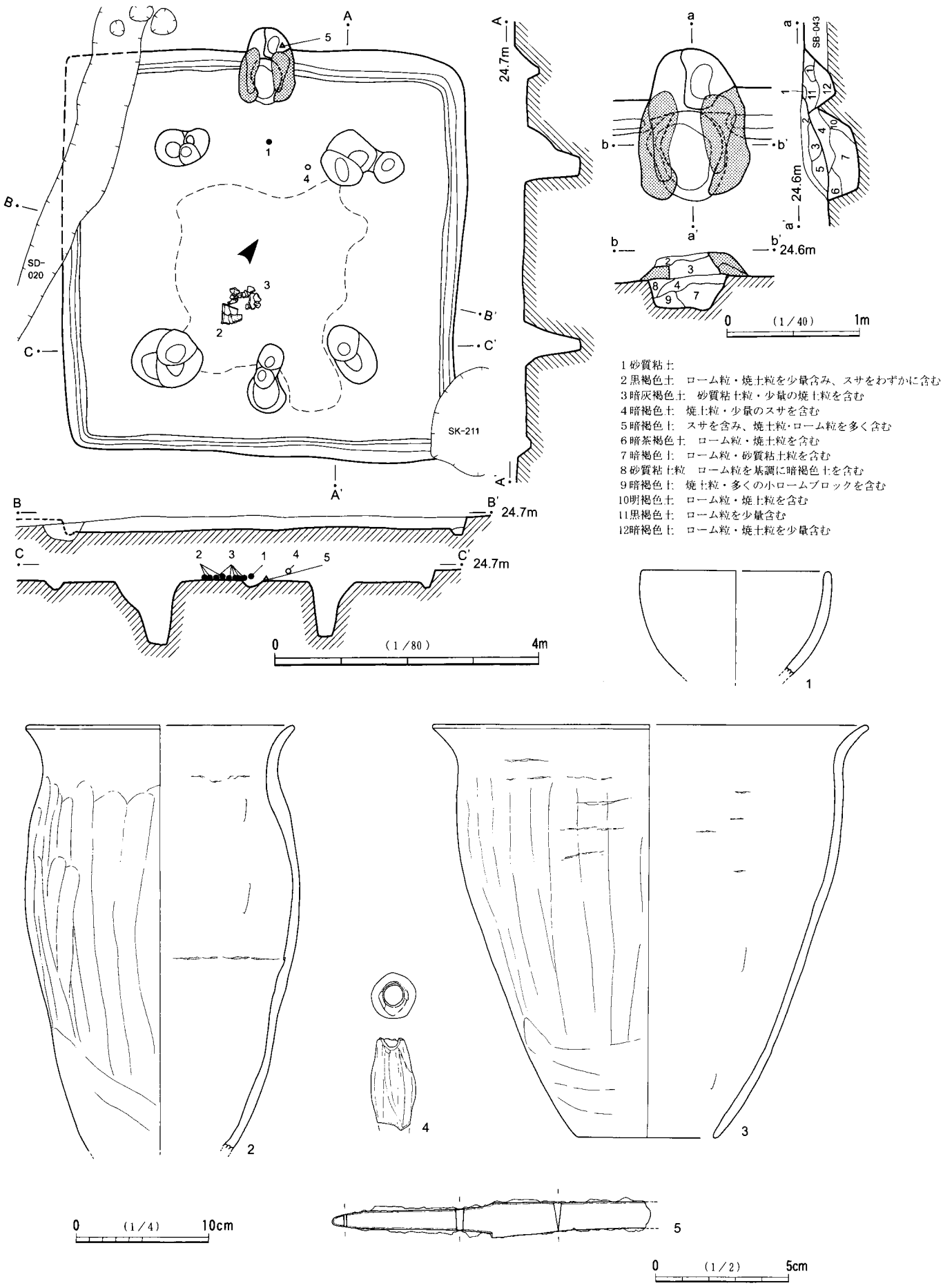
平面形態は方形で，規模は現存で5.8m×6.56mを測る。主軸方位はN-11°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は24cm～34cmで東側が低くなっている。床面は主柱穴に囲まれた範囲に硬化面が広がる。壁溝(幅25cm前後，深さ4cm～7cm)は遺存範囲では，カマド部分を除いて全周している。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土はローム粒やローム・ブロックを多く含む褐色土を主体に，暗褐色土が混在している。

カマドは北壁中央に設けられているが，煙道部側を削平されている。遺存状態は悪く，袖部が一部残存していた。

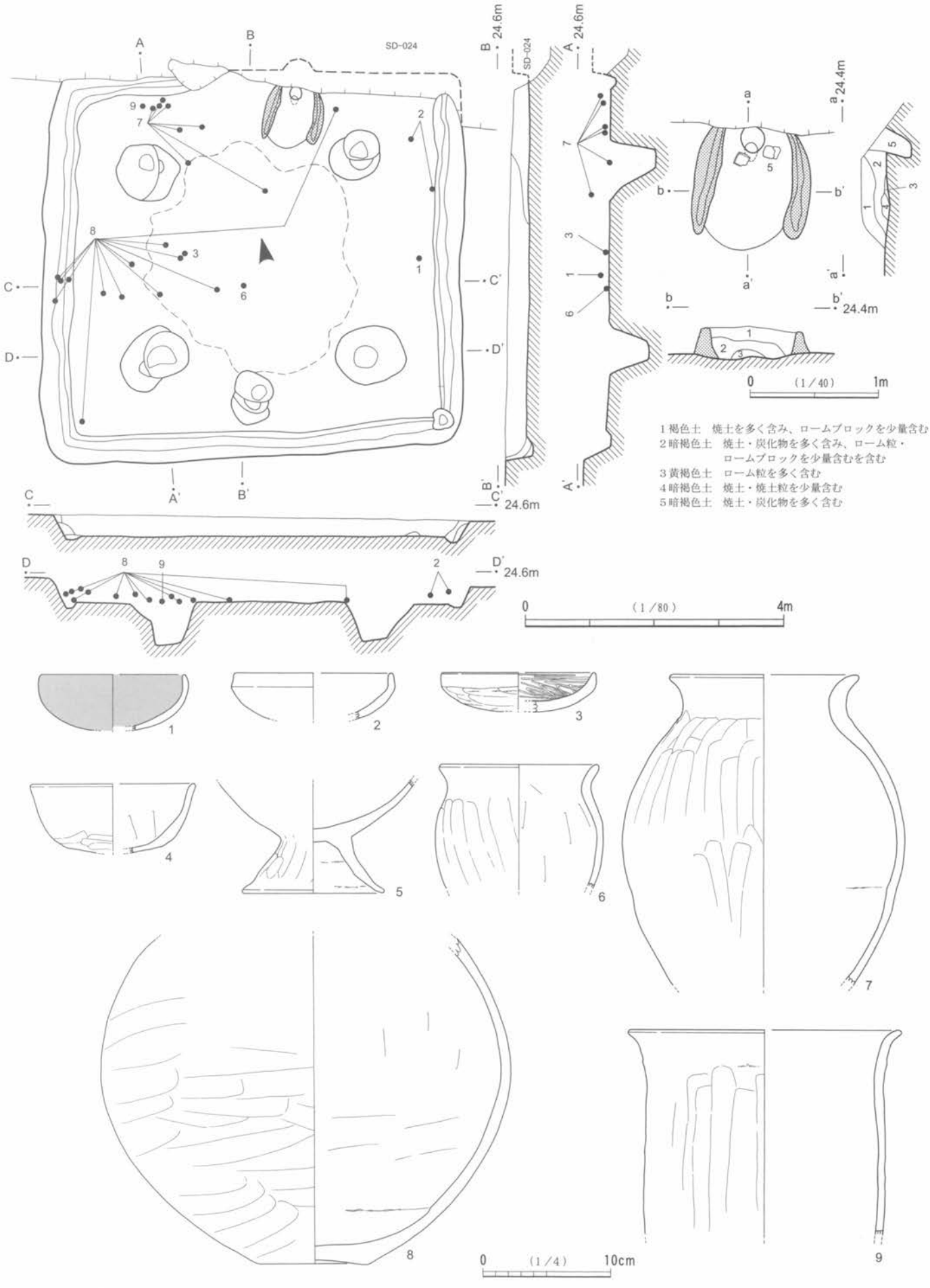
遺物は覆土や床面から，土師器杯・甕などが出土している。



第51図　ＳＢ-042・ＳＢ-043及び出土遺物



第52図　ＳＢ-044及び出土遺物



第53図　ＳＢ-045及び出土遺物

ＳＢ-048（第54・55図，図版36）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。SB-024に北壁側を削平され，中央部には南北に攪乱が大きく入り，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は現存で6.8m×6.7mを測る。主軸方位はN-18°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ，壁高は遺存状態の比較的良い西壁側で49cm～54cm，削平されている東壁側では5cm前後を測る。床面はほぼ平坦で，中央部に硬化面が広がる。壁溝(幅15cm，深さ10cm)は，遺存している範囲では全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。P1の南側に隣接して，ローム・ブロックを盛り上げた10cm程度の高まりがみられる。覆土は，ローム・ブロックやローム粒を含む黒暗褐色土を主体に，黒色土，焼土ブロックが混在する。

カマドは北壁中央やや西寄りに設けられている。SB-024に煙道部から袖部の一部まで削平されており，遺存状態は悪い。火床は皿状に15cm掘り窪まれ，焼土がよく堆積していた。

遺物は，床面や覆土中から土師器杯・高杯・甕，須恵器蓋などが出土している。特に北壁側でまとまっている。19の刀子は覆土中からの出土である。茎部を一部欠損する。両関である。現存長14.1cm，刃部長10.7cm・幅1.5cm・厚さ0.38cm，茎長3.4cm・幅1.1cm・厚さ0.4cmを測る。

ＳＢ-051（第56図，図版37）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。SB-048と攪乱によって，北壁の全部と西壁の1/2を削平されており，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は現存で5.9m×5.8mを測る。主軸方位はN-71°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は10cm～30cmで東壁側が低くなっている。床面は凹凸があり，中央部がよく踏み固められている。壁溝(幅10cm～18cm，深さ6cm)は，遺存している範囲ではカマド部分を除いて全周する。主柱穴は４本検出され，P2・P3は補助的なピットを伴う。南壁際の東寄りの区域では床面がやや高くつくられ，壁溝から延びる浅い溝によって区画が形成されている。この区画の南東コーナー付近に貯蔵穴，中央寄りに出入り口施設に伴うピットが設けられている。貯蔵穴(径100cm，深さ60cm)はP2と連結している。出入り口のピットはカマドの対面ではなく，この位置に設けられている。覆土は黒褐色土が主体である。

カマドは東壁中央に設けられ，壁を27cm掘り込んで煙道部を形成する。天井部はすでに崩落しているが，袖部がよく遺存していた。火床は土坑状に20cm掘り窪められ，焼土が堆積していた。

遺物は，カマド前面やP2周辺から土師器杯・甕が出土している。10は土製紡錘車である。径上面3.1cm下面4.8cm，厚さ2.8cmを測る。

ＳＢ-052（第57図，図版７）

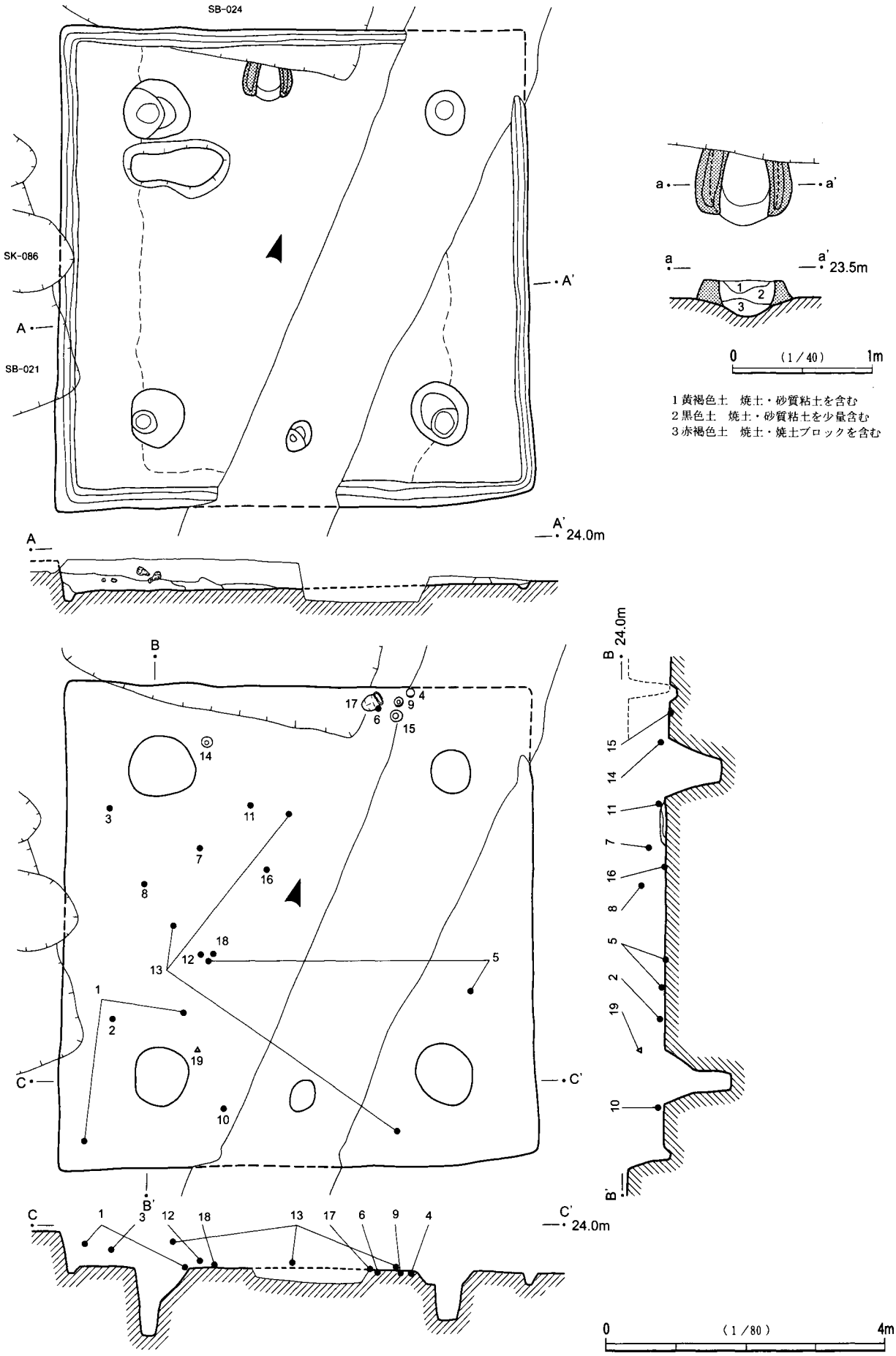
調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。SB-041に西半を大きく削平され，遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は東壁の長さ5.60m，北壁の現存の長さは2.4mである。カマドが北壁に設けられていたと推定して，主軸方位はN-7°-Eとなる。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は8cm～19cmで南壁側が低くなっている。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。壁溝(幅20cm，深さ3cm)は遺存範囲では全周する。主柱穴等のピットは検出されていない。

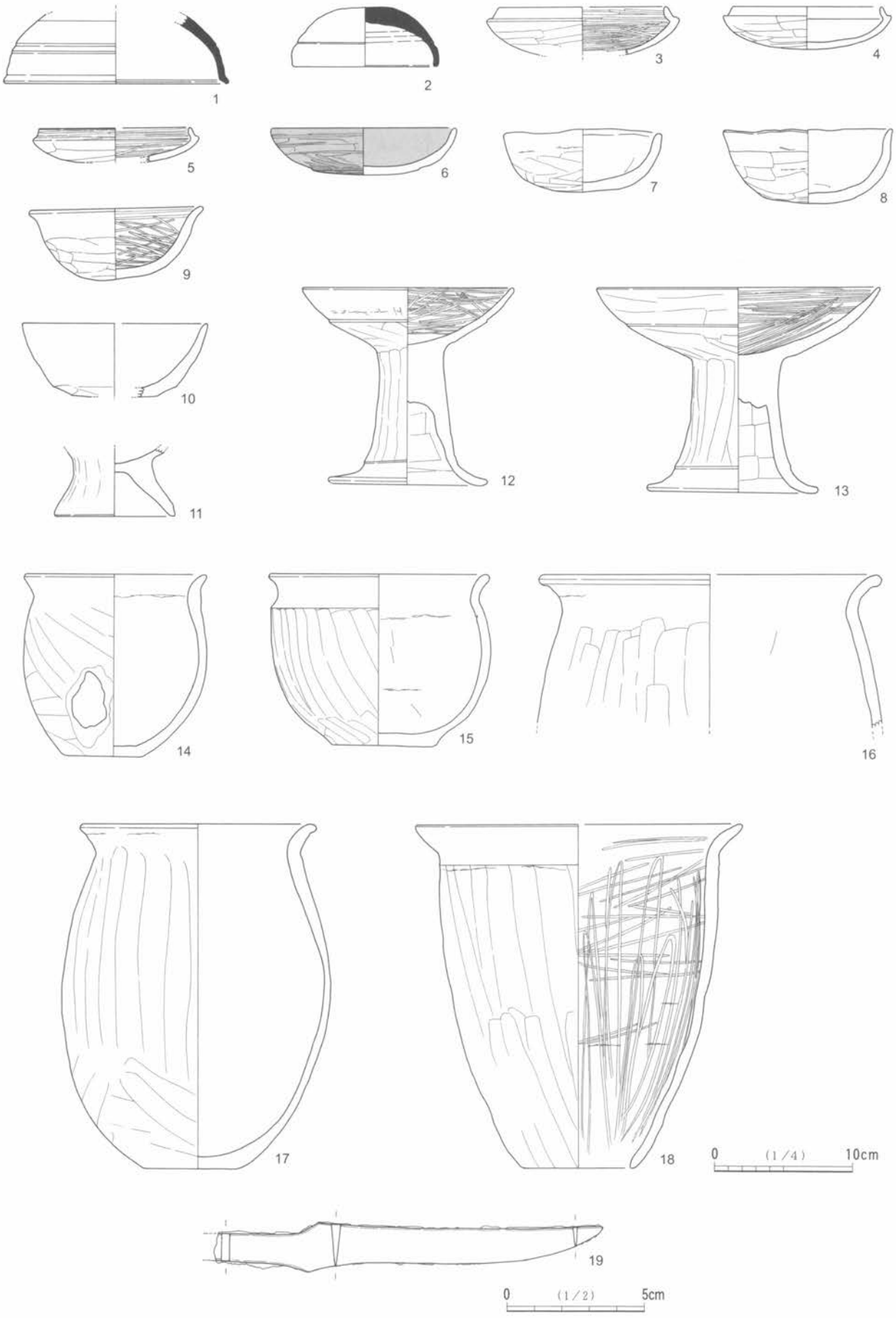
遺物は，土師器甕等が覆土下層からわずかに出土している。

ＳＢ-054（第58図，図版７・37）

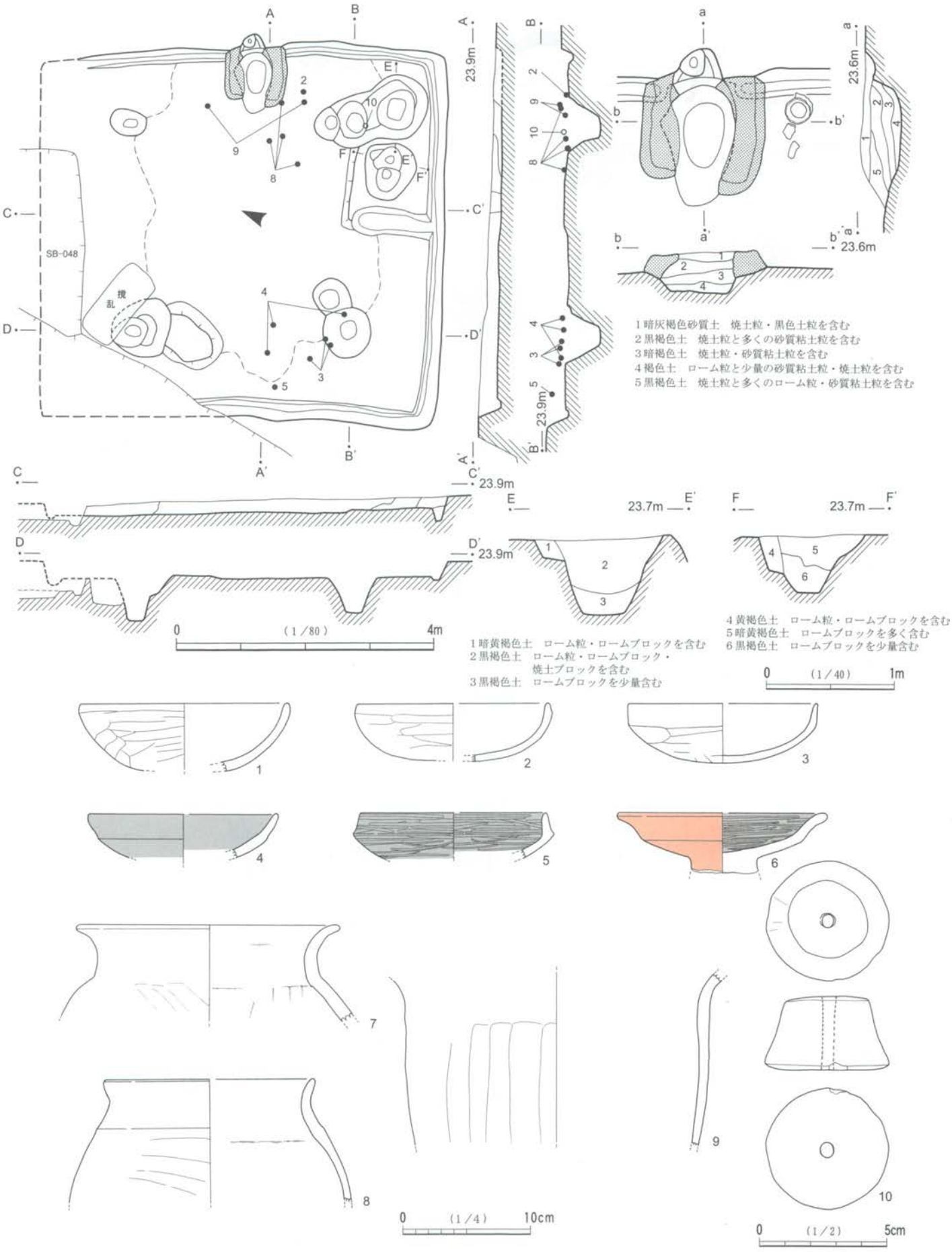
調査区の中央南側，Ｃ２グリッドに位置する。SB-055と一部で重複し，南東コーナー付近を削平してい


SB-024
SK-086
SB-021
A
A'
24.0m
a
a'
23.5m
1
2
3
0
(1/40)
1m
1 黄褐色土　焼土・砂質粘土を含む
2 黒色土　焼土・砂質粘土を少量含む
3 赤褐色土　焼土・焼土ブロックを含む
B
B'
C
C'
24.0m
0
(1/80)
4m

第54図　ＳＢ-048



第55図　ＳＢ-048出土遺物



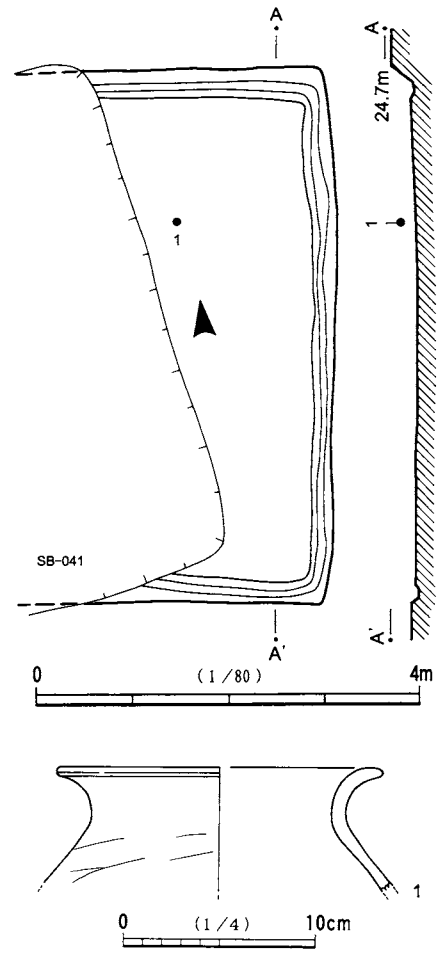
第56図　ＳＢ-051及び出土遺物

る。遺存状態は良好である。

平面形態は正方形で，規模は4.72m×4.74mを測る。主軸方位はN-13°-Wである。壁の立ち上がりはやや緩やかで，壁高は14cm～24cmで東壁側が低くなっている。床面は全体に軟弱で，硬化面の広がりも狭い。壁溝(幅14cm～20cm，深さ7cm～13cm)はカマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを多く含む黒褐色土を主体に，暗褐色土や焼土粒が混在する。

カマドは北壁中央に設けられている。作り替えが行われており，左袖部を右方向に煙道部まで寄せて新たなカマドを構築している。旧カマドは壁を10cm掘り込んで，角度のある煙道部を形成する。新カマドは壁への掘り込みはなく，垂直に立ち上がる煙道部をもつ。天井部はすでに崩落していたが，袖部の遺存は良好である。火床は旧カマドの位置に皿状に10cm掘り窪められていた。

出土遺物は少なく，土師器杯・甕などが覆土中や床面から出土している。７は土玉である。８は緑色凝灰岩製の管玉である。一部を欠損する。長さ2.4cm，径0.9cm×1.0cm，孔径0.15cmを測る。９は不明鉄製品である。やや彎曲しているが，刃部がある。



第57図　ＳＢ-052及び出土遺物

ＳＢ-055（第59図，図版７・37）

調査区の中央南側，Ｃ２グリッドに位置する。SB-054に南東コーナー付近を一部削平されているが，遺存状態は良好である。

平面形態は正方形で，規模は4.40m×4.38mを測る。主軸方位はN-3°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は14cm～22cmと西側がやや低くなっている。床面はほぼ平坦で，中央部は踏み固められている。壁溝(幅12cm～20cm，深さ3cm～5cm)はカマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土にはローム粒やローム・ブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

カマドは北東壁中央に設けられ，壁を45cm掘り込み煙道を形成している。遺存状態は悪く，袖部の一部が残存しているにすぎない。火床は皿状に浅く掘り窪まれ，よく焼土が堆積していた。

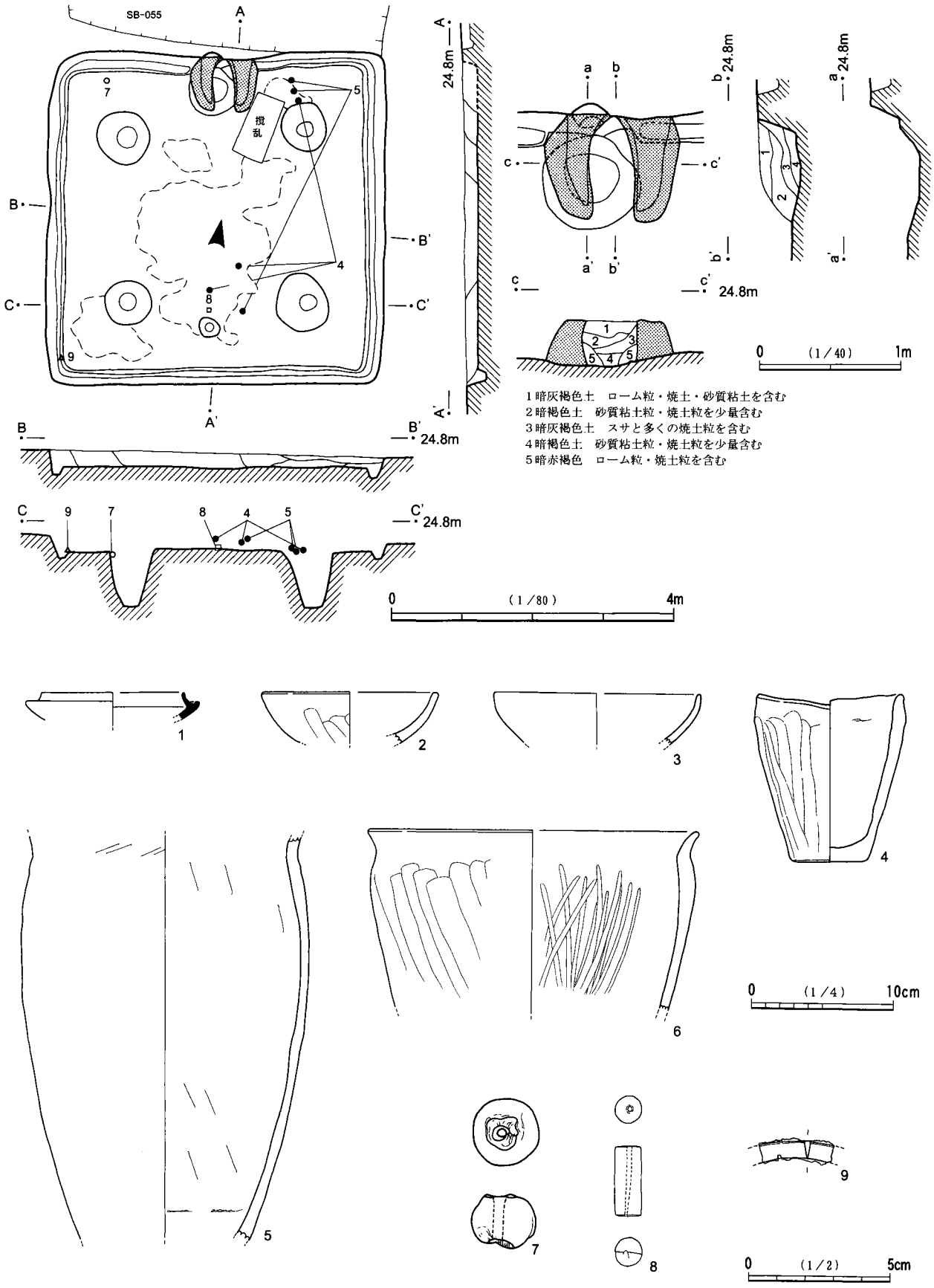
遺物は少なく，カマド内から土師器甕が出土している。２は支脚である。

ＳＢ-056（第60・61図，図版７・37・38）

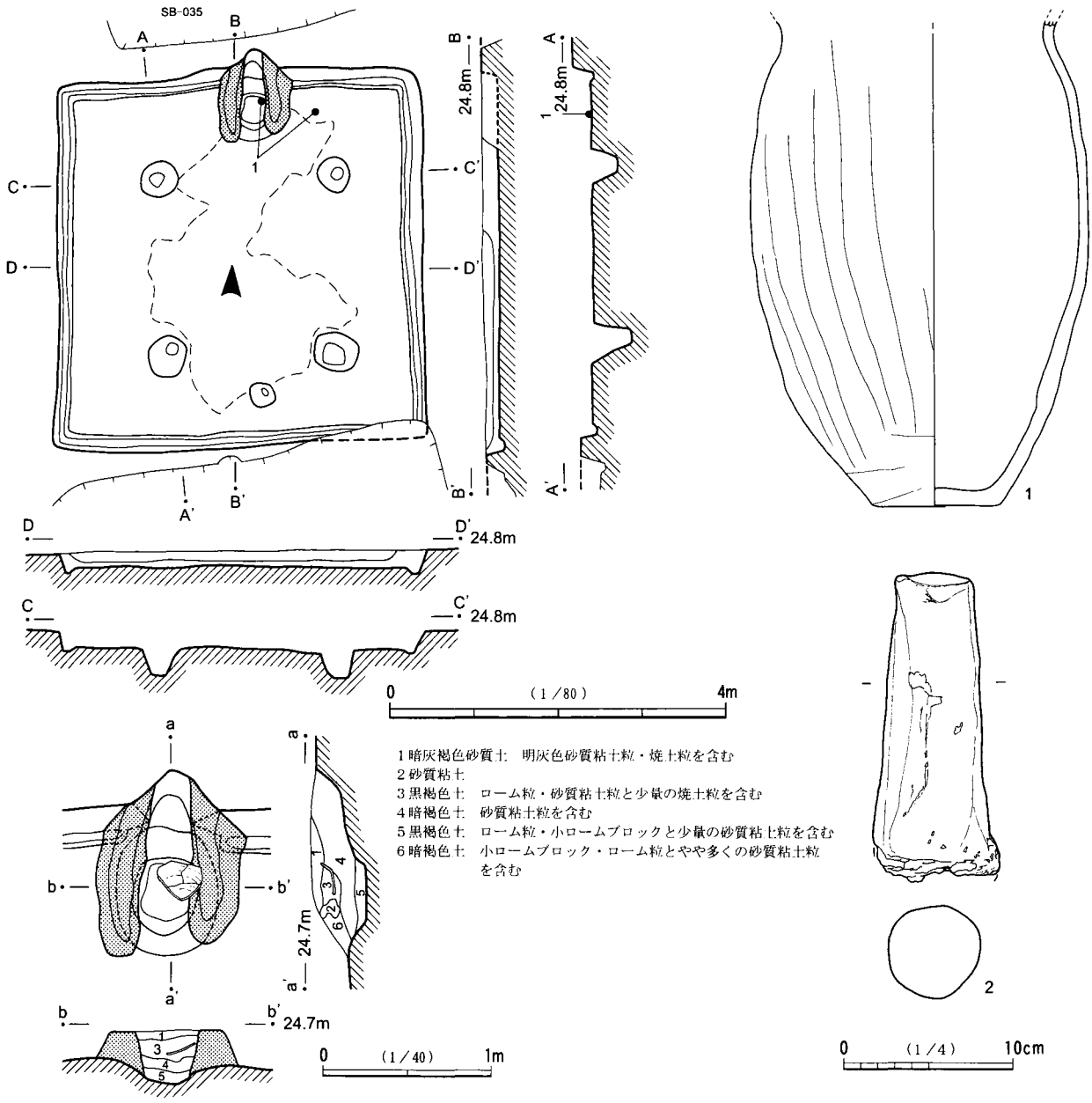
調査区の中央南側，Ｃ２グリッドに位置する。中世遺構に南側を大きく削平されており，遺存状態はあまり良好ではない。

平面形態は正方形で，規模は北東壁5.70m，北西壁5.72mを測る。主軸方位はN-35°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は18cm前後である。床面はほぼ平坦で，中央部に硬化面が広がる。壁溝(幅16cm，深さ6cm～10cm)は，遺存している範囲ではカマド部分を除いて全周する。主柱穴は３本が遺存していた。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黒褐色土が主体で，黄褐色土や黒色土が混在している。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を37cm掘り込んで，垂直に立ち上がる煙道部を形成する。遺存



第58図　ＳＢ-054及び出土遺物



第59図　ＳＢ-055及び出土遺物

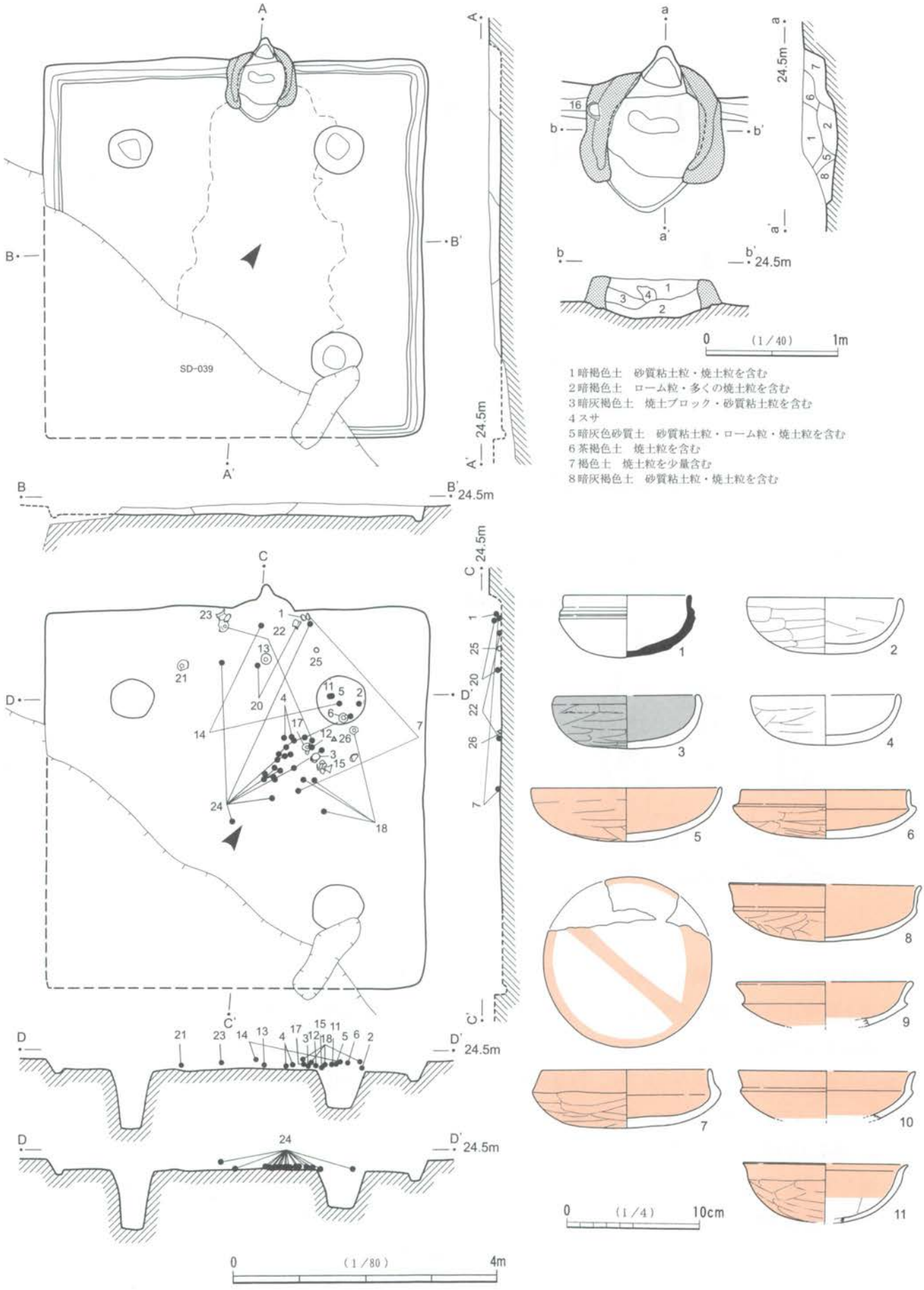
状態は良好ではなく，袖部が残存しているにすぎない。火床は12cm掘り窪められ，焼土が堆積していた。

出土遺物は多く，覆土中や床面から土師器杯・高杯・甕，須恵器杯や鉄鏃が出土している。特に，カマド前面からP2周辺にかけてまとまっている。26は鉄鏃である。鏃身の先端を欠損し，鏃身から茎の一部にかけて遺存している。現存長6.7cm，鏃身長3.1cm・幅2.85cm・厚さ0.2cm・逆刺長0.15cm，篦被長2.3cm・幅0.2cm，茎長1.45cm・厚さ0.35cmを測る。25は支脚である。

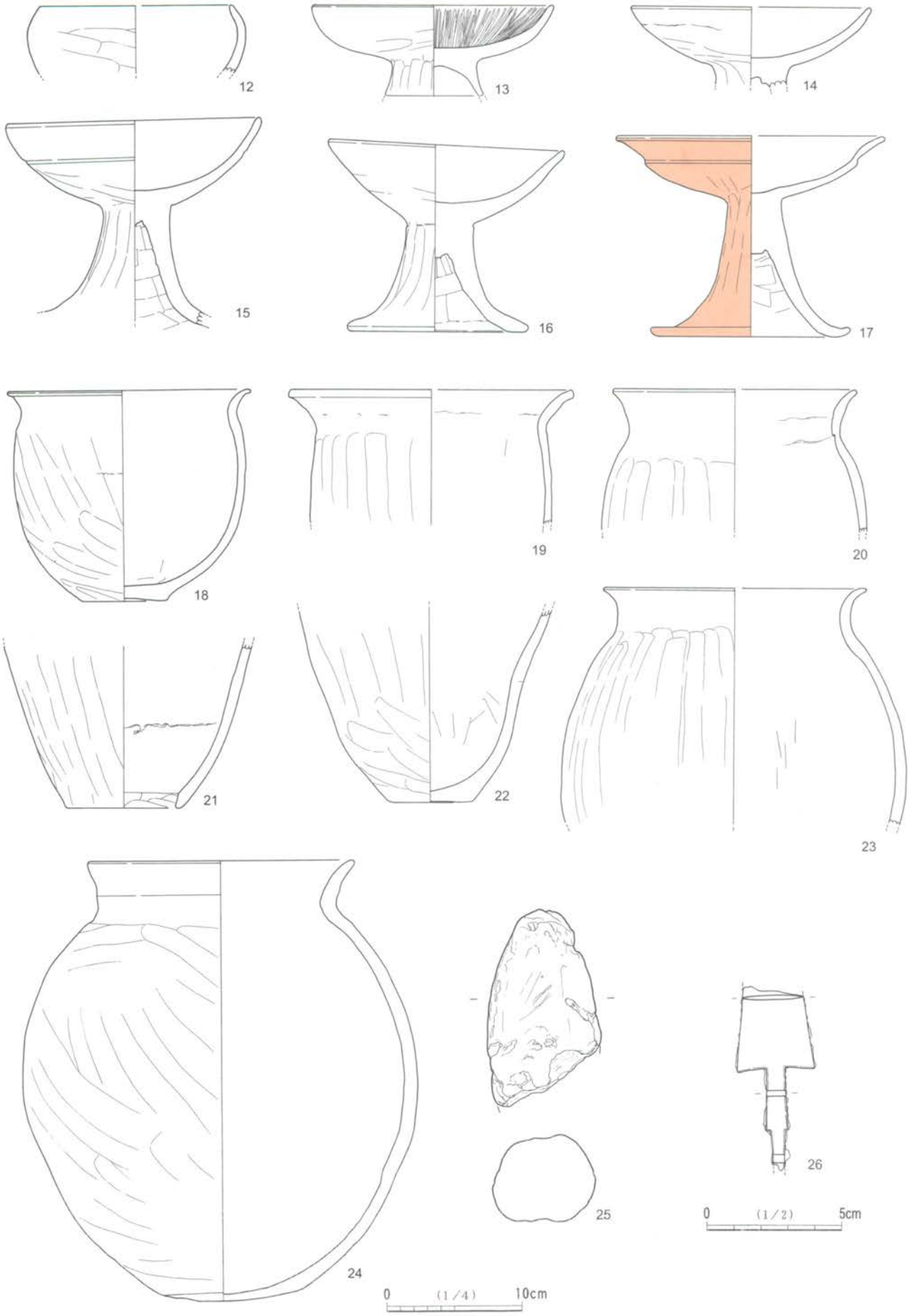
ＳＢ-057（第62図，図版38）

調査区北側中央，Ｂ３グリッドに位置する。南側の大半と上面を削平されており，遺存状態は悪い。

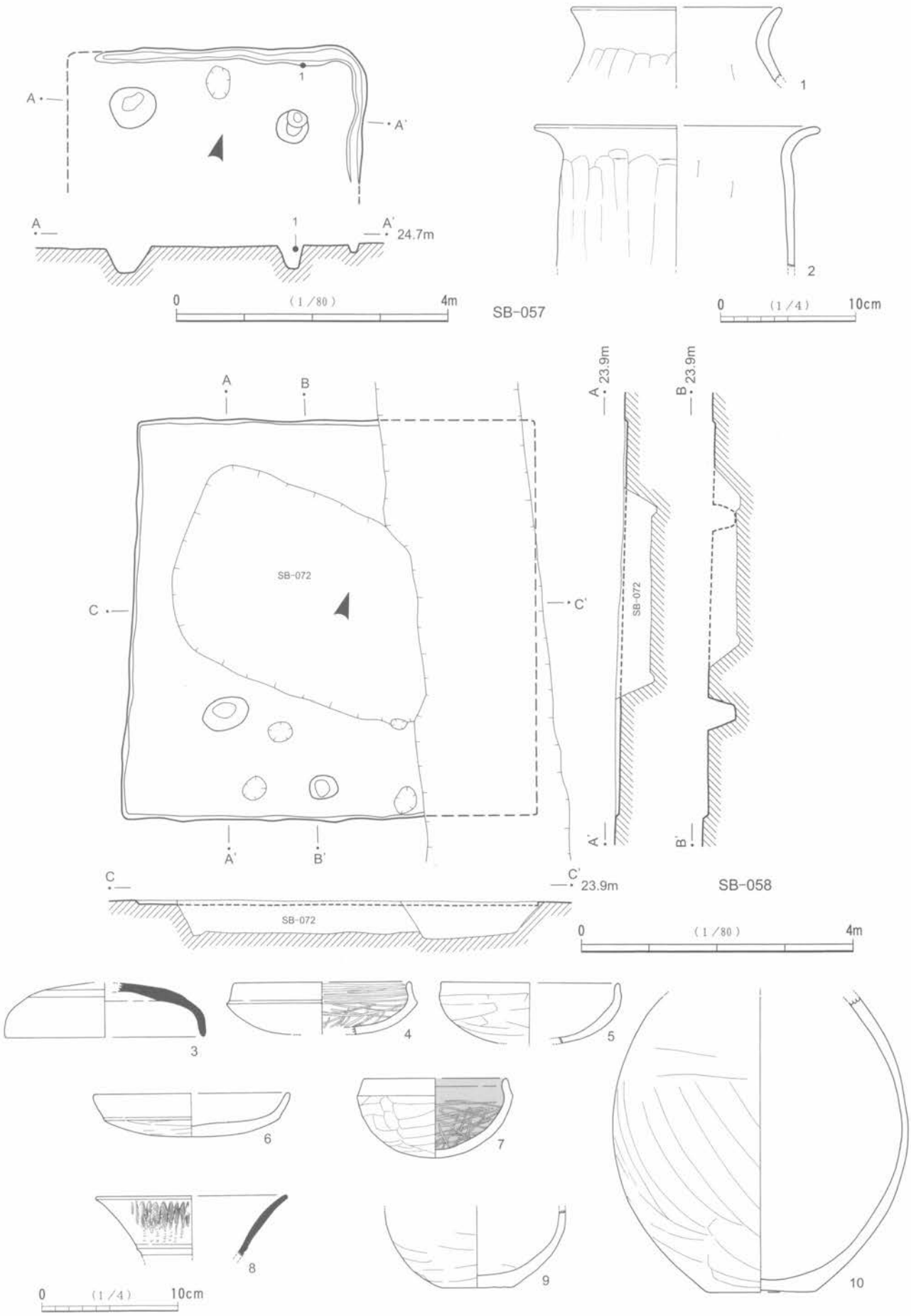
平面形態は方形になると考えられる。規模は，現存で東壁1.6m，北壁3.9mを測る。主軸方位は不明である。床面は全体に凹凸がある。壁溝(幅20cm，深さ3cm～7cm)は，遺存している範囲で巡っている。主柱穴は２本確認できた。



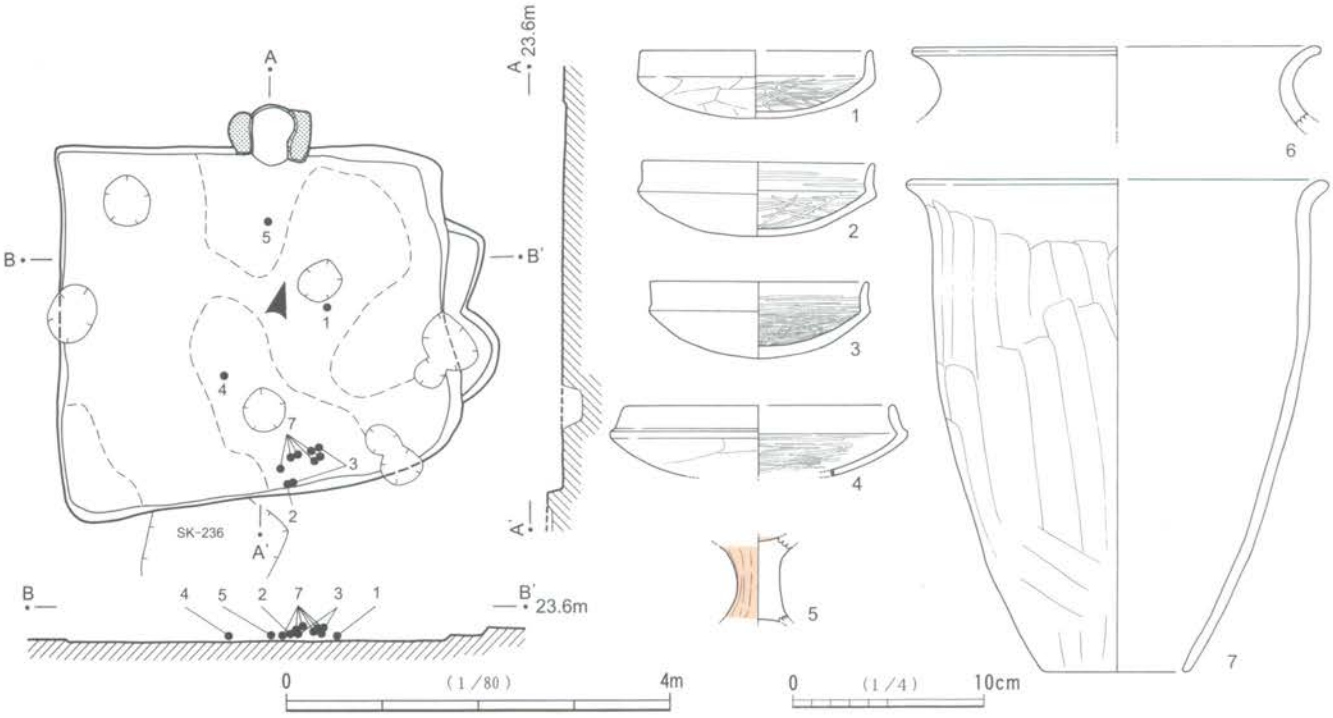
第60図　ＳＢ-056及び出土遺物(１)



第61図　ＳＢ-056出土遺物（２）



第62図　ＳＢ-057・ＳＢ-058及び出土遺物



第63図　ＳＢ-059及び出土遺物

カマドは，火床の位置から推定して北壁中央に設けられていたと考えられる。

出土遺物は，１の土師器甕片が壁溝内から出土している。

ＳＢ-058（第62図，図版７・38）

調査区の東側，Ｄ２グリッドに位置する。住居中央をSB-072に削平され，東側は大きく攪乱を受けており，遺存状態は悪くカマドの痕跡も確認できなかった。

平面形態は方形で，規模は現存で5.8m×4.4mを測る。主軸方位はN-20°-Wである。上面も削平されており，壁の状態は不明である。床面は全体に軟弱で，壁溝は認められない。１本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出できた。覆土には暗黄褐色土がわずかに堆積していた。

遺物は覆土中から，土師器杯・甕，須恵器杯蓋・甕などが出土している。

ＳＢ-059（第63図，図版38）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。上面を大きく削平され，SB-069と重複し遺存状態は悪い。

平面形態は不整方形で，規模は3.64m×4.00mを測る。主軸方位はN-15°-Wである。壁の状態は不明である。床面はやや凹凸があり，一部に硬化面が残存している。壁溝は認められない。床面から数基のピットを検出したが，本住居に伴うピットはなかった。

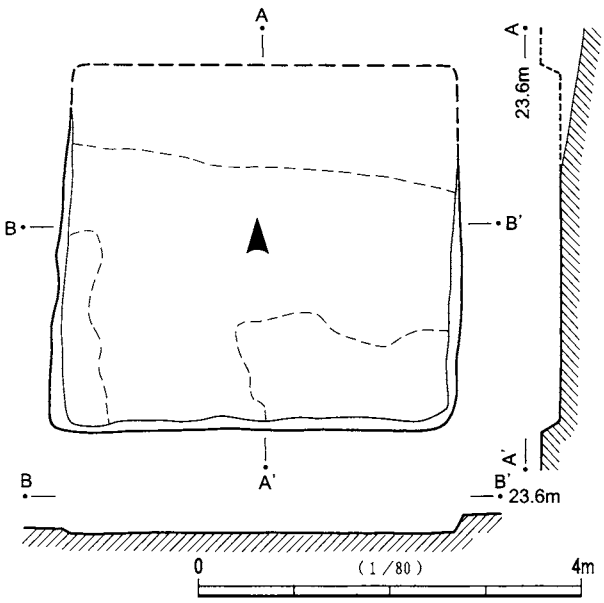
カマドは北壁中央に，壁から45cm張り出して設けられている。遺存状態は悪く，袖部の一部が残存していたが，本遺跡では特異な形態である。

遺物は，床面から土師器杯・甕・甑などが出土している。

ＳＢ-060（第64図）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。斜面に位置しているため北壁側はすでに失われ，上面も削平されており，遺存状態は悪い。覆土中から出土した古墳時代後期の土師器片から時期を判断した。

平面形態は方形で，規模は現存で2.80m×4.16mを測る。カマドが北壁に設けられていたと推定して，



第64図　ＳＢ-060

主軸方位はN-1°-Eとなる。壁は，比較的遺存の良い南壁では緩やかに掘り込まれ，壁高は19cm～22cmを測る。床面はほぼ平坦で，中央部は広く踏み固められていた。柱穴・壁溝等は確認されていない。

遺物は，覆土中から土師器片が出土しているが，図示できるものはなかった。

ＳＢ-061（第65図，図版７・38・39）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。北側が斜面にかかり，SB-062と東壁の一部が接し，西壁の一部をＳＫ-186に削平されており，遺存状態はあまり良好ではない。

平面形態は方形で，規模は5.14m×4.80mを測る。主軸方位はN-18°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は10cm～24cmで北側が低くなっている。床面は凹凸があり，中央部に硬化面が広がる。壁溝(幅20cm～30cm，深さ4cm～12cm)は，北東壁，南東コーナーとカマド部分を除いて巡っている。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム粒や焼土粒を含む黒褐色土を主体に，暗褐色土，褐色土，焼土粒が混在している。

カマドは北壁中央に設けられ，壁を15cm掘り込み煙道部を形成する。上面を削平されていたため，天井部はすでに崩落していたが，カマド内から土師器甕が据えられたように出土した。袖部もよく残り，遺存状態は比較的良好である。火床は広く10cm掘り窪まれ，焼土が堆積していた。

遺物は，カマド周辺から須恵器杯蓋，土師器杯・高杯・甕などが出土している。15は支脚である。

ＳＢ-062（第66図，図版39）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。北側が斜面にかかり，SB-036・061に南西側を一部削平されており，遺存状態はあまり良好ではない。

平面形態は方形で，規模は6.94m×6.40mを測る。主軸方位はN-18°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は11cm～36cmで北側が低くなっている。床面は全体に軟弱で凹凸がある。壁溝(幅16cm～30cm，深さ2cm～7cm)は，住居の南半に巡っており，南東側では幅が広くなっている。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム粒や焼土粒を含む暗褐色土を主体に，暗茶褐色土，黒褐色土が混在している。

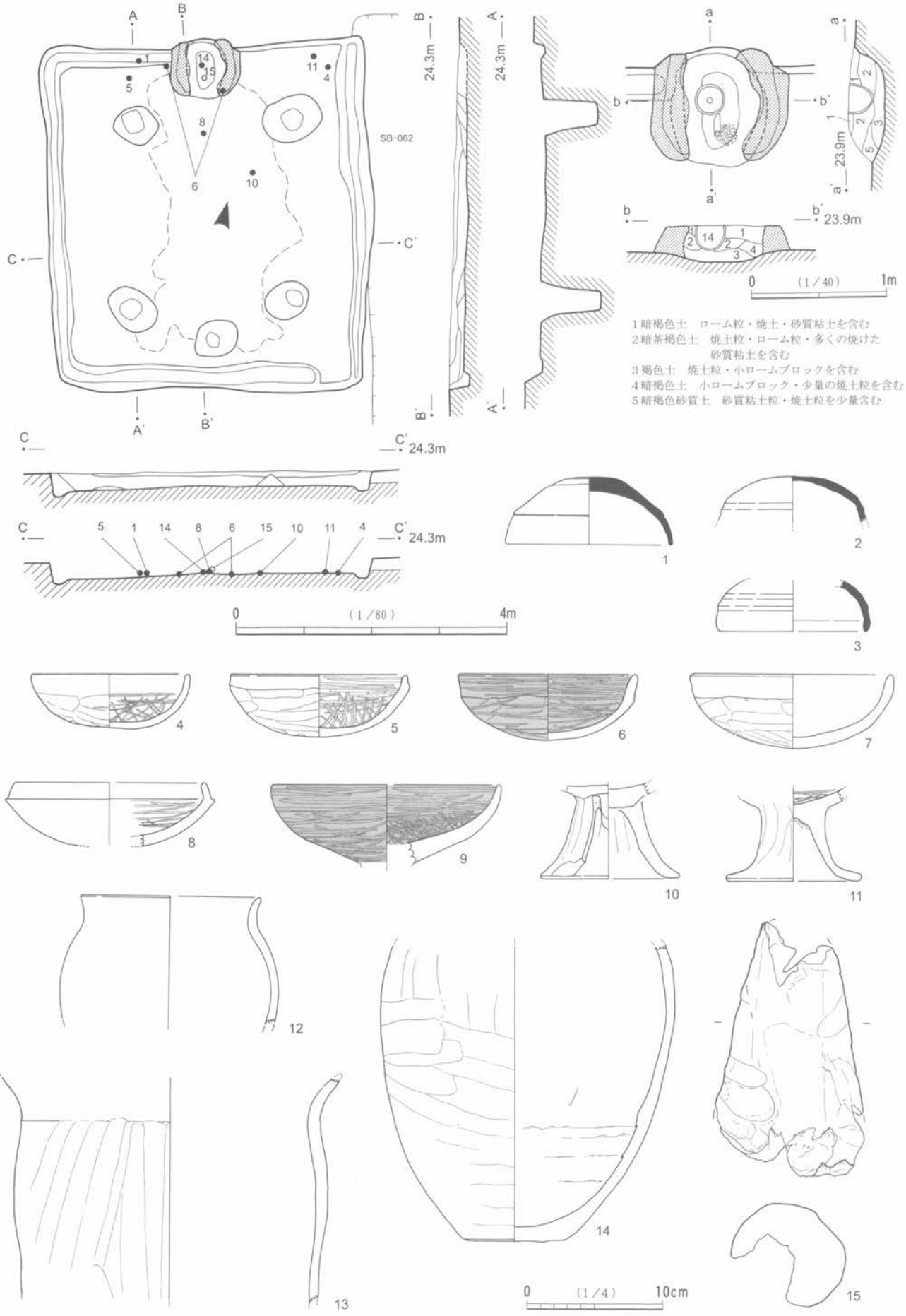
カマドは北壁中央に設けられ，壁を13cm掘り込んで垂直に立ち上がる煙道を形成する。天井部はすでに崩落していたが，袖部が遺存していた。袖部に沿うように，浅いピットが火床とともに掘られている。

遺物は，カマド周辺や床面から土師器杯・高杯などがわずかに出土している。５は支脚である。

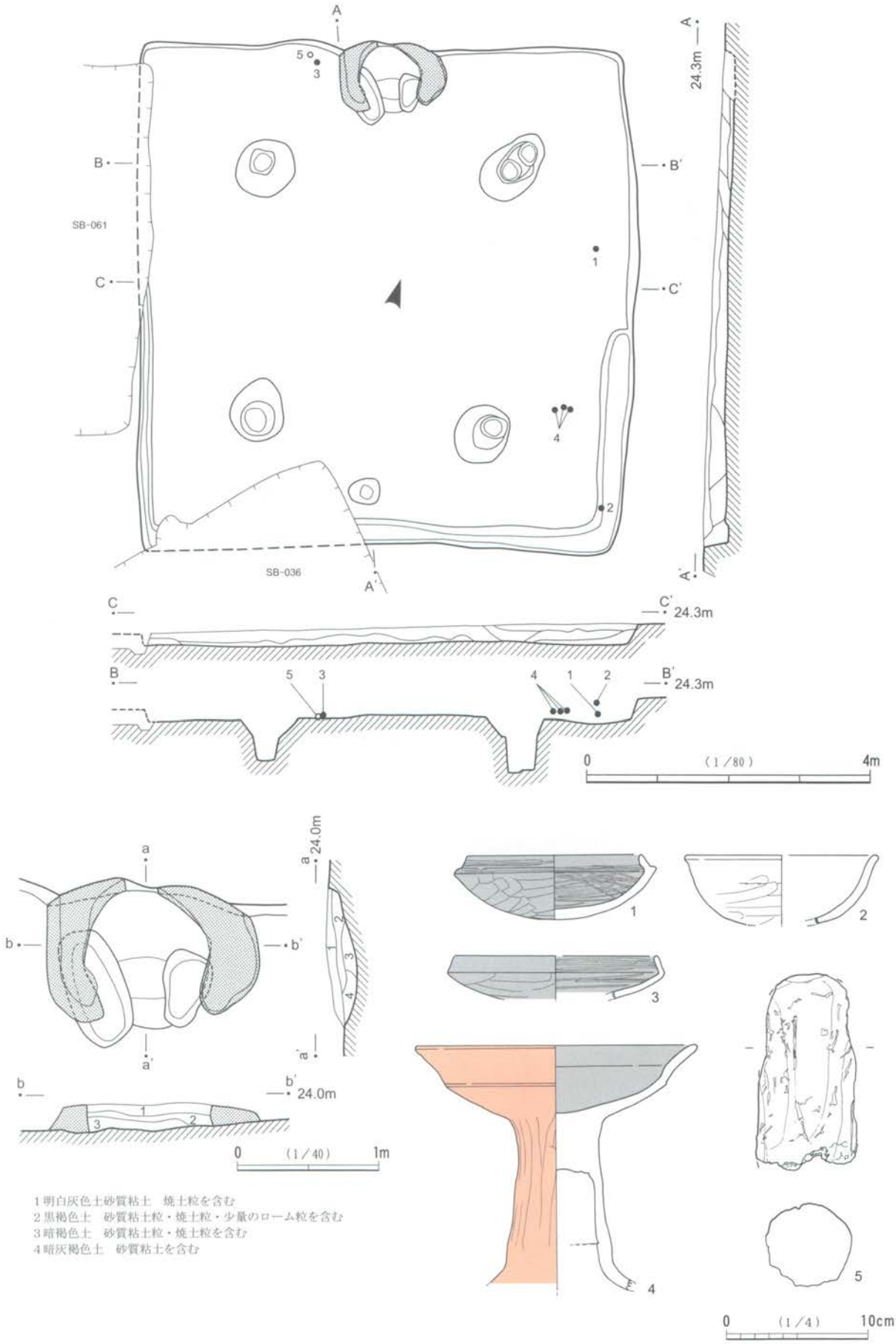
ＳＢ-064（第67図，図版８）

調査区の東端，Ｅ２グリッドに位置する。SB-065と南コーナーで重複し，一部を削平している。

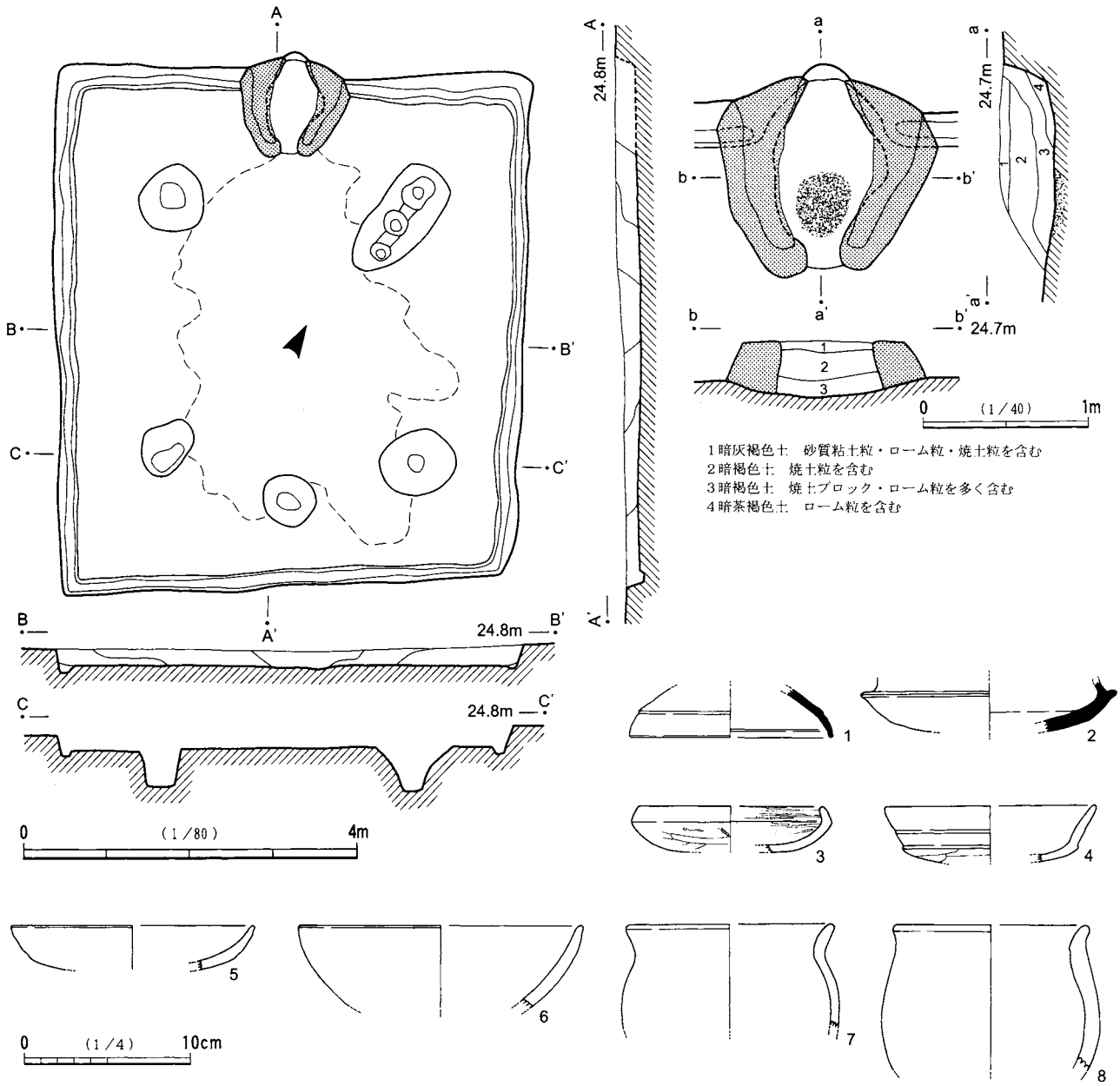
平面形態は長方形で，規模は6.30m×5.70mを測る。主軸方位はN-32°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は18cm～28cmを測る。床面は，凹凸があるが全体に堅緻で，中央部には硬化面が広がる。



第65図　ＳＢ-061及び出土遺物



第66図　ＳＢ-062及び出土遺物



第67図　ＳＢ-064及び出土遺物

壁溝(幅15cm～20cm，深さ5cm～11cm)は，カマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。P2は３基の小ピットからなり，このうち北側のピットが主柱穴で，他は補助的な用途のピットと考えられる。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黒褐色土を主体に，暗黄褐色土が混在している。

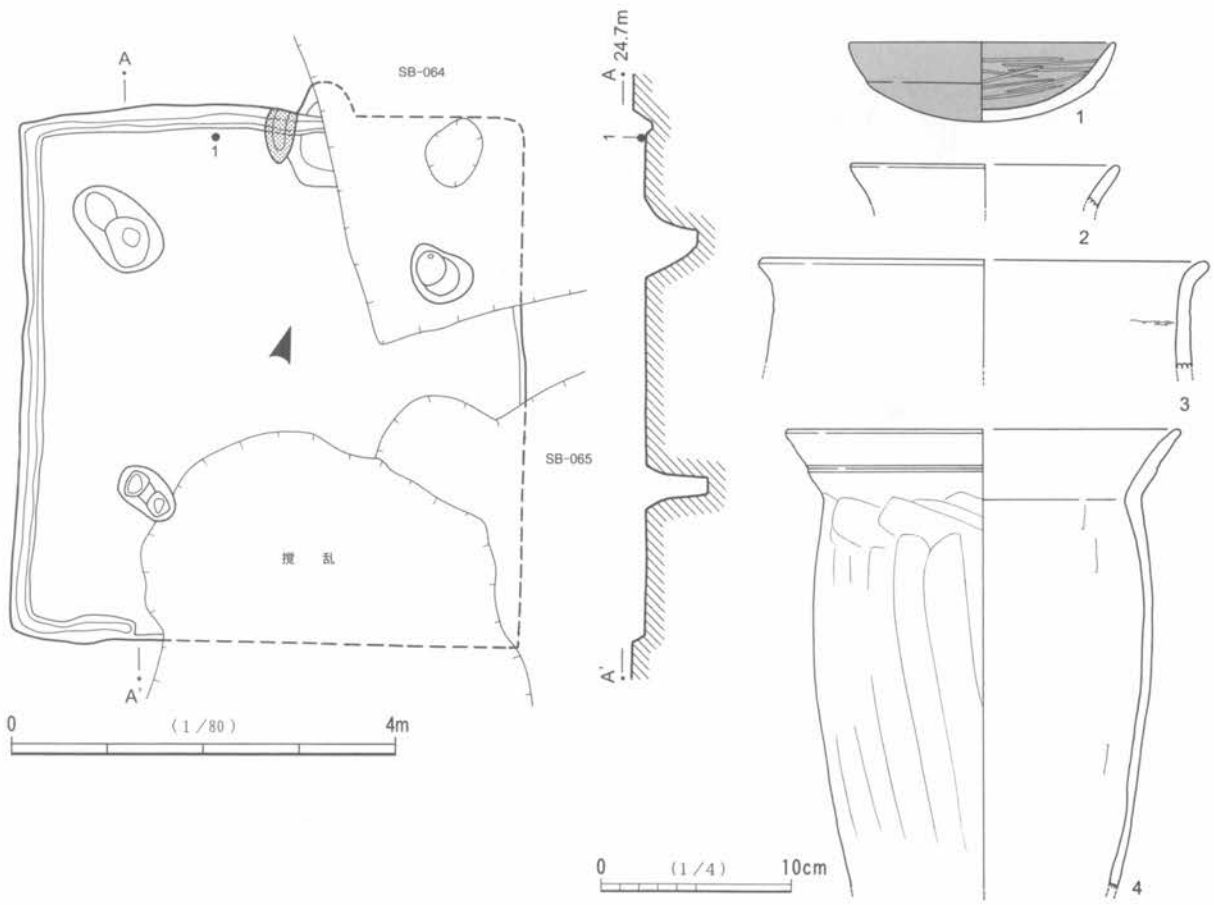
カマドは北西壁中央に設けられ，壁を26cm掘り込み垂直に立ち上がる煙道部を形成する。天井部はすでに崩落していたが，袖部が良好に遺存していた。火床は浅いが，焼土が堆積していた。

出土遺物は少なく，須恵器杯，土師器杯・甕がカマドや柱穴内から出土している。

ＳＢ-065（第68図，図版８・39）

調査区の東端，Ｅ２グリッドに位置する。SB-064・065と攪乱に東半を削平され，遺存状態は悪い。

平面形態は長方形で，規模は5.60m×5.20mを測る。主軸方位はN-19°-Wである。壁の掘り込みは浅



第68図　ＳＢ-065及び出土遺物

く，壁高は13cm前後である。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。壁溝(幅20cm，深さ2cm～7cm)は，遺存している範囲では，東壁部分を除いて全周する。３本の主柱穴を検出したが，１本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットは攪乱を受け不明である。

カマドは北壁中央に設けられている。SB-064に右側を削平されており，遺存状態は悪い。左袖部の一部が残存していた。火床は楕円形に17cm掘り窪まれている。

遺物は，覆土やカマドから土師器杯・甕がわずかに出土している。

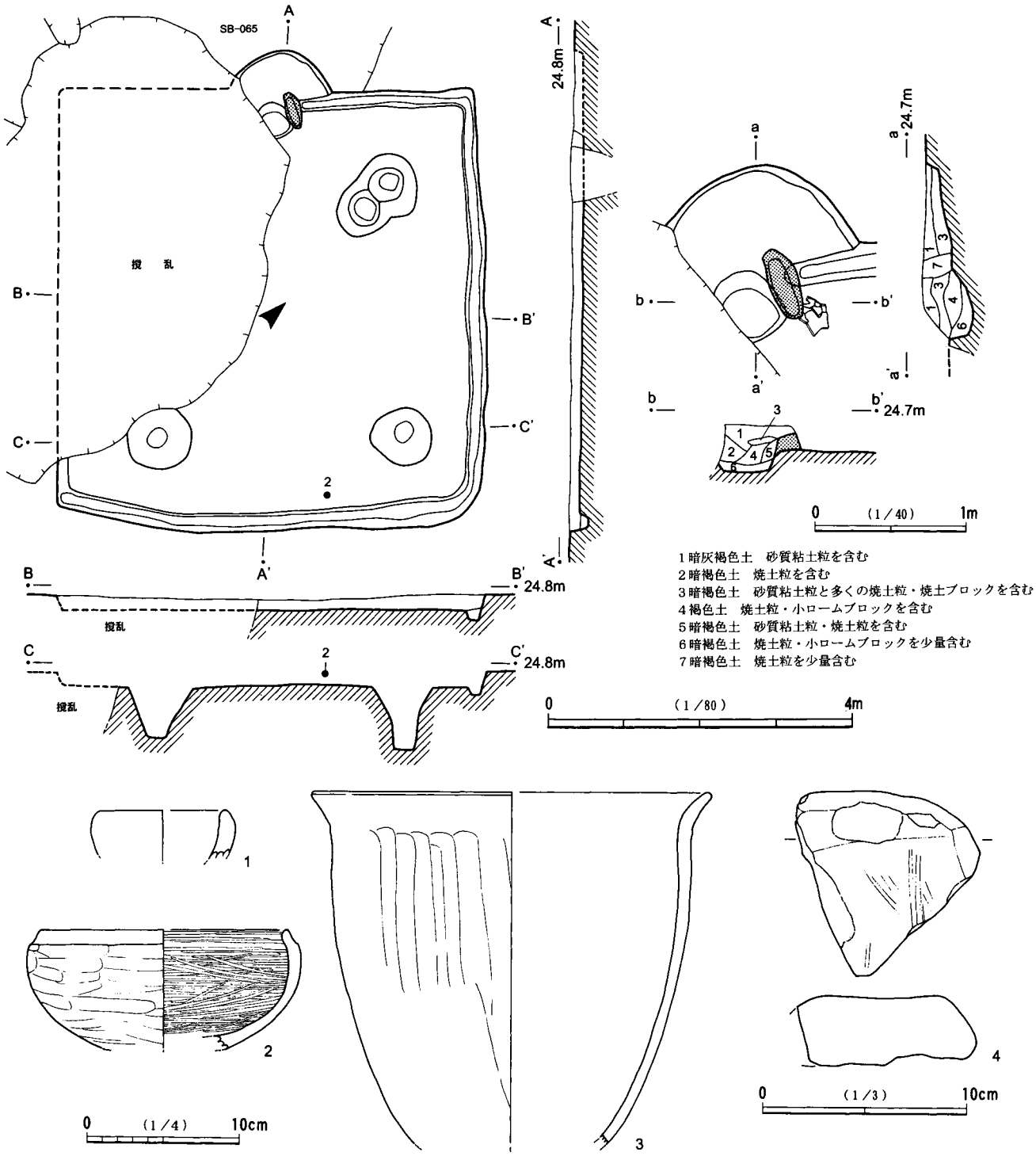
ＳＢ-066（第69図，図版８・39）

調査区の東端，Ｅ２グリッドに位置する。SB-065と重複し，西側の大半が攪乱を受けており，遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は5.74m×5.60mを測る。主軸方位はN-47°-Wである。壁の掘り込みは浅く，壁高は15cm～20cmを測る。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。壁溝(幅20cm，深さ6cm～10cm)は，遺存している範囲では全周する。主柱穴は３本検出したが，出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黒褐色土を主体に，暗黄褐色土が混在している。

カマドは北壁中央に設けられている。煙道部にあたる部分が，半円形にテラス状に広がる。左袖部は攪乱を受け，右袖部の一部が残存していた。火床は皿状に17cm掘り窪められている。

遺物は，覆土中やカマド内から土師器杯・甕片などがわずかに出土している。４は砥石の一部であろう。砂岩製で，最大長9.0cm，最大幅8.7cm，最大厚3.4cm，重量334.77ｇを測る。

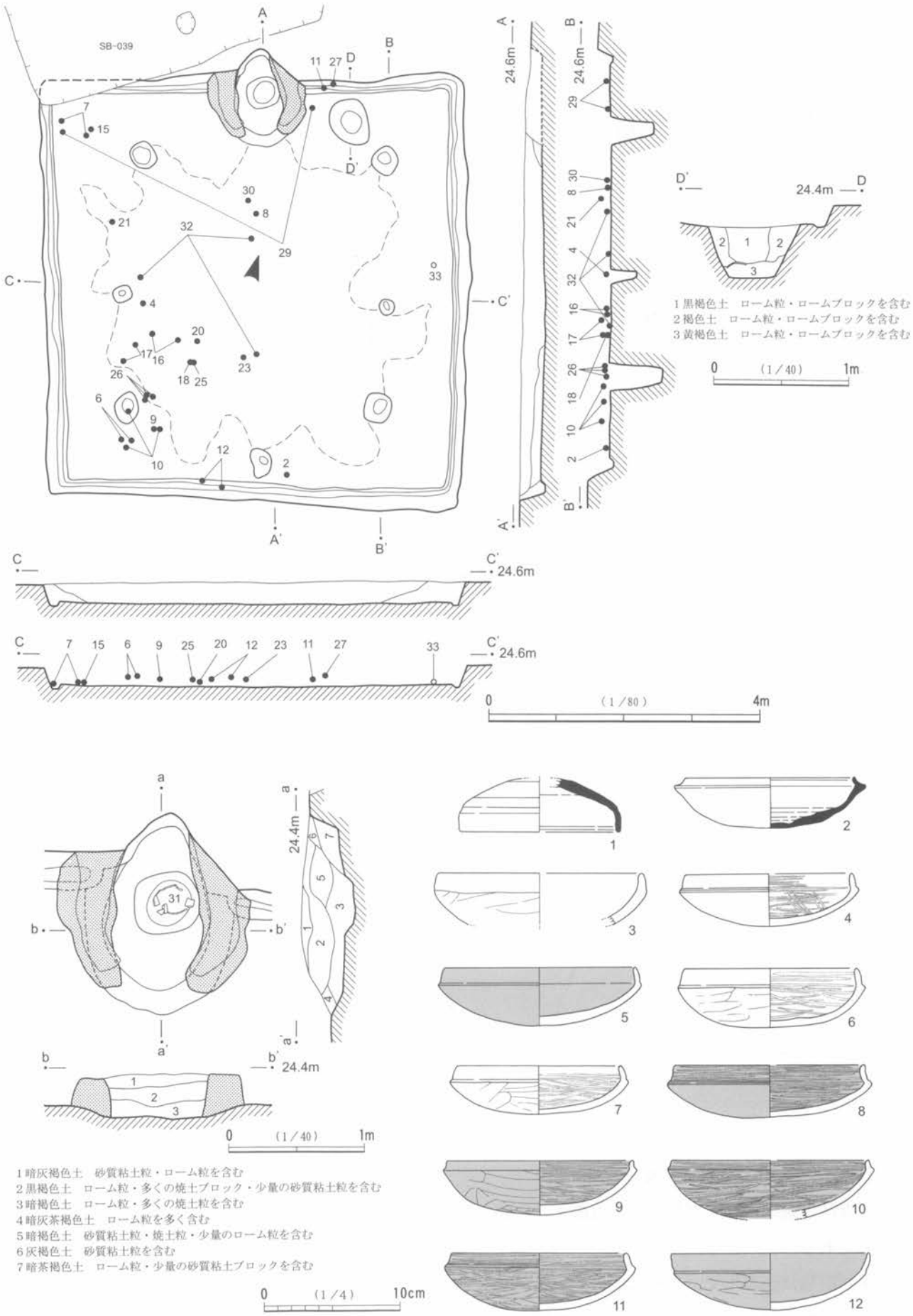


第69図　ＳＢ-066及び出土遺物

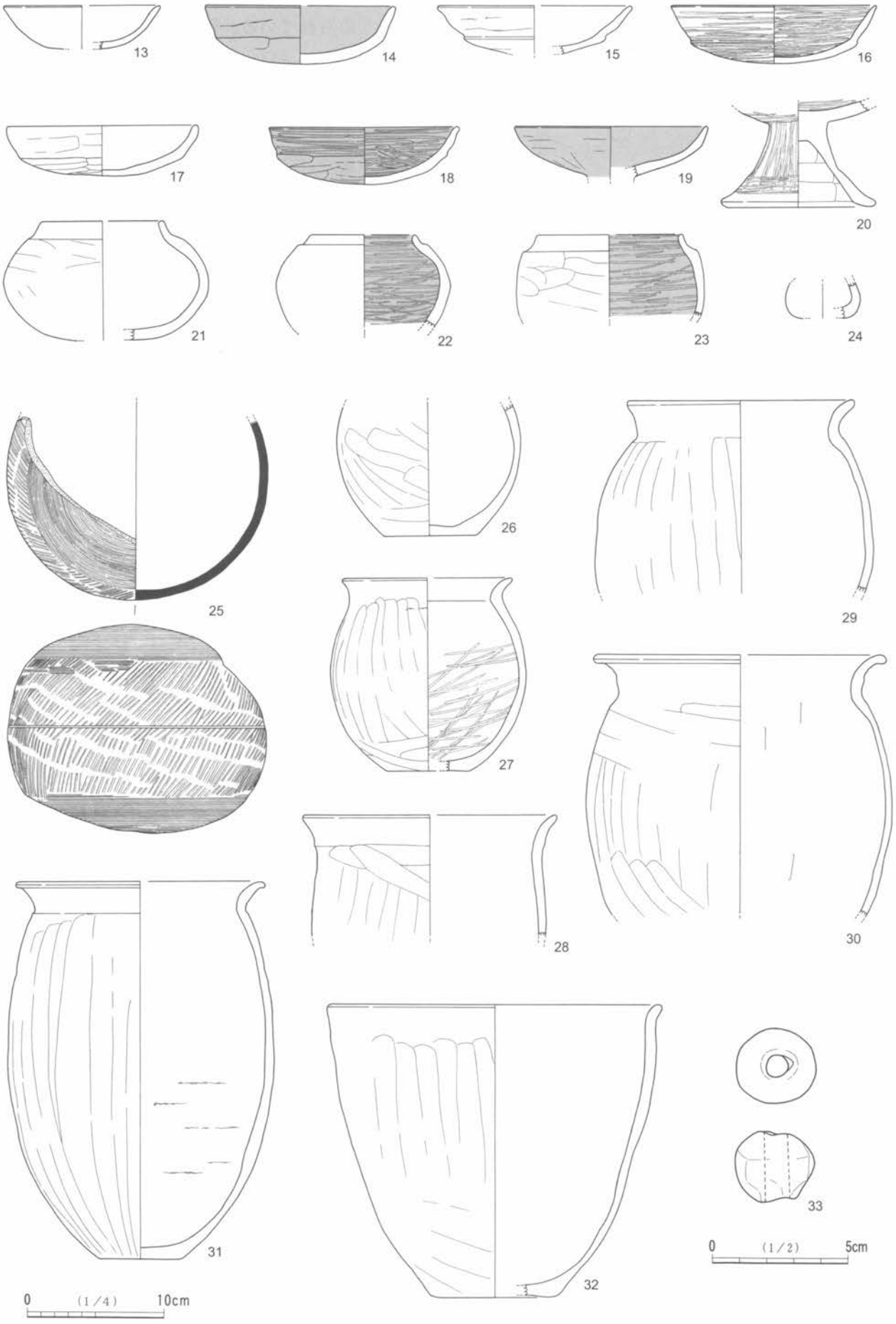
ＳＢ-067（第70・71図，図版８・39・40）

調査区の東端，Ｅ１グリッドに位置する。SB-039に北西コーナー付近を削平されているが，遺存状態は良好である。

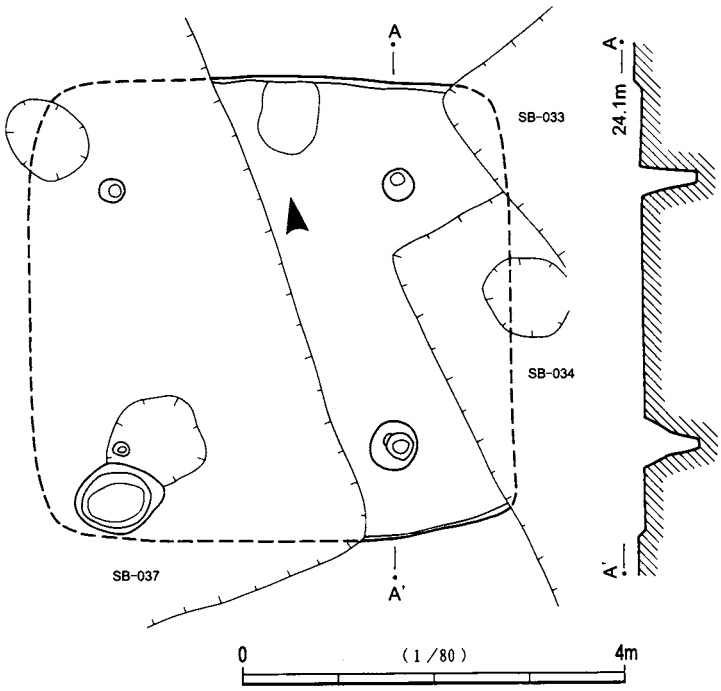
平面形態は正方形で，規模は6.26m×6.30mを測る。主軸方位はN-17°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は11cm～36cmで北側が低くなっている。床面は全体に堅緻で，特に中央部は広く踏み固



第70図　ＳＢ-067及び出土遺物（１）



第71図　ＳＢ-067出土遺物(２)



第72図　ＳＢ-068

められている。壁溝(幅12cm～20cm，深さ4cm～9cm)は，カマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と２本の補助柱穴，出入り口施設に伴うピットを検出した。貯蔵穴(径58cm×76cm，深さ40cm)は，カマド右側に設けられている。覆土は，ローム粒を多く含む黒褐色土を主体に，褐色土，暗褐色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を37cm掘り込んで，ほぼ垂直に立ち上がる煙道部を形成する。遺存状態は良好で，袖部がよく残っていた。火床は10cm掘り窪められ，中心はさらに楕円形に6cm下げられている。カマド内からは，31の土師器甕が出土している。

遺物は多く，須恵器杯，土師器杯・高杯・甕などが，カマド周辺や南西側床面からまとまって出土している。33は土玉である。

ＳＢ-068（第72図，図版８）

調査区の北西部，Ｄ２グリッドに位置する。SB-033・034・037に大きく削平されている。上面も削平され，カマドも痕跡が北壁中央で確認されたのみで，遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は推定で4.9m×5.0mとなる。主軸方位はN-11°-Eである。壁はわずかに6cm～8cm程度が残存していた。床面はほぼ平坦で，全体に軟弱である。壁溝は確認されていない。主柱穴は，SB-37の床面に残るピットも含めて４本検出された。南西コーナー付近からは土坑が検出されたが，本住居に伴うものかは判然としない。

カマドは残存する焼土の位置から推定して，北壁中央に設けられていたと考えられる。

遺物は，覆土中から土師器片などが出土したが，図示できるものはなかった。

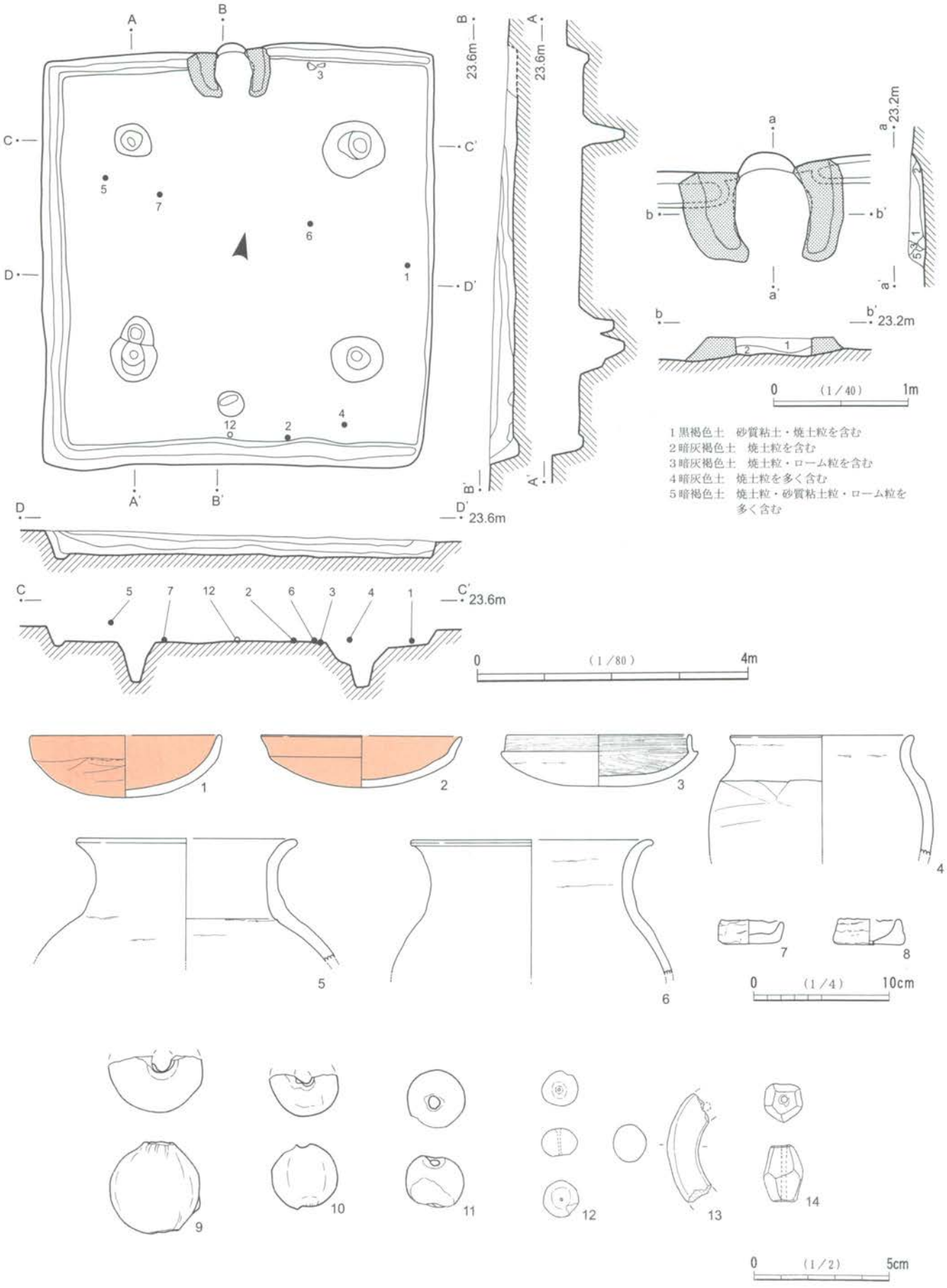
ＳＢ-071（第73図，図版８・40）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。上面を削平されているが，遺存状態は良好である。

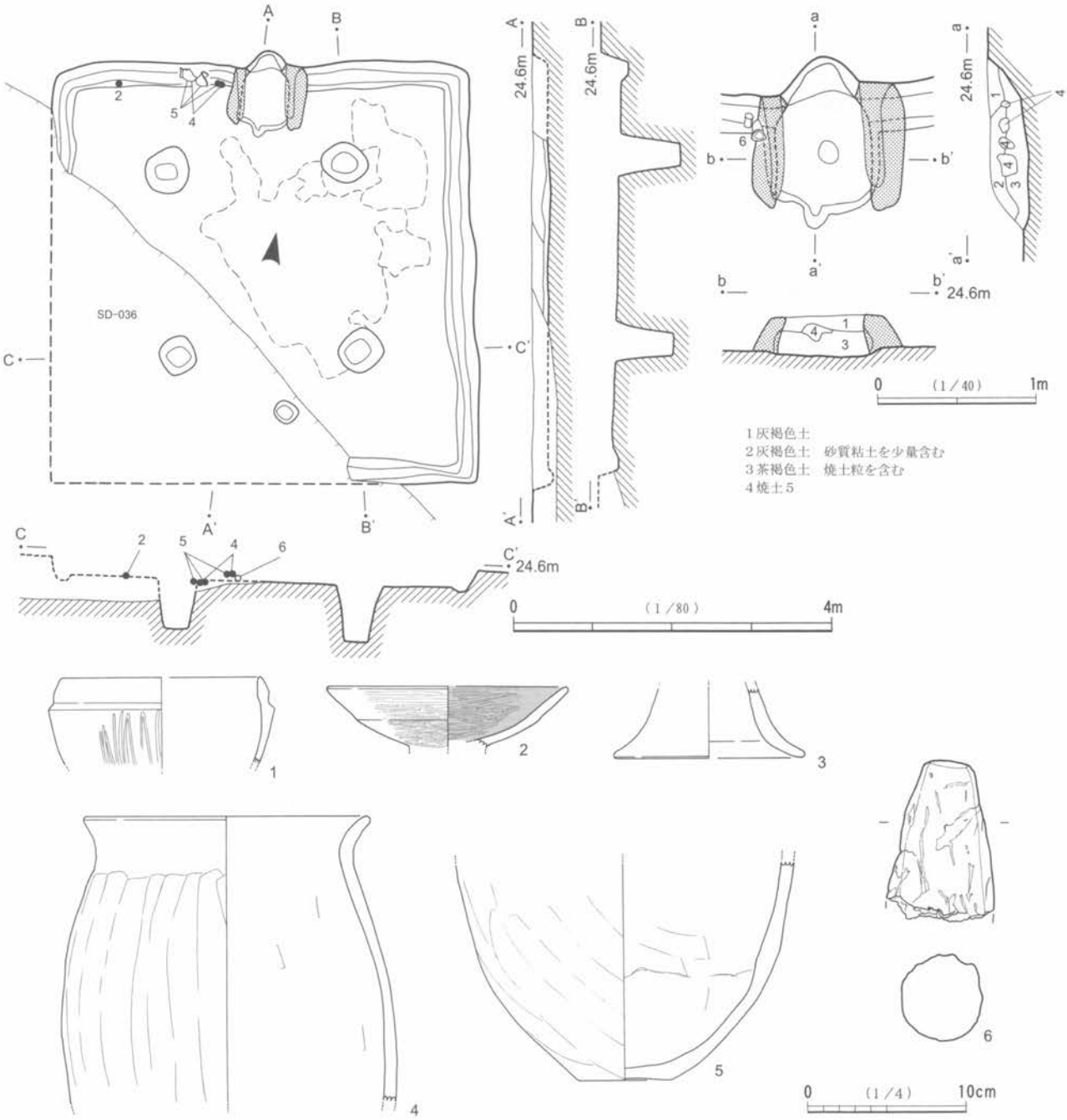
平面形態は長方形で，規模は6.26m×5.84mを測る。主軸方位はN-12°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は13cm～45cmで北側が次第に低くなっている。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。壁溝(幅20cm～28cm，深さ3cm～5cm)は，東壁とカマド部分を除いて巡っている。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土はローム・ブロックを含む黒褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を14cm掘り込み，緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。天井部はすでに崩落していたが，袖部がよく残っていた。火床の掘り込みはなく，被熱もわずかである。

出土遺物は少なく，床面や覆土中から土師器杯・甕や玉類が出土している。９～12は土玉である。13は土製勾玉の一部であろう。頭部と端部を欠損しているが，孔の一部が遺存している。14は土製切子玉で，丁寧なつくりである。長さ2.1cm・幅1.45cm・孔径0.2cmを測る。



第73図　ＳＢ-071及び出土遺物



第74図　ＳＢ-075及び出土遺物

ＳＢ-075（第74図，図版８・40）

調査区の東端，Ｅ２グリッドに位置する。南西側を中世の遺構に大きく削平され，遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は5.32m×5.20mを測る。主軸方位はN-10°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は14cm～32cmを測る。北西側が低くなっている。床面はやや凹凸があり，中央部から北東側にかけて硬化面が広がる。壁溝(幅20cm～28cm，深さ5cm～7cm)は，遺存している範囲では，カマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム・ブロックを含む黒褐色土を主体に，暗黄褐色土が混在している。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を20cm掘り込み，緩やかに立ち上がる煙道部を形成する。天井

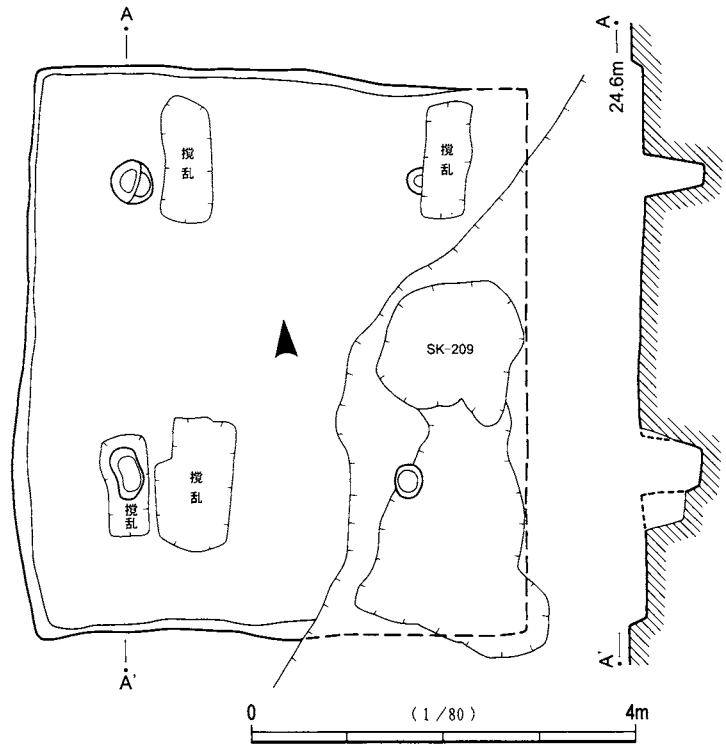
部はすでに崩落し袖部が残存していた。袖部の内側は良く被熱している。火床の掘り込みは浅く，焼土の堆積は少ない。

遺物の出土は少なく，床面や覆土中から土師器杯・甕などが出土している。６は支脚である。

ＳＢ-076（第75図）

調査区の中央南側，Ｃ３グリッドに位置する。中世遺構や攪乱により全体を大きく削平されており，遺存状態は悪い。カマドもすでに失われているが，平面形態や主柱穴の配置などから住居跡と判断した。

平面形態は方形で，規模は現存で5.9m×5.6mを測る。主軸方位はN-6°-Eである。壁の状態は不明であるが，現存する壁高は10cm前後である。床面も攪乱されており，壁溝は確認されていない。主柱穴は４本確認できたが，P1以外は攪乱されている。遺物は出土していない。



第75図　ＳＢ-076

第２節　古墳

ＳＤ-004（第76・77図）

調査区の西端，Ａ２グリッドに位置する円墳である。全体が中世の溝状遺構と重複しているため，墳丘はすでに失われ，主体部も不明である。周溝も西側斜面にかかる範囲は流失し，遺存状態は悪い。

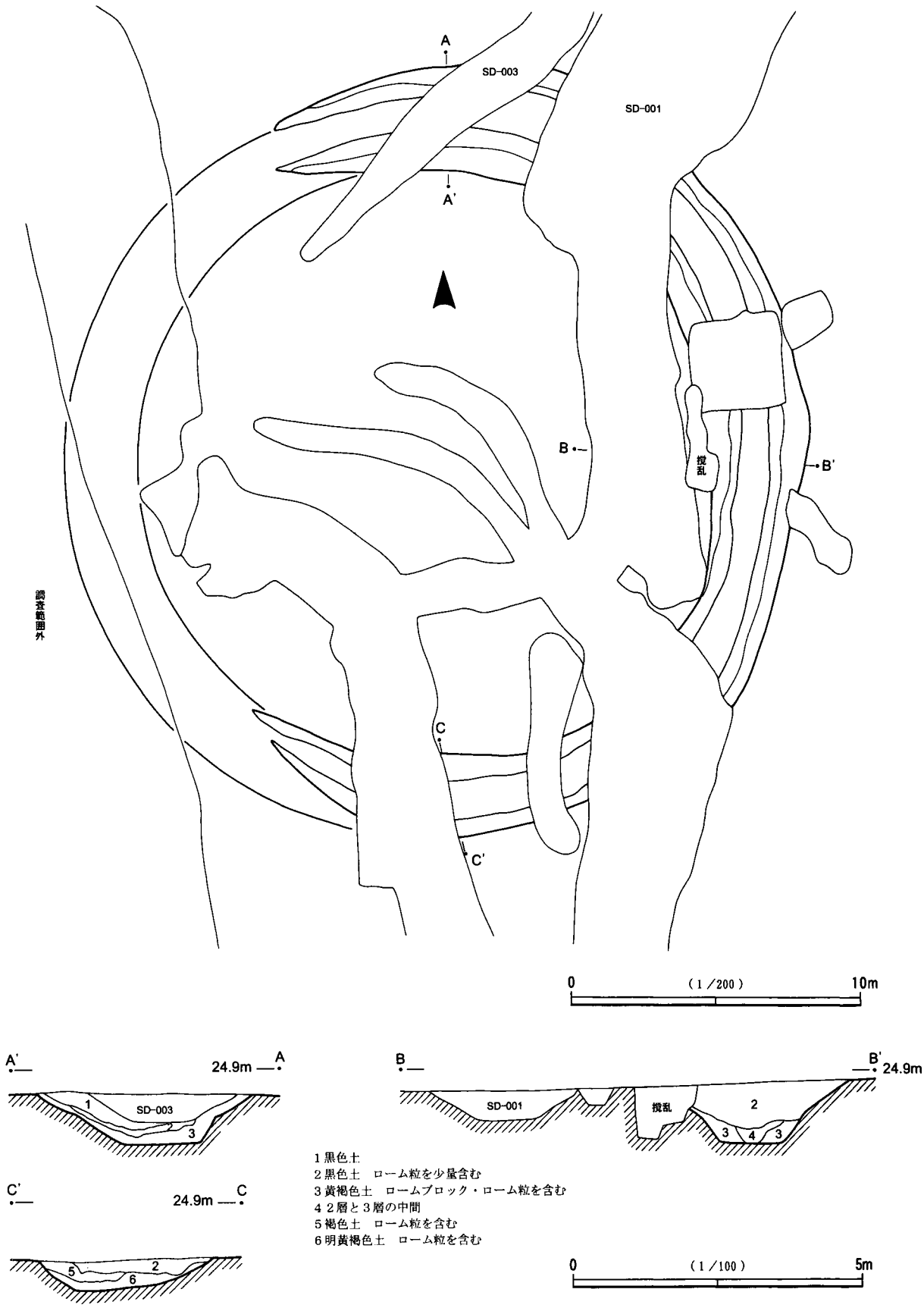
平面形態は円形で，外縁径・内縁径はそれぞれ南北26.5m・19.9m，東西は推定で26m・20mを測る。周溝の上端は2.5m～4.1m，溝底幅0.9m～1.6m，深さは0.48m～0.86mである。遺存の良好な箇所で判断すると，周溝は逆台形に掘り込まれ，溝底面はほぼ平坦である。覆土は，底面近くにローム粒を多く含んだ黄褐色土があり，その上に黒色土や褐色土が堆積していた。

遺物は，周溝内から土師器杯・甕，須恵器杯・甕，砥石などが出土している。砥石は砂岩製で，最大長6.0cm，最大幅3.0cm，最大厚3.2cm，重量95.33ｇを測る。

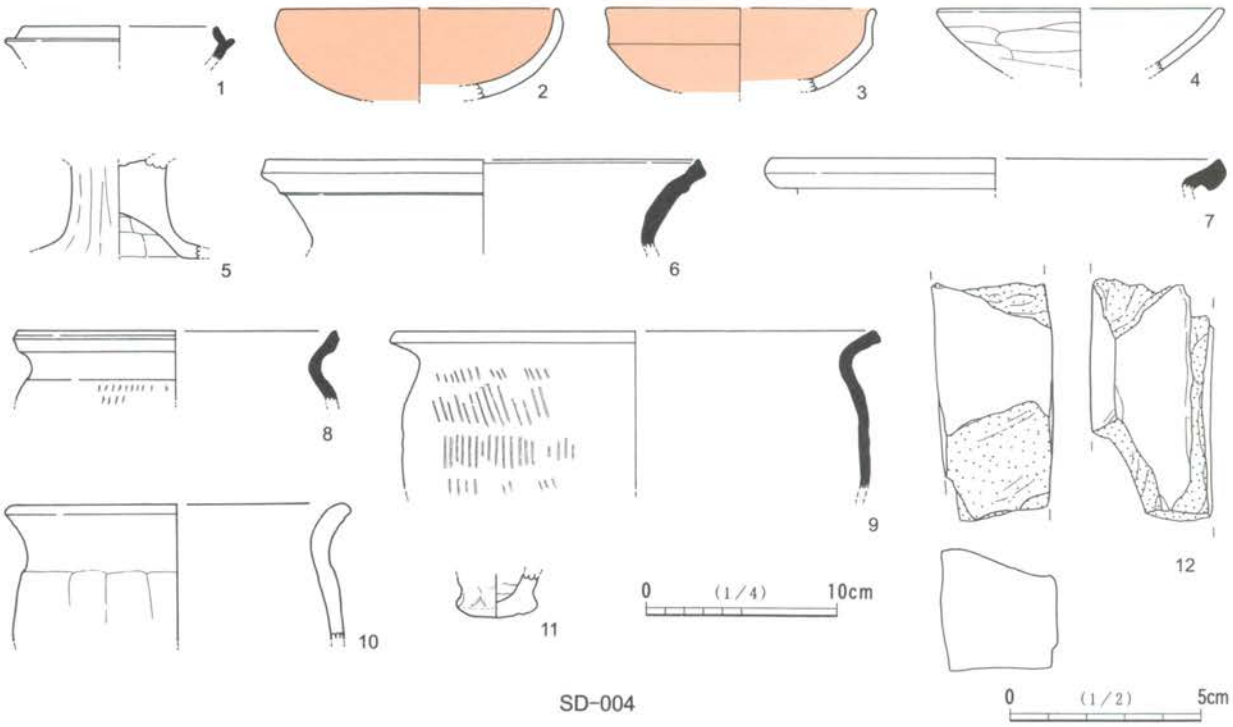
ＳＤ-006（第77図）

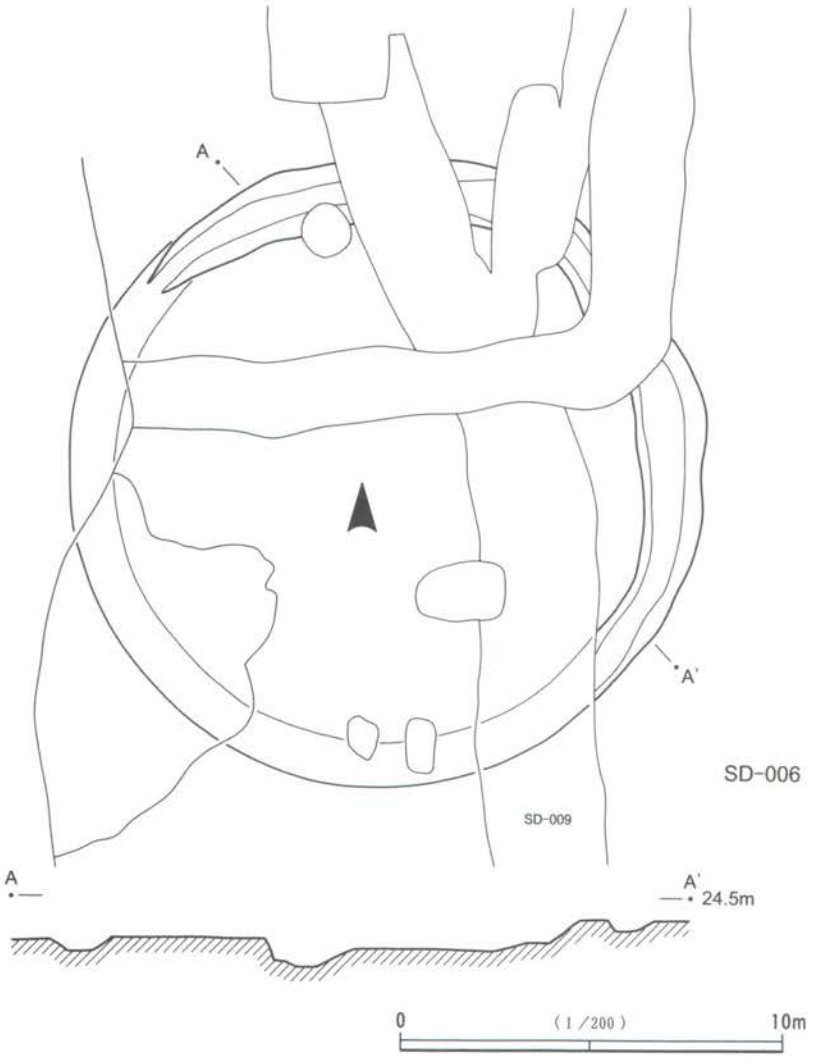
調査区の西端，Ａ２グリッドに位置する円墳である。SD-004の南側に隣接し，同様の条件で遺存状態は悪い。主体部も不明である。

平面形態は円形で，外縁径16.5m・内縁径14.0mと推定される。遺存範囲で，周溝の上端は1.2m～1.9m，溝底幅0.5m～1.1m，深さは0.15m～0.43mである。周溝は緩やかに掘り込まれ，底面はやや凹凸がみられる。覆土は，ローム・ブロックを含む明褐色土や黄褐色土が堆積していた。遺物は出土していない。


A
SD-003
SD-001
A'
B
B'
撹乱
調査範囲外
C
C'
0
(1/200)
10m
A'
24.9m
A
1
SD-003
3
B
B'
24.9m
SD-001
撹乱
2
3
4
3
C'
24.9m
C
5
2
6
1黒色土
2黒色土　ローム粒を少量含む
3黄褐色土　ロームブロック・ローム粒を含む
4 2層と3層の中間
5褐色土　ローム粒を含む
6明黄褐色土　ローム粒を含む
0
(1/100)
5m

第76図　ＳＤ-004





第77図　ＳＤ-004出土遺物，ＳＤ-006

第３節　土　坑

ＳＫ-002（第78図，図版40）

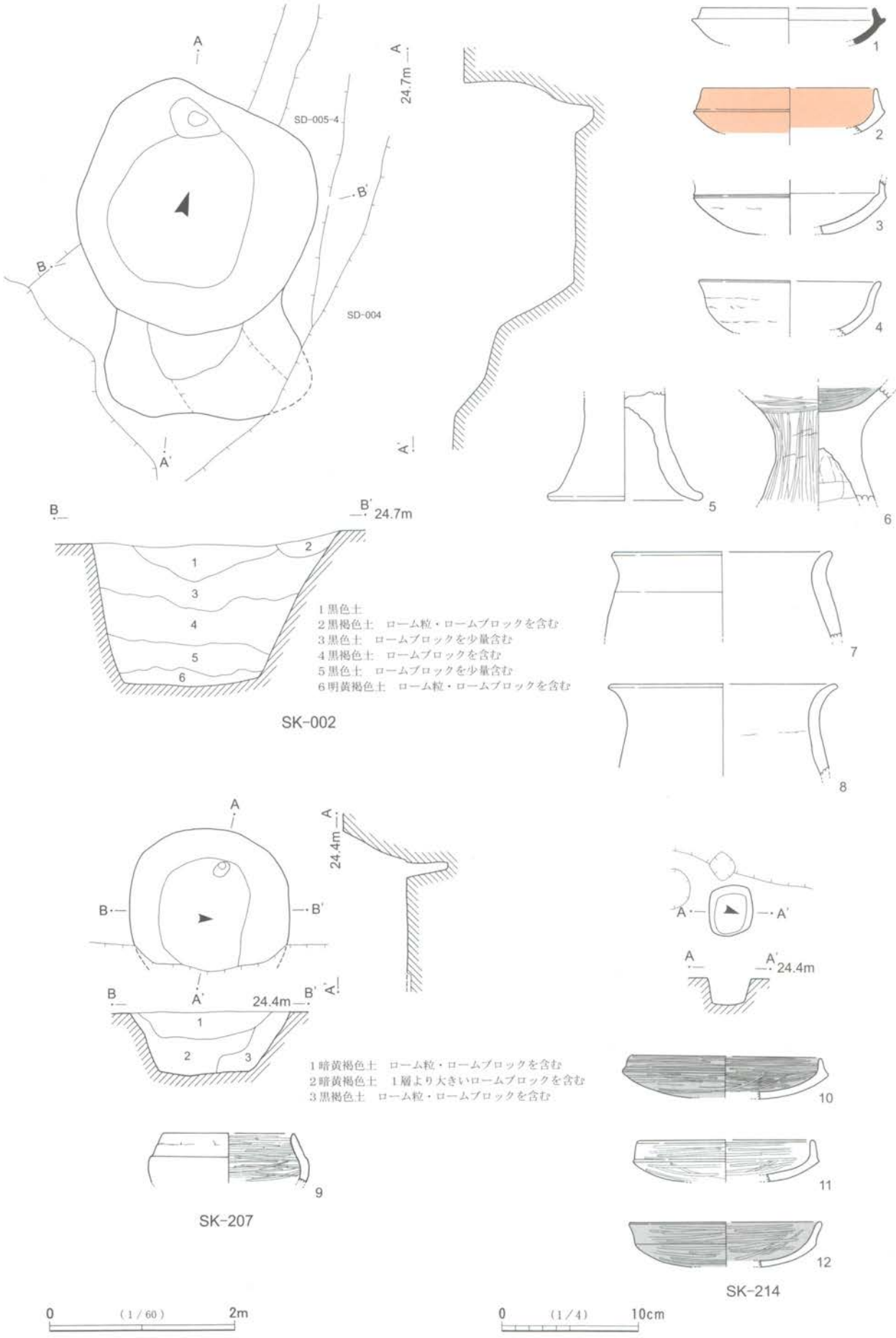
調査区の西端，Ａ２グリッドに位置する大型の土坑である。SD-004・005と一部重複し上面は削平されているが，遺存状態は比較的良好である。平面形態は楕円形で，径2.83m×2.62m，深さ1.55mを測る。南側に浅いが，段をもつ。全体に緩やかに掘り込まれているが，北壁では垂直に立ち上がっている。底面は不整形で，径1.65m×1.53mを測る。ほぼ平坦で，北側にピット(径40cm×60cm，深さ12cm)を検出した。覆土は，ローム・ブロックを含む明黄褐色土や黒褐色土，黒色土が堆積していた。遺物は，覆土中から須恵器杯，土師器杯・高杯・甕が出土している。

ＳＫ-207（第78図）

調査区の中央，Ｃ２グリッドに位置する。東側を削平されているが，遺存状態は良好である。平面形態は楕円形になると考えられる。南北長1.72m，東西の長さは現存で1.74m，深さは0.78mである。緩やかに掘り込まれ，底面は，南北長0.94m，東西は現存で1.23mの楕円形で，ほぼ平坦である。底面の西端にピット(径14cm×20cm，深さ45cm)が掘り込まれている。覆土にはローム粒やローム・ブロックを含んでいる。遺物は，土師器杯が覆土中から出土した。

ＳＫ-214（第78図，図版40）

調査区の中央南部，Ｂ３グリッドに位置する。SB-043・044の7m西側で，周辺に展開しているのは中世遺構群である。形態的には土坑よりも，住居跡の貯蔵穴の可能性が高いが，住居の痕跡は確認されていないので，土坑として報告する。平面形態は隅丸方形で，規模は0.48m×0.55m，深さは28cm～35cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。覆土中から土師器杯３点が出土した。



第78図　ＳＫ-002・ＳＫ-207・ＳＫ-214及び出土遺物

第４章　奈良・平安時代

奈良・平安時代は竪穴住居跡19軒・掘立柱建物跡３棟・土坑33基・円形周溝２基で構成されている。８世紀中頃の住居跡が１軒検出されているほかは，９世紀中頃から10世紀中頃にかけての遺構である。台地の北西側に展開し，土坑墓を囲むように住居跡が配置されており，限定された範囲での分布となっている。

第１節　竪穴住居跡

ＳＢ-002（第79図，図版８・41）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。上面をやや削平されているが，遺存状態は良好である。

平面形態は長方形で，規模は3.20m×3.68mを測る。主軸方位はN-27°-Eである。壁は垂直に掘り込まれ，壁高は17cm～27cmで北西側が低くなっている。床面は凹凸があり，カマド前面から南壁にかけて帯状に硬化面が広がる。壁溝(幅12cm～20cm，深さ3cm～5cm)はカマド部分を除いて全周する。４本の主柱穴は，いずれも壁溝内にやや内側を向いて穿たれている。出入り口施設に伴うピットも南壁際から検出されている。覆土は，ローム粒やローム・ブロック，焼土粒を含む黒褐色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられている。壁を70cm掘り込んで，袖部も取り込みカマド全体を構築している。天井部はすでに崩落していたが，袖部にあたる部分は遺存していた。煙道部は緩やかに立ち上がり，火床の掘り込みは浅い。

出土遺物は少なく，床面や覆土から土師器杯・甕や鉄製品が出土している。６の墨書土器は記号で，覆土中からの出土。10の燧金は南壁際の床面，11の鎌は北東コーナー付近の覆土中からの出土である。10は幅10.25cm・高さ3.5cm・厚さ0.25cm・孔径0.35cm×0.5cmを測る。木質が一部付着している。11は刃部の一部が遺存している。現存長8.83cm・刃部幅2.58cm・厚さ0.21cmを測る。

ＳＢ-003（第79図，図版41）

調査区の北西端，Ａ１グリッドに位置する。全体に攪乱を受け，遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は現存で3.26m×2.00mを測る。主軸方位，壁の状態は不明である。床面中央にやや踏み固めた面が残っていた。壁溝(幅10cm，深さ6cm前後)は，遺存している範囲では全周する。主柱穴等は検出されなかった。カマドもすでに削平されているため，位置等も不明である。

出土遺物はほとんどないが，床面から12の墨書土器が出土している。

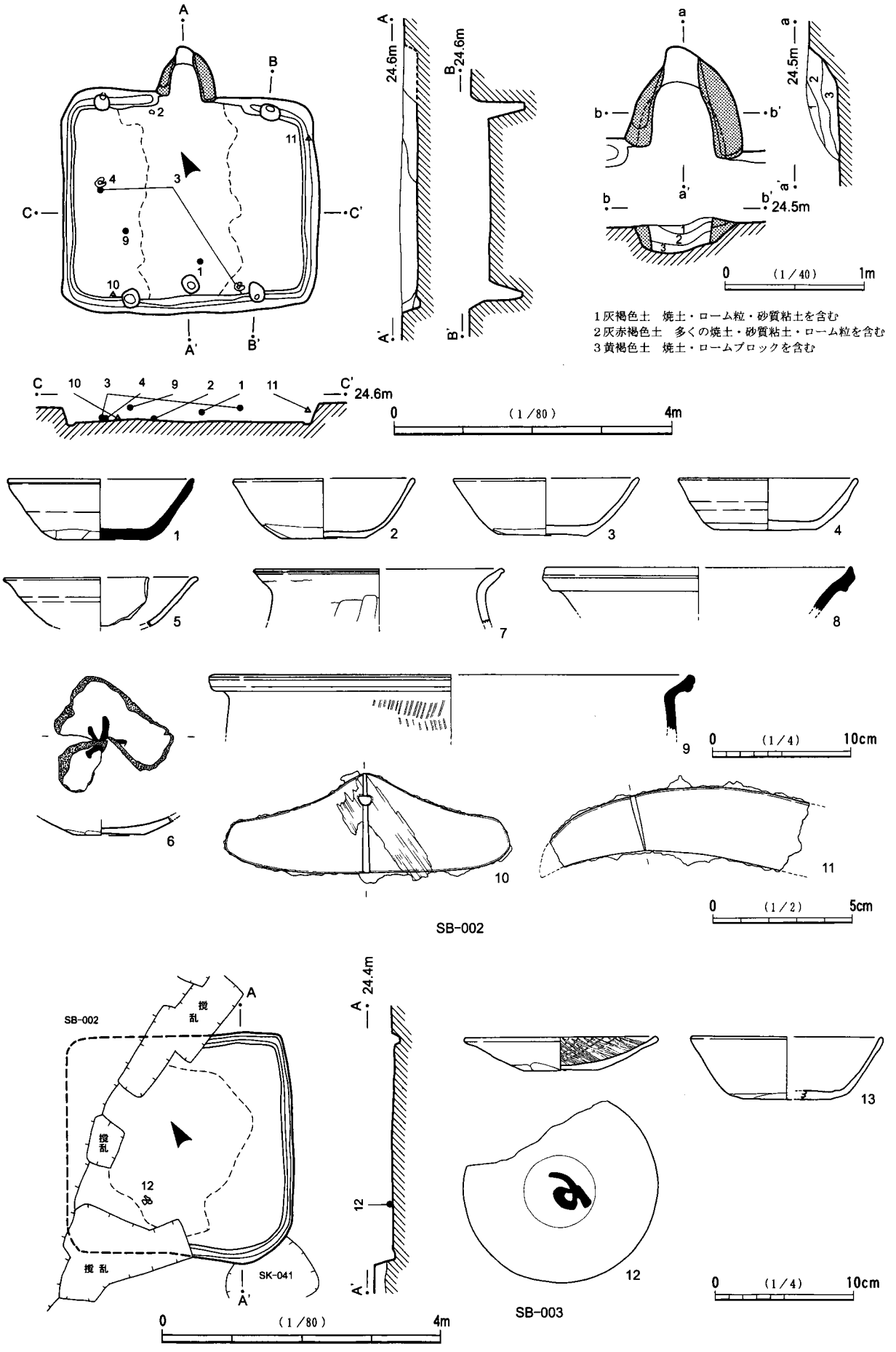
ＳＢ-004（第80図，図版８）

調査区の西側，Ａ２グリッドに位置する。古墳時代の円墳であるSD-004の周溝上に構築されているため，壁や床面等は不明確な点が多い。

平面形態は方形で，規模は推定で3.10m×3.26mを測る。主軸方位はN-7°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は遺存の良好な東壁側で17cm程度である。床面は全体に軟弱である。主柱穴や壁溝等は確認されていない。

カマドは北壁中央に設けられているが，遺存状態は悪い。わずかに袖部の砂質粘土の一部や，焼土が残存していた。カマド内からは支脚が出土している。

遺物は，覆土中からわずかに土師器杯，須恵器甕などが出土している。



第79図　ＳＢ-002・ＳＢ-003及び出土遺物

ＳＢ-005，ＳＫ-231（第80図，図版９・41）

調査区の西端，Ａ２グリッドに位置する小鍛冶遺構である。円墳SD-004の周溝上に構築され，SD-009に上面を削平されている。北西コーナー付近が壊されており，遺存状態は良好ではない。

平面形態は長方形で，規模は3.82m×3.02mを測る。主軸方位はN-1°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は8cm～10cmを測る。床面は凹凸があり，中央部が南北に踏み固められている。壁溝(幅10cm～14cm，深さ3cm～5cm)は遺存している範囲では，炉の部分を除いて全周する。主柱穴は確認できなかったが，南壁際中央から出入り口施設に伴うピットを検出した。

鍛冶炉は北壁中央に設けられている。遺構の内側に向いていた炉を壊し，新たに外側に開く炉を構築している。炉壁は砂質粘土でつくられ，炉底は青紫色に変色していた。炉の全面の浅い落ち込みは古い炉に伴うもので，焼土や炭化粒を含んでいた。

SK-231は鍛冶炉に伴い設けられ，周辺にはスラグが集中していた。規模は，0.88m×1.16m，深さ57cmである。覆土は，スラグを多量に含む黒褐色土を主体に，焼土を含む褐色土が混入している。

遺物は，覆土中から須恵器杯・甕，土師器甕，砥石などが出土している。11の鞴羽口は，スラグ集中範囲からの出土である。12・13は砥石で，凝灰岩製である。12は最大長8.8cm，最大幅3.0cm，最大厚1.6cm，重量68.4ｇを測る。13は小型品で，最大長3.6cm，最大幅2.0cm，最大厚1.9cm，重量14.83ｇを測る。

ＳＢ-007（第81図，図版９・41）

調査区の中央やや北西側，Ｂ１グリッドに位置する。SB-008・077，SD-014や土坑と重複し，南半を大きく削平され遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，壁長は3.40mと推定される。主軸方位はN-10°-Ｅである。遺存している範囲の観察では，壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は8cm～14cmである。床面は凹凸は激しく，全体に軟弱である。壁溝(幅20cm，深さ5cm～8cm)は遺存している範囲では，カマド部分を除いて全周する。主柱穴は４本検出されたが，P4は土坑に壊されている。

カマドは北壁中央に設けられ，壁を40cm掘り込んでいる。遺存状態は悪く，掘方を確認できる程度で，袖部なども遺存していなかった。

出土遺物は少なく，床面やカマド内から土師器杯・足高高台付椀などが出土している。

ＳＢ-008（第81図，図版９・41）

調査区の中央やや北西側，Ｂ２グリッドに位置する。SB-007・077や土坑と重複し，西側を削平され全体に遺存状態は悪い。

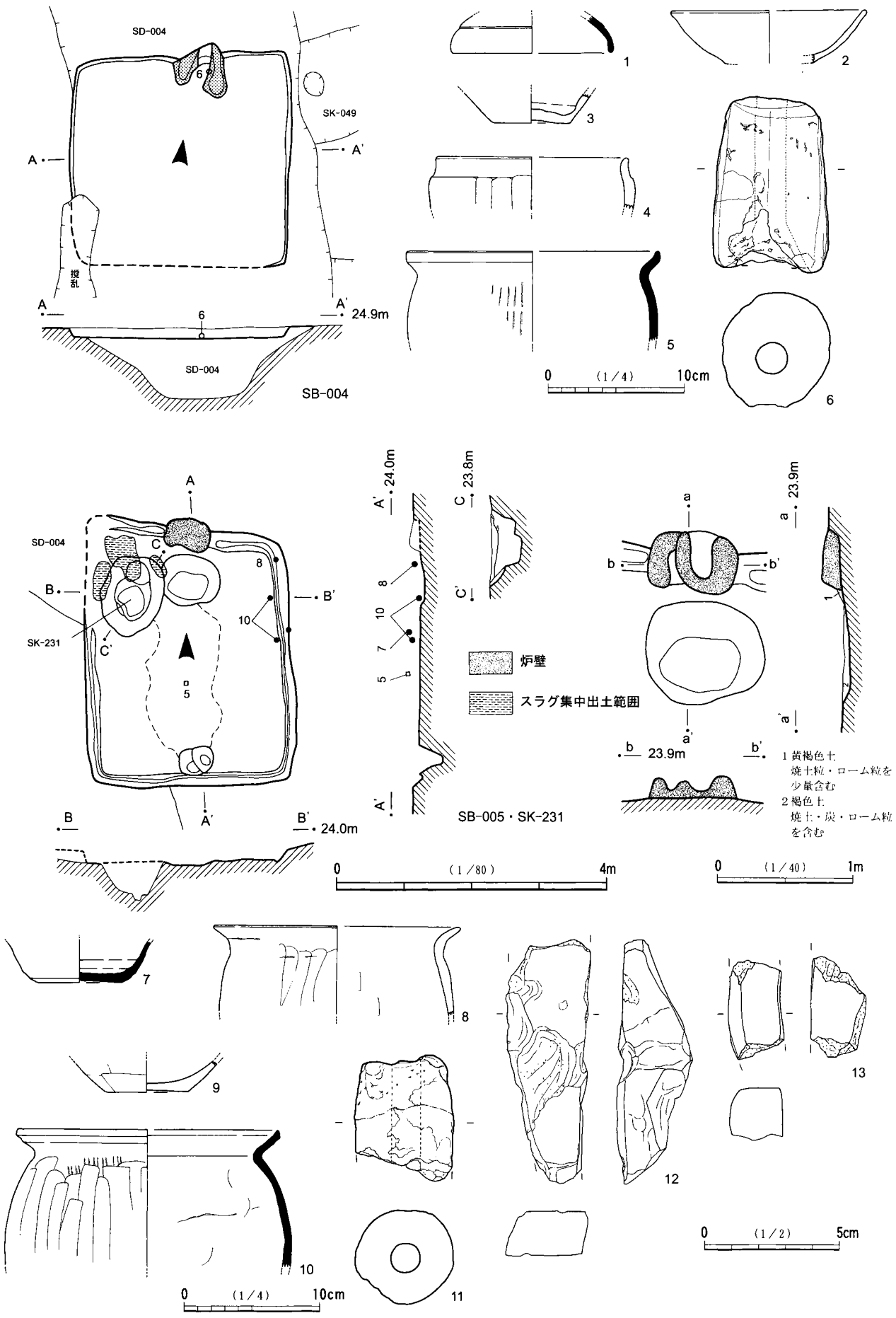
平面形態は方形で，規模は推定で3.04m×2.70mである。主軸方位はN-35°-Ｅである。壁は遺存している部分では緩やかに掘り込まれ，壁高は24cm前後である。床面は全体に軟弱で，凹凸がある。壁溝(幅14cm～20cm，深さ3cm)は，遺存している範囲では東壁の一部とカマド部分を除いて巡っている。柱穴等は確認されていない。覆土は黒色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられているが，全体に大きく削平されており，掘方が確認できた程度である。

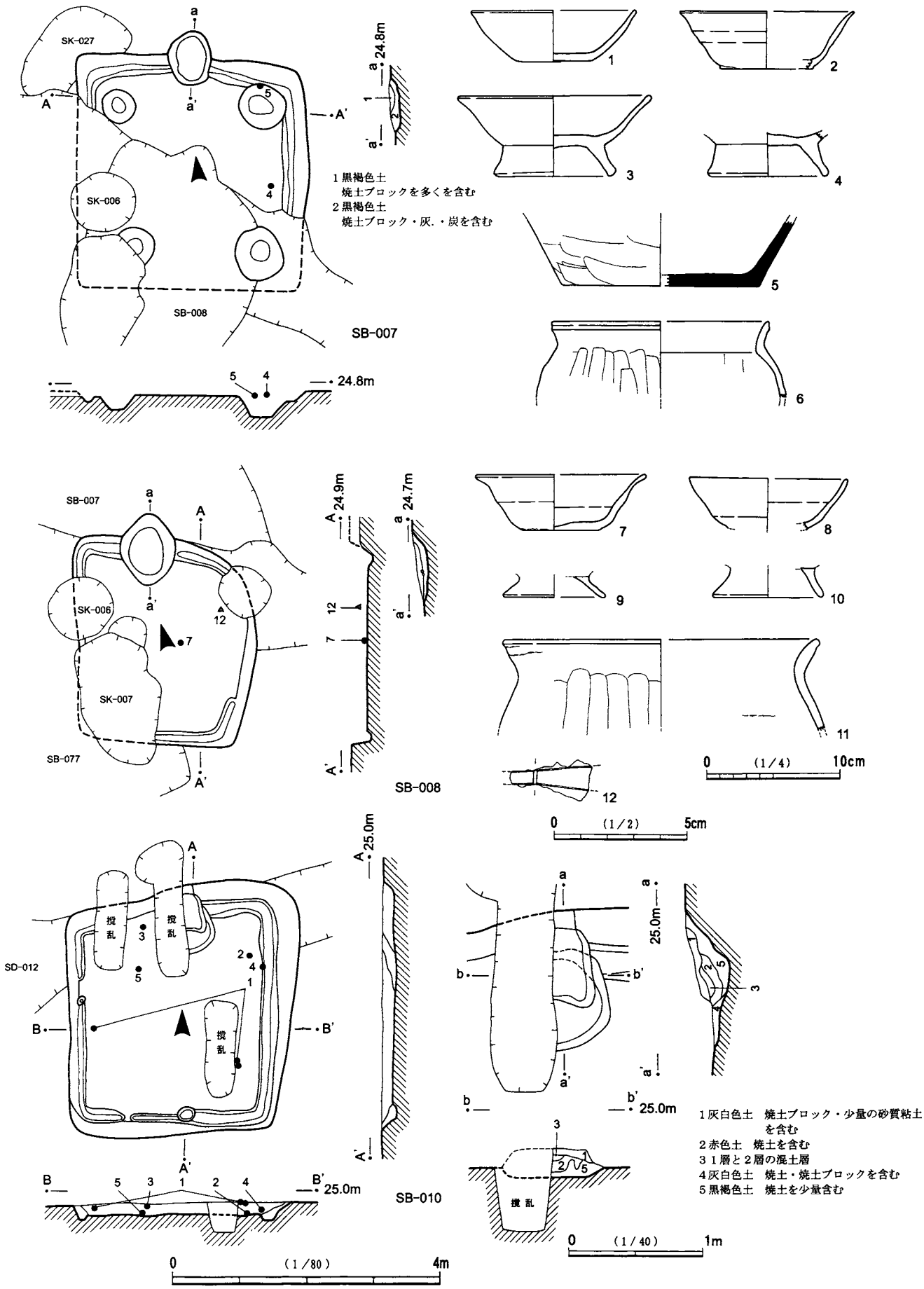
出土遺物は少なく，土師器杯などや刀子が床面からわずかに出土している。12は刀子の茎の部分である。現存長3.1cm，幅0.9cm，厚さ0.15cmを測る。

ＳＢ-010（第81・82図，図版９・41）

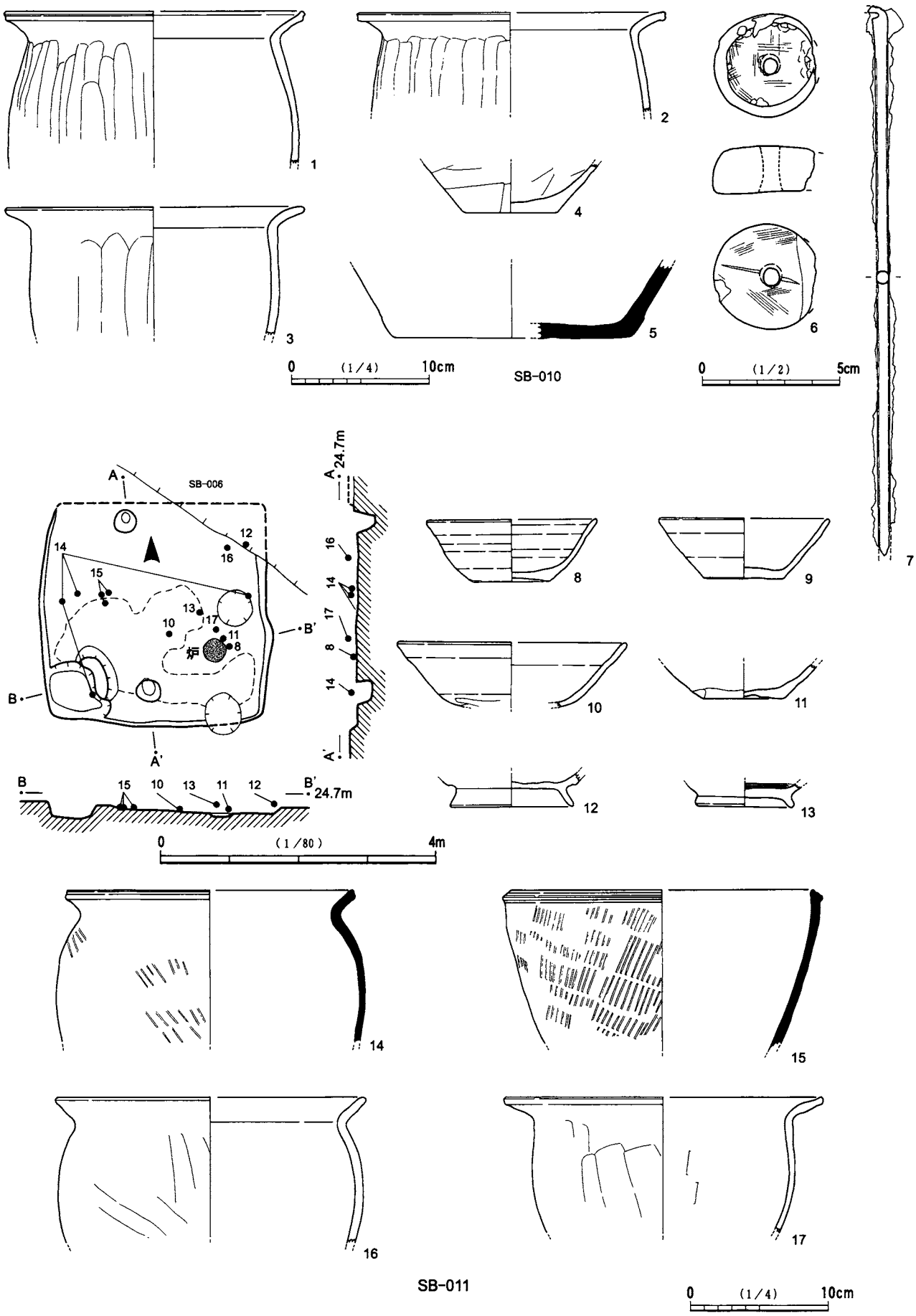
調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。SD-012と重複し，３か所に攪乱を受けており遺存状態は



第80図　ＳＢ-004・ＳＢ-005及び出土遺物



第81図　ＳＢ-007・ＳＢ-008及び出土遺物，ＳＢ-010



第82図　ＳＢ-010出土遺物，ＳＢ-011及び出土遺物

良好ではない。

平面形態は長方形で，規模は3.78m×3.34mを測る。主軸方位はN-1°-Wである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は20cm前後である。床面は凹凸があり，中央部に踏み固めた面が広がる。壁溝(幅15cm～26cm，深さ4cm～8cm)は，カマド部分を除いて途切れながら巡る。柱穴等は確認されていない。覆土は黒色土が主体で，黒褐色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられていたが，大きく攪乱を受けており，煙道部から火床にかけての部分が遺存していた。火床は12cmほど掘り窪められ，焼土が堆積していた。

遺物は床面や覆土中から，土師器甕や石製紡錘車，鉄製品などが出土している。６は蛇紋岩製の紡錘車で，一部欠損している。径は上面3.0cm・下面3.8cm，厚さ1.75cm，孔径0.75cmを測る。７は鉄製紡錘車の軸である。上端の一部と下部を欠損する。現存長20.1cm，断面は楕円形で径0.4cmを測る。

ＳＢ-011（第82図，図版９・41）

調査区の北西側，Ｂ１グリッドに位置する。SB-006と重複し，北側はすでに消失している。上面も全体に削平されており，遺存状態は悪い。

平面形態は方形で，規模は現存で3.10m×3.28mを測る。主軸方位はN-2°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は7cm～13cmを測る。床面はやや凹凸があり，南半がよく踏み固められている。主柱穴，壁溝は確認されていないが，出入り口施設に伴うピットを南壁側で検出した。南西コーナーには浅い貯蔵穴(径70cm，深さ8cm)が付設され，周囲は土手状の高まりが巡る。

カマドは不明であるが，南東側の床に炉(径35cm，深さ5cm)が設けられている。

遺物の出土は比較的多い。特に炉の周辺の床面から，土師器杯・甕，須恵器甕などが出土している。

ＳＢ-016（第83図，図版９・41・42）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。土坑に一部削平されているが，遺存状態は良好である。

平面形態は隅丸方形で，規模は3.40m×3.54mを測る。特に北東コーナーは丸味が強くなっている。主軸方位はN-14°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は18cm～27cmを測る。南側がやや低くなっている。床面はやや凹凸があり，中央部が硬化している。壁溝(幅20cm，深さ5cm～9cm)は，南壁の一部とカマドの部分を除き巡っている。柱穴等は確認されていない。覆土は黒色土が主体である。

カマドは北壁中央に設けられていたが，遺存状態は悪く右袖部がわずかに遺存しているにすぎない。確認できた火床は9cmほど掘り窪まれている。

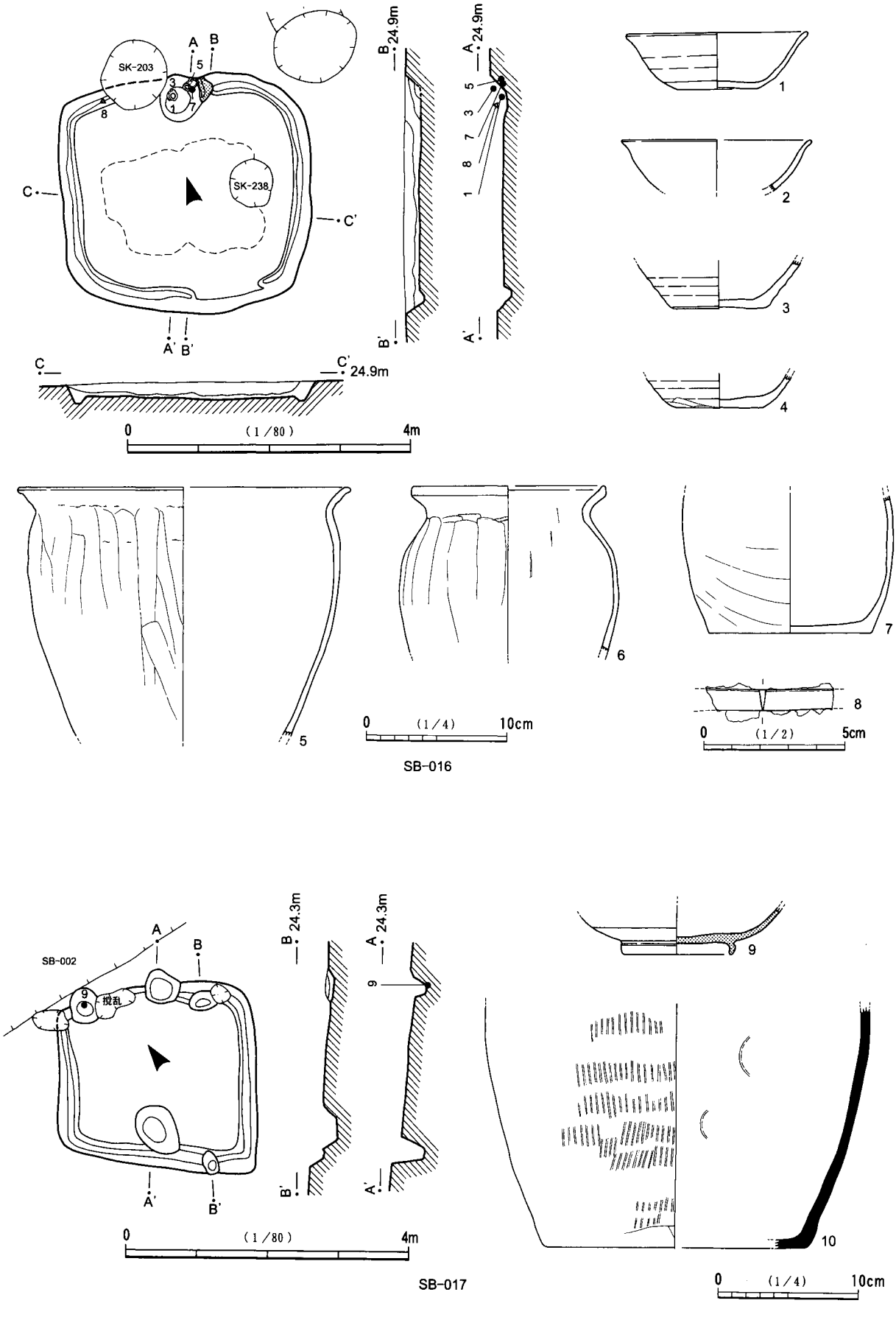
出土遺物は少ないが，カマド内から１・３・５・７が出土している。８は刀子身部の一部である。現存長4.53cm・幅0.76cm・厚さ0.2cmを測る。

ＳＢ-017（第83図，図版９・42）

調査区の北西端，Ｂ１グリッドに位置する。緩斜面に位置し，北側が次第に低くなっている。一部攪乱を受け遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は2.60m×2.80mを測る。主軸方位はN-36°-Eである。壁は，比較的遺存の良い南壁側では緩やかに掘り込まれ，壁高は20cmを測る。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。壁溝(幅12cm～20cm，深さ5cm)は，カマド部分を除いて全周する。柱穴は，北壁と南壁のそれぞれ東側の壁溝内に２本検出した。南壁際の土坑は，貯蔵穴の可能性もあるが，判然としない。

カマドは北壁中央に設けられていたが，遺存状態は悪く袖部も残存していない。火床は皿状に浅く掘り



第83図　ＳＢ-016・ＳＢ-017及び出土遺物

窪められている。

遺物は少なく，覆土中から土器片がわずかに出土している。９の灰釉陶器椀は，北西コーナー付近のピットから出土している。

ＳＢ-019（第84図，図版９・42）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。上面を全体に削平され，特に東壁側では著しい。また，南北に農道が走り，カマドの上面を一部削平しているが，遺存状態は比較的良好である。

平面形態は長方形で，規模は4.68m×5.18mを測る。主軸方位はN-62°-Wである。壁は，遺存の良好な西壁側では緩やかに掘り込まれ，壁高は2cm～20cmで東側が次第に低くなっている。床面はやや凹凸があり，中央部に硬化面が広がる。壁溝(幅12cm～20cm，深さ5cm)は，南東壁の一部とカマド部分を除いて全周する。主柱穴４本と出入り口施設に伴うピットを検出した。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む褐色土が主体である。

カマドは北西壁中央に設けられ，壁を32cmほど掘り込んでいる。遺存状態はあまり良好ではなく，天井部はすでに崩落し，袖部の砂質粘土がわずかに残っていた。火床は皿状に6cm掘り込まれている。

遺物は，床面や覆土中から須恵器杯や土師器甕，鎌などが出土している。４は土玉である。５の鎌は，刃部が彎曲し先端部を欠損する。現存長18.45cm・幅2.45cm・厚さ0.25cm，基端部に高さ0.85cmの折り返しをもつ。

ＳＢ-020（第84図，図版９・42）

調査区の中央北側，Ｃ１グリッドに位置する。古墳時代の住居跡であるSB-021の覆土中に掘り込まれ，SD-016に一部削平されており，形態等は判然としない。

平面形態は方形になると考えられ，規模は推定で2.9m×3.5mである。主軸方位はN-25°-Eと想定される。わずかに遺存している西壁の一部では，緩やかに掘り込まれており，壁高は12cm程度である。床面は全体に軟弱である。柱穴，壁溝等は確認されていない。

カマドは北壁中央に設けられていたが，遺存状態は悪く，袖部の砂質粘土や焼土が残存していた。

出土遺物は比較的多く，カマド周辺や南東床面から土師器杯・甕，灰釉陶器などが出土している。14は支脚である。

ＳＢ-026（第85図，図版10・42）

調査区の中央やや北側，Ｂ１グリッドに位置する。SB-027と重複し，大半はその覆土中に構築されている。東西方向に走るSD-024に東壁と西壁の一部を削平され，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形で，規模は3.90m×3.70mを測る。主軸方位はN-12°-Eである。掘り込みが浅いため壁の遺存も悪く，壁高は5cm～11cm程度である。床面はほぼ平坦で全体に軟弱である。壁溝(幅15cm，深さ3cm)は，南壁側に巡っている。柱穴等は確認されていない。

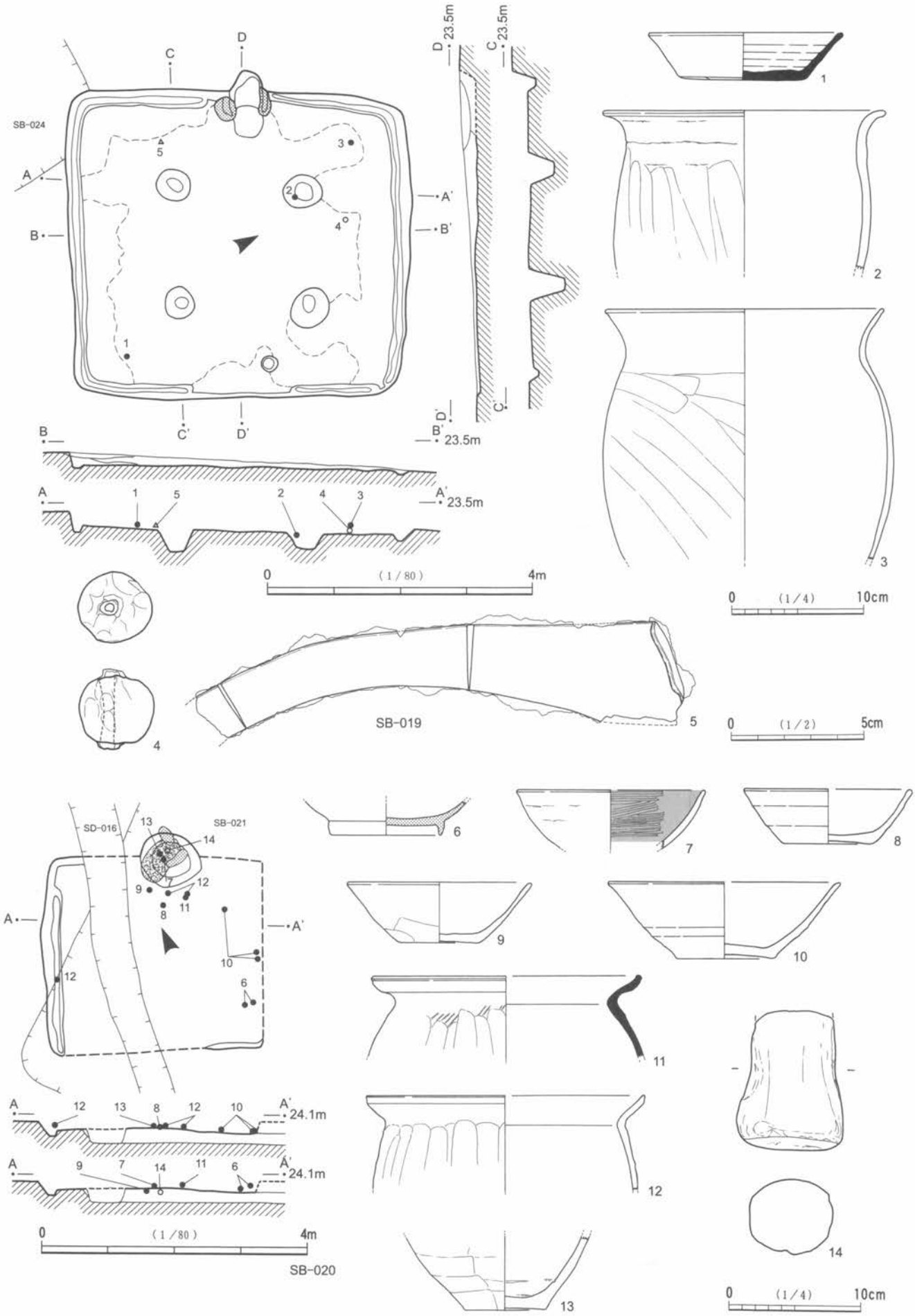
カマドは北壁中央に設けられていたが，すでに削平されており，砂質粘土や焼土の残存を確認したにすぎない。

遺物は，カマド周辺の床面から土師器杯・甕，甑などが出土した。10は支脚である。

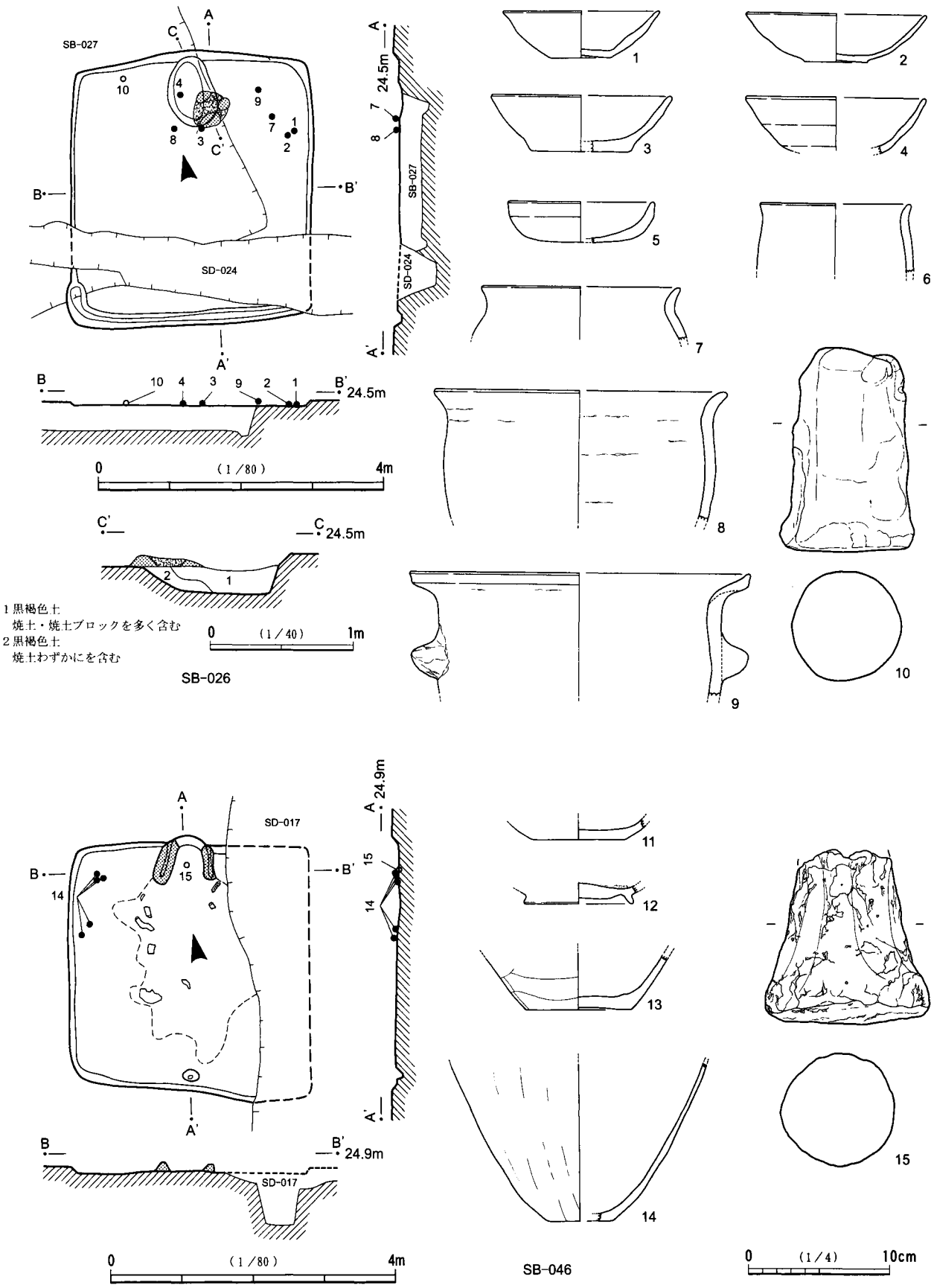
ＳＢ-046（第85図，図版10）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。SD-017に東側1/3を削平されている。

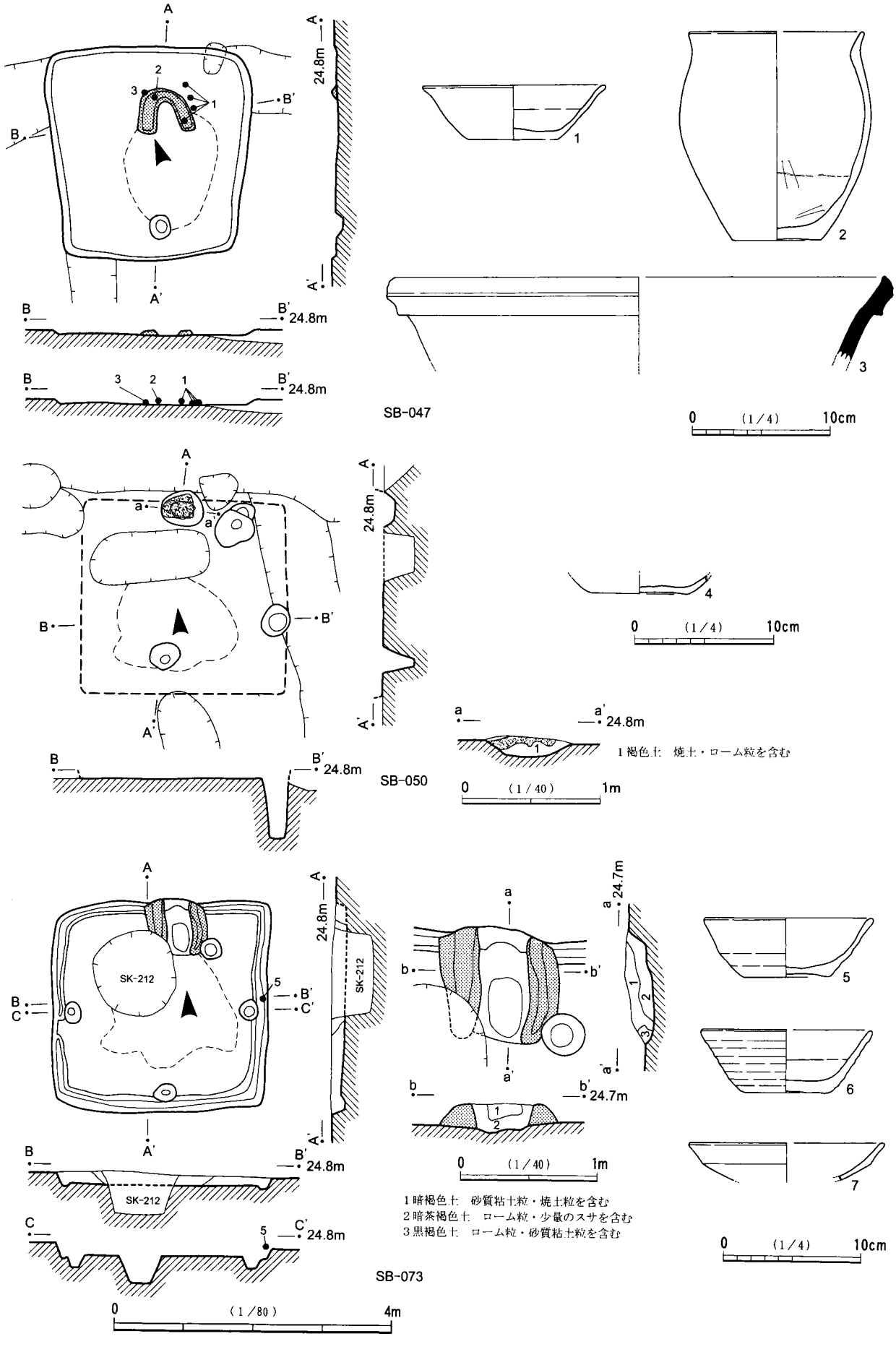
平面形態は方形で，規模は現存で3.46m×2.30mを測る。主軸方位はN-13°-Eである。掘り込みは浅



第84図　ＳＢ-019・ＳＢ-020及び出土遺物



第85図　ＳＢ-026・ＳＢ-046及び出土遺物



第86図　ＳＢ-047・ＳＢ-050・ＳＢ-073及び出土遺物

く，壁高は10cm程度である。床面は凹凸があるが，中央部がよく踏み固められている。柱穴，壁溝は確認されていないが，出入り口施設に伴うピットを検出した。

カマドは北壁中央に設けられている。遺存状態は悪く，袖部の砂質粘土が残存していた。

出土遺物は少なく，床面から土師器杯・甕などがわずかに出土している。15は支脚である。

ＳＢ-047（第86図，図版10・42）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。SB-046の北側２ｍに位置し，北壁側でSD-012と重複する。全体に上面を削平されており，遺存状態は良好ではない。

平面形態は，北壁2.8mに対し，南壁は2.4mと短く，不整長方形となる。規模は3.16m×2.86mを測る。主軸方位はN-20°-Eである。壁の掘り込みは浅く，比較的遺存の良い南西側でも壁高は10cm程度である。床面は凹凸があり，中央部にやや硬化している面を検出した。柱穴，壁溝は確認されていないが，出入り口施設に伴うピットを検出した。

カマドは住居内に設けられている。中央やや北よりの床面に砂質粘土で袖部を構築しているが，カマド前面に砂質粘土が散布しており遺存状態は悪い。

遺物は，カマド周辺から土師器杯・甕，須恵器甕などがわずかに出土している。

ＳＢ-050（第86図）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。全体に大きく削平されており，遺存状態は悪い。床面の一部やカマド火床の痕跡などから，住居跡と判断した。

平面形態は方形になると考えられ，規模は2.8m×3.0mと推定される。主軸方位は不明である。壁，柱穴，壁溝は確認できなかったが，床面の硬化面の一部や出入り口施設に伴うピットを検出した。

カマドは北壁中央に設けられていたが，すでに削平されており，火床に残存していた焼土などからその位置を確認した。火床は15cm掘り窪められており，焼土・焼土ブロックが堆積していた。

遺物はほとんどないが，４はカマド内から出土した。

ＳＢ-073（第86図，図版10・42）

調査区の中央やや西側，Ｂ２グリッドに位置する。SK-212に床面とカマドの一部を削平されているが，遺存状態は比較的良好である。

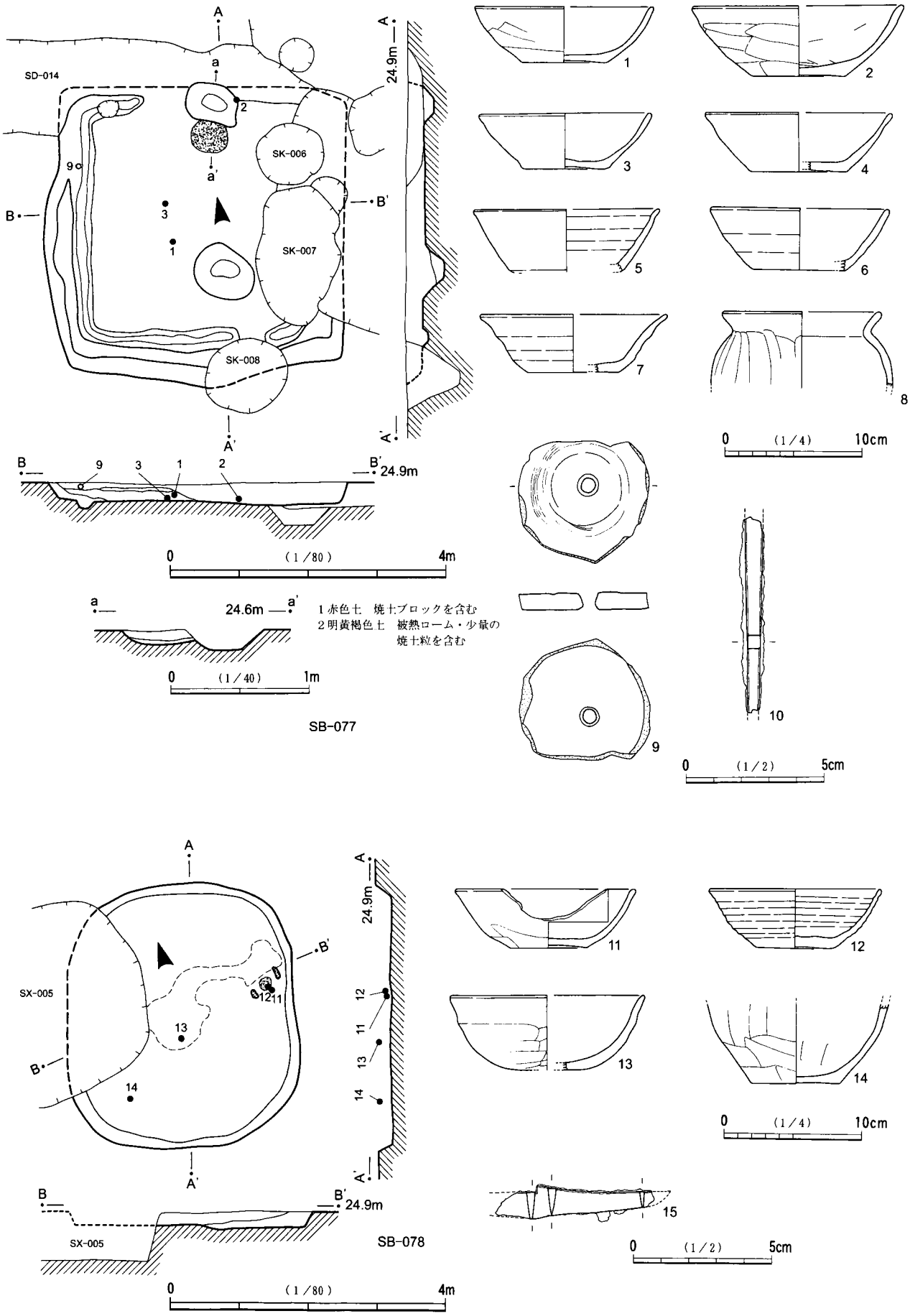
平面形態は方形で，規模は3.04m×3.14mを測る。主軸方位はN-3°-Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は北東コーナー付近が5cm前後と低くなっているが，そのほかの壁では14cm前後となる。床面はやや凹凸があり，カマド前面から中央にかけて硬化面が広がる。壁溝(幅15cm，深さ2cm～4cm)は，西壁の一部とカマド部分を除いて全周する。東西の壁際中央のピットは，相対した位置にあり形状等も類似していることなどから柱穴と考えられる。出入り口施設に伴うピットは壁溝にかかって掘り込まれている。覆土は黒色土を主体に，ローム粒やローム・ブロックを含んだ黒褐色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられ，壁への掘り込みは浅く，煙道部の立ち上がりも緩やかである。SK-212に袖部の一部を削平されているが，構築材であるスサも検出され，遺存状態は良好である。火床は皿状に6cm掘り窪まれ，焼土がわずかに堆積していた。

出土遺物は少なく，覆土中やカマド内から出土している。図示した土器は覆土から出土した。

ＳＢ-077（第87図，図版10・42）

調査区の中央やや北西側，Ｂ２グリッドに位置する。発掘調査時は遺存状態が悪いため，性格不明な遺



第87図　ＳＢ-077・ＳＢ-078及び出土遺物

構とされたが，精査の結果，住居跡と判断した。SB-007・008，SD-014や土坑と重複し，東側が大きく削平されている。

平面形態は方形になると考えられ，規模は4.4m×4.2mと推定される。主軸方位はN-17°-Eである。壁は西壁から南壁にかけて遺存しているが，状態が悪く本来の掘方等は不明である。壁高は23cm程遺存している。床面はかなり凹凸があり，硬化面は確認できなかった。壁溝(幅20cm～28cm，深さ5cm～8cm)は，西壁から南壁の一部にかけて巡っている。主柱穴と考えられるピットは検出されていない。覆土は粘土粒を含む黒色土を主体に，ローム・ブロックやローム粒を含む黒褐色土が混在する。

カマドは北壁中央に設けられていたが，すでに削平され火床が残存していた程度である。火床は北側に攪乱を受けていたが，皿状に10cm掘り窪まれよく被熱している。

遺物の出土は少なく，土師器杯・甕や紡錘車，鉄製品などが，覆土中や床面から出土している。1～3は床面や床面直上から，9・10は覆土中から，それぞれ出土した。9は土師器杯の底部を加工した紡錘車であろう。回転糸切り痕が残る。10は棒状の鉄製品で，鉄鏃の茎部の一部であろう。現存長7.0cm，断面は方形(0.5cm×0.5cm)である。

ＳＢ-078（第87図，図版10・42）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。SX-005に西側1/3を削平されている。

平面形態は隅丸方形で，規模は推定で3.8m×3.4mである。主軸方位はN-17°-Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，壁高は20cmを測る。床面はやや凹凸があり，中央部に帯状に硬化面が残っていた。柱穴，壁溝等は確認されていない。覆土はローム・ブロックを含む黒色土が堆積していた。

カマドは，東壁際中央の床面に設けられていた。砂質粘土が7cm～10cmの高さで袖部のように東西に付設され，その間の床面は火床のように焼土が堆積し被熱していた。袖部の間は40cmである。簡便な施設が想定できる。ここからは，11・12が出土した。

遺物は少なく，この他には覆土中から土師器甕や刀子が出土している。15は刀子の一部である。棟関が明瞭に残る。現存長5.8cm，身部長4.3cm・幅1.1cm・厚さ0.35cm，茎長1.5cm・幅1.0cm・厚さ0.4cmを測る。

第２節　掘立柱建物跡

ＳＢ-053（第88図，図版10）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。SB-013・015号住居跡を一部壊して重複する。遺存状態は悪く，南側桁行と東側梁間のみを確認できた。

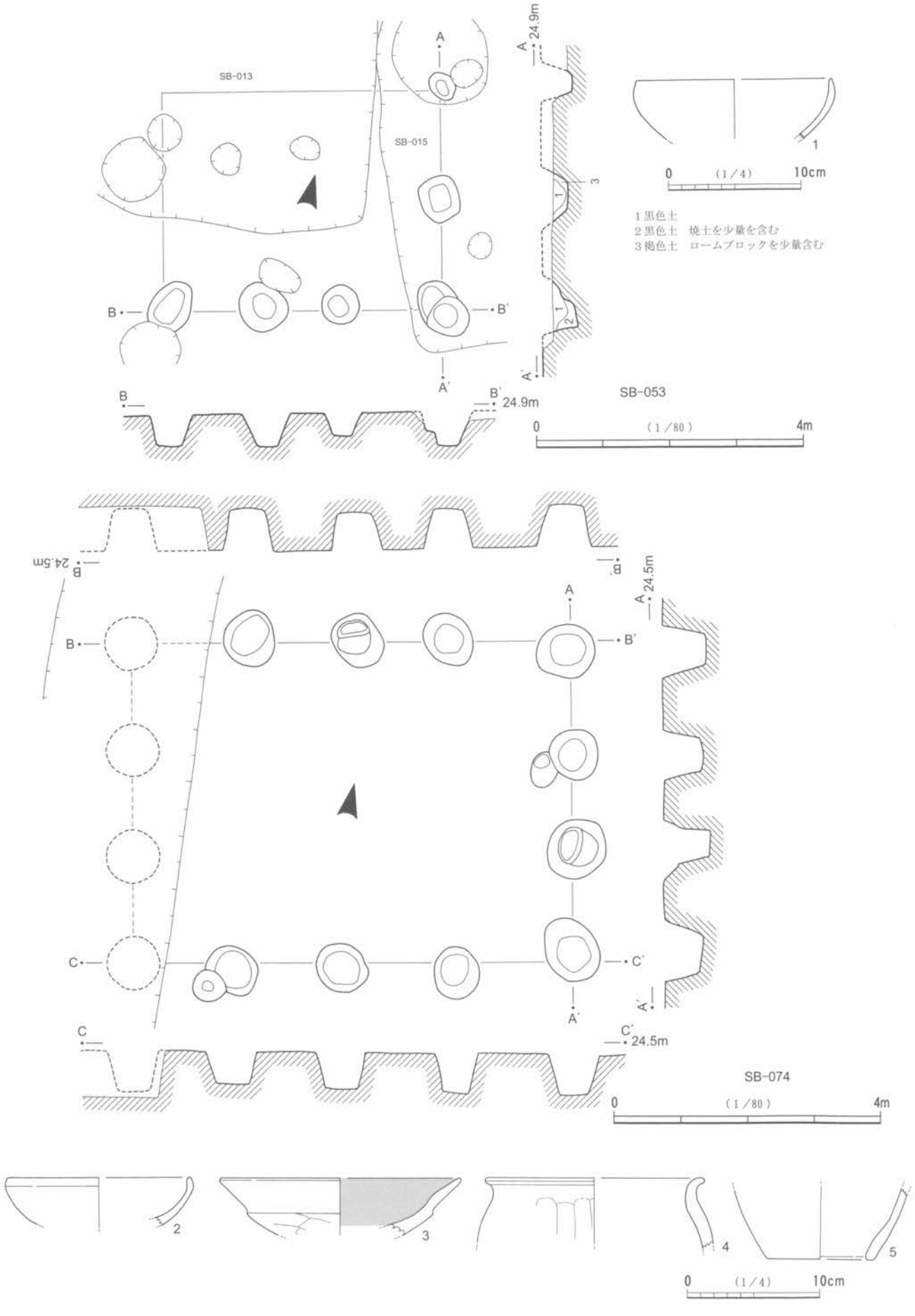
東西３間(4.1m)，南北２間(3.4m)の東西棟の側柱建物である。桁行方位はN-74°-Eである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.15m～1.55m，梁間(南北)方向では1.7mを測る。柱穴は径45cm～75cmの楕円形で，深さは25cm～51cmである。柱のあたり痕跡は判然としない。掘方埋土は，黒色土やローム粒を含んだ黒褐色土である。

遺物は，覆土中から１の土師器杯などが出土した。

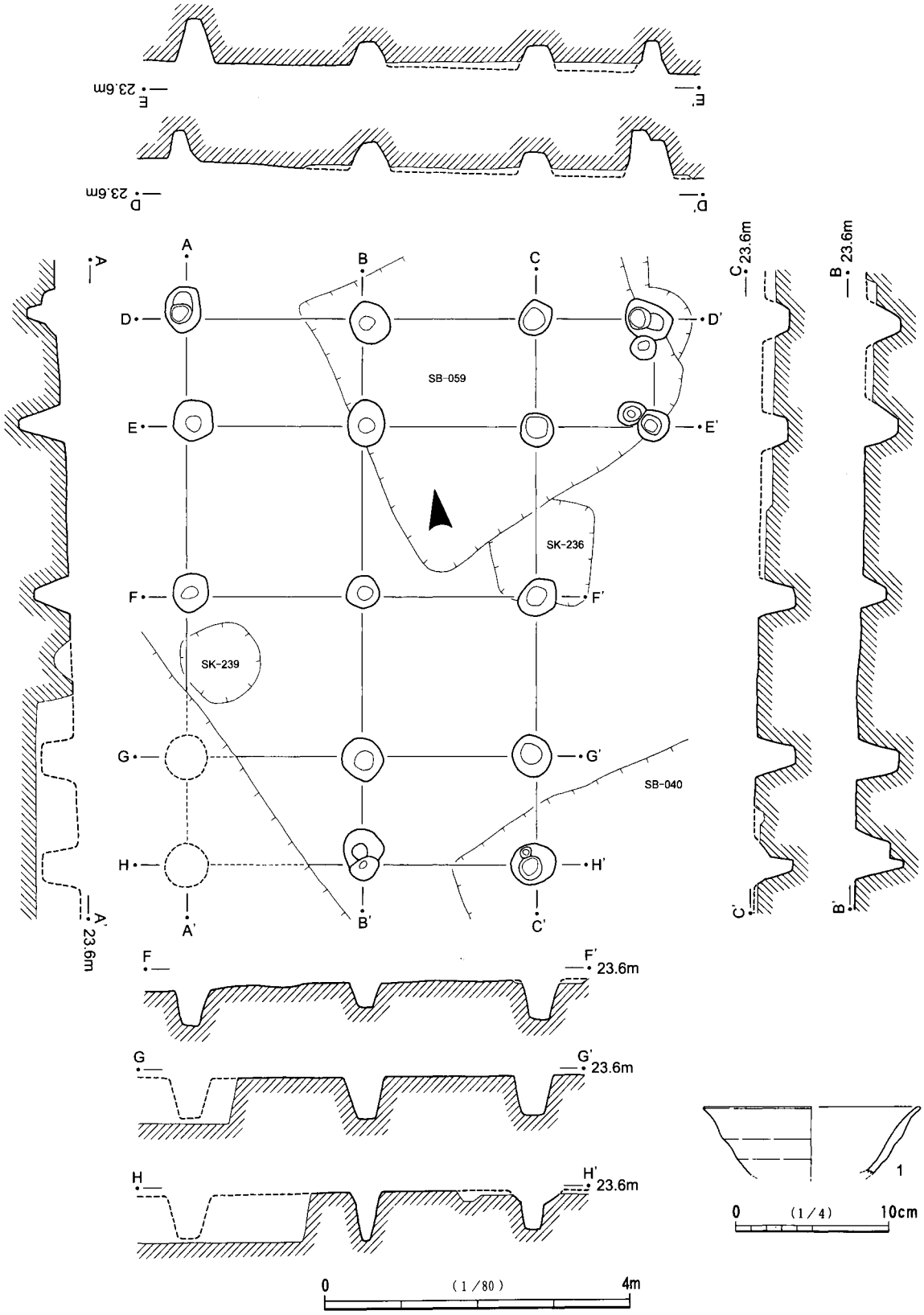
ＳＢ-074（第88図，図版10）

調査区の中央，Ｃ２グリッドに位置する。西側梁間方向の柱穴を，現代の溝で削平されている。桁行方向の柱穴は溝の西側では検出されていないため，隅柱は溝内に位置していたと考えられる。

南北３間(4.6m)，推定で東西４間(6.6m)の東西棟の側柱建物である。桁行方位はN-76°-Eである。



第88図　ＳＢ-053・ＳＢ-074及び出土遺物



第89図　ＳＢ-070及び出土遺物

柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.45m～1.85m，梁間(南北)方向では1.4m～1.6mを測る。柱穴は径70cm～100cmの楕円形で，径75cm×80cm前後のものが多い。深さは51cm～80cmであるが，平均的には62cm前後となる。全体的には一定の規模で掘り込まれている。柱のあたり痕跡は判然としない。

遺物は，覆土中から土師器杯・高杯などが出土した。

ＳＢ-070（第89図）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。SB-040・059と重複し，南西の隅柱を現代の溝に削平されており，検出できなかった。

東西２間(4.55m)，南北２間(4.35m)の東西棟の総柱建物で，南面と北面にそれぞれ庇をもつ。北面の庇は，東側にさらに張り出す構造をとる。桁行方位はN-81°-Wである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で2.25m～2.30m，梁間(南北)方向では2.15m～2.20mを測る。柱穴は径45cm～55cmの円形で，ほぼ一定の規模である。深さは，中心の柱穴は32cmと浅いが，他は45cm～60cmである。北面の庇は1.35mを１間分とし，桁行柱穴列にほぼ対向するように配置されている。東側へは１間(1.55m)張り出している。南面の庇は，南西隅柱が検出できなかったが，1.4mを１間分としてやはり桁行方向に対向して配置されている。

覆土中から土器片が出土した。

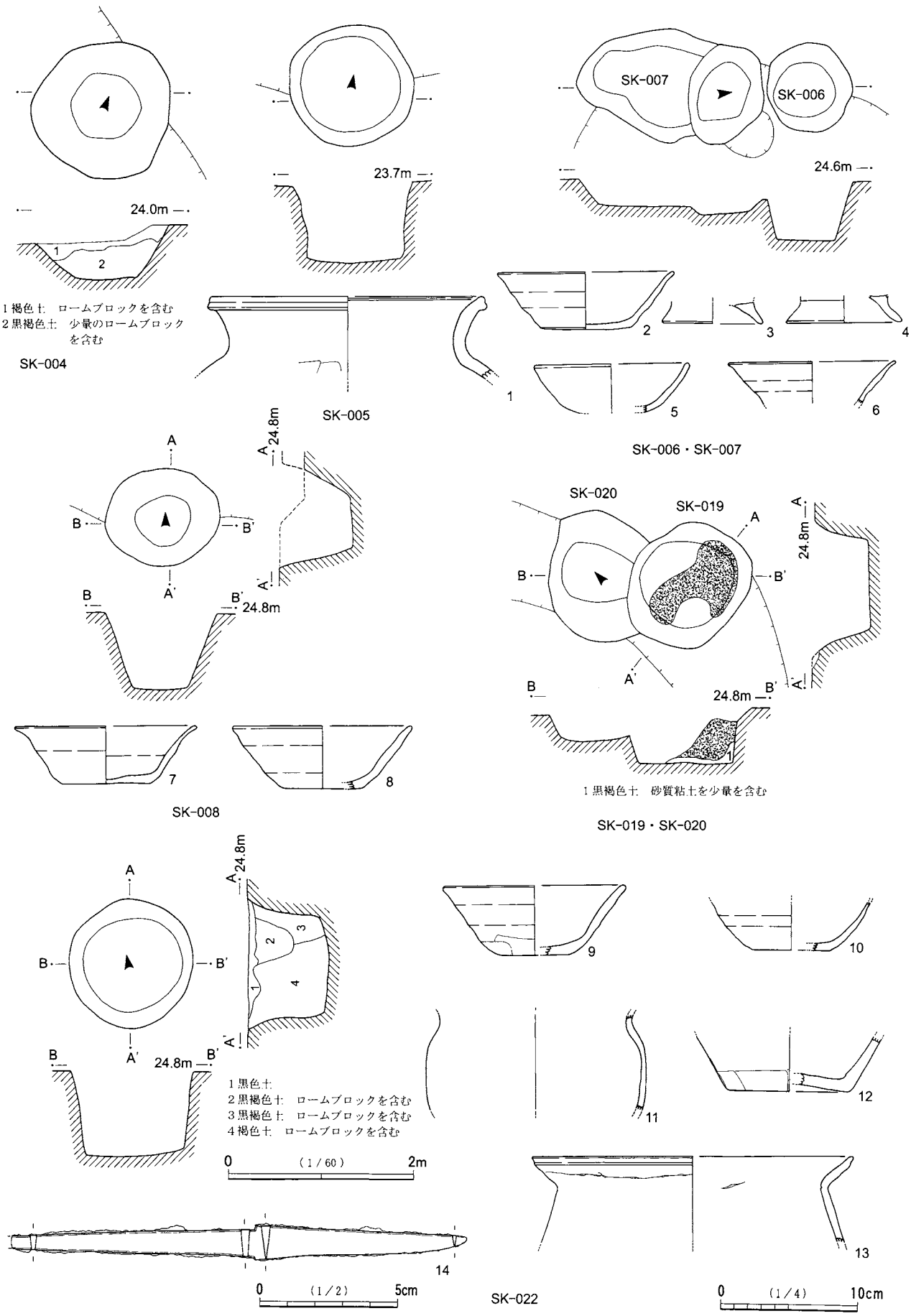
第３節　土　坑

調査区内からは多数の土坑が検出されているが，出土遺物から奈良・平安時代に属すると判断できる土坑を主に掲載した(第90図～第95図，第２表，図版11・43)。遺物が出土していない土坑についても，形態・規模等から同時期と考えられるものは図示してある。これらは，出土遺物や形態等から土坑墓と考えられるものが多い。住居跡と同様に中央西側に多く分布しており，なかには住居跡と重複している土坑もある。形態は主に円形・楕円形で，わずかに不整方形もある。円形土坑の規模は，0.7m～1.57m，深さは11cm～86cmと差はあるが，平均的には1.1m×1.2mの規模のものが多い。形態が整い，ほぼ垂直に掘り込まれ底面が平坦なものは，覆土が埋め戻された堆積状況を示しており，土坑墓の可能性が高い。SK-022・051・073・113などが代表的な土坑である。覆土中からは土師器杯・甕などや刀子が出土し，出土量は比較的多い。楕円形土坑の規模は，0.94m～2.02m，深さは22cm～86cmである。平均的な規模は1.1m×1.4mである。円形に近い形態のものは，やはり円形土坑と同様に土坑墓と考えられる。楕円形土坑のなかには，スラグ(SK-082)やカマド構築材の砂質粘土が廃棄されている土坑(SK-020)のほか，２個の墨書土器(SK-086)や灰釉陶器(SK-206)が出土した土坑もある。主な土坑の規模等は第２表にまとめた。

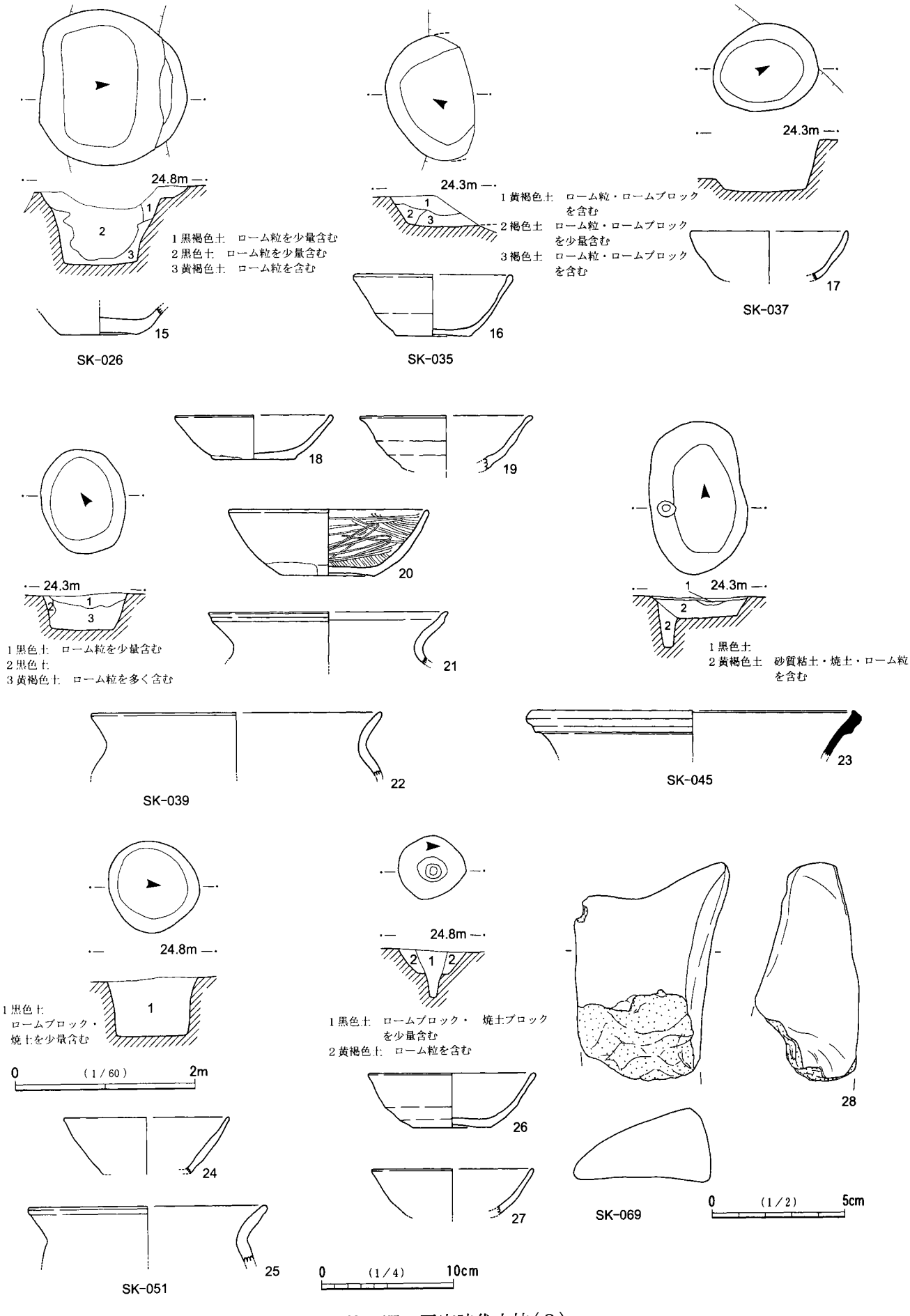
鉄製品が出土した土坑はSK-022・110の２基である。第91図14は刀子で，茎の端部を欠損する。両関が明瞭に残る。現存長16.65cm，身部長7.75cm・幅1.3cm・厚さ0.35cm，茎部長8.9cm・幅1.0cm・厚さ0.3cmを測る。SK-022出土。第94図61・62は刀子の身部である。61は現存長5.2cm・幅0.9cm・厚さ0.25cm，62は現存長5.0cm・幅0.8cm・厚さ0.25cmをそれぞれ測る。

砥石はSK-069・088から出土している。第92図28は凝灰岩製で，最大長7.0cm，最大幅5.3cm，最大厚2.7cm，重量167.57ｇを測る。第94図52は，最大長5.4cm，最大幅6.5cm，最大厚3.9cm，重量191.75ｇを測る。砂岩製である。

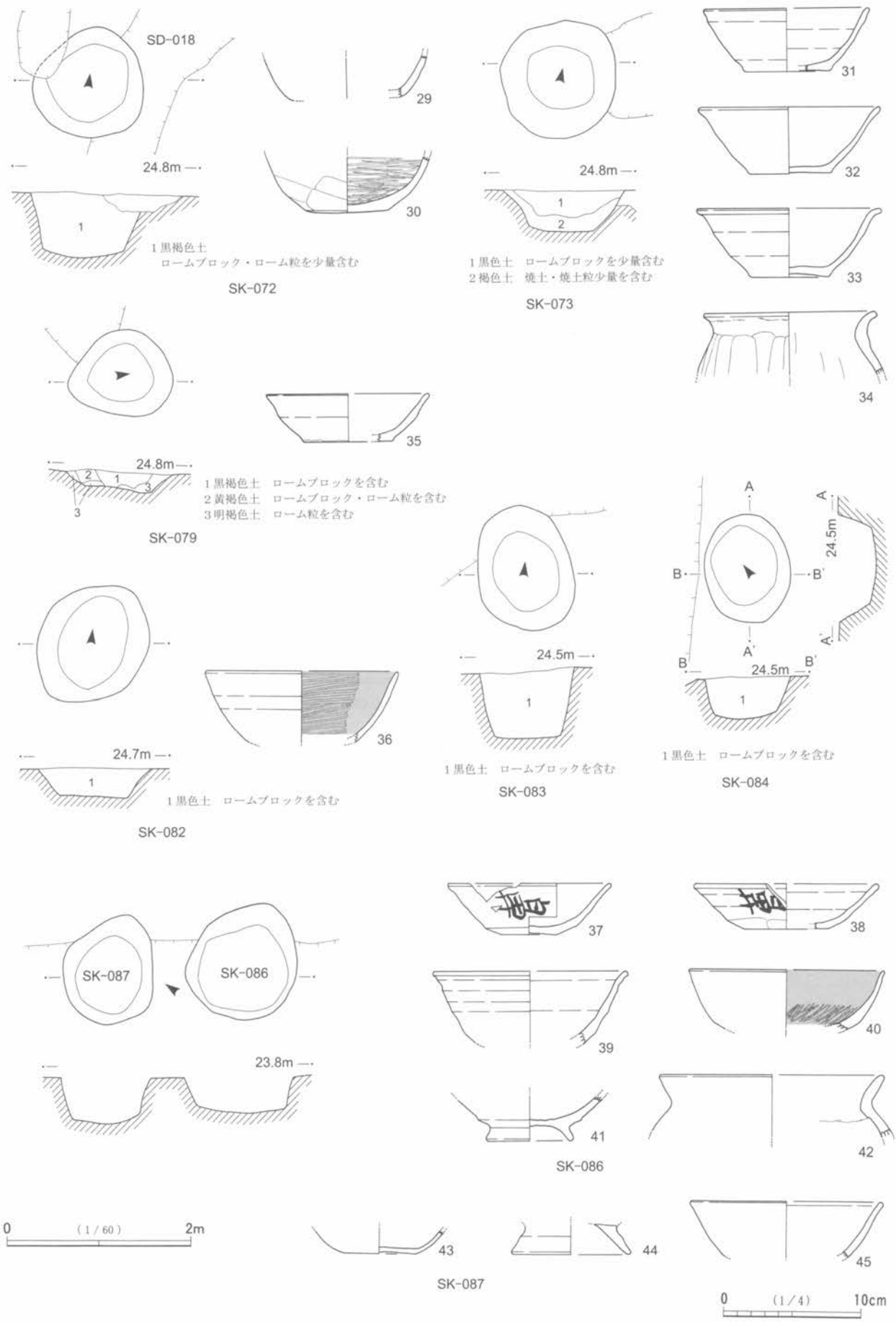
第90図　平安時代土坑分布図



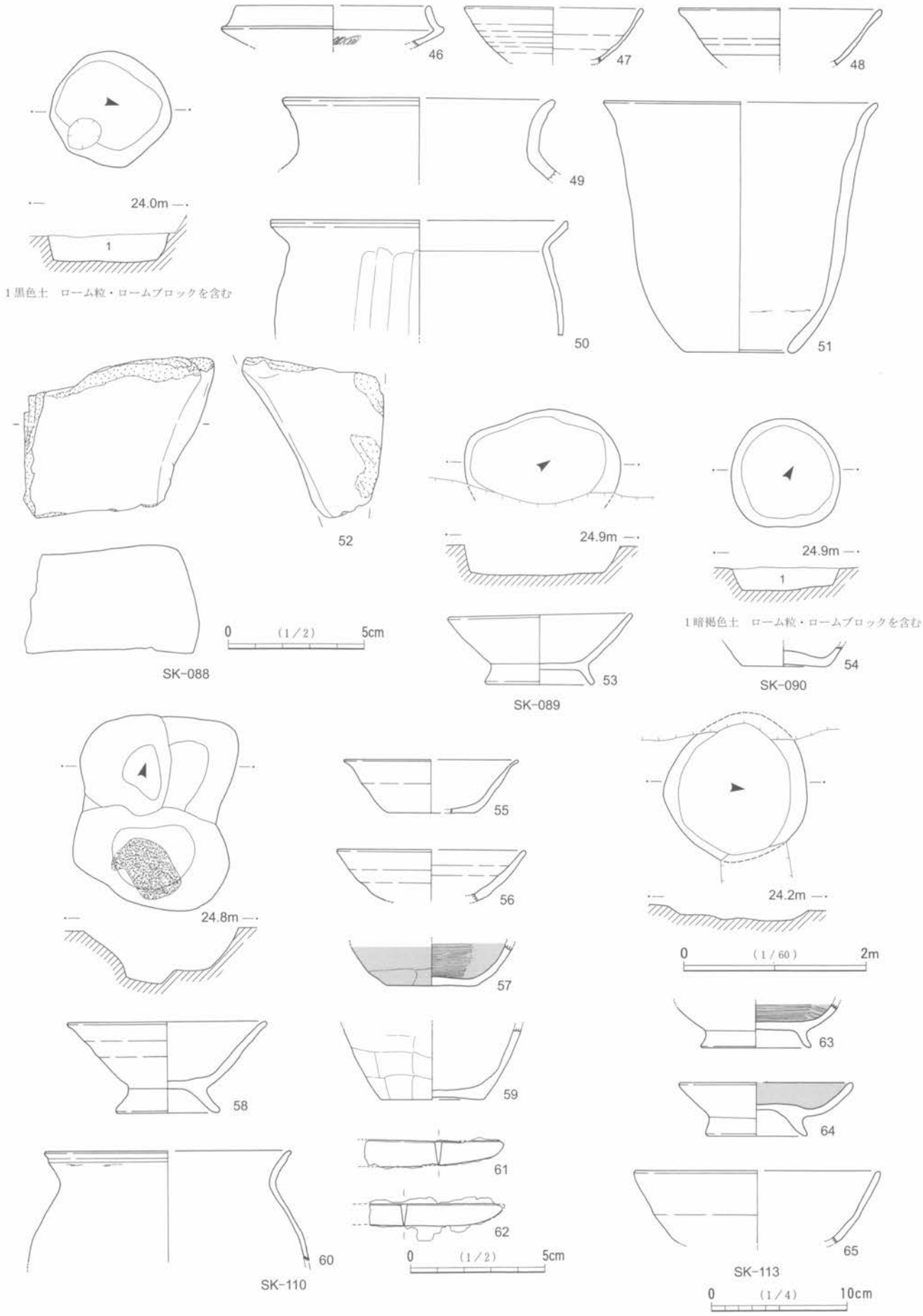
第91図　平安時代土坑(1)



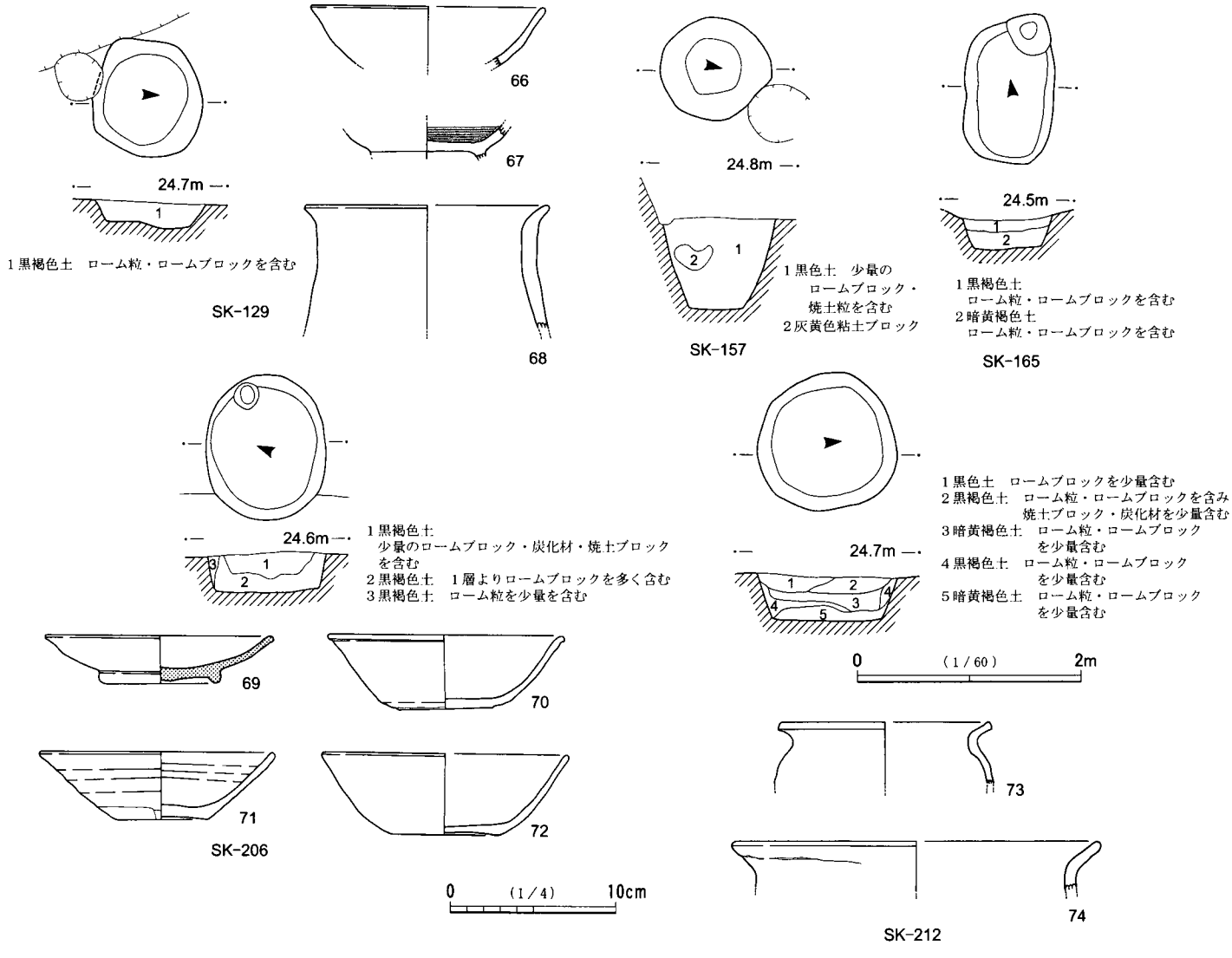
第92図　平安時代土坑(2)



第93図　平安時代土坑(3)



第94図　平安時代土坑(4)



第95図　平安時代土坑(5)

第２表　平安時代土坑一覧

［ ］は現存値

遺構番号	挿図番号	グリッド	平面形態	規　　模(m)	深さ(m)	備　　考
SK-004	第91図	A2－29	円　形	1.52 × 1.42	0.60	
SK-005	第91図	A2－46	円　形	1.36 × 1.36	0.85	
SK-006	第91図	B2－59	円　形	0.96 × 0.90	0.64	
SK-007	第91図	B2－59	楕円形	2.02 × 1.24	0.36	
SK-008	第91図	B2－02	楕円形	1.24 × 1.08	0.80	
SK-019	第91図	B2－03	楕円形	1.40 × 1.22	0.61	砂質粘土を廃棄
SK-020	第91図	B2－03	楕円形	1.40 × [0.9]	0.36	
SK-022	第91図	B2－10	円　形	1.40 × 1.34	0.86	刀子
SK-026	第92図	B2－10	楕円形	1.74 × 1.62	0.86	
SK-035	第92図	B1－25	楕円形	1.40 × [1.0]	0.37	
SK-037	第92図	A1－39	楕円形	1.18 × 1.00	0.57	
SK-039	第92図	A1－24	楕円形	1.15 × 0.95	0.40	
SK-045	第92図	A1－39	楕円形	1.70 × 1.06	0.24	
SK-051	第92図	B1－51	円　形	1.02 × 1.00	0.65	
SK-069	第92図	B1－60	円　形	0.76 × 0.70	0.50	ピット，砥石
SK-072	第93図	B1－61	円　形	1.22 × 1.16	0.72	
SK-073	第93図	B1－61	円　形	1.30 × 1.22	0.45	
SK-079	第93図	B2－04	楕円形	1.10 × 0.94	0.22	
SK-082	第93図	B1－60	楕円形	1.44 × 1.16	0.32	スラグを廃棄
SK-083	第93図	A1－32	楕円形	1.34 × 1.02	0.71	
SK-084	第93図	A1－32	楕円形	1.16 × 0.94	0.45	
SK-086	第93図	C1－49	楕円形	1.28 × 1.17	0.40	墨書土器
SK-087	第93図	C1－49	楕円形	1.22 × 1.04	0.50	
SK-088	第94図	B1－64	不整方形	1.26 × 1.22	0.30	砥石
SK-089	第94図	B2－03	楕円形	1.74 × [0.5]	0.32	
SK-090	第94図	B2－02	円　形	1.26 × 1.22	0.26	
SK-110	第94図	B2－12	不整方形	2.07 × 1.46	0.59	刀子
SK-113	第94図	B1－38	円　形	1.57 × 1.52	0.11	
SK-129	第95図	B2－14	不整方形	1.06 × 1.00	0.22	
SK-157	第95図	B2－26	円　形	1.02 × 0.94	0.83	
SK-165	第95図	B3－14	楕円形	1.26 × 0.81	0.25	
SK-206	第95図	C2－25	楕円形	1.30 × 1.07	0.31	灰釉陶器
SK-212	第95図	B2－23	円　形	1.26 × 1.21	0.40	SB－073と重複

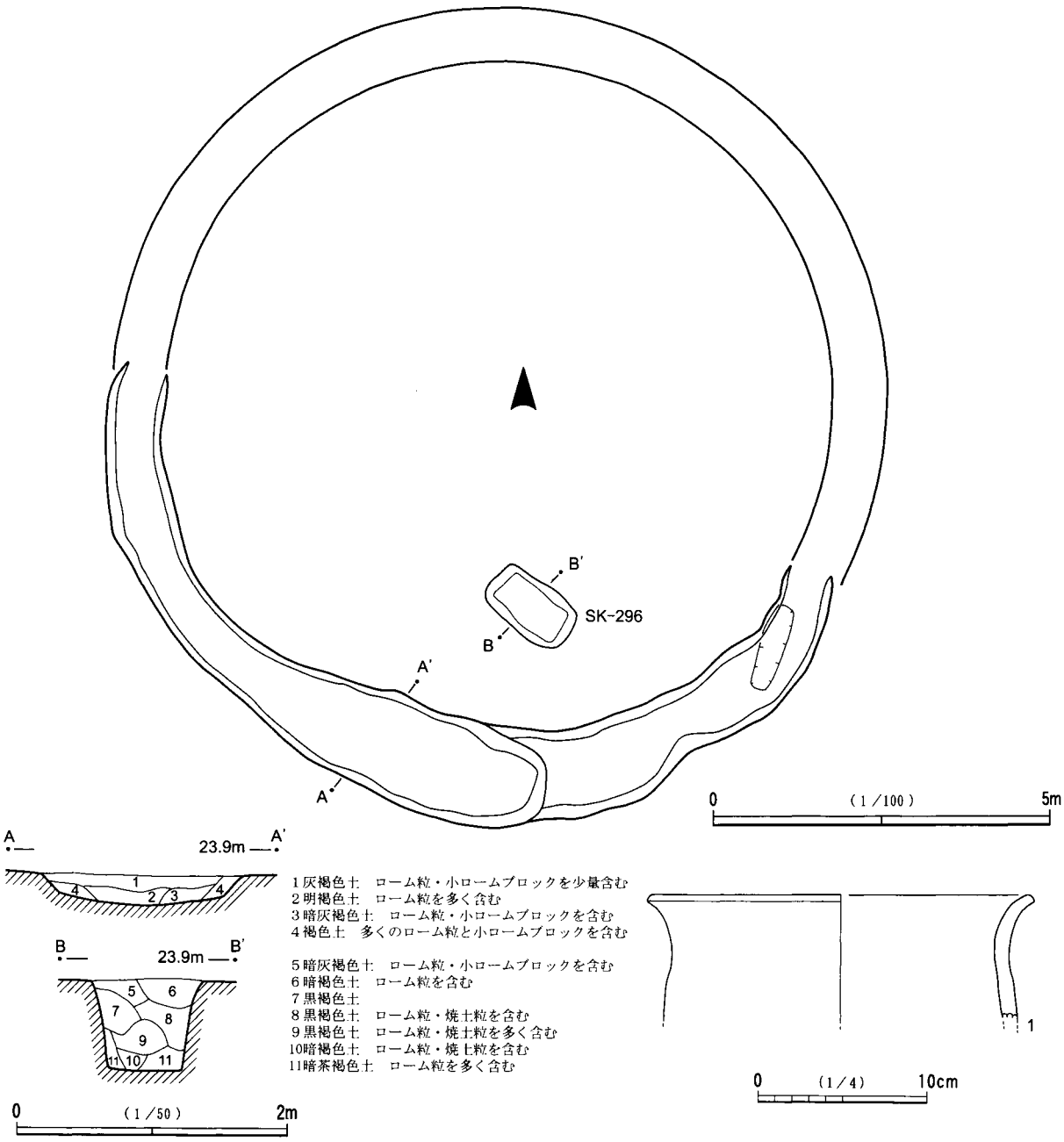
第４節　円形周溝

ＳＸ-013，ＳＫ-296（第96図）

調査区の東側，Ｄ１グリッドに位置する。斜面にかかるため，北半3/5を消失し遺存状態は悪い。

平面形態は円形と考えられ，外縁径12.0m・内縁径10.0mと推定される。周溝は，西側でさらに深く掘り込まれ，8cm程度の段差をもつ。周溝の上端は0.8m～1.55m，溝底幅0.6m～1.3m，深さは東側で8cm～13cm，西側では9cm～18cmと全体に浅い。周溝は緩やかに掘り込まれ，溝底面はほぼ平坦である。遺物は，周溝内から１などの土師器片が出土している。

SK-296は周溝の内側に位置する，平面形態は方形(0.84m×1.42m，深さ0.67m)の土坑である。ほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。SD-013の埋葬施設の可能性もあるが，出土遺物もないため土坑として掲載した。

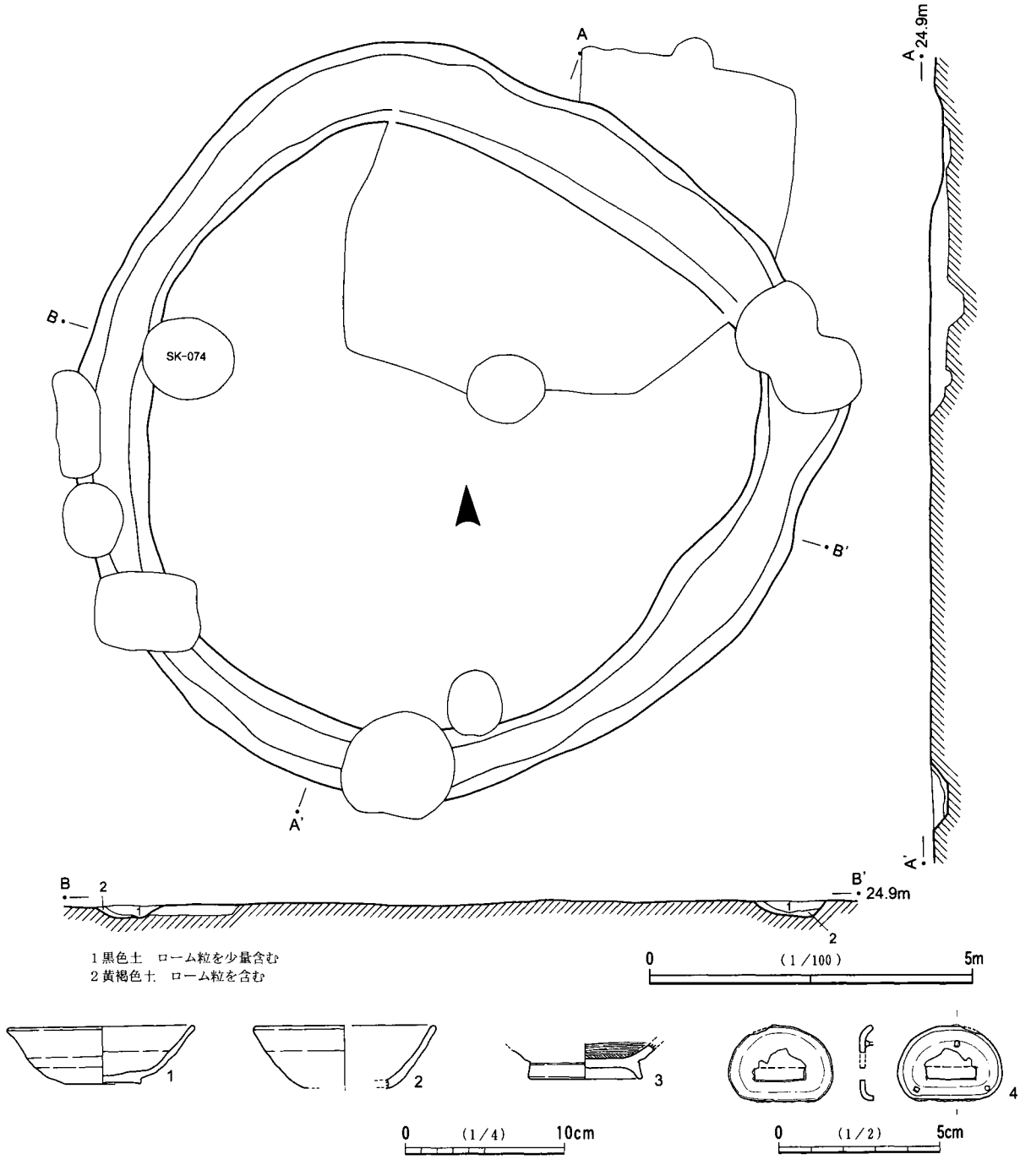


第96図　ＳＸ-013及び出土遺物，ＳＫ-296

ＳＤ-014（第97図，図版49）

調査区の中央西側，Ｂ２グリッドに位置する。上面を削平され，住居跡や多くの土坑と重複しているため，遺存状態は悪い。

平面形態は東側が膨らむ楕円形で，外縁径23.2m～24.2m・内縁径18.8m～19.1mを測る。周溝の上端は0.77m～1.42m，溝底幅0.32m～0.94m，深さは11cm～26cmと全体に浅い。周溝の掘り込みは緩やかで，溝底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒をわずかに含む黒色土を主体に，黄褐色土が混在する。遺物は周溝内から，土師器杯などのほか，銙帯金具の丸鞆が出土している。４は丸鞆の表金具で，透孔の上部が欠損している。内面の三隅に鋲足を鋳出している。横幅3.25cm，縦幅2.33cm，厚さ0.2cmを測る。透孔は推定で1.55cm×0.38cmである。



第97図　ＳＤ-014及び出土遺物

第５章　中　　世

第１節　概　要

中世遺構は大別すると，台地整形区画７か所，道路状遺構１条，溝状遺構35条，堀１条などである。台地整形区画内は，掘立柱建物跡，柵列，方形竪穴遺構，土坑，井戸，土坑墓，地下式坑，火葬施設などのほか，性格の不明な多数の土坑・ピットによって構成されている。

道路状遺構は，台地南東部から第１・第２台地整形区画に沿って台地中央部まで走り，第１区画の北西コーナー付近で判然としなくなる。

溝状遺構は，台地西側の整形区画が空白な区域や，縁辺部に近い区域に東西方向・南北方向に走っている。区画溝のほか，堀と同様に防御的な機能をもつものも含まれていると考えられる。

台地整形区画は，形状や分布状況から方形と弧状の区画に分けることができる。調査を行った方形区画(第１～第３)は台地南東に位置しているが，確認調査時にはさらに南に延びる区画と台地の南西部に広がる大きな区画の存在が確認されている。これらの区画は急斜面際に位置していたため，防災上の判断から調査前に削平したので詳細については不明であるが，南西部の区画は推定規模東西50m×南北30mと大きく，遺構の配置状況からみても中世遺構の中核をなす遺構であった可能性が高い。これらの方形区画は，台地南半に集中している傾向がみられる。台地の北側や西側とは道路や溝によって隔てられ，当該期には台地中央部と北側は空閑地に近い状況であったと考えられる。弧状の区画(第５～第７)は，台地北側と西側の縁辺部の３か所に単独で位置している。内部は方形区画とは異なり，掘立柱建物跡や井戸等の施設は見あたらず，土坑などが散漫に分布している程度である。

台地整形方形区画内からは，方形竪穴遺構，井戸，土坑，地下式坑，火葬施設のほか、多数のピットが検出されている。方形竪穴遺構の中でも正方形に近い大型のものは，特に第１整形区画の西側に集中して配置されている。土坑は平面形態や深さも様々で，粘土貼りの土坑もあり，性格は一定していない。形態から土坑墓と考えられるものもあるが，人骨や副葬品の出土はない。ここでは平面形態の類型ごとに掲載した。地下式坑は，整形区画の縁辺部に配置される傾向が強く，貯蔵穴や埋葬施設として利用されていた。なかには，馬を埋葬した地下式坑も検出されている。多数のピットは，掘立柱建物跡や柵列，植栽痕列を構成していたと考えられ，そのなかから想定される遺構を復原して掲載した。復原にあたっては，方位・配列関係，ピットの形態や規模等を考慮した。他にも多数のピットが存在しており，復原可能な遺構はあると考えられ，さらに検討の余地はある。

遺物は，貿易陶磁器，瀬戸･美濃，常滑，カワラケや鉄製品・石製品・銭貨などが，台地整形区画や溝状遺構，堀跡から出土している。時期的には，12世紀中頃から16世紀末までの陶磁器が出土しているが，主体となるのは13世紀前半から15世紀前半代である。出土遺物については，第５節で一括して説明する。

本遺跡は出土した中世陶磁器からみると，12世紀末頃から村落として経営が開始され，14世紀後半から15世紀前半に最も活動の活発な時期を迎える。その後，村落としては次第に衰退し，戦国時代が始まる15世紀後半からは，より防御的な弧状の区画や溝が台地際や整形区画を囲むように造成され，15世紀末までには村落は急速に消滅していったと考えられる。そして，周辺でしばしば戦闘が行われた16世紀代には，台地上に「普請半ばとも思える」(小高1995)堀が構築されるなど，一時的に使用されたようである。

第２節　道路状遺構

ＳＤ-36（第５・98・99図，図版12）

中世遺構群の中心である第１・第２整形区画の北側に位置する道路状遺構である。台地南東側の尾根付近から台地上を西北西方向に走るが，次第に浅くなり，第１整形区画の北西コーナー付近ではSD-025に一部削平され，SD-024と重複するなど，形態が判然としなくなる。東側の部分と第１整形区画の東端付近から西端に沿っての範囲では，一段掘り下げられ，底面には多数の不規則な形態のピットが配置されている。

台地の東端から北西方向へ22m直線的に延び，主軸方位はN-57°-Wである。SK-191付近で西方向にやや内彎しながら進み，主軸方位をN-77°-Wにとる。幅は，東端で4.96mを測るが，次第に幅を広げていき，東端から24mの地点(SK-191付近)では7.88mと最も広くなる。その後は狭くなり，東端から51mの地点では5.24mとなる。深さは15cm～72cmで，かなり緩やかに掘り込まれている。東側が最も浅いが，東端から29mの地点が深く，西方向に進むに従って25cm程度に浅くなる。

また，東側部分で整形区画側を一段溝状に掘り下げているが，第１整形区画と第２整形区画との境付近からはさらに一段掘り下げ，主軸方位をN-75°-Wにとっている。幅は，東端で2.68mを測るが次第に広がり，ピット群が集中する箇所では4.52mと最も広くなっている。西方向に進むに従い次第に狭くなり，西端では1.62mとなる。深さは23cm～85cmで，東端が最も深く，西側が浅くなっていく。この範囲は底面に形態の異なる多数のピットが不規則に掘り込まれているが，北側壁面の列は直線的に配列されているようにみえる。形態は不整形が多く不統一で，規模も径30cm～90cm，深さ10cm～119cmと不規則である。これらのピットの性格は判然としないが，植栽痕の可能性がある。一部ピットが集中する範囲では，深さ10cm～74cmのピットが連結している箇所もある。

出土遺物も多く，白磁碗，青磁碗・皿，鉄釉壺片，瀬戸･美濃の碗・皿，常滑甕・捏鉢のほか，カワラケや在地産の擂鉢，銭貨などが出土し，第１整形区画などの遺構との接合関係も多くみられる。

第３節　台地整形区画

本遺跡からは，地山をある一定の規模で掘削し段差を形成して区画を設ける，台地整形区画が７か所検出された。このうち，第４整形区画は全体に削平されているため段差が判然とせず，明確な整形区画は確認できなかったが，方形竪穴遺構や土坑・火葬施設などが検出されている範囲を整形区画と想定して掲載した。各整形区画内から検出された，掘立柱建物跡，柵列，方形竪穴遺構，土坑，井戸，地下式坑，火葬施設などのうち主な遺構の詳細については，各整形区画ごとに説明する。なお，土坑の中には土坑墓と思われる遺構も存在しているが，ここでは一括して土坑として扱っている。

１　第１整形区画と周辺（第98・99図，図版14・15）

調査区の中央から南東に大きく展開する整形区画で，本遺跡の中世遺構群の中心である。北側から西側にかけて道路状遺構SD-036や溝SD-025が取り囲むように巡り，区画を規制している。東側は第２整形区画が隣接し，南西側にも第３整形区画が位置している。確認調査の結果では，南側にも別の整形区画が存在していたことが確認されているが，前述したように調査前に削平している。

南側の一部を除いて明確な段差で区画され，遺存状態は良好である。南側は次第に掘り込みが浅くなり，特に南東側では段差が不明瞭な箇所もあるが，おおよその区画範囲は判断できる。

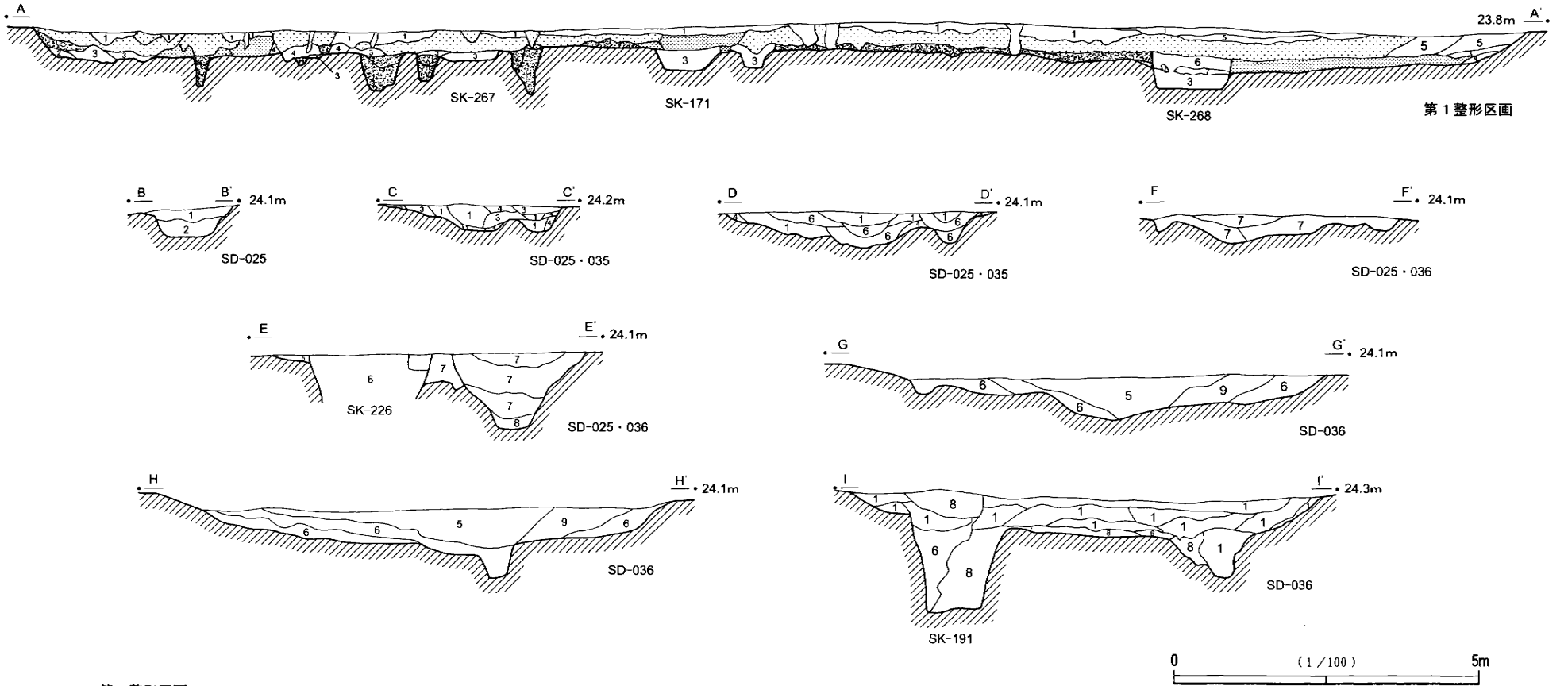
第98図　第１整形区画と周辺

平面形態は方形で，規模は東西45m，南北20m～25mである。面積は約1,040㎡を測る。段差は北側34cm～47cm，東側17cm～26cm，西側は5cm～22cmと南側が次第に浅くなっている。南側は54cmの段差がつく箇所もあるが，全体に浅く南東側の一部ではわずかな段差しか確認できなかった。

区画内全体では，溝状遺構５条，方形竪穴遺構７基，土坑50基，粘土貼り土坑２基，大型不整形竪穴遺構４基，井戸１基，地下式坑２基，火葬施設１基のほか，多数のピット群で構成されている。ピット群からは７棟の掘立柱建物跡，６条の柵列を復原した。区画は段差のラインや構成遺構の内容などから，方形竪穴遺構が集中する西部地区と，ピット群の集中や囲いのように柵列が廻り空閑地をもつ東部地区に大きく分けることができる。

西部地区では，西側の段差に沿ってピットが粗密に並んでいる。浅い溝状遺構SD-027に伴ってピットが配置されているが，ピットの規模や深さも多様性があり，直線的な配列にはならないこと，ピット間の間隔が一定ではないことなどから，柵列ではなく一部は植栽痕と考えられる。西南側の段差に沿ってもピット群が検出されたが，こちらは規模や深さ・間隔等がある程度一定であることから，柵列の可能性が高い。あるいは，門と塀のような施設の存在も考慮される。溝状遺構のうち，区画の南西端を東西方向に走るSD-030は配置・方向性や規模等から判断して，整形区画の外側に位置するSD-025・035とともに，整形区画の一部を囲うように設けられた可能性が高い。単なる区画溝ではなく防御的な機能をもった堀のような施設であることも考えられる。その設置時期は，他の遺構との重複関係から整形区画の最終期の段階に想定される。区画内を南北方向に走るSD-026は，SD-030に一部削平されていることから，それよりもやや新しい時期と思われる。方形竪穴遺構は，SK-122を除いて中央北側に集中的に配置され，多くはほかの土坑を削平して構築されている。SK-122がSD-026を削平していることや出土遺物から判断して，方形竪穴遺構は区画内では新しい時期に位置づけられる。大型のものが多く集中していることが特徴的である。土坑は北側と西側の段差に沿って配置されているものが多い。２基の地下式坑のうち，１基は北側の縁辺部に配置されているが，馬が埋葬されていたSK-175は区画内の南側に設けられている。この近くには火葬施設も配置されており，整形区画の廃絶後に墓域として利用されていたと考えられる。ピット群からは掘立柱建物跡や柵列を復原したが，方形竪穴遺構に削平されたピットの存在も予想され，なお検討の余地はある。

東部地区は，土坑やピット群が集中する北部から西部にかけての範囲・南側の空閑地・東側の柵列と大型不整形竪穴が配置されている範囲の３ブロックに大きくわけられる。北部から西部のピット群からは，５棟の掘立柱建物跡と１条の柵列を復原したが，こちらも検討の余地はある。特に南側の空閑地に接するピット群は，囲いのような柵列になる可能性もある。土坑もピット群と同様の範囲に分布し，特に北側の範囲に集中している。ここでは２基の粘土貼り土坑を検出したが，遺跡の規模に比べて検出数は少ない。南側の空閑地には，わずかな土坑とピットが配置されている。底面は凹凸が激しく，波板状になっている部分もある。この空閑地の利用方法は判然としないが，東側に位置する大型不整形竪穴のSX-024やSK-273も含めた範囲で考えると，広場的な空間と水溜め場などの施設が想定される。東側の柵列は，ピットの配列や規模等は一定ではないが，東西10m・南北17mの範囲を囲うようにピットが並び，一部は段差を形成して囲いのような施設が想定される。その範囲の北側には，２基の土坑とピット群が位置している。このピット群からは，土坑を取り込むように配置する１棟の掘立柱建物・SA-007を復原した。南側にはSX-024やSK-273のような大型不整形竪穴が設けられ，低い段差で区画されている。この区域の西側から南側にかけては，柵列のピットの間隔がやや粗くなり，段差で囲いの範囲を示している。特に西側ではピットが確



第１整形区画

- 暗灰褐色土　ローム粒・小ロームブロックを含む
- 茶褐色土　ローム粒を含む
- 暗褐色土　ローム粒を含む

1　灰褐色土　ローム粒を含む
2　ローム粒・ロームブロックを基調に暗褐色土粒を含む
3　褐色土　ローム粒・小ロームブロックを含む
4　明褐色土　ローム粒を含む
5　黒色土　ローム粒を多く含む
6　暗茶褐色土　ローム粒を少量含む
7　明灰色粘土ブロックを基調に褐色土粒を含む

SD-025、SD-035、SD-036

1　暗褐色土　ローム粒を含む
2　ローム粒・ロームブロックを基調に暗褐色土を含む
3　暗茶褐色土　ローム粒を含む
4　茶褐色土　ローム粒を多く含む
5　褐色土　ローム粒を含む
6　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
7　黒色土　ローム粒・ロームブロックを含む
8　黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
9　明黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む

第99図　第１整形区，画ＳＤ-025・035・036土層断面図

認されず，囲いが開いていることがわかる。遺構の性格については不明であるが，西側の空閑地との関連を考慮して，その性格を想定する必要があろう。

東部地区を南北に設定した土層断面図（第99図）から，まず暗褐色土や茶褐色土が堆積し，その上に厚く暗灰褐色土が堆積している状況を示している。いずれの層も，ローム粒やローム・ブロックを含んでいる。最上層には灰褐色土が部分的に厚く堆積している。

なお，区画の周辺に巡る溝SD-025・035や，離れて位置する竪穴遺構SB-063・072，地下式坑SK-191，井戸SK-226，大型不整形竪穴SX-017もここでまとめて報告する。

（1） 溝状遺構

ＳＤ-026（第98図）

区画の西側を直線的に南北方向に走り，南端は南側縁辺部に接する浅い溝である。SK-122とSD-030に一部削平され，数基のピットと重複する。全長21.4m，幅0.7m～1.3m，深さ10cm～57cmを測る。主軸方位はN-8°-Eである。北側に進むに従い次第に浅くなり，底面はほぼ平坦である。遺物は常滑甕片が出土している。

ＳＤ-027（第98図）

区画の西側縁辺部を，段差に沿って南北方向に走り，多くのピットが配置されている。全長16.9m，幅0.7m～1.3m，深さ13cm～35cmを測る。主軸方位はN-13°-Eである。底面は凹凸が激しい。

ＳＤ-030（第98図）

区画の南西側縁辺部を東西方向に走り，SK-256を一部削平している。西側は区画の南西端に，東側はSD-026に，それぞれ接している。全長8.5m，幅0.8m～1.1m，深さ80cm～85cmを測る。主軸方位はN-75°-Wである。長さは短いが，形態が整いしっかり掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。遺物は，瀬戸・美濃の灰釉四(三)耳壺片，常滑甕片，カワラケが出土している。

ＳＤ-031（第98図）

区画の南西側縁辺部を東西方向に走る浅い溝で，SD-030とは連続していない。SK-256の南側のピット列から連なるピットを伴う，区画のための溝であろう。全長7.1m，幅0.6m～1.5m，深さ2cm～7cmを測る。遺物は，常滑甕片・捏鉢片が出土している。

ＳＤ-042（第98図）

区画の西側の北寄りに位置する浅い溝である。SD-026とSD-027を連結するように東西方向に走り，両端がそれぞれの溝に接している。全長5.4m，幅0.5m～1.06m，深さ10cm～20cmを測る。

ＳＤ-025（第98・99図）

第１整形区画の周囲を直角に囲むように，区画の北西側から西側にかけて走る溝である。区画の北側縁辺部に位置する地下式坑SK-115の北側周辺から掘り込まれているようであるが，攪乱を受けているため判然としない。北側では，主軸方位を区画南西側縁辺部に位置するSD-030と同じくN-75°-Wにとり，現状で直線的に約20m(幅1.6m～2.2m，深さ81cm～107cm)走った後，南南西方向に約５m短く屈曲する。そこから浅い溝(幅0.9m～1.6m，深さ10cm～33cm)となり，第３整形区画の東端を区画するように34.5m南南西方向に走る。西側での主軸方位はN-15°-Eと，直角に曲がっている。

この溝は，SD-030と平行に，SD-035とは直交するように走っている。ともに第１整形区画を囲むように配置され，狭い幅で整然と掘り込まれており，堀や塀のような防御的な施設であると考えられる。

遺物は，青磁碗，鉄釉壺片，常滑などが出土している。

ＳＤ-035（第98・99図）

第１整形区画の西側縁辺部の2m～3m外側を，南南西方向に走る溝である。SD-025のすぐ東側に位置し，主軸方位はSD-025と同じくＮ-15°-Ｅである。南端で第３整形区画の一部を削平している。ほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。セクション図で判断すると，SD-025を一部削平している。全長22.1m，幅0.7m～1.0m，深さ41cm～54cmを測る。遺物は常滑甕片が出土している。

ＳＤ-032（第98図）

第１整形区画の西側，SD-025と直角に重複する溝である。主軸方位はＮ-79°-Wである。全長7.1m，幅1.2m～1.6m，深さ16cm～19cmを測る。緩やかに掘り込まれ，底面は凹凸がある。遺物は常滑甕片が出土している。

（２） 掘立柱建物跡

ＳＡ-001（第100図）

区画の北西コーナー付近で，縁辺部の近くに位置している。SD-026・046を一部削平している。南側にもピットが存在するが，建物として組むことはできない。東西２間(3.2m～3.5m)，南北２間(4.0m～4.2m)の南北棟の建物と推定される。梁間方向の南側中央の柱穴が検出されていない。桁行方位はＮ-15°-Ｅである。柱間寸法は，桁行(南北)方向で2.0m～2.2m，梁間(東西)方向では1.5m～1.7mを測る。柱穴は径30cm～54cmの楕円形で，深さは32cm～73cmである。出土遺物はない。

ＳＡ-002（第101図）

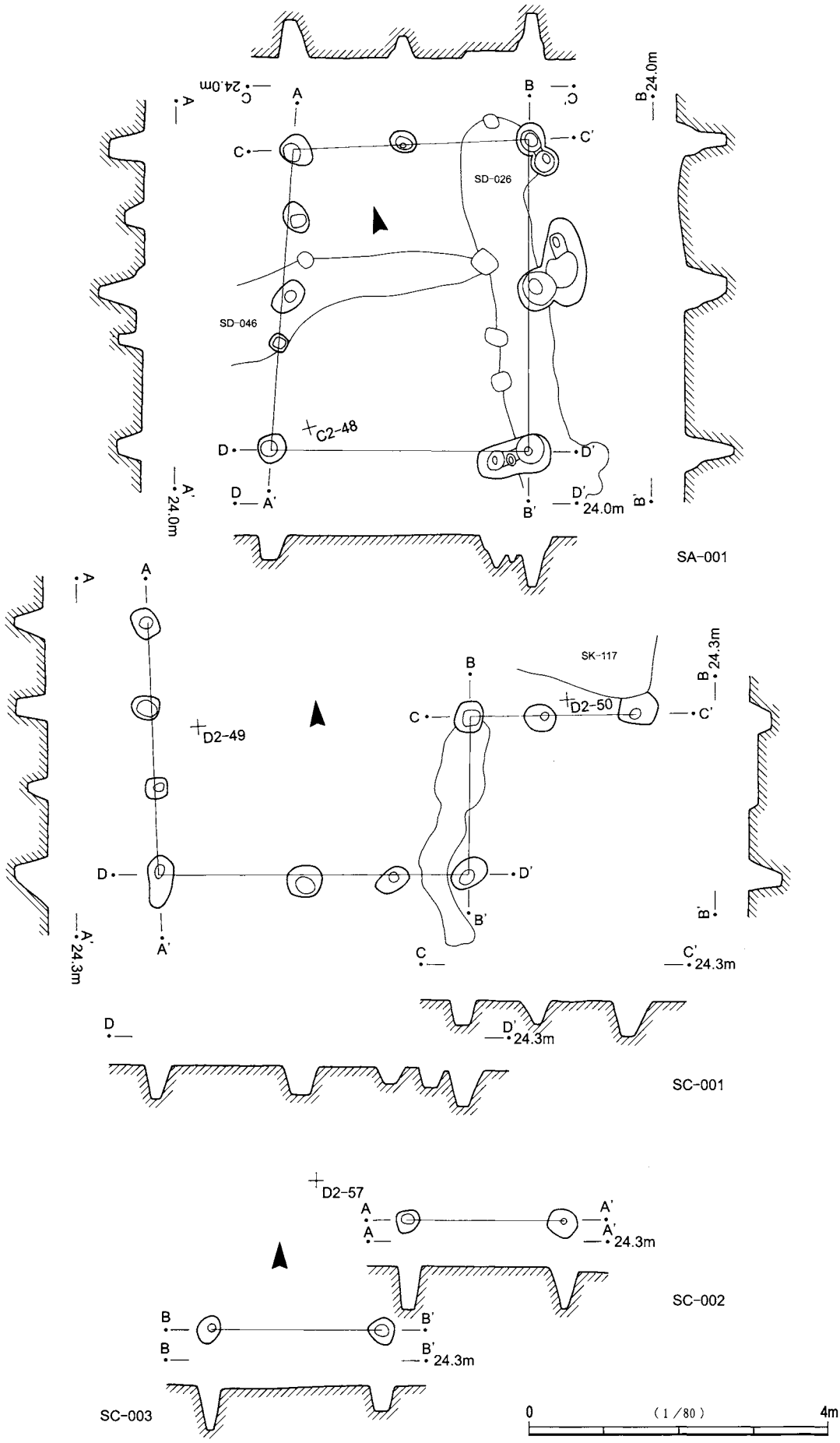
区画の東側の北西コーナー付近で，縁辺部の近くに位置している。SA-003と南側で一部重複するが，この周辺にはピットが集中しており，これ以外の建物の想定も考えられる。東西３間(5.9m～6.0m)，南北２間(3.0m～3.1m)の東西棟の建物と推定される。南面には庇を伴う。桁行方位はＮ-81°-Wである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.5m～2.4m，梁間(南北)方向では1.4m～1.6mを測り，桁行方向が不規則である。柱穴は径30cm～46cmの楕円形で，深さは39cm～68cmである。また南面の庇は，桁行南側の柱穴列から40cmの間隔で柱穴が配列されている。間隔は不規則で，身舎の柱穴列とは対応しない柱穴もある。出土遺物はない。

ＳＡ-003（第101図）

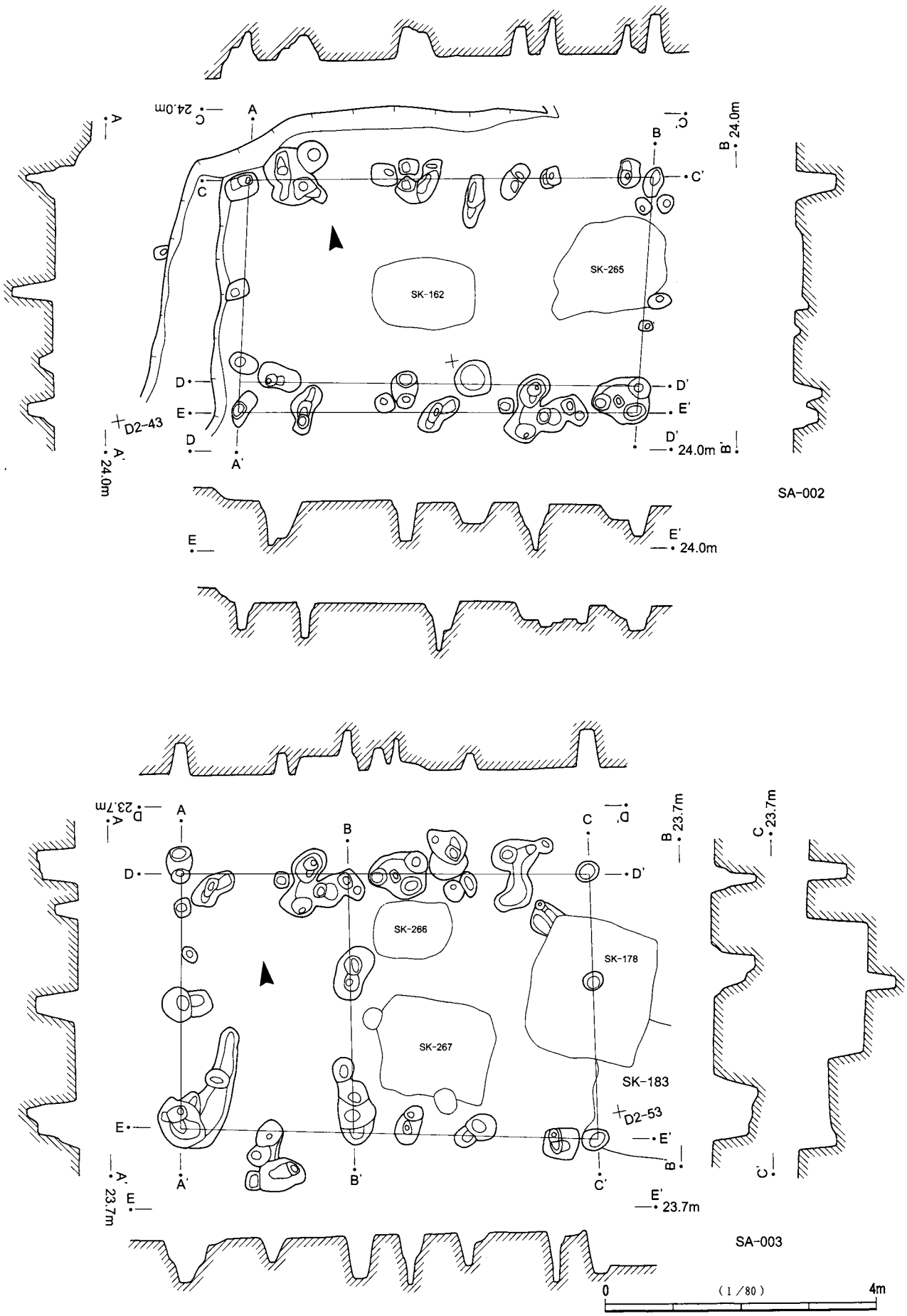
区画の東側に位置し，SA-002と一部重複する。東西４間(6.0m～6.2m)，南北２間(3.74m～3.88m)の東西棟の建物と推定される。桁行方位はＮ-79°-Wである。柱間寸法は不規則で，桁行(東西)方向で1.0m～1.8m，梁間(南北)方向では1.8m～2.3mを測る。桁行方向の西から２間目の棟筋に，間仕切りのための柱穴(径50cm，深さ60cm)が穿たれている。また，梁間方向の東側中央のピットは，SK-178に本来伴うものである。柱穴は径30cm～52cmの楕円形で，深さは32cm～61cmである。出土遺物はない。

ＳＡ-004（第102図）

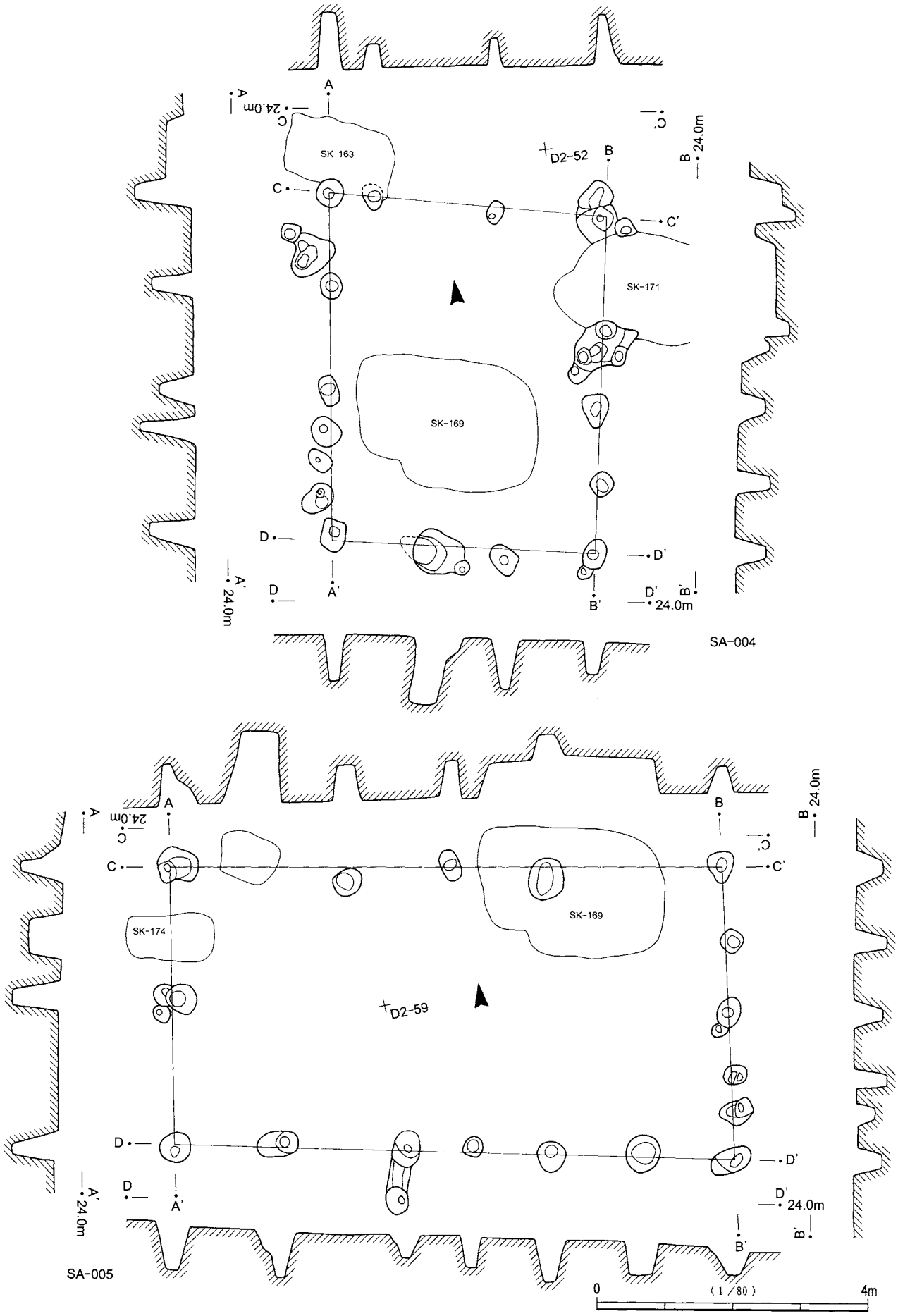
区画の中央部に位置し，SK-169を囲むようにピットが配列している。SA-005，SK-163・171と一部重複する。東西２間(3.94m～4.14m)，南北３間(4.96m～5.12m)の南北棟の建物と推定される。桁行方位はＮ-9°-Ｅである。柱間寸法は，桁行(南北)方向で1.40m～2.22m，梁間(東西)方向では1.40m～2.54mを測り，間隔は不規則である。柱穴は径34cm～54cmの楕円形で，深さは38cm～86cmである。出土遺物はない。



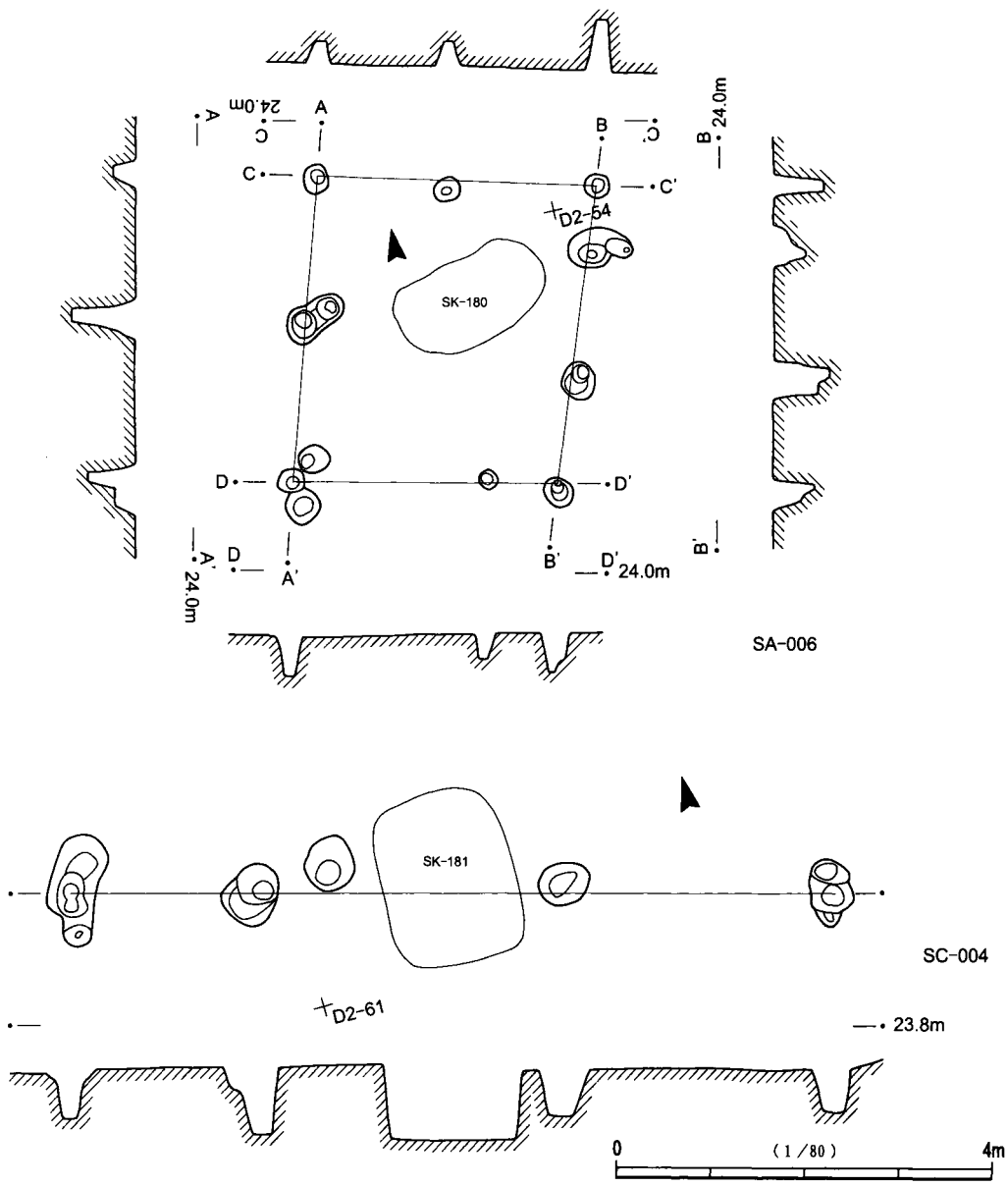
第100図　第1・掘立柱建物跡(1)及び柵列(1)



第101図　第１・掘立柱建物跡(２)



第102図　第１・掘立柱建物跡(３)



第103図　第１・掘立柱建物跡(４)及び柵列(２)

ＳＡ-005（第102図）

区画の中央部のやや南寄りに位置する。SA-004，SK-169と一部重複する。東西４間(8.2m～8.34m)，南北２間(4.1m～4.3m)の東西棟建物と推定される。桁行方位はN-81°-Wである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.6m～2.7m，梁間(南北)方向では1.9m～2.2mを測る。桁行方向の間隔が不規則である。柱穴は径28cm～48cmの円形や楕円形で，深さは38cm～67cmである。出土遺物はない。

ＳＡ-006（第103図）

区画の東側に位置し，SK-180を囲むようにピットが配列している。東西２間(2.86m～3.0m)，南北２間(3.2m～3.3m)の南北棟の建物と推定される。南側柱筋中央の柱穴が検出されていない。桁行方位はN-16°-Eである。柱間寸法は，桁行(南北)方向で1.2m～1.7m，梁間(東西)方向では1.4m～1.6mを測る。柱穴は径26cm～42cmの円形で，深さは27cm～55cmである。出土遺物はない。

ＳＡ-007（第104図）

区画の東端，柵列が囲む区域に位置する。SK-184を囲むようにピットが配列している。北東部に張り出しの一室と西側に庇をもつ，東西２間(3.2m～3.46m)，南北４間(6.9m～7.0m)の南北棟の建物と推定される。桁行方位はN-19°-Eである。柱間寸法は，桁行(南北)方向で1.66m～1.8m，梁間(東西)方向では1.5m～1.8mを測る。柱穴は径28cm～40cmの円形か楕円形で，深さは17cm～80cmである。身舎の北東部を東側に張り出して，１間(1.4m)×２間(2.8m)の室が付設されている。西側の庇は，南北３間半(5.9m)と身舎よりは北側で半間分短かいが，側柱とほぼ対応する位置に設けられている。桁行柱穴とは北側で0.8m，南側では1.1mの間隔があり，南側がやや開くような特徴をもつ。出土遺物はない。

（３） 柵列

ＳＣ-001（第100図）

区画の西側中央に位置している。SK-118を囲むように柱穴が配列し，東側柱筋で東へ向かっている。北側には方形竪穴遺構が配置し底面を大きく掘削しており，配列からみて柱穴はその位置まで延びていたことも考えられる。その場合は，柵列ではなく掘立柱建物であった可能性もある。規模は現存で，東西長は南側4.2m，北側2.2m，南北長は西側3.2m，東側2.1mを測る。柱穴は径28cm～52cmの楕円形で，深さは20cm～46cmである。出土遺物はない。

ＳＣ-002・003（第100図）

SC-001の南側に位置し，２本の柱穴の簡易なつくりである。長さは，それぞれ2.1mと2.3mである。SC-001と方向が一致しており，配置に関連性があることも考えられる。

ＳＣ-004（第103図）

区画の東側中央に位置し，SK-181と重複する。北側の土坑群と南側の空閑地を区切るように配置されている。４本の柱穴は2.0m～3.2mの間隔で直線的に並び，長さは8.2mである。柱穴は径40cm～52cmの楕円形で，深さは45cm～69cmである。出土遺物はない。

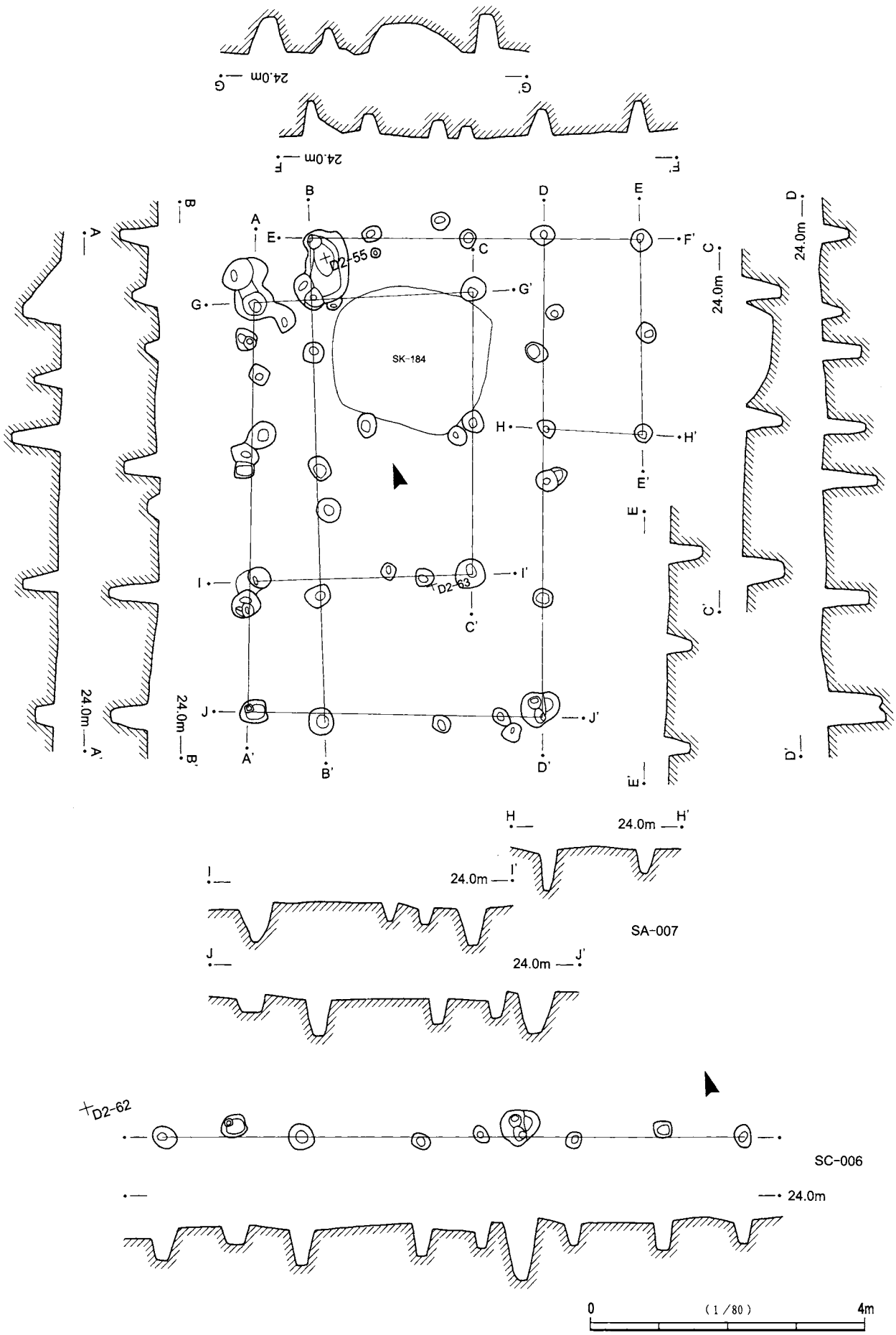
ＳＣ-005（第105図）

区画の東端に位置する柵列である。全体にピットの規模や配列は不規則ではあるが，北西側から東側縁辺部にかけて囲いのようなピットの配置が認められる。南西側は囲いが開き，ピットを設けずに浅い段差で区画を形成している。柵列の全体の規模は東西10m・南北17mで，この範囲を大きく囲っている。北西側の柵列は長さ6.5mを測る。ピットはほぼ直線的に並び，径25cm～55cm・深さ40cm～72cmのピットが連結するように配置されている。北側の柵列は長さ約10mを測る。ピットは段差に沿ってやや弧状に並び，径20cm～40cm・深さ43cm～87cmを測る。東側の柵列は，区画の段差に沿って配置され，長さは17mである。北側でピットの配列が一部途切れるような箇所があり，ここに出入り口施設が設けられていた可能性もある。ピットの規模は，径30cm～50cm・深さ20cm～86cmである。連結している複合的なピットも多く，複雑な様相である。

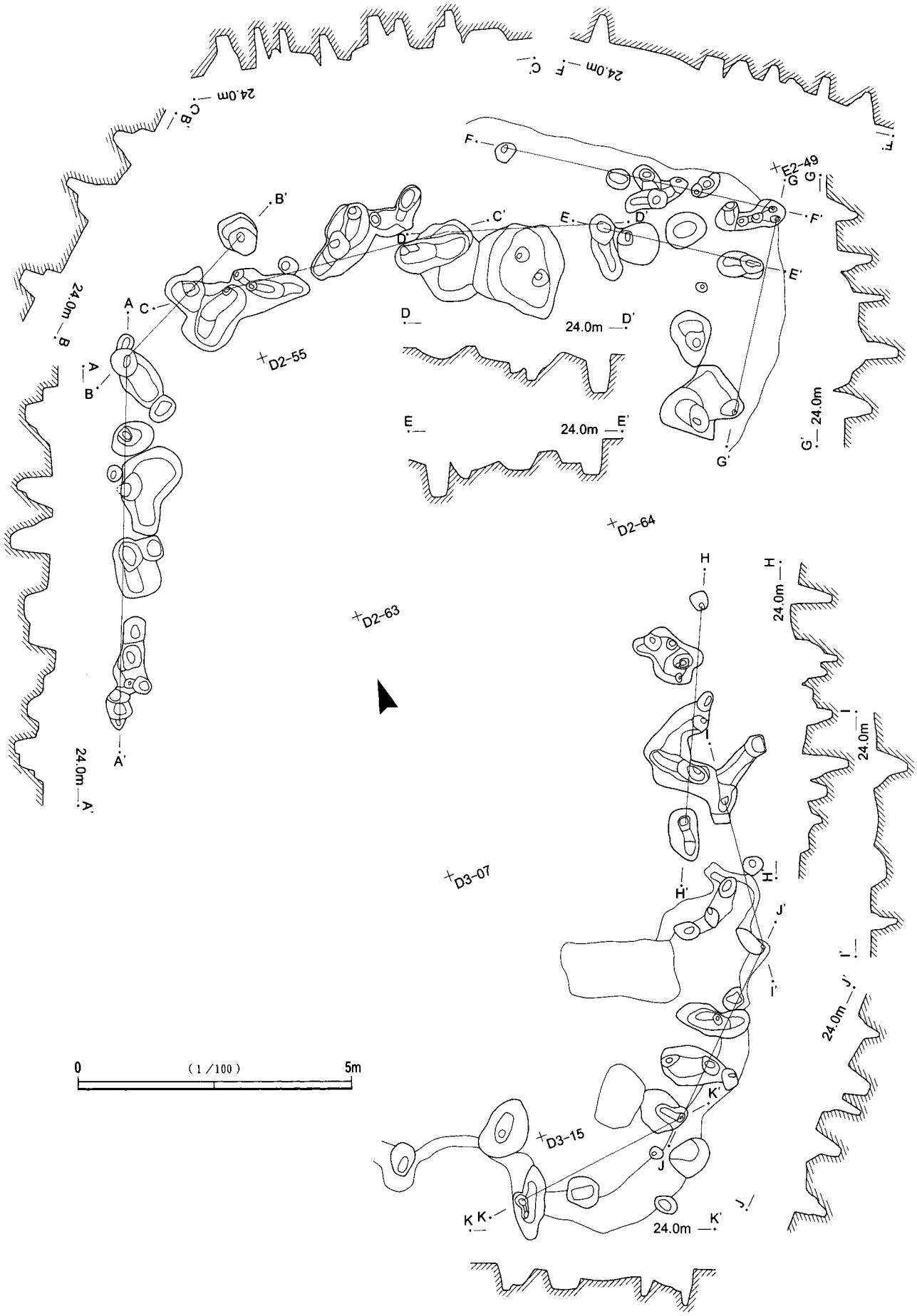
この囲いの南側には大型不整形竪穴や土坑が設けられている。整形区画内をさらに18cm～28cm下げており，底面は凹凸が激しい。用途は不明であるが，水溜め場等の施設の可能性もある。

本遺構は，柵列で囲まれた空間の北側に建物を配し，南側には水溜め施設を設けるなど，広く作業場等として利用していたことが考えられる。

これを南北に分けるように配置されたのがSC-006(第104図)である。柱穴は直線的に1.2m～2.0mの間隔で並んでいる。長さは8.6mを測り，柱穴の径は24cm～36cm，深さは32cm～89cmである。



第104図　第１・掘立柱建物跡(５)及び柵列(３)



第105図　第1・SC-005

（4） 方形竪穴遺構

ＳＫ-122（第106図）

区画西側のやや南寄りに位置し，SD-026を一部削平し構築されている。平面形態はほぼ正方形で，規模は東西3.5m，南北3.7m，深さは94cm～101cmを測る。長軸方位はN-3°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，底面は凹凸がある。壁溝(幅12cm～18cm，深さ2cm前後)は部分的に途切れるが，ほぼ全周する。底面の東壁際には長軸方向に，不整形の土坑(径1.54m×0.6m，深さ9cm～17cm)が設けられているが，焼土等は確認されていない。この土坑に重複して浅いピット(深さ4cm～7cm)が穿たれている。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む明黄褐色土や黄褐色土が主体で，人為的に埋め戻されている。

遺物は覆土中から，瀬戸・美濃や常滑甕などの中世陶器や銭貨(元祐通寶)が出土している。

ＳＫ-117（第106図）

SK-117は，区画西側の北寄りに位置し，SX-010・SK-261と重複する。東側でSK-261を大きく壊し，西壁側ではSX-010を削平している。平面形態はほぼ正方形と考えられ，規模は現存で東西3.05m，南北3.06m，深さは104cm～110cmを測る。長軸方位はN-17°-Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，底面は凹凸がある。壁溝(幅14cm～24cm，深さ2cm前後)は北壁から西壁の一部を除いて巡っている。底面に炉やピットなどの施設は確認されていない。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む黄褐色土が主体で，人為的に埋め戻されている。瀬戸・美濃や常滑の陶器片が出土している。

ＳＸ-010・011（第106図）

SX-010は区画西側の北寄りに位置し，SX-011・SK-117と重複する大型の遺構である。平面形態は長方形で，規模は推定で東西5.0m，南北3.7m，深さは108cm～117cmを測る。長軸方位はN-74°-Wである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，底面は凹凸がある。壁溝(幅12cm～18cm，深さ2cm)は南西コーナー付近に巡っている。底面に炉やピットなどの施設は確認されていない。覆土は，ローム粒やローム・ブロックを含む明黄褐色土や黄褐色土を主体に，黒褐色土が混在している。瀬戸大窯期の端反皿片が出土している。

SX-011はSX-010に大半を削平されている。平面形態は正方形と考えられ，規模は推定で東西2.6m，南北2.7mを測る。深さは104cmである。長軸方位はN-16°-Eである。遺存範囲では，壁は垂直に掘り込まれ，底面は凹凸がある。北壁の一部から東壁にかけて壁溝(幅14cm～18cm，深さ5cm)が巡っている。底面に炉やピットなどの施設は確認されていない。出土遺物はない。

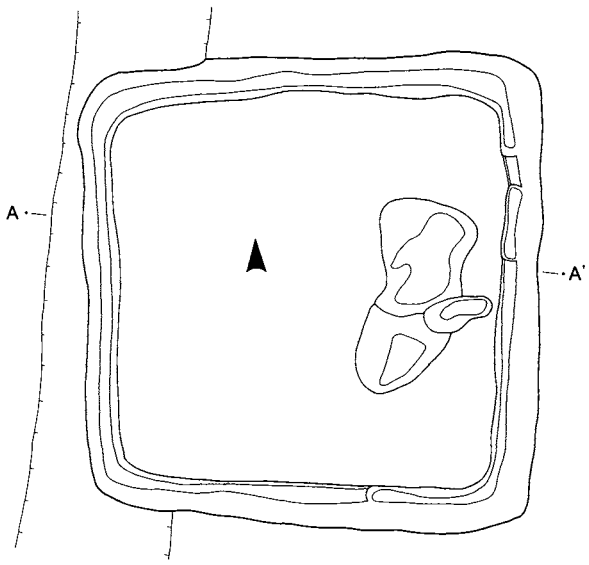
ＳＫ-136（第107図）

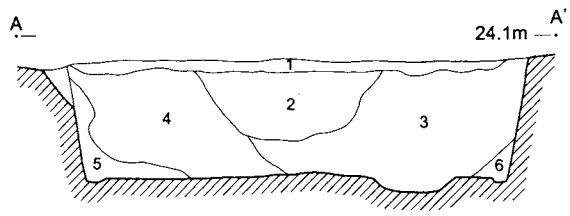
区画の中央やや北寄りに位置し，SK-134を一部削平している。平面形態は方形で，規模は東西2.02m，南北1.84m，深さは69cm～78cmを測る。長軸方位はN-81°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ，底面は凹凸がある。底面には，長軸方向に３基のピットが直線的に配置されている。東壁際のピット(径46cm，深さ37cm)と西壁際のピット(径50cm×62cm，深さ44cm)は，遺構の内側を向くように穿たれている。中央のピット(径38cm×50cm，深さ29cm)は他のピットより浅くなっている。底面に炉などの施設は確認されていない。覆土には，ローム粒やローム・ブロックを含む褐色土や明黄褐色土が堆積している。

遺物は，覆土中から瀬戸・美濃，常滑の中世陶器や鉄製品が出土している。

ＳＫ-116（第108図）

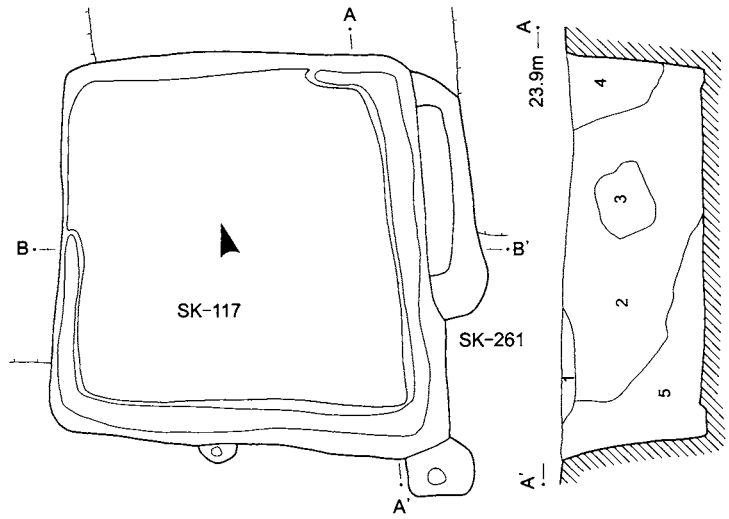
区画西側の北寄りに位置し，SK-143を削平している。SX-011の北側に近接し，周囲には多数のピットが配置されている。平面形態は方形で，規模は推定で東西2.3m，南北2.46m，深さは84cmである。長軸方

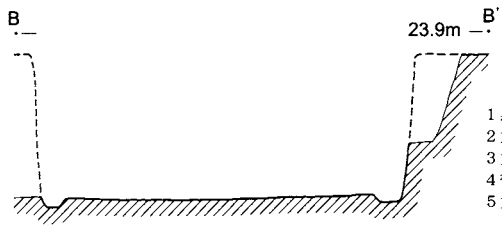




1 褐色土　ローム粒・少量のロームブロックを含む
2 黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
3 明黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
4 明黄褐色土　2層よりロームブロックが少ない
5 褐色土　小ロームブロック・ローム粒を含む
6 褐色土　ロームブロック・ローム粒を含む

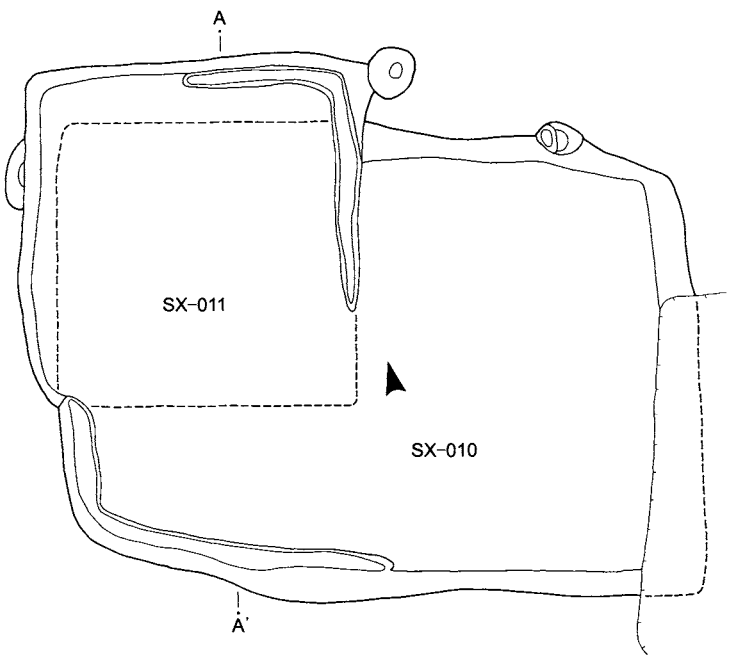
SK-122

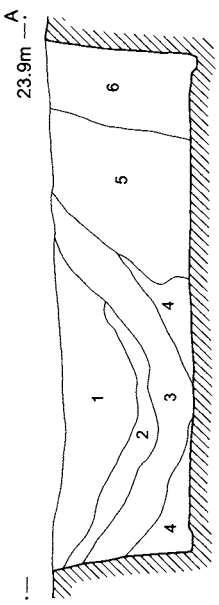




1 黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
2 黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
3 黄褐色土　2層よりローム粒を多く含む
4 褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
5 黄褐色土　2層よりローム粒を多く含む

SK-117・SK-261



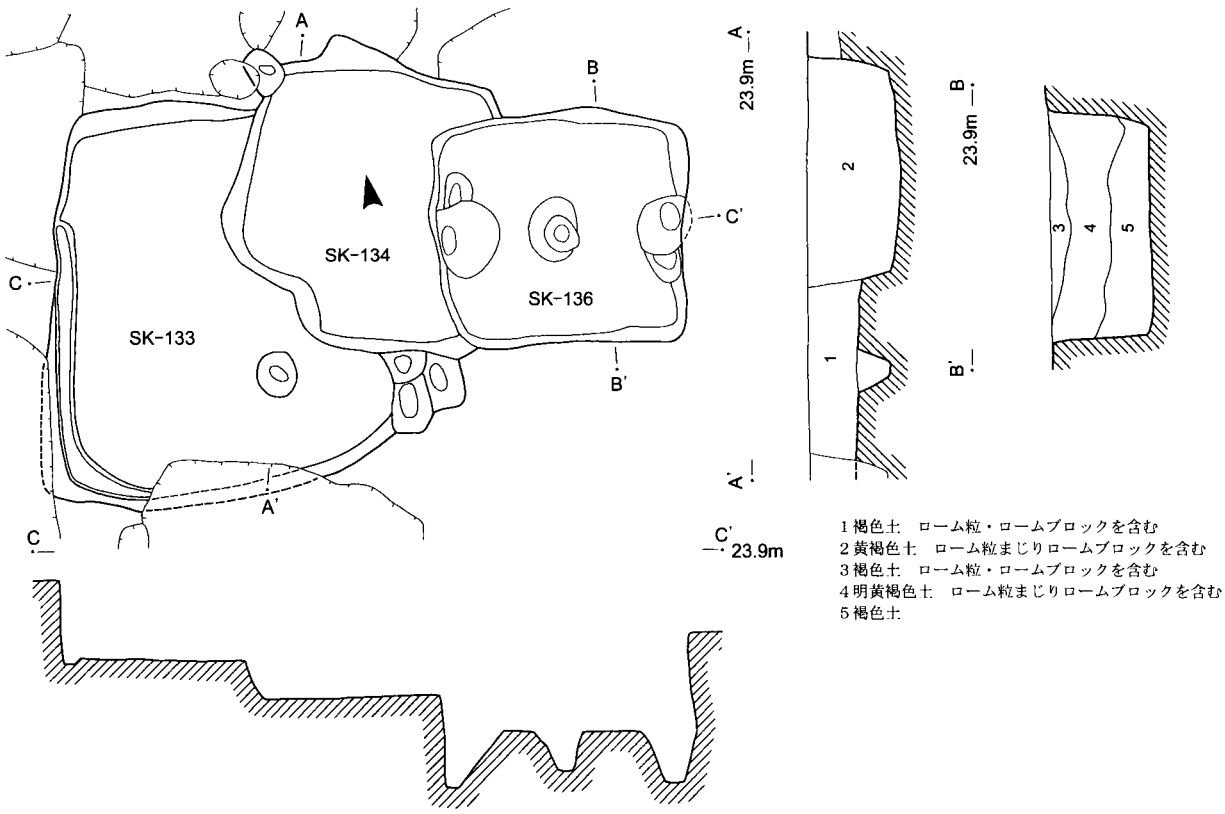


1 黄褐色土　ロームブロック・ローム粒を含む
2 黒褐色土　ロームブロックを含む
3 黄褐色土　ローム粒まじりロームブロックを含む
4 黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
5 明黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
6 明黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む

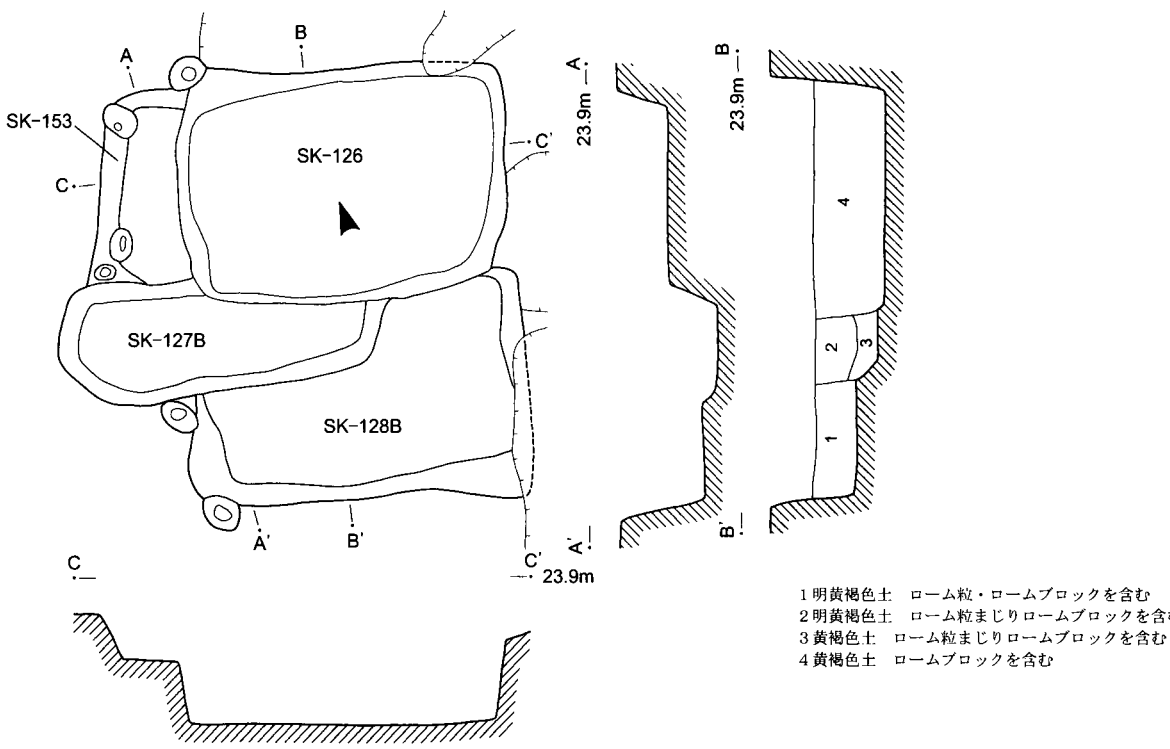
SX-010・SX-011

0　(1/60)　2m

第106図　第1・方形竪穴遺構(1)



SK-133・SK-134・SK-136



SK-126・SK-127B・SK-128B・SK-153

0　(1/60)　2m

第107図　第1・方形竪穴遺構(2)及び土坑(1)

位はN-19°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれ，底面は凹凸がある。底面に炉やピットなどの施設は確認されていない。覆土はローム粒やローム・ブロックを含む黄褐色土で，人為的に埋め戻されている。遺物は，鉄釉壺片，瀬戸・美濃や常滑の中世陶器片などが出土している。

ＳＫ-178（第109図）

区画東側の北寄りに位置し，SK-183の一部を削平している。北側には粘土貼り土坑SK-179などの土坑やピットが多数配置されている。平面形態は長方形で，規模は東西1.8m，南北2.0m，深さは92cmである。長軸方位はN-3°-Wである。壁は垂直に掘り込まれ，底面はやや凹凸がある。底面中央にピット(径27cm×32cm，深さ39cm)が設けられている。広い範囲に灰や粘土ブロックが散布し，南東コーナー付近からは炭化材も出土している。覆土はローム粒やローム・ブロックを多く含む層が主に堆積しており，遺構の廃絶時に人為的に埋め戻されている。出土遺物はない。

ＳＢ-063（第112図，図版21）

第１整形区画の北東27mの地点で，地下式坑SK-191と同様に，第１整形区画と第２整形区画の境の延長線上に位置している。周辺には古墳時代後期の住居跡があるが，中世の遺構は存在していない。

平面形態は隅丸長方形で，長軸長4.28m・短軸長2.64mを測る。主軸方位はN-9°-Eである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は54cmを測る。底面は凹凸はあるが，全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～22cm，深さ7cm)は南壁の一部を除いて全周する。柱穴(掘方径42cm～62cm，深さ60cm～64cm)は長軸に沿って２基検出され，柱痕は細い。南西壁際に焼土と炭化材が投棄されていた。遺物は，覆土中から瀬戸・美濃の袋物の破片やカワラケと鉄製品が出土している。

ＳＢ-072（第112図，図版21）

第１整形区画の北東17m，SB-063の西40mの地点に位置する。古墳時代後期の住居跡SB-58の床面中央を破壊しているが，東側を削平されている。

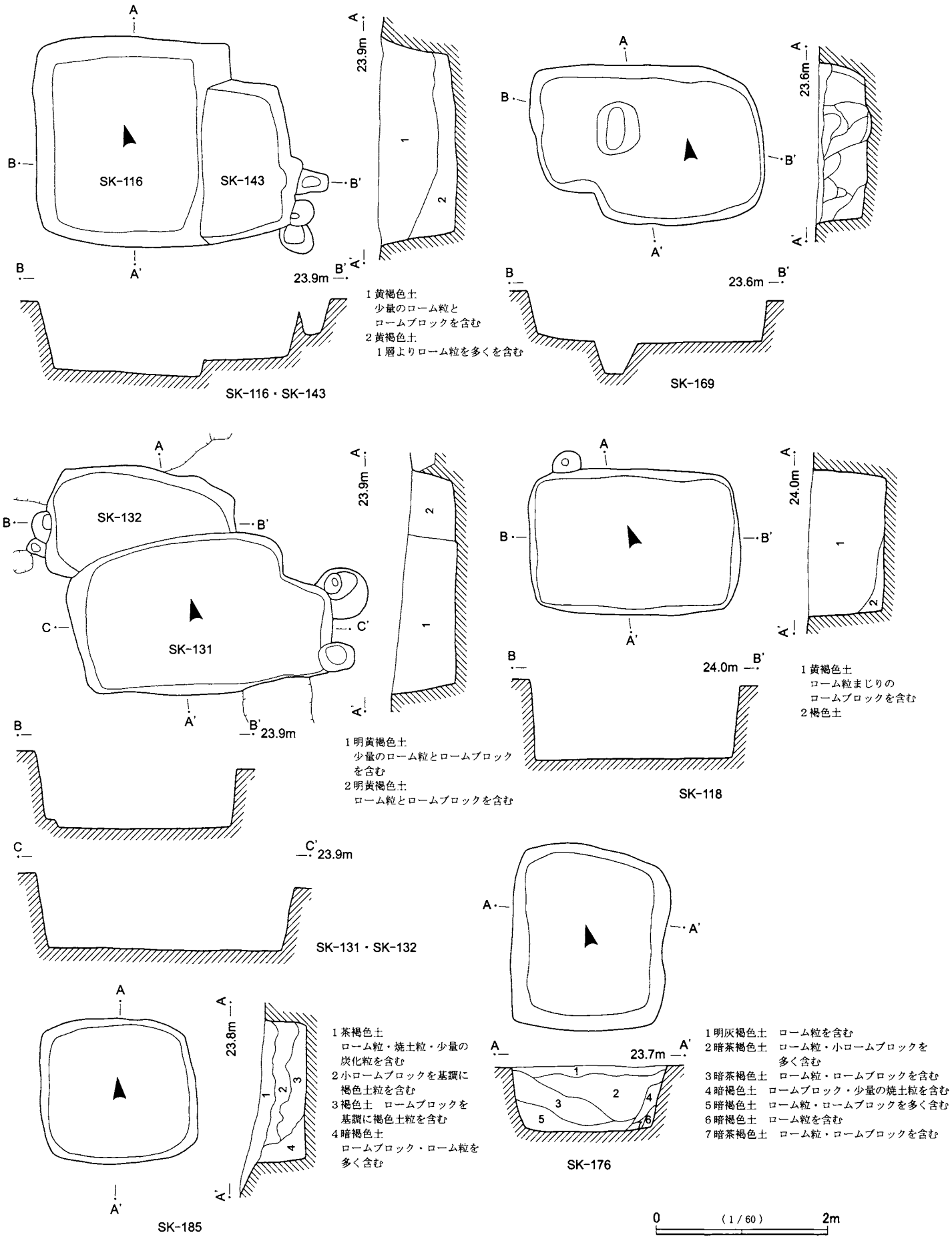
平面形態は隅丸長方形で，長軸長は推定で4.4m・短軸長2.86mを測る。主軸方位はN-85°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，壁高は28cm～45cmを測る。底面は全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～18cm，深さ3cm～7cm)は遺存している範囲ではほぼ全周する。柱穴(掘方径50cm～78cm，深さ82cm～88cm)は長軸に沿って２基検出され，柱痕は細い。遺物は，覆土中から13世紀前半代の常滑甕片が出土している。

（５） 土坑（第107～111図，第12表）

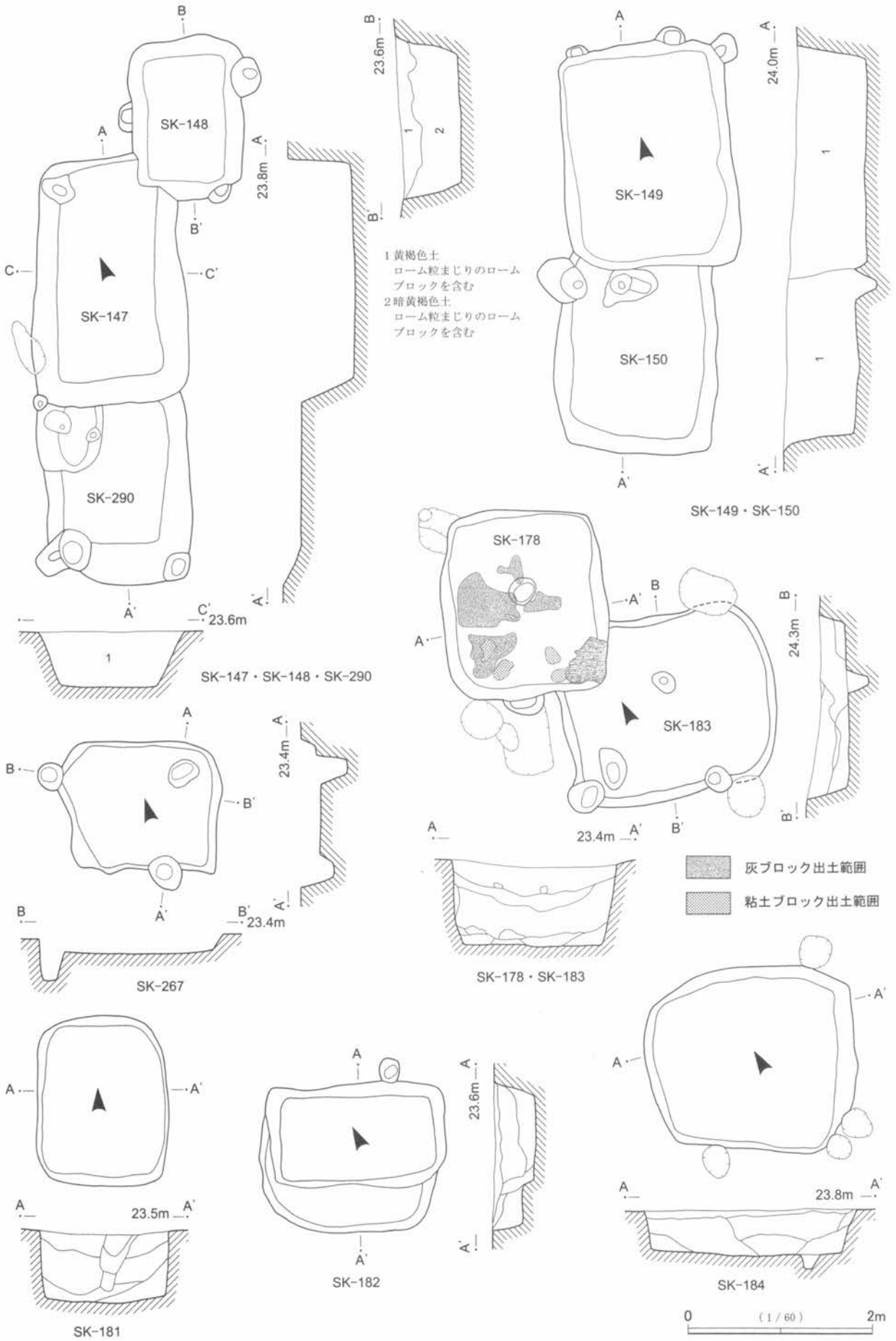
区画内からは，50基の土坑と２基の粘土貼り土坑を検出した。

西側地区は比較的形態の整った長方形土坑が分布している。特にSD-026と西側縁辺部の間には，形態の類似した長軸方位を南北にとる５基の長方形土坑(SK-147～150・290)が集中している。覆土はローム粒やローム・ブロックを含む土層が主体で，人為的に埋め戻されている土坑が多い。出土遺物はほとんどないが，SK-147からは瀬戸・美濃の天目茶碗が出土している。また，北側縁辺部の方形竪穴遺構周辺では，ほとんどの土坑が重複しており，配置に何らかの規制があったことを示唆している。

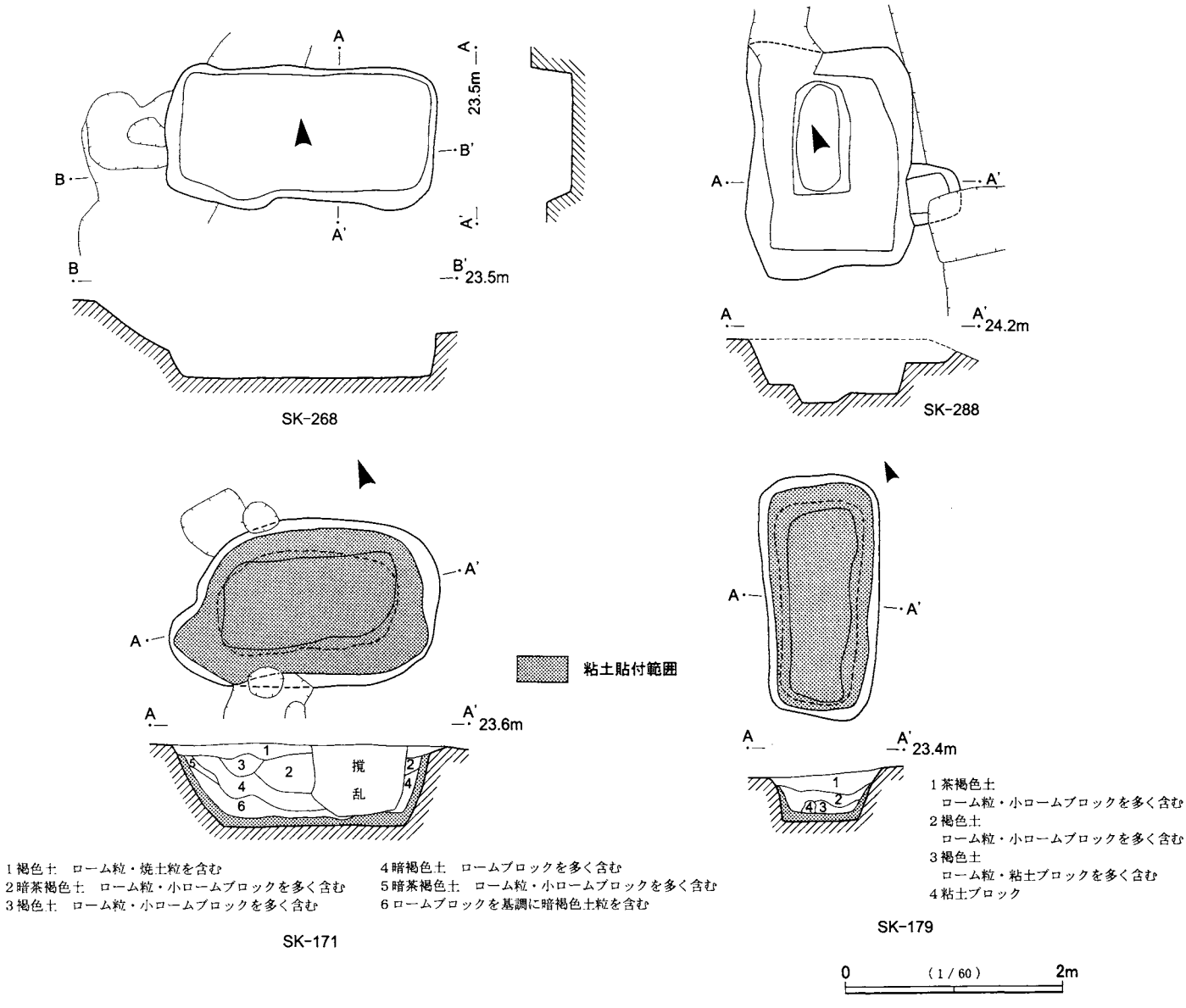
東側地区では北側縁辺部周辺に集中しているが，形態や配置も不規則である。この範囲はピット群も集中しており，建物や柵列の配列と密接な関連があると考えられる。２基の粘土貼り土坑は，この地区のみから検出された。土坑の底面や壁面に砂質粘土を貼り付けており，墓坑や水溜め施設と考えられている。他の遺構との重複はない。



第108図　第1・方形竪穴遺構(3)及び土坑(2)



第109図　第1・方形竪穴遺構(4)及び土坑(3)



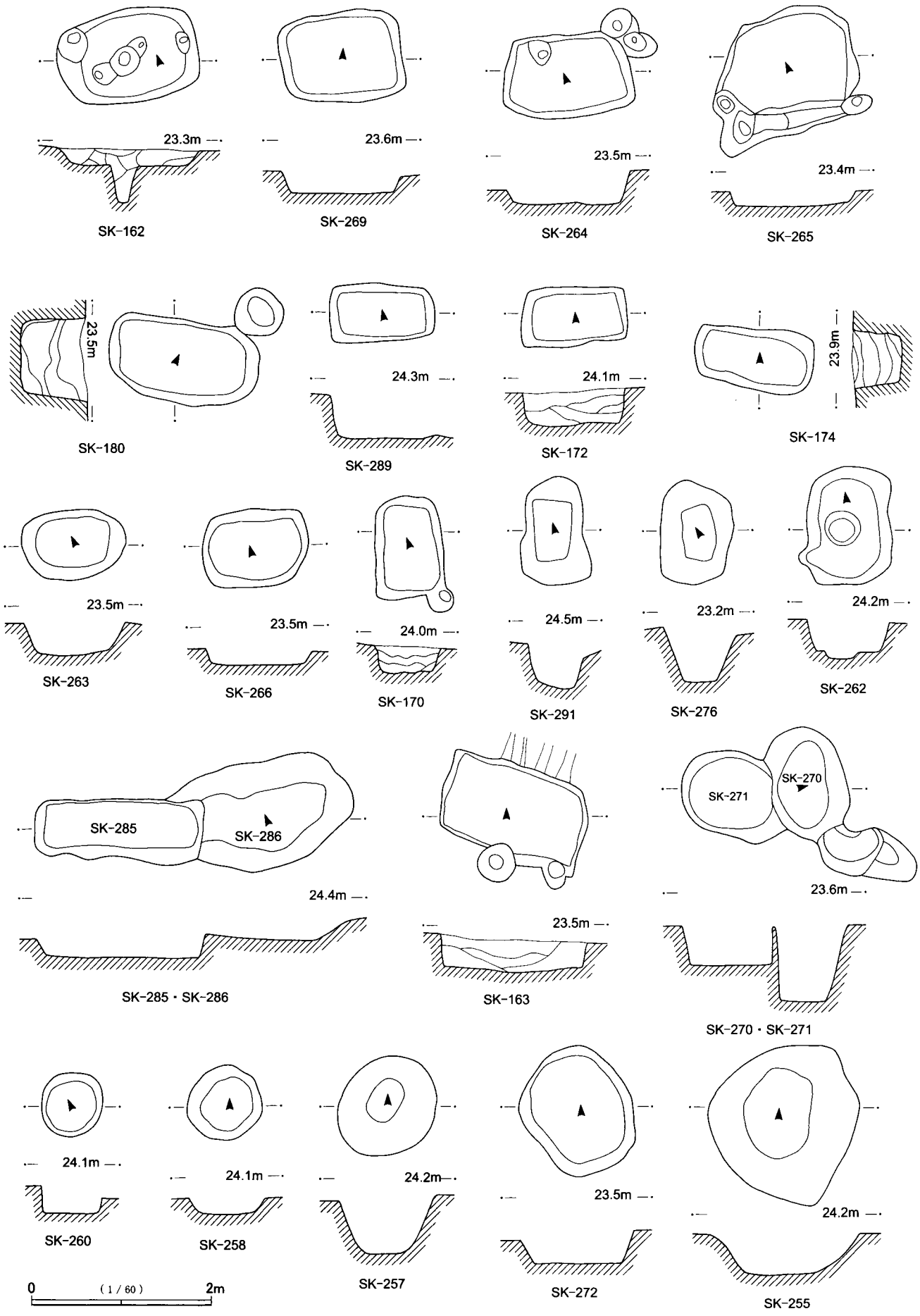
第110図　第1・土坑(4)

SK-171（第110図）

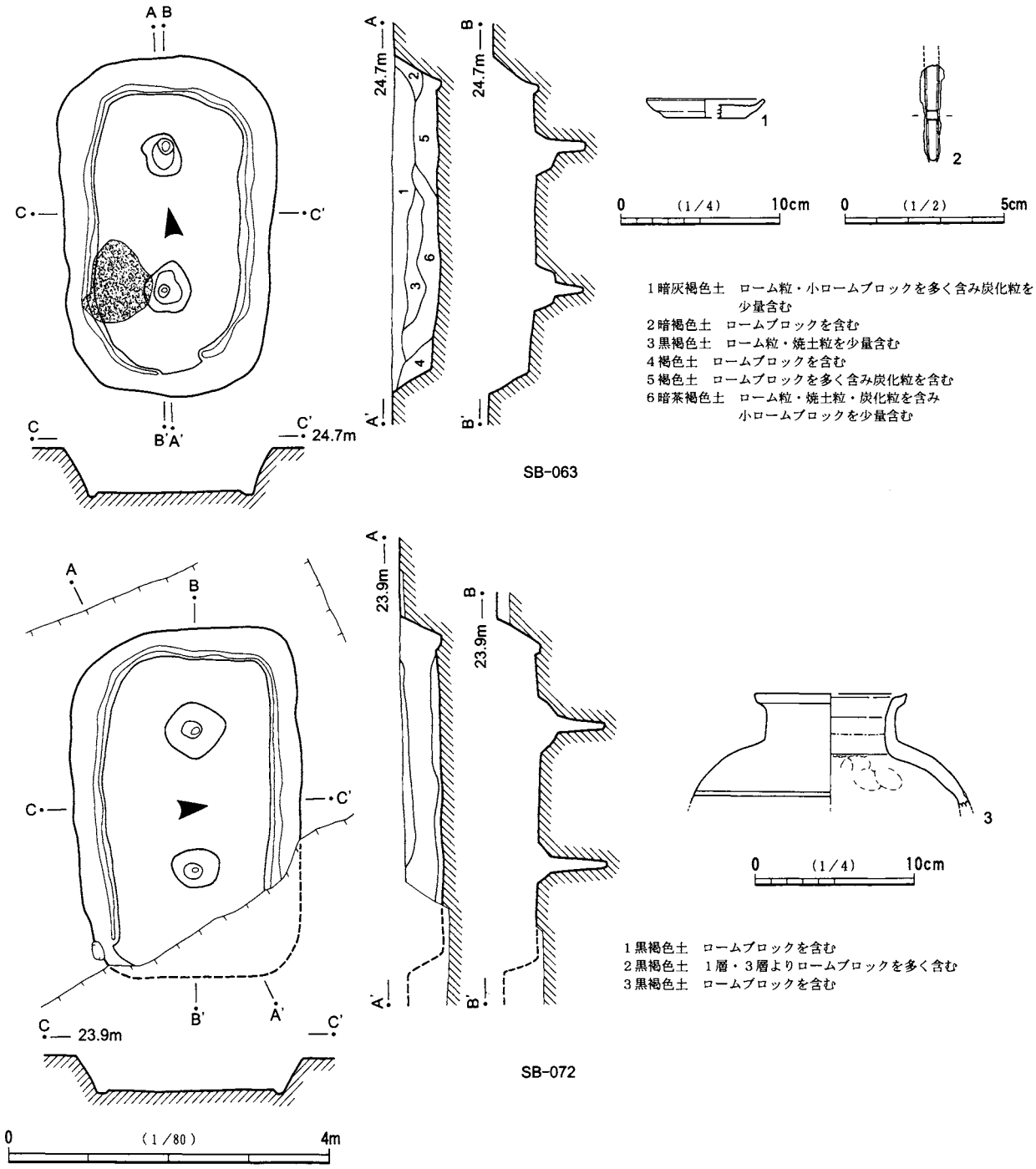
区画東側の中央部に位置する。平面形態は不整方形で，規模は2.25m×1.55m，深さは73cmである。壁は緩やかに掘り込まれ，特に西壁側の張り出した部分の立ち上がりが緩い。底面と壁面に厚さ10cmほどの明灰色粘土を貼り付けている。覆土はローム粒やローム・ブロックを含む暗褐色土を主体に暗茶褐色土が混入する。出土遺物はない。

SK-179（第110図）

区画東側の北寄りに位置する。平面形態は長方形で，規模は2.21m×1.03m，深さは43cmである。壁は垂直に掘り込まれている。底面と壁面に厚さ7cm前後の暗灰色粘土を貼り付けている。覆土はローム・ブロックを多く含む褐色土が主体である。出土遺物はない。


23.3m
SK-162
23.6m
SK-269
23.5m
SK-264
23.4m
SK-265
23.5m
SK-180
24.3m
SK-289
24.1m
SK-172
23.9m
SK-174
23.5m
SK-263
23.5m
SK-266
24.0m
SK-170
24.5m
SK-291
23.2m
SK-276
24.2m
SK-262
SK-285
SK-286
24.4m
SK-285・SK-286
23.5m
SK-163
SK-271
SK-270
23.6m
SK-270・SK-271
24.1m
SK-260
24.1m
SK-258
24.2m
SK-257
23.5m
SK-272
24.2m
SK-255
0
(1/60)
2m

第111図　第1・土坑(5)



第112図　第1・SB-063・SB-072及び出土遺物

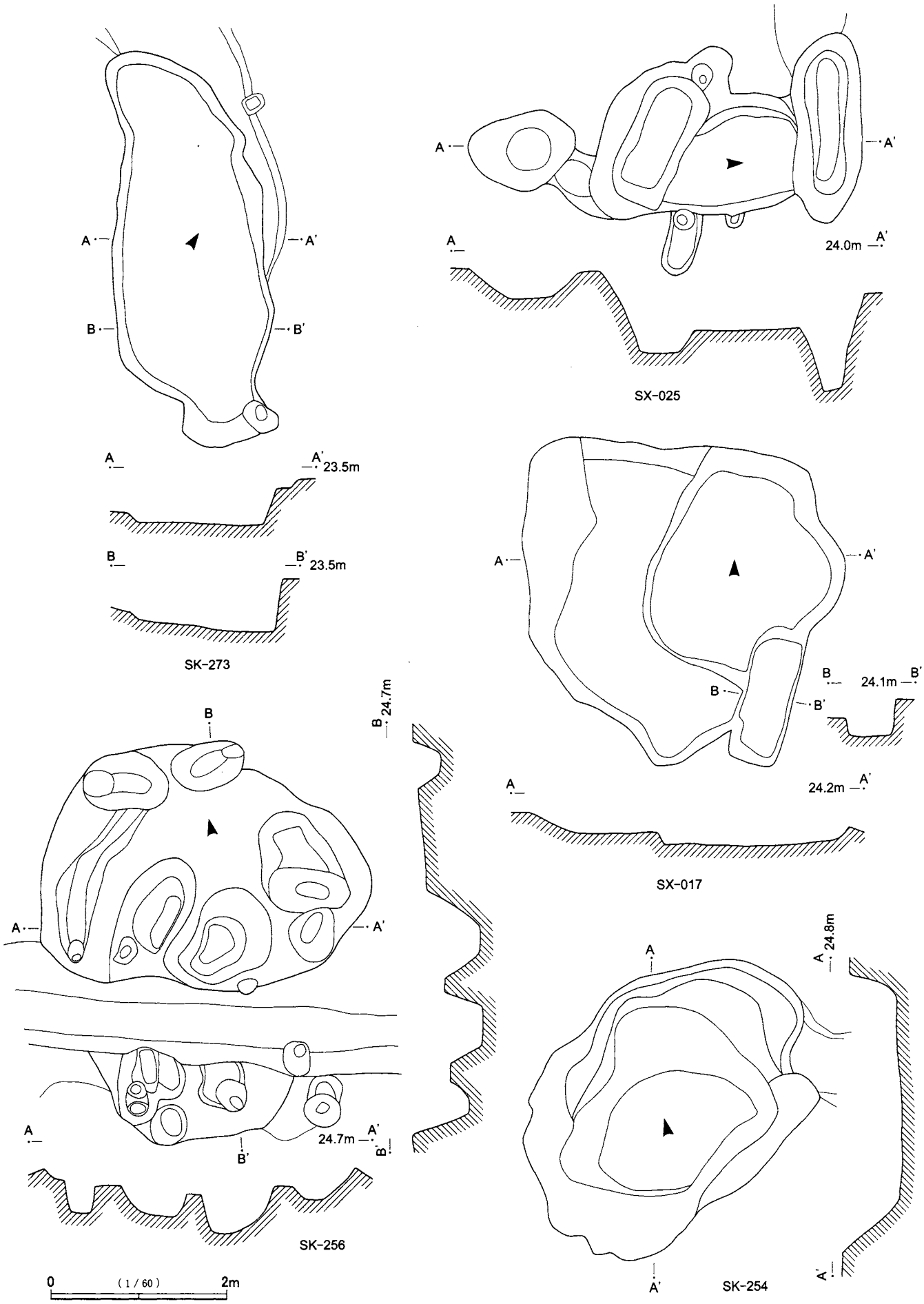
（6）　大型不整形竪穴

SK-273（第113図）

区画の東側，柵列SC-005の南半に位置し，SX-024と重複する。平面形態は東西に長い不整形で，規模は1.82m×4.63m，深さは11cm～61cmを測る。壁は，北東側が深く垂直に掘り込まれているが，南西側に進むに従って低くなり，底面も次第に浅くなる。底面は浅い落ち込みがあり，凹凸が激しい。

SX-025（第113図）

区画東側の南端縁辺部に位置し，4基の土坑が重複しているような形態である。周辺に土坑などは検出



第113図　第１・大型不整形竪穴

されていない。中央の土坑(1.34m×1.46m・深さ59cm)は南北に長く設けられ，その両端に２基の土坑(北側0.74m×2.14m・深さ114cm，南側1.02m×1.92m・深さ90cm)が，ほぼ平行するように配置されている。さらにその南側に浅い皿状の土坑(0.9m×1.22m・深さ33cm)が位置している。底面はいずれも平坦である。性格は不明であるが，縁辺部の中央に位置しており，出入り口施設の一部の可能性もある。遺物は，15世紀前半代の常滑捏鉢片が出土している。

ＳＫ-256（第113図）

区画西側の南西端縁辺部に位置し，SD-030に南側部分を削平されている。縁辺部から区画の内側に不整円形に広がる浅い竪穴である。規模は3.72m×4.24m，深さは13cmと浅い。遺構内には数基の小ピットと浅い溝が不規則に配置されている。南側のピット群は東側の縁辺部に延びるピット列に連なっている。

ＳＫ-254（第113図）

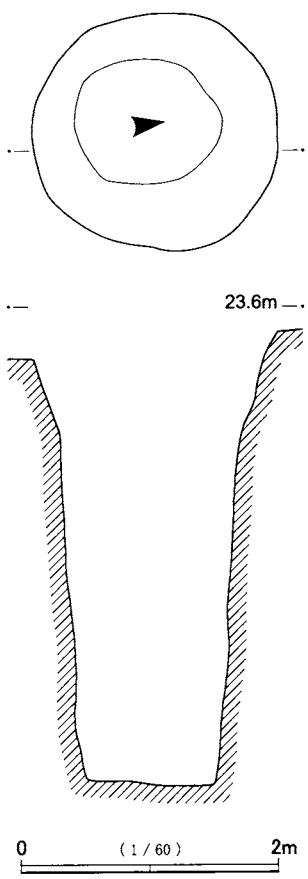
区画西側の北西端縁辺部とSD-025の間に位置する。規模は径2.72m×3.32m，深さは65cmである。壁は崩落のためか緩やかになっており，底面はほぼ平坦である。

ＳＸ-017（第113図）

第１整形区画の北西，SD-025を一部削平している。不整形の２基の竪穴と長方形土坑が連結している。径3.65mの不整楕円形で，深さは25cm～30cmである。土坑は1.56m×0.54m，深さ39cmを測り，SD-025に沿って南北に並んでいる。遺物は，青磁碗，常滑甕・捏鉢片が出土している。

（７） 井戸・ＳＫ-226（第114図）

第１整形区画の北側に位置し，SD-036の廃絶後に掘削された素掘りの井戸である。上面は1.8m×1.9mの楕円形で，底面径0.94m×1.14m，深さは3.5mを測る。上半部は一部崩落しているが，ほぼ垂直に掘り込まれ，粘土層を掘り抜き底面は砂層まで達している。土器片がわずかに出土しているが，図示できるものはない。



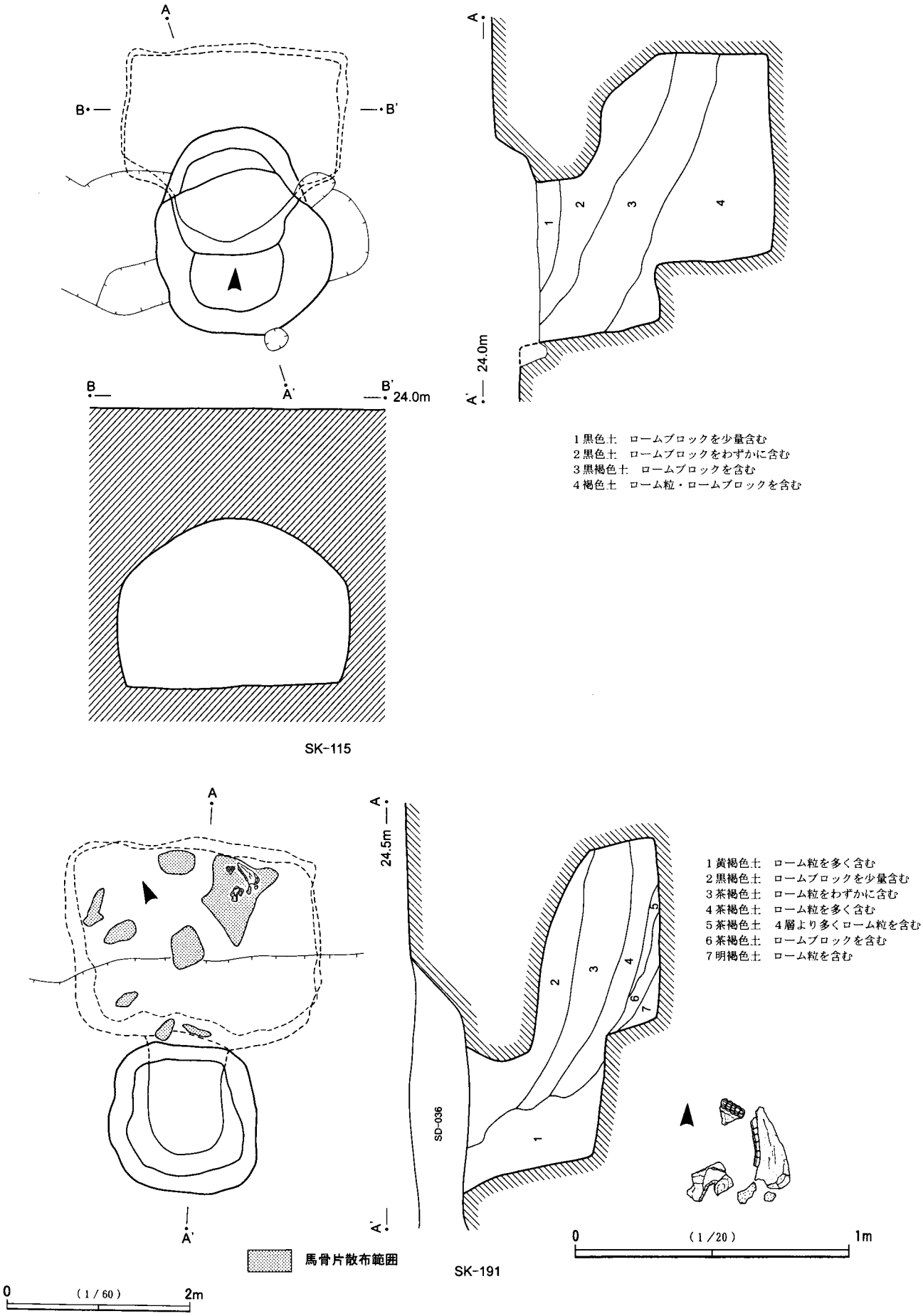
第114図　第１・ＳＫ-226

（８） 地下式坑

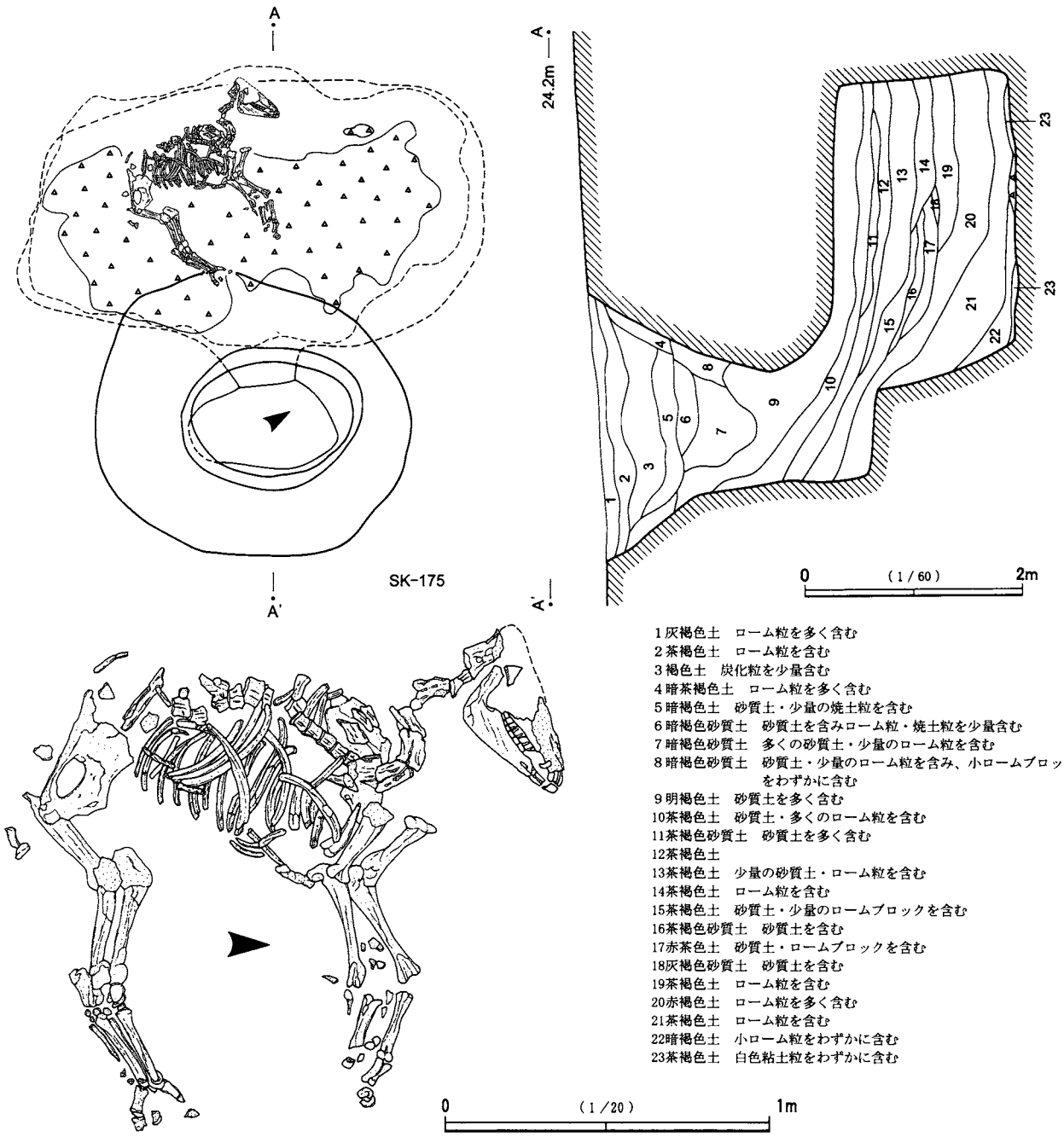
ＳＫ-115（第115図，図版21）

区画西側の中央寄り，北側縁辺部に位置する。周辺には方形竪穴遺構・土坑などが集中し，上面は浅い土坑と重複している。すでに竪坑は大きく開口し，主室の天井部の一部は崩落していたが，奥壁側は比較的よく遺存していた。

主軸方位はＮ-２°-Ｗである。竪坑は北側が崩落して現状では径1.75m×1.95mと大きく開口している。深さは1.55mを測る。開口部は幅95cm，高さは不明である。主室底面との段差は1.25mと深い。主室は長方形であるが開口部へ向かって半円形に70cmほど広がっている。幅(東西)2.3m・奥行(南北)2.14m・高さ1.85mを測り，床面積は約4.05㎡である。確認面からの深さは3.05mを測る。奥壁は垂直に1.2m立ち上がった後，角度をもって天井部に続いている。天井部はアーチ型をなす。主室底面はほぼ平坦である。主室内には，ローム粒やローム・ブロックを



第115図　第1・地下式坑(1)



第116図　第1・地下式坑(2)

含む褐色土や黒色土が流れ込んでいた。覆土中からは，青磁碗，瀬戸・美濃，常滑の中世陶器や石が出土している。他の遺構との接合関係も多く，周辺から投棄されたと考えられる。

SK-175（第116図，図版21）

区画西側の南寄りに位置している。火葬施設SK-177が隣接しているが，土坑やピットは少ない。竪坑や天井部も良く残っており，遺存状態は良好である。本遺跡で最も大きな地下式坑で，主室内には馬が貝層の上に埋葬されていた。

主軸方位はN-60°-Wである。竪坑の上面は径2.5m×2.9mの楕円形で，漏斗状に大きく開いている。主室方向に下がるに従い次第にすぼまり，上面から1.7mの地点では径1.05m×1.55mと最も狭くなる。

竪坑の深さは2.5mを測る。開口部は幅64cm，高さは75cmと狭い。主室底面との段差は1.3mを測る。主室は隅丸長方形で，床面の形態が不整形になっている。幅(南北)3.72m・奥行(東西)2.56m・高さ1.7mを測り，床面積は約6.2㎡である。確認面からの深さは4.05mを測る。奥壁はやや内傾しながら1.56m立ち上がり，天井部との境は明瞭である。主室底面には2cm～5cmの厚さに，貝が広範囲に敷き詰められていた。その貝層の上からは埋葬された馬が1頭分出土した。ほぼ全身の骨格が残っており，遺存状態は良好である。覆土はローム・ブロックを含む層が少なく，自然に堆積したと考えられる。覆土中から，瀬戸・美濃，常滑甕片が出土しているが，量的には少ない。

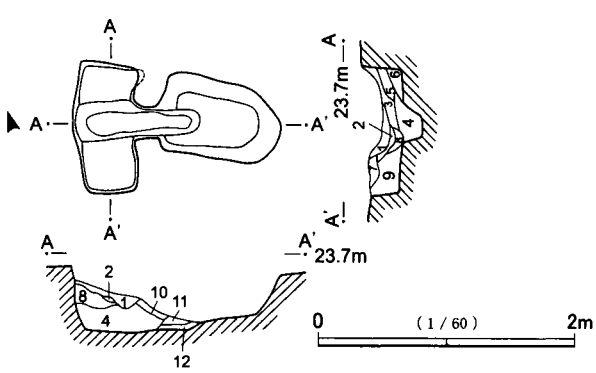
ＳＫ-191（第115図，図版22）

第１整形区画の北東，SD-036の縁辺部で，第１整形区画と第２整形区画の境の延長線上に位置している。周辺に土坑やピットなどの施設は配置されていない。遺存状態は良好である。

主軸方位はN-27°-Eである。竪坑は，1.5m×1.6mの隅丸方形で，深さは1.57mを測る。開口部は幅85cm，高さは80cm，主室底面との段差は55cmである。主室はやや不整形の方形で，幅(東西)2.46m・奥行(南北)1.84m・高さ1.3mを測り，床面積は約4.52㎡である。確認面からの深さは2.8mを測る。奥壁は，72cmまで内傾しながら立ち上がり，天井部に続いている。天井部との境は明瞭である。主室底面には馬骨片が散布していた。奥壁際からは下顎骨と歯が出土している。覆土の状況から，馬の埋葬後にある程度まで埋め戻し，その後は自然に堆積している様子がわかる。覆土中から常滑甕片がわずかに出土している。

（９） 火葬施設・ＳＫ-177（第117図，図版22）

区画西側の南寄りに位置している。地下式坑SK-175の南東に隣接する。平面形態は，燃焼部と通風坑が連結したＴ字型で，通風孔が狭くなっている。規模は，燃焼部が46cm×102cm・深さ36cm，通風坑は62cm×162cm・深さ51cm，通風孔は幅22cmを測る。主軸方位はN-71°-Wである。覆土中から火葬骨片や炭化粒・焼土粒が出土している。



1暗茶褐色土　ローム粒を多く含む
2暗褐色土　火葬骨片を含み、ローム粒多くの炭化粒を含む
3暗褐色土　ローム粒を含む
4黒褐色土　炭化粒・焼土粒を含む
5茶褐色土　ローム粒を多く含む
6暗茶褐色土　炭化粒・焼土粒を含み、火葬骨片を少量含む
7暗褐色土　炭化物・炭化粒を含む
8炭化物、炭化粒を基調に焼土粒・火葬骨片を少量含む
9暗褐色土　炭化物を多く含み炭化粒を含む
10炭化粒を基調に暗褐色土粒を含む
11暗茶褐色土　炭化粒を多く含み焼土粒をわずかに含む
12茶褐色土　炭化粒を少量含む

第117図　第１・ＳＫ-177

２　第２整形区画（第118図，図版16）

調査区の東南端に位置する。第１整形区画と同様に，北側を道路状遺構SD-036が走っている。第１整形区画の東側に隣接し，その境は整形を受けていない平坦な地山が幅1.0m～2.5mで続いている。北側と東側は段差で区画され，遺存状態は比較的良好である。西側は緩やかに掘り込まれており，段差が10cm以内の場所もある。東側は確認調査の結果から判断して，ほぼこの範囲に整形区画はまとまると考えられる。

第118図　第２整形区画と周辺

南側は一部削平されているため，区画の明瞭な段差は確認できなかったが，内側へ屈曲するような浅い痕跡が認められ，整形区画の範囲はおおよそ確認できたと考えられる。また，北東隅では区画が開くように，道路状遺構に続く部分が検出されている。

平面形態は不整方形で，規模は東西21m，南北は西側で20m，東側では15mである。面積は約370㎡を測る。段差は北側で14cm～34cm，東側では23cm～40cmである。

区画内は，土坑19基，井戸１基，地下式坑１基，多数のピット群で構成されている。ピット群からは，３棟の掘立柱建物跡，２条の柵列を復原した。これらの遺構は主に区画の北側に集中し，さらに東西にわかれて位置している。区画の南側では段差もなくなり，ピット数も次第に減少していく。井戸はやや離れて南西隅に，地下式坑は区画の北東縁辺部で段差に一部かかるように，それぞれ配置されている。

覆土は，ローム粒を多く含む茶褐色土や黄褐色土が主体である。

（１） 掘立柱建物跡

ＳＡ-008（第119図）

区画の西側中央で，SK-281を囲むように位置する。東西４間(5.8m～6.0m)，南北２間(3.2m～3.4m)の東西棟の建物と推定される。桁行方位はN-68°-Wである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.2m～1.8m，梁間(南北)方向では1.6m～1.7mを測り，桁行の柱間寸法が一定していない。柱穴は径28cm～48cmの楕円形で，深さは24cm～47cmである。出土遺物はない。

ＳＡ-009（第119図）

区画の北西部に位置する。SK-186と重複し，南西隅の柱穴を失っている。また，SA-010と一部重複するが，新旧関係は不明である。東西２間(4.0m)，南北２間(3.1m)の東西棟の建物と推定される。桁行方位はN-65°-Wである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.8m～2.2m，梁間(南北)方向では1.3m～1.8mを測る。柱穴は径40cm～60cmの楕円形で，深さは45cm～62cmである。出土遺物はない。

ＳＡ-010（第120図）

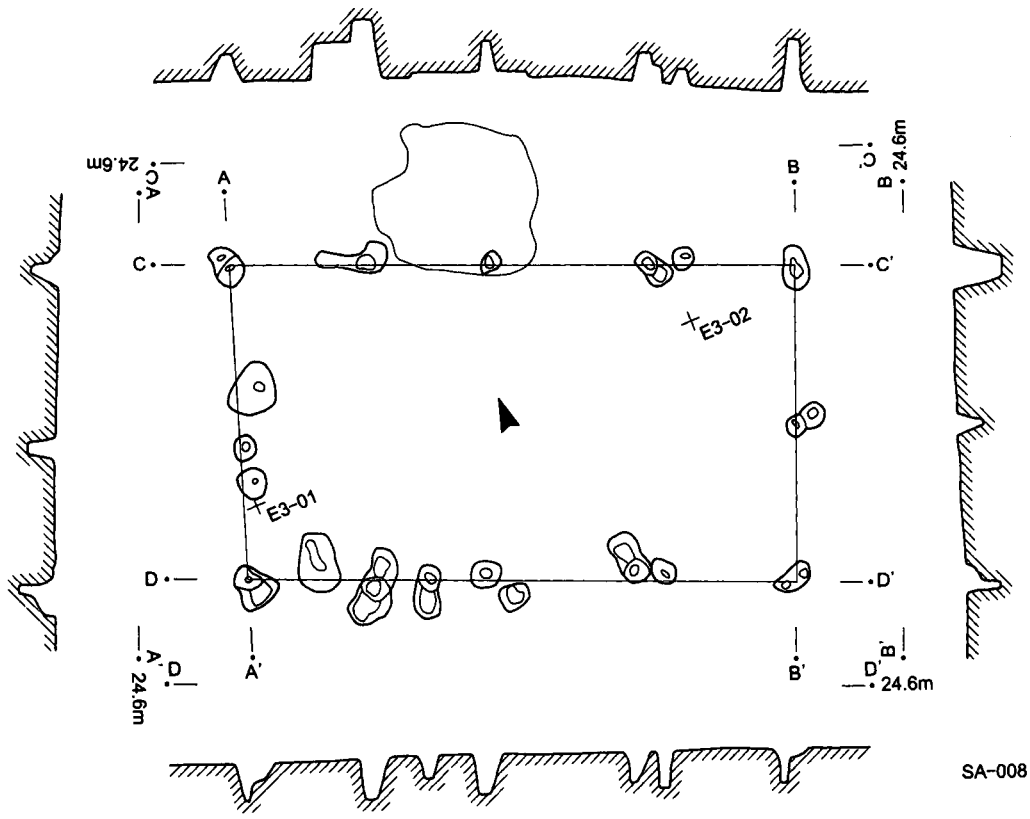
区画の北西部で段差に沿って位置する。東西１間(4.0m)，南北２間(4.0m)の建物と推定される。柱穴は径32cm～48cmの方形や楕円形で，深さは24cm～48cmである。出土遺物はない。

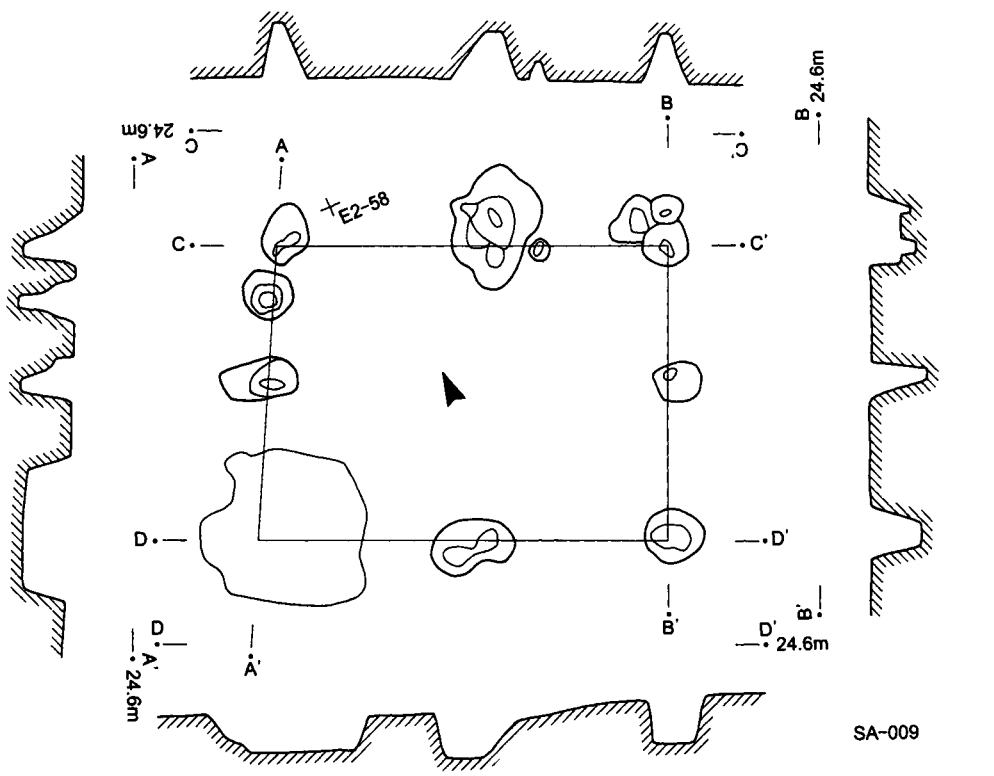
（２） 柵列（第120図）

直線的に並ぶピットから，形態や深さなどを考慮してSC-007・008の２条の柵列を復原した。周囲にはこれと対応するピットがみあたらないことから，掘立柱建物の一部である可能性は低い。ともに長さは3m前後と短く，柵列よりも簡単な塀のような構造物であったことも考えられる。出土遺物はない。

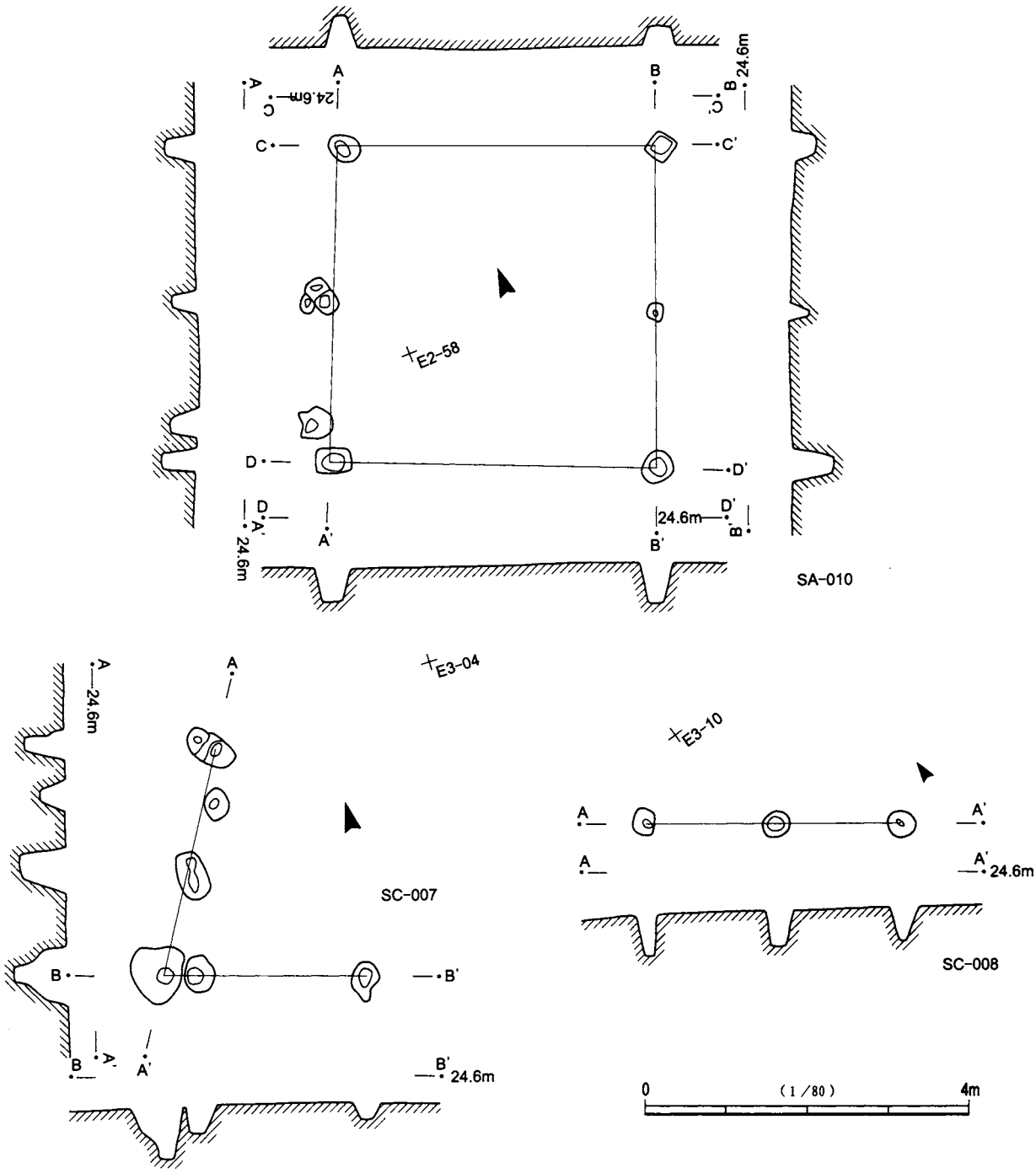
（３） 土坑（第121図，第12表）

検出された19基の土坑は，いずれも区画の北側に集中し，さらに北西側と北東側に分布はわかれる。このうち，北東側では深さが90cmのSK-193とSK-188の方形土坑や，SK-282などの小規模な土坑が配置されている。これに対し北西側では８基の土坑が集中し，なかにはSK-187やSK-280などのように重複する土坑もある。SK-277・278・281の３基の長方形土坑は，規模が長軸長1.5m・短軸長1.0m前後で，ほぼ垂直に掘り込まれており，底面も平坦であることなどから，土坑墓である可能性が高い。SK-187と重複するSK-279・280は，一辺1.2mの正方形である。平面形態は異なるが，ほぼ垂直に50cm～65cm掘り込まれており，埋め戻されたような覆土の堆積状況から，これらも土坑墓と考えられる。

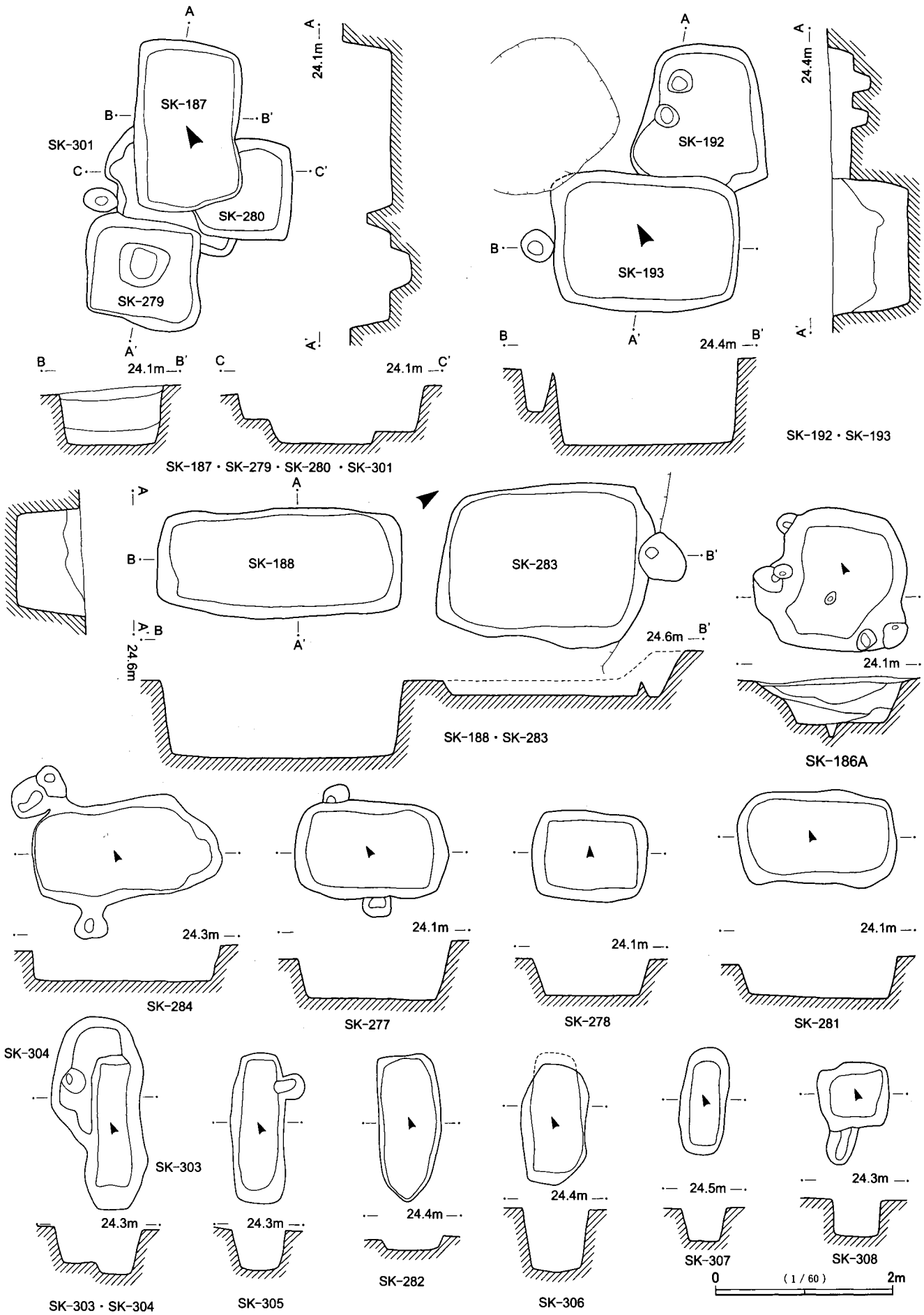




第119図　第２・掘立柱建物跡(１)



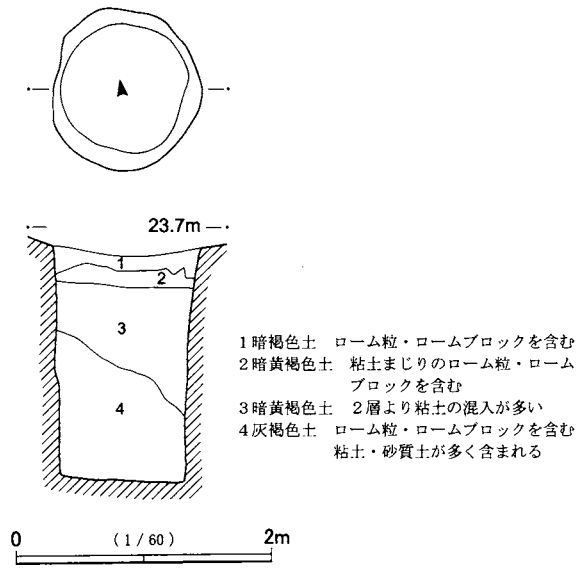
第120図　第２・掘立柱建物跡(２)及び柵列


SK-187
SK-301
SK-280
SK-279
24.1m
SK-187・SK-279・SK-280・SK-301
SK-192
SK-193
24.4m
SK-192・SK-193
SK-188
SK-283
24.6m
SK-188・SK-283
24.1m
SK-186A
24.3m
SK-284
24.1m
SK-277
24.1m
SK-278
24.1m
SK-281
SK-304
SK-303
24.3m
SK-303・SK-304
24.3m
SK-305
24.4m
SK-282
24.4m
SK-306
24.5m
SK-307
24.3m
SK-308
0
(1/60)
2m

第121図　第2・土坑

（4） 井戸・ＳＫ-194（第122図）

区画の南西隅に位置する素掘りの井戸である。上面は1.1m×1.2mの楕円形で，底面径1.0m，深さは1.8mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。埋土は，ローム粒やローム・ブロックと粘土を多く含む灰褐色土層や暗黄褐色土が厚く堆積しており，人為的に埋め戻された可能性が高い。土器片などが出土したが，図示できるものはない。

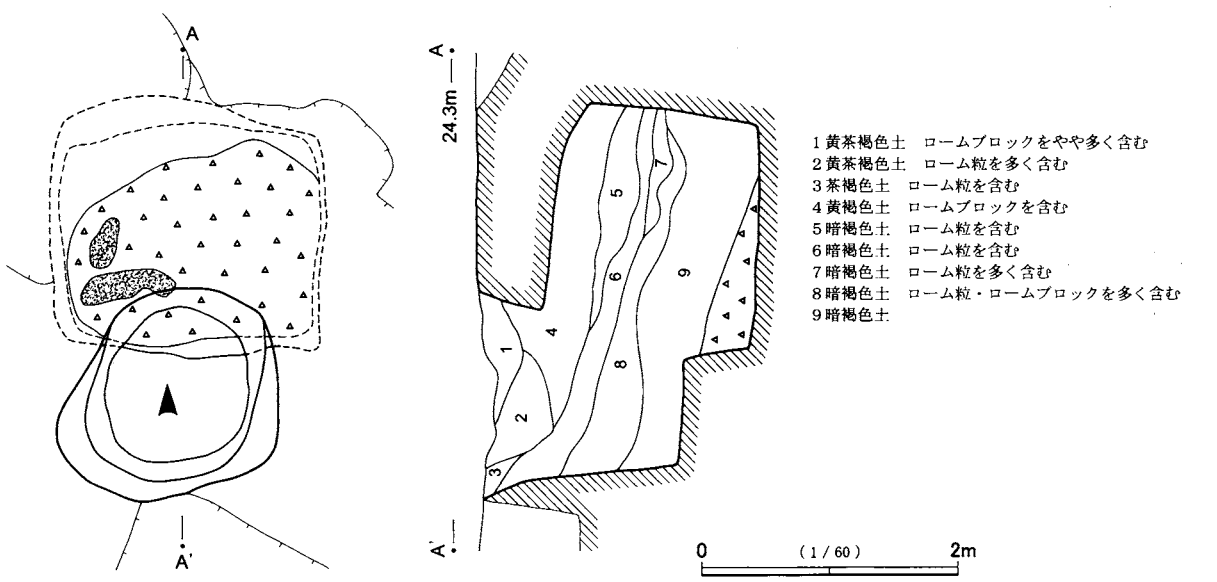


第122図　第２・ＳＫ-194

（5） 地下式坑・ＳＫ-189（第123図，図版22）

区画の北東部の段差に沿って位置する。竪坑の一部がSK-193と重複する。周囲には，土坑群が竪坑を取り囲むように配置されている。遺存状態は良好で，主室の天井部もよく遺存していた。

主軸方位はN-5°-Eである。竪坑は径1.6m×1.9mの楕円形で，深さは1.6mである。開口部は幅1.0m，高さは1.1mで，主室底面との段差は50cmである。主室は方形で，幅(東西)2.05m・奥行(南北)1.75m・高さ1.65mを測り，床面積は約3.59㎡である。確認面からの深さは2.2mを測る。主室底面には貝層が投棄されて堆積している。また，貝層の上面の一部には焼土が堆積していた。貝類の分析結果については，附章で述べる。覆土中から常滑甕片，カワラケなどが，主室からは，銭貨(政和通寶)や石２個が出土している。このうち，石は五輪塔の一部の可能性もある。



第123図　第２・ＳＫ-189

3　第３整形区画（第124図，図版13）

調査区の中央南側で，第１整形区画の南西に位置する。東側の境を南北方向に走るSD-025に区画されている。北側と西側は緩やかに掘り込まれ，浅い段を形成している。さらに北側は東西に走る溝SD-039に区画されている。南側では段差が認められず平坦面が広がり，貝層を伴う別の整形区画が連続している。その境は判然としないが，東西の段差が内側へそれぞれ屈曲する部分が確認されており，この整形区画のおおよその範囲は把握できる。

平面形態は不整方形で，規模は北側15m・南側17.5m・東側16m・西側19mを測り，面積は約292㎡である。段差は北側で14㎝～25㎝，西側では13㎝～21㎝と浅い。

なお，南側へ続く別の区画については，大きく削平されているため，正確な規模・内容等は不明であるが，検出した遺構については第３整形区画に含めて報告する。この区画内では，掘立柱建物跡が東西に離れて配置され，その間は遺構のない空閑地が広がる。また，北側の区画との境には柵列が設けられている。

区画内は，方形竪穴遺構３基，土坑11基以上，地下式坑３基，ピット群で構成されている。ピット群は区画の南側に集中し，このなかから計５棟の掘立柱建物跡，柵列１条を復原した。土坑は区画内のほぼ全域から遺構が検出されているが，方形竪穴遺構は北西コーナー付近にまとまっている。掘立柱建物や柵列は南側に集中する傾向がみられ，南側へ続く区画からも３棟が復原できた。地下式坑は西側で１基，東側では２基が検出されたが，ともに区画の縁辺部に配置され，段差にかかるように区画内から竪坑が掘られているのが特徴的である。地下式坑の構築にあたっては，配置に何らかの規制があったことが考えられる。

（１）　掘立柱建物跡

ＳＡ-011（第125図）

区画の南側でSK-221を囲むように位置し，SA-012と重複する。東西２間(3.8m～4.0m)，南北２間(4.2m～4.4m)の南北棟の建物と推定される。桁行方位はN-25°-Eである。柱間寸法は，桁行(南北)方向で1.9m～2.2m，梁間(東西)方向では1.6m～2.2mを測る。柱穴は径28㎝～68㎝の楕円形で，深さは43㎝～99㎝である。比較的掘り込みの深い柱穴が多い。出土遺物はない。

ＳＡ-012（第125図）

SA-011と北側部分で重複する。東西２間以上，南北２間(2.7m)の建物と推定される。東側にもピット群は存在するが，柱穴となるようなピットは確認できなかった。囲いのような構造物であった可能性もある。柱穴は径36㎝～52㎝の楕円形で，深さは50㎝～77㎝である。出土遺物はない。

ＳＡ-013・014（第126図）

第３整形区画の南側へ続く区画内の西側に位置する。ピットの配列から２棟の建物を復原した。

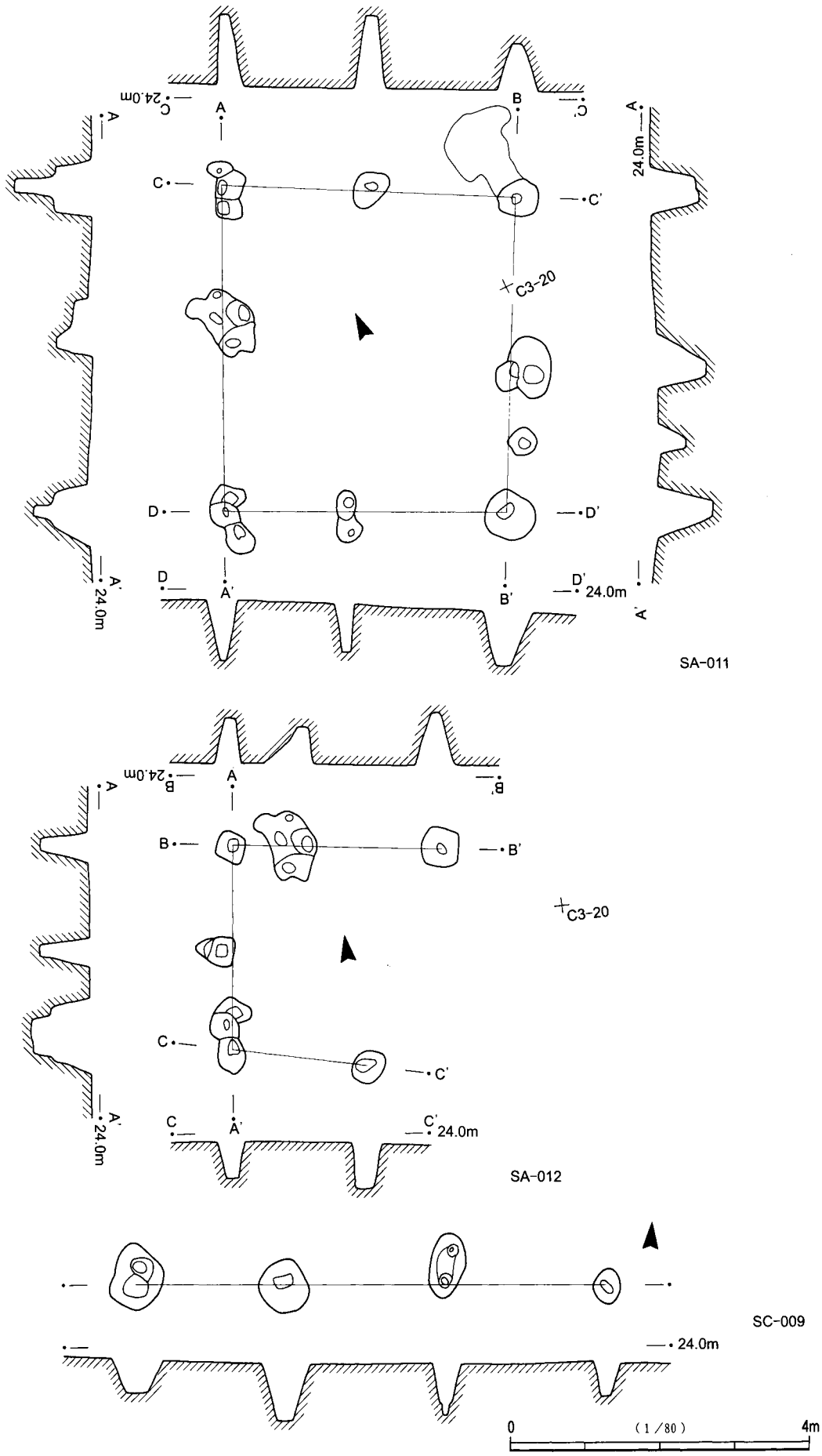
SA-013は，東西２間(3.4m～3.5m)，南北２間(3.1m～3.4m)の建物で，南側柱筋の中央の柱穴が検出されていない。柱間寸法は，南北方向で1.3m～1.8m，東西方向では1.6m～1.9mである。柱穴は，南東隅の柱穴を除いて径30㎝前後の楕円形で，深さは23㎝～58㎝である。出土遺物はない。

SA-014は，東西１間(3.2m)，南北１間(1.5m～1.8m)の建物と推定される。南東隅の柱穴が内側へ入り込んでいる。柱穴は径32㎝～40㎝の楕円形で，深さは46㎝～68㎝である。出土遺物はない。

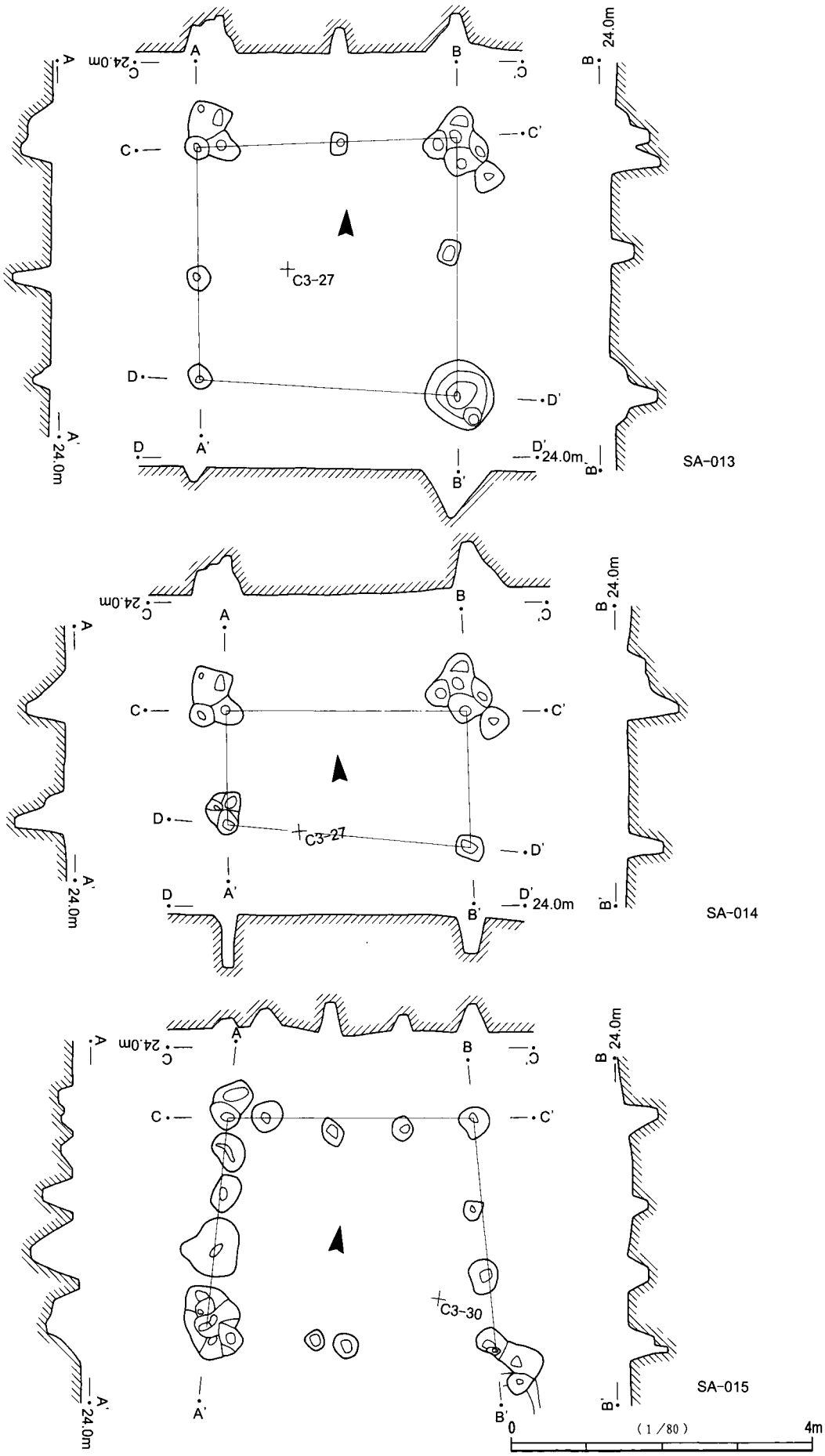
ＳＡ-015（第126図）

南側へ続く区画内の東側に位置する。東西３間(3.3m)，南北３間(2.7m～3.1m)の建物と推定される。南側柱筋には浅いピットはあるが，柱穴は検出されていない。柱間寸法は，南北方向で0.9m～1.2m，東

第124図　第３整形区画と周辺



第125図　第３・掘立柱建物跡(１)及び柵列



第126図　第３・掘立柱建物跡(２)

西方向では1.0m～1.4mを測る。柱穴は径28cm～52cmの楕円形で，深さは20cm～50cmと不規則である。出土遺物はない。

（2） 柵列・ＳＣ-009（第125図）

区画の南側で，南側に広がる別の区画との境に位置する。柱穴は４本で長さは6.4m，柱間寸法は2.0m～2.2mを測る。柱穴は径36cm～68cmの楕円形で，深さは48cm～75cmである。出土遺物はない。

（3） 方形竪穴遺構

ＳＫ-200（第127図）

区画の北西コーナーに位置する。東側にSK-201，南側にSK-202が隣接する。溝SD-039を一部削平して構築されている。平面形態は方形で，規模は東西2.10m，南北2.24m，深さは70cm～80cmである。南壁外側に不整形の掘り込み(深さ12cm)は，ステップ状の出入り口施設と考えられる。出入り口方向を主軸とした場合，方位はN-13°-Eである。壁はやや緩やかに掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。底面の南北壁際中央には，出入り口方向に並行して２基の楕円形のピット(径40cm・深さ29cm，径45cm・深さ36cm)が配置されている。底面には炉などの施設は確認されていないが，粘土ブロックが南西部に散布していた。

覆土中から白磁碗片や銭貨(聖宋元寶)が出土した。

ＳＫ-201（第127図）

SK-200の東側に位置する。溝SD-039を一部削平し構築されている。平面形態は方形で，規模は東西2.50m，南北2.34m，深さは65cm～80cmである。南壁外側の西寄りに設けられている楕円形の浅い掘り込み(径64cm，深さ15cm)は，ステップ状の出入り口の施設と考えられる。出入り口方向を主軸とした場合，方位はN-9°-Eである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。底面の南北壁際中央には，出入り口方向に並行して２基の円形のピット(径34cm・深さ19cm，径24cm・深さ25cm)が配置されている。炉などの施設は確認されていない。覆土中から瀬戸･美濃の縁釉皿片が出土している。

ＳＫ-202（第127図）

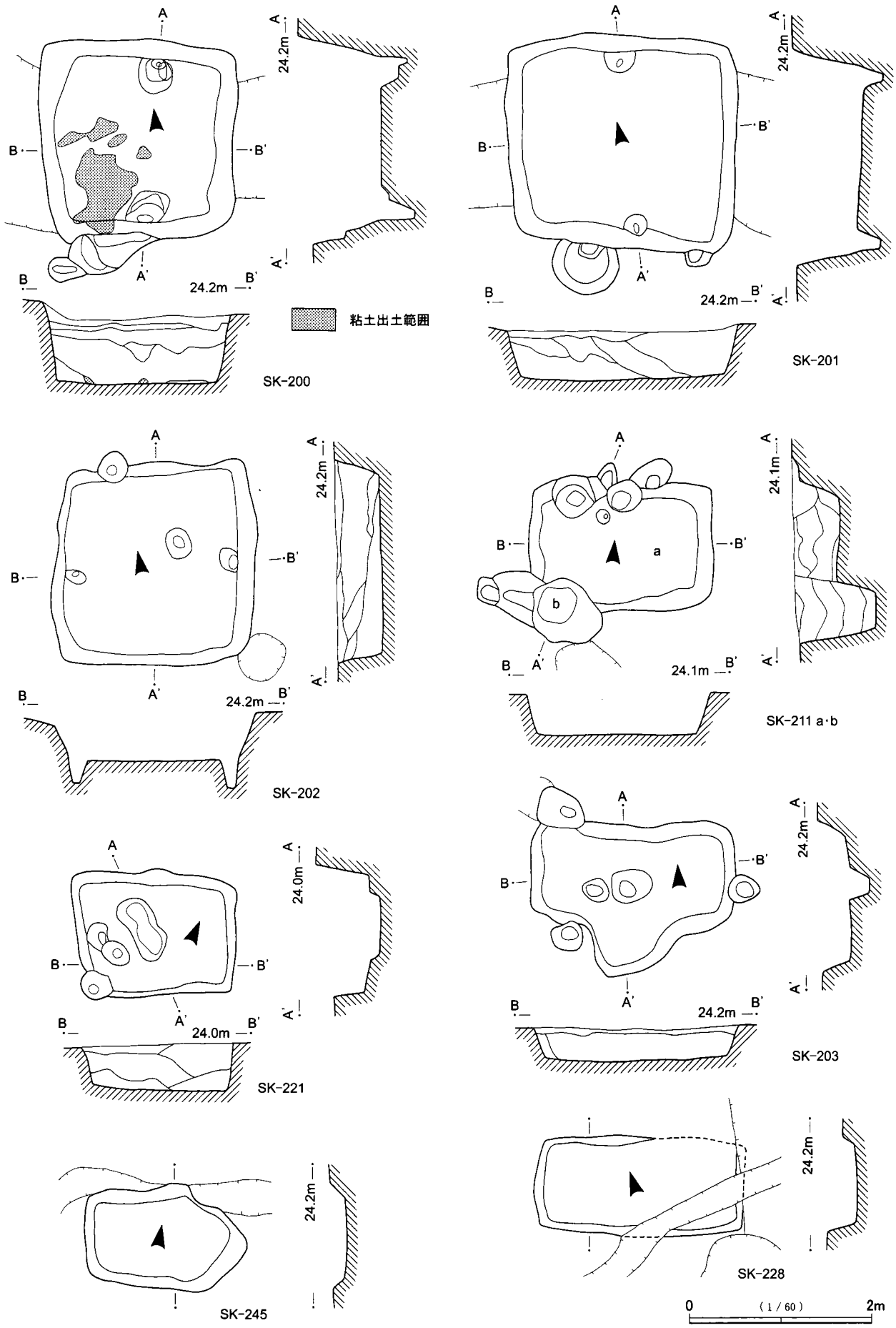
SK-200の南側に位置する。平面形態は方形で，規模は東西2.14m，南北2.24m，深さは28cm～48cmである。西側が低くなっている。主軸方位はN-13°-Eである。出入り口施設は検出されていない。壁はほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。底面の東西壁中央に，２基の楕円形のピット(径24cm・深さ34cm，径16cm・深さ24cm)が配置されている。底面中央にもピット(径30cm・深さ17cm)が１基設けられている。炉などの施設は確認されていない。土器片などが出土したが，図示できるものはない。

（4） 土坑（第127・128図，第12表）

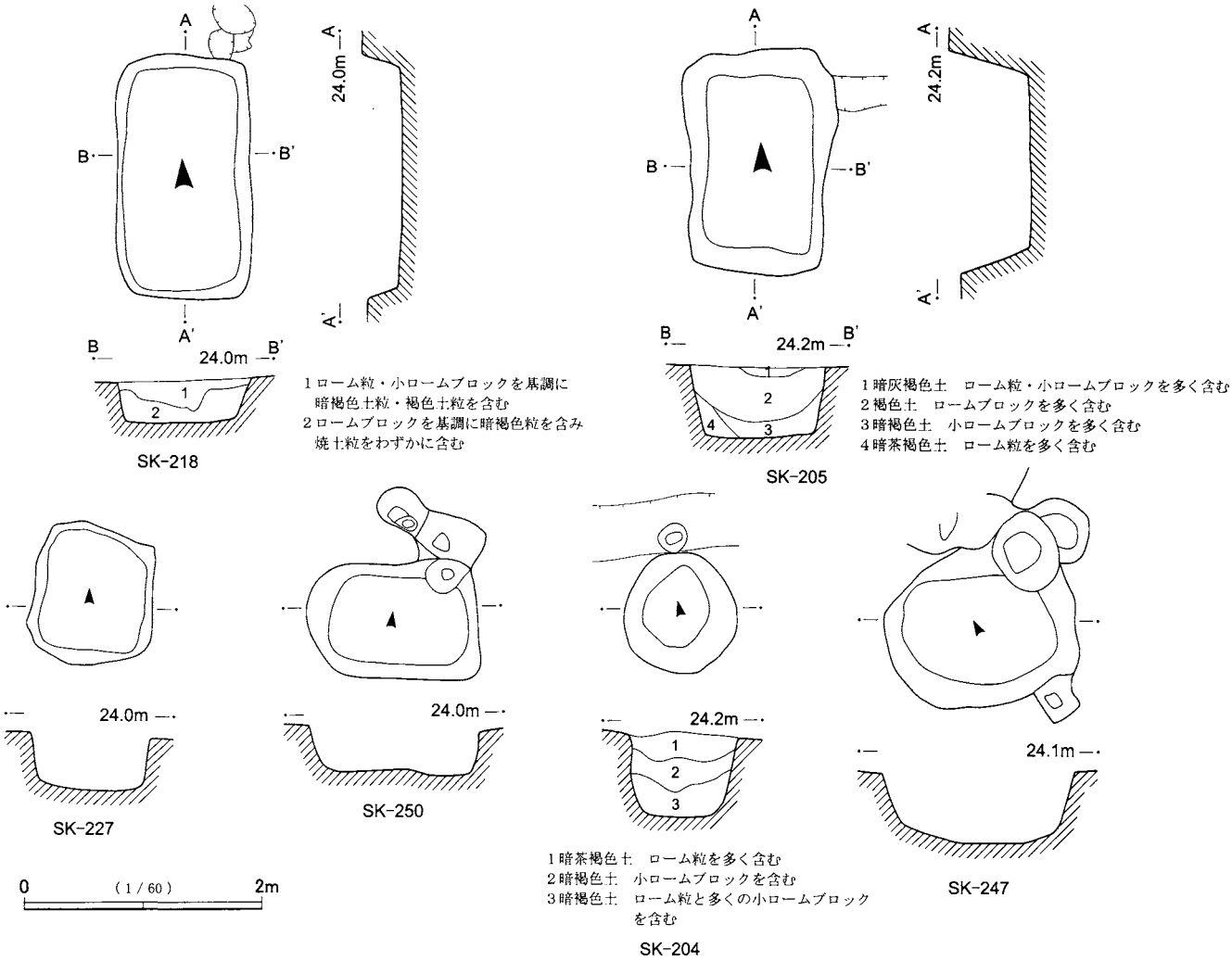
区画のほぼ全域から検出されたが，このうち比較的形態の整った11基について図示した。平面形態は長方形を中心に，不整方形，楕円形などがある。長方形の土坑のうち，SK-203・205・218・228は規模が長軸長2.0m・幅1.0m前後で，底面が平坦であること，覆土の状況から埋め戻されたと判断できる土坑もあることなどから，土坑墓である可能性が高い。長軸方向は南北方向と東西方向に二分される。SK-227のように一辺1m前後の正方形い近い土坑も土坑墓と考えられる。

ＳＫ-211a（第127図）

区画の中央部に位置する土坑墓である。一部がピットと重複し，削平されている。長軸長2.0m・短軸長1.4m，深さは48cmである。長軸方位はE-4°-Nである。やや緩やかに掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒，ローム･ブロックを多く含む層が堆積し，人為的に埋め戻されている。覆土中か



第127図　第３・方形竪穴遺構及び土坑(１)



第128図　第３・土坑(２)

ら青磁碗，鉄釉壺片，瀬戸・美濃縁釉小皿が出土した。

（５）　地下式坑

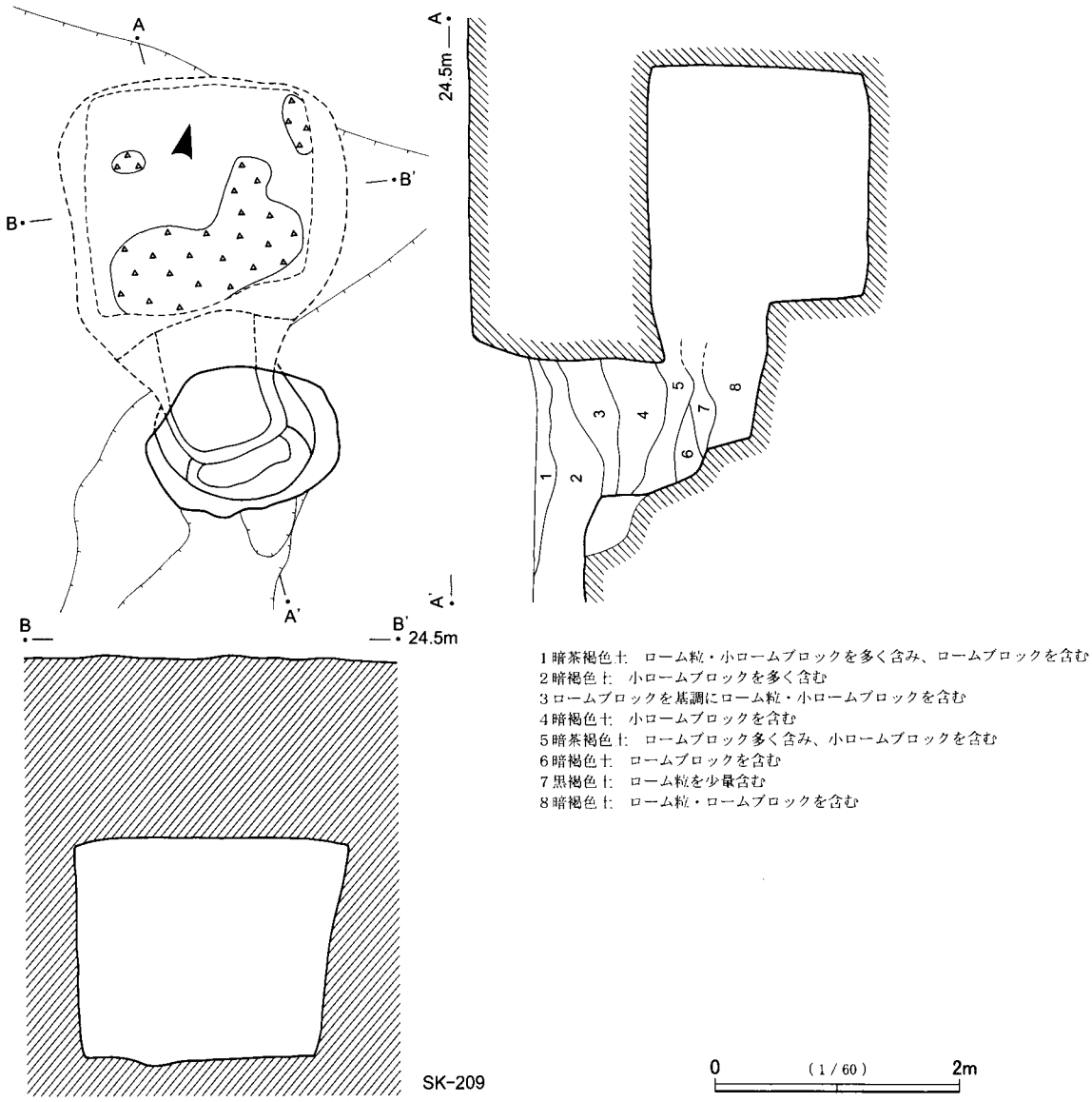
ＳＫ-209（第129図，図版22）

区画の西側縁辺部に位置する。周辺には土坑墓SK-218などが配置されている。南側から竪坑へ溝状遺構が続き，上面が一部削平されている。全体に遺存状態は良好で，主室の天井部もよく遺存していた。

主軸方位はN-17°-Wである。竪坑は，径1.22m×1.56mの楕円形で，途中に段を形成し，深さは2.35mである。開口部は幅80cm，高さは85cm，主室底面との段差は75cmである。主室は方形で，幅(東西)1.76m・奥行(南北)1.85m・高さ1.75mを測り，床面積は約3.26㎡である。確認面からの深さは3.3mを測る。奥壁はほぼ垂直だが，東側壁はやや開くように立ち上がる。主室底面は凹凸があり，貝層が投棄され流れ込んでいた。貝類の分析結果については，附章で述べる。覆土中からカワラケが出土した。

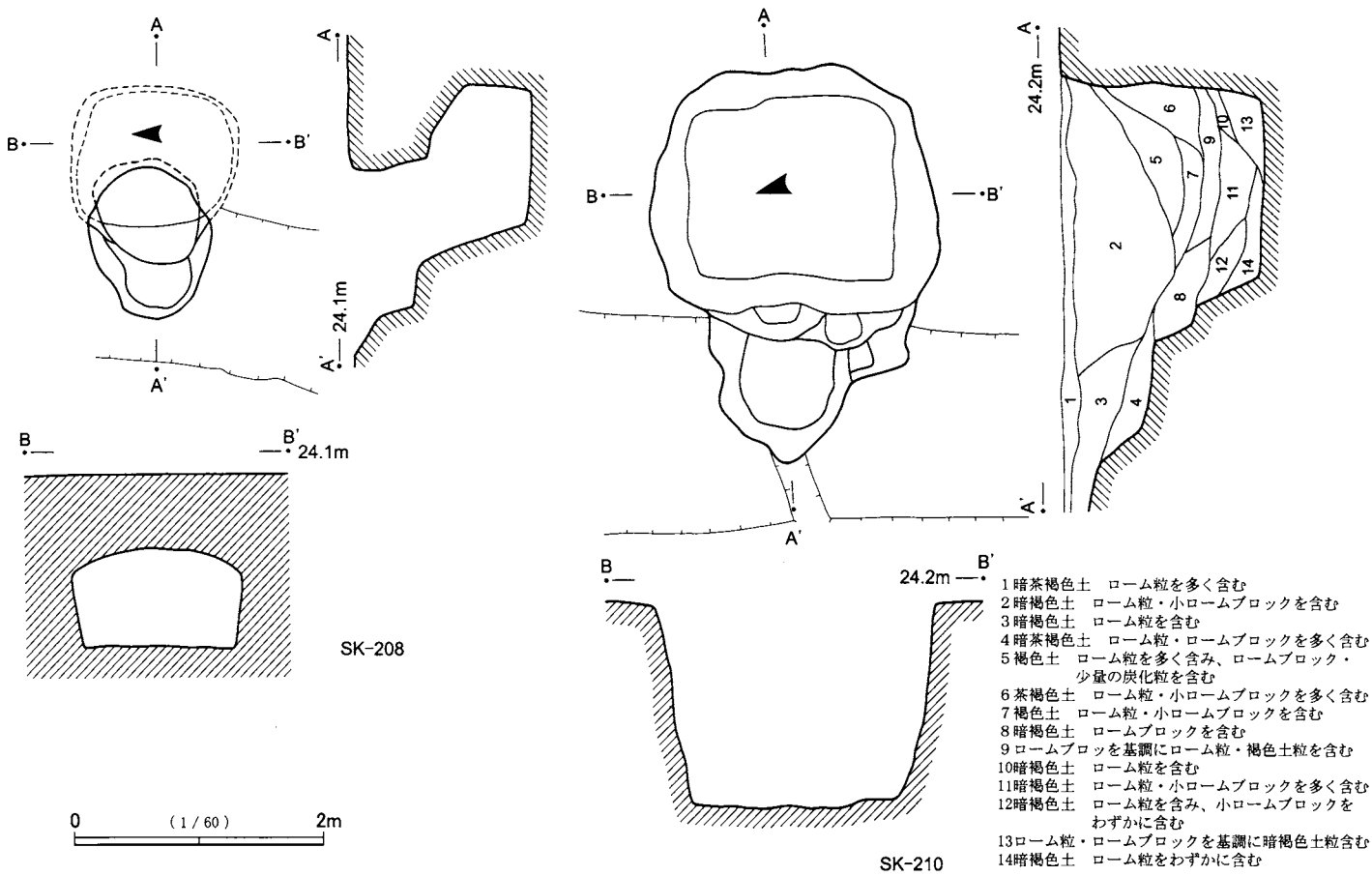
ＳＫ-208（第130図，図版22）

区画の東側縁辺部で，SK-210の南側に隣接している。溝SD-025の上面を削平して構築され，周辺には土坑やピットが配置されている。小規模な遺構で，竪坑に近い天井部の一部が崩落していた。



第129図　第３・地下式坑(１)

主軸方位はＥ-3°-Ｓである。竪坑は，主室に近い部分の天井部がすでに一部崩落しており，現状では径1.0m×1.26mと大きく開いている。深さは54cmである。開口部は幅80cm，主室底面との段差は86cmである。主室は隅丸方形で，南壁側がやや張り出している。幅(南北)1.24m・奥行(東西)1.14m・高さ84cmを測り，床面積は約1.41㎡である。確認面からの深さは1.5mを測る。奥壁は垂直に立ち上がるが，天井部との境は明瞭ではない。南北壁はやや開くように立ち上がり，天井部はアーチ型をなす。主室底面は平坦である。主室の一部がSK-210と接している。覆土中から常滑甕片が出土している。



第130図　第３・地下式坑(２)

ＳＫ-210（第130図）

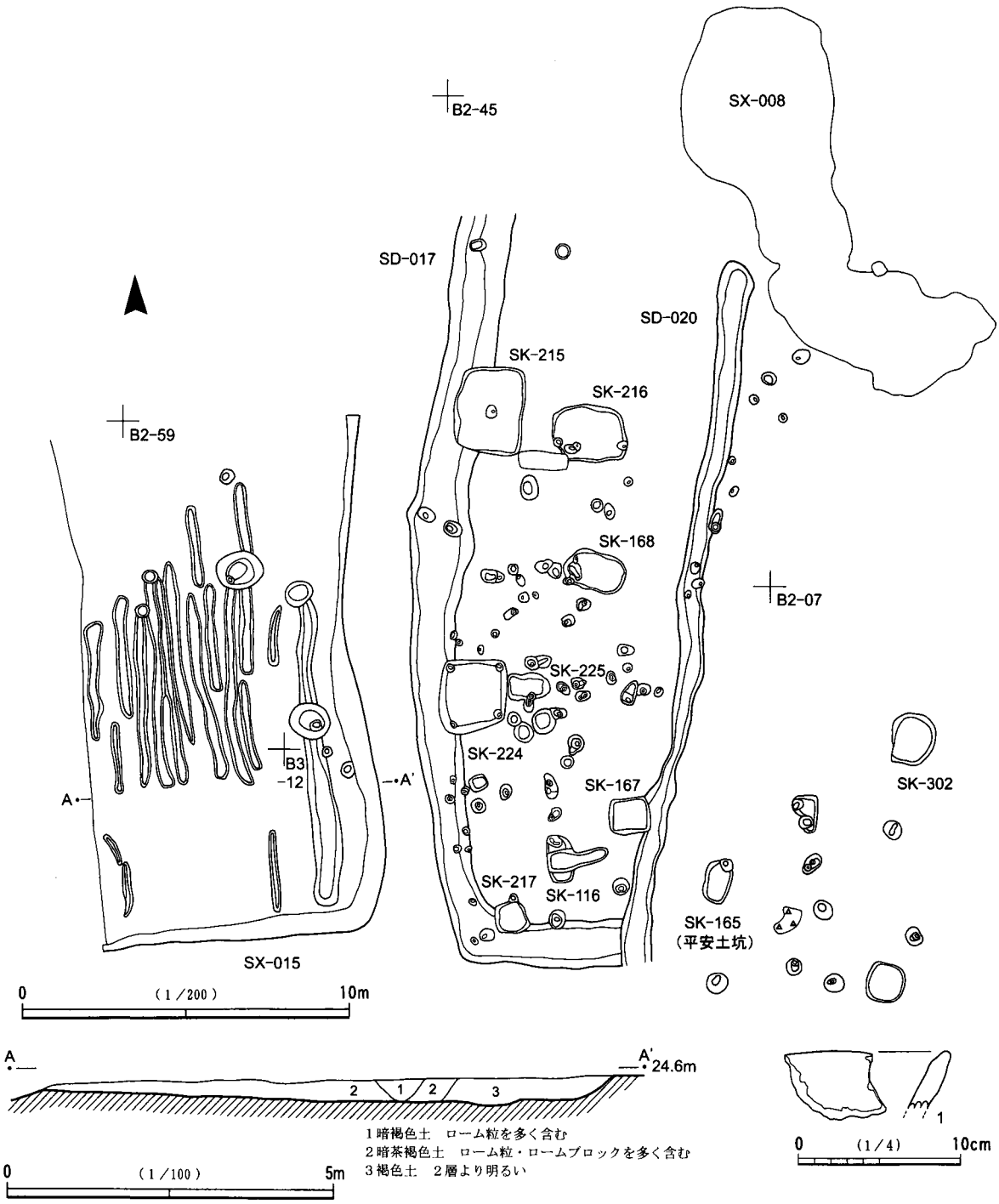
区画の東側縁辺部に位置する。天井部はすでに崩落し，竪坑の一部と主室は遺存している。竪坑にも溝SD-040が延びており，天井部崩落後に別の施設として改変されたと考えられる。

主軸方位はＥ-16°-Ｓである。竪坑は現状で径1.04m，深さは72cmである。開口部は幅75cm，主室底面との段差は75cmである。途中にステップ状の足場を設けている。主室は方形で，幅(南北)1.64m・奥行(東西)1.47m・床面積約2.41㎡である。確認面からの深さは1.62mを測る。主室底面はほぼ平坦である。

本遺構は，壁から天井部に接する部分が全く残っていないことや，主室内の覆土下部に天井部のロームが堆積していないことなどから，構築後の早い時期に天井部が崩落し，その処理も速やかに行われたと考えられる。その後は，溝SD-040の水溜め施設として再利用されたことも考えられる。覆土中から常滑甕片が出土している。

4　第４整形区画と周辺（第131図）

調査区の中央西側で，第３整形区画の西にやや離れて位置する。上面を大きく削平されているため段差が確認されず，形態や規模等は不明である。東西両側に溝SD-017・020が南北方向に走り，方形竪穴遺構や土坑の一部を削平している。中央に方形竪穴遺構・土坑・ピット群・火葬施設がまとまって配置されていることから，その範囲をおおむねの区画と判断したが，SD-020の東側へ広がる可能性もある。さらに西側には，段差を形成し畝状の高まりが集中している区画(SX-015)が位置しているが，土坑やピット等が配置されていないことから，これまでの整形区画とは異なる性格の遺構であることも考えられる。なお，周



第131図　第４整形区画と周辺及び出土遺物

辺に位置する方形竪穴遺構SX-005・SK-130，大型の不整形土坑SX-008や，区画からは離れて存在する土坑もここでまとめて報告する。

区画内は，方形竪穴遺構２基，土坑６基，火葬施設１基，ピット群で構成されているが，他の区画よりも遺構の密集度は低い。ピット群から掘立柱建物や柵列は復原できなかった。

（１） 方形竪穴遺構

ＳＫ-215（第132図）

区画の北西側に位置し，SK-216に隣接する。上面を大きく削平されているため，壁高は低くなっている。平面形態は長方形で，規模は長軸長(南北)2.62m，短軸長(東西)2.12m，深さは28cmを測る。主軸方位はN-5°-Eである。出入り口施設は検出されていない。ほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。中央にピット(径34cm×42cm，深さ43cm)が配置されている。底面中央の東壁際から炭化材が検出されたが，炉などの施設は確認されていない。出土遺物はない。

ＳＫ-224（第132図）

区画の中央西寄りに位置し，遺存状態は良好である。平面形態は不整方形で，規模は東西2.08m・南北は東側で1.74m，西側では2.04mと東壁が短くなっている。深さは53cm～60cmを測る。南北方向を主軸とした場合，方位はN-1°-Wである。出入り口施設は検出されていない。壁はやや緩やかに掘り込まれ，底面は平坦である。底面の四隅に径18cm～28cm，深さ28cm～33cmの円形のピットをもつ。炉などの施設は確認されていないが，上屋が存在していたと考えられる。土器片などが出土したが伴うものはない。

ＳＸ-005（第133図，図版23）

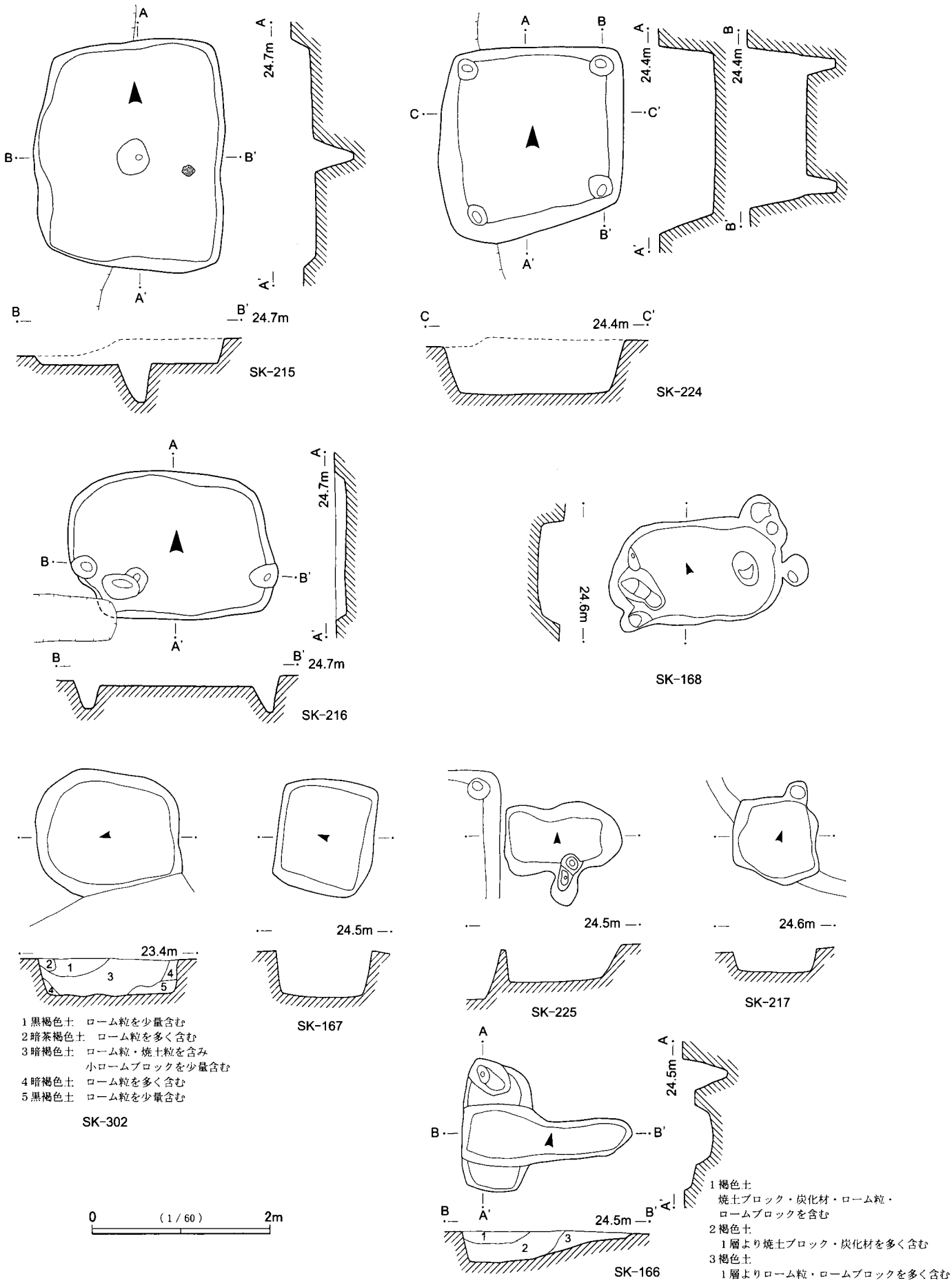
調査区の中央西寄り，Ｂ２グリッドに位置する。平安時代の竪穴住居跡SB-078を削平している。平面形態は方形で，規模は長軸長(南北)2.80m・短軸長(東西)2.76m，深さは64cmを測る。主軸方位はN-5°-Wである。出入り口施設は検出されていない。壁は東側部分を除いて，ほぼ垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。底面に炉などの施設やピットは確認されていない。覆土はローム・ブロックを含む層が主体で，人為的に埋め戻されている。土器片などが出土したが伴うものはない。

ＳＫ-130（第133図）

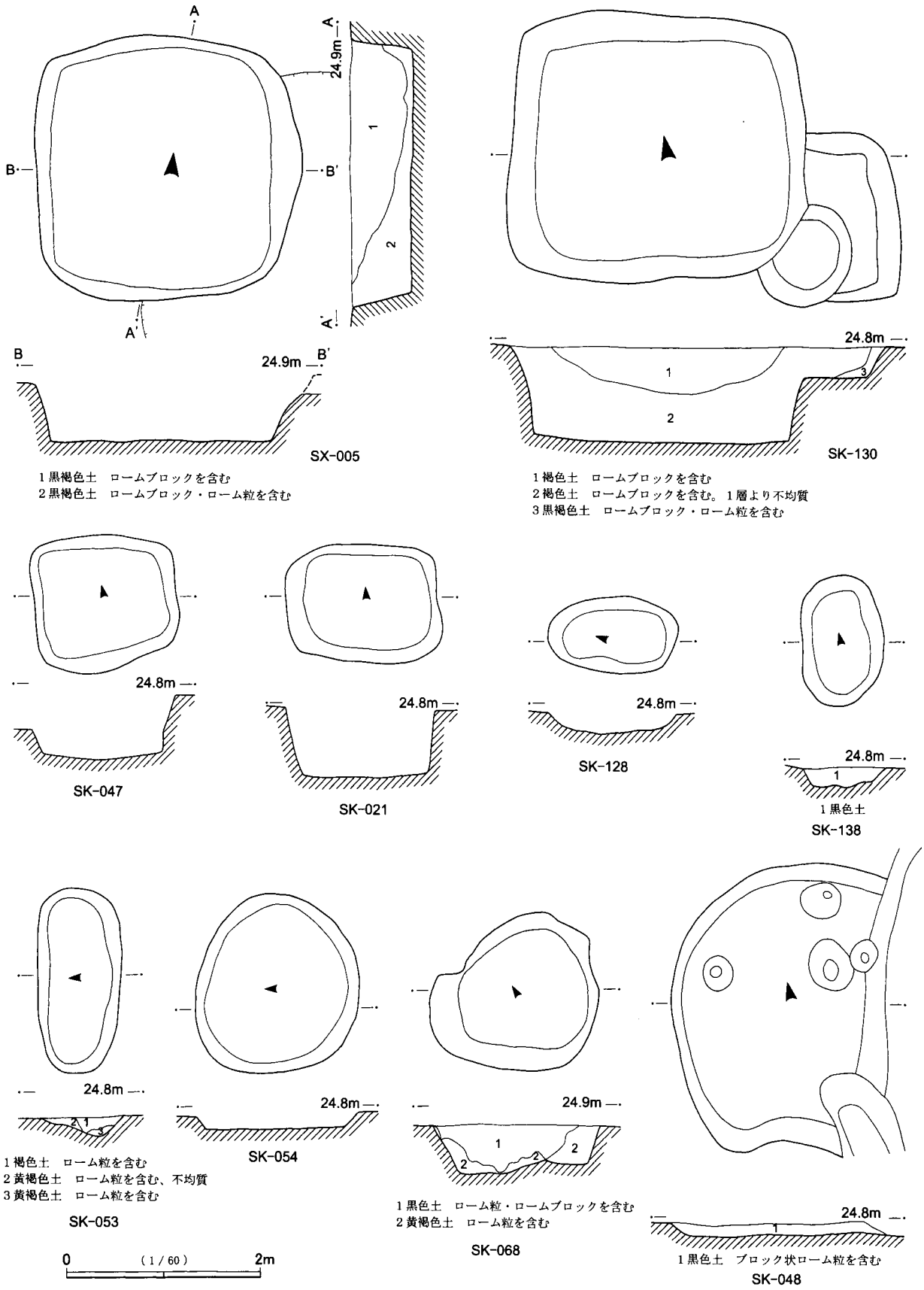
調査区の中央西寄り，Ｂ２グリッドに単独で位置する。平面形態は方形で，規模は長軸長(東西)3.04m・短軸長(南北)2.74m，深さは86cm～101cmを測る。主軸方位はW-15°-Nである。東壁側には方形の土坑状の掘り込み(幅0.94m×1.72m，深さ30cm)と，楕円形の土坑(径1.08m，深さ43cm)が配置されており，出入り口施設と考えられる。壁は緩やかに掘り込まれ，底面はほぼ平坦である。底面に炉などの施設やピットは確認されていない。覆土はローム・ブロックを主体とする層で，人為的に埋め戻されている。土器片などが出土したが伴うものはない。

（２） 土坑（第132・133図，第12表）

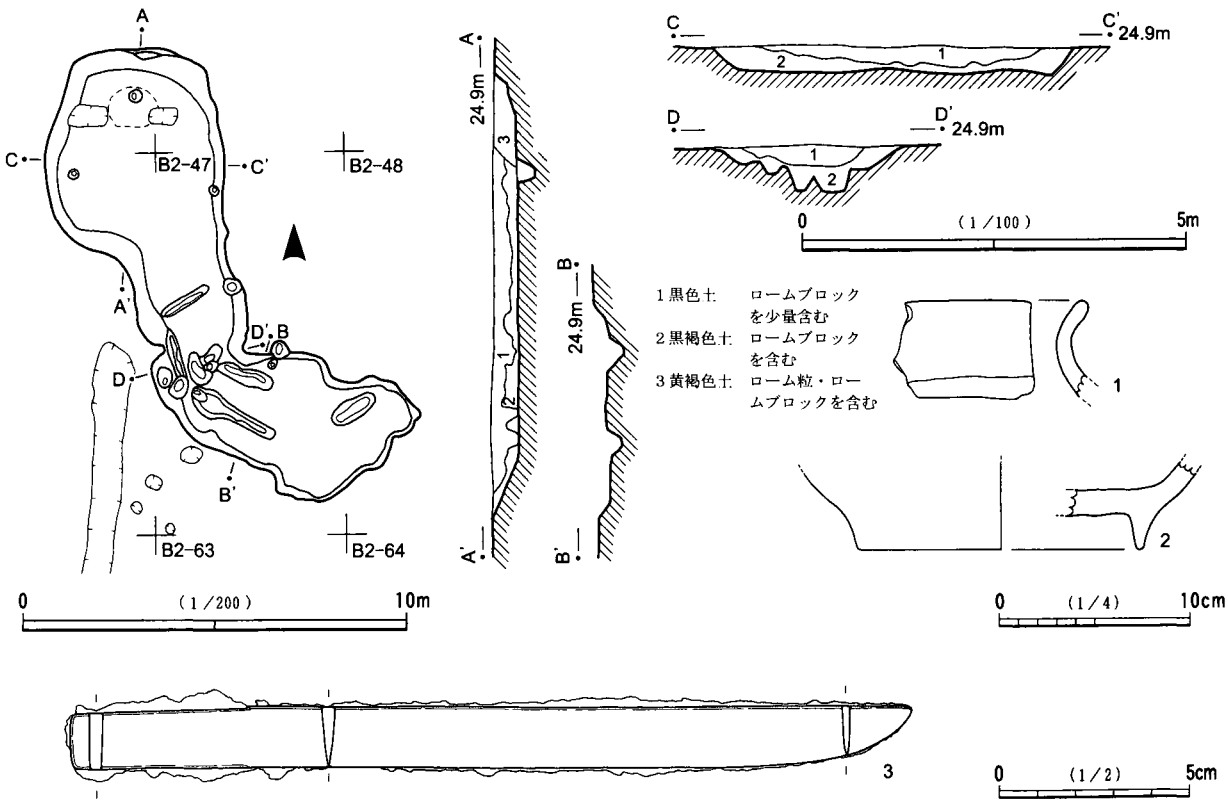
区画内には６基の土坑がやや散漫に分布している。このうち，SK-216はSK-215に隣接する比較的大型の不整形の土坑で，規模は1.68m×2.28m，深さは12cmと浅い。東西の壁際にピットが配置されている。覆土はローム粒やローム・ブロックを含む黒褐色土である。SK-167は，規模1.10m×1.28m，深さ53cmの方形の土坑で，土坑墓の可能性が高い。SK-302はやや離れて位置しているが，平面形態や覆土の状態などから土坑墓と考えられる。



第132図　第４・方形竪穴遺構(１)及び土坑(１)，ＳＫ-166



第133図　第４・方形竪穴遺構(２)及び土坑(２)



第134図　第４・ＳＸ-008及び出土遺物

（３）　火葬施設・ＳＫ-166（第132図）

区画の南端に位置する。上面が削平され，燃焼部の北側をピットで削平されている。平面形態は，燃焼部と通風坑が連結したＴ字型である。規模は，燃焼部が76cm×142cm・深さ13cm，通風坑では46cm×192cm・深さ34cmを測る。主軸方位はW-10°-Ｓである。覆土には炭化材，焼土ブロックが含まれていたが，骨粉等は出土していない。

（４）　ＳＸ-015（第131図）

第４整形区画の西側に位置する整形区画であるが，西側はすでに削平され，北側も範囲が判然としなくなる。また，区画を構成する遺構も他の整形区画とは異なり，方形の土坑やピット群は配置されておらず，中央部で南北に延びる畝状の高まりが多数が検出された。平面形態は方形になると思われ，規模は現状で東西８ｍ・南北15.5ｍを測る。緩やかに35cmほど掘り込まれ段差を形成している。区画の東側の溝(幅50cm～90cm，長さ9.2ｍ，深さ5cm～9cm)は，規模や方向性からSD-018に連続する可能性も考えられる。畝状の遺構は15条検出されている。畝の規模は，長さ1.82ｍ～6.25ｍ，幅13cm～43cm，高さは3cm～7cmと一定していないが，南側では直線的に並んでいる。畝間も広狭があり特に規則性は認められず，性格は不明である。遺物は，溝から常滑の甕・捏鉢片が出土した。

（５）　ＳＸ-008（第134図，図版23）

第４整形区画の北東に位置する大型の不整形竪穴である。南北に長い北側部分と，東西に長い南側部分が連結したような形態である。規模は，長軸長12.9ｍ，短軸長は中央部で2.15ｍ，深さは北側37cm・南側27cmを測る。全体に緩やかに掘り込まれ，底面はやや凹凸がある。底面には浅いピットや溝が不規則に配置されている。覆土はローム・ブロックを含む黒色土や黒褐色土が主体となる。遺物は北側部分を中心に，

土器片や常滑の破片(１・２)や銭貨(開元通寶)，小刀(３)が出土している。

小刀はほぼ完形品で，全長22.05cmを測る。刃部(長さ17.4cm・幅1.5cm・背幅1.8mm～4.2mm)から茎部(長さ4.65cm・幅1.4cm～1.54cm・厚さ4.5mm)は直線的に伸び，関は不明瞭である。茎部に目釘穴はない。北側部分の西壁際の覆土中からの出土である。

5　第５整形区画と周辺（第135図，図版19)

調査区の北西部に位置し，台地北側斜面に面した緩斜面を地山整形し，弧状の区画を形成している(SX-002)。北側はすでに削平され，西側も近世の溝SD-002に攪乱を受けている。北側はさらに斜面に沿って段を形成していた可能性はある。規模は現状で，東西25m・南北5.5mである。緩やかに60cm掘り込まれ，整地面はほぼ平坦である。整地面には区画に平行して溝(長さ16m・幅1.5m・深さ41cm～62cm)が配置され，東側で北側斜面方向に屈曲している。この溝からは２の常滑の甕片が出土した。この甕は第１整形区画のSK-115・175から出土した破片と接合した。また，西側のピット群はSD-002に伴う近世の遺構である。遺物は，覆土中から瀬戸･美濃，常滑の中世陶器やカワラケが出土している。

なお，第５整形区画の南西側には，斜面上や堀内に土坑や火葬施設が単独で分布しているが，ここでまとめて報告する。土坑については第12表にまとめた。

（１）　火葬施設・ＳＫ-001（第135図，図版23)

SD-001の廃絶後に堀底に構築された遺構である。上面をすでに削平されている。平面形態は，燃焼部と通風坑が連結したＴ字型である。規模は，燃焼部が85cm×135cm・深さ37cm，通風坑では33cm×210cm・深さ23cmを測る。主軸方位はN-57°-Wである。燃焼部の底面はほぼ平坦で，通風のための溝は検出されていない。燃焼部の底面から通風坑にかけて焼土が堆積し，炭化材もよく遺存していた。また，骨粉も35cm×40cmの範囲で燃焼部から出土している。

6　第６整形区画と周辺（第136図，図版19)

調査区の西端に位置し，台地西側斜面に面した緩斜面を地山整形し，弧状の区画を形成している(SX-004)。西側は崖面にかかり，北側の一部は近世の道路状遺構により削平されている。規模は現状で，南北27m・東西5.5mである。傾斜をもって掘り込まれ，整地面はやや凹凸がある。整地面からは火葬施設とピットが検出された。遺物は覆土中から，１のカワラケ，３の燧金などが出土している。

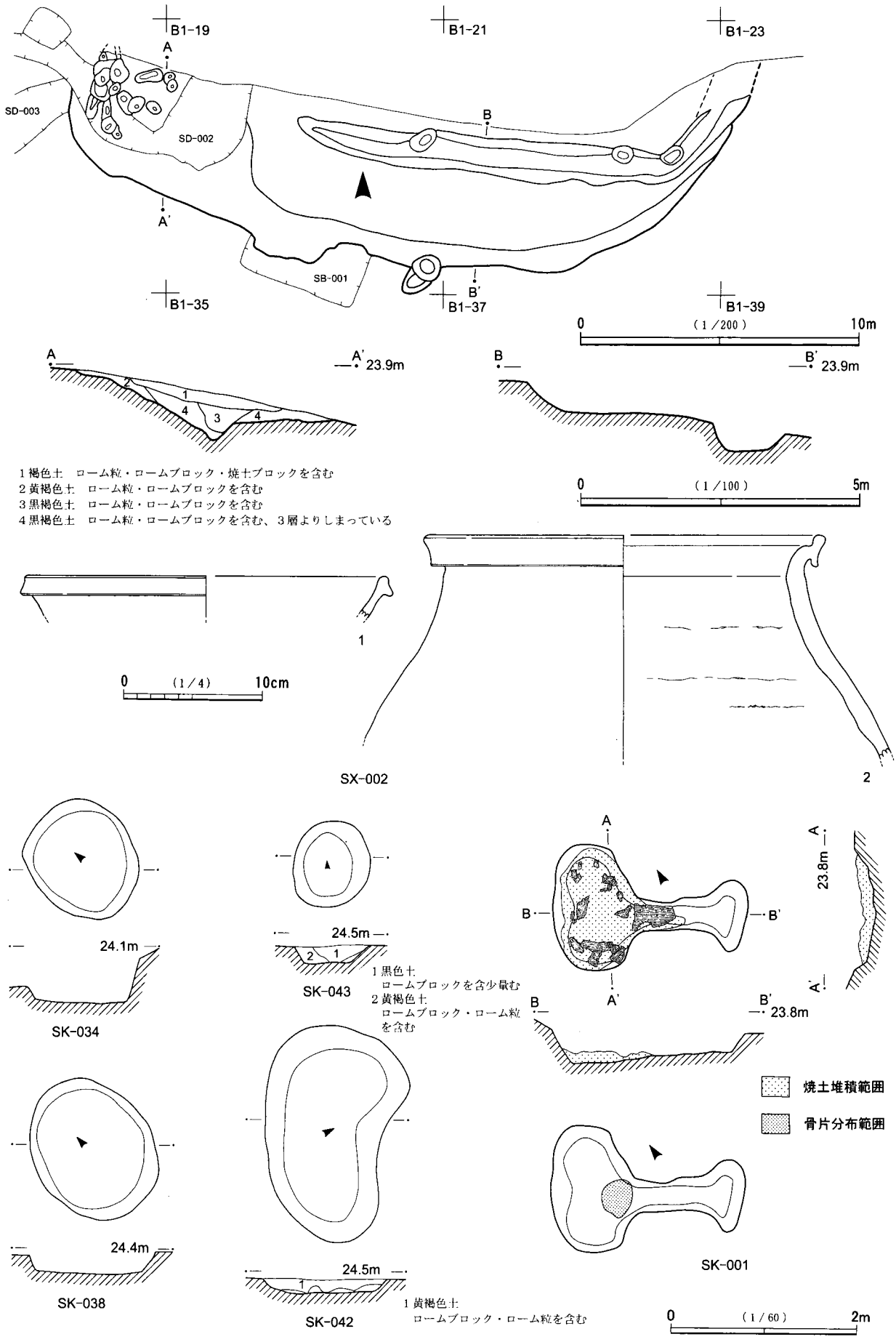
なお，第６整形区画の南東側には，土坑や大型不整形土坑が位置しているが，ここでまとめて報告する。土坑については第12表にまとめた。

（１）　火葬施設・ＳＫ-010（第136図，図版23)

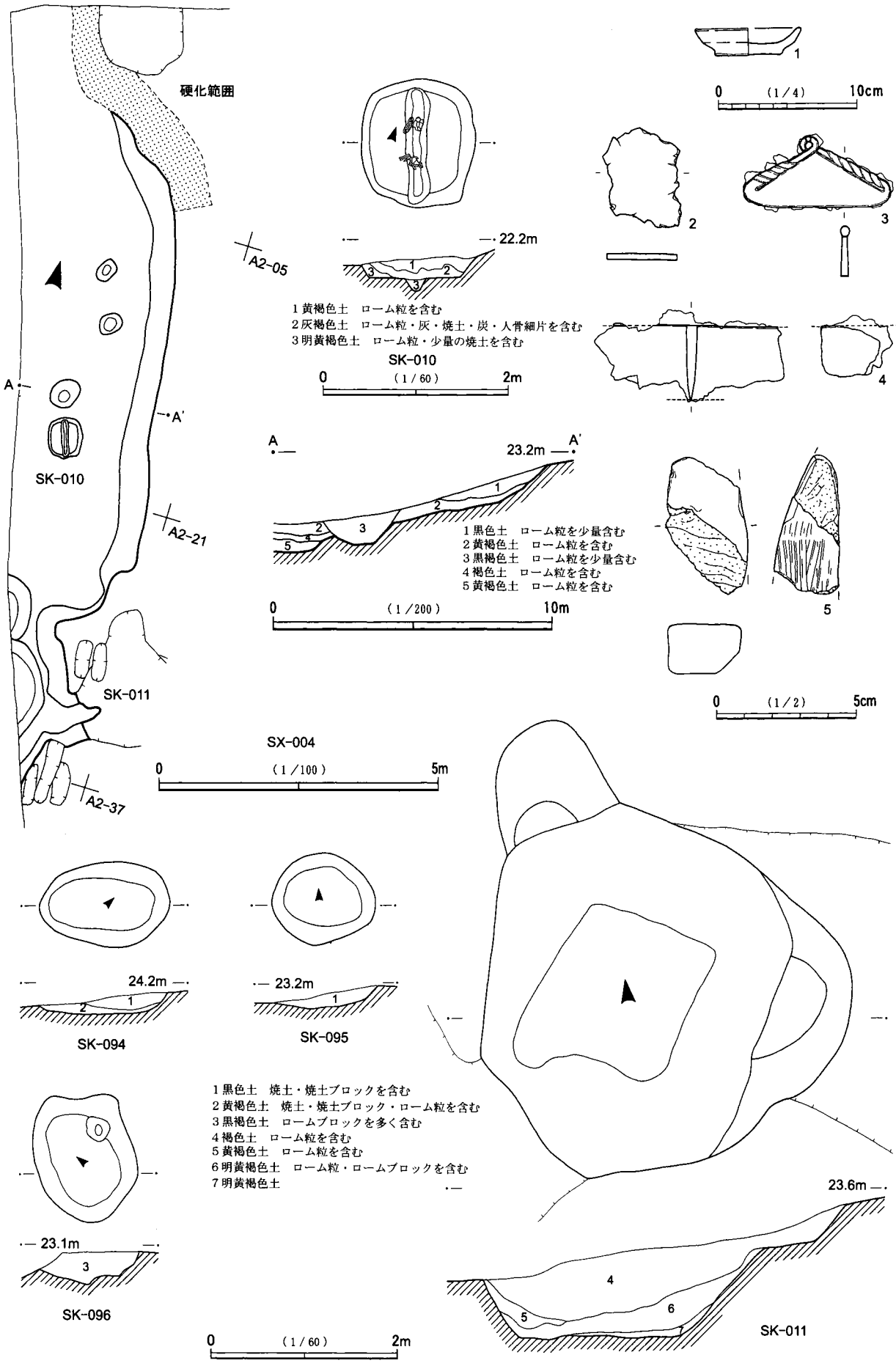
区画の中央南寄りに位置し，上面をやや削平されている。平面形態は隅丸方形で，規模は長軸長(南北)1.40m・短軸長(東西)1.24m，深さは23cmを測る。主軸方位はN-19°-Wである。壁は緩やかに掘り込まれ，底面中央には長軸方向に溝(長さ125cm・幅22cm・深さ12cm)が設けられている。この溝の上面からは火葬骨の一部が出土している。覆土には焼土・炭化材・灰・骨粉が含まれており，この場で火葬したと考えられる。遺物は，覆土中から２の鉄片や常滑甕片が出土した。

（２）　不整形土坑・ＳＫ-011（第136図)

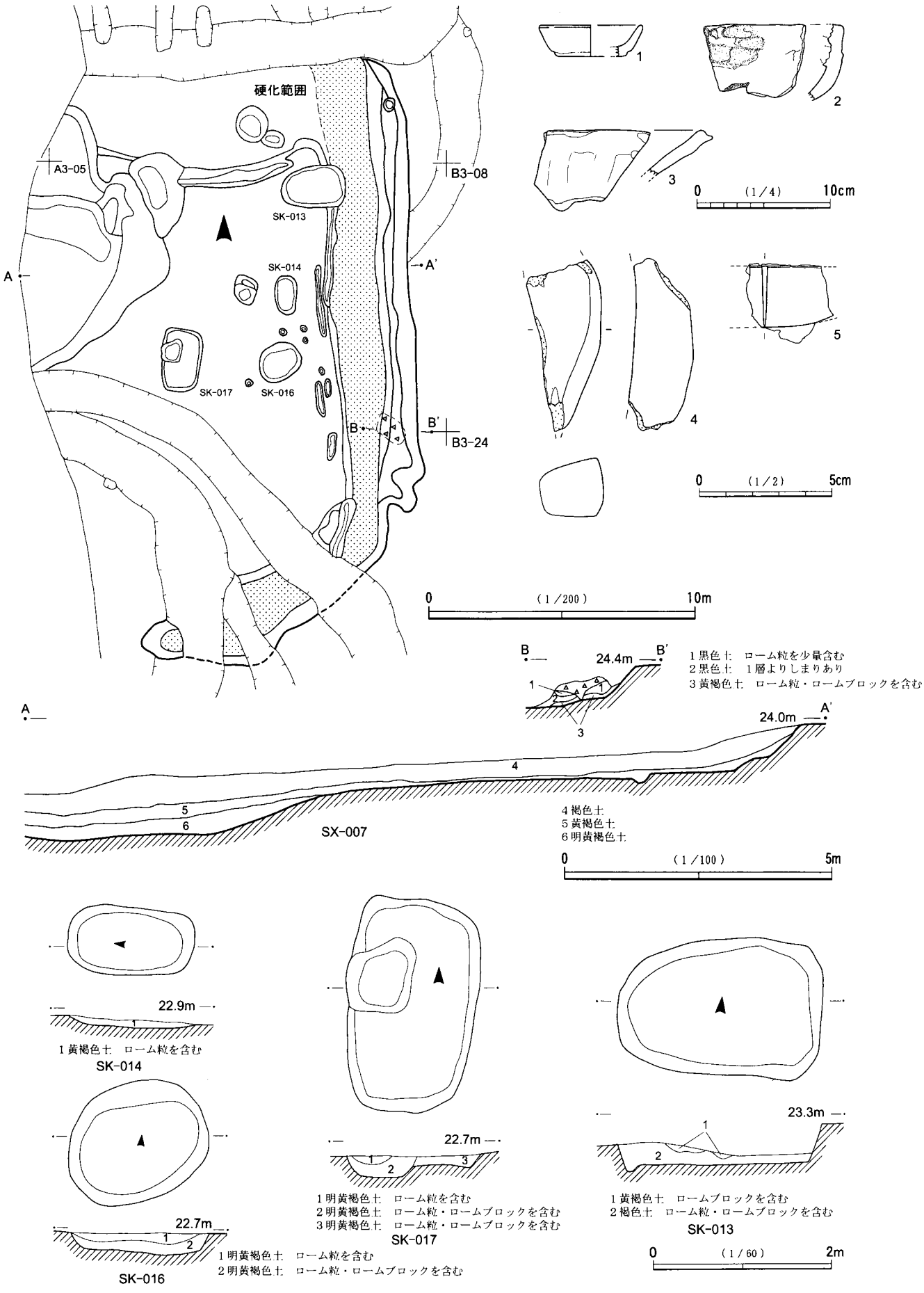
区画の南端に隣接し，２基の土坑と重複している。規模は，長軸長3.8m・短軸長3.1m，深さは95cmを



第135図　第５整形区画及び出土遺物



第136図　第６整形区画及び出土遺物



第137図　第７整形区画及び出土遺物

測る。壁は緩やかに掘り込まれ，底面は平坦である。覆土はローム粒を含む褐色土が主体である。覆土中から土器片などが出土したが伴うものはない。なお，本土坑の西側からカワラケが出土している。

２は鋳鉄の破片である。薄い板状になっている。現存長3.65cm×2.8cm・厚さ2mmである。３は上端に環をもつ燧金である。横幅5.3cm・縦幅2.6cm・厚さ3mmを測る。環は径7mmで断面(径2mm)は円形である。重量14.18ｇ。整地面の覆土中から出土した。４は刀の刃部片である。現存長9.3cm・幅2.7cm・背幅3.5mmを測る。整地面の覆土中からの出土である。５は凝灰岩製の砥石で，最大長4.1cm，最大幅2.8cm，最大厚1.7cm，重量39.33ｇを測る。

7　第７整形区画（第137図，図版20）

調査区の西南端に位置している。台地西側斜面に面した緩斜面を地山整形し，区画を形成している(SX-007)が，北側をSD-005に南側をSD-007・008に，それぞれ削平されている。さらに，SD-009から連続する道路状遺構が東端を走り，本来の形態や規模は判然としない。この道路状遺構は，土層の堆積状態から判断して，整形区画が埋没する以前に構築されていたことがわかる。整形区画の段差を利用しており，東側の段差はあまり改変されずに本来の形態を保っている可能性もある。現状の規模は，南北22m・東西14.5mである。整地面は平坦で，４基の土坑と小ピットで構成されている。土坑については第12表にまとめた。西側はさらに一段下がり，整地面を形成している。SD-008の西側にも同様の平坦面が確認されており，整形区画は斜面際まで段差を形成しながら広がると思われる。また，段差際に貝類が投棄されているが分析結果については，附章で述べる。遺物は，中世陶器，カワラケ，砥石，スラグ，銭貨(元豊通寶)などが整地面を中心に出土している。

４は凝灰岩製の砥石である。最大長5.9cm，最大幅2.7cm，最大厚2.1cm，重量24.96ｇを測る。５は鉄製小刀の刃部片である。現存長3.3cm，身幅2.3cm，厚さ2mmを測る。

第４節　堀跡，溝状遺構

台地の中央から西側にかけての区域に，堀跡や溝状遺構が検出された。西側では，SD-001のような堀跡やSD-005・009の比較的規模の大きな溝が，台地縁辺部に位置する弧状の台地整形区画との間に設けられている。これらの遺構は，台地北西部から西部にかけての区域に広がっており，整形区画と有機的に関連した施設の可能性が高い。台地中央部を南北に走るSD-017のように，北側で半円形に屈曲する部分を設けるなど，曲輪的な形態をとる溝もある。また，SD-024は方向性からみて，SD-036から連続して直線的にSD-017まで延び，道路状遺構と溝を連結している。これらの遺構は形態や位置は様々で，その性格も堀切などの防御施設・区画溝・排水用などが考えられるが，いずれも台地整形区画と密接に関連して配置されていると思われる。このなかから，代表的な溝を以下に説明する。

ＳＤ-001（第138図，図版17・18）

調査区の北西端，台地が舌状に北西側へ張り出す付け根部分に位置する堀跡で，台地中央部と舌状部を分ける堀切である。規模の大きな堀と，それに連続する溝で構成されている。堀は，第５整形区画(SX-005)の南西端付近から，やや曲線的に南西方向に延びている。全長34.3m，幅4.2m～6.5m，深さ1.02m～1.78mを測る。堀は，やや緩やかに掘り込まれ，西側では段差が形成されている。断面は箱薬研に近い形態である。堀底には４箇所に仕切が設けられ，南側の仕切が最も深く作られている。なお，堀底の北側に

は堀の廃絶後に，火葬施設・SK-001が設けられている。遺物の出土は多く，白磁碗，青磁碗，瀬戸・美濃，常滑，銭貨が覆土中から出土している。また，図示できなかったが，緑釉陶器の小片が２点出土した。

堀の南端から続く溝は，南方向に直線的に9.5m延び，その地点で西方向にほぼ直角に屈曲するが，SD-009に西側を削平されている。現状で長さ17.2m，幅1.6m～3.2m，深さ40cm～50cmを測る。

ＳＤ-003（第138図）

SD-001に沿うように西側0.2m～1.2mに位置する溝で，北側は第５整形区画に削平されている。北東から南西方向に曲線的に延びている。現状で長さ41.3m，幅0.7m～2.2m，深さ56cmで，逆台形に掘り込まれている。覆土中から常滑甕・捏鉢片が出土した。

ＳＤ-005（第139図）

調査区の西端中央，第６・第７整形区画の中間に位置する。北側でSD-001を，南側でSD-009と第７整形区画をそれぞれ削平している。東側部分(長さ13.1m・幅2.1m～3.7m・深さ42cm)は南北方向に延び，南側でほぼ直角に屈曲し，13.1m西方向の台地斜面に向かっていく。北側は２条に分かれ，北西方向にやや蛇行しながら16mほど延び，次第に幅が狭くなっていく。遺物は，青磁碗，瀬戸・美濃，常滑甕，銭貨が覆土中から出土している。

ＳＤ-007・008（第139図）

調査区の西南端で，第７整形区画の南側を削平している。南側から曲線的に西側斜面に向かって走る溝である。SD-007は現状で長さ15.8m，幅1.4m～2.3m，深さ52cmである。SD-008は現状で長さ12.5m，幅1.8m～2.6m，深さ1.16m～1.72mで，断面Ｖ字形に掘り込まれている。覆土中に貝が投棄されており，分析結果は附章に記載した。覆土中から常滑甕片が出土している。

ＳＤ-009（第139図）

調査区の西端中央，SD-005の内側を南北方向に走る浅い溝である。SD-001の西端部分を削平している。現存で長さ21.1m，幅1.9m～2.9m，深さ12cm～30cmを測る。覆土中から常滑甕片が出土した。

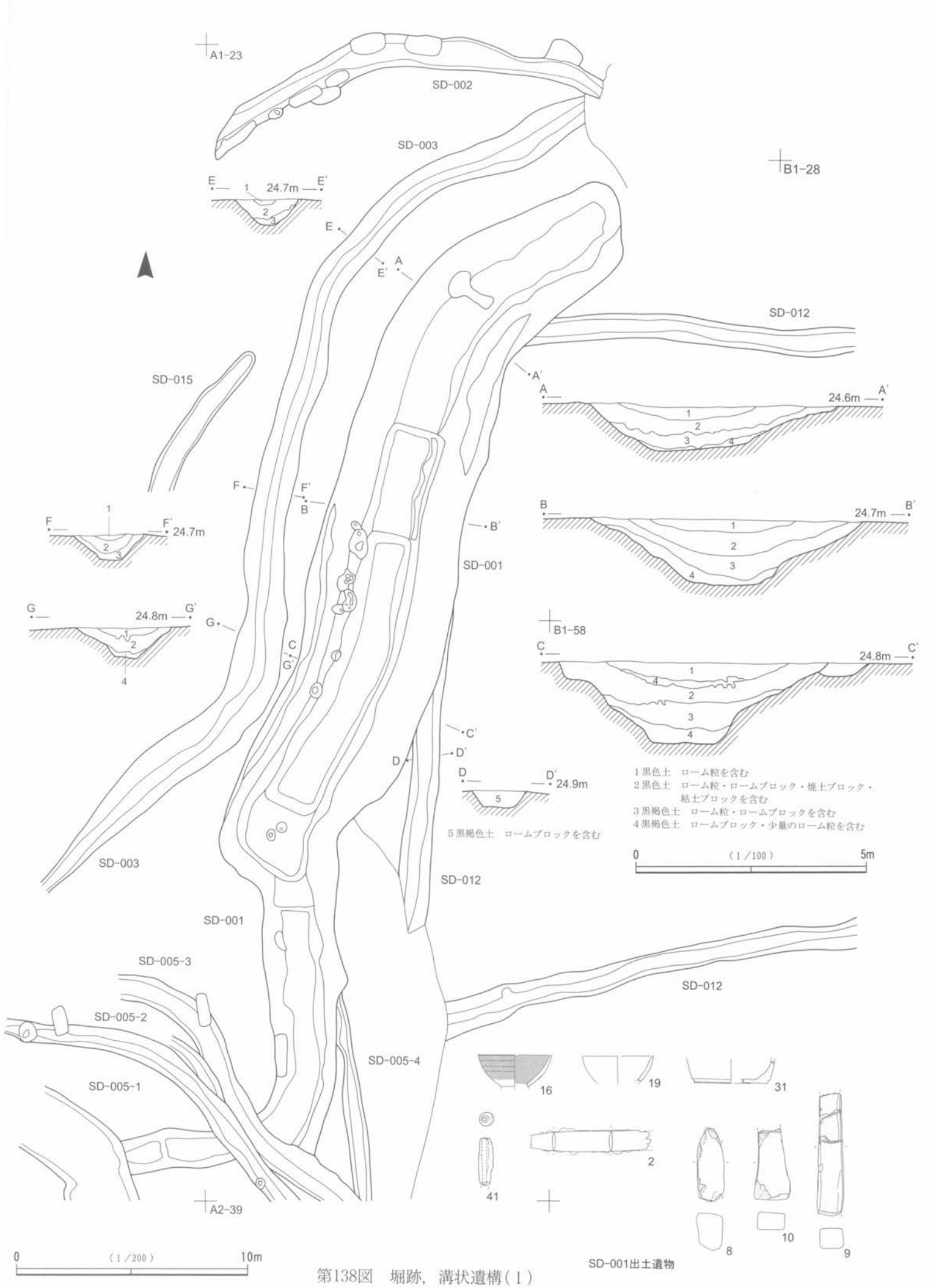
ＳＤ-012（第139・140図）

調査区西側で，東西に平行に走る２条の溝と，その２条の溝を西端で連結するように南北方向に走る溝で構成されている。北側の溝は，第５整形区画の南側をほぼ直線的に東西に走り，西端がSD-001に削平されている。現存で長さ42.3m，幅0.7m～1.1m，深さ10cm～23cmを測る。南側の溝は，途中でやや曲線的になるが東西に走り，西端が判然としなくなる。現存で長さ50.3m，幅1.1m～1.8m，深さ32cm～46cmを測る。双方の溝とも途中SD-017に一部削平されている。西側の溝は，SD-001に大きく削平されており，現存で長さ13.8m，幅1.2m～1.8m，深さ30cm～46cmを測る。断面形はいずれも逆台形で，底面はほぼ平坦である。

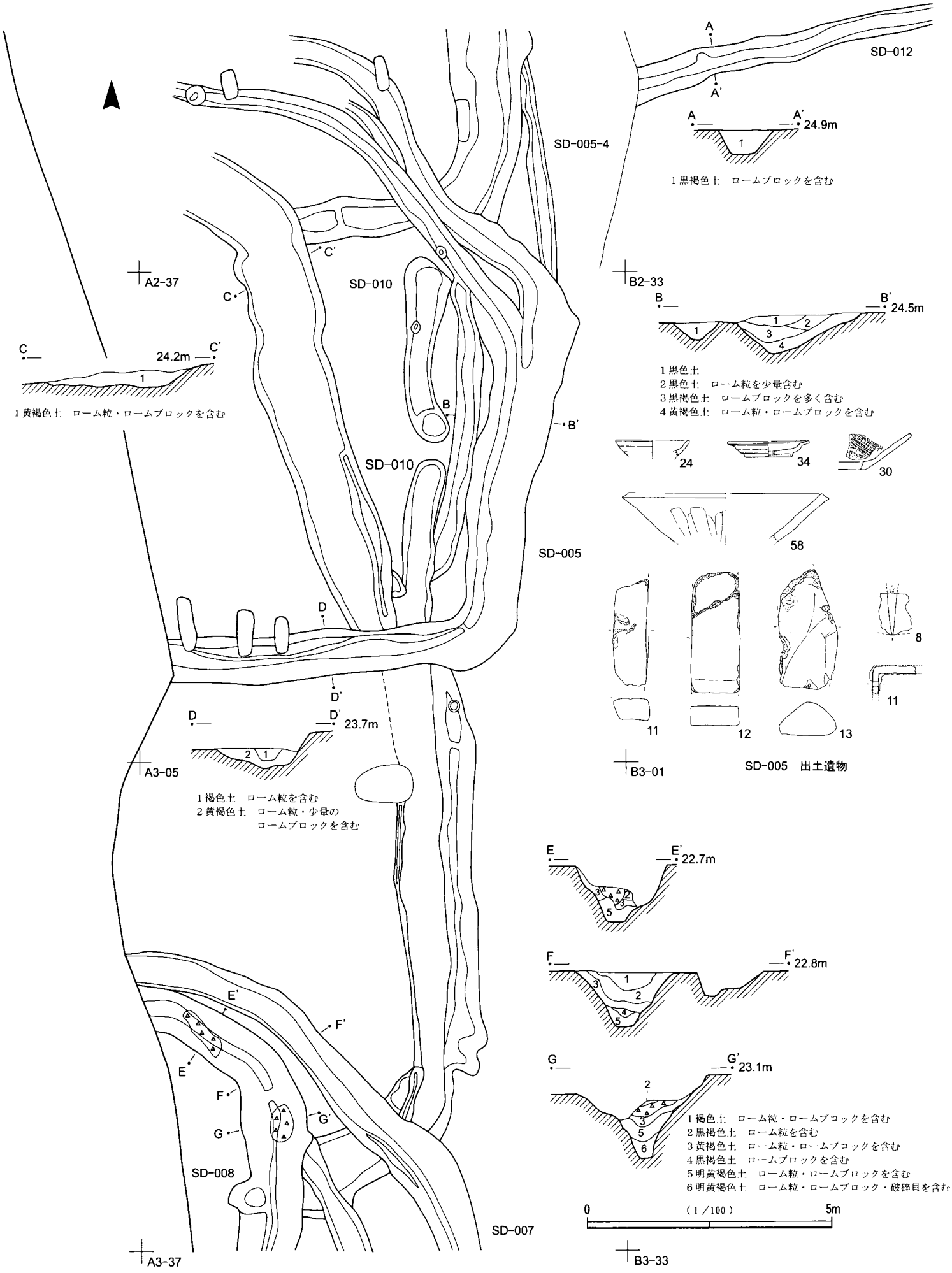
ＳＤ-017・018（第140・141図）

SD-017は，調査区の西側を南北方向に走る溝で，北側で半円形に屈曲している。第４整形区画の南端を東西方向に５m延びた地点で，北北西方向に12m走り，そこから屈曲して北北東方向に49m直線的に延びていく。北側では東方向へ6.5m半円形に張り出す特異な形態をみせる。幅1.2m～2.2m，深さ5cm～46cmを測る。南側が浅いが，中央部から北側に進むに従って深くなる。北側の張出部では28cm～51cmを測る。底面にはピットが不規則に設けられている。覆土中から青磁碗，瀬戸・美濃，常滑，カワラケが出土した。

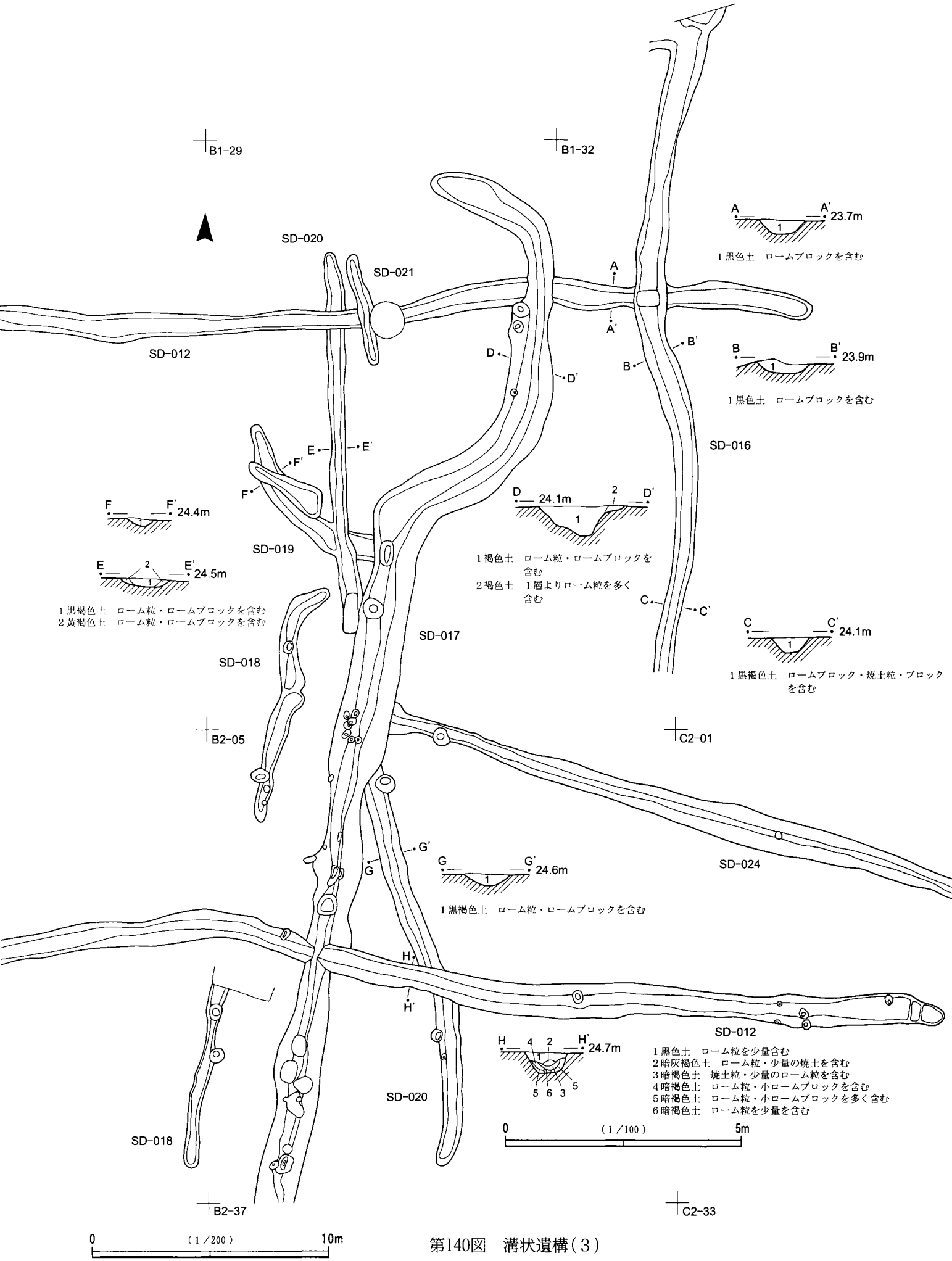
SD-018は，SD-017の西側を沿うように，途切れながら南北方向に走る溝である。北端で西側へやや張り



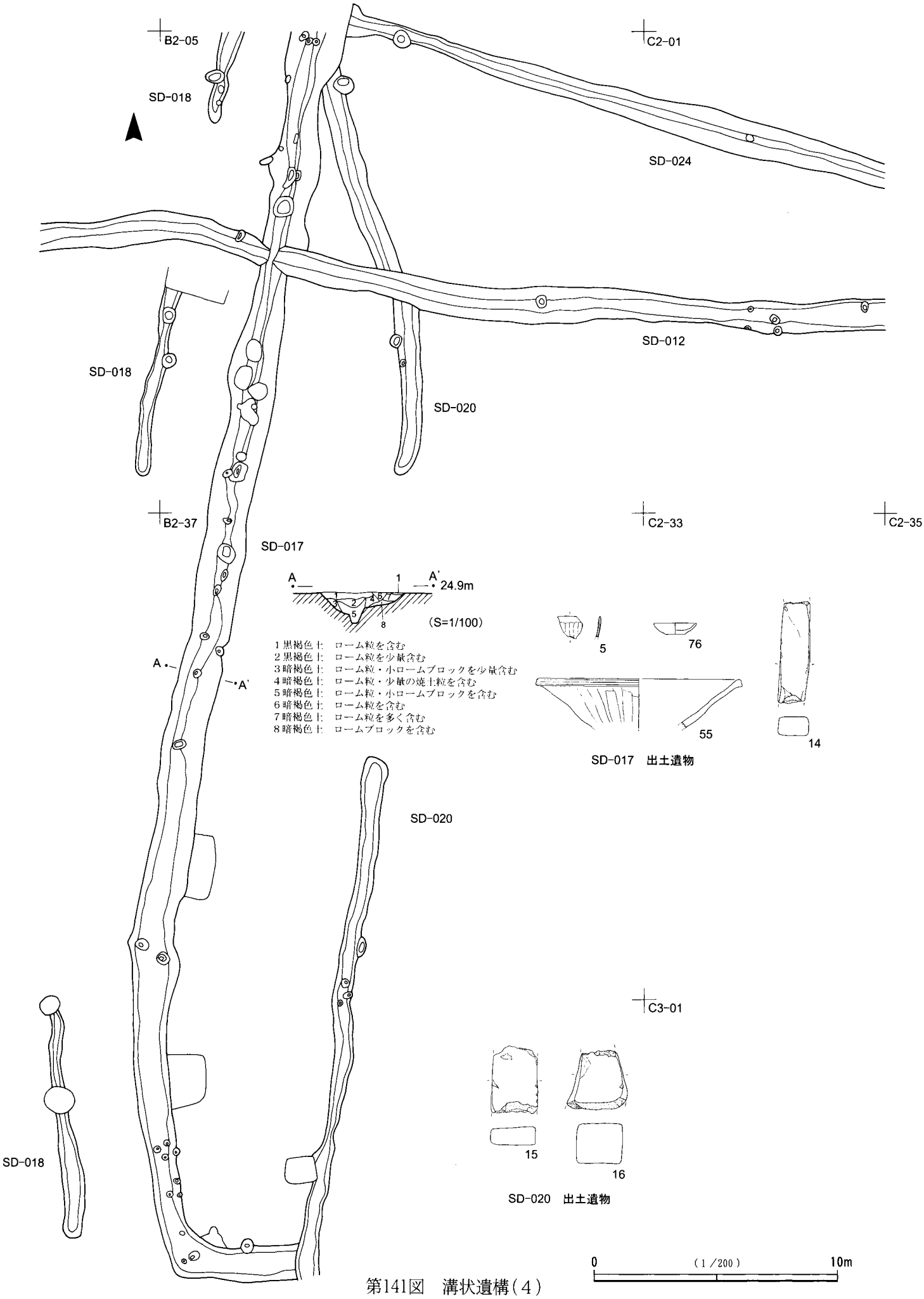
第138図　堀跡，溝状遺構(1)


SD-012
A
A'
24.9m
1 黒褐色土　ロームブロックを含む
SD-005-4
SD-010
SD-005
SD-008
SD-007
A2-37
B2-33
B3-01
A3-05
A3-37
B3-33
24.2m
1 黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
24.5m
1 黒色土
2 黒色土　ローム粒を少量含む
3 黒褐色土　ロームブロックを多く含む
4 黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
23.7m
1 褐色土　ローム粒を含む
2 黄褐色土　ローム粒・少量の
ロームブロックを含む
SD-005　出土遺物
22.7m
22.8m
23.1m
1 褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
2 黒褐色土　ローム粒を含む
3 黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
4 黒褐色土　ロームブロックを含む
5 明黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む
6 明黄褐色土　ローム粒・ロームブロック・破砕貝を含む
0　(1/100)　5m
0　(1/200)　10m

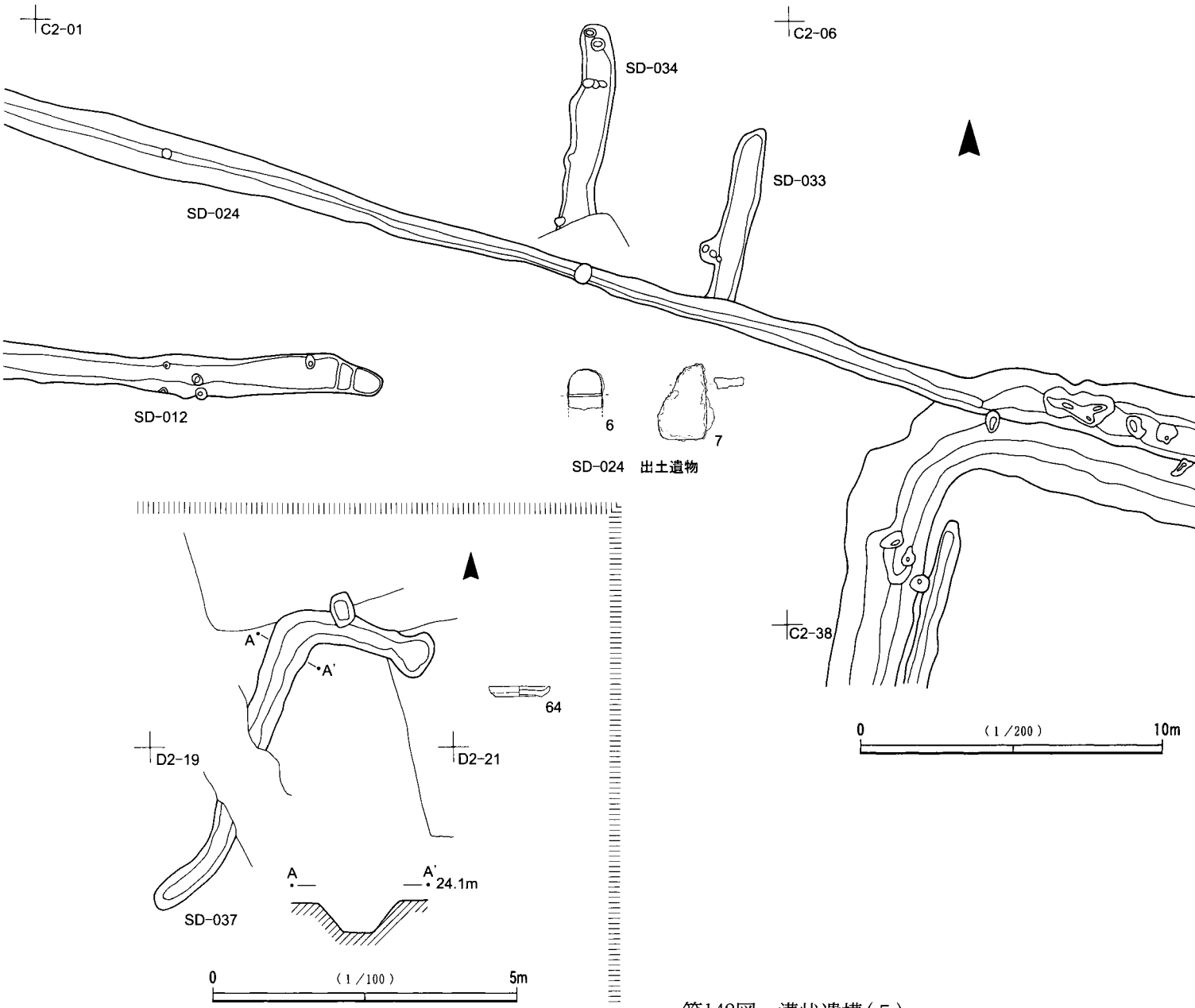
第139図　溝状遺構(2)


B1-29
B1-32
SD-020
SD-021
SD-012
SD-016
SD-019
SD-017
SD-018
SD-024
SD-020
SD-018
B2-05
C2-01
B2-37
C2-33
A A' 23.7m
1 黒色土　ローム粒・ローム粒を含む
B B' 23.9m
1 黒色土　ローム粒・ローム粒を含む
D 24.1m D'
1 褐色土　ローム粒・ローム粒を含む
2 褐色土　1層よりローム粒を多く含む
F F' 24.4m
E E' 24.5m
1 黒褐色土　ローム粒・ローム粒を含む
2 黄褐色土　ローム粒・ローム粒を含む
C C' 24.1m
1 黒褐色土　ローム粒・ローム粒・焼土粒・ブロックを含む
G G' 24.6m
1 黒褐色土　ローム粒・ローム粒を含む
H H' 24.7m
1 黒色土　ローム粒を少量含む
2 暗灰褐色土　ローム粒・少量の焼土を含む
3 暗褐色土　焼土粒・少量のローム粒を含む
4 暗褐色土　ローム粒・小ローム粒を含む
5 暗褐色土　ローム粒・小ローム粒を多く含む
6 暗褐色土　ローム粒を少量を含む
0 (1/100) 5m
0 (1/200) 10m

第140図　溝状遺構(3)


B2-05
C2-01
SD-018
SD-024
SD-012
SD-018
SD-020
B2-37
C2-33
C2-35
SD-017
A
A'
24.9m
(S=1/100)
1 黒褐色土　ローム粒を含む
2 黒褐色土　ローム粒を少量含む
3 暗褐色土　ローム粒・小ロームブロックを少量含む
4 暗褐色土　ローム粒・少量の焼土粒を含む
5 暗褐色土　ローム粒・小ロームブロックを含む
6 暗褐色土　ローム粒を含む
7 暗褐色土　ローム粒を多く含む
8 暗褐色土　ロームブロックを含む
5
76
55
14
SD-017　出土遺物
SD-020
C3-01
15
16
SD-020　出土遺物
SD-018
0
(1/200)
10m

第141図　溝状遺構(4)



第142図　溝状遺構(5)

出す。現状で長さ56.8m，幅50cm～80cm，深さ7cm～13cmを測る。覆土中からカワラケが出土した。

ＳＤ-020（第140・141図）

調査区西側で，SD-017の東側をやや蛇行しながら南北方向に走る溝である。第４整形区画の東側を通り，途中SX-008周辺で一部途切れる。南側はすでに削平されている。現存で長さ72.4m，幅0.5m～1.05m，深さ6cm～20cmを測る。南側の溝が全体に浅くなっている。覆土中から常滑捏鉢片が出土した。

ＳＤ-024（第140～142図）

調査区の中央を直線的に東西方向に走る溝である。東側はSD-036から延び，西側はSD-017と重複し，２つの遺構を連結している。主軸方位はN-73°-Wで，SD-025・030などと一致し，台地の中央部を南北に分けるように配置されている。現存で長さ46.5m，幅0.8m～1.6m，深さ49cm～63cmを測る。また，東側からは，ほぼ直交するように２条の短い溝(SD-033・034)が延びている。覆土中から常滑甕片が出土した。

ＳＤ-037（第142図）

調査区東側中央に単独で位置し，中央部を攪乱されている。SD-036付近から北東に10.4m延び，その地点で直角に東方向へ4.5m屈曲する。西端は土坑状に広がる。幅84cm～134cm，深さ25cm～52cmを測り，北側が次第に浅くなっている。覆土中からカワラケが出土した。

第５節　出土遺物

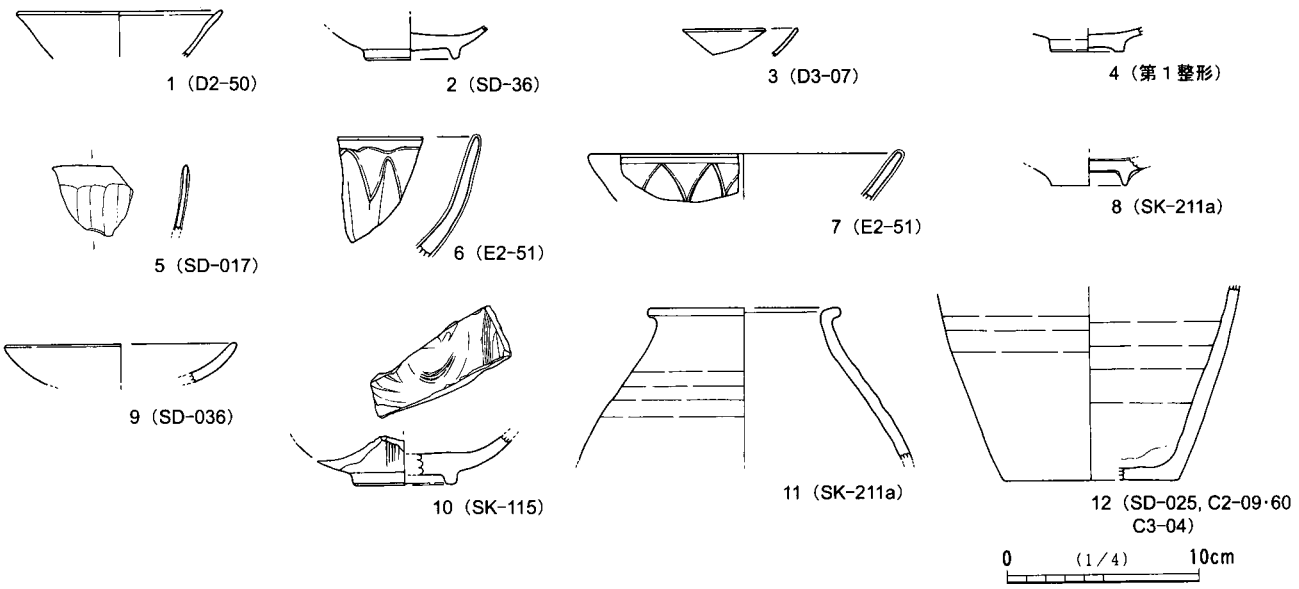
中世遺構から出土した遺物は，貿易陶磁器，瀬戸･美濃や常滑の陶器，カワラケなどの在地産土器のほか，鉄製品，石製品，銭貨である。これらの遺物は台地整形区画を中心に，堀や溝，土坑など遺跡全体から出土している。なお，陶磁器の分類については，貿易陶磁器は横田・森田1978，瀬戸･美濃は藤澤1982・1986・1991・1995，常滑は中野1994・1995，をそれぞれ参考とした。

１　陶磁器

出土した中世陶磁器のうち，産地が判明した破片は769点である。内訳は，貿易陶磁器48点(6.2%)，瀬戸･美濃161点(20.9%)，常滑529点(68.8%)，土器類31点(4.0%)となる。

（１）貿易陶磁器（第143図，図版44・45）

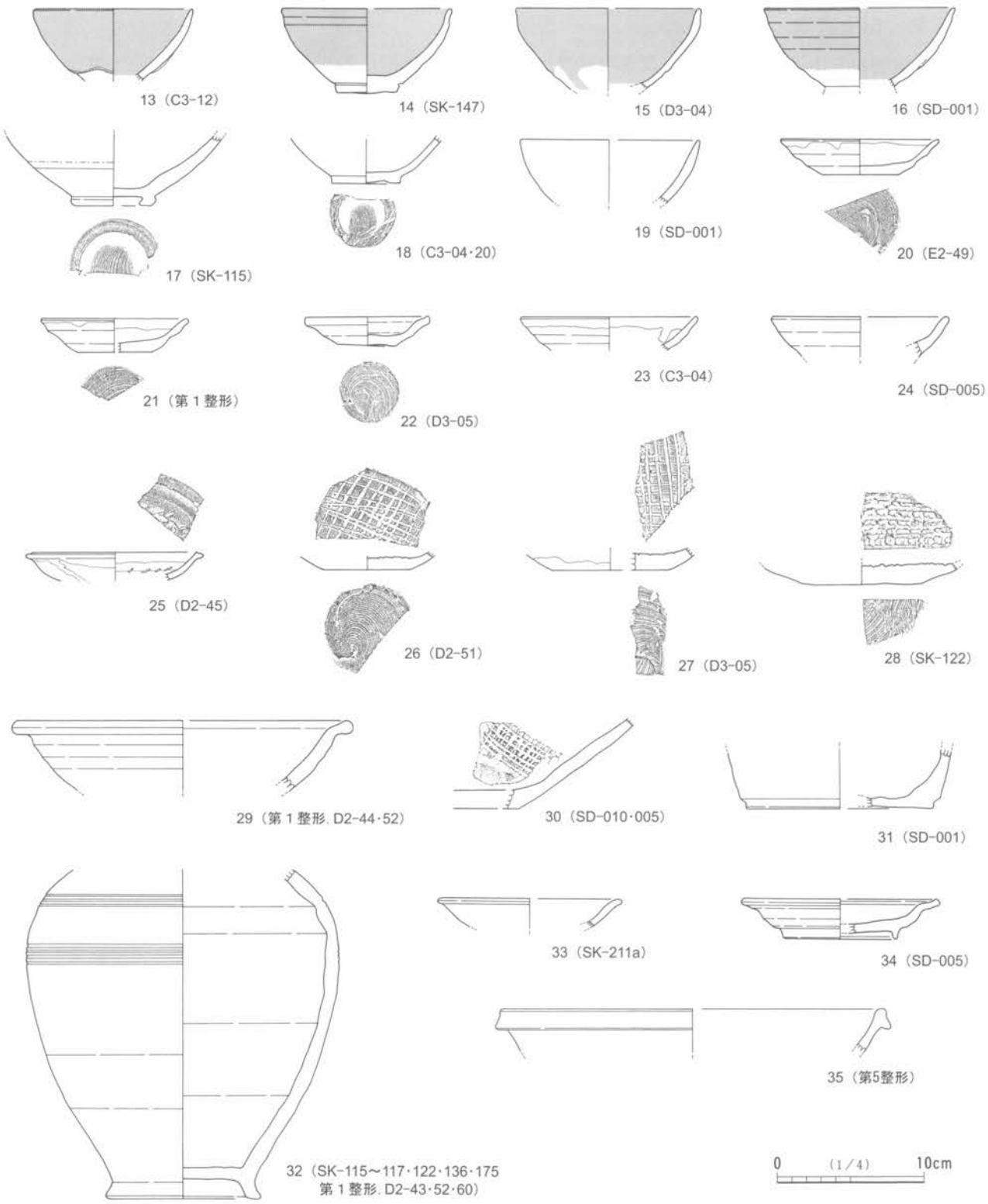
48点の破片が出土している。内訳は，白磁碗５点・皿３点，青白磁瓶子３点，青磁碗24点・皿１点・香炉１点，鉄釉壺11点である。青磁碗のうち，龍泉窯系は22点，同安窯系は２点となる。龍泉窯系ではⅠ-5類の碗が20点と最も多く出土している。１～４は白磁の碗・皿，５～９は龍泉窯系青磁の碗・皿，10は同安窯系青磁の碗，11・12は鉄釉壺である。12世紀中頃～13世紀中頃の製品が主体となるが，４の白磁の皿や11・12の鉄釉壺のように15世紀代の製品も出土しており，搬入の時期は２回あったことがわかる。



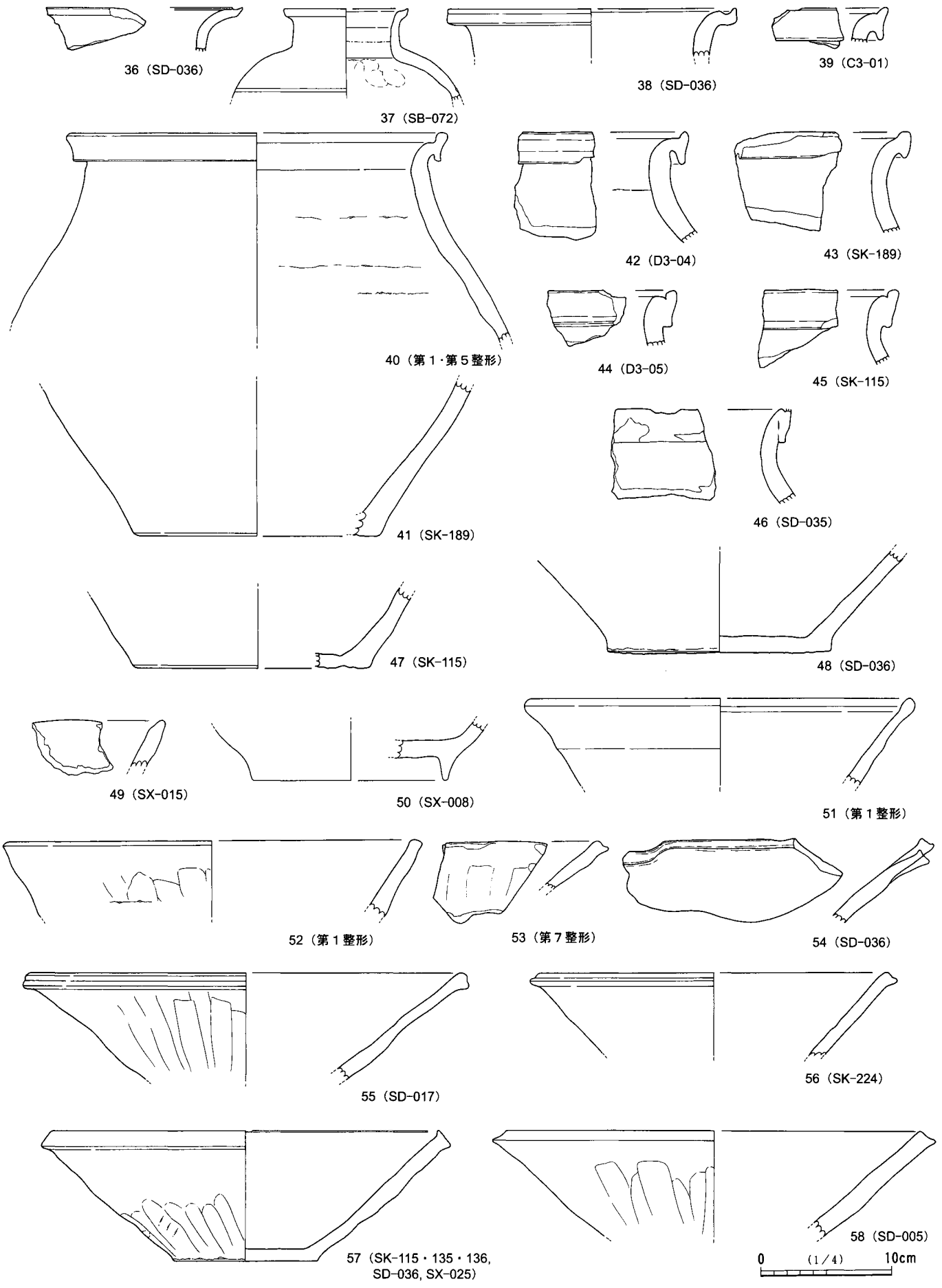
第143図　貿易陶磁器

（２）瀬戸･美濃（第144図，図版44～46）

161点の破片が出土している。内訳は，壺・瓶子等の袋物61点，碗31点，皿54点，鉄釉擂鉢15点である。13～16は天目茶碗，17・18は灰釉平碗，19は時期は不明だが灰釉の碗である。20～24は縁釉小皿，25～28は卸皿で，25は後Ⅳ期新段階の時期であろう。29は折縁深皿，30は灰釉大皿である。30は内面の一部に卸目をもつ。31は瓶子，32は灰釉四(三)耳壺である。33～35は大窯期の製品で，33は端反皿，34は折縁皿，35は鉄釉擂鉢である。壺のうち灰釉四(三)耳壺は，後Ⅰ～Ⅱ期に比定され30点が出土している。碗は，天目茶碗(中Ⅳ～後Ⅰ期)から端反碗(後Ⅳ期古)まで出土している。14世紀後半～15世紀中頃の時期にあたる。皿は，古瀬戸の縁釉小皿・卸皿・深皿・大皿から大窯期の端反皿・折縁皿までと多く，特に後期の縁釉皿の出土が多い。擂鉢は大窯期のもので，15世紀末～16世紀末までの時期である。


13（C3-12）
14（SK-147）
15（D3-04）
16（SD-001）
17（SK-115）
18（C3-04・20）
19（SD-001）
20（E2-49）
21（第１整形）
22（D3-05）
23（C3-04）
24（SD-005）
25（D2-45）
26（D2-51）
27（D3-05）
28（SK-122）
29（第１整形, D2-44・52）
30（SD-010・005）
31（SD-001）
32（SK-115～117・122・136・175
第１整形, D2-43・52・60）
33（SK-211a）
34（SD-005）
35（第5整形）
0 (1/4) 10cm

第144図　瀬戸・美濃


36（SD-036）
37（SB-072）
38（SD-036）
39（C3-01）
40（第１・第５整形）
42（D3-04）
43（SK-189）
44（D3-05）
45（SK-115）
41（SK-189）
46（SD-035）
47（SK-115）
48（SD-036）
49（SX-015）
50（SX-008）
51（第１整形）
52（第１整形）
53（第７整形）
54（SD-036）
55（SD-017）
56（SK-224）
57（SK-115・135・136,
SD-036, SX-025）
58（SD-005）
0
（1／4）
10cm

第145図　常滑

（3）常滑（145図，図版44・46）

529点の破片が出土している。内訳は，甕458点，捏鉢71点である。甕に比べて捏鉢の出土点数が少ないことが特徴的である。

甕(36～48)は，３～４型式(12世紀末～13世紀初め）から９型式(15世紀前半)までの資料が出土しているが，８型式のものは不明である。このうち７型式(14世紀前半)の出土点数が多い。36は３～４型式，37は４～５型式(13世紀前半)，38は５型式(13世紀前半～中頃)，39は６b型式(13世紀末)，40～43は７型式，44～46は９型式である。

捏鉢(49～58)の71点は，片口鉢も含めた数量である。５型式(13世紀前半～中頃)から９型式(15世紀前半)までの資料が出土している。５型式と９型式の出土点数が多い。49・50は５型式，51は６a型式(13世紀第Ⅲ四半期)，52は７型式(14世紀前半)，53・54は８型式(14世紀後半)，55～58は９型式である。

（4）土器類（第146図，図版44）

31点の破片が出土している。内訳は，伊勢鍋１点，在地産香炉１点・擂鉢１点・カワラケ26点・内耳鍋２点である。このうち，カワラケ24点と内耳鍋(83・84)を図示した。

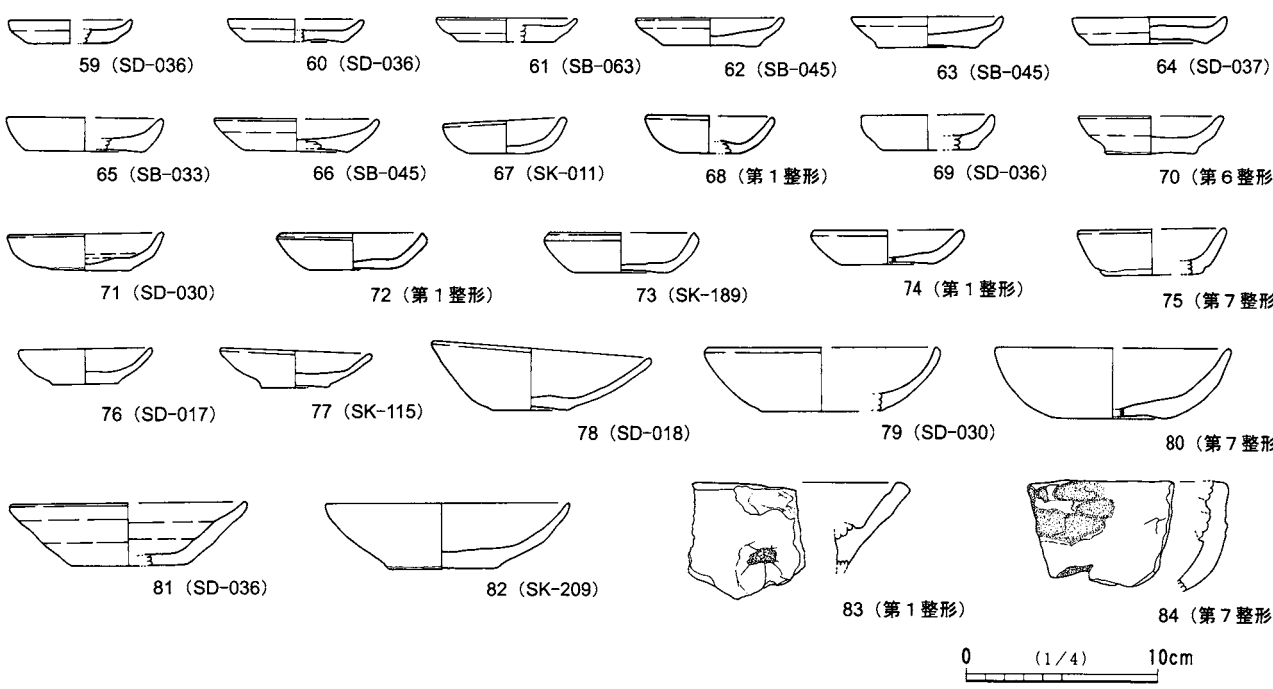
カワラケは，形態と大きさにより大きくは２型式に分類できる。Ⅰ群(59～77)は口径6.3cm～8.4cmの小型のカワラケで，Ⅱ群(78～82)は口径11.5cm～12.7cmの大型のもので，土師質土器とされているものである。Ⅰ群はさらに，形態や口底比により次のように細分される。

A類　皿状に扁平で口縁部を小さく引き出し，口径に比べて器高が低いが，底部の器厚が厚い。口径6.3cm～8.4cm，器高1.2cm～1.7cmを測る。底径は5.2cm前後のものが多い。(59～66)

B類　A類に比べて底部からの立ち上がりが高く，体部が明瞭に形成されている。さらに，体部が丸味をもつB1類(67～71)と，直線的に立ち上がるB2類(72～74)に細分される。

C類　杯型で，体部が直線的に立ち上がり，器高が2.4cmと高いもの。(75)

D類　杯型で，口径・器高に比べて底径が3.5cm前後と小さいもの。(76・77)



第146図　土器

2　鉄製品

鉄釘を中心に鎌などが出土しているが，欠損品がほとんどで本来の用途や形状が不明な製品が多い。第1整形区画内の出土が最も多く，西側の溝や土坑からも出土している(第147図，図版49・50)。

1は鎌で，刃部先端を欠損している。基端部に折り返しを持つ。刃部長9.7cm・幅3.6cm・厚さ2mmを測る。SD-036出土。2は両刃で両端を欠損している。現存長10.5cm・幅1.7cm・厚さ3.5mmを測る。SD-001出土。3は鉈の一部であろう。現存長6.1cm・幅1.3cm・厚さ2mmを測る。SK-136出土。4もSK-136から出土した不明鉄製品である。先端の断面は円形だが，中央は断面方形(4mm×5mm)である。現存長10.15cmを測る。5は紡錘車の軸部であろう。現存長は15.4cmを測り，断面(5mm×5.5mm)は方形である。SD-035出土。6は判然としないが，帯先金具であろう。現存長2.7cm・幅2.45cm・厚さ1.6mmを測る。SD-024出土。7～9は溝から出土した不明品である。8は鋤や鍬の土掘り具の刃部先端の可能性もある。現存長3.48cm・幅2.63cm・厚さ8.3mmを測る。10～12は鋤の一部であろう。13～26は不明品である。先端が折れ曲がっているもの(17～19)や，環状に曲がっているもの(16・26)もある。27～45は鉄釘である。34・37は別の製品の可能性もあるが，ここに含めた。頭部は方形のものがほとんどで，30・32・43のような折頭釘が多い。28・35は木質が残る。31は6本の釘が束のように付着したまま出土した。脚(2.5mm×3mm)は断面方形で，細いつくりである。

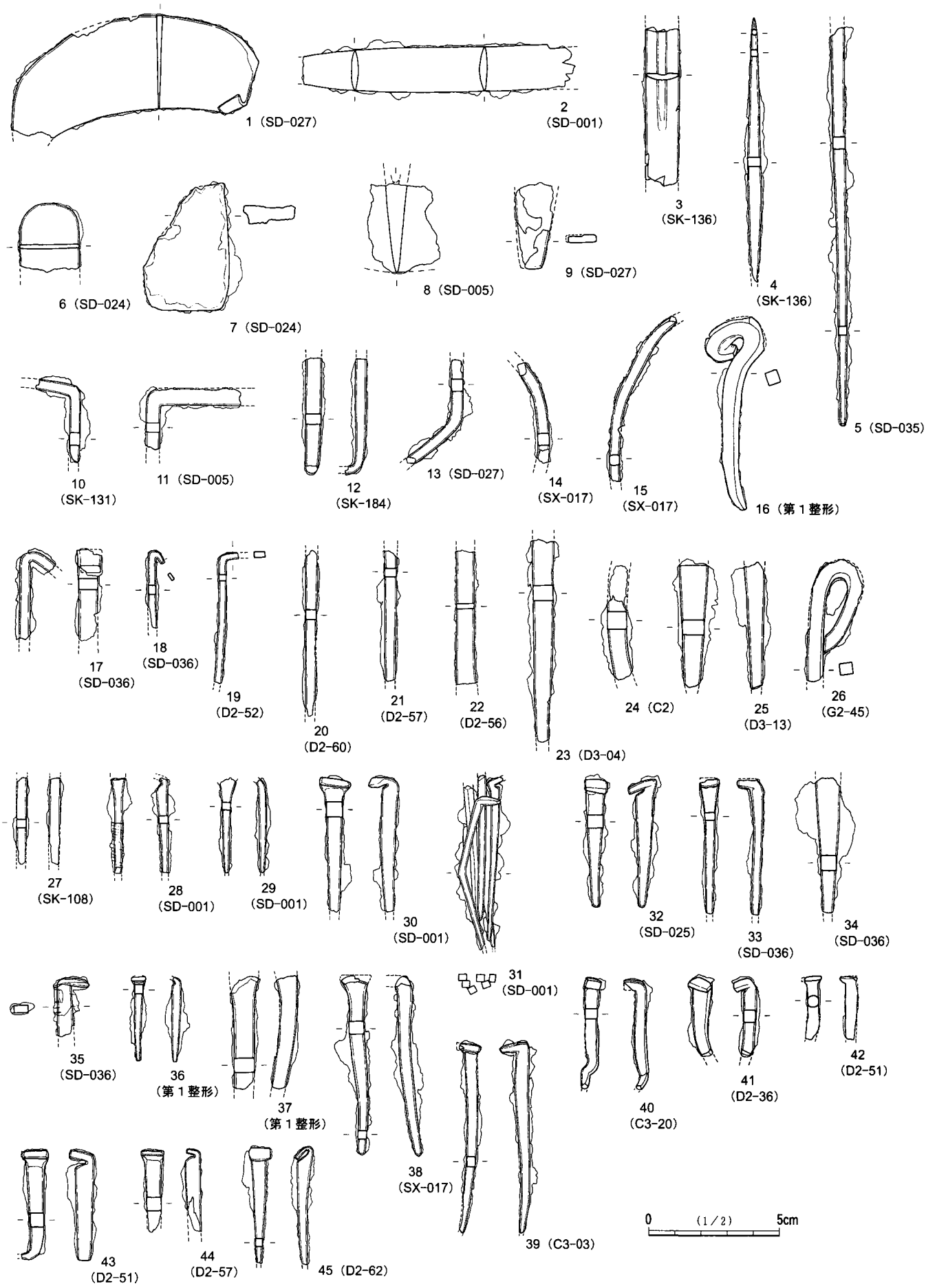
3　石製品・土錘

石製品は，砥石を中心に硯も出土している(第148～150図，図版50～52，第3表)。本遺跡から出土した40点の砥石を掲載した。石質は凝灰岩が多く，砂岩や流紋岩がわずかに含まれている。なかには被熱して変色しているものもある。38は温石で，大きく欠損している。現存で，縦幅5.3cm，横幅4.8cm，厚さ1.4cmを測る。上部に7mm×9mmの楕円形の孔が穿孔されている。滑石系の石質で，側面は垂直に面取りされ，表面は平滑である。県内では類例として，千葉市西屋敷遺跡010号土坑墓出土の「有孔板状石製品」があげられる(矢戸・谷ほか1979)。第3整形区画のC3-10グリッドから出土した。硯(39)は，硯尻を欠損しているが小型の長方形で，内外面とも側面が赤く塗られている。外面は垂直に面取りされている。内面は細い縁帯が作出され，海部はよく使用し磨り減っている。約半分の遺存で，縦幅は現存で5.5cm，横幅4.6cm，厚さは縁帯部1.1cm・海部0.9cmを測る。粘板岩製。第1整形区画内のSK-131から出土した。

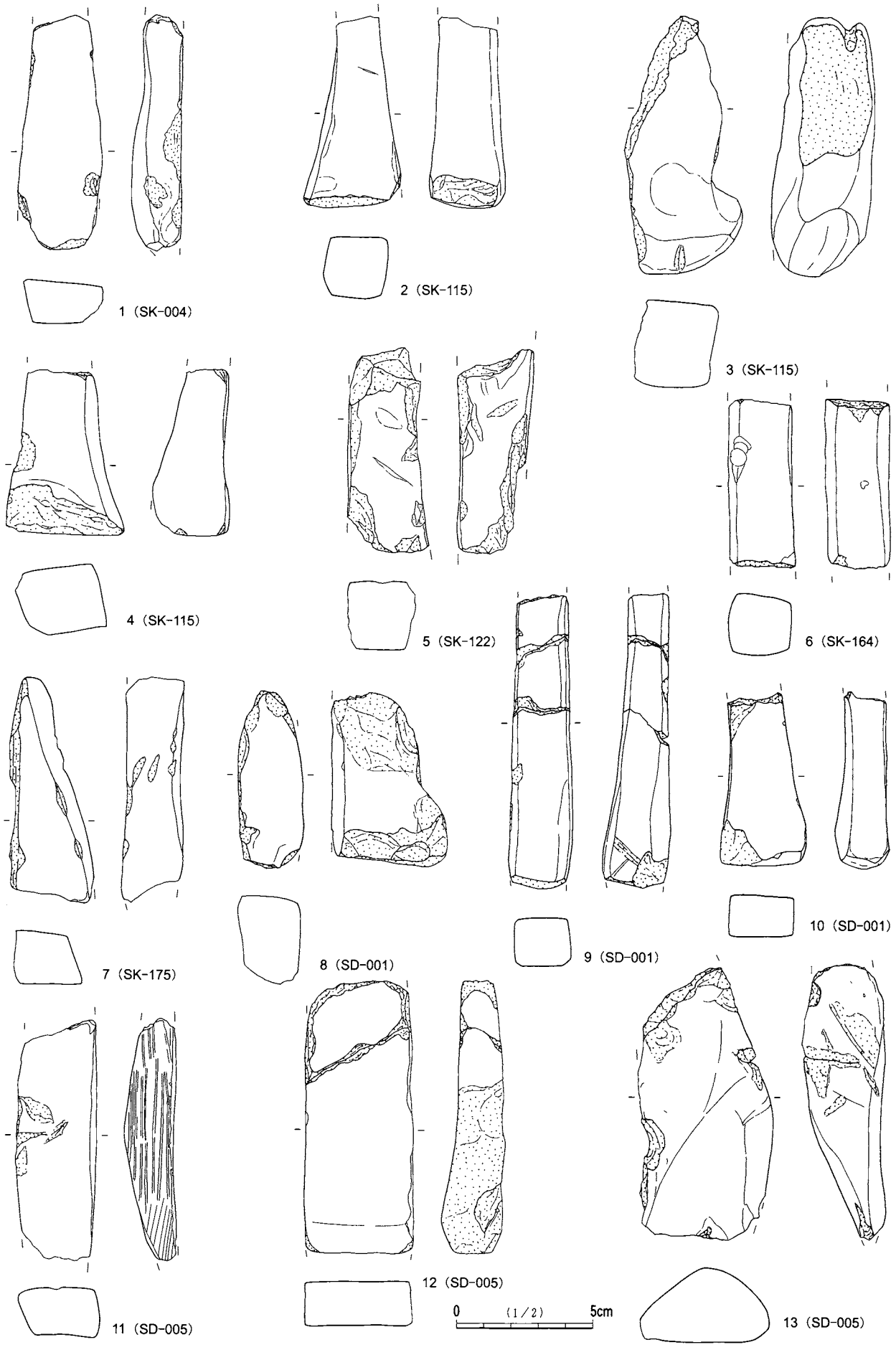
土錘(第150図40～46，図版47，第4表)は7点が出土した。いずれも管状の形態である。

4　銭　貨

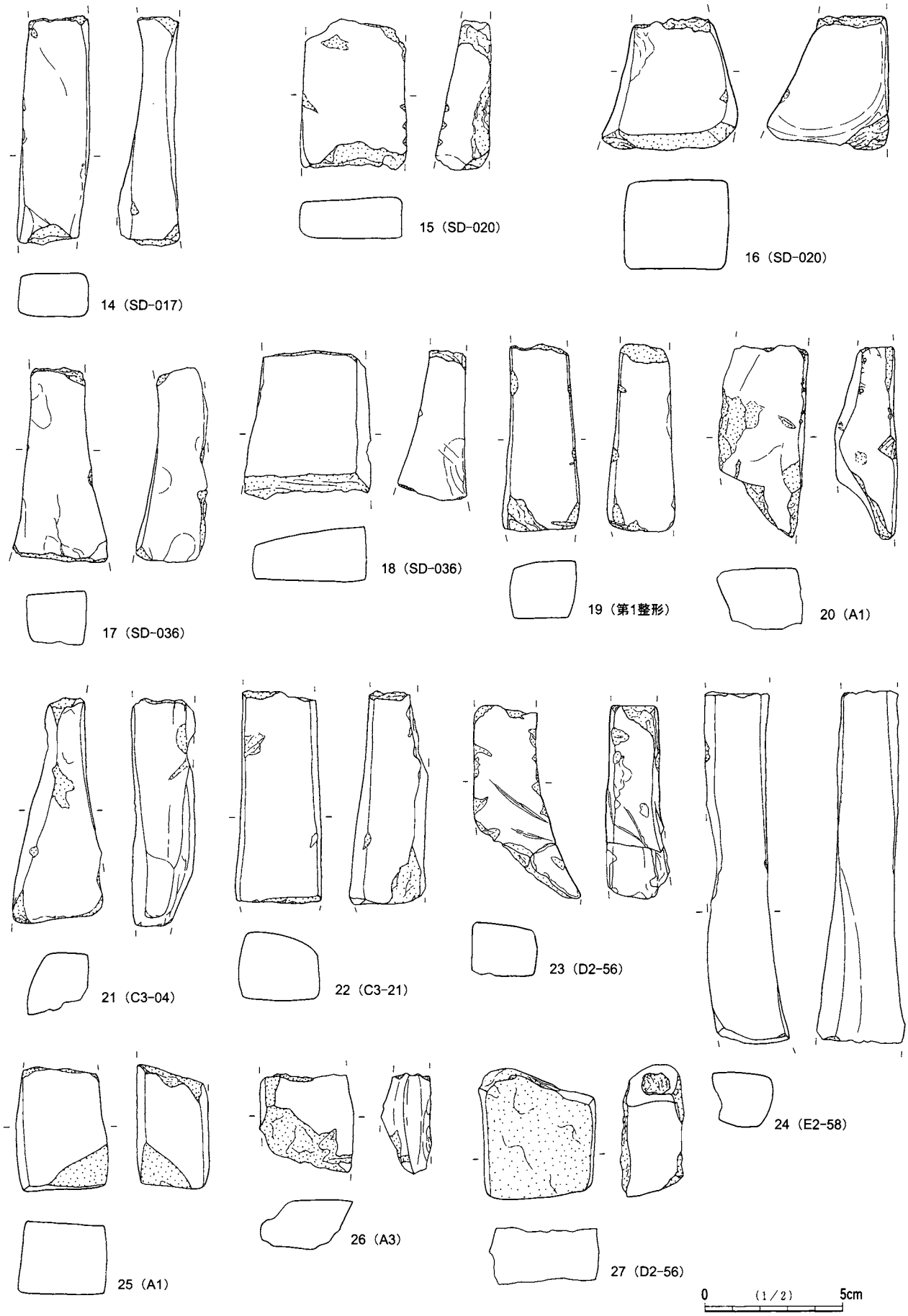
34枚の銭貨が出土したが，判読可能な銭貨は29枚である(第151図，図版52，第5表)。内訳は，唐銭(開元通寶)5枚，北宋銭(祥符元寶ほか)21枚，南宋銭(建炎通寶)1枚，明銭(洪武通寶)2枚である。このうち，第1整形区画からは15枚(遺構2枚，覆土13枚)，周辺のSD-036からも4枚が出土しており，銭貨の出土も集中していることがわかる。その他の遺構では，SD-010から3枚出土している。


1 (SD-027)
2 (SD-001)
3 (SK-136)
4 (SK-136)
5 (SD-035)
6 (SD-024)
7 (SD-024)
8 (SD-005)
9 (SD-027)
10 (SK-131)
11 (SD-005)
12 (SK-184)
13 (SD-027)
14 (SX-017)
15 (SX-017)
16 (第1整形)
17 (SD-036)
18 (SD-036)
19 (D2-52)
20 (D2-60)
21 (D2-57)
22 (D2-56)
23 (D3-04)
24 (C2)
25 (D3-13)
26 (G2-45)
27 (SK-108)
28 (SD-001)
29 (SD-001)
30 (SD-001)
31 (SD-001)
32 (SD-025)
33 (SD-036)
34 (SD-036)
35 (SD-036)
36 (第1整形)
37 (第1整形)
38 (SX-017)
39 (C3-03)
40 (C3-20)
41 (D2-36)
42 (D2-51)
43 (D2-51)
44 (D2-57)
45 (D2-62)
0 (1/2) 5cm

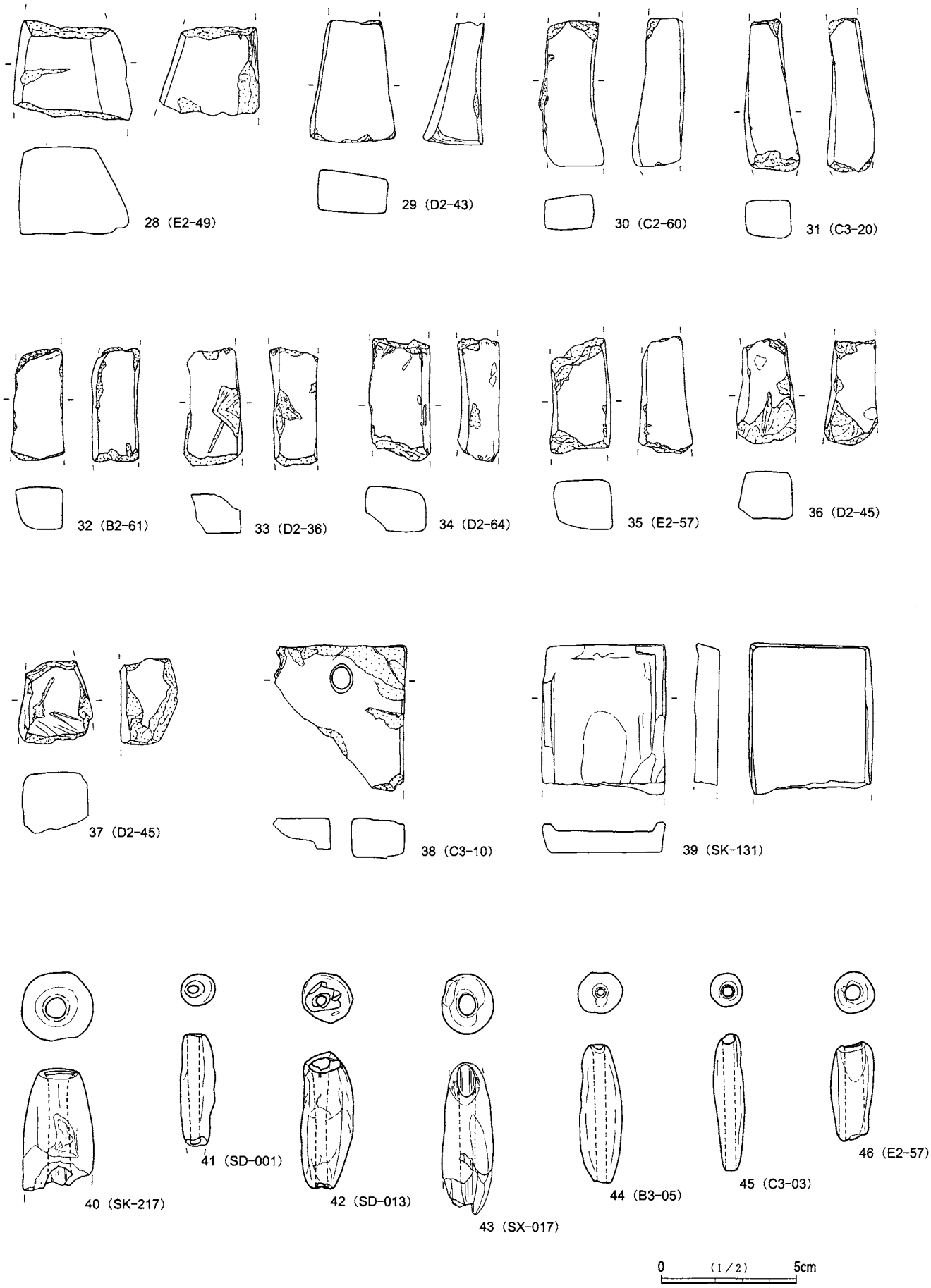
第147図　鉄製品


1 (SK-004)
2 (SK-115)
3 (SK-115)
4 (SK-115)
5 (SK-122)
6 (SK-164)
7 (SK-175)
8 (SD-001)
9 (SD-001)
10 (SD-001)
11 (SD-005)
12 (SD-005)
13 (SD-005)
0
(1/2)
5cm

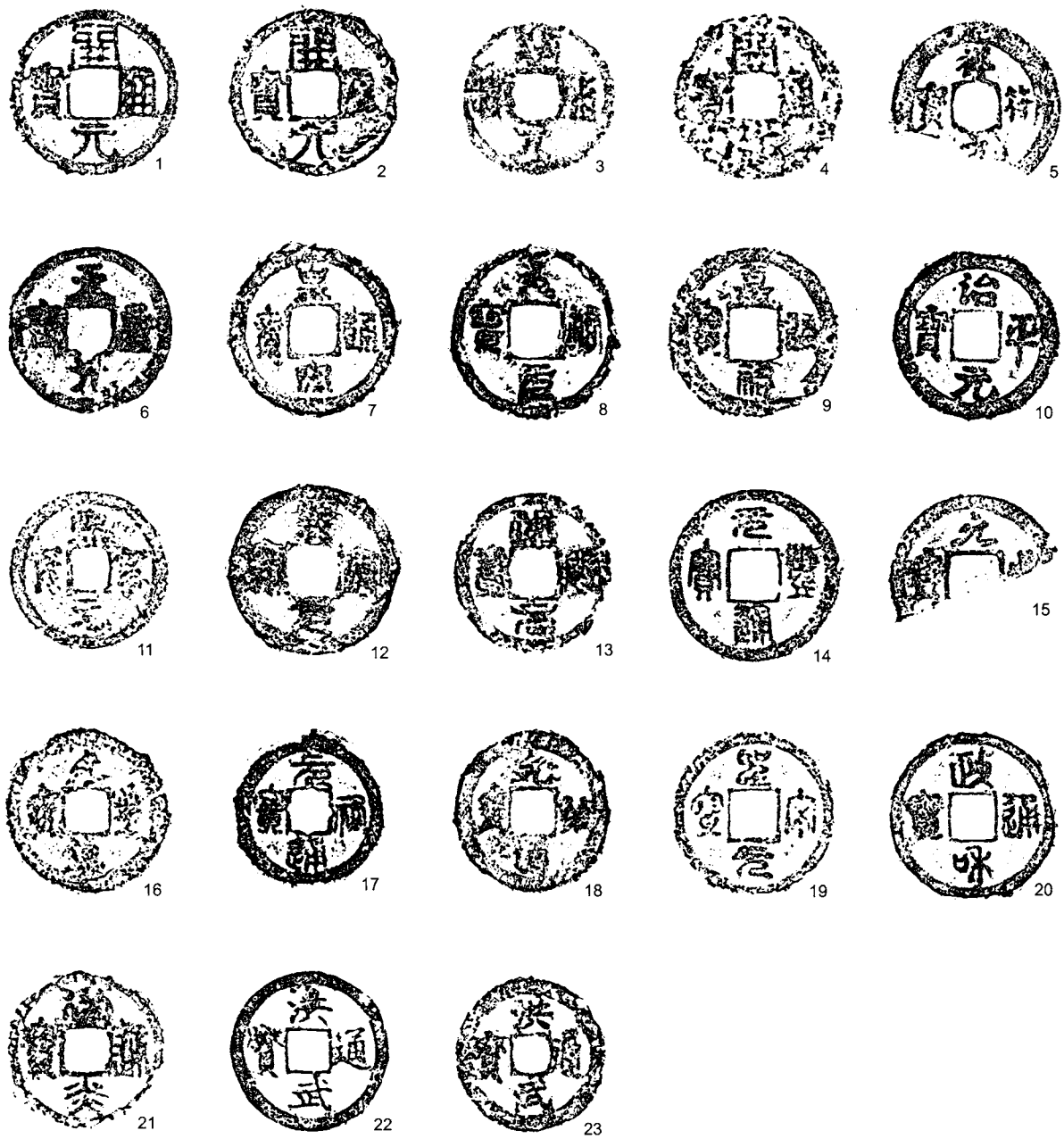
第148図　石製品(1)


14 (SD-017)
15 (SD-020)
16 (SD-020)
17 (SD-036)
18 (SD-036)
19 (第1整形)
20 (A1)
21 (C3-04)
22 (C3-21)
23 (D2-56)
24 (E2-58)
25 (A1)
26 (A3)
27 (D2-56)
0 (1/2) 5cm

第149図　石製品(2)



第150図　石製品(3)，土錘



0 (1／1) 5cm

第151図　銭貨

第3表　砥石計測表

番号	遺構番号	遺物番号	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　　考
1	SK-004	1	凝灰岩	8.6	2.0	1.6	61.21	被熱している
2	SK-115	89	凝灰岩	7.0	3.3	2.2	75.55	
3	SK-115	90	砂　岩	9.5	4.0	3.1	95.33	
4	SK-115	129	凝灰岩	5.9	4.3	2.4	76.30	
5	SK-122	1	凝灰岩	7.4	2.8	2.4	64.60	
6	SK-164	1	凝灰岩	6.0	2.3	2.2	56.67	
7	SK-175	37	凝灰岩	8.1	3.0	1.9	57.36	被熱している
8	SD-001	25	砂　岩	6.4	4.1	3.1	62.95	
9	SD-001	5	流紋岩	10.6	2.3	1.7	72.53	
10	SD-001	25	凝灰岩	6.2	3.1	1.5	47.25	
11	SD-005	35	凝灰岩	8.6	2.9	1.7	62.24	被熱している
12	SD-005	52	凝灰岩	9.9	3.9	1.6	114.89	
13	SD-005	20	流紋岩	9.8	4.7	2.5	149.96	
14	SD-017	14	凝灰岩	8.3	2.4	2.6	62.50	
15	SD-020	1	凝灰岩	5.5	3.8	1.9	55.73	
16	SD-020	1-1	凝灰岩	4.8	4.6	3.2	118.35	
17	SD-036	26	凝灰岩	6.8	3.3	1.9	59.59	被熱している
18	SD-036	53	砂　岩	5.1	4.5	1.9	68.35	
19	第1整形区画	31	凝灰岩	6.7	2.7	2.0	64.92	旧SX-009
20	A1	1	凝灰岩	6.8	3.1	2.2	54.25	
21	C3-04	1	凝灰岩	8.0	3.2	2.0	60.99	
22	C3-21	1	凝灰岩	7.6	3.1	2.4	98.82	
23	D2-56	3	凝灰岩	6.9	2.7	1.8	55.13	
24	E2-58	1	凝灰岩	12.7	2.5	1.9	119.88	
25	A1	1	凝灰岩	4.4	3.2	2.6	60.74	
26	A3	3	凝灰岩	3.5	3.4	1.7	21.67	
27	D2-56	3	凝灰岩	4.7	4.1	2.0	66.34	
28	E2-49	1	凝灰岩	3.4	4.3	3.2	81.57	
29	D2-43	2	凝灰岩	4.6	3.1	1.5	39.59	
30	C2-60	1	凝灰岩	5.5	2.1	1.2	28.68	
31	C3-20	1	凝灰岩	5.7	1.9	1.4	23.54	
32	B2-61	1	凝灰岩	4.0	2.0	1.5	20.72	
33	D2-36	2	凝灰岩	3.9	2.0	1.4	20.90	
34	D2-64	1	凝灰岩	4.4	2.2	1.6	22.19	
35	E2-57	2	凝灰岩	4.1	2.2	1.8	26.20	
36	D2-45	1	凝灰岩	3.8	2.2	1.7	22.27	
37	D2-45	1	凝灰岩	3.0	2.7	2.1	23.01	

第4表　土錘計測表

番号	遺構番号	遺物番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)
40	SK-217	1	3.3	1.9	0.6	12.23
41	SD-001	2	4.1	1.2	0.4	4.74
42	SD-013	2	5.0	1.8	0.4	13.91
43	SX-017	5	5.4	1.9	0.8	15.37
44	B3-05	2	5.1	1.6	0.3	12.15
45	C3-03	1	5.0	1.1	0.4	5.04
46	E2-57	5	3.5	1.6	0.6	7.29

第5表 銭貨計測表

番号	銭種	書体	読み	初鋳年	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)	出土遺構	備考
1	開元通寶	真書	対読	621年	2.3	24.85	21.40	8.65	7.30	1.07	0.70	第1整形	背上月・平頭通
2	開元通寶	真書	対読	621年	2.6	25.20	21.30	8.30	6.85	1.37	0.90	SX-008	背上月・小通
3	開元通寶	真書	対読	621年	2.8	22.80	19.50	8.50	6.50	1.07	0.85	D2-63	
4	開元通寶	真書	対読	621年	2.1	24.80	20.85	8.30	6.80	1.62	0.87	SK-169	
	開元通寶	真書	対読	621年	(0.5)	—	—	—	—	0.90	0.70	第1整形	背上月
5	祥符元寶	真書	回読	1008年	(2.0)	24.50	17.50	7.80	6.10	1.23	0.63	第1整形	
6	天聖元寶	真書	回読	1023年	2.3	24.15	20.35	—	6.55	1.00	0.82	D2-44	
	天聖元寶	篆書	回読	1023年	(1.5)	23.40	19.15	8.70	6.50	1.00	5.00	C3-03	
	景祐元豊	真書	回読	1034年	(1.1)	—	—	—	—	1.25	0.95	SB-025	
7	皇宋通寶	篆書	対読	1039年	3.1	24.80	19.70	8.70	6.65	1.22	0.87	D2-63	
	皇宋通寶	真書	対読	1039年	2.2	24.85	20.25	8.65	6.80	1.45	0.75	D2-43	
	皇宋通寶	篆書	対読	1039年	3.3	24.70	20.55	10.10	7.55	1.40	1.07	D2-45	
8	嘉祐元寶	篆書	回読	1056年	3.8	24.95	21.45	8.50	6.85	1.62	0.95	SD-036	
9	嘉祐通寶	篆書	回読	1056年	2.5	25.40	19.85	8.65	7.00	1.17	0.85	SD-036	
10	治平元寶	真書	回読	1064年	2.6	24.35	19.60	8.30	6.40	1.07	0.75	SD-005	
11	熙寧元寶	真書	回読	1068年	2.9	22.90	18.75	7.15	5.60	1.20	1.00	SD-001	
12	熙寧元寶	篆書	回読	1068年	2.9	24.85	20.80	9.05	6.95	1.15	0.87	第1整形	
13	熙寧元寶	篆書	回読	1068年	2.4	23.90	19.60	8.10	6.80	1.37	0.92	SD-036	
14	元豊通寶	篆書	回読	1078年	2.5	25.40	20.60	8.65	7.00	1.20	0.50	SK-164	
15	元豊通寶	行書	回読	1078年	(1.4)	—	—	8.20	6.90	1.05	0.80	第7整形	
16	元豊通寶	行書	回読	1078年	2.8	23.85	18.60	8.05	6.25	1.30	0.90	SD-010	
	元豊通寶	行書	回読	1078年	(0.8)	—	—	—	—	1.40	0.80	SB-036	
17	元祐通寶	篆書	回読	1086年	2.7	22.10	17.45	7.60	5.70	1.50	0.97	第1整形	
18	元祐通寶	真書	回読	1086年	2.3	23.85	18.40	7.70	6.00	1.32	1.00	SK-122	
19	聖宋元寶	篆書	回読	1101年	2.5	23.75	20.30	8.25	6.35	1.22	0.67	SK-200	
20	政和通寶	篆書	対読	1111年	3.7	24.40	21.00	7.65	6.25	1.30	0.85	SK-189	
21	建炎通寶	篆書	対読	1127年	2.5	22.65	19.80	8.10	6.30	1.30	0.77	D2-51	折二銭か
22	洪武通寶	真書	対読	1368年	2.7	23.55	18.85	7.00	5.80	1.42	0.50	D2-43	
23	洪武通寶	真書	対読	1368年	2.7	22.45	17.75	6.60	5.10	1.10	0.67	SD-005	
	不明	—	—	—	1.7	23.50	—	—	5.95	0.90	0.85	D2-56	
	不明	真書	回読	—	(1.2)	—	—	—	—	1.00	0.90	SD-005	「□□元寶」
	不明	—	—	—	(2.8)	—	—	—	—	—	—	SD-010	
	不明	—	—	—	(2.2)	—	—	—	—	—	—	SD-036	
	不明	—	—	—	(0.9)	—	—	—	—	—	—	SK-183	無文銭

第６章　ま と め

本遺跡では，縄文時代から中世までの遺構や遺物が出土し，多くの成果を得られた。遺構は台地のほぼ全域に展開している。古墳時代や平安時代の竪穴住居跡や土坑墓も多く検出されたが，遺構の中心となるのは台地の南側から西側に展開する台地整形区画などの中世遺構群である。遺物も各時代の遺構に伴い，多くの土器が出土しているが，特に貿易陶磁器や瀬戸・美濃，常滑などの陶磁器類をはじめとした中世の遺物が数多く出土した。ここでは，これまでに明らかになった本遺跡全体の概要を述べるとともに，中世については遺構と遺物を中心にさらに整理し，まとめとしたい。

縄文時代は，早期から後期にかけての土器が遺跡全体から散漫に出土している。遺構としては，早期の陥穴や炉穴，前期の住居跡１軒が，台地西側の区域で検出されたのみである。

古墳時代は，竪穴住居跡中期１軒・後期50軒，古墳２基，土坑３基を検出した。中世の台地整形区画を除いた範囲から遺構が検出され，本来は台地全体に集落は展開していたと考えられる。古墳は，すでに大きく削平されていたが，海岸平野を臨む台地先端部付近に位置している。周溝からは５世紀後半の土師器杯が出土しているが，本遺跡の北東側に位置する椎名崎遺跡の西ノ原１号墳と同時期の可能性もある。遺構からの注目される遺物としては，SB-015から出土した鉄製方形鋤・鍬先があげられる。共伴する土器から５世紀前半代に比定され，この時期から徐々に本遺跡での活動が始まったと考えられる。本格的な集落は６世紀中頃から居住が開始され，７世紀中頃まで継続していた。６世紀後半から７世紀前半にかけての住居が30軒存在し，多くの住居がこの時期に集中していることがわかる。その後，７世紀後半から８世紀前半までの期間は，本遺跡での遺構は確認されていない。

奈良・平安時代は，８世紀中頃の住居跡が１軒検出されたほかは，９世紀中頃から10世紀中頃の竪穴住居跡と土坑墓である。９世紀代が13軒，10世紀代５軒の構成となっている。古墳時代の遺構が台地全体に展開していたのに対し，この時期の遺構は台地の中央から西側に範囲を限定して分布している。

１　中世遺構について

中世の遺構については第５章で，台地整形区画・道路状遺構・溝状遺構・堀跡に大別した。さらに，整形区画内の掘立柱建物・柵列・方形竪穴遺構・土坑・地下式坑・火葬施設の個別の遺構は，各整形区画に説明し，出土遺物も各種別に分類して記載した。なお，遺構の変遷については，時期を特定できる資料の出土が少ないため，重複関係や遺構の分布・配置から大枠の傾向を把握した程度である。陶磁器類が出土している遺構もあるが，時期差の大きい遺物が同一遺構の覆土中から出土している例が多くみられた。また，複数の遺構間での接合関係も多く，個別の遺構の時期の確定は困難であった。

伯父名台遺跡は，海岸平野に張り出した東西240m・南北150mの舌状台地上に立地する。東側に細尾根が続いているが，独立した台地の様相を呈している。中世の遺構は，この台地上の北東部を除いた全域に展開している。北東部では，道路状遺構の北側に竪穴遺構２基と溝状遺構１条が単独で検出されたのみで，中世遺構の空白地帯となっている。この空閑地は比較的広い面積を占めており，菜園地等として利用され，竪穴遺構はその作業小屋であったことも考えられる。また，中央部から西側にかけての範囲には，古墳時代から平安時代の遺構があまり攪乱を受けずに多く遺存しており，一部の区域を除いて中世の大規模な造

成は行われなかった可能性がある。台地の南側を中心にして中世の活動は行われていたのであろう。

道路　道路状遺構(SD-036)は，台地南東部から第１・第２整形区画に沿って台地中央部まで走り，第１整形区画の北西コーナー付近で判然としなくなる。本遺跡が立地するこの台地は，東側に延びる細尾根に椎名神社遺跡が存在しているが，ここには道路状遺構は検出されていない。さらに，すぐ隣接する区域では確認調査の結果，すでに4m～5mも削平されており，この道路状遺構の始点は不明であるが，台地下から上ってきた可能性が高い。この遺構は，当初は浅く広く造成されていたが，第１と第２の整形区画の境付近からさらに一段掘り下げられる。底面には不整形のピットが多数掘られており，一部不規則ながら直線的に配列されている。これらのピットは，整形区画の前面に配置された植栽痕列の可能性もある。

また，本遺構は主軸方位を概ねN-75°-Wにとっているが，この方位はこれに直交するN-15°-Eの方位とともに，中世遺構の配置を規制する大きな要素となっている。すなわち，主軸を東西方向にとる遺構はN-75°-Wに，南北方向にとる遺構はN-15°-Eに集約されるものが多い。例えば，第１整形区画の南西側を囲むように位置する溝SD-025・030・035は，ほぼこの方位に配置されていることがわかる。また，SD-036から台地中央に向かって延びるSD-024の方位もN-73°-Wと，これらの溝とほぼ同方位を指している。このことは，台地全体の中世遺構の配置関係を考えるうえで，この２つは重要な方位となっている。

台地整形区画　中世遺構群の中心である台地整形区画は，形状や分布状況からから方形(第１～第３)と弧状の区画(第５～第７)に分けることができる。このうち方形の形態をとる整形区画は，台地の南東部に主に位置し，台地南側に偏っている。特に前述したように，確認調査時に検出された南西部の区画は，調査前に削平してしまったが，推定規模東西50m・南北30mと最も規模の大きな区画である。この区画の大きさは第１整形区画よりも一回り大きく，規模や遺跡全体の分布状況からみても中世遺構の中心であったことがわかる。内容が全く不明であるため明確なことは言えないが，規模や配置状況からみて，「館」かより大きな「屋敷地」などの居住域であった可能性が高い。

方形の整形区画の規模は，第１が東西45m・南北20m～25m，面積1,040㎡(約315坪)，第２が東西21m・南北15m～20m，面積370㎡(約112坪)，第３が東西16m～19m・南北15m～17.5m，面積292㎡(約88坪)となり，第１整形区画が調査した整形区画のなかでは最も規模が大きい。第２整形区画の北側に続く部分を除くと，第２と第３の整形区画はほぼ同規模である。第１整形区画は第５章で述べたように東側と西側に大きく分けられるが，東西15m～20mの範囲に内容的に一つのまとまりをみせる。この規模を基本的な単位として，複合的な要素をもった第１整形区画が形成されていると考えられる。

同様の遺跡の類例としては，成田市駒井野荒追遺跡(林田1993)があげられる。ここでは，出土した中世陶器から15世紀前半から中頃を中心とした時期に屋敷地と墓域が設けられ，有力な農民層の存在を想定している。溝で区画された屋敷地全体の面積は2,080㎡の規模をもち，２か所の台地整形区画や掘立柱建物，土坑，地下式坑などで構成されている。このうち屋敷の中心となる１号台地整形区画は，南北24.5m・東西12.6m，面積271㎡を測り，拡張後の２号整形区画は，南北27m・東西16m，面積は235.6㎡である。本遺跡での単位を東西15m～20m(約1/6町)とすると，これらの区画はほぼ同様の規模になることがわかる。居住域としての規模は，これを最小単位として屋敷地が設けられていった可能性も考えられる。

区画内部の構成については前章で述べたとおりであるが，第１整形区画を中心に想定復原した掘立柱建物も含めてみていきたい。第１では，掘立柱建物は主に区画の中央から北東側に配列され，集中する方形竪穴遺構や地下式坑は西側の区域に設けられており，区域によって遺構の内容が異なっている。方形竪穴

遺構と地下式坑については諸説があるが，本遺跡では掘立柱建物やピット群との同時に存在していたと考えられることから，これらの遺構は貯蔵施設あるいは作業施設としての機能を考えたい。中央から東側の区域は掘立柱建物を中心とした住屋，西側は貯蔵や作業のための空間という，それぞれの機能を想定できよう。主屋となる建物はSA-005(約36㎡)が相当すると思われるが，これはSA-004(約21㎡)と連結することも考えられる。その場合でも，面積は約48㎡と小規模なものである。付属の建物であるSA-002(約19㎡)，SA-003(約24㎡)や，水溜め用の施設と思われる粘土貼り土坑(SK-171・179)も近接して配置されており，居住の中心的な空間であった可能性は高い。南側の空閑地との境には塀と思われる柵列(SC-004)が付設され，居住区域とは区画されている。東側に連続する柵列(SC-006)も同様の施設である。また，柵列あるいは植栽列(SC-005)が囲うように巡る東側の一角にあるSA-007(約28㎡)は，庇や室を持つ構造で主屋とは別の住屋が想定できる。SA-001(約15㎡)やSA-006(約10㎡)は小屋のような建物であろう。この屋敷地の出入り口は，区画の南西側の段差付近に設けられていたと考えられる。並列するピット群のうち，幅2.4mの間隔に並ぶ２本のピット(PitA･B)は，簡単なつくりの門のような施設の一部であることも想定される。その内側には見通しを避けるようにSC-002・003がほぼ正面に配置されている。その奥にあるSC-001は簡単な塀のような施設で，方形竪穴遺構を囲っている。なお，SK-175はほかの地下式坑とは異なり，区画の縁辺部ではなく平坦面に配置されている。これは，屋敷地としての機能が終了し区画が廃絶された後に，火葬施設SK-175とともに当初から埋葬施設として設けられたと思われる。第２・第３整形区画については，掘立柱建物の面積が小さく，貯蔵施設を伴う小規模な屋敷地であったことが想定される。

内部の構成については，それぞれの整形区画でいくつかの共通点と相違点がみられる。同規模の第２と第３整形区画の相違点は次のとおりである。1)第３整形区画に方形竪穴遺構が配置されていることである。しかもこの遺構には，出入り口施設や底面にピットを持ち，建物として機能していたことも考えられる。土坑は，第２が北側の道路近くに集中しているのに対し，第３では全域に散漫に分布しピット数も多い。2)第２整形区画には井戸が存在していることである。3)地下式坑は，それぞれ区画の段差際に設けられているが，第２整形区画は北側に１基，第３では東西の際に計３基が設けられていることである。共通点としては，1)区画の段差際にピット列が配置されていないこと，2)粘土貼り土坑や火葬施設が設けられていないこと，などである。これに対し，第１整形区画は，区画内に井戸を持たないことを除いて内容的には，基本的な要素を備えている。他の整形区画と比較するとその特徴として，1)区画の周辺に柵列や植栽痕列と考えられるピット列が配置されていること，2)比較的規模の大きな方形竪穴遺構が集中して配置されていること，3)粘土貼り土坑が設けられていること，時期は下るが4)馬を埋葬した地下式坑や火葬施設の存在，などがあげられる。

また，第１整形区画ではSD-025・030・035が，前述したように区画南西側を囲むように段差付近などに配置されている。SD-030は区画の段差に沿って一部を削平しており，屋敷地として使用されている間に設定された可能性がある。区画内の方形竪穴遺構や土坑では，SK-136とSK-176を結んだ線の西側の遺構覆土中からのみ中世陶器が出土しており，SD-030などの設置に伴って人為的に埋め戻されたと考えられる。その時期は出土遺物から判断して，15世紀中頃であろう。これらの溝は，幅は狭いが比較的深く，丁寧に掘り込まれており，堀や板塀のような防御的施設と想定できる。

このような方形の整形区画に対して，弧状の区画は台地の縁辺部に単独で位置している。内部の構造も土坑が散漫に分布している程度で，方形竪穴遺構や掘立柱建物，井戸などの施設も検出されていない。周

辺には堀切と考えられるSD-001や溝が配置されている。これは，方形の整形区画が屋敷地として生活関連遺構が多く検出されているのに対し，弧状の区画は立地状況や周辺の遺構との関連から，防御的な性格の強い遺構であることを示唆している。

2　遺物について

中世の遺構からは，陶磁器をはじめとして，金属製品，石製品，銭貨などが数多く出土しているが，ここでは陶磁器を中心にみていきたい。

出土した中世陶磁器で，産地の判明したものは769点を数える。内訳は，貿易陶磁器48点(6.2%)，瀬戸・美濃161点(20.9%)，常滑529点(68.8%)，土器類31点(4.0%)である(第152図，第６表)。

時期　産地の判明した769点の中世陶磁器のうち，編年や時期が明確な破片は226点で，12世紀中頃から16世紀後半までの製品が出土している(第７表)。全体として増加する時期は，13世紀前半と，14世紀前半から15世紀前半の２時期に大きく分けられる。13世紀前半は，貿易陶磁器と初期の常滑製品の増加による。14世紀前半は，常滑のピークと瀬戸・美濃の廃棄開始時期にあたる。14世紀後半から15世紀前半にかけては，瀬戸・美濃の増加や常滑の再度の増加傾向により，遺跡全体で出土量が最も増える時期にあたる。15世紀後半からは次第に減少し，16世紀後半にはほとんど消滅してしまう。

貿易陶磁器は，12世紀中頃から13世紀と13世紀中頃の製品が多い。白磁皿はⅢ類，碗はⅨ類にそれぞれ比定され，12世紀中頃から13世紀と13世紀中頃の年代が考えられる。青磁碗は，龍泉窯系Ⅰ類と同安窯系Ⅰ類の製品が４点出土しており，12世紀中頃から13世紀初めにかけての製品と思われる。青磁では13世紀中頃の龍泉窯系Ⅰ-5類の碗が20点と最も多く出土している。これ以外にも15世紀代と考えられる白磁皿と鉄釉壺が出土しており，搬入の時期が大きく２回あったことを示唆している。常滑よりも先行して搬入されている12世紀代の製品は伝世品であろう。

瀬戸・美濃は，14世紀初めから16世紀末までの製品が出土している。本遺跡で最も古い製品は，14世紀初めの古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期に比定される折縁深皿である。14世紀中頃の製品は不明であるが，14世紀後半にあたる中Ⅳ期～後Ⅰ期から増加を始め，15世紀前半の後Ⅲ期までの間が出土点数が多い。この間の製品としては，天目茶碗，灰釉四(三)耳壺，灰釉平碗，縁釉小皿，直縁大皿，灰釉大皿，卸目付大皿など器種も豊富である。その後は次第に減少し，15世紀後半の古瀬戸Ⅳ期の皿類を最後に大窯期に移行する。大窯期は，１期(15世紀末～16世紀初め)の端反皿から４期(16世紀末)の鉄釉擂鉢まで出土しているが，出土点数はわずかに計９点である。

常滑は，12世紀末から15世紀前半までの製品が出土している。甕は，12世紀末～13世紀初めの３～４型式から現れ，７型式(14世紀前半)の出土点数が最も多くなる。その後は，次第に減少し９型式(15世紀前半)以降の製品は出土していない。捏鉢・片口鉢は，５型式(13世紀前半～中頃)から出現する。９型式(15世紀前半)の製品が最も多いが，その後は甕と同様に出土していない。

分布　分布範囲(第153図)は遺跡全体に及んでいるが，特に第１整形区画とその周辺のSD-025・030・036に集中し，全出土点数の62%にあたる478点がこの区域から出土している。これに第２・第３整形区画やSX-017も合わせると，568点もの中世陶磁器が第１整形区画を中心とした範囲に集中して出土しており，これは全出土点数の74%の割合を占めていることになる。種類別でも貿易陶磁器から土器類までの全製品が出土している。その他の区域では，台地中央部から北西部と西部にかけて分布している。中央部では，SD-017・024，SX-008とその周辺から，青磁碗，瀬戸・美濃，常滑やカワラケが散漫に出土している。北西

部はSD-001から，白磁碗，青磁碗，瀬戸・美濃，常滑の破片が29点出土した。第１整形区画周辺以外での遺構からの出土点数としては最も多いが，全出土点数の3.8％にすぎない。西部でもSD-005・009・010から，青磁碗，瀬戸・美濃，常滑の破片が計21点，第７整形区画からは16点が出土した。

第１整形区画内からは277点の中世陶磁器が出土している。内訳は，貿易陶磁器17点(6.1％)，瀬戸・美濃82点(29.6％)，常滑171点(61.7％)，土器類７点(2.5％)である。時期からみると，12世紀中頃から16世紀前半までの製品が出土している。14世紀前半から次第に増加し，15世紀前半に最も多くなる。15世紀後半からは急激に減少し，16世紀後半には消滅する(第８表)。遺物はほぼ区画全体から出土している。東側では，この範囲を囲むように覆土中から貿易陶磁器や瀬戸・美濃，常滑，銭貨が出土するが，特に北側段差付近や粘土貼り土坑周辺に集中している。遺構の検出が少ない範囲では，遺物の出土も少ない。遺構からの出土は，SK-136とSK-176を結んだ線の西側の竪穴遺構などに限定され，その東側の遺構からは全く出土していないことが注目される。中央のピット群を境に，東側と西側では出土傾向に大きな違いがある。これは前述したように，防御的な堀の築造に伴う人為的な埋め戻しによるものと考えられる。西側の遺構から出土した中世陶器は，13世紀代の常滑も含まれているが，概ね14世紀末から15世紀前半の時期の瀬戸・美濃や常滑の製品と15世紀前半の常滑製品である。SK-147からは古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期(14世紀後半)の天目茶碗が出土している。後Ⅰ～Ⅱ期(14世紀末～15世紀初め)の灰釉四(三)耳壺は６か所の竪穴遺構や地下式坑から出土しているが，区画の覆土中の破片とも接合しており，広範囲に破片が廃棄されたと考えられる。また，地下式坑SK-115からは常滑甕片を中心に，同安窯系の青磁碗や瀬戸・美濃，常滑，カワラケまで39点が覆土中から出土しており，こちらは時期の異なる製品が多く混在していることがわかる。

遺構間の接合関係も多い。第145図57の常滑捏鉢(９型式)は，区画西側の北端に位置する地下式坑SK-115，土坑SK-135・136と北側の道路状遺構溝SD-036，区画南東部のSX-025からそれぞれ出土した破片が接合している。同一整形区画内での広範囲な接合関係は，瀬戸・美濃の灰釉四(三)耳壺(第144図32)にみることができる。主に，区画中央から西側にかけての覆土中や遺構内に広く散布し，40m離れた破片が接合している。第145図40の常滑甕(第７型式)は，第１整形区画内の地下式坑SK-115・SK-175の破片と，第５整形区画から出土した破片が接合した。直線距離にして約95mも離れており，遺跡のなかでかなり遺物が移動している。また，グリッドで取り上げた中世陶磁器の分布(第154図)は，第１から第４整形区画の範囲に集中し，西側と北西側の区域からはほとんど出土していない。これは西側を中心とする区域を広く整地などの改修が行われた際に，主に東側の整形区画が最終的に不要品の廃棄場として利用され，広い範囲から集められた陶磁器類が投棄された結果と考えられる。この改修の時期は明らかではないが，大規模な整地であるならば，堀(SD-001)の掘削とともに16世紀代に行われたことも想定できる。

３　時代的背景について

伯父名台遺跡は，古代は下総国千葉郡千葉郷，中世においては八条院領千葉庄に属し，江戸時代には千葉郡椎名下郷と呼ばれていた地域である。『千葉大系図』に千葉常兼の子で常重の弟にあたる胤光が「椎名六郎」として「居城于下総國千葉庄椎名郷」とあるが，『神代本千葉系図』では千葉常胤の弟である胤光が椎名五郎と称しており，こちらの説の方が有力である(野口1994)。椎名氏は12世紀中頃には，「椎名台」を中心に城を構えていたようである。この「椎名台」は，伯父名台遺跡の南側に位置する刈田子台遺跡にあたると考えられる。千葉氏の一族である椎名氏は，この「椎名郷」に本拠地を構えていたが，12世紀の終わり頃に匝瑳南条庄に移り住み，以後はその地で勢力を伸ばしていくことになる。なお，『日本城郭大系』第６

巻(大木ほか1980)には，椎名崎大字おちない台に「おちない台館」が所在し，「半島状台地の全体が占地され，直線連郭をなしており，土塁・空堀の一部残る」と記載されている。本遺跡に該当すると考えられるが，地名の由来など詳細については不明である。

千葉庄は，12世紀初めに在庁官人であった千葉常重が所領を八条院に寄進したことによって成立したものである。鎌倉時代にも八条院領として伝えられており，下総国守護に補任された千葉氏の拠点となっていた。千葉氏は，一族内の対立はあったものの，鎌倉幕府の滅亡と続く南北朝の動乱期にも下総国守護職を維持していたが，室町期に入ると応永23年(1416)の上杉禅秀の乱，永享10年～嘉吉元年(1438～1441)の永享の乱・結城合戦と，鎌倉公方(のちに古河公方)と関東管領の対立抗争から発展した東国各地の戦乱のなかに巻き込まれていく。そして享徳３年(1454)から始まった享徳の乱では，関東管領上杉氏側の千葉宗家は，古河公方足利成氏側に属した馬加康胤や原胤房についに滅ぼされる事態となった。その後，伝統的権威である千葉介として千葉宗家を継承した馬加系千葉氏は，15世紀後半に本拠地を千葉城から酒々井町の本佐倉城に移し，千葉庄は実質的に小弓城に拠る原氏の支配するところとなっていった。

この原氏は，千葉介満胤の子で「再原祖」といわれる原胤高を祖とする千葉氏の一族で，生実付近を本貫地としていた(外山1990)。上総との国境に位置する小弓周辺は，浜村に近接し太平洋側と連絡する街道も近くを通るなど，陸海の交通の要衝の地でもあった。そのため原氏は，しばしば上総真里谷武田氏と所領などをめぐって衝突し，これを撃退してきた。そこで真里谷武田氏は安房里見氏と同盟を結び，永正14年(1517)には古河公方足利高基の弟である足利義明を擁して，原氏の居城であった小弓城を攻めてこれを奪い取った(永正15年という説もある)。義明は小弓公方と称して小弓城に居城することになるが，古河公方・北条氏と天文７年(1538)国府台に戦い敗死する。その後，原氏は小弓城を奪還したが，天文８年(1539)に北生実の生実城に本拠地を移したといわれている。さらに，北条氏と結びついた原氏は，千葉氏の拠点であった臼井城を16世紀中頃には攻略し，次第に下総各地に進出して千葉氏を凌ぐ勢力に成長していく。

一方，二度の国府台合戦で敗れた里見氏は，再び勢力を挽回し数度にわたり下総に侵攻して，永禄４年(1561)と元亀元年(1570)には生実城を落城させている。元亀２年(1571)のものとされる六月二日付井田平三郎宛の千葉胤富書状写(「井田文書」)に，「･･･，然處生實邊ニ敵地形見掛候間，窪田普請出来候者，翌日普請可打立事候，･･･，普請未熟之刻，即乗向可付是非候，氏政も加勢之儀，所望候，･･･，両地出来候者，何事も不可有所詮候，急速之行ニ極之由候，･･･」と，里見方は窪田(袖ヶ浦市久保田)に城を完成させた翌日にも，生実周辺に城を築こうとしているので，未完成のうちに攻撃するため急いで来陣するよう，坂田城の井田平三郎に命令を下している(横芝町史編纂委員会1975)。胤富は北条氏政にも応援を要請しており，当時の緊迫した状況が伝わってくる。この書状にみえる里見方の「普請未熟」の城についての位置や内容は判然としないが，伯父名台遺跡がその地であるならば，堀(SD-001)が該当することも十分に考えられる。

伯父名台遺跡が中世の村落として継続していた12世紀末頃から15世紀後半の時期の，この地域に関する詳細な記録はほとんどないが，14世紀後半から15世紀後半までの史料として「香取造営料足納帳」(市川市史編纂委員会1973，以下単に「納帳」と略す)と『本土寺過去帳』(千葉県1982，以下単に『過去帳』と略す)に，わずかに人名や地名を見いだすことができる。

「納帳」は，香取神宮の遷宮に伴い賦課された「造営料」のうち，明徳３年(1392)から応永12年(1405)までの14年分と応永13年(1406)・同14年(1407)の納付状況を表している(遠山1990)。ここには，造営料を負担する人物名・寺院名やその所領地と面積・負担銭額が記載され，下総各地の地名のなかに「椎名」が７か所

にみえる。すなわち，「椎名郷」の「原殿」，「椎名」の「圓城寺源内左衛門殿」，「粟六郎殿」，「椎名九郎殿」，「宍倉七郎左衛門入道」，「牛弓御坊」，「普見庵」と，「椎名」に領地を所有していた領主や寺院が記載されている。このうち，「粟六郎」は「粟飯原六郎」であろうが，寺院である「牛弓御坊」と「普見庵」については未詳である。また，原氏は「原殿」のほかに，「原越前入道」「原将監」の名がみえ，小弓周辺以外にも「高篠」「小栗原」「牛尾」に領地を所有し，円城寺氏と競合している土地もある。「椎名九郎」は，この「椎名」をかつて本拠地としていた椎名氏の一族であろう。主流が匝瑳方面に移住した後も，一部は残留していたのか，所領のみを残していたのかは明らかではないが，田数一町九反六十歩と小規模である。この「納帳」からは，これらの領主の多くが一か所にまとまった土地を所領していたのではなく，各地に領地を分散していたことがわかる。「椎名」における田地の面積は，圓城寺源内左衛門の四町六反大を最大に，粟飯原六郎の三丁四反三十，椎名九郎の一町九反六十歩，宍倉七郎左衛門入道の五反小，普見庵の五反小，牛弓御坊の二反半と続く。14世紀末から15世紀初頭の伯父名台遺跡の周辺には，谷津田を中心とした比較的小規模な田地が複雑に入り組み，複数の所有者が存在していたことが理解できる。しかも，後に原氏と激しく対立し千葉宗家とともに滅ぼされる円城寺氏や，足利将軍家と密接な関係があった粟飯原氏の一族の領地が，この「椎名」に存在していたことは注目される。また，「原殿」は応永13年11月９日に「椎名郷分」として，銭参貫八百廿五文を納めている。これは田数にして十五町三反に相当する規模であり，「原殿」と小弓城の「原胤高」との地理的・年代的な近似から，両者の「かなり強い関連性」を指摘する見解もある(遠山・外山1985)。

15世紀後半の史料としては，『過去帳』九日上段に「原越後入道道喜」が「文明三辛卯九月小弓館ニテ 打死」とある。文明３年(1471)９月９日に小弓城周辺において合戦が行われたようであるが，この人物を原越後守胤房にあてる見方もある。なお，この年の６月には古河公方足利成氏が長尾景信に古河城を追われ，本佐倉城の千葉孝胤を頼っており，この頃までには千葉宗家が本佐倉城に移っていたことがわかる。これより先に，道喜に近いと思われる人物として，『過去帳』八日上段に「原入道道盛」が「嘉吉元 六月 結城陳ニテ」死亡したことが記録されている。系譜関係は明らかではないが，「原越後入道道喜」と同じ一族であろう。結城合戦は嘉吉元年(1441)４月には終了しているので，落城後の残党との戦闘等で死亡したことも考えられる。16世紀初頭の文亀元年(1501)には，『過去帳』十九日中段に「栗生入正蓮」が「文亀元辛 小弓ニテ被誅」の記録があり，「長谷殿妙長」「同新六妙永」とともに誅殺されている。いずれの人物についても詳細は不明であるが，15世紀後半以降の小弓周辺の不安定な状況を知ることができる。

４　おわりに

中世における伯父名台遺跡の内容や，村落として存続していた時代背景について概観してきた。この地域は本来は椎名氏の支配地であったが，村落の経営が開始された12世紀末頃には匝瑳方面に本拠地を移しており，その後は千葉氏の支配下におかれていたと考えられる。初期の13世紀前半は，比較的安定した時期が続き，村落の基礎もこの時期に形成されたのであろう。台地整形区画を中心とした居住域には，貿易陶磁器なども入手できる名主のような有力農民層を想定することができる。ただし，のちの「納帳」にみえるような田地の複雑な領地の分散からは，地主的な名主層の存在は想定しがたいと思われる。その後，鎌倉幕府の滅亡や南北朝の動乱期には一時的に衰退したものの，動乱が収束した14世紀後半からは再び活発になり，15世紀代には貿易陶磁器が搬入されるなど最盛期を迎える。この背景には，近接する浜村での中世江戸湾における活発な交易や，港湾都市の「有徳人」と称される人々の出現などの影響もあったと考えられる(浜名1991，市村1992)。しかし，15世紀前半の上杉禅秀の乱から始まった争乱は，永享の乱から享徳

の乱へと広がり，千葉宗家の滅亡と千葉介の馬加系千葉氏への交替，原氏の台頭という変化をもたらした。その頃には防御的な体制をとりながらも存続していた村落も，15世紀中頃からは次第に衰退していき，原氏が実質的に千葉庄を支配することとなった15世紀末までに，この台地上での村落は廃絶したようである。その後の村落の所在は明らかではないが，別の場所でほかの集落と結びつき新たな集落として発展していったと思われる。その場所は，現在の集落と同じ地域に重なる可能性が高く，今後の調査では周辺地域との関連を検討する必要があろう。廃絶した整形区画は，火葬施設や馬葬坑にみられるように，この村落の葬送区域として一部機能していたことが想定できる。16世紀代には瀬戸大窯製品もわずかながら出土しており，台地上での小規模な活動が認められる。そして最終的には，一時的に里見氏による「普請未熟」な城の施設として，伯父名台遺跡が使用された可能性も十分に考えられるだろう。

参考文献

横田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-形式分類と編年を中心として-」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

藤澤良祐　1982　「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第８号　東洋陶磁学会

藤澤良祐　1986　「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐　1991　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐　1995　「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『研究紀要』第３輯(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

中野晴久　1994　「赤羽・中野「生産地における編年について」」『「中世常滑焼をおって」資料集』　日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久　1995　「常滑焼編年作業と今後の課題」『考古学ジャーナル』№396　ニューサイエンス社

笹生　衛　1991　「房総の中世土器様相について」『史館』第23号　史館同人会

市川市史編纂委員会　1973　『市川市史』第５巻　吉川弘文館

横芝町史編纂委員会　1975　『横芝町史』　千葉県山武郡横芝町

矢戸三男・谷　旬ほか　1979　『千葉市西屋敷遺跡』　(財)千葉県文化財センター

大木　衛ほか　1980　『日本城郭大系』第６巻 千葉・神奈川　新人物往来社

千葉県　1982　『千葉縣史料 中世編 本土寺過去帳』

遠山成一・外山信司　1985　「岩富原氏の研究」『房総史学』第26号　千葉県高等学校教育研究会歴史部会

遠山成一　1990　「室町前期における下総千葉氏の権力構造についての一考察-「香取造営料足納帳」の分析を中心に-」『千葉史学』第16号　千葉歴史学会

外山信司　1990　「戦国末期の下総原氏」『千葉史学』第17号　千葉歴史学会

浜名敏夫　1991　「中世江戸湾の海上交通」『千葉史学』第19号　千葉歴史学会

市村高男　1992　「中世東国における房総の位置-地域構造論的視点からの概観-」『千葉史学』第21号　千葉歴史学会

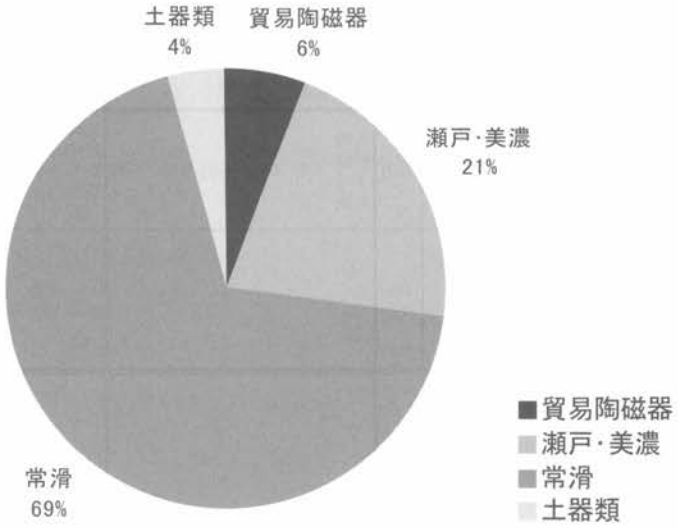
林田利之　1993　『駒井野荒追遺跡』　(財)印旛郡市文化財センター

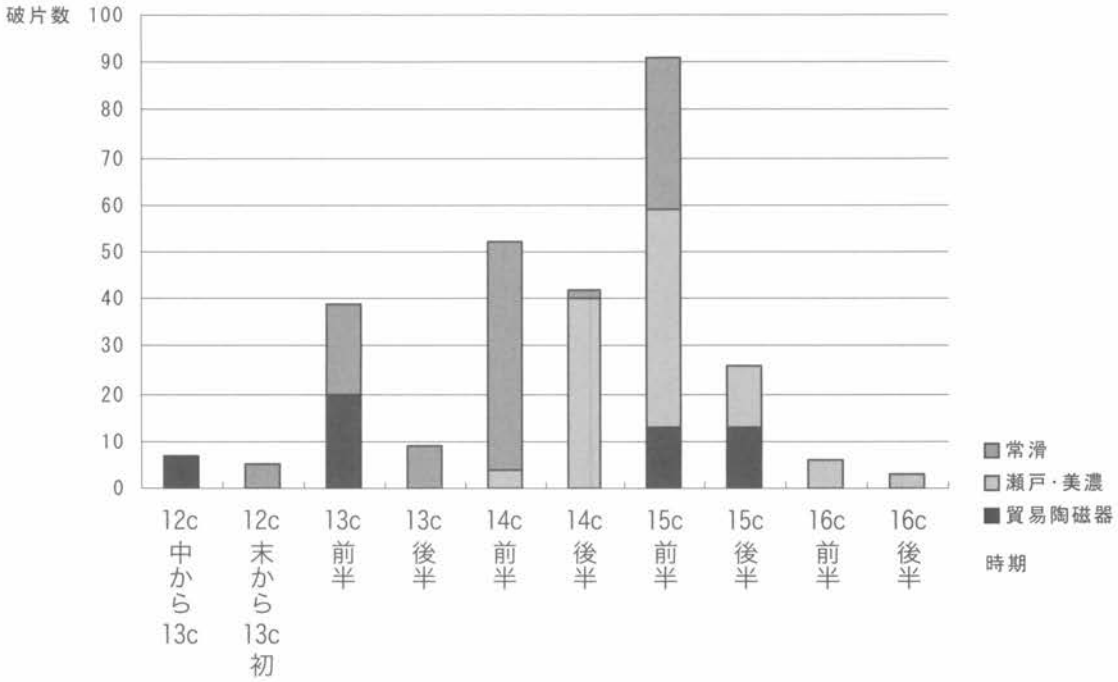
野口　実　1994　『中世東国武士団の研究』　高科書店

小高春雄　1995　「小弓城跡」『千葉県所在中近世城館詳細分布調査報告書Ⅰ-旧下総國地域-』　千葉県教育委員会

坂田城跡総合調査団　1996　『坂田城総合調査報告書　上総井田文書』　横芝町教育委員会

井上哲朗　2001　『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書』９　(財)千葉県文化財センター





※ 15世紀代の貿易陶磁は，15c前半と後半の両方に含めてある。

第152図　中世陶磁器組成

第6表　中世陶磁器遺構別組成表（破片点数）（1）

整形区画	遺構・グリッド	貿易陶磁器																													
		白磁				青白磁	青磁					鉄釉	瀬戸・美濃																		
		碗		皿		瓶子	碗			皿	香炉	壺	灰釉四(三)耳壺	小壺	瓶子	水注か	袋物	天目茶碗	灰釉平碗	端反碗	灰釉碗	縁釉小皿			縁釉皿		卸皿	
		Ⅳ類	不明	Ⅲ類		不明	龍泉窯系Ⅰ類	龍泉窯系Ⅰ-5類	同安窯系Ⅰ類	龍泉窯系	不明	不明	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期	不明	不明	不明	不明	古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期	古瀬戸後Ⅰ期	古瀬戸後Ⅱ～Ⅳ期	古瀬戸後Ⅳ期古	不明	古瀬戸後Ⅱ期	古瀬戸後Ⅲ期	古瀬戸後Ⅳ期新	古瀬戸後期		古瀬戸後Ⅳ期新		不明
		13c中葉		12c中葉～13c	15c代		12c中葉～13c初	13c中葉	12c中葉～13c初	不明		15c代か	14c末～15c初					14c後半	14c後半	15c前半	15c中葉		14c末～15c初	15c前半	15cⅢ	14c後半～15c後半		15cⅢ		
第1整形区画	C2-31																														
	C2-32																														
	C2-63												2																		
	D2-25																														
	D2-33												1																		
	D2-36																														
	D2-43												5				1			1											
	D2-44												1																		
	D2-45		1				1		1												2				5		1			
	D2-46																				1										
	D2-50	1						1				1									1		1								
	D2-51																														1
	D2-52							1					1		1							1		1	3					
	D2-54																				4										
	D2-56																														
	D2-57												1		1																
	D2-59												1																		
	D2-60																														
	D2-62																														
	D2-63																														
	D2-64							1																							
	D3-01																														
	D3-03																														
	D3-04							2										1													
	D3-05																						1								1
	D3-06																				1										
	D3-07				1								1																		
	D3-12																														
	D3-13																				1										
	D3-14							1																							
	D3-15																														
	SK-115								1				2						1												
	SK-116											1	2								1										
	SK-117												1												1						
	SK-118																														
	SK-122												1																		1
	SK-126																														
	SK-134																														
	SK-135																														
	SK-136												3								1										
	SK-147																	1													
	SK-150																														
	SK-175												1																		
	SK-176																														
	SX-009				1	1		1					6								2	1		1	2					
	SX-010																														
	SX-025																														
	小計	1	1	0	2	1	1	7	2	0	0	2	29	0	2	0	0	1	2	1	0	1	14	2	2	2	11	1	3
		17											32						18					28					
第2整形区画	D3-08																														
	E2-49					2																		1						
	E2-50																							1							
	E2-51							2																							
	E2-57														1																
	E2-59							1																							
	E2-60							1													1										
	E3-01														1												1				
	E3-04																														
	E3-10																														
	SK-189																														
	小計	0	0	0	0	2	0	4	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0
		6											2						1					4					

国産陶器																										土器					遺構別出土点数
										常滑																伊勢	在地				
折縁深皿	直縁大皿	卸目付大皿	灰釉大皿	端反皿	折縁皿		鉄釉擂鉢			甕							揑鉢・片口鉢								鍋	香炉	擂鉢	カワラケ	内耳鍋	
古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期	古瀬戸後Ⅱ期	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期	大窯1期	大窯3期	大窯3期後	大窯1期	大窯4期前	不明	3～4型式	4～5型式	5型式	6b型式	7型式	9型式	不明	5型式	6a型式	5～6型式	7型式	8型式	9型式	7～9型式	不明	不明	不明			
14c初	14c末～15c初	15c前半	15c前半	15c末～16c初	16c Ⅲ	16c後半	15c末～16c初	16c末		12c末～13c初	13c前半	13c前半～中頃	13c末	14c前半	15c前半		13c前半～中頃	13c Ⅲ	13c代	14c前半	14c後半	15c前半	14c前半～15c前半							
																1															1
																2															2
																															2
																1															1
																															1
																2			1												3
													1			3			1												12
1																															2
									2							23						2	1							39
																															1
																										1					6
																															1
1														1		10						6									26
																3															7
														3		1	1						1								6
																6						1									9
																															1
	1															1						1			1						4
																1															1
																2															2
																1															2
														1																	1
																1															1
														1		2						2									8
															1							1									4
																3															4
																							1								3
														1																	1
									1																						2
														1		1															3
														1																	1
														3	1	27		1				2						1			39
																1															5
																4		1													7
																1															1
																2		1	1												6
																2															2
																			1												1
																						1									1
																1			1			1									7
																															1
																1															1
									1					1		6															9
														1		1															2
1			2											2		9		1		1		1						3	1		36
				1																											1
																						1									1
3	1	0	2	1	0	0	0	0	4	0	0	0	1	16	2	119	1	4	5	1	0	19	3	1	1	0	4	1	277	
			28					4					138							33										
																1				1											2
																1															4
										1																					2
														2																	4
																															1
		1																	1												3
																1							1								4
																1	1														4
							1																								1
																1															1
														2														1			3
0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	4	0	5	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	29	
			4					1					10							4										

中世陶磁器遺構別組成表（2）

整形区画	遺構・グリッド	貿易陶磁器																											
		白磁				青白磁	青磁					鉄釉	瀬戸・美濃																
		碗		皿		瓶子	碗			皿	香炉	壺	灰釉四(三)耳壺		小壺	瓶子	水注か	袋物	天目茶碗	灰釉平碗		端反碗	灰釉碗	緑釉小皿			緑釉皿	卸皿	
		IV類	不明	III類		不明	龍泉窯系I類	龍泉窯系I-5類	同安窯系I類	龍泉窯系	不明	不明	古瀬戸後I～II期	不明	不明	不明	不明	不明	古瀬戸中IV～後I期	古瀬戸後I期	古瀬戸後II～IV期	古瀬戸後IV期古	不明	古瀬戸後II期	古瀬戸後III期	古瀬戸後IV期新	古瀬戸後期	古瀬戸後IV期新	不明
		13c中葉		12c中葉～13c	15c代		12c中葉～13c初	13c中葉	12c中葉～13c初	不明		15c代か	14c末～15c初						14c後半	14c後半	15c前半	15c中葉		14c末～15c初	15c前半	15c III	14c後半～15c後半	15c III	
第3整形区画	C2-59																	1									1		
	C2-60											1																	
	C2-61							1																					
	C3-01											1																	
	C3-02																												
	C3-03											1									1					1			
	C3-04										1	1														1	1		
	C3-05																												
	C3-10																						1						
	C3-11																												
	C3-12																		1										
	C3-20																				1								
	C3-21																										1		
	C3-28																												
	SK-200	1																											
	SK-201																										1		
	SK-208																												
	SK-209																												
	SK-210																												
	SK-211a							1				1																	
	SK-222																												
	小計	1	0	0	0	0	0	2	0	0	1	5	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	1	0	0	2	4	0	0
		9											1						4										
第4整形区画	B2-61																												
	B3-03																												
	B3-05																	1											
	B3-13																												
	B3-14																												
	SK-217																						1						
	SK-224																	1											
	SX-015																												
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
		0											2						1										
第5	SX-002																	1											
第6	SK-010																												
	SX-004																												
第7	SX-007																						1				1		
	B1-55																1	1											
	B2-02											1																	
	B2-31																												
	C1-01																												
	C2-02											1																	
	C2-03																												
	C2-12																												
	C2-25																												
	C2-53							1																					
	D2-02																												
	D2-12																												
	E2-02																												
	E2-15																						1						
	SB-008																						1						
	SB-012																	1											
	SB-025																												
	SB-033																												
	SB-043																												
	SB-045																												
	SB-046																												

国産陶器																									土器					遺構別出土点数
										常滑															伊勢	在地				
折縁皿	直縁大皿	卸目付大皿	灰釉大皿	端反皿	折縁皿		鉄釉擂鉢			甕							捏鉢・片口鉢								鍋	香炉	擂鉢	カワラケ	内耳鍋	
古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期	古瀬戸後Ⅱ期	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期	大窯1期	大窯3期	大窯3期後	大窯1期	大窯4期前	不明	3～4型式	4～5型式	5型式	6b型式	7型式	9型式	不明	5型式	6a型式	5～6型式	7型式	8型式	9型式	7～9型式	不明		不明	不明			
14c初	14c末～15c初	15c前半	15c前半	15c末～16c初	16cⅢ	16c後半	15c末～16c初	16c末		12c末～13c初	13c前半	13c前半～中頃	13c末	14c前半	15c前半		13c前葉～中頃	13cⅢ	13c代	14c前半	14c後半	15c前半	14c前半～15c前半							
																3			1											2
1																														5
													1			3														2
																2														5
																3														2
			1													6														6
																1														11
									2																					1
				1																										3
																														1
																														1
																														1
																2														2
																														1
																														1
																1														1
																												1		1
																4														4
				1																										3
																1														1
1	0	0	1	2	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	26	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	55
			10					2					27							1										
																1				1										2
									1							5														6
																														1
																1						1								2
																1														1
																														1
																						2								3
																3	1													4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	11	1	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	20
			0					1					11							5										
								1						1																3
														1																1
																1												1		2
									2							5		2			1	1						2	1	16
																2														4
																														1
																1														1
																1														1
																7														8
																1														1
																1														1
																1														1
																														1
																8														8
									2																					2
																2														2
																														1
																														1
						1																								2
																														1
																												1		1
																1														1
																												3		3
																1														1

中世陶磁器遺構別組成表（3）

整形区画	遺構・グリッド	貿易陶磁器											瀬戸・美濃																
		白磁				青白磁	青磁					鉄釉																	
		碗		皿		瓶子	碗			皿	香炉	壺	灰釉四(三)耳壺		小壺	瓶子	水注か	袋物	天目茶碗	灰釉平碗		端反碗	灰釉碗	緑釉小皿			緑釉皿	卸皿	
		IV類	不明	III類		不明	龍泉窯系I類	龍泉窯系I-5類	同安窯系I類	龍泉窯系	不明	不明	古瀬戸後I～II期	不明	不明	不明	不明	不明	古瀬戸中IV～後I期	古瀬戸後I期	古瀬戸後II～IV期	古瀬戸後IV期古	不明	古瀬戸後II期	古瀬戸後III期	古瀬戸後IV期新	古瀬戸後期	古瀬戸後IV期新	不明
		13c中葉		12c中葉～13c	15c代		12c中葉～13c初	13c中葉	12c中葉～13c初	不明		15c代か	14c末～15c初						14c後半	14c後半	15c前半	15c中葉		14c末～15c初	15c前半	15c III	14c後半～15c後半	15c III	
	SB-060																												
	SB-063																	1											
	SB-072																												
	SD-001		1					1						1		1		9	1				1						
	SD-003																												
	SD-005							2																		1			
	SD-007																												
	SD-008																												
	SD-009																												
	SD-010																												
	SD-013																										1		
	SD-017							1						1															
	SD-018																												
	SD-020																												
	SD-024																												
	SD-025							1				2						2											
	SD-026																												
	SD-030												1																
	SD-031																												
	SD-032																												
	SD-034																												
	SD-035																												
	SD-036		1	1						1								2					2				2		
	SD-037																												
	SK-002																												
	SK-008																												
	SK-011																												
	SK-022																	1											
	SK-047																												
	SK-119																												
	SK-191																												
	SB-078																												
	SX-008																	1							1				
	SX-017							1																					
合計		2	3	1	2	3	2	20	2	1	1	11	30	2	4	1	1	23	4	1	2	1	23	4	3	5	20	1	3
		5		3		3	24			1	1	11	61						31										
総計		48											161																
比率		6.2%											20.9%																

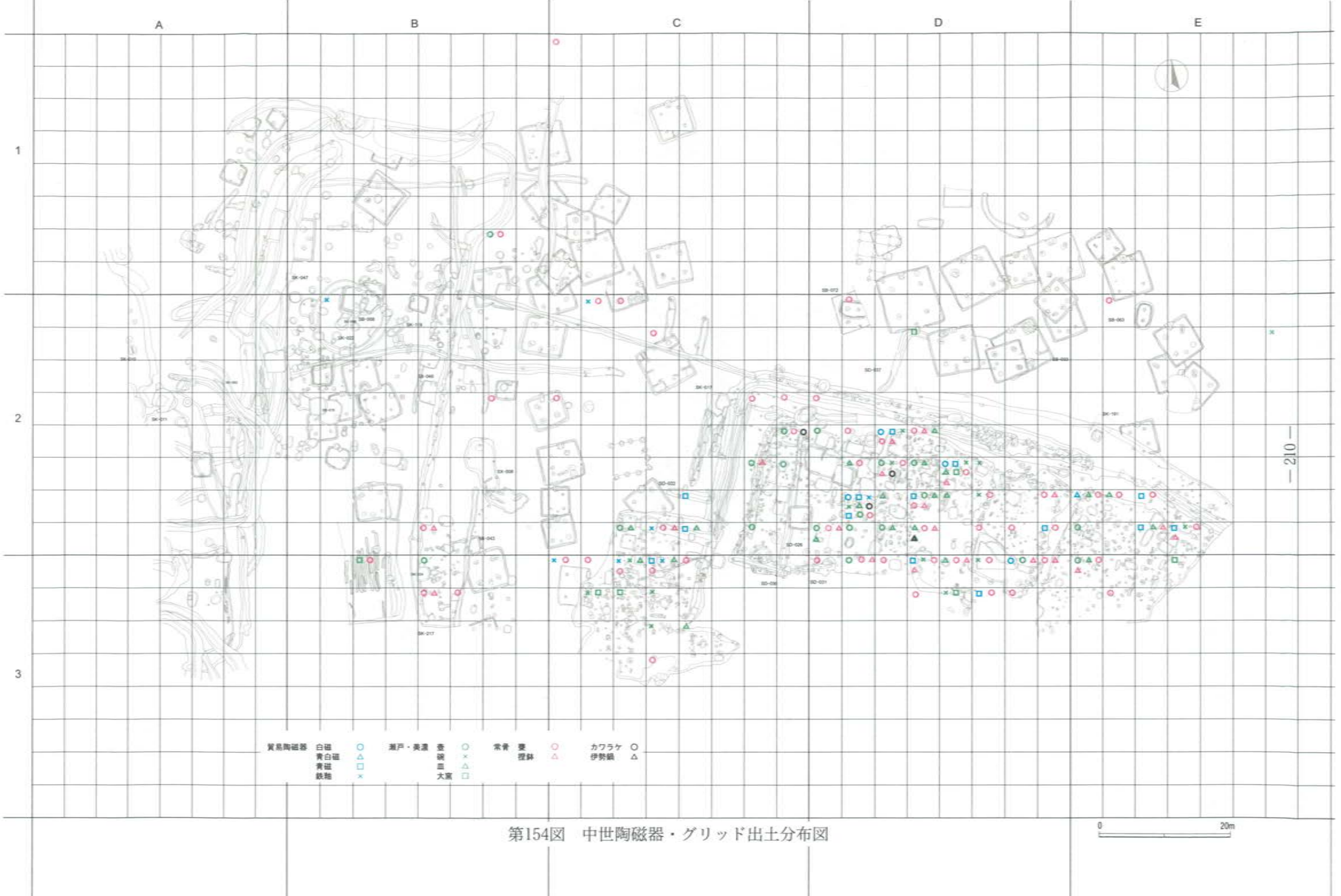
※ 同一遺構内で接合した遺物は，1点で計算してある。

国産陶器																									土器					遺構別出土点数
										常滑															伊勢	在地				
折縁深皿	直縁大皿	知目付大皿	灰釉大皿	端反皿	折縁皿		鉄釉擂鉢			甕							捏鉢・片口鉢								鍋	香炉	擂鉢	カワラケ	内耳鍋	
古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期	古瀬戸後Ⅱ期	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期	大窯1期	大窯3期	大窯3期後	大窯1期	大窯4期前	不明	3～4型式	4～5型式	5型式	6b型式	7型式	9型式	不明	5型式	6a型式	5～6型式	7型式	8型式	9型式	7～9型式	不明	不明	不明				
14c初	14c末～15c初	15c前半	15c前半	15c末～16c初	16c Ⅲ	16c後半	15c末～16c初	16c末		12c末～13c初	13c前半	13c前半～中頃	13c末	14c前半	15c前半		13c前葉～中頃	13c Ⅲ	13c代	14c前半	14c後半	15c前半	14c前半～15c前半							
																1														1
																												1		2
											1																			1
									1					1		9	3													29
																1	2													3
			1		1				1							7						1								14
				1																										1
																2			1											3
																2														2
			1													4														5
																3														4
														1		9						1						1		14
																												1		1
																						1								1
																1														1
														2		22	2													31
																4														4
																6												2		9
														1		3	1													5
																1														1
																												1		1
															1	4														5
										3		1		17		117	2		1	1	1	3				1	5			161
																												1		1
																2														2
				1																										1
																												1		1
																														1
																1														1
																1														1
										1						2														3
																		1												1
												1				2	2													7
																4	1													6
4	1	1	5	5	1	1	1	1	13	5	1	2	2	44	3	401	16	7	9	4	2	29	4	1	1	1	26	2	769
54							15			458							71													
										529															1	30				769
										68.8%															4.0%					

第153図　中世陶磁器・遺構出土分布図

SB-072
SB-063
SB-033
SD-037
SK-017
SK-191
SD-032
SD-026
SD-030
SD-031

0 (1/500) 20m



第154図　中世陶磁器・グリッド出土分布図

第７表　中世陶磁器破片組成表・遺跡全体

時期	貿易陶磁器			瀬戸・美濃								常滑		合計	比率
	白磁碗・皿	青磁碗	鉄釉壺	灰釉壺	天目茶碗	灰釉碗	縁釉皿	卸皿	深皿・大皿	大窯皿	鉄釉捏鉢	甕	捏鉢		
12c 中から 13c	1	4												5	2.2%
12c 末から 13c 初												5		5	2.2%
13c 前半												3	16	19	8.4%
13c 中頃	2	20												22	9.7%
13c 後半												2	7	9	4.0%
14c 前半									4			44	4	52	23.0%
14c 後半					4	1							2	7	3.1%
14c 末から 15c 初				30			4		1					35	15.5%
15c 前半						2	3		6			3	29	43	19.0%
15c 中頃	2		11			1								14	6.2%
15c 後半							5	1						6	2.7%
15c 末から 16c 初										5	1			6	2.7%
16c 後半										2	1			3	1.3%
	5	24	11	30	4	4	12	1	11	7	2	57	58	226	100.0%

※　15 世紀代の貿易陶磁器については，15 世紀中頃の欄に含めてある

第８表　中世陶磁器破片組成表・第１整形区画

時期	貿易陶磁器			瀬戸・美濃								常滑		合計	比率
	白磁碗・皿	青磁碗	鉄釉壺	灰釉壺	天目茶碗	灰釉碗	縁釉皿	卸皿	深皿・大皿	大窯皿	鉄釉捏鉢	甕	捏鉢		
12c 中から 13c		3												3	2.8%
12c 末から 13c 初														0	0.0%
13c 前半													1	1	1.0%
13c 中頃	1	7												8	7.6%
13c 後半												1	4	5	4.8%
14c 前半									3			16	1	20	19.0%
14c 後半					2	1								3	2.9%
14c 末から 15c 初				29			2							31	29.5%
15c 前半							2		2			2	19	25	23.8%
15c 中頃	2		2			1								5	4.8%
15c 後半							2	1						3	2.8%
15c 末から 16c 初										1				1	1.0%
16c 後半														0	0.0%
	3	10	2	29	2	2	6	1	5	1	0	19	25	105	100.0%

※　15 世紀代の貿易陶磁器については，15 世紀中頃の欄に含めてある

第9表　古墳時代竪穴住居跡一覧

（　）は推定値　　［　］は現存値

遺構番号	挿図番号	グリッド	時　期	平面形態	主軸長×短軸長(m)	主軸方位	備　　考
SB-001	第14図	B1－27	不　明	方　形	[2.1] × 4.30	—	
SB-006	第15図	B1－35	7世紀中頃	方　形	6.60 × 6.26 5.70 × 5.80	N－54°－W	外側（旧） 内側（新）
SB-009	第17図	B2－19	6世紀後半	正方形	5.20 × 5.20	N－15°－W	
SB-012	第18図	B1－32	6世紀後半	正方形	6.68 × 6.64	N－12°－W	
SB-013	第19図	B2－26	7世紀前半	方　形	4.48 × 4.20	N－14°－W	
SB-014	第20図	B1－49	6世紀末	方　形	6.48 × [3.3]	W－5°－N	
SB-015	第21図	B2－27	5世紀前半	方　形	[4.9] × 5.64	N－23°－W	炉
SB-018	第22図	B2－34	6世紀末	方　形	4.60 × [4.2]	W－5°－S	
SB-021	第23図	C1－57	7世紀前半	方　形	4.86 × 5.06	N－39°－W	
SB-022	第24図	C1－41	7世紀中頃	方　形	[4.8] × 4.94	N－66°－W	
SB-023	第24図	B1－40	6世紀後半	方　形	[4.9] × 5.50	N－37°－W	
SB-024	第25図	C1－41	7世紀中頃	方　形	4.90 × 4.30	N－2°－W	
SB-025	第27図	C1－20	6世紀後半	方　形	6.08 × 5.94	N－18°－W	
SB-027	第29図	B1－62	6世紀中頃	方　形	5.80 × 5.60	N－10°－W	
SB-029	第30図	B2－04	6世紀後半	方　形	2.98 × 2.58	N－78°－W	
SB-030	第31図	C2－20	7世紀前半	方　形	7.14 × 6.94	N－28°－W	
SB-031	第33図	D1－61	7世紀前半	方　形	7.90 × 7.70	N－28°－W	
SB-032	第35図	B2－32	7世紀中頃	正方形	5.46 × 5.50	N－23°－W	
SB-033	第36図	D2－15	7世紀前半	方　形	7.44 × 7.28	N－28°－W	
SB-034	第38図	D2－23	6世紀後半	方　形	5.54 × 5.40	N－73°－E	
SB-035	第39図	C2－41	6世紀中頃	方　形	6.08 × 6.40	N－14°－W	
SB-036	第41図	D2－08	7世紀前半	方　形	5.20 × 5.34	N－43°－W	
SB-037	第43図	D2－13	6世紀後半	正方形	7.04 × 6.96	N－12°－W	
SB-038	第45図	B1－64	6世紀後半	方　形	6.40 × 6.10	N－19°－W	
SB-039	第46図	E1－49	6世紀後半	正方形	4.66 × 4.60	N－36°－W	
SB-040	第47図	D1－59	7世紀中頃	方　形	9.10 × 8.40	N－16°－W	
SB-041	第49図	B2－51	7世紀中頃	方　形	5.54 × 5.26	N－10°－W	
SB-042	第51図	D2－16	6世紀中頃	方　形	[4.9] × 5.54	N－20°－W	
SB-043	第51図	B2－62	6世紀代	方　形	[2.5] × 4.56	N－15°－W	
SB-044	第52図	B3－07	7世紀前半	正方形	6.14 × 6.08	N－15°－W	
SB-045	第53図	B2－16	6世紀後半	方　形	[5.8] × 6.56	N－11°－E	
SB-048	第54図	C1－50	6世紀後半	方　形	[6.8] × 6.70	N－18°－W	
SB-051	第56図	C1－59	6世紀末	方　形	5.90 × [5.8]	N－71°－E	
SB-052	第57図	B2－52	6世紀代	方　形	5.60 × [2.4]	(N－7°－E)	
SB-054	第58図	C2－57	7世紀前半	正方形	4.72 × 4.74	N－13°－W	
SB-055	第59図	C2－49	7世紀代	正方形	4.40 × 4.38	N－3°－W	
SB-056	第60図	C2－51	6世紀中頃	正方形	5.70 × 5.72	N－35°－W	
SB-057	第62図	B3－23	7世紀代	—	[1.6] × [3.9]	—	
SB-058	第62図	D2－02	7世紀前半	方　形	5.80 × [4.4]	N－20°－W	
SB-059	第63図	D1－51	6世紀中頃	不整方形	3.64 × 4.00	N－15°－W	
SB-060	第64図	D1－45	不　明	方　形	[2.8] × 4.16	(N－1°－E)	
SB-061	第65図	D1－63	7世紀前半	方　形	5.14 × 4.80	N－18°－W	
SB-062	第66図	D1－56	6世紀後半	方　形	6.94 × 6.40	N－18°－W	
SB-064	第67図	E2－12	6世紀後半	長方形	6.30 × 5.70	N－32°－W	
SB-065	第68図	E2－19	6世紀後半	長方形	5.60 × 5.20	N－19°－W	
SB-066	第69図	E2－20	7世紀前半	方　形	5.74 × 5.60	N－47°－W	
SB-067	第70図	E1－58	7世紀前半	正方形	6.26 × 6.30	N－17°－W	
SB-068	第72図	D2－14	不　明	方　形	(4.9) × (5.0)	N－11°－E	
SB-071	第73図	C1－52	6世紀中頃	長方形	6.26 × 5.84	N－12°－W	
SB-075	第74図	E2－34	7世紀前半	方　形	5.32 × 5.20	N－10°－W	
SB-076	第75図	C3－01	不　明	方　形	5.90 × [5.6]	N－6°－E	旧SX-016

第10表　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧

（　）は推定値　　［　］は現存値

遺構番号	挿図番号	グリッド	時　期	平面形態	主軸長×短軸長(m)	主軸方位	備　考
SB-002	第79図	A1－39	9世紀中頃	長方形	3.20 × 3.68	N－27°－E	
SB-003	第79図	A1－24	9世紀中頃	方形	3.26 × [2.0]	—	
SB-004	第80図	A2－16	10世紀前半	方形	(3.1) × 3.26	N－7°－W	
SB-005	第80図	A2－46	9世紀中頃	長方形	3.82 × 3.02	N－1°－W	小鍛冶
SB-007	第81図	B1－59	10世紀中頃	(正方形)	(3.4) × (3.4)	N－10°－E	
SB-008	第81図	B2－03	10世紀前半	長方形	3.04 × (2.7)	N－35°－E	
SB-010	第81図	B2－17	9世紀中頃	長方形	3.78 × 3.34	N－1°－W	
SB-011	第82図	B1－43	10世紀前半	方形	[3.1] × 3.28	N－2°－E	炉
SB-016	第83図	B2－34	9世紀後半	隅円方形	3.40 × 3.54	N－14°－E	
SB-017	第83図	B1－17	9世紀後半	方形	2.60 × 2.80	N－36°－E	
SB-019	第84図	C1－42	8世紀中頃	長方形	4.68 × 5.18	N－62°－W	
SB-020	第84図	C1－49	9世紀後半	方形	(2.9) × (3.5)	(N－25°－E)	
SB-026	第85図	B1－63	10世紀前半	方形	3.90 × 3.70	N－12°－E	
SB-046	第85図	B2－21	9世紀代	方形	3.46 × [2.3]	N－13°－E	
SB-047	第86図	B2－13	9世紀後半	長方形	3.16 × 2.86	N－20°－E	
SB-050	第86図	B2－22	9世紀代	方形	(2.8) × (3.0)	—	
SB-073	第86図	B2－23	9世紀後半	方形	3.04 × 3.14	N－3°－E	
SB-077	第87図	B2－02	9世紀後半	方形	(4.4) × (4.2)	N－17°－E	旧SX-001
SB-078	第87図	B2－26	9世紀後半	隅円方形	3.80 × (3.4)	N－17°－E	旧SX-006

第11表　土器観察表（1）

（　）推定値　〈　〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-006	第16図1	土師器杯	完形	口径 10.4 底径 — 器高 3.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-006	第16図2	土師器杯	90	口径 11.0 底径 — 器高 3.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図3	土師器杯	90	口径 12.6 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-006	第16図4	土師器杯	90	口径 12.0 裾径 — 器高 4.2	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-006	第16図5	土師器杯	80	口径 11.4 底径 — 器高 3.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-006	第16図6	土師器杯	50	口径 13.2 底径 — 器高 〈4.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	内外面黒色処理
SB-006	第16図7	土師器杯	完形	口径 10.1 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図8	土師器杯	完形	口径 9.4 底径 — 器高 3.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-006	第16図9	土師器杯	90	口径 12.0 底径 — 器高 4.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図10	土師器杯	90	口径 11.8 底径 — 器高 4.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図11	土師器杯	90	口径 11.4 底径 — 器高 4.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図12	土師器高杯	10	口径 (14.0) 裾径 — 器高 〈5.4〉	脚部 — 体部 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図13	土師器杯	完形	口径 20.2 底径 — 器高 5.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	全面磨滅
SB-006	第16図14	土師器高杯	50	口径 10.4 裾径 — 器高 〈4.0〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図15	土師器高杯	50	口径 10.6 裾径 — 器高 〈4.6〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	外面赤彩 内面黒色処理
SB-006	第16図16	土師器高杯	完形	口径 13.8 裾径 9.2 器高 10.8	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SB-006	第16図17	土師器甑	30	口径 28.1 孔径 — 器高 〈26.0〉	孔部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図18	土師器甕	10	口径 (25.6) 底径 — 器高 〈7.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-006	第16図19	土師器甕	20	口径 — 底径 (7.0) 器高 〈17.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	底部木葉痕
SB-006	第16図20	土師器甕	40	口径 12.8 底径 — 器高 〈12.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-009	第17図1	土師器杯	20	口径 (12.2) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-009	第17図2	土師器杯	20	口径 (13.4) 底径 — 器高 〈4.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-009	第17図3	土師器杯	10	口径 (14.3) 底径 — 器高 〈3.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-009	第17図4	土師器甕	30	口径 — 底径 6.2 器高 〈5.5〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	

土器観察表（2）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-012	第18図1	須恵器蓋	50	口径 (13.2) 天井径 — 器高 3.8	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	暗灰色	長石	
SB-012	第18図2	土師器杯	70	口径 (12.6) 底径 — 器高 4.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-012	第18図3	土師器杯	20	口径 (12.8) 底径 — 器高 〈4.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-012	第18図4	土師器杯	20	口径 (14.2) 底径 — 器高 〈4.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母	
SB-012	第18図5	土師器杯	20	口径 (14.4) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-012	第18図6	土師器甕	20	口径 19.6 底径 — 器高 〈15.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-012	第18図7	手捏ね	50	口径 10.2 底径 — 器高 5.4	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-012	第18図8	手捏ね	完形	口径 8.4 底径 5.5 器高 5.6	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母	
SB-012	第18図9	手捏ね	70	口径 7.7 底径 5.0 器高 4.2	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-012	第18図10	手捏ね	70	口径 8.4 底径 5.9 器高 4.6	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-013	第19図1	土師器杯	20	口径 (10.4) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-013	第19図2	土師器杯	70	口径 11.6 底径 — 器高 3.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-013	第19図3	土師器高杯	30	口径 11.8 裾径 — 器高 〈4.5〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	内面黒色処理
SB-013	第19図4	土師器甕	30	口径 (19.4) 底径 — 器高 〈21.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-013	第19図5	土師器甕	90	口径 18.8 底径 (4.9) 器高 31.1	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-014	第20図1	須恵器蓋	20	口径 (12.8) 天井径 — 器高 〈4.2〉	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	長石	
SB-014	第20図2	土師器杯	20	口径 (13.8) 底径 — 器高 3.1	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-014	第20図3	土師器杯	10	口径 (11.7) 底径 — 器高 〈2.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-014	第20図4	土師器杯	10	口径 — 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-014	第20図5	土師器杯	50	口径 14.2 底径 — 器高 4.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	外面黒色処理
SB-014	第20図6	土師器甕	30	口径 (13.2) 底径 — 器高 〈9.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母	
SB-014	第20図7	土師器甕		口径 (26.4) 底径 — 器高 〈9.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-014	第20図8	土師器甕	80	口径 17.4 底径 6.2 器高 29.0	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-015	第21図1	土師器甕	20	口径 — 底径 5.8 器高	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	

土器観察表（3）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-018	第22図1	土師器杯	80	口径 (11.8) 底径 — 器高 4.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-018	第22図2	土師器椀	40	口径 (9.5) 底径 5.6 器高 7.8	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-018	第22図3	土師器鉢	50	口径 17.0 底径 — 器高 8.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-018	第22図4	土師器甕	90	口径 15.6 底径 6.0 器高 21.2	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-018	第22図5	土師器甕	完形	口径 14.5 底径 6.9 器高 25.8	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-018	第22図6	土師器甑	80	口径 28.2 孔径 7.5 器高 25.0	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-021	第23図1	土師器杯	60	口径 12.0 底径 — 器高 3.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英	
SB-021	第23図2	土師器杯	30	口径 (12.8) 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-021	第23図3	土師器杯	40	口径 13.2 底径 — 器高 4.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-021	第23図4	土師器杯	90	口径 12.4 底径 — 器高 3.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-021	第23図5	須恵器杯	40	口径 (11.8) 底径 4.5 器高 3.2	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-021	第23図6	土師器杯	50	口径 13.3 底径 5.7 器高 4.0	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-021	第23図7	土師器甕	30	口径 (12.8) 底径 — 器高 〈11.2〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-021	第23図8	土師器甕	10	口径 (21.6) 底径 — 器高 〈6.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-021	第23図9	土師器甕	30	口径 — 底径 8.0 器高 (36.8)	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-021	第23図10	土師器甕	30	口径 — 底径 5.2 器高 〈7.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-022	第24図1	須恵器杯	完形	口径 8.5 底径 4.7 器高 3.0	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-022	第24図2	土師器杯	20	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-022	第24図3	土師器高杯	10	口径 (19.4) 裾径 — 器高 〈4.6〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	外面赤彩 内面黒色処理
SB-023	第24図6	土師器杯	20	口径 (12.8) 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	長石	内面黒色処理
SB-023	第24図7	土師器杯	70	口径 — 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-023	第24図8	土師器高杯	30	口径 (19.6) 裾径 — 器高 〈6.9〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	外面赤彩 内面黒色処理
SB-023	第24図9	土師器甕	10	口径 (17.5) 底径 — 器高 〈7.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母	
SB-023	第24図10	土師器甕	20	口径 (17.8) 底径 — 器高 〈13.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	

土器観察表（4）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-024	第25図1	須恵器蓋	完形	口径 11.7 天井径 — 器高 2.8	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	暗灰色	石英・長石	紐とかえり
SB-024	第25図2	須恵器蓋	20	口径 (9.7) 天井径 — 器高 〈4.1〉	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-024	第25図3	土師器杯	90	口径 10.9 底径 — 器高 3.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-024	第25図4	土師器杯	40	口径 12.4 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第25図5	土師器高杯	50	口径 — 裾径 11.6 器高 〈7.8〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-024	第25図6	土師器高杯	50	口径 — 裾径 13.0 器高 〈7.8〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第25図7	土師器鉢	完形	口径 12.8 底径 — 器高 10.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-024	第25図8	土師器甕	20	口径 (13.2) 底径 — 器高 〈12.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第25図9	土師器甕	20	口径 (11.8) 底径 — 器高 〈8.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第26図10	土師器甕	40	口径 18.2 底径 — 器高 〈13.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第26図11	土師器甕	30	口径 (16.2) 底径 (6.0) 器高 22.8	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-024	第26図12	土師器甕	70	口径 15.2 底径 6.2 器高 23.9	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第26図13	土師器甕	60	口径 16.0 底径 — 器高 〈22.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第26図14	土師器甕	30	口径 (23.2) 底径 — 器高 〈24.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-024	第26図15	土師器甕	60	口径 24.0 底径 9.4 器高 31.3	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-025	第28図1	須恵器蓋	20	口径 (15.0) 天井径 — 器高 〈3.3〉	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-025	第28図2	須恵器杯	10	口径 (10.8) 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英	
SB-025	第28図3	土師器杯	40	口径 (14.6) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-025	第28図4	土師器杯	50	口径 14.5 底径 — 器高 3.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-025	第28図5	土師器杯	60	口径 11.2 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	内外面赤彩
SB-025	第28図6	土師器杯	90	口径 13.0 底径 — 器高 4.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	褐色	石英・長石・雲母	
SB-025	第28図7	土師器杯	40	口径 (14.8) 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	黒褐色	石英・長石	内外面黒色処理
SB-025	第28図8	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SB-025	第28図9	土師器杯	30	口径 (11.2) 底径 — 器高 〈4.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩

土器観察表（5）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-025	第28図10	土師器杯	70	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈4.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-025	第28図11	土師器杯	80	口径 13.7 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-025	第28図12	土師器杯	60	口径 (15.4) 底径 — 器高 〈4.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-025	第28図13	土師器杯	40	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈5.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-025	第28図14	土師器高杯	10	口径 (17.2) 裾径 — 器高 〈5.1〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	外面赤彩
SB-025	第28図15	土師器高杯	40	口径 (20.6) 裾径 — 器高 〈4.9〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	外面赤彩 内面黒色処理
SB-025	第28図16	土師器高杯	70	口径 13.7 裾径 — 器高 〈6.0〉	脚部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	外面赤彩 内面黒色処理
SB-025	第28図17	土師器高杯	60	口径 — 裾径 — 器高 〈21.6〉	脚部 ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 体部 — 内面 —	黄褐色	石英・雲母	外面赤彩
SB-025	第28図18	土師器甕	10	口径 (15.0) 底径 — 器高 〈5.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-025	第28図19	土師器甕	20	口径 (11.8) 底径 — 器高 〈10.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	口縁内面・外面赤彩
SB-025	第28図20	土師器甕	20	口径 (17.4) 底径 — 器高 〈6.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-025	第28図21	土師器甕	10	口径 (19.0) 底径 — 器高 〈11.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-025	第28図22	土師器甕	80	口径 17.7 底径 7.5 器高 27.0	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-025	第28図23	土師器甕	60	口径 — 底径 8.8 器高 〈17.6〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 刷毛・ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	底部木葉痕
SB-025	第28図24	手捏ね	完形	口径 5.1 底径 5.4 器高 2.0	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-025	第28図25	手捏ね	完形	口径 5.4 底径 4.9 器高 1.5	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-025	第28図26	手捏ね	完形	口径 8.1 底径 7.7 器高 3.0	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-025	第28図27	手捏ね	50	口径 7.0 底径 6.4 器高 3.9	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-025	第28図28	手捏ね	60	口径 11.0 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-027	第29図1	須恵器蓋	10	口径 (10.3) 天井径 — 器高 〈3.1〉	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-027	第29図2	土師器杯	10	口径 (12.9) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-027	第29図3	土師器杯	80	口径 14.2 底径 4.8 器高 6.5	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-027	第29図4	土師器杯	20	口径 (12.8) 底径 — 器高 〈4.1〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-027	第29図5	土師器杯	10	口径 (10.6) 底径 — 器高 〈3.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	

土器観察表（6）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-027	第29図6	土師器杯	10	口径 (17.8) 底径 — 器高 〈6.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母	
SB-027	第30図7	土師器甑	10	口径 (21.8) 孔径 — 器高 〈11.2〉	孔部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-027	第30図8	土師器甑	30	口径 (19.4) 孔径 — 器高 〈12.4〉	孔部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-027	第30図9	土師器甑	30	口径 (16.4) 孔径 — 器高 〈16.4〉	孔部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-029	第30図14	土師器杯	完形	口径 11.6 底径 — 器高 3.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-029	第30図15	土師器甕	完形	口径 13.2 底径 5.6 器高 16.3	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-029	第30図16	土師器甑	50	口径 14.2 孔径 — 器高 〈16.1〉	孔部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	
SB-030	第32図1	須恵器杯	90	口径 12.8 底径 — 器高 3.7	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-030	第32図2	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈3.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-030	第32図3	土師器杯	10	口径 (13.2) 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
SB-030	第32図4	土師器杯	40	口径 — 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-030	第32図5	土師器杯	10	口径 (13.4) 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-030	第32図6	土師器杯	40	口径 (15.8) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-030	第32図7	土師器杯	70	口径 18.7 底径 — 器高 6.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	大型品
SB-030	第32図8	土師器高杯	10	口径 (13.4) 裾径 — 器高 〈4.2〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
SB-030	第32図9	土師器高杯	60	口径 — 裾径 10.1 器高 〈5.2〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	外面赤彩
SB-030	第32図10	土師器高杯	60	口径 — 裾径 — 器高 〈11.5〉	脚部 ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 —	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
SB-030	第32図11	土師器高杯	10	口径 (17.7) 裾径 — 器高 〈4.0〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	外面赤彩 内面黒色処理
SB-030	第32図12	土師器甕	20	口径 (18.6) 底径 — 器高 〈23.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-030	第32図13	土師器甕	20	口径 (19.0) 底径 — 器高 〈29.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-030	第32図14	土師器甑	10	口径 (22.0) 孔径 — 器高 〈15.4〉	孔部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-030	第32図15	手捏ね	30	口径 (3.5) 底径 (3.0) 器高 〈2.0〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-030	第32図16	手捏ね	50	口径 (5.2) 底径 4.7 器高 2.4	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-030	第32図17	手捏ね	10	口径 (7.2) 底径 (7.0) 器高 3.5	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石	

土器観察表（7）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-031	第33図1	須恵器蓋	10	口径 (15.0) 天井径 — 器高 〈2.4〉	天井部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	
SB-031	第33図2	土師器杯	80	口径 13.0 底径 — 器高 4.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-031	第33図3	土師器杯	20	口径 (13.3) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-031	第33図4	土師器杯	60	口径 12.2 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-031	第33図5	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈3.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-031	第33図6	土師器杯	60	口径 11.5 底径 — 器高 2.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-031	第33図7	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-031	第33図8	土師器杯	20	口径 (12.6) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	
SB-031	第33図9	土師器杯	20	口径 (13.4) 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-031	第33図10	土師器杯	30	口径 (13.2) 底径 — 器高 〈3.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-031	第33図11	土師器杯	90	口径 13.8 底径 — 器高 3.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石	
SB-031	第33図12	土師器杯	20	口径 (13.6) 底径 — 器高 3.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-031	第33図13	土師器杯	20	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈2.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英	
SB-031	第33図14	土師器杯	80	口径 13.6 底径 — 器高 3.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-031	第33図15	土師器鉢	80	口径 (15.0) 底径 — 器高 〈6.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-031	第33図16	土師器甕	10	口径 (12.8) 底径 — 器高 〈5.4〉	底部 — 体部 刷毛・ﾅﾃﾞ 内面 刷毛・ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	駿東型甕
SB-031	第33図17	土師器杯	50	口径 (17.7) 底径 (10.4) 器高 〈7.1〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母	
SB-031	第33図18	土師器甕	10	口径 (18.6) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-031	第33図19	土師器甕	10	口径 (13.7) 底径 — 器高 〈5.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-031	第34図20	土師器甕	20	口径 (23.8) 底径 — 器高 〈16.1〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-031	第34図21	土師器甕	40	口径 (13.7) 底径 8.0 器高 15.9	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-032	第35図1	須恵器蓋	90	口径 8.5 天井径 5.9 器高 2.9	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-032	第35図2	土師器杯	80	口径 10.2 底径 — 器高 3.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-032	第35図3	土師器杯	10	口径 (10.8) 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	

土器観察表（8）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-032	第35図4	土師器杯	60	口径 11.6 底径 5.3 器高 4.0	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-032	第35図5	土師器杯	20	口径 — 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	外面赤彩
SB-032	第35図6	土師器甕	30	口径 — 底径 7.0 器高 〈26.5〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-032	第35図7	手捏ね	40	口径 (9.2) 底径 (7.8) 器高 〈2.8〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	底部木葉痕
SB-033	第37図1	土師器杯	60	口径 13.0 底径 — 器高 4.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母	
SB-033	第37図2	土師器杯	40	口径 (13.4) 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-033	第37図3	土師器杯	30	口径 (13.8) 底径 — 器高 3.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-033	第37図4	土師器杯	90	口径 13.3 底径 — 器高 3.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母	
SB-033	第37図5	土師器杯	60	口径 16.7 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	内外面黒色処理
SB-033	第37図6	土師器杯	10	口径 (12.3) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英	
SB-033	第37図7	土師器杯	10	口径 (14.9) 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英	
SB-033	第37図8	土師器杯	80	口径 11.5 底径 — 器高 3.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-033	第37図9	土師器杯	完形	口径 11.6 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英	
SB-033	第37図10	土師器杯	30	口径 (13.2) 底径 — 器高 3.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-033	第37図11	土師器杯	70	口径 12.2 底径 — 器高 3.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-033	第37図12	土師器高杯	40	口径 — 裾径 (11.8) 器高 〈4.7〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 —	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-033	第37図13	土師器椀	30	口径 (21.0) 底径 — 器高 〈7.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-033	第37図14	土師器杯	20	口径 (17.4) 底径 — 器高 〈5.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-033	第37図15	土師器鉢	10	口径 (18.2) 底径 — 器高 〈6.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-033	第37図16	土師器甕	30	口径 (13.6) 底径 — 器高 〈10.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-033	第37図17	土師器甕	20	口径 (18.6) 底径 — 器高 〈12.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-033	第37図18	土師器甕	30	口径 (18.7) 底径 — 器高 〈17.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-033	第37図19	土師器甕	90	口径 20.1 底径 7.4 器高 26.8	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-033	第37図20	土師器甕	80	口径 15.8 底径 (7.0) 器高 〈23.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	

土器観察表（9）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-033	第37図21	手捏ね	90	口径 4.0 底径 4.2 器高 3.1	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-033	第37図22	手捏ね	30	口径 — 底径 — 器高 〈2.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英	
SB-033	第37図23	手捏ね	40	口径 (7.2) 底径 (4.0) 器高 〈2.0〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-034	第38図1	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈2.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	
SB-034	第38図2	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英	
SB-035	第39図1	須恵器蓋	60	口径 (14.4) 天井径 — 器高 4.5	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	天井部に自然釉
SB-035	第39図2	土師器杯	80	口径 12.9 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面赤彩
SB-035	第39図3	土師器杯	30	口径 (12.2) 底径 — 器高 〈4.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
SB-035	第39図4	土師器杯	90	口径 11.8 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面赤彩
SB-035	第39図5	土師器杯	20	口径 (13.5) 底径 — 器高 〈4.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-035	第39図6	土師器杯	完形	口径 13.0 底径 — 器高 7.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-035	第39図7	土師器高杯	70	口径 — 裾径 — 器高 〈9.4〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石	
SB-035	第39図8	土師器鉢	50	口径 15.3 底径 6.6 器高 5.7	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-035	第40図9	土師器甕	90	口径 12.4 底径 9.0 器高 13.5	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-035	第40図10	土師器甕	40	口径 (14.6) 底径 6.6 器高 22.0	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-035	第40図11	土師器甕	10	口径 (15.2) 底径 — 器高 〈9.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-035	第40図12	土師器甕	70	口径 (19.6) 底径 6.8 器高 22.2	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-035	第40図13	土師器甕	60	口径 18.4 底径 8.2 器高 29.2	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-035	第40図14	土師器甕	20	口径 — 底径 7.8 器高 〈20.1〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	底部木葉痕
SB-035	第40図15	土師器甕	80	口径 32.6 底径 8.4 器高 27.8	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-035	第40図16	土師器甑	80	口径 20.8 孔径 7.8 器高 18.4	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-035	第40図17	土師器甑	70	口径 22.8 孔径 (6.6) 器高 21.9	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-036	第41図1	須恵器蓋	20	口径 (10.2) 天井径 — 器高 〈2.8〉	天井部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	
SB-036	第41図2	土師器杯	10	口径 (10.0) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	

土器観察表（10）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-036	第41図3	土師器杯	10	口径 (12.5) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-036	第41図4	土師器杯	20	口径 — 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-036	第41図5	土師器杯	10	口径 (15.6) 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-036	第41図6	土師器甕	40	口径 (20.6) 底径 — 器高 〈19.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-036	第41図7	土師器甕	20	口径 (24.0) 底径 — 器高 〈13.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-036	第42図9	土師器甑	20	口径 (28.4) 孔径 (13.0) 器高 〈27.7〉	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-036	第42図10	土師器甑	10	口径 (27.7) 孔径 (9.0) 器高 〈35.0〉	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第43図1	土師器杯	完形	口径 14.2 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第43図2	土師器杯	80	口径 12.6 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-037	第43図3	土師器杯	80	口径 11.5 底径 — 器高 3.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	内面黒色処理
SB-037	第43図4	土師器杯	80	口径 12.6 底径 — 器高 3.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-037	第43図5	土師器杯	80	口径 14.4 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-037	第43図6	土師器杯	90	口径 13.2 底径 — 器高 4.1	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第43図7	土師器杯	80	口径 12.4 底径 — 器高 3.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第43図8	土師器杯	90	口径 12.0 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第44図9	土師器杯	完形	口径 14.4 底径 — 器高 3.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-037	第44図10	土師器杯	90	口径 13.6 底径 — 器高 3.1	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-037	第44図11	土師器杯	50	口径 13.4 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-037	第44図12	土師器杯	完形	口径 14.4 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-037	第44図13	土師器杯	90	口径 13.8 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-037	第44図14	土師器杯	40	口径 (12.5) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英	
SB-037	第44図15	土師器杯	完形	口径 12.2 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-037	第44図16	土師器杯	40	口径 13.5 底径 — 器高 〈5.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第44図17	土師器杯	完形	口径 13.4 底径 — 器高 3.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理 ヘラ記号

土器観察表（11）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-037	第44図18	土師器杯	10	口径 (12.5) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
SB-037	第44図19	土師器鉢	完形	口径 15.8 底径 6.1 器高 7.0	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第44図20	土師器鉢	90	口径 16.8 底径 6.5 器高 8.2	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第44図21	土師器鉢	20	口径 (27.3) 底径 (16.2) 器高 9.1	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-037	第44図22	土師器甕	50	口径 (15.0) 底径 6.0 器高 11.0	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-037	第44図23	土師器甕	30	口径 (15.8) 底径 6.3 器高 27.2	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-037	第44図24	土師器甕	10	口径 (23.0) 底径 — 器高 〈15.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	黄褐色	石英・長石	
SB-037	第44図25	土師器甕	20	口径 — 底径 8.1 器高 〈13.2〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-037	第44図26	手捏ね	完形	口径 8.2 底径 8.0 器高 3.0	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-038	第45図1	土師器杯	10	口径 (15.4) 底径 — 器高 〈2.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	
SB-038	第45図2	土師器杯	10	口径 (13.6) 底径 — 器高 〈3.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-038	第45図3	土師器杯	10	口径 (15.8) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-038	第45図4	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-038	第45図5	土師器杯	20	口径 (10.6) 底径 (6.0) 器高 〈3.2〉	底部 回転糸切り 体部 ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-038	第45図6	土師器椀	10	口径 9.8 底径 — 器高 〈5.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-038	第45図7	土師器甕	10	口径 (13.4) 底径 — 器高 〈5.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英	
SB-038	第45図8	手捏ね	完形	口径 7.0 底径 6.4 器高 2.1	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	
SB-039	第46図1	土師器杯	完形	口径 11.7 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-039	第46図2	土師器杯	10	口径 (13.6) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-039	第46図3	土師器高杯	40	口径 — 裾径 — 器高 〈7.8〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-040	第47図1	須恵器蓋	70	口径 11.2 天井径 4.6 器高 4.5	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	青灰色	石英・長石	
SB-040	第47図2	須恵器蓋	40	口径 (14.2) 天井径 — 器高 〈3.8〉	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-040	第47図3	須恵器杯	10	口径 (12.6) 底径 — 器高 〈3.4〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-040	第47図4	須恵器杯	30	口径 (9.6) 底径 — 器高 4.2	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	ヘラ記号

土器観察表 (12)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-040	第47図5	土師器杯	20	口径 (15.3) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-040	第47図6	土師器杯	20	口径 (14.4) 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-040	第47図7	土師器杯	10	口径 (15.6) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-040	第47図8	土師器杯	70	口径 (13.3) 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石	
SB-040	第47図9	土師器杯	20	口径 — 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-040	第48図10	土師器杯	20	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈5.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-040	第48図11	土師器椀	50	口径 (9.0) 底径 (7.0) 器高 (8.0)	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-040	第48図12	土師器高杯	90	口径 15.0 裾径 10.4 器高 11.3	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-040	第48図13	土師器高杯	40	口径 — 裾径 — 器高 〈7.8〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-040	第48図14	土師器甕	30	口径 (9.6) 底径 — 器高 〈7.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-040	第48図15	土師器甕	30	口径 (11.6) 底径 (5.0) 器高 7.0	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-040	第48図16	土師器甕	30	口径 (9.4) 底径 — 器高 〈12.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-040	第48図17	土師器甕	30	口径 (15.5) 底径 — 器高 〈9.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-040	第48図18	土師器甕	10	口径 (16.4) 底径 — 器高 〈9.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-040	第48図19	土師器甕	30	口径 (16.7) 底径 — 器高 〈9.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-041	第49図1	土師器杯	完形	口径 10.7 底径 — 器高 3.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-041	第49図2	土師器杯	30	口径 (15.8) 底径 — 器高 〈3.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-041	第49図3	土師器杯	70	口径 (19.6) 底径 — 器高 〈5.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-041	第49図4	土師器杯	30	口径 (9.3) 底径 — 器高 5.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-041	第49図5	土師器高杯	10	口径 (10.9) 裾径 — 器高 〈3.9〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SB-041	第49図6	土師器高杯	10	口径 (18.0) 裾径 — 器高 〈6.1〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-041	第50図7	土師器甕	30	口径 (15.2) 底径 — 器高 〈10.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-041	第50図8	土師器甕	30	口径 (14.9) 底径 — 器高 〈11.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-041	第50図9	土師器甕	70	口径 (20.3) 底径 6.4 器高 32.7	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	

土器観察表（13）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-041	第50図10	土師器甕	80	口径 19.9 底径 6.8 器高 33.7	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-041	第50図11	土師器甕	60	口径 16.6 底径 8.3 器高 27.7	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-042	第51図1	須恵器杯	60	口径 (12.2) 底径 6.0 器高 3.9	底部 回転糸切り 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-042	第51図2	土師器杯	50	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	内外面赤彩
SB-042	第51図3	土師器杯	50	口径 13.7 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-042	第51図4	須恵器甕	10	口径 (8.8) 底径 — 器高 〈9.3〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	体部外面に刻み
SB-042	第51図5	土師器高台付椀	60	口径 — 底径 7.8 器高 〈5.3〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	暗褐色	石英・長石・雲母	
SB-042	第51図6	土師器甕	20	口径 — 底径 6.6 器高 〈14.5〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-043	第51図7	土師器甕	10	口径 (11.0) 底径 — 器高 〈3.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-044	第52図1	土師器鉢	20	口径 (13.9) 底径 — 器高 〈8.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-044	第52図2	土師器甕	70	口径 (20.1) 底径 — 器高 〈32.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-044	第52図3	土師器甑	30	口径 (32.6) 孔径 (10.6) 器高 31.2	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-045	第53図1	土師器杯	30	口径 (10.8) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-045	第53図2	土師器杯	30	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-045	第53図3	土師器杯	40	口径 (11.8) 底径 — 器高 〈3.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-045	第53図4	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 — 器高 〈5.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-045	第53図5	土師器高杯	70	口径 — 裾径 10.6 器高 〈8.4〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-045	第53図6	土師器甕	20	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈9.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-045	第53図7	土師器甕	30	口径 (14.2) 底径 — 器高 〈24.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-045	第53図8	土師器甕	40	口径 — 底径 8.5 器高 〈25.2〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-045	第53図9	土師器甕	10	口径 (20.8) 底径 — 器高 〈15.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-048	第55図1	須恵器蓋	10	口径 (16.0) 天井径 — 器高 〈5.0〉	天井部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-048	第55図2	須恵器蓋	70	口径 10.2 天井径 3.7 器高 4.3	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-048	第55図3	土師器杯	10	口径 (12.1) 底径 — 器高 〈3.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	

土器観察表（14）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-048	第55図4	土師器杯	60	口径 10.6 底径 — 器高 3.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図5	土師器杯	10	口径 (10.8) 底径 — 器高 〈2.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図6	土師器杯	70	口径 13.2 底径 7.8 器高 3.6	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-048	第55図7	土師器杯	完形	口径 11.2 底径 — 器高 4.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-048	第55図8	土師器杯	90	口径 12.0 底径 — 器高 5.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図9	土師器杯	完形	口径 12.2 底径 — 器高 5.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図10	土師器杯	10	口径 (13.2) 底径 — 器高 〈5.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-048	第55図11	土師器高杯	40	口径 — 裾径 8.4 器高 〈4.9〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図12	土師器高杯	80	口径 15.2 裾径 10.7 器高 14.3	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図13	土師器高杯	60	口径 (20.2) 裾径 (12.1) 器高 14.7	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図14	土師器甕	完形	口径 12.9 底径 5.5 器高 13.2	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図15	土師器甕	80	口径 15.4 底径 7.2 器高 12.5	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-048	第55図16	土師器甕	10	口径 (24.2) 底径 — 器高 〈11.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-048	第55図17	土師器甕	90	口径 16.4 底径 7.2 器高 24.9	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-048	第55図18	土師器甑	30	口径 (23.4) 孔径 (7.8) 器高 〈24.8〉	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-051	第56図1	土師器杯	40	口径 (15.9) 底径 — 器高 〈5.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-051	第56図2	土師器杯	20	口径 (14.7) 底径 — 器高 〈4.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-051	第56図3	土師器杯	60	口径 14.4 底径 — 器高 4.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-051	第56図4	土師器杯	20	口径 (14.5) 底径 — 器高 〈3.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-051	第56図5	土師器杯	10	口径 (14.5) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-051	第56図6	土師器高杯	30	口径 (16.0) 裾径 — 器高 〈4.6〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	外面赤彩 内面黒色処理
SB-051	第56図7	土師器甕	10	口径 (20.0) 底径 — 器高 〈7.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-051	第56図8	土師器甕	10	口径 (16.0) 底径 — 器高 〈9.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-051	第56図9	土師器甕	10	口径 — 底径 — 器高 〈13.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	

土器観察表（15）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-052	第57図1	土師器甕	10	口径 (16.6) 底径 — 器高 〈6.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-054	第58図1	須恵器杯	10	口径 (9.9) 底径 — 器高 〈1.9〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	
SB-054	第58図2	土師器杯	10	口径 (12.2) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-054	第58図3	土師器杯	10	口径 (13.4) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-054	第58図4	土師器鉢	50	口径 10.0 底径 5.2 器高 11.7	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-054	第58図5	土師器甕	40	口径 — 底径 — 器高 〈28.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-054	第58図6	土師器甕	10	口径 (23.0) 底径 — 器高 〈12.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-055	第59図1	土師器甕	10	口径 (25.8) 底径 — 器高 〈8.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-056	第60図1	須恵器杯	90	口径 9.4 底径 — 器高 4.7	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-056	第60図2	土師器杯	80	口径 11.5 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-056	第60図3	土師器杯	90	口径 10.6 底径 — 器高 3.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	内外面黒色処理
SB-056	第60図4	土師器杯	40	口径 (11.0) 底径 — 器高 3.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	長石・ｽｺﾘｱ	
SB-056	第60図5	土師器杯	80	口径 14.2 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
SB-056	第60図6	土師器杯	90	口径 12.6 底径 — 器高 3.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
SB-056	第60図7	土師器杯	70	口径 12.6 底径 — 器高 4.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
SB-056	第60図8	土師器杯	20	口径 (14.4) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
SB-056	第60図9	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
SB-056	第60図10	土師器杯	10	口径 (13.2) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
SB-056	第60図11	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
SB-056	第61図12	土師器椀	10	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈5.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	
SB-056	第61図13	土師器高杯	60	口径 17.5 裾径 — 器高 6.8	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-056	第61図14	土師器高杯	30	口径 (17.4) 裾径 — 器高 〈5.9〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-056	第61図15	土師器高杯	90	口径 18.5 裾径 — 器高 〈15.3〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-056	第61図16	土師器高杯	70	口径 17.2 裾径 12.8 器高 13.8	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	

土器観察表（16）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-056	第61図17	土師器高杯	40	口径 (19.4) 裾径 (14.6) 器高 〈14.8〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
SB-056	第61図18	土師器甕	50	口径 17.6 底径 6.2 器高 15.5	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-056	第61図19	土師器甕	10	口径 (20.6) 底径 — 器高 〈10.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-056	第61図20	土師器甕	20	口径 (17.6) 底径 — 器高 〈10.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-056	第61図21	土師器甑	30	口径 — 孔径 8.4 器高 〈11.9〉	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-056	第61図22	土師器甕	10	口径 — 底径 6.2 器高 〈14.2〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-056	第61図23	土師器甕	20	口径 (19.0) 底径 — 器高 〈17.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-056	第61図24	土師器甕	70	口径 19.3 底径 10.2 器高 32.4	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-057	第62図1	土師器甕	10	口径 (15.2) 底径 — 器高 〈5.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-057	第62図2	土師器甕	10	口径 (20.4) 底径 — 器高 〈10.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-058	第62図3	須恵器蓋	40	口径 (14.5) 天井径 — 器高 〈3.9〉	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-058	第62図4	土師器杯	10	口径 (12.8) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-058	第62図5	土師器杯	20	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈4.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-058	第62図6	土師器杯	20	口径 (14.2) 底径 — 器高 3.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-058	第62図7	土師器杯	80	口径 (10.5) 底径 — 器高 5.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	内面黒色処理
SB-058	第62図8	須恵器壺	10	口径 (13.9) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	櫛描波状文
SB-058	第62図9	土師器甕	20	口径 — 底径 5.3 器高 〈5.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-058	第62図10	土師器甕	30	口径 — 底径 (7.8) 器高 〈21.6〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-059	第63図1	土師器杯	40	口径 (12.0) 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-059	第63図2	土師器杯	90	口径 12.0 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-059	第63図3	土師器杯	80	口径 11.4 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-059	第63図4	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-059	第63図5	土師器高杯	10	口径 — 裾径 — 器高 〈3.6〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	体部内面・脚部外面赤彩
SB-059	第63図6	土師器甕	10	口径 (21.2) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	

土器観察表（17）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-059	第63図7	土師器甑	50	口径 21.6 孔径 (7.2) 器高 〈25.7〉	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-061	第65図1	須恵器蓋	80	口径 12.4 天井径 — 器高 4.9	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-061	第65図2	須恵器蓋	10	口径 — 天井径 — 器高 〈3.3〉	天井部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-061	第65図3	須恵器蓋	20	口径 10.8 天井径 — 器高 〈3.8〉	天井部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	
SB-061	第65図4	土師器杯	50	口径 11.4 底径 — 器高 3.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-061	第65図5	土師器杯	60	口径 12.8 底径 — 器高 4.5	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-061	第65図6	土師器杯	70	口径 13.0 底径 — 器高 4.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-061	第65図7	土師器杯	完形	口径 14.5 底径 — 器高 5.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英	
SB-061	第65図8	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈4.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-061	第65図9	土師器高杯	30	口径 (16.6) 裾径 — 器高 〈5.8〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英	内外面黒色処理
SB-061	第65図10	土師器高杯	40	口径 — 裾径 (10.3) 器高 〈7.0〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	脚部に透孔
SB-061	第65図11	土師器高杯	20	口径 — 裾径 (10.0) 器高 〈6.8〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-061	第65図12	土師器甕	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈9.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-061	第65図13	土師器甕	10	口径 — 底径 — 器高 〈16.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-061	第65図14	土師器甕	70	口径 — 底径 7.6 器高 〈21.8〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-062	第66図1	土師器杯	完形	口径 12.2 底径 — 器高 4.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-062	第66図2	土師器杯	10	口径 (13.3) 底径 — 器高 〈4.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-062	第66図3	土師器杯	30	口径 (14.2) 底径 — 器高 〈3.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-062	第66図4	土師器高杯	70	口径 19.8 裾径 — 器高 〈17.2〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	外面赤彩 内面黒色処理
SB-064	第67図1	須恵器蓋	10	口径 (12.0) 天井径 — 器高 〈3.0〉	天井部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	
SB-064	第67図2	須恵器杯	10	口径 — 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-064	第67図3	土師器杯	10	口径 (11.0) 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-064	第67図4	土師器杯	10	口径 (12.6) 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-064	第67図5	土師器杯	10	口径 (14.5) 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	

土器観察表（18）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-064	第67図6	土師器高杯	10	口径 (16.8) 裾径 — 器高 〈4.9〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-064	第67図7	土師器甕	10	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈6.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-064	第67図8	土師器甕	10	口径 (11.3) 底径 — 器高 〈8.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-065	第68図1	土師器杯	90	口径 13.8 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-065	第68図2	土師器甕	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈2.2〉	底部 — 体部 — 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-065	第68図3	土師器甕	10	口径 (23.1) 底径 — 器高 〈5.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-065	第68図4	土師器甕	30	口径 20.4 底径 — 器高 〈24.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-066	第69図1	土師器杯	10	口径 (8.2) 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-066	第69図2	土師器椀	30	口径 (16.2) 底径 — 器高 〈7.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-066	第69図3	土師器甕	10	口径 (26.0) 底径 — 器高 〈23.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-067	第70図1	須恵器蓋	10	口径 (11.2) 天井径 — 器高 〈3.9〉	天井部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-067	第70図2	須恵器杯	70	口径 (12.3) 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-067	第70図3	土師器杯	20	口径 (15.0) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-067	第70図4	土師器杯	30	口径 (12.2) 底径 — 器高 3.9	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-067	第70図5	土師器杯	50	口径 (14.0) 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-067	第70図6	土師器杯	90	口径 12.6 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-067	第70図7	土師器杯	80	口径 12.0 底径 — 器高 3.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-067	第70図8	土師器杯	40	口径 (13.8) 底径 — 器高 3.7	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-067	第70図9	土師器杯	60	口径 (13.8) 底径 — 器高 4.0	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	内外面黒色処理
SB-067	第70図10	土師器杯	50	口径 (14.4) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-067	第70図11	土師器杯	90	口径 12.8 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-067	第70図12	土師器杯	90	口径 14.4 底径 — 器高 4.2	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-067	第71図13	土師器杯	30	口径 (11.4) 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-067	第71図14	土師器杯	30	口径 (13.6) 底径 — 器高 4.4	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理 内外面磨滅

土器観察表（19）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-067	第71図15	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-067	第71図16	土師器杯	70	口径 (14.8) 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-067	第71図17	土師器杯	60	口径 (15.8) 底径 — 器高 3.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-067	第71図18	土師器杯	50	口径 (14.4) 底径 — 器高 4.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-067	第71図19	土師器高杯	20	口径 13.9 裾径 — 器高 〈3.8〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内外面黒色処理
SB-067	第71図20	土師器高杯	60	口径 — 裾径 10.2 器高 〈7.9〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-067	第71図21	土師器椀	50	口径 8.8 底径 — 器高 〈8.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-067	第71図22	土師器椀	20	口径 7.4 底径 — 器高 〈6.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SB-067	第71図23	土師器椀	20	口径 (10.4) 底径 — 器高 〈6.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石	内面黒色処理
SB-067	第71図24	手捏ね	10	口径 — 底径 — 器高 〈2.5〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母	
SB-067	第71図25	須恵器提瓶	30	口径 — 底径 — 器高 〈14.4〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ｶｷﾒ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-067	第71図26	土師器甕	40	口径 — 底径 6.8 器高 〈9.6〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-067	第71図27	土師器甕	40	口径 12.1 底径 (6.0) 器高 15.2	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-067	第71図28	土師器甕	10	口径 (18.3) 底径 — 器高 〈8.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-067	第71図29	土師器甕	20	口径 16.2 底径 — 器高 〈14.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石	
SB-067	第71図30	土師器甕	30	口径 (20.6) 底径 — 器高 〈19.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-067	第71図31	土師器甕	30	口径 (17.2) 底径 5.8 器高 27.8	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石	
SB-067	第71図32	土師器甕	70	口径 23.9 底径 (8.0) 器高 21.5	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-071	第73図1	土師器杯	40	口径 (13.8) 底径 — 器高 4.6	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
SB-071	第73図2	土師器杯	30	口径 (14.6) 底径 — 器高 3.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	内外面赤彩
SB-071	第73図3	土師器杯	90	口径 13.5 底径 — 器高 3.8	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-071	第73図4	土師器甕	20	口径 13.3 底径 — 器高 〈8.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-071	第73図5	土師器甕	20	口径 (16.0) 底径 — 器高 〈9.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-071	第73図6	土師器甕	10	口径 (17.6) 底径 — 器高 〈9.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	

土器観察表 (20)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-071	第73図7	手捏ね	完形	口径 4.4 底径 3.8 器高 1.8	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-071	第73図8	手捏ね	30	口径 〈4.3〉 底径 〈4.6〉 器高 1.9	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-075	第74図1	土師器鉢	10	口径 〈12.4〉 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-075	第74図2	土師器高杯	10	口径 〈14.8〉 裾径 — 器高 〈3.6〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	内面黒色処理
SB-075	第74図3	土師器高杯	10	口径 — 裾径 〈11.6〉 器高 〈4.3〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 —	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-075	第74図4	土師器甕	50	口径 17.6 底径 — 器高 〈17.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-075	第74図5	土師器甕	20	口径 — 底径 5.8 器高 〈13.5〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SD-004	第77図1	須恵器杯	10	口径 〈11.0〉 底径 — 器高 〈1.8〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SD-004	第77図2	土師器杯	20	口径 〈14.4〉 底径 — 器高 〈4.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
SD-004	第77図3	土師器杯	10	口径 〈14.8〉 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
SD-004	第77図4	土師器杯	10	口径 〈14.0〉 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SD-004	第77図5	土師器高杯	30	口径 — 裾径 — 器高 〈5.1〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 —	橙褐色	石英・長石	
SD-004	第77図6	須恵器甕	10	口径 〈22.6〉 底径 — 器高 〈4.7〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SD-004	第77図7	須恵器甕	10	口径 〈23.3〉 底径 — 器高 〈1.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰褐色	石英・長石	
SD-004	第77図8	須恵器甕	10	口径 〈16.6〉 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SD-004	第77図9	須恵器甕	10	口径 〈24.0〉 底径 — 器高 〈8.1〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SD-004	第77図10	土師器甕	10	口径 〈17.3〉 底径 — 器高 〈7.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SD-004	第77図11	手捏ね	70	口径 — 底径 4.2 器高 〈2.1〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SK-002	第78図1	須恵器杯	10	口径 〈12.4〉 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SK-002	第78図2	土師器杯	10	口径 〈12.4〉 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	内外面赤彩
SK-002	第78図3	土師器杯	20	口径 — 底径 — 器高 〈4.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SK-002	第78図4	土師器杯	10	口径 〈13.0〉 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	

土器観察表（21）

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SK-002	第78図5	土師器高杯	20	口径 — 裾径 (10.6) 器高 〈7.6〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 — 内面 —	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-002	第78図6	土師器高杯	30	口径 — 裾径 — 器高 〈8.0〉	脚部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SK-002	第78図7	土師器甕	10	口径 (15.4) 底径 — 器高 〈6.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SK-002	第78図8	土師器甕	10	口径 (16.0) 底径 — 器高 〈6.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SK-207	第78図9	土師器椀	10	口径 (9.4) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SK-214	第78図10	土師器杯	50	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈3.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SK-214	第78図11	土師器杯	10	口径 (12.6) 底径 — 器高 〈3.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-214	第78図12	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SB-002	第79図1	須恵器杯	40	口径 (13.0) 底径 6.6 器高 〈4.0〉	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-002	第79図2	土師器杯	30	口径 (12.9) 底径 6.0 器高 〈4.3〉	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-002	第79図3	土師器杯	完形	口径 13.2 底径 6.2 器高 4.0	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-002	第79図4	土師器杯	90	口径 12.6 底径 7.4 器高 3.8	底部 全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-002	第79図5	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈3.4〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内面油煙付着
SB-002	第79図6	土師器杯	10	口径 — 底径 7.0 器高 〈1.1〉	底部 回転糸切り・手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	墨書「記号」
SB-002	第79図7	土師器甕	10	口径 (17.6) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-002	第79図8	須恵器甕	10	口径 (21.3) 底径 — 器高 〈3.1〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	褐色	石英・雲母	
SB-002	第79図9	須恵器甕	10	口径 (17.3) 底径 — 器高 〈4.7〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-003	第79図12	土師器皿	70	口径 13.6 底径 5.2 器高 2.4	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	墨書「記号」
SB-003	第79図13	土師器杯	30	口径 (13.6) 底径 (3.2) 器高 4.5	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-004	第80図1	須恵器蓋	10	口径 (11.6) 天井径 — 器高 〈2.8〉	天井部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-004	第80図2	土師器杯	10	口径 (14.2) 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-004	第80図3	土師器甕	10	口径 — 底径 5.5 器高 〈2.2〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	

土器観察表 (22)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-004	第80図4	土師器椀	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-004	第80図5	須恵器甕	10	口径 (18.8) 底径 — 器高 〈6.5〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-005	第80図7	須恵器杯	20	口径 — 底径 (6.2) 器高 〈2.9〉	底部 全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	
SB-005	第80図8	土師器甕	10	口径 (17.8) 底径 — 器高 〈6.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-005	第80図9	土師器甕	10	口径 — 底径 5.8 器高 〈2.1〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-005	第80図10	須恵器甕	10	口径 (19.3) 底径 — 器高 〈10.1〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石・雲母	
SB-007	第81図1	土師器杯	40	口径 (12.2) 底径 5.8 器高 3.8	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-007	第81図2	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-007	第81図3	土師器 足高高台付椀	60	口径 (14.4) 底径 8.4 器高 6.2	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-007	第81図4	土師器 足高高台付椀	20	口径 — 底径 8.5 器高 〈3.3〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-007	第81図5	須恵器甕	10	口径 — 底径 (14.6) 器高 〈4.8〉	底部 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-007	第81図6	土師器甕	10	口径 (16.0) 底径 — 器高 〈5.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-008	第81図7	土師器杯	30	口径 (13.6) 底径 (6.0) 器高 4.2	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-008	第81図8	土師器杯	20	口径 (11.7) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-008	第81図9	土師器 高台付椀	20	口径 — 底径 8.0 器高 〈2.2〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-008	第81図10	土師器 高台付椀	10	口径 — 底径 (7.3) 器高 〈1.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-008	第81図11	土師器甕	10	口径 (23.3) 底径 — 器高 〈6.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-010	第82図1	土師器甕	10	口径 (21.6) 底径 — 器高 〈11.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-010	第82図2	土師器甕	10	口径 (22.2) 底径 — 器高 〈7.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-010	第82図3	土師器甕	10	口径 (21.4) 底径 — 器高 〈9.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-010	第82図4	土師器甕	10	口径 — 底径 (6.8) 器高 〈3.5〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-010	第82図5	須恵器甕	10	口径 — 底径 (17.4) 器高 〈5.2〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-011	第82図8	土師器杯	30	口径 (12.3) 底径 5.6 器高 4.6	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-011	第82図9	土師器杯	30	口径 (12.2) 底径 5.8 器高 5.4	底部 回転糸切り・手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	

土器観察表 (23)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-011	第82図10	土師器杯	20	口径 (16.6) 底径 — 器高 〈4.7〉	底部 — 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-011	第82図11	土師器杯	30	口径 — 底径 5.9 器高 〈2.5〉	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母	
SB-011	第82図12	土師器高台付椀	30	口径 — 底径 8.8 器高 〈2.5〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-011	第82図13	土師器高台付椀	10	口径 — 底径 6.8 器高 〈1.8〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	内面黒色処理
SB-011	第82図14	須恵器甕	10	口径 (20.6) 底径 — 器高 〈11.0〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-011	第82図15	須恵器甕	10	口径 (21.8) 底径 — 器高 〈11.8〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-011	第82図16	土師器甕	10	口径 (24.4) 底径 — 器高 〈10.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-011	第82図17	土師器甕	10	口径 (23.0) 底径 — 器高 〈9.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-016	第83図1	土師器杯	80	口径 12.6 底径 5.6 器高 4.1	底部 全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-016	第83図2	土師器杯	10	口径 (13.4) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-016	第83図3	土師器杯	20	口径 — 底径 6.2 器高 〈3.2〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石・雲母	
SB-016	第83図4	土師器杯	20	口径 — 底径 (5.8) 器高 〈2.3〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-016	第83図5	土師器甕	20	口径 (23.6) 底径 — 器高 〈17.6〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SB-016	第83図6	土師器甕	20	口径 (13.6) 底径 — 器高 〈11.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-016	第83図7	土師器甕	30	口径 — 底径 11.4 器高 〈8.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-017	第83図9	灰釉陶器椀	40	口径 — 底径 7.6 器高 〈3.4〉	底部 全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	内面刷毛塗り
SB-017	第83図10	須恵器甕	10	口径 — 底径 (18.8) 器高 〈16.9〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰褐色	石英・長石	
SB-019	第84図1	須恵器杯	70	口径 14.6 底径 9.6 器高 3.8	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	
SB-019	第84図2	土師器甕	20	口径 21.0 底径 — 器高 〈12.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-019	第84図3	土師器甕	30	口径 20.8 底径 — 器高 〈18.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-020	第84図6	灰釉陶器椀	30	口径 — 底径 (8.0) 器高 〈2.6〉	底部 全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	刷毛塗り
SB-020	第84図7	土師器杯	20	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈4.5〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SB-020	第84図8	土師器杯	50	口径 (12.6) 底径 7.0 器高 4.1	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-020	第84図9	土師器杯	60	口径 (13.8) 底径 6.0 器高 4.5	底部 回転糸切り・手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	

土器観察表 (24)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-020	第84図10	土師器杯	40	口径 (17.2) 底径 7.2 器高 5.7	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-020	第84図11	須恵器甕	10	口径 (20.0) 底径 — 器高 〈6.2〉	底部 — 体部 ﾀﾀｷ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-020	第84図12	土師器甕	10	口径 (21.0) 底径 — 器高 〈7.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-020	第84図13	土師器甕	20	口径 — 底径 6.2 器高 〈5.6〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母	
SB-026	第85図1	土師器杯	20	口径 (11.0) 底径 (4.2) 器高 3.4	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-026	第85図2	土師器杯	20	口径 (12.5) 底径 4.3 器高 〈3.5〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-026	第85図3	土師器杯	30	口径 (12.6) 底径 (6.8) 器高 〈4.0〉	底部 静止糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-026	第85図4	土師器杯	20	口径 (12.6) 底径 — 器高 〈3.9〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-026	第85図5	土師器杯	10	口径 (10.0) 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-026	第85図6	土師器甕	10	口径 (10.4) 底径 — 器高 〈4.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SB-026	第85図7	土師器甕	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-026	第85図8	土師器甕	10	口径 (20.4) 底径 — 器高 〈9.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-026	第85図9	土師器甑	10	口径 (24.1) 孔径 — 器高 〈7.5〉	孔部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-046	第85図11	土師器杯	10	口径 — 底径 6.4 器高 〈1.5〉	底部 全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SB-046	第85図12	土師器高台付椀	10	口径 — 底径 7.6 器高 〈1.5〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ	橙褐色	石英・雲母	
SB-046	第85図13	土師器甕	10	口径 — 底径 7.4 器高 〈3.7〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SB-046	第85図14	土師器甕	10	口径 — 底径 (4.6) 器高 〈11.0〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-047	第86図1	土師器杯	80	口径 13.2 底径 6.5 器高 4.0	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-047	第86図2	土師器甕	50	口径 (12.4) 底径 6.4 器高 15.4	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-047	第86図3	須恵器甕	10	口径 (35.8) 底径 — 器高 〈6.0〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SB-050	第86図4	土師器杯	10	口径 — 底径 (7.0) 器高 〈1.1〉	底部 全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SB-073	第86図5	土師器杯	70	口径 12.0 底径 6.2 器高 4.3	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-073	第86図6	土師器杯	40	口径 (12.2) 底径 (6.0) 器高 4.1	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-073	第86図7	土師器杯	10	口径 (13.9) 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	

土器観察表 (25)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SB-077	第87図1	土師器杯	40	口径 (12.8) 底径 6.0 器高 4.1	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-077	第87図2	土師器杯	60	口径 (15.2) 底径 6.6 器高 5.3	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-077	第87図3	土師器杯	80	口径 12.3 底径 5.8 器高 4.2	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-077	第87図4	土師器杯	10	口径 (13.4) 底径 (7.0) 器高 4.4	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SB-077	第87図5	土師器杯	20	口径 (13.6) 底径 — 器高 〈4.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-077	第87図6	土師器杯	20	口径 (12.8) 底径 (6.6) 器高 4.5	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	
SB-077	第87図7	土師器杯	10	口径 (13.6) 底径 (6.6) 器高 4.2	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-077	第87図8	土師器甕	10	口径 (11.1) 底径 — 器高 〈5.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・長石	
SB-078	第87図11	土師器杯	70	口径 13.0 底径 5.6 器高 4.3	底部 全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	口縁部2か所欠損
SB-078	第87図12	土師器杯	70	口径 12.4 底径 5.4 器高 4.3	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-078	第87図13	土師器杯	20	口径 (14.0) 底径 — 器高 5.3	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-078	第87図14	土師器甕	30	口径 — 底径 (3.2) 器高 〈5.7〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-053	第88図1	土師器杯	10	口径 (14.6) 底径 — 器高 〈4.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SB-074	第88図2	土師器杯	10	口径 (13.6) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SB-074	第88図3	土師器高杯	10	口径 (18.0) 裾径 — 器高 〈4.3〉	脚部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SB-074	第88図4	土師器甕	10	口径 (16.0) 底径 — 器高 〈4.9〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SB-074	第88図5	土師器甑	10	口径 — 孔径 (8.0) 器高 〈5.4〉	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SB-070	第89図1	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SK-005	第91図1	土師器甕	10	口径 (19.6) 底径 — 器高 〈6.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SK-006	第91図2	土師器杯	30	口径 (12.6) 底径 6.6 器高 5.1	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SK-006	第91図3	土師器 足高高台付椀	10	口径 — 底径 (7.2) 器高 〈1.5〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 —	橙褐色	石英・雲母	
SK-007	第91図4	土師器 足高高台付椀	10	口径 — 底径 (8.2) 器高 〈1.9〉	底部 ﾅﾃﾞ 高台部 ﾅﾃﾞ 内面 —	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	

土器観察表 (26)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SK-007	第91図5	土師器杯	20	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-007	第91図6	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈3.1〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	
SK-008	第91図7	土師器杯	30	口径 (13.0) 底径 〈6.4〉 器高 4.2	底部 静止糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-008	第91図8	土師器杯	10	口径 (12.9) 底径 (5.8) 器高 4.6	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SK-022	第91図9	土師器杯	20	口径 (13.0) 底径 (4.7) 器高 5.0	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SK-022	第91図10	土師器杯	10	口径 — 底径 (5.6) 器高 〈3.5〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-022	第91図11	土師器甕	10	口径 — 底径 — 器高 〈6.8〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SK-022	第91図12	土師器甕	10	口径 — 底径 8.8 器高 〈4.0〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SK-022	第91図13	土師器甕	10	口径 〈23.2〉 底径 — 器高 〈6.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-026	第92図15	土師器杯	10	口径 — 底径 5.7 器高 〈2.1〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-035	第92図16	土師器杯	60	口径 (11.7) 底径 5.5 器高 4.6	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗褐色	石英・長石・雲母	
SK-037	第92図17	土師器杯	10	口径 (11.6) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-039	第92図18	土師器杯	10	口径 (12.6) 底径 (7.0) 器高 〈3.3〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-039	第92図19	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈4.1〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-039	第92図20	土師器杯	80	口径 14.8 底径 7.0 器高 4.9	底部 回転糸切り・手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-039	第92図21	土師器甕	10	口径 (17.6) 底径 — 器高 〈3.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SK-039	第92図22	土師器甕	10	口径 (21.9) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-045	第92図23	須恵器甕	10	口径 〈24.4〉 底径 — 器高 〈3.2〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SK-051	第92図24	土師器杯	10	口径 (12.2) 底径 — 器高 〈4.2〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-051	第92図25	土師器甕	10	口径 (17.6) 底径 — 器高 〈4.2〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SK-069	第92図26	土師器杯	60	口径 12.6 底径 6.0 器高 4.0	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	褐色	石英・長石・雲母	
SK-069	第92図27	土師器杯	30	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈3.5〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-072	第93図29	土師器杯	10	口径 — 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-072	第93図30	土師器杯	40	口径 — 底径 6.1 器高 4.0	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	

土器観察表 (27)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SK-073	第93図31	土師器杯	20	口径 (11.8) 底径 (6.0) 器高 4.7	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SK-073	第93図32	土師器杯	60	口径 13.0 底径 5.9 器高 4.9	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SK-073	第93図33	土師器杯	50	口径 (13.2) 底径 5.4 器高 5.0	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-073	第93図34	土師器甕	10	口径 12.2 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SK-079	第93図35	土師器杯	10	口径 (11.7) 底径 (3.2) 器高 3.5	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SK-082	第93図36	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈5.1〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	内面黒色処理
SK-086	第93図37	土師器杯	70	口径 11.8 底径 4.1 器高 3.7	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	墨書「鼻」
SK-086	第93図38	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 (6.0) 器高 3.2	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	墨書「鼻」
SK-086	第93図39	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈5.2〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-086	第93図40	土師器杯	20	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	内面黒色処理
SK-086	第93図41	土師器 高台付椀	30	口径 — 底径 (6.2) 器高 〈3.3〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SK-086	第93図42	土師器甕	10	口径 (16.0) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-087	第93図43	土師器杯	10	口径 — 底径 (5.0) 器高 〈1.7〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SK-087	第93図44	土師器 足高高台付椀	10	口径 — 底径 (8.4) 器高 〈2.2〉	底部 — 高台部 ﾅﾃﾞ 内面 —	褐色	石英・雲母	
SK-087	第93図45	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 — 器高 〈4.1〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-088	第94図46	土師器杯	10	口径 (14.2) 底径 — 器高 〈3.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-088	第94図47	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈4.2〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SK-088	第94図48	土師器杯	10	口径 (14.8) 底径 — 器高 〈4.3〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-088	第94図49	土師器甕	10	口径 (20.0) 底径 — 器高 〈6.0〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-088	第94図50	土師器甕	10	口径 (21.8) 底径 — 器高 〈8.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石	
SK-088	第94図51	土師器甑	20	口径 〈20.0〉 孔径 (7.8) 器高 〈18.7〉	孔部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SK-089	第94図53	土師器 足高高台付椀	完形	口径 13.5 底径 8.2 器高 5.2	底部 回転糸切り・ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・ｽｺﾘｱ	
SK-090	第94図54	土師器杯	20	口径 — 底径 6.2 器高 〈1.6〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-110	第94図55	土師器杯	20	口径 (12.8) 底径 (6.4) 器高 3.9	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	

土器観察表 (28)

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
SK-110	第94図56	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 — 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-110	第94図57	土師器杯	10	口径 — 底径 (6.4) 器高 〈3.1〉	底部 回転糸切り 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内外面黒色処理
SK-110	第94図58	土師器 足高高台付椀	80	口径 (14.6) 底径 7.4 器高 6.7	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SK-110	第94図59	土師器甕	10	口径 — 底径 (7.6) 器高 〈5.2〉	底部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SK-110	第94図60	土師器甕	10	口径 (18.0) 底径 — 器高 〈8.1〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・長石・雲母	
SK-113	第94図63	土師器 高台付椀	50	口径 — 底径 8.0 器高 〈3.2〉	底部 回転糸切り・ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	内面黒色処理
SK-113	第94図64	土師器 高台付杯	50	口径 (12.7) 底径 7.2 器高 4.0	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗褐色	石英・雲母	内面黒色処理
SK-113	第94図65	土師器椀	10	口径 (18.0) 底径 — 器高 〈5.3〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-129	第95図66	土師器杯	10	口径 (13.9) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗褐色	石英・雲母	
SK-129	第95図67	土師器 高台付杯	10	口径 — 底径 — 器高 〈2.1〉	底部 回転糸切り・ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	内面黒色処理
SK-129	第95図68	土師器甕	20	口径 (14.6) 底径 — 器高 〈7.4〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	
SK-206	第95図69	灰釉陶器皿	90	口径 13.6 底径 6.7 器高 2.9	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰白色	石英・長石	
SK-206	第95図70	土師器杯	60	口径 14.0 底径 5.6 器高 4.5	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・ｽｺﾘｱ	
SK-206	第95図71	土師器杯	90	口径 14.0 底径 5.5 器高 4.1	底部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SK-206	第95図72	土師器杯	40	口径 (14.6) 底径 6.3 器高 4.9	底部 静止糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-212	第95図73	土師器甕	10	口径 (12.5) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	黒褐色	石英・雲母	
SK-212	第95図74	土師器甕	10	口径 (20.0) 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母	
SX-013	第96図1	土師器甕	10	口径 (22.2) 底径 — 器高 〈7.5〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	
SD-014	第97図1	土師器杯	80	口径 11.4 底径 4.6 器高 3.5	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石・雲母	
SD-014	第97図2	土師器杯	10	口径 (10.1) 底径 (5.4) 器高 〈3.8〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	
SD-014	第97図3	土師器 高台付椀	30	口径 — 底径 6.8 器高 〈1.8〉	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	

第12表　中世土坑一覧（1）

（　）は推定値　　［　］は現存値

遺構番号	挿図番号	グリッド	整形区画	平面形態	規　模(m)	深さ(m)	出土遺物等
SK-261	第106図	D2－42	第1	不 明	—　×　—	0.67	
SK-133	第107図	D2－42	第1	方　形	(3.2)　×　(2.8)	0.41	
SK-134	第107図	D2－42	第1	不整方形	2.25　×　(2.0)	0.74	常滑捏鉢
SK-126	第107図	D2－34	第1	方　形	2.60　×　1.83	0.90	常滑甕
SK-127B	第107図	D2－34	第1	方　形	2.49　×　0.90	0.78	
SK-128B	第107図	D2－34	第1	方　形	(2.6)　×　(1.8)	0.68	
SK-153	第107図	D2－34	第1	方　形	[1.5]　×　[0.6]	0.37	
SK-143	第108図	D2－33	第1	方　形	1.88　×　[1.1]	0.63	
SK-169	第108図	D2－51	第1	不整方形	2.70　×　1.90	0.58	ピット
SK-131	第108図	D2－50	第1	不整方形	3.07　×　1.85	0.82	
SK-132	第108図	D2－50	第1	方　形	2.21　×　[0.9]	0.78	
SK-118	第108図	D2－42	第1	長方形	2.50　×　1.70	0.90	常滑甕
SK-185	第108図	D3－03	第1	方　形	1.84　×　1.70	0.54	
SK-176	第108図	D2－58	第1	方　形	2.17　×　1.80	0.78	常滑甕
SK-147	第109図	C2－47	第1	長方形	2.68　×　1.60	0.65	天目茶碗
SK-148	第109図	C2－48	第1	長方形	1.78　×　1.21	0.68	
SK-149	第109図	C2－56	第1	長方形	2.45　×　1.82	0.75	
SK-150	第109図	C2－55	第1	長方形	[2.1]　×　1.75	0.80	常滑甕
SK-290	第109図	C2－47	第1	長方形	[2.0]　×　1.60	0.20	
SK-267	第109図	D2－44	第1	不整方形	1.64　×　1.36	0.20	
SK-181	第109図	D2－53	第1	長方形	1.85　×　1.43	0.75	
SK-182	第109図	D2－46	第1	長方形	1.91　×　1.10	0.44	
SK-183	第109図	D2－45	第1	方　形	2.35　×　2.00	0.31	
SK-184	第109図	D2－55	第1	方　形	2.28　×　1.98	0.49	
SK-171	第110図	D2－52	第1	不整方形	2.25　×　1.55	0.73	粘土貼り土坑
SK-179	第110図	D2－45	第1	長方形	2.21　×　1.03	0.43	粘土貼り土坑
SK-268	第110図	D3－04	—	長方形	2.50　×　1.24	0.39	
SK-288	第110図	C2－22	—	方　形	2.03　×　1.47	0.59	
SK-162	第111図	D2－35	第1	方　形	1.57　×　1.05	0.20	
SK-269	第111図	D2－61	第1	方　形	1.33　×　1.00	0.21	
SK-264	第111図	D2－36	第1	方　形	1.39　×　0.83	0.37	
SK-265	第111図	D2－36	第1	不整方形	1.40　×　1.20	0.16	
SK-180	第111図	D2－53	第1	長方形	1.67　×　0.93	0.72	
SK-289	第111図	C2－46	第1	長方形	1.17　×　0.64	0.48	
SK-172	第111図	D2－57	第1	長方形	1.17　×　0.65	0.37	
SK-174	第111図	D2－50	第1	長方形	1.32　×　0.65	0.56	
SK-263	第111図	D2－37	第1	隅丸方形	1.15　×　0.77	0.36	
SK-266	第111図	D2－44	第1	長方形	1.16　×　0.87	0.17	
SK-170	第111図	D2－49	第1	長方形	1.12　×　0.76	0.30	
SK-291	第111図	C2－45	第1	不整方形	1.20　×　0.62	0.50	
SK-276	第111図	D3－07	第1	不整方形	1.10　×　0.80	0.60	
SK-262	第111図	D2－57	第1	不整方形	1.30　×　0.93	0.35	
SK-285	第111図	D2－48	第1	長方形	1.86　×　0.63	0.24	
SK-286	第111図	D2－48	第1	不整方形	[1.7]　×　1.19	0.15	
SK-163	第111図	D2－43	第1	長方形	1.65　×　0.98	0.36	
SK-270	第111図	D2－61	第1	楕円形	[1.0]　×　0.94	0.44	
SK-271	第111図	D2－61	第1	楕円形	1.22　×　[0.8]	0.83	
SK-260	第111図	D2－41	第1	円　形	0.70　×　0.68	0.30	
SK-257	第111図	C2－64	第1	楕円形	1.17　×　1.03	0.64	
SK-258	第111図	D2－34	第1	円　形	0.83　×　0.82	0.19	
SK-272	第111図	D3－05	第1	隅丸方形	1.38　×　1.18	0.35	
SK-255	第111図	C2－63	第1	楕円形	1.67　×　1.66	0.45	
SK-187	第121図	E2－57	第2	長方形	1.95　×　1.16	0.65	

中世土坑一覧（2）

遺構番号	挿図番号	グリッド	整形区画	平面形態	規　模(m)	深さ(m)	出土遺物等
SK-279	第121図	E2－57	第2	方　形	1.26 × 1.14	0.45	
SK-280	第121図	E2－57	第2	方　形	1.16 × [1.0]	0.50	
SK-301	第121図	E2－57	第2	不　明	(1.5) × (1.2)	0.30	
SK-192	第121図	E2－60	第2	不整方形	[1.5] × 1.27	0.29	
SK-193	第121図	E2－59	第2	長方形	2.10 × 1.56	0.95	
SK-188	第121図	E2－59	第2	長方形	2.76 × 1.23	0.86	
SK-283	第121図	E2－59	第2	長方形	2.35 × 1.73	0.17	
SK-186A	第121図	E2－57	第2	不整方形	1.67 × 1.58	0.50	
SK-284	第121図	E3－02	第2	不整方形	2.14 × 1.10	0.40	
SK-277	第121図	E2－49	第2	長方形	1.75 × 1.08	0.65	
SK-278	第121図	E2－50	第2	方　形	1.31 × 1.00	0.40	
SK-281	第121図	E2－57	第2	隅丸方形	1.80 × 1.03	0.46	
SK-303	第121図	E3－11	第2	長方形	1.74 × 0.70	0.50	
SK-304	第121図	E3－03	第2	不整方形	(1.5) × (1.0)	0.40	
SK-305	第121図	E3－03	第2	長方形	1.70 × 0.60	0.45	
SK-282	第121図	E3－02	第2	不整方形	1.63 × 0.72	0.15	
SK-306	第121図	E3－11	第2	長方形	1.35 × 0.75	0.72	
SK-307	第121図	E3－03	第2	隅丸方形	1.20 × 0.52	0.38	
SK-308	第121図	E2－60	第2	方　形	0.80 × 0.72	0.42	
SK-211a	第127図	C3－03	第3	長方形	2.00 × 1.40	0.48	青磁碗，鉄釉壺，端反皿
SK-221	第127図	C3－19	第3	方　形	1.74 × 1.35	0.52	
SK-203	第127図	C3－04	第3	不整方形	2.25 × (1.1)	0.35	
SK-245	第127図	C3－04	第3	不整方形	1.80 × 1.15	0.17	
SK-228	第127図	C3－05	第3	長方形	(2.3) × 1.08	0.25	
SK-218	第128図	C3－02	第3	長方形	2.10 × 1.12	0.35	
SK-205	第128図	C3－03	第3	長方形	1.90 × 1.15	0.62	
SK-227	第128図	C2－61	第3	方　形	1.20 × 1.00	0.47	
SK-250	第128図	C3－30	第3	隅丸方形	1.45 × 0.95	0.32	
SK-204	第128図	C2－52	第3	円　形	1.02 × 0.97	0.70	
SK-247	第128図	C3－12	第3	隅丸方形	1.64 × 1.35	0.60	
SK-216	第132図	B2－61	第4	不整方形	2.28 × 1.68	0.12	
SK-168	第132図	B2－61	第4	不整方形	1.93 × 1.17	0.30	
SK-302	第132図	B3－07	第4	隅丸方形	1.63 × 1.40	0.43	
SK-167	第132図	B3－14	第4	方　形	1.28 × 1.10	0.53	
SK-225	第132図	B3－05	第4	不整方形	1.33 × 0.72	0.40	
SK-217	第132図	B3－13	第4	不整方形	0.96 × 0.95	0.27	灰釉碗
SK-047	第133図	B1－57	—	方　形	1.49 × 1.42	0.66	常滑甕
SK-021	第133図	B2－09	—	方　形	1.62 × 1.21	0.71	
SK-128	第133図	B2－22	—	楕円形	1.36 × 0.80	0.22	
SK-138	第133図	B2－20	—	楕円形	1.35 × 0.85	0.20	
SK-053	第133図	B1－52	—	楕円形	1.92 × 0.86	0.20	
SK-054	第133図	B2－01	—	楕円形	1.84 × 1.69	0.15	
SK-068	第133図	B2－33	—	不整円形	1.76 × 1.62	0.52	
SK-048	第133図	B2－01	—	不整円形	2.83 × [2.0]	0.11	
SK-034	第135図	B1－26	—	楕円形	1.26 × 1.19	0.46	
SK-043	第135図	A1－31	—	楕円形	0.91 × 0.83	0.19	
SK-038	第135図	A1－32	—	楕円形	1.55 × 1.29	0.25	
SK-042	第135図	A1－31	—	楕円形	2.30 × 1.32	0.16	
SK-094	第136図	A2－13	第6	楕円形	1.38 × 0.91	0.21	
SK-095	第136図	A2－22	第6	楕円形	1.12 × 0.96	0.18	
SK-096	第136図	A2－22	第6	楕円形	1.33 × 1.05	0.35	
SK-013	第137図	A3－06	第7	隅丸方形	2.29 × 1.51	0.43	
SK-014	第137図	A3－06	第7	隅丸方形	1.43 × 0.79	0.10	
SK-016	第137図	A3－14	第7	楕円形	1.65 × 1.31	0.25	
SK-017	第137図	A3－06	第7	隅丸方形	2.38 × 1.43	0.23	

第13表　中世陶磁器・土器観察表（1）

（　）推定値　〈　〉現存値

挿図番号	遺構番号	産地器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	編年	時期
第143図1	第1整形区画 D2-50	白磁碗	10	口径 (10.6) 底径 — 器高 〈2.4〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 —	灰白色	密	Ⅳ類	13C中葉
第143図2	SD-036	白磁皿	20	口径 — 底径 5.0 器高 〈1.7〉	底部 ロクロ整形 体部 ロクロ整形 内面 —	灰白色	密	Ⅲ類	12C中葉～13C
第143図3	第1整形区画 D3-07	白磁皿	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 —	白色	密・白色	B群	15世紀代
第143図4	第1整形区画	白磁皿	10	口径 — 底径 3.8 器高 〈1.2〉	高台 削出し 体部 ロクロ整形 内面 —	白色	密・白色	B群	15世紀代
第143図5	SD-017	青磁碗	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 鎬蓮弁文 内面 —	くすんだ緑色	密・灰白色	龍泉窯Ⅰ-5類	13世紀中葉
第143図6	第2整形区画 E2-51	青磁碗	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 鎬蓮弁文 内面 —	オリーブ色	密・灰白色	龍泉窯Ⅰ-5類	13世紀中葉
第143図7	第2整形区画 E2-51	青磁碗	10	口径 (16.2) 底径 — 器高 〈2.5〉	底部 — 体部 蓮弁文 内面 —	オリーブ色	密・灰白色	龍泉窯Ⅰ-5類	13世紀中葉
第143図8	第3整形区画 SK-211a	青磁小碗	10	口径 — 底径 4.0 器高 〈1.4〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 —	オリーブ色	密・灰白色	龍泉窯Ⅰ-5類	13世紀中葉
第143図9	SD-036	青磁皿	10	口径 (12.2) 底径 — 器高 〈2.0〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 —	オリーブ色	密・灰白色	龍泉窯系	不明
第143図10	第1整形区画 SK-115	青磁碗	10	口径 — 底径 (5.0) 器高 〈2.6〉	底部 ヘラケズリ 体部 ロクロ整形 内面 —	オリーブ色	密・灰白色	同安窯系Ⅰ類	12C中葉～13C初め
第143図11	第3整形区画 SK-211a	鉄釉壺	10	口径 (10.0) 底径 — 器高 〈7.9〉	底部 — 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	不明	15世紀代か
第143図12	SD-025 C2-09・60 C3-04	鉄釉壺	10	口径 — 底径 (9.2) 器高 〈10.0〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英	不明	15世紀代か
第144図13	第3整形区画 C3-12	瀬戸・美濃 天目茶碗	10	口径 (10.6) 底径 — 器高 〈4.9〉	高台 — 体部 ロクロ整形 内面 —	黒褐色	密・明灰色	古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期	14世紀後半
第144図14	第1整形区画 SK-147	瀬戸・美濃 天目茶碗	50	口径 (11.4) 底径 4.1 器高 5.8	高台 削出し 体部 ロクロ整形 内面 —	黒褐色	密・明灰色	古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期	14世紀後半
第144図15	第1整形区画 D3-04	瀬戸・美濃 天目茶碗	20	口径 (12.4) 底径 — 器高 〈5.6〉	高台 — 体部 ロクロ整形 内面 —	飴色	密・灰褐色	古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期	14世紀後半
第144図16	SD-001	瀬戸・美濃 天目茶碗	10	口径 (13.0) 底径 — 器高 〈5.5〉	高台 — 体部 ロクロ整形 内面 —	飴色	密・灰褐色	古瀬戸中Ⅳ～後Ⅰ期	14世紀後半
第144図17	第1整形区画 SK-115	瀬戸・美濃 灰釉平碗	10	口径 — 底径 〈5.2〉 器高 〈5.0〉	底部 回転糸切り 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	オリーブ灰色	密・浅黄色	古瀬戸後Ⅰ期	14世紀後半
第144図18	第3整形区画 C3-04・20	瀬戸・美濃 灰釉平碗	10	口径 — 底径 4.6 器高 〈3.0〉	高台 — 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	くすんだ橙色	密・浅黄色	古瀬戸後Ⅱ～後Ⅳ期	15世紀前半
第144図19	SD-001	瀬戸・美濃 灰釉碗	10	口径 (12.0) 底径 — 器高 〈4.4〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	淡緑色	密・浅黄色	古瀬戸	不明
第144図20	第2整形区画 E2-49	瀬戸・美濃 縁釉小皿	30	口径 (10.6) 底径 (5.2) 器高 2.4	底部 回転糸切り 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	灰色	密・石英	古瀬戸後Ⅱ期	14世紀末～15世紀初め
第144図21	第1整形区画	瀬戸・美濃 縁釉小皿	10	口径 (9.7) 底径 (5.0) 器高 2.3	底部 回転糸切り 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	灰色	密・石英	古瀬戸後Ⅱ期	14世紀末～15世紀初め
第144図22	第1整形区画 D3-05	瀬戸・美濃 縁釉小皿	60	口径 8.2 底径 3.9 器高 1.9	底部 回転糸切り 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	灰色	密・浅黄色	古瀬戸後Ⅲ期	15世紀前半
第144図23	第3整形区画 C3-04	瀬戸・美濃 縁釉小皿	10	口径 (11.8) 底径 — 器高 〈2.3〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	淡緑色,浅黄色	密・浅黄色	古瀬戸後Ⅳ期新段階	15世紀第Ⅲ四半期
第144図24	SD-005	瀬戸・美濃 縁釉小皿	10	口径 (11.6) 底径 — 器高 〈2.7〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 ナデ	灰白色,淡褐色	密・浅黄色	古瀬戸後Ⅳ期新段階	15世紀第Ⅲ四半期

中世陶磁器・土器観察表（2）

挿図番号	遺構番号	産地器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	編年	時期
第144図25	第1整形区画 D2-45	瀬戸・美濃 卸皿	10	口径 (10.9) 底径 — 器高 〈1.9〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 ﾅﾃﾞ	淡緑色, 浅黄色	密・浅黄色	古瀬戸後Ⅳ期新段階	15世紀第Ⅲ四半期
第144図26	第1整形区画 D2-51	瀬戸・美濃 卸皿	10	口径 — 底径 6.0 器高 〈0.9〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	浅黄色	密・浅黄色	古瀬戸	不明
第144図27	第1整形区画 D3-05	瀬戸・美濃 卸皿	10	口径 — 底径 (8.0) 器高 〈1.0〉	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	淡緑色, 浅黄色	密・明灰色	古瀬戸	不明
第144図28	第1整形区画 SK-122	瀬戸・美濃 卸皿	10	口径 — 底径 (8.0) 器高 〈1.3〉	底部 ﾍﾗﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	浅黄色	密・浅黄色	古瀬戸	不明
第144図29	第1整形区画 D2-44・52	瀬戸・美濃 折縁深皿	10	口径 (22.2) 底径 — 器高 〈4.7〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 ﾅﾃﾞ	淡緑色	密・浅黄色	古瀬戸中Ⅰ～中Ⅱ期	14世紀初め
第144図30	SD-010・005	瀬戸・美濃 灰釉大皿	10	口径 — 底径 — 器高 〈5.7〉	底部 — 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ，釘目	浅黄色, オリーブ色	密・浅黄色	古瀬戸後Ⅱ～後Ⅲ期	15世紀前半
第144図31	SD-001	瀬戸・美濃 瓶子	10	口径 — 底径 (12.5) 器高 〈3.8〉	底部 ﾍﾗﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	淡緑色	密・明灰色	古瀬戸	不明
第144図32	第1整形区画 SK-115～117・122等	瀬戸・美濃 灰釉四(三)耳壺	完形	口径 — 底径 10.0 器高 〈21.9〉	底部 ﾍﾗﾅﾃﾞ 体部 ロクロ整形 内面 ﾅﾃﾞ	淡緑色	密・明灰色	古瀬戸後Ⅰ～後Ⅱ期	14世紀末～15世紀初め
第144図33	第3整形区画 SK-211a	瀬戸・美濃 端反皿	20	口径 (12.2) 底径 — 器高 〈1.9〉	底部 — 体部 ロクロ整形 内面 ﾅﾃﾞ	オリーブ灰色	密・浅黄色	大窯1期	15世紀末～16世紀初め
第144図34	SD-005	瀬戸・美濃 折縁皿	40	口径 (13.0) 底径 (7.7) 器高 2.7	底部 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 体部 ロクロ整形 内面 ﾅﾃﾞ	灰色, オリーブ灰色	密・明灰色	大窯3期	16世紀第Ⅲ四半期
第144図35	第5整形区画	瀬戸・美濃 鉄釉擂鉢	10	口径 (26.0) 底径 — 器高 〈2.9〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗赤褐色	密・浅黄色	大窯4期前	16世紀末
第145図36	SD-036	常滑 甕	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英	3～4型式	12世紀末～13世紀初め
第145図37	SB-072	常滑 甕	20	口径 (9.5) 底径 — 器高 〈7.0〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	緑灰色, 明赤褐色	石英	4～5型式	13世紀前半
第145図38	SD-036	常滑 甕	20	口径 (21.8) 底径 — 器高 〈3.7〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色, オリーブ灰色	石英	5型式	13世紀前半～中頃
第145図39	第3整形区画 C3-01	常滑 甕	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗灰赤褐色	石英	6b型式	13世紀末
第145図40	第1・第5整形区画	常滑 甕	20	口径 (28.0) 底径 — 器高 〈16.0〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	7型式	14世紀前半
第145図41	第2整形区画 SK-189	常滑 甕	20	口径 — 底径 (18.0) 器高 〈11.7〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	7型式	14世紀前半
第145図42	第1整形区画 D3-04	常滑 甕	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	7型式	14世紀前半
第145図43	第2整形区画 SK-189	常滑 甕	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	7型式	14世紀前半
第145図44	第1整形区画 D3-05	常滑 甕	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	9型式	15世紀前半
第145図45	第1整形区画 SK-115	常滑 甕	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗赤褐色	石英・長石	9型式	15世紀前半
第145図46	SD-035	常滑 甕	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗赤褐色	石英・長石	9型式	15世紀前半
第145図47	第1整形区画 SK-115	常滑 甕	10	口径 — 底径 (16.8) 器高 〈6.0〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	不明	不明
第145図48	SD-036	常滑 甕	10	口径 — 底径 (17.0) 器高 〈7.7〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	赤褐色	石英・長石	不明	不明

中世陶磁器・土器観察表（3）

挿図番号	遺構番号	産地器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	編年	時期
第145図49	第4整形区画 SX-015	常滑 捏鉢・片口鉢	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗灰色	石英・長石	5型式	13世紀前半～中頃
第145図50	SX-008	常滑 捏鉢・片口鉢	10	口径 — 底径 (14.8) 器高 〈4.5〉	底部 ﾅﾃﾞ 体部 ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ 内面 ﾍﾗﾅﾃﾞ	灰色	石英・長石	5型式	13世紀前半～中頃
第145図51	第1整形区画	常滑 捏鉢・片口鉢	10	口径 (29.0) 底径 — 器高 〈6.6〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗灰色	石英・長石	6a型式	13世紀第Ⅲ四半期
第145図52	第1整形区画	常滑 捏鉢・片口鉢	10	口径 (31.0) 底径 — 器高 〈5.8〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗灰色	石英・長石	7型式	14世紀前半
第145図53	第7整形区画	常滑 捏鉢・片口鉢	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰赤褐色	石英・長石	8型式	14世紀後半
第145図54	SD-036	常滑 捏鉢・片口鉢	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・長石	8型式	14世紀後半
第145図55	SD-017	常滑 捏鉢・片口鉢	10	口径 (32.8) 底径 — 器高 〈8.1〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰赤褐色	石英・長石	9型式	15世紀前半
第145図56	第4整形区画 SK-224	常滑 捏鉢・片口鉢	10	口径 (26.4) 底径 — 器高 〈6.3〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰赤褐色	石英・長石	9型式	15世紀前半
第145図57	第1整形区画 SK-115・135・136 SD-036, SX-025	常滑 捏鉢・片口鉢	40	口径 (29.2) 底径 (11.0) 器高 〈9.9〉	底部 粗いﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗灰色	石英・長石	9型式	15世紀前半
第145図58	SD-005	常滑 捏鉢・片口鉢	10	口径 (31.6) 底径 — 器高 〈8.0〉	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	灰褐色	石英・長石	9型式	15世紀前半
第146図59	SD-036	カワラケ	20	口径 (6.3) 底径 (4.2) 器高 1.2	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図60	SD-036	カワラケ	10	口径 (7.0) 底径 (5.2) 器高 1.2	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図61	SB-063	カワラケ	40	口径 (7.2) 底径 (5.0) 器高 1.2	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図62	SB-045	カワラケ	完形	口径 7.6 底径 5.1 器高 1.4	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図63	SB-045	カワラケ	完形	口径 7.8 底径 5.3 器高 1.6	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図64	SD-037	カワラケ	完形	口径 7.9 底径 6.1 器高 1.4	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図65	SB-033	カワラケ	20	口径 (8.1) 底径 (6.2) 器高 1.7	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・ｽｺﾘｱ	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図66	SB-045	カワラケ	50	口径 (8.4) 底径 (5.4) 器高 1.7	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母	Ⅰ群A類	14世紀～15世紀
第146図67	SK-011	カワラケ	60	口径 6.4 裾径 3.9 器高 1.7	脚部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅰ群B1類	14世紀～15世紀
第146図68	第1整形区画	カワラケ	20	口径 (6.6) 底径 (3.3) 器高 1.9	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅰ群B1類	14世紀～15世紀
第146図69	SD-036	カワラケ	10	口径 (6.8) 底径 (4.8) 器高 1.8	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	暗黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	Ⅰ群B1類	14世紀～15世紀
第146図70	第6整形区画	カワラケ	30	口径 (7.5) 裾径 4.6 器高 2.0	脚部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅰ群B1類	14世紀～15世紀
第146図71	SD-030	カワラケ	70	口径 8.0 底径 5.1 器高 1.9	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	Ⅰ群B1類	14世紀～15世紀
第146図72	第1整形区画	カワラケ	完形	口径 7.4 底径 4.4 器高 1.9	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	雲母	Ⅰ群B2類	14世紀～15世紀

中世陶磁器・土器観察表（4）

挿図番号	遺構番号	産地器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	編年	時期
第146図73	第2整形区画 SK-189	カワラケ	60	口径 (7.6) 底径 (5.2) 器高 2.1	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	Ⅰ群B2類	14世紀～15世紀
第146図74	第1整形区画	カワラケ	30	口径 (7.8) 底径 (4.8) 器高 1.8	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅰ群B2類	14世紀～15世紀
第146図75	第7整形区画	カワラケ	10	口径 (7.6) 底径 (5.0) 器高 2.4	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母	Ⅰ群C類	14世紀～15世紀
第146図76	SD-017	カワラケ	30	口径 (6.8) 底径 3.4 器高 1.9	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	Ⅰ群D類	14世紀～15世紀
第146図77	第1整形区画 SK-115	カワラケ	完形	口径 7.8 裾径 3.5 器高 1.9	脚部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	Ⅰ群D類	14世紀～15世紀
第146図78	SD-018	カワラケ	50	口径 11.5 裾径 4.1 器高 3.2	脚部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	橙褐色	石英・ｽｺﾘｱ	Ⅱ群	14世紀～15世紀
第146図79	SD-030	カワラケ	10	口径 (12.0) 底径 (6.4) 器高 3.3	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅱ群	14世紀～15世紀
第146図80	第7整形区画	カワラケ	40	口径 (12.2) 底径 5.4 器高 3.7	底部 回転糸切り・ﾅﾃﾞ 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅱ群	14世紀～15世紀
第146図81	SD-036	カワラケ	20	口径 (12.2) 底径 (6.0) 器高 3.3	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅱ群	14世紀～15世紀
第146図82	第3整形区画 SK-209	カワラケ	40	口径 (12.7) 底径 5.8 器高 3.4	底部 回転糸切り 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母	Ⅱ群	14世紀～15世紀
第146図83	第1整形区画	内耳鍋	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黒色	石英・長石	—	
第146図84	第7整形区画	内耳鍋	口縁部	口径 — 底径 — 器高 —	底部 — 体部 ﾅﾃﾞ 内面 ﾅﾃﾞ	黄褐色	石英・雲母・ｽｺﾘｱ	—	

附　章　貝サンプルの分析結果

縄文時代早期後葉の炉穴２基と古墳時代後期の住居跡２軒，中世遺構10基で貝殻の堆積が認められた。各貝層を一括して，またはブロックごとに一括して貝サンプルを採取した。サンプルは整理室で9.52mm，4mm，2mm，1mmメッシュの試験フルイによる水洗分離を経て，選別を行った。採取量の多いサンプルについては一部のみ水洗・選別を行い，残りは計量と4mmメッシュの園芸用フルイを用いた微細遺物の回収を行った後に廃棄した。

貝サンプルの整理は四柳隆・西野雅人が行い，貝類の同定・分析は，当センター所蔵の貝類標本を用い，西野が行った。なお，縄文早期と中世のサンプルの一部で多くの微小貝が検出されたが，分析を行っていない。貝類のほかにはフジツボ，魚骨片，土壌性生物の斃死体，炭化種子を検出した。

第14表　貝サンプル一覧

貝層名	時期		遺構	ｶｯﾄ数	備考	分析/採取量
SK-062	縄文早期	早期後葉	炉穴	1	全量採取、一部水洗	63.6㌔/580.0㌔
SK-097	縄文早期	早期後葉	炉穴	1	全量採取	5.0㌔
SB-013	古墳後期	7C前	住居	2	ブロック一括採取×2	0.6㌔
SB-051	古墳後期	6C末	住居	1	貝殻片のみ取り上げ	0.03㌔
SD-008	中世		溝	2	ブロック一括×2	39.2㌔
SK-115	中世		地下式坑	12	貝殻と周囲の土×12	1.8㌔
SK-175	中世		地下式坑	1	ブロック一括、一部水洗	16.6㌔/181.7㌔
SK-189	中世		地下式坑	1	ブロック一括、一部水洗	54.4㌔/503.5㌔
SK-208	中世		地下式坑	1	全量採取、ごく少量	0.2㌔
SK-209	中世		地下式坑	1	２単位一括、一部水洗	6.7㌔/52.1㌔
SX-007	中世		整形区画	1	全量採取	19.6㌔
SX-020	中世		整形区画内貝層	1	全量採取、一部水洗	5.8㌔/37.3㌔
SX-021	中世		整形区画内貝層	1	全量採取、一部水洗	27.5㌔/277.3㌔
SX-022	中世		整形区画内貝層	1	全量採取、一部水洗	6.3㌔/26.2㌔
SX-023	中世		整形区画内貝層	1	全量採取、一部水洗	6.7㌔/31.1㌔

第15表　　貝類種名一覧

腹足綱	原始腹足目	ユキノカサガイ科	ツボミガイ	*Patelloida pygmaea lampanicola*
		ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*
			ダンベイキサゴ	*Umbonium (Suchium) giganteum*
		リュウテンサザエ科	スガイ	*Lunella coronata coreensis*
	中腹足目	ウミニナ科	オオタニシ	*Cipangopaludina japonica*
			ヘナタリガイ	*Cerithideopsilla cingulata*
			カワアイガイ	*Cerithideopsilla djadjariensis*
			ウミニナ科	Potamididae gen. & sp. Indet.
		オニノツノガイ科	カニモリガイ	*Proclava kochii*
		タマガイ科	ツメタガイ	*Glassaulax didyma*
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
			イボニシ	*Thais (Reishia) clavigera*
		ムシロガイ科	アラムシロガイ	*Reticunassa festiva*
			ムシロガイ	*Niotha livescens*
		コロモガイ科	コロモガイ	*Sydaphera spengleriana*
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	*Tegillarca granosa*
			サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*
	ウグイスガイ目	ナミマガシワガイ科	ナミマガシワガイ	*Anomia chinensis*
		イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
			イタボガキ科	Ostreidae gen. & sp. indet.
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*
			バカガイ	*Mactra chinensis*
		サビシラトリガイ	サビシラトリガイ	*Macoma contabulata*
			ユウシオガイ	*Moerella rutila*
			ニッコウガイ科	Tellinidae gen. & sp. indet.
		マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
		フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	*Trapezium liratum*
		シジミ科	ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*
		マルスダレガイ科	カガミガイ	*Phacosoma japonicum*
			アサリ	*Ruditapes philippinarum*
			ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			オキシジミ	*Cyclina sinensis*
		オオノガイ科	オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
	計		19科	33種

1　出土状況

縄文時代早期

早期後葉の条痕文土器を伴う炉穴内貝層２か所である。炉穴群全体の時期が，土器から茅山式期(茅山上層式から下層式)から鵜ガ島台式期と捉えられている。

ＳＫ-062　炉穴に入った130cm×100cm，厚さ60cmほどのかなり大きな貝ブロックである。貝層下や貝層の周囲の土にも残りの悪い貝殻が入っており，掘り込みの大半を覆うように貝殻が廃棄されたものであろう。周囲の貝の少ない部分は貝殻が融解したものと考える。取り上げ後の堆積は580リットル(土嚢49袋)あり，全量が採取された。このうち任意の５袋(63.6リットル)を水洗・選別した。出土した土器は茅山上層式の土器である。

ＳＫ-097　炉穴に入った60cm×40cm，厚さ20cmほどの貝ブロックである。取り上げ後で５リットルの貝層全量を採取した。遺構には比較的多くの土器片を伴っており，茅山下層式の貝層であろう。

古墳時代後期

いずれも住居跡内のごく小さな貝ブロックである。

ＳＢ-013　径10cm～20cm，厚さ10cmほどの混貝土層ブロックを２か所検出した。住居跡覆土の２層の上部にあたり，住居がかなり埋まってから貝殻が棄てられている。

ＳＢ-051　大きさの不明なごく小さな貝ブロックである。残りの悪い貝殻片のみが取り上げられた。

中世

中世台地整形区画遺構群内の11か所で貝層を検出した。遺構群全体の時期が13～15世紀とされており，概ねこの時期の試料としてよいだろう。

ＳＤ-008　溝の覆土中層で210cm×60cm，および150cm×100cmほどの２つの貝ブロックを検出した。厚さはいずれも約20cmである。取り上げ後の体積はそれぞれ約20リットルあり，全量を採取した。貝種組成をみるとほとんど同じであり，一連の廃棄によると思われる。貝殻は，表面がそれほど劣化していないのに破砕率が高い。踏みつけられたものであろうか。貝のほかにイノシシの牙破片と獣骨の小片を検出した。遺構は中世の溝とされているが，貝サンプル中には口縁部を含む土師器数点，須恵器があり，中世のものはごく小片もみられなかった。

ＳＫ-115　地下式坑の覆土12か所に残りの悪い貝殻が点在した。サンプルはそれぞれ周囲の土ごと取り上げられたが，貝は全体でもアカニシ22点にすぎない。採取量は合計で1.8リットルである。伴出した陶磁器の時期は14世紀前半が主体である。位置はセクション図の３層と４層の上下に散らばっており，その層界と同様の傾斜をもって分布している。きわめて残りの悪いアカニシのみが検出される事例は，ほとんどの貝が腐朽してしまったなかで，堅牢で残りやすいアカニシがかろうじて遺存したと考えるのが妥当である。したがって，アカニシのみで構成される当試料は採取･廃棄された貝種構成を示すものではないと考える。

ＳＫ-175　地下式坑の竪坑部と主室に貝層が入っていた。竪坑部の貝層は径50cm，厚さ40cmほどあり，181.7リットル(土嚢40袋)すべてを採取した。水洗・選別はこのうち土嚢４袋(16.6リットル)について実施した。主室の貝層は底面の大半に薄く広がっていた。サンプル採取の記述があるが紛失した。遺構からはウマの全身骨が自然位で検出されている。常滑産の大甕も出ているが，詳細な時期は明らかでない。

ＳＫ-189　地下式坑の主室覆土２か所に貝層が入っていた。下部の貝層は竪坑の方向から主室底面に向

けて三角堆積している。底面の大半を覆う200cm×150cm，最厚部で40cmほどの貝層である。現地で503.5リットル(土嚢100袋)すべてが採取され，水洗はこのうち土嚢10袋(54.4リットル)について実施した。さらに，貝の数がきわめて多いため，選別は一部で充分と判断し，４袋分(約21.8リットル)のみを対象とした。もう一方は主室覆土中層の小ブロックであり，サンプル採取の記述があるが紛失した。遺構からはウマの頭骨が検出されている。図示した土器類のうち，カワラケは14～15世紀のものであろう。貝殻の残りはきわめて良好である。ただし，ウミニナ類のみ残りが悪く，タールの付着が著しい。イボキサゴ漁に伴って死貝が混入したことの現れであろう。

ＳＫ-208　地下式坑から0.2リットルの貝サンプルを採取した。位置や規模は不明である。種が判明したのはアカニシ１点のみである。殻軸にまで穿孔性生物の生痕が著しいので，死貝が持ち込まれたものと思われる。

ＳＫ-209　地下式坑の主室から竪坑部にかけて厚さ10cmほどの貝層を形成していた。主室底面から10cmほど上に，竪坑側から奥に向けて若干の傾斜をもって堆積している。また，竪坑覆土の最下層にも小さなブロック貝層がみられた。サンプルは１袋と９袋の２単位採取されてたが，位置が不明なので一括して扱う。全部で52.1リットルのうち，それぞれ１袋，合計２袋(6.7リットル)を水洗・選別した。残りは計量・簡易フルイがけの後，廃棄したが，安定した貝種組成を知るには分析量がやや足りなかったようである。遺構からはカワラケが出土している。なお，小型哺乳類の全身骨らしいものを検出したけれども，土壌生物の斃死体とみられるので同定を実施しなかった。

第７整形区画(SX-007)　台地整形区画の区画を形成する端部の段差に堆積した130cm×80cm，厚さ20cmほどの貝ブロックである。全量，19.6リットルを採取した。区画内で出土した土器には16～17世紀の内耳鍋１点と，14世紀のもの数点がある。ほかに，コメなど10点ほどの炭化種子を検出した。

ＳＸ-020　第４整形区画内の平坦面に堆積した100cm×50cm，厚さ10cmほどの貝ブロックである。全量37.3リットル(土嚢７袋)を採取し，そのうち5.8リットル(１袋)を水洗・選別した。残りは計量・簡易フルイがけの後，廃棄したが，安定した貝種組成を知るには分析量がやや足りなかったようである。貝層下には掘り込みを伴わず，直接時期を示す遺物も皆無であった。

ＳＸ-021　第３整形区画内の平坦面に堆積した400cm×150cm，厚さ10cmほどの貝ブロックである。全量277.3リットル(土嚢49袋)を採取し，そのうち27.5リットル(５袋)を水洗・選別した。貝層下には掘り込みを伴わず，直接時期を示す遺物も皆無であった。サンプルからはムギに似た炭化種子２点を検出した。

ＳＸ-022　第１整形区画の南側平坦面に堆積した100cm×50cm，厚さ５cmほどの貝ブロックである。全量26.2リットル(土嚢5袋)を採取し，そのうち6.3リットル(１袋)を水洗・選別した。残りは計量・簡易フルイがけの後，廃棄したが，安定した貝種組成を知るには分析量がやや足りなかったようである。貝層下には掘り込みを伴わず，直接時期を示す遺物も皆無であった。

ＳＸ-023　第１整形区画内の南側平坦面に堆積した80cm×60cm，厚さ20cmほどの貝ブロックである。全量31.1リットル(土嚢５袋)を採取し，そのうち6.7リットル(１袋)を水洗・選別した。貝層下には掘り込みを伴わず，直接時期を示す遺物も皆無であった。

２　貝種組成

全体で19科33種を検出した。古墳時代，中世の貝層ではイボキサゴ・ハマグリ・シオフキガイ・アサリに代表される内湾砂底種がほとんどであるのに対して，縄文早期の貝層では，湾奥泥底のハイガイ・マガ

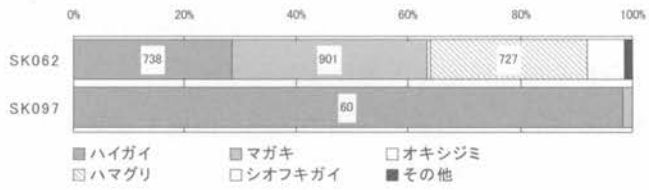
第16表　貝類同定結果

	縄文早期		古墳後期	中世										
種名	SK062	SK097	SB013	SD008-1	SD008-2	SK115	SK175	SK189	SK209	SX007	SX020	SX021	SX022	SX023
ツボミガイ					2									
イボキサゴ				1327	1677		212	13127	119	1080	25	2864	177	1364
ダンベイキサゴ							1							
スガイ				1										
オオタニシ							12					5		
ウミニナ科	17			5	17		8	89	2	9		11	1	10
ツメタガイ	6				2					0				
アカニシ	1			6	0	22			2			0		
アラムシロガイ				5	9		8	139		13		38		33
ハイガイ	738	60												
サルボウガイ				3	1		3			3				
マガキ	647	1		15	63		2	1						
イタボガキ科幼貝	254			11			2	5						
シオフキガイ	166		13	194	285		316	92	91	387	37	396	28	196
バカガイ					0		7				0	1		
マテガイ	6		3	2	21						11	0		0
ユウシオガイ								6						
カガミガイ	1	0		1	0				4	2	104	11	1	
アサリ	9		2	150	173		72	106	1	351	2	99	4	17
ハマグリ	727		4	1156	1284		514	9	9	475	0	136	13	20
オキシジミ	13													
合　計	2585	61	22	2876	3534	22	1157	13574	228	2320	179	3561	224	1640

このほかに，古墳時代後期のSB051でハマグリ片，中世のSK208でアカニシ1点が検出されている。

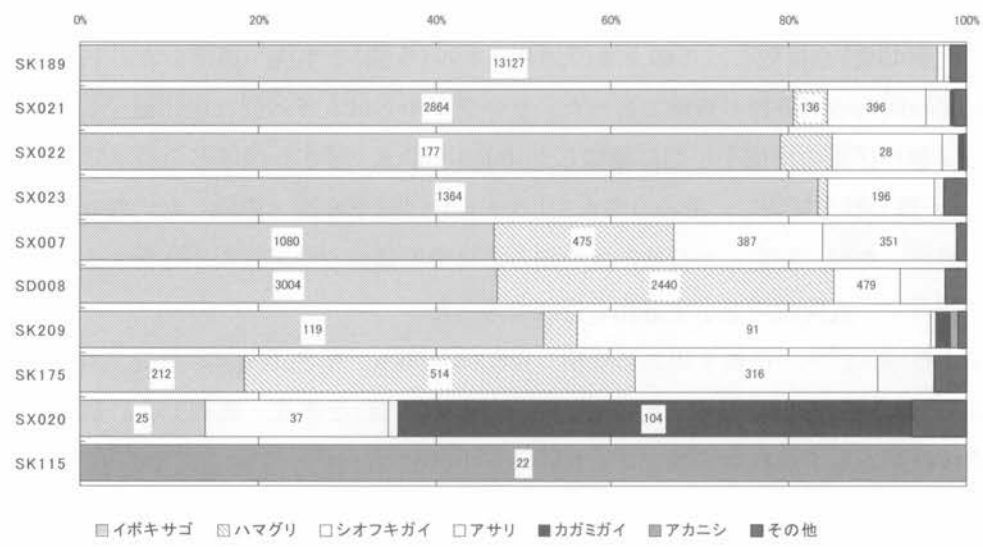
縄文早期

種名	SK062	SK097
ハイガイ	738	60
マガキ	901	1
オキシジミ	13	
ハマグリ	727	
シオフキガイ	166	
その他	40	
合　計	2585	61



中世

種名	SK189	SX021	SX022	SX023	SX007	SD008	SK209	SK175	SX020	SK115
イボキサゴ	13127	2864	177	1364	1080	3004	119	212	25	
ハマグリ	9	136	13	20	475	2440	9	514	0	
シオフキガイ	92	396	28	196	387	479	91	316	37	
アサリ	106	99	4	17	351	323	1	72	2	
カガミガイ		11	1		2	1	4		104	
アカニシ		0				6	2			22
その他	240	55	1	43	25	149	2	43	11	0
合　計	13574	3561	224	1640	2320	6402	228	1157	179	22



第155図　貝種組成

キが主体で内湾砂底種が混じる。

縄文早期では，SK-062でマガキ・ハイガイ・ハマグリの３種にシオフキガイが若干混じる。また，大きめのフジツボ類が多い(附図版)。SK-097はハイガイがほとんどで，マガキが若干混じる。

中世では，ほとんどのサンプルでイボキサゴ・ハマグリ・シオフキガイ・アサリの4種が優先種となっている。この傾向は，当地域の縄文時代から近世までの貝層に共通した傾向である。イボキサゴと二枚貝３種がだいたい拮抗しており，縄文期ほど圧倒的なイボキサゴの優先はみられない。とはいえ，中世においてもイボキサゴは活発に採取されている。二枚貝のなかでの構成はサンプルによって差が大きい。全体的にみるとハマグリとシオフキガイが同じくらい採取されたようである。

一方，SX-020ではカガミガイが最も多く，マテガイもややまとまっていて，以上のサンプルとは異なっている。マテガイはどの時代にあっても時折まとめて採取されている。これに対し，カガミガイが積極的に採取されている事例は，当地域では稀であり，現在でも不味とされて市場で見かけない貝である。おそらく当地では長い間にわたって価値が低かったものとみられる。

主要種以外で注意したいものには，SK-175とSX-021で検出した淡水種のオオタニシ，SK-175で検出した外洋種のダンベイキサゴがある。ウミニナ類については，イボキサゴの多いサンプルに小形貝が少数混じる例が多く，ほとんどがイボキサゴ漁での混獲により偶然持ち込まれたものとみられる。SK-175に(計測できないが)やや大きめの個体が混じるのは気になるが，ウミニナ類の食習慣があった可能性は低いといえるだろう。縄文早期のSK-062にはイボキサゴが伴わない。しかし，ウミニナ類はすべて小さく，タールの付着が著しいので，やはり混獲された可能性が高い。縄文早期のハイガイ漁で，かご等の道具が用いられた可能性を考慮する必要がある。

3　貝殻のサイズ

イボキサゴ　古代以降に，縄文時代に比べて大きなイボキサゴが採取されていることは知られているが，具体的に比較できるデータは蓄積されていない。今回示した中世のデータのうち，平均で15mm以下の試料は古代以降としてはやや小さ目である。これに対して，SD-008の平均16.4mm，17.3mmはかなり大きいが，貝層の時期が古代の可能性もあるので注意を要する。

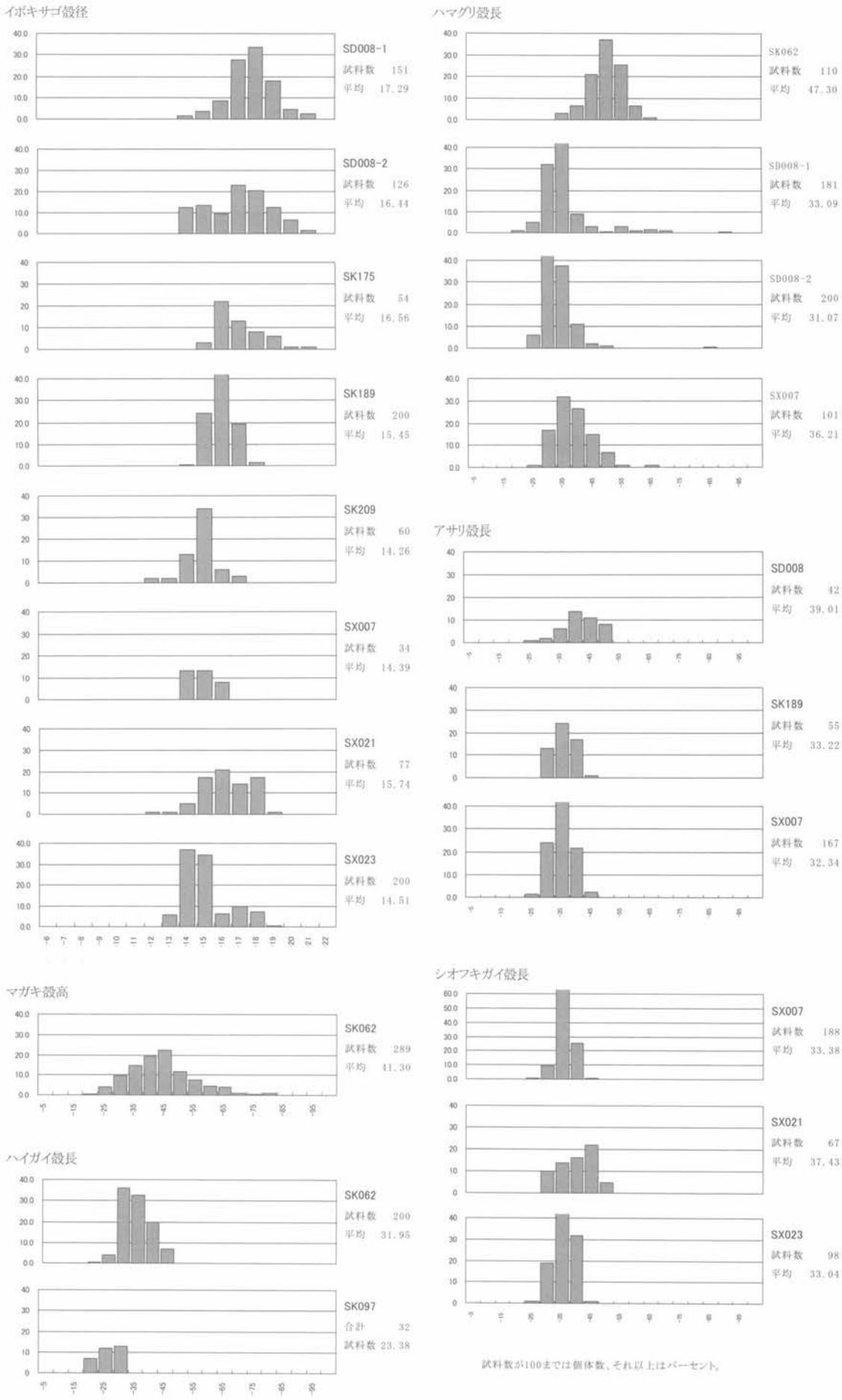
マガキ　マガキは成長が早いため他の二枚貝と同じ階級幅でグラフ化するとばらつきが大きくなる。しかし，SK-062のグラフは35mm～45mmを中心とした比較的ひずみが少なく滑らかなカーブを示した。

ハイガイ　２つのサンプルでサイズの違いが著しい。SK-062は25mm～40mmの比較的大きな個体が多いのに対して，SK-097は，ハイガイ主体の貝層であるにも関わらず，15mm～30mmの小形貝ばかりである。

ハマグリ　縄文早期のSK-062では40mm～60mmの比較的大きな個体を採取している。40mm以下は少なく，大き目のものを選んで採取したらしい。これに対して，SD-008とSX-007では40mm以下が中心である。成長速度にもよるが，SD-008では産卵前の個体をも採取した可能性が高い。古代以降の貝層ではずっと大きなハマグリに偏る例が多く，10cm近いものもそれほど珍しくないことを考えると，今回の中世の例はやや小さ目といえよう。

アサリ　30mm～40mmが主体である。当地域の古代の貝層では40mm～60mmが主体の例も多いので，これに比べるとやや小さ目の印象がある。

シオフキガイ　やはり30mm～40mmが主体である。当地域の古代の貝層では40mm～60mmが主体の例も多いので，これに比べるとやや小さ目の印象がある。



第156図　貝類計測値分布

4　中世の貝類採取と資源について

イボキサゴとハマグリは東京湾岸にある縄文時代の貝塚の二大構成種である。しかし，現在の東京湾ではきわめて稀な存在となってしまった。いつ頃からイボキサゴとハマグリが減り，アサリとバカガイが増えたのかは，東京湾の貝類相と貝類採取の変遷史上，きわめて興味深い問題である。明治30年ごろの産額をみると，このころにはすでにバカガイがハマグリの10倍近くになっている(西野2000)。一方，千葉東南部ニュータウン内各遺跡の貝サンプルをみると，古代の貝層ではハマグリがシオフキガイと同じ程度に多く，バカガイが多い事例はみられない。これに対して，近世では有吉城跡SE01(井戸)でバカガイがまとまって採取された例がみられた(西野2002)。集落に持ち込まれたなかにバカガイが少ないからといって，資源が少なかったとはいえないのであるが，ハマグリが少なくなったのは，資源が減り，採れなくなったことによる可能性は高い。今回提示した中世のデータは，これまでに比較的多くのデータが知られている古代以前と，近代以降の生態調査のデータをつなぐ貴重なものとなるであろう。

5　SK-062のマガキについて

マガキの左殻のうち，殻頂部付近が残る個体を観察したところ，以下のようであった。

観察結果

A:付着痕なし，またはマガキ同士で付着	200	69.2%
B:付着痕あり，対象不明	36	12.5%
C:二枚貝に付着	15	5.2%
D:棒状のものに付着	30	10.4%
E:巻貝に付着	7	2.4%
F:フジツボに付着	1	0.3%
試料数	289	100.0%

第17表　付着痕分類別のSK-062マガキ殻長

殻長mm	A	B	C	D	E	F
-20.0	1		1			
-25.0	10			1		
-30.0	23	2	1		2	
-35.0	33	6	2	1		
-40.0	34	11	3	5	2	
-45.0	41	7	3	11	1	1
-50.0	25	4	2	3		
-55.0	14	2	2	3	1	
-60.0	7	1	1	3	1	
-65.0	8			3		
-70.0	1	2				
-75.0		1				
-80.0	3					
試料数	200	36	15	30	7	1
平均	40.47	42.52	41.13	45.61	39.99	44.12
標準偏差	11.14	10.47	9.69	9.18	10.71	—

Aのうち付着痕のないものについても，マガキ同士で付着してカキ礁を形成していたものと推定できる。当地域には多数の貝塚が知られているにも関わらず，このような例は少ない。この付近の谷は谷奥までの距離が短く，谷底の傾斜が強い(松島1982)ため，カキ礁は早期後葉に一時的に形成された後，短い期間で失われた可能性が高い。数少ない事例には，東南部ニュータウン内の小金沢古墳群011号炉穴(未報告)がある。ここではカキ礁を形成していたとみられるもの(分類A)に，わずかだが8cm～11cmの大型貝が含まれており，平均のサイズも本例よりやや大きい。ほかの貝や棒状のおそらく植物に付着して育った個体は，成長がせいぜい6cm～7cm止まりであり，両遺跡に共通する。サンプル間のカキ礁を形成した個体の割合や，サイズ分布の差はカキ礁の発達の度合いを知る手がかりとなるであろう。

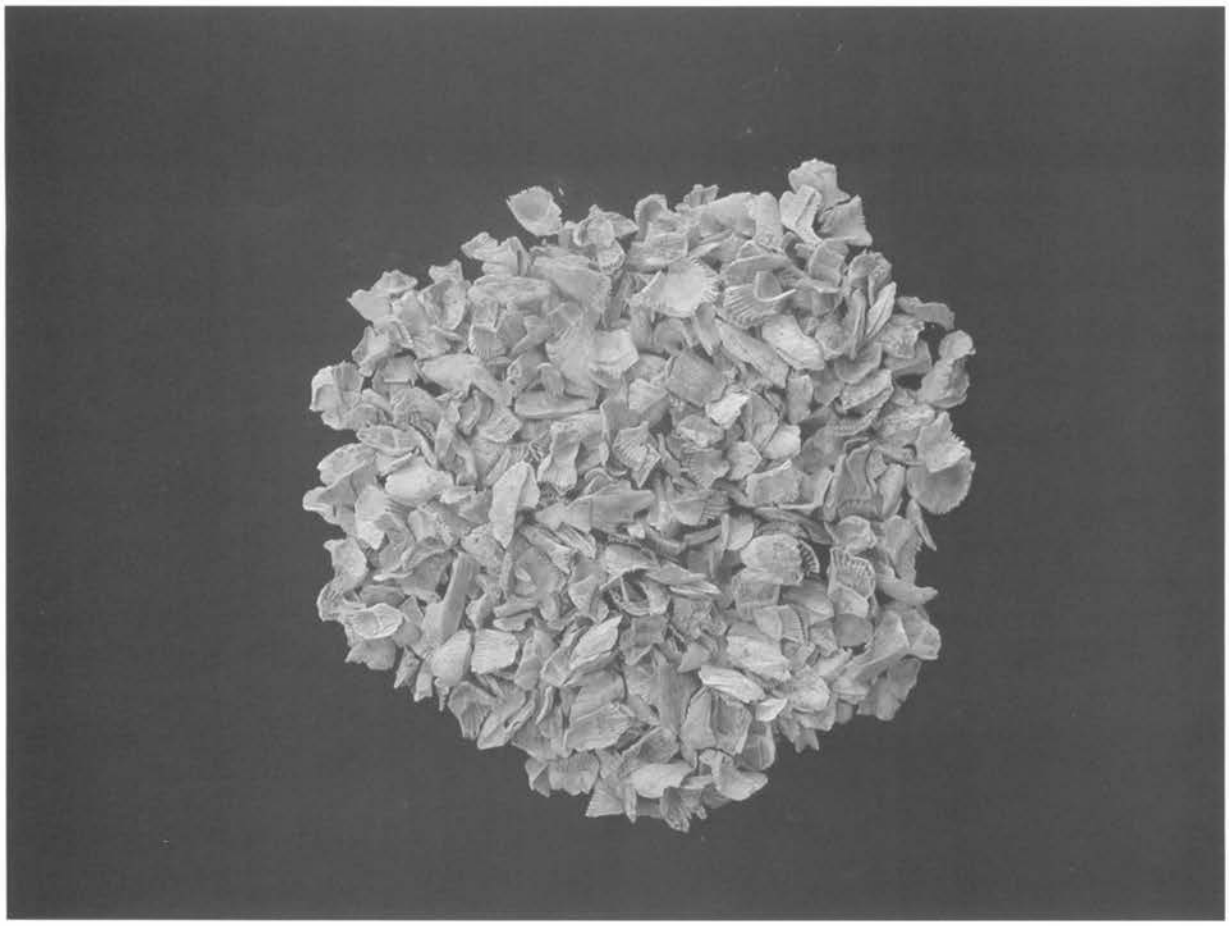
6　SK-062のフジツボ類について

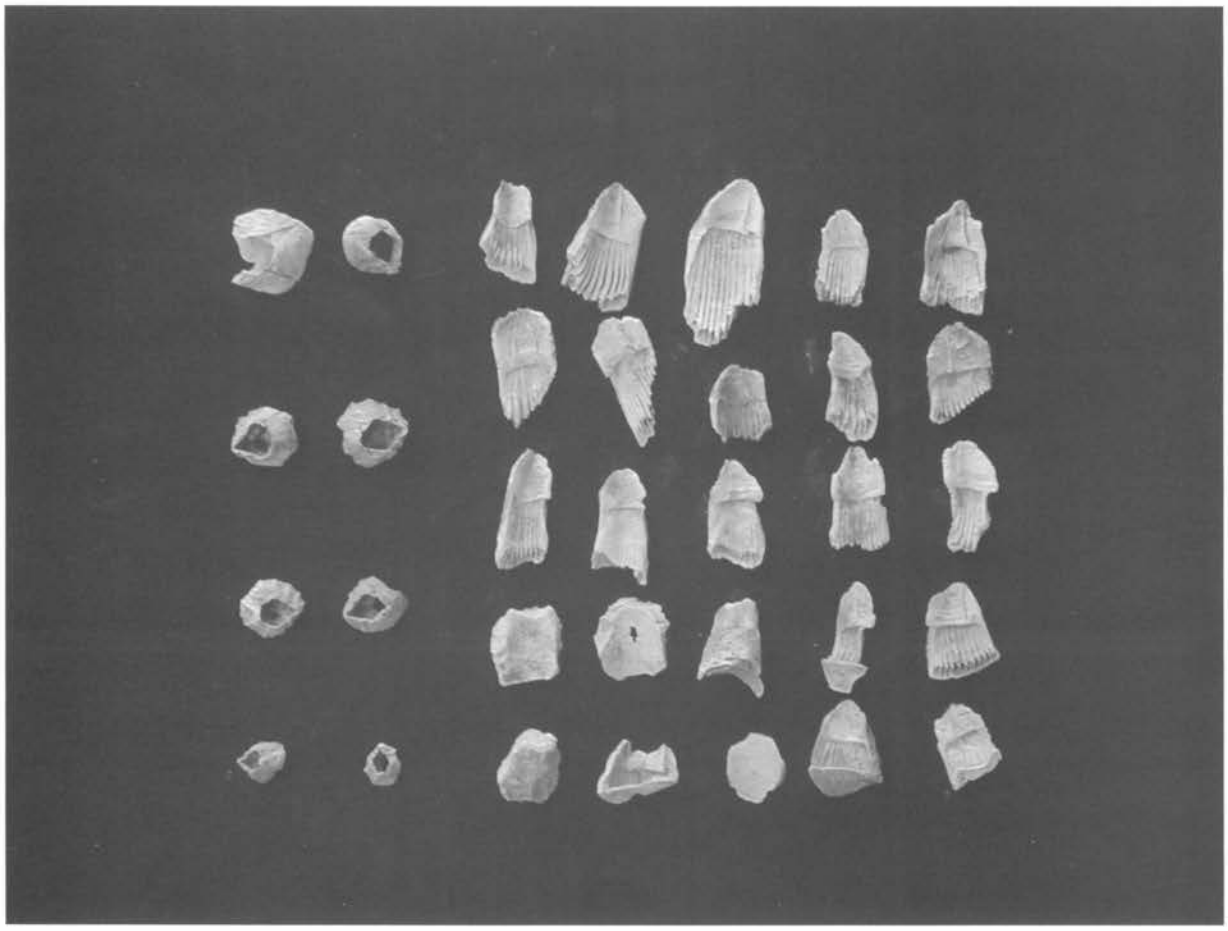
大小2種類計72gあり(附図版)，大形種の多くは棒状付着痕をもつ。フジツボの食習慣が縄文早期に遡る可能性を示す貴重な例である。

文献

西野雅人2000「明治期に記録された東京湾の魚貝類相－農商務省水産局『東京湾漁場報告』から－」『動物考古学』14

西野雅人2002「動物遺存体」『千葉東南部ニュータウン25－千葉市有吉城跡1』(財)千葉県文化財センター





ＳＫ－062出土フジツボ類

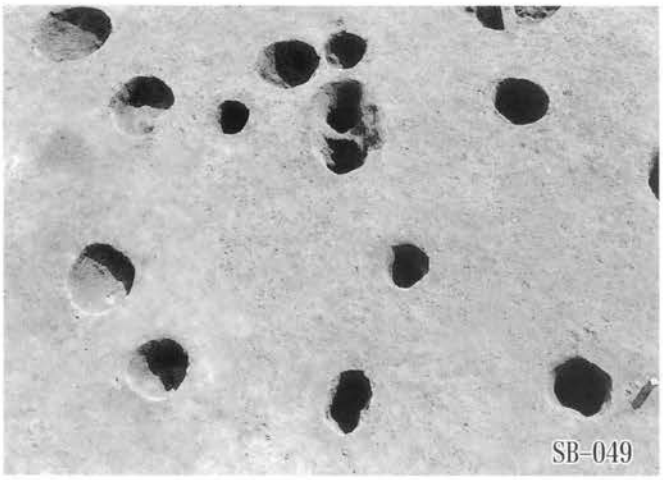
写 真 図 版

図版1

遺跡周辺航空写真

図版 2

遺跡全景（東から・平成6年度）


SB-049

SK-023

SK-027

SK-028・029

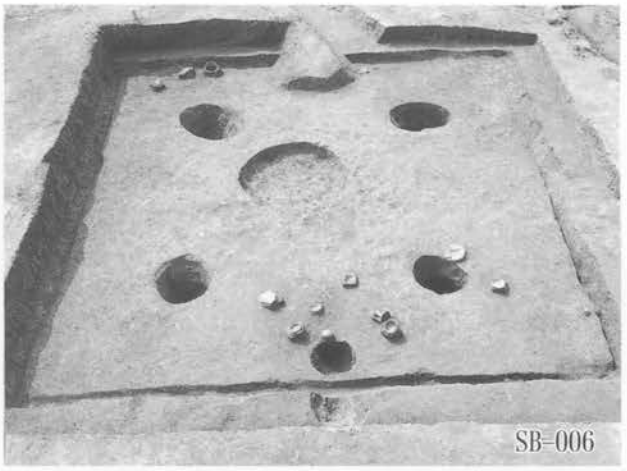
SK-030

SK-040

SK-041

SK-062・063

図版 4



SB-018

SB-021

SB-022

SB-024

SB-025

SB-027

SB-029

SB-029

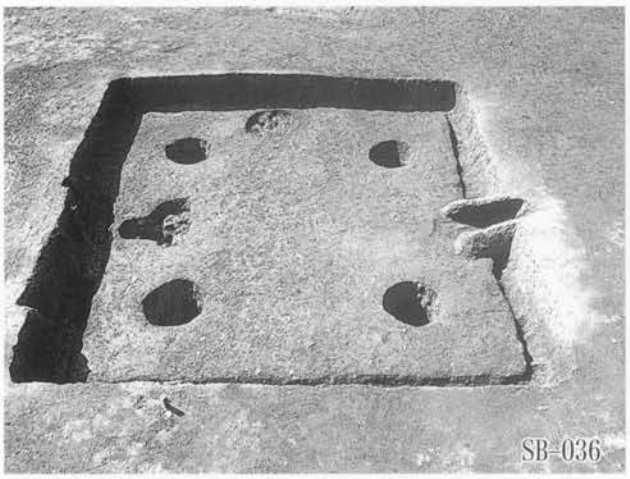
図版 6

SB-030

SB-032

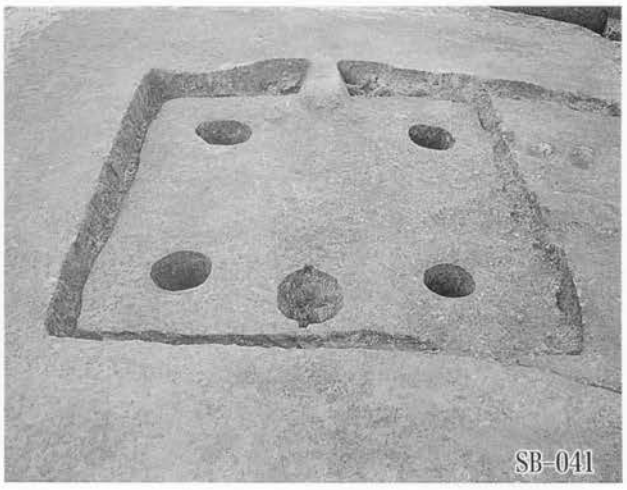
SB-034

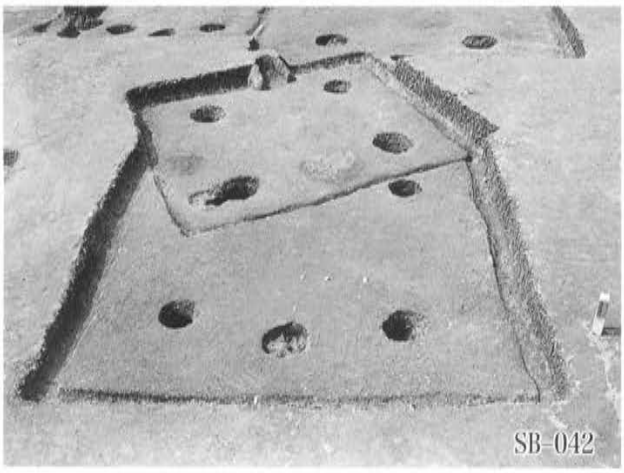
SB-035

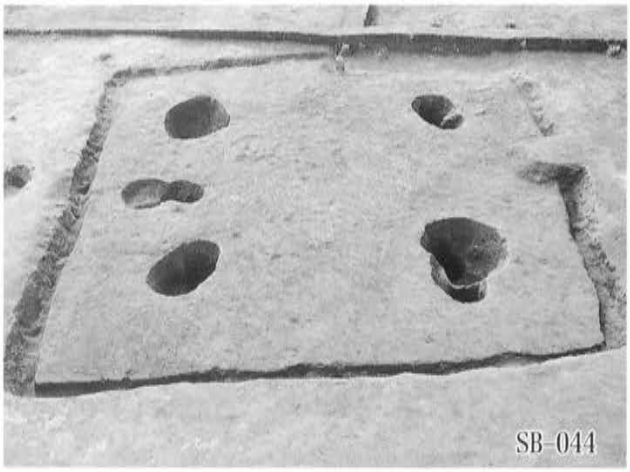

SB-036

SB-037

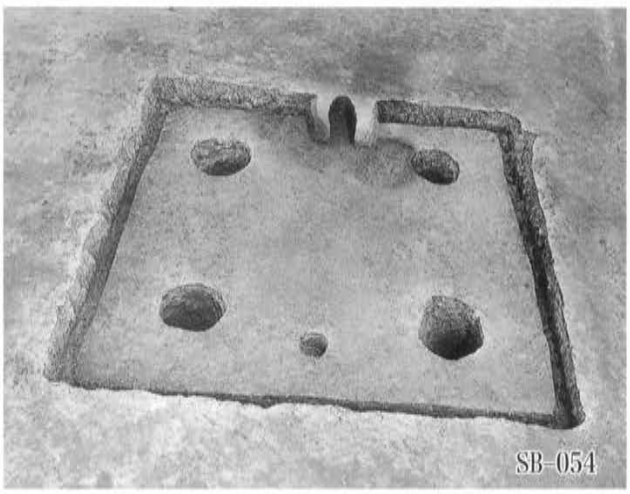
SB-039


SB-041


SB-042


SB-044

SB-052


SB-054

SB-055

SB-056

SB-058

SB-061

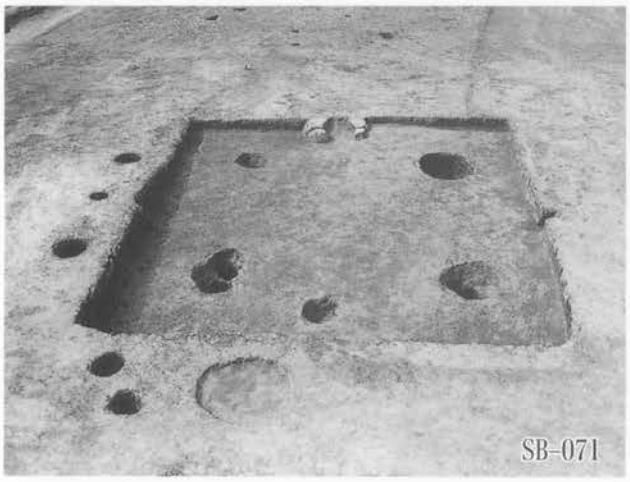
図版 8

SB-064

SB-064・065・066

SB-067

SB-068


SB-071

SB-075

SB-002

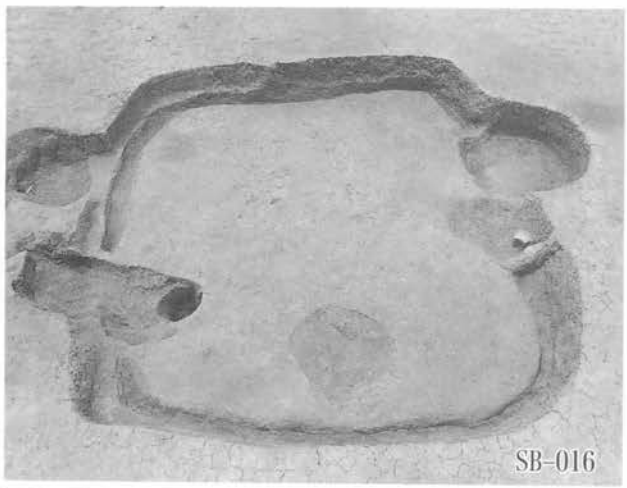
SB-004

SB-005

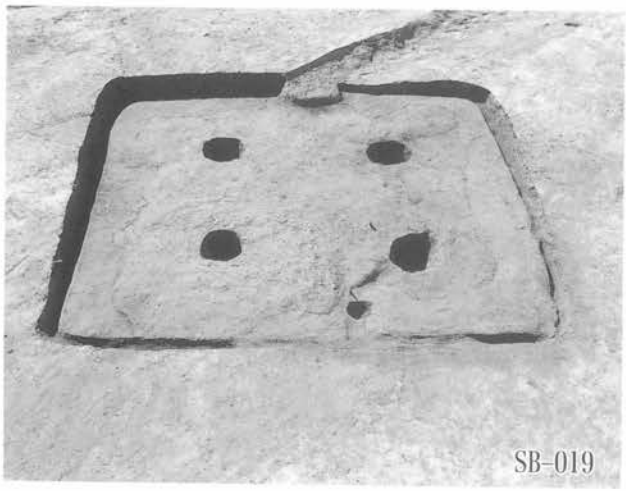
SB-007・008

SB-010

SB-011


SB-016

SB-017

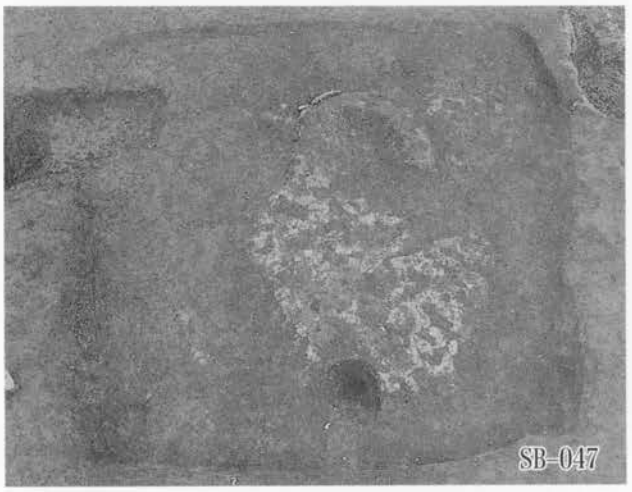

SB-019

SB-020

図版10

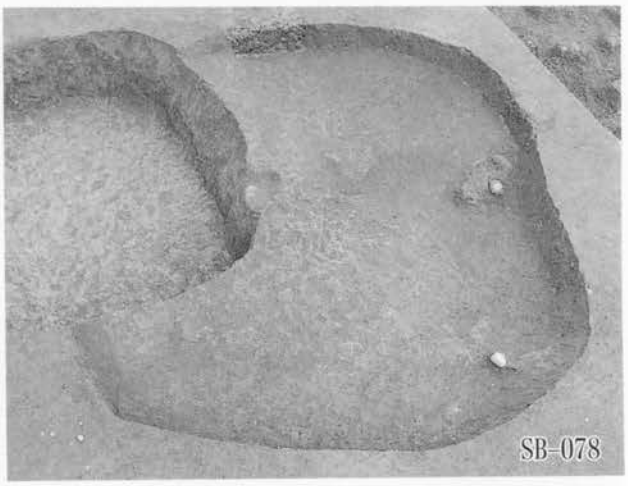
SB-026

SB-046


SB-047

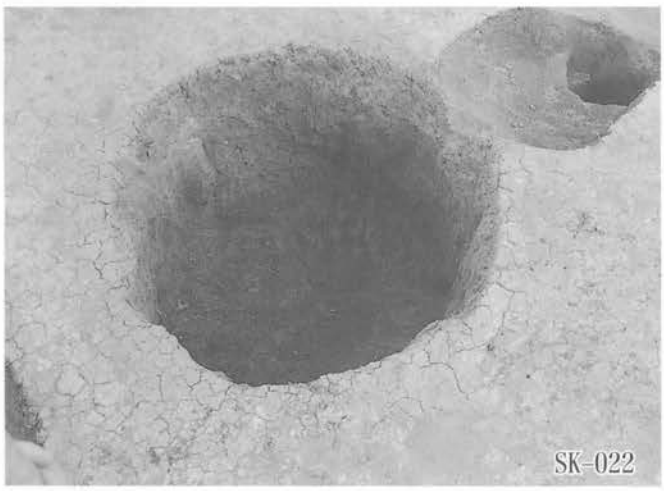
SB-073
SK-212

SB-077


SB-078

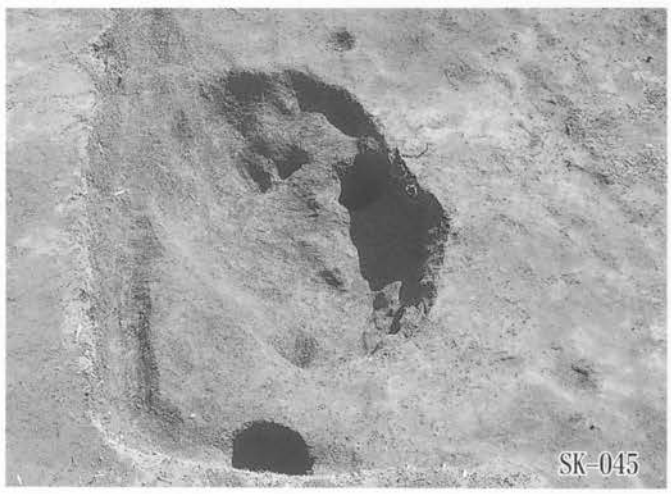
SB-053

SB-074


SK-022

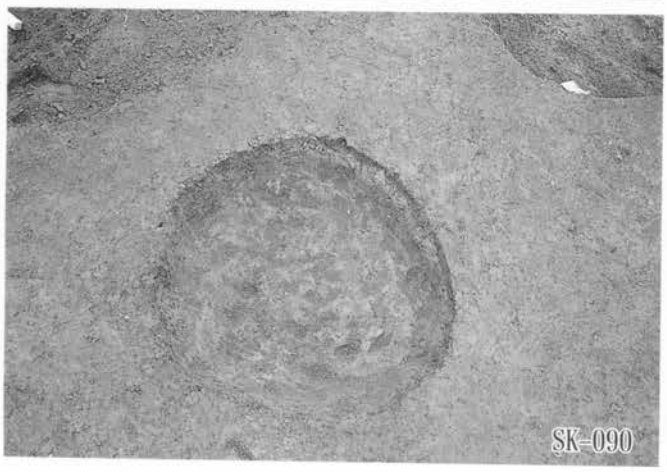
SK-037

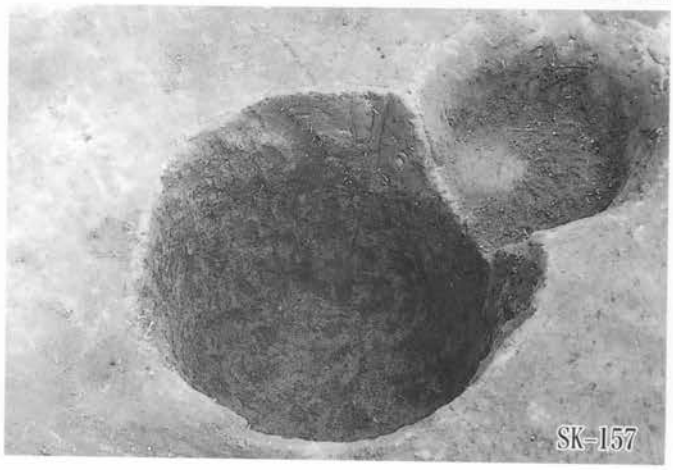
SK-039


SK-045

SK-051・052

SK-079

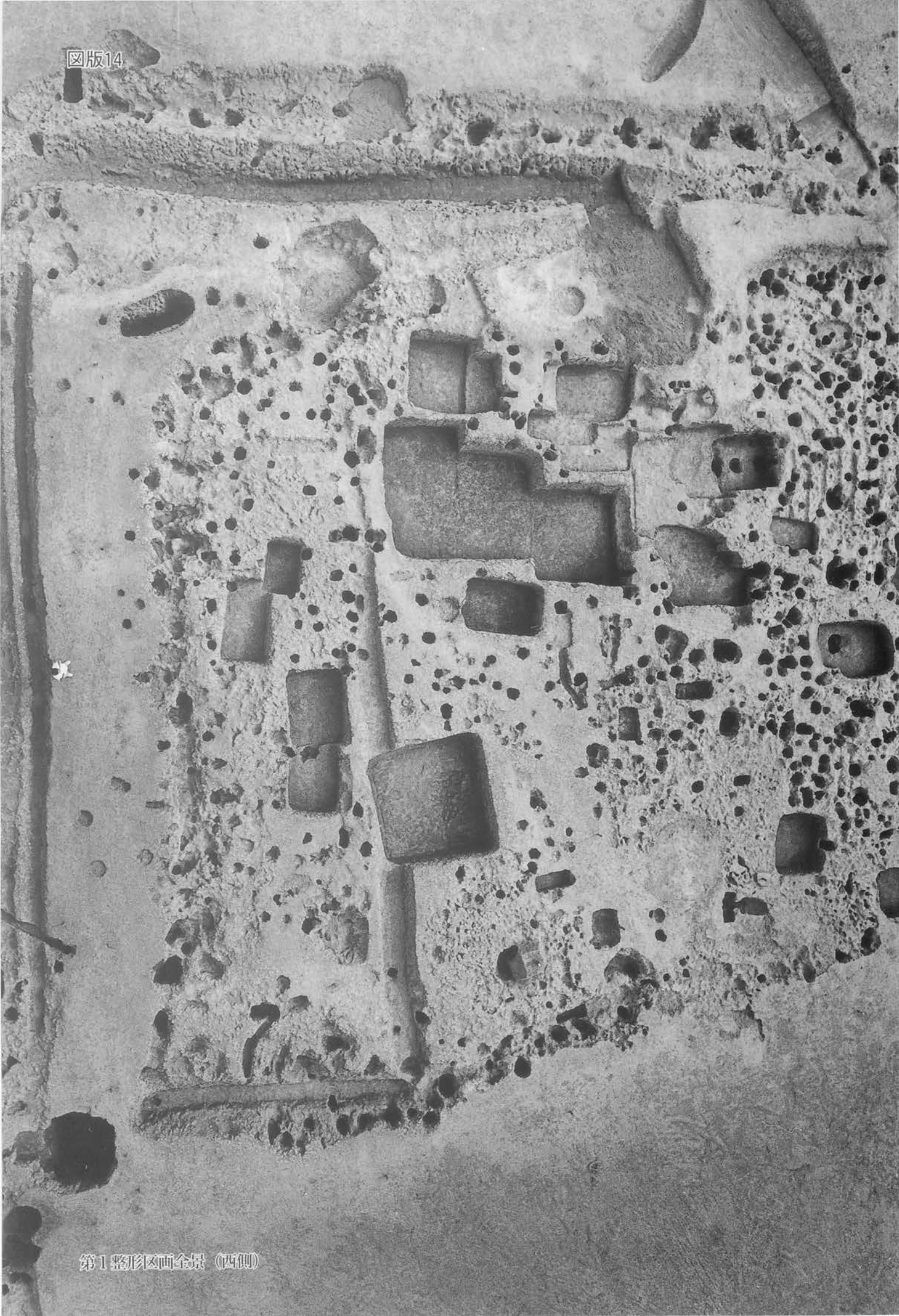

SK-090


SK-157

図版12

中世・合地整形区画航空写真

第3整形図面全景



第1整形区画全景（西側）

第1整形区画全景（東側）

第２整形区画全景

遺跡北西部（南東から）

遺跡北西部（北から）

SD-001・003全景

SD-001土層断面

第5整形区画（南東から）

第6整形区画（南から）

第７整形区画（東から）

第７整形区画（南から）

SB-063

SB-063

SB-072

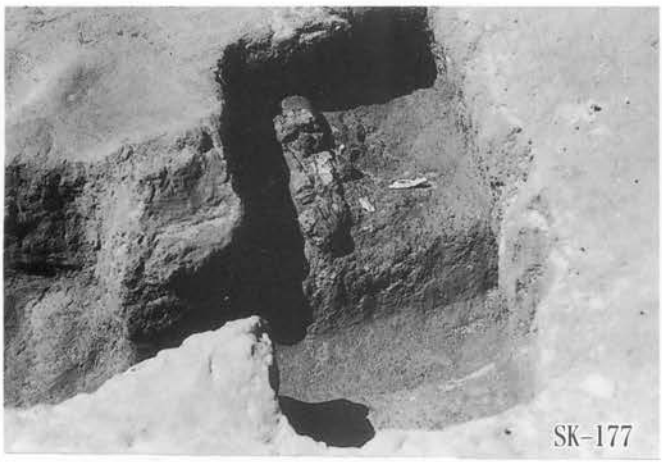
SK-115

SK-175

SK-175

SK-175

SK-175


SK-177

SK-191

SK-191

SK-194

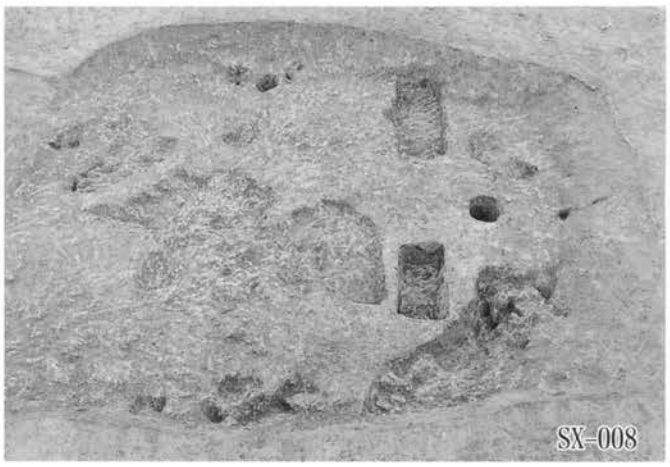
SK-189

SK-209

SK-209

SK-208

SX-005


SX-008

SK-001

SK-001

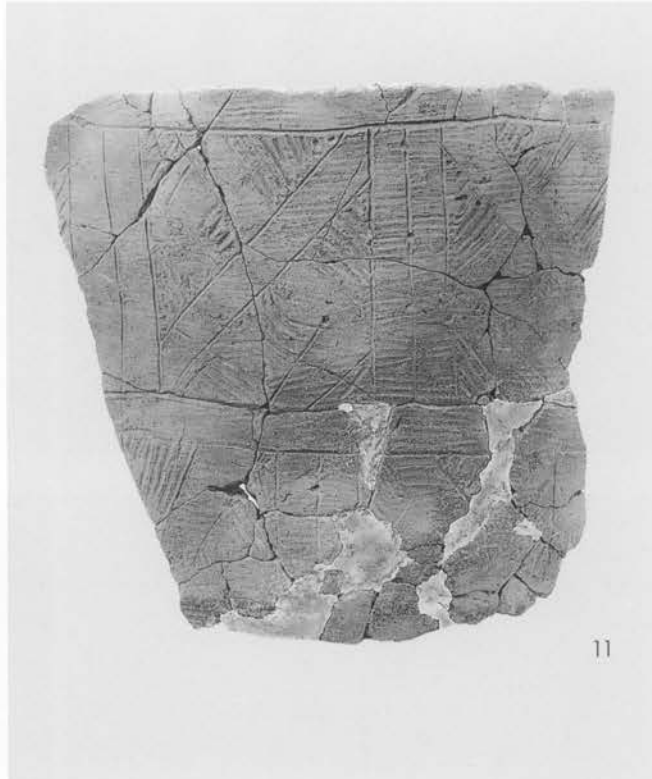
SK-001

SK-011

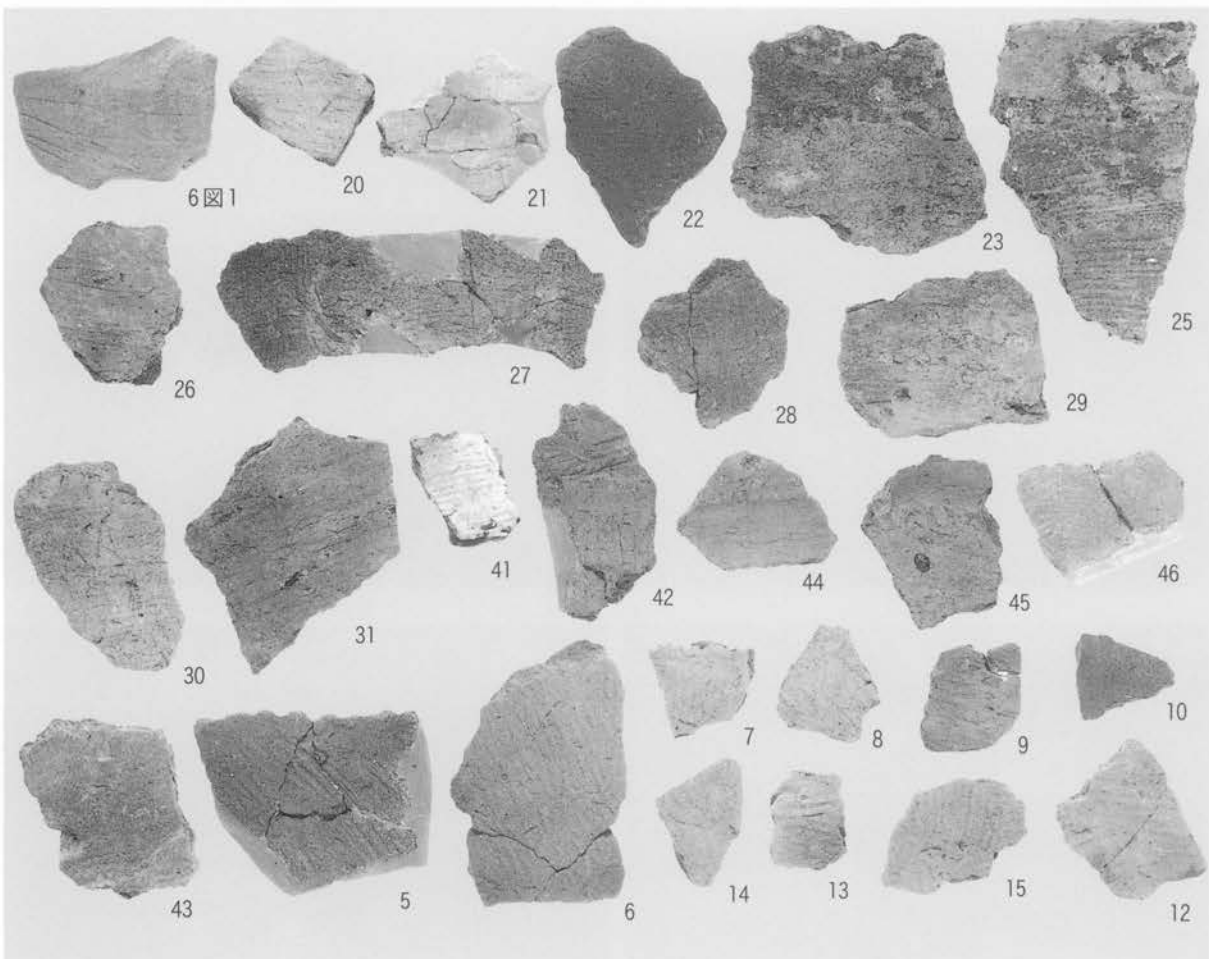
SK-010

SK-010

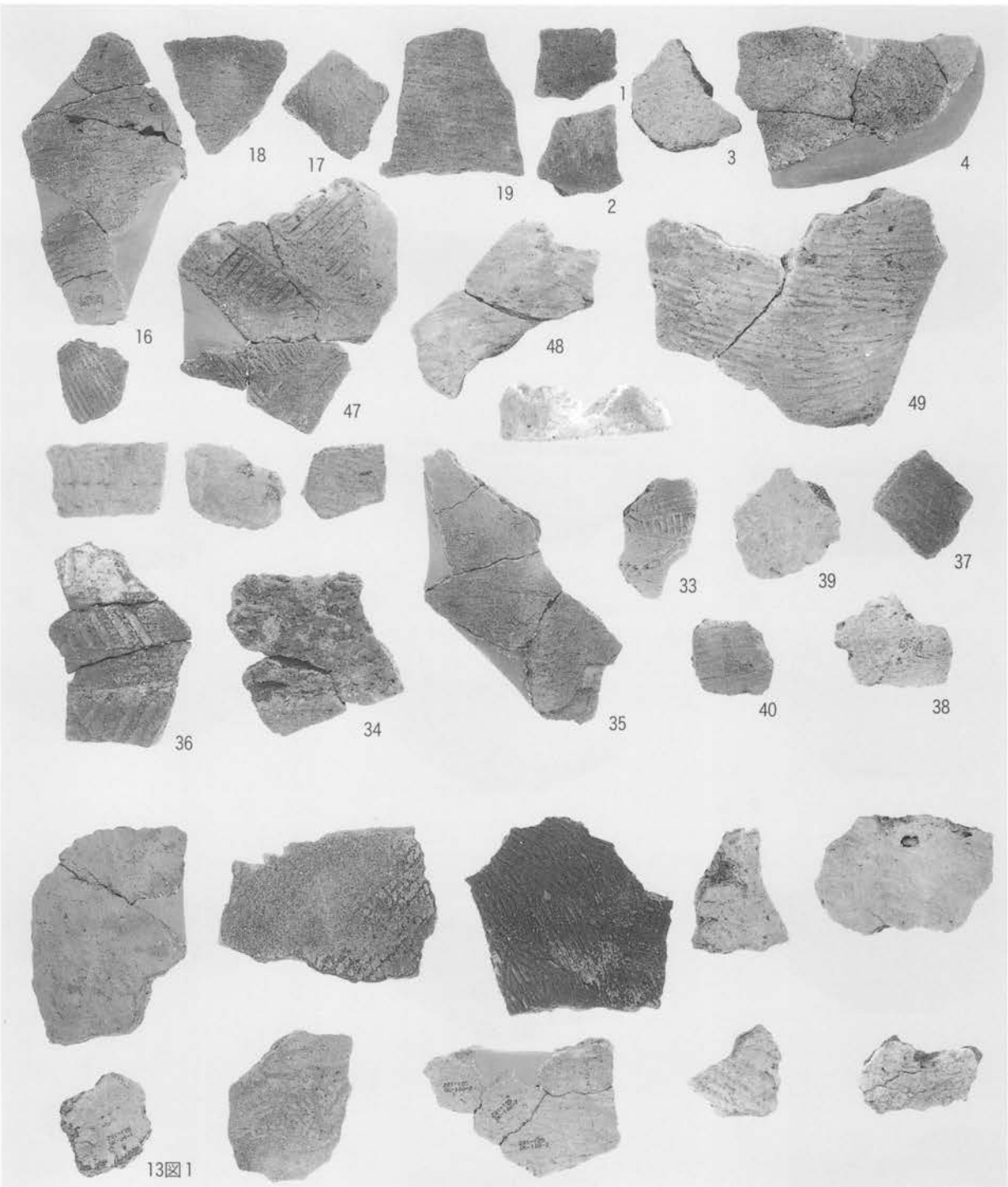
32


11

24


6図1
20
21
22
23
25
26
27
28
29
30
31
41
42
44
45
46
43
5
6
7
8
9
10
14
13
15
12

縄文土器（1）



縄文土器（2）

6-1

6-2

6-3

6-4

6-5

6-6

6-7

6-8

6-9

6-10

6-11

6-13

6-14

6-15

6-16

6-17

6-20

9-4

12-1

12-2

12-5

古墳時代出土土器（1）

12-8

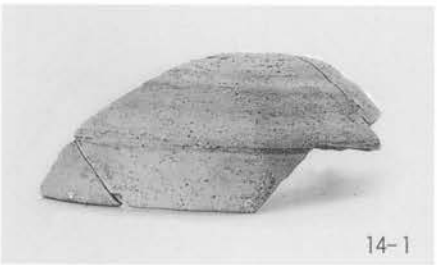
12-10

13-2

13-3

13-4

13-5


14-1

18-1

14-5

14-8

18-3

18-2

18-4

18-5

18-6

古墳時代出土土器（2）

21-1

21-3

21-4

21-5

21-6

21-10

22-1

22-2

23-7

23-8

23-9

23-10

24-1

24-2

24-3

24-5

24-6

24-12

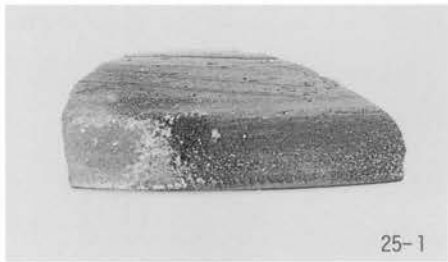
24-7

24-10

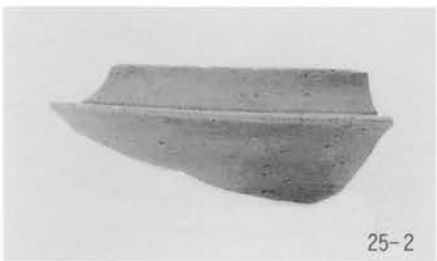
古墳時代出土土器（3）

24-13

24-15


25-1

25-6


25-2

25-4

25-13

25-11

25-12

25-20

25-15

25-16

25-24

25-22

25-23

27-1

25-25

25-26

27-3

古墳時代出土土器（4）

27-8

27-9

29-14

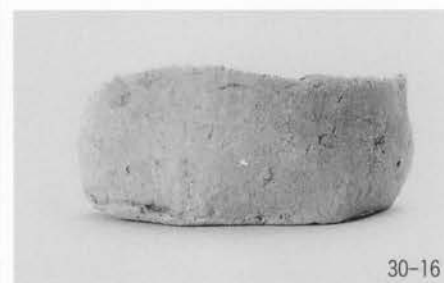
29-15

29-16

30-1

30-9

30-6


30-16

30-10

30-7

31-2

30-11

31-6

31-4

31-5

31-14

31-8

31-11

31-17

古墳時代出土土器（5）

31-21

32-4

33-2

33-8

33-12

33-17

32-1

32-7

33-4

33-9

33-13

33-18

33-21

32-2

33-1

33-5

33-11

33-16

33-19

33-23

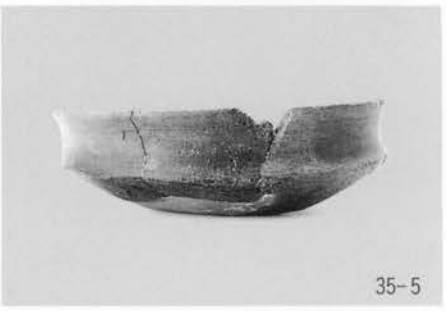
古墳時代出土土器（6）

33-20

35-1

35-2

35-4


35-5

35-3

35-7

35-9

35-6

35-12

35-13

35-10

35-16

35-17

35-15

36-1

古墳時代出土土器（7）

36-2

36-9

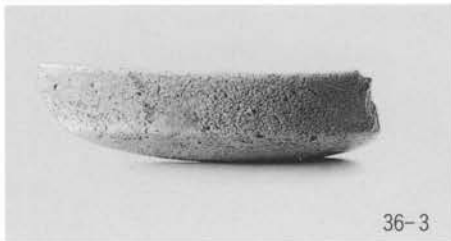
37-3

37-6

37-9

37-12

37-17


36-3

37-1

37-4

37-7

37-10

37-13

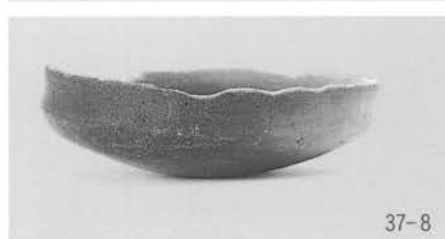
37-19

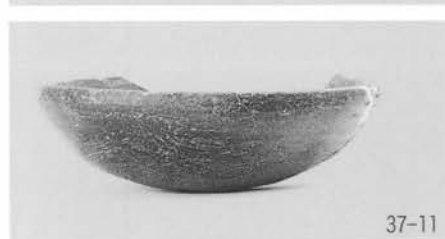
37-20

36-7

37-2

37-5


37-8


37-11

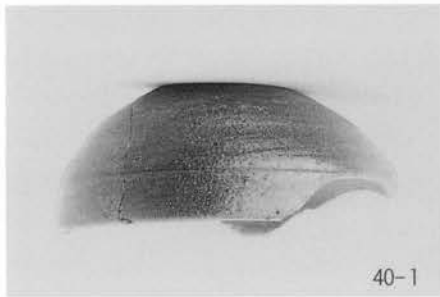
37-15

37-22

古墳時代出土土器（8）

37-24

38-5

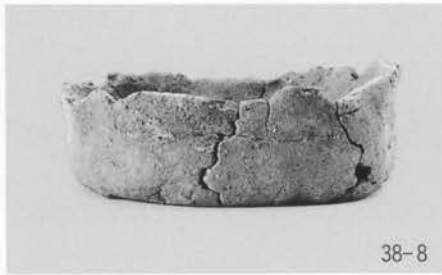

40-1

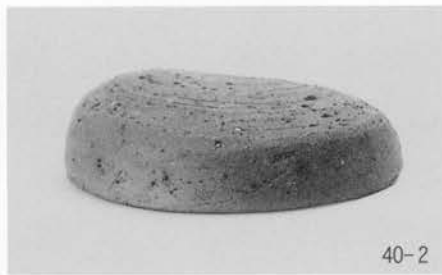
40-6

40-11

40-15

37-26


38-8

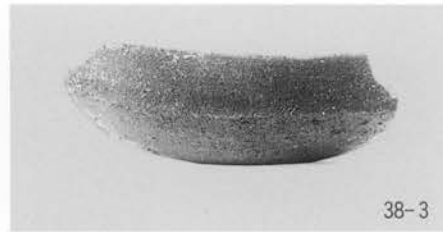

40-2

40-8

40-12

40-17

41-1


38-3

39-1

40-4

40-10

40-13

40-18

41-3

古墳時代出土土器（9）

41-4

41-5

41-7

41-11

41-10

41-9

42-1

42-2

42-3

42-5

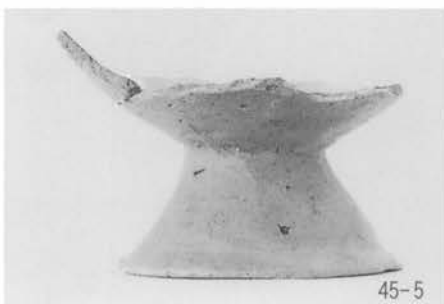
44-2

44-3

45-1

45-2

45-3


45-5

古墳時代出土土器（10）

45-7

45-8

48-1

48-2

48-4

48-6

48-7

48-8

48-9

48-11

48-12

48-13

48-14

48-17

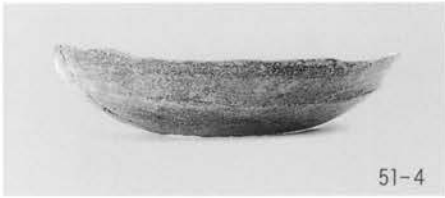
48-18

48-15

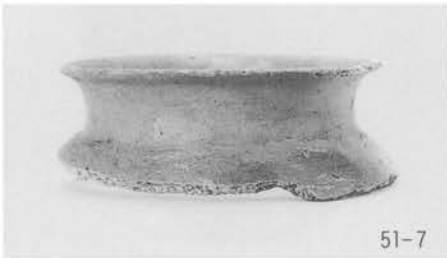
古墳時代出土土器（11）

51-1

51-3


51-4

51-6


51-7

54-4

55-1

56-1

56-2

56-4

56-3

56-7

56-5

56-6

56-16

56-13

56-15

56-23

56-17

古墳時代出土土器（12）

56-18

58-3

58-7

59-2

61-1

61-5

61-9

56-24

58-4

58-8

59-3

61-3

61-6

57-1

57-2

58-6

59-1

59-7

61-4

61-7

61-10

62-4

67-1

67-7

67-10

67-15

67-18

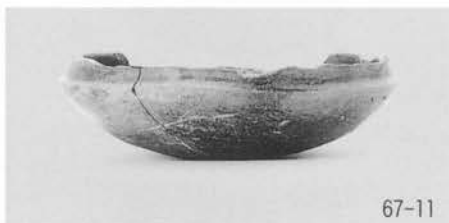
62-1

65-1

66-2

67-2

67-8


67-11

67-16

67-20

62-3

65-4

67-6

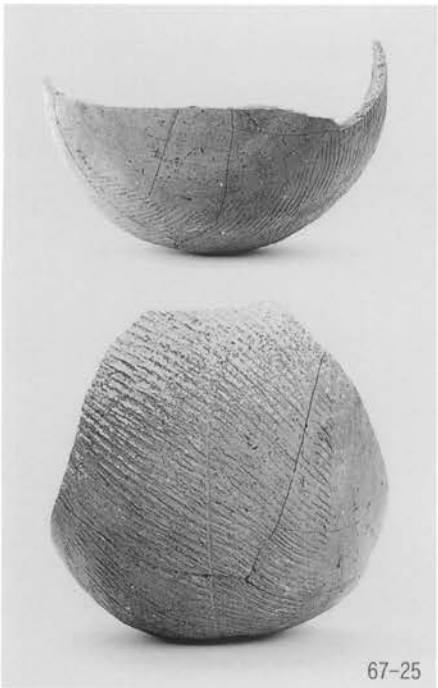
67-9

67-12

67-17

67-21

古墳時代出土土器（14）


67-25

67-27

67-29

67-30

67-31

67-32

71-1

71-2

71-3

71-7

71-4

71-6

75-4

78図5

78図6

78図10

古墳時代出土土器（15）

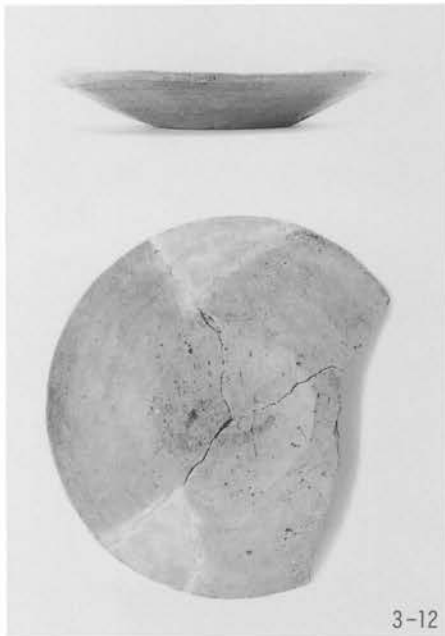
2-1

2-2

2-3

2-4

2-6


3-12

3-13

5-8

7-1

7-3

7-4

8-7

8-10

10-1

10-2

11-14

11-8

11-9

16-1

奈良・平安時代出土土器（1）

16-5

16-6

17-9

19-1

19-2

19-3

20-6

20-9

26-3

26-9

47-1

47-2

73-5

73-6

77-2

77-3

77-6

78-11

78-12

奈良・平安時代出土土器（2）

12

32

33

34

37

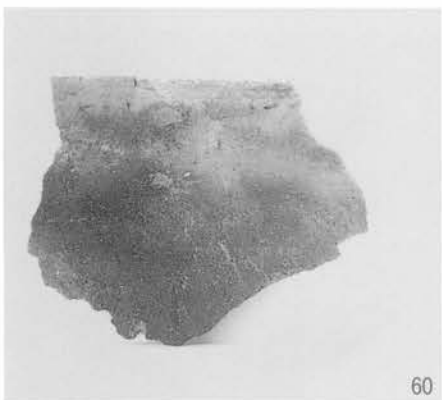
38

41

45

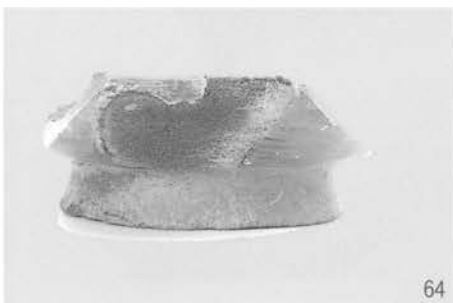
51

58


60

68

69

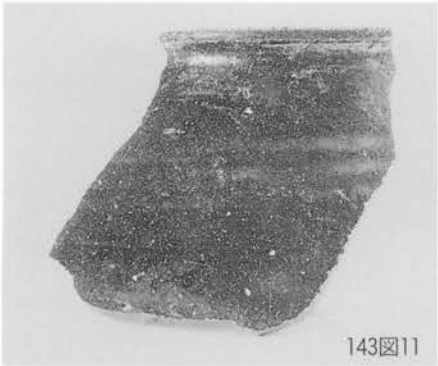

64

72

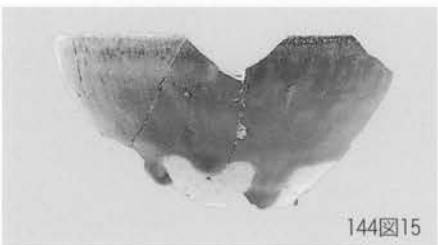
70

71

奈良・平安時代出土土器（3），平安時代土坑

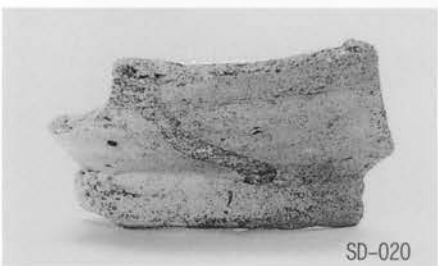

143図11

144図14


144図15

144図16

144図32


SD-020

145図48

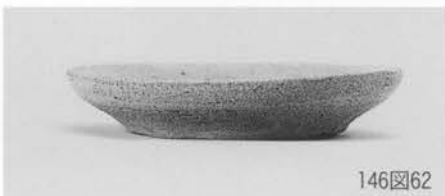
144図17

144図34

144図22

145図40

145図37


146図62

146図63

146図64

146図67

146図71

146図72

146図73

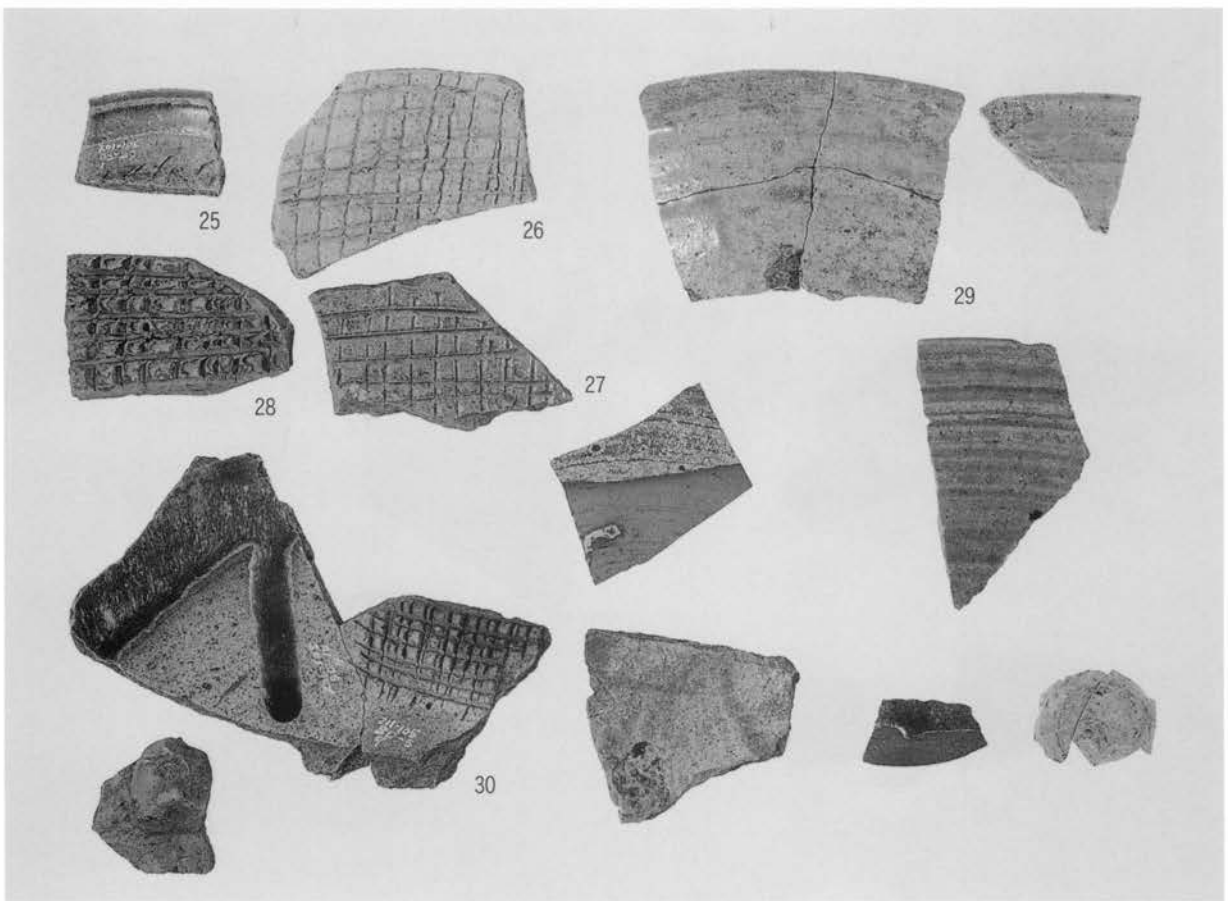
146図74

146図77

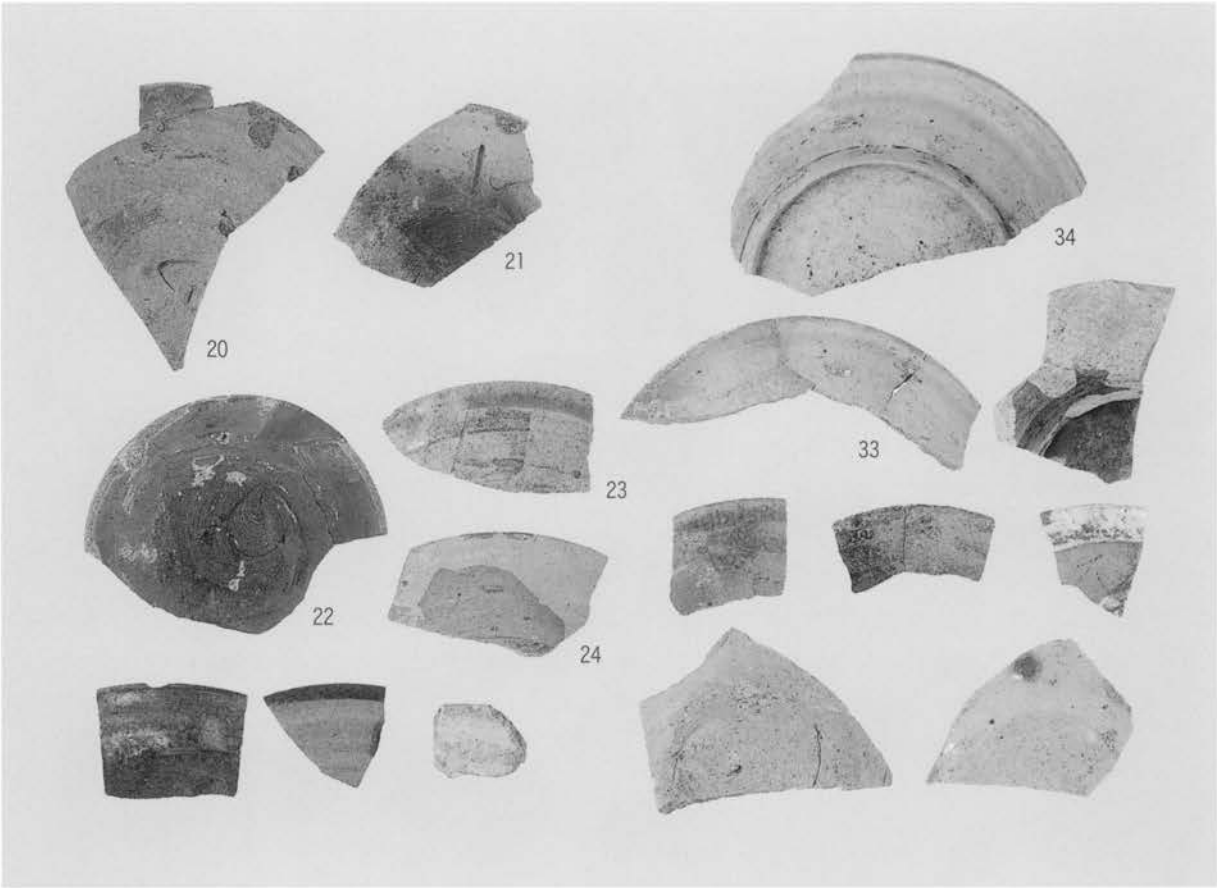
146図80

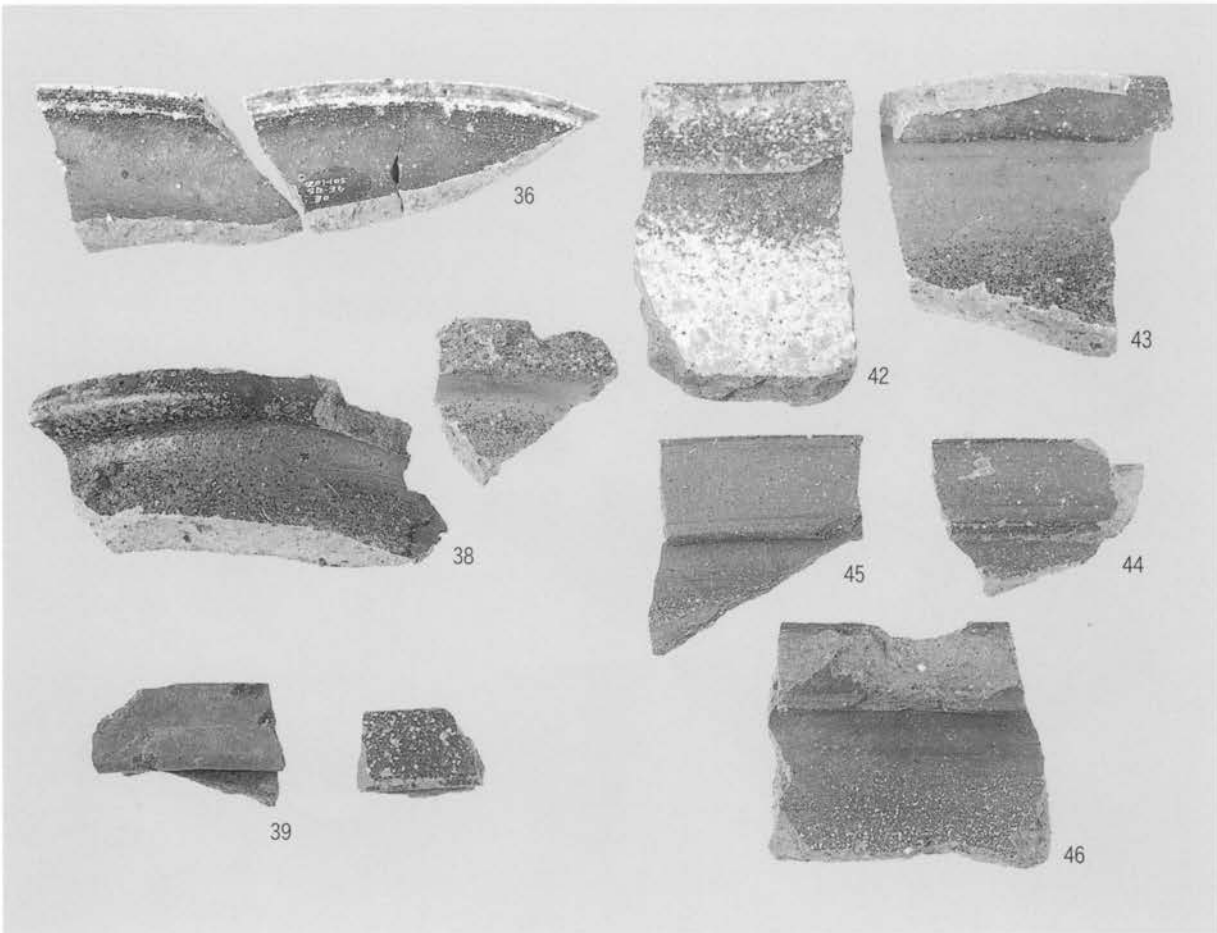
146図82

中世陶磁器・土器

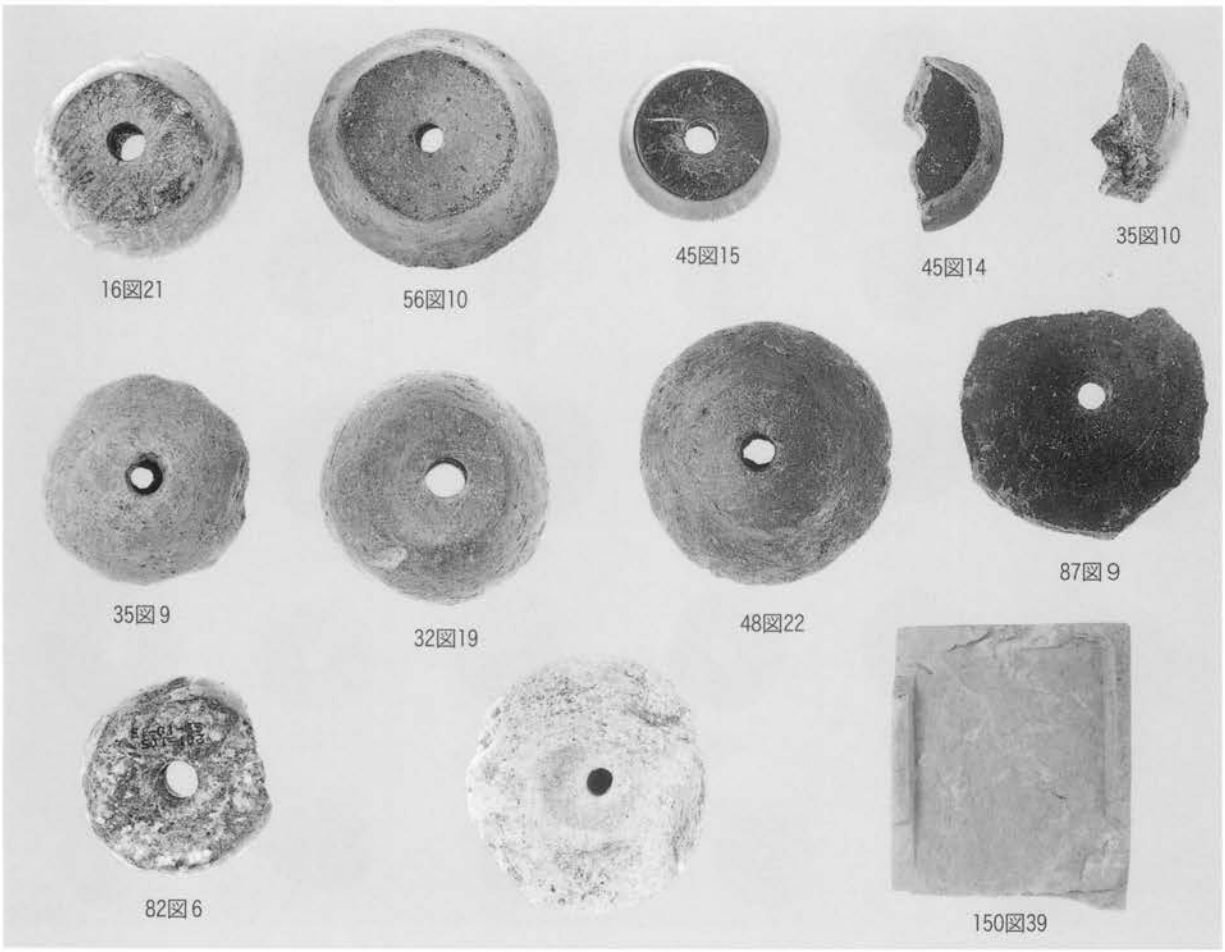


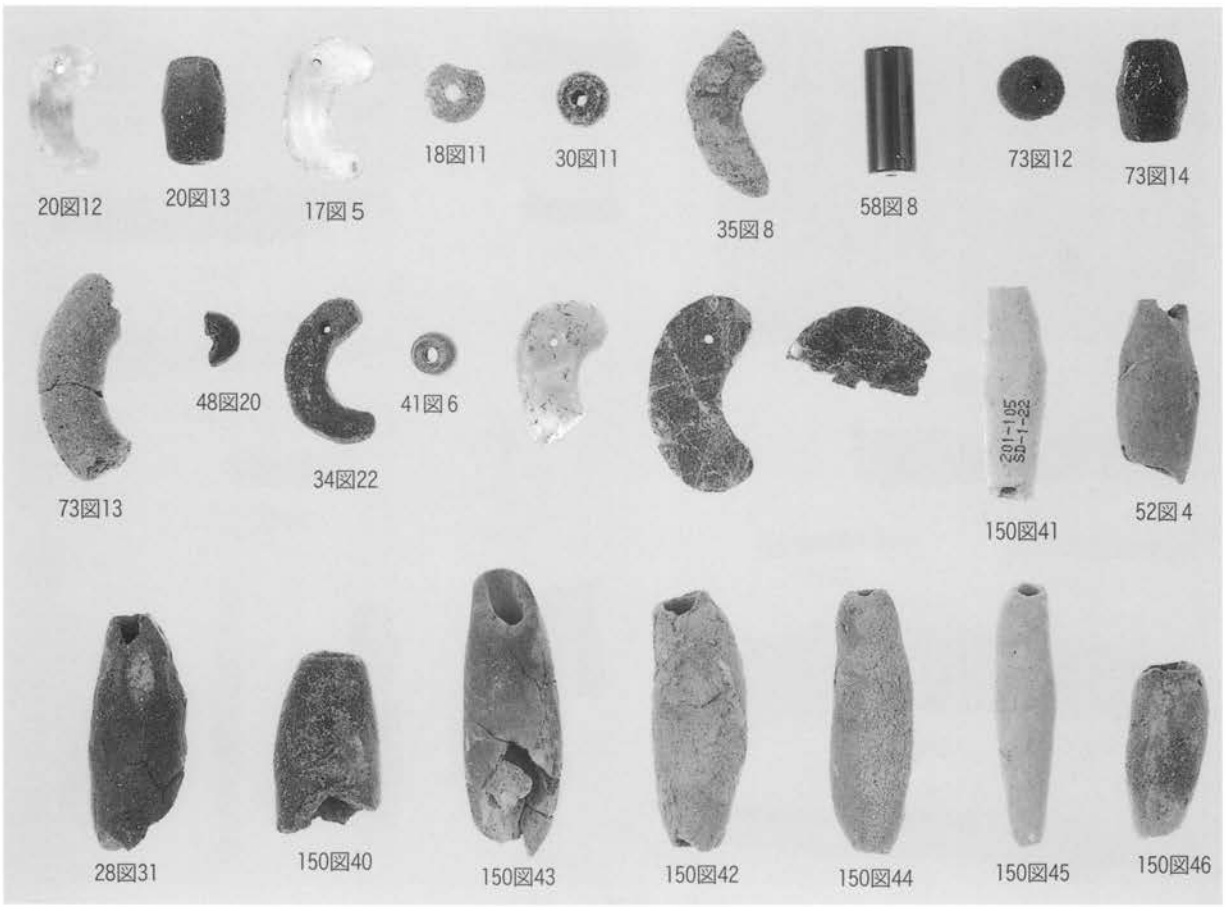
貿易陶磁器，瀬戸・美濃（1）



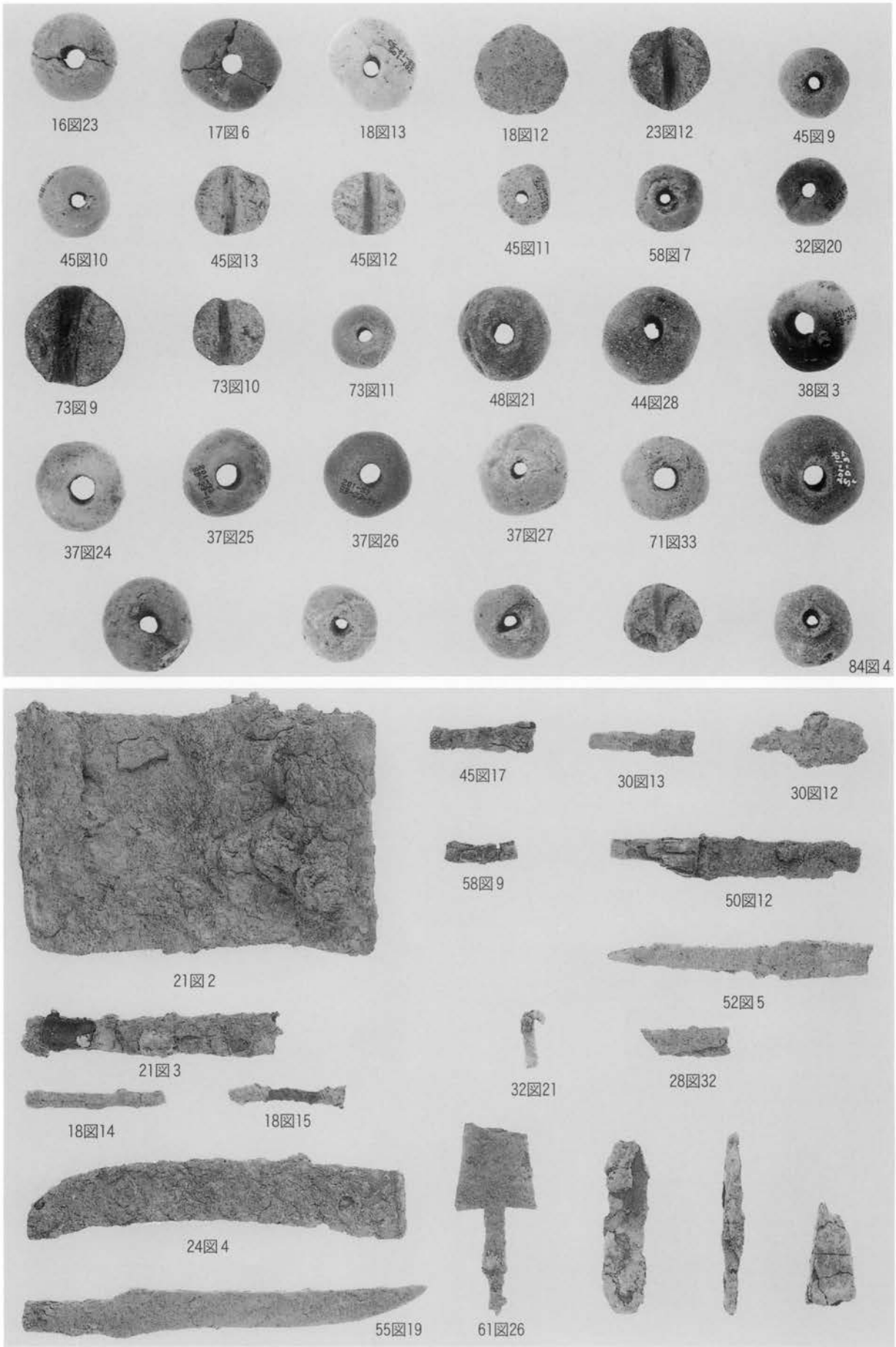


瀬戸・美濃（2），常滑

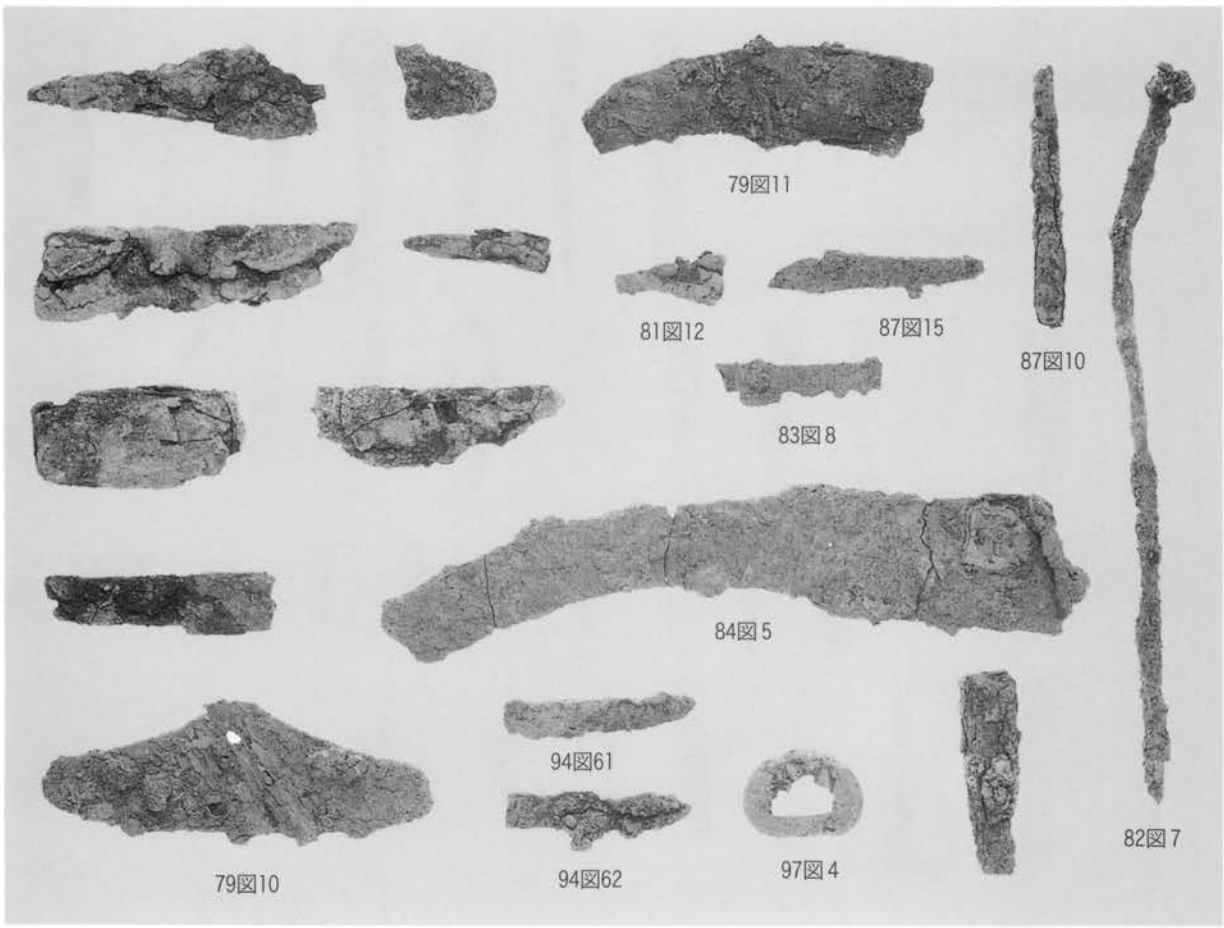

16図21
56図10
45図15
45図14
35図10
35図9
32図19
48図22
87図9
82図6
150図39

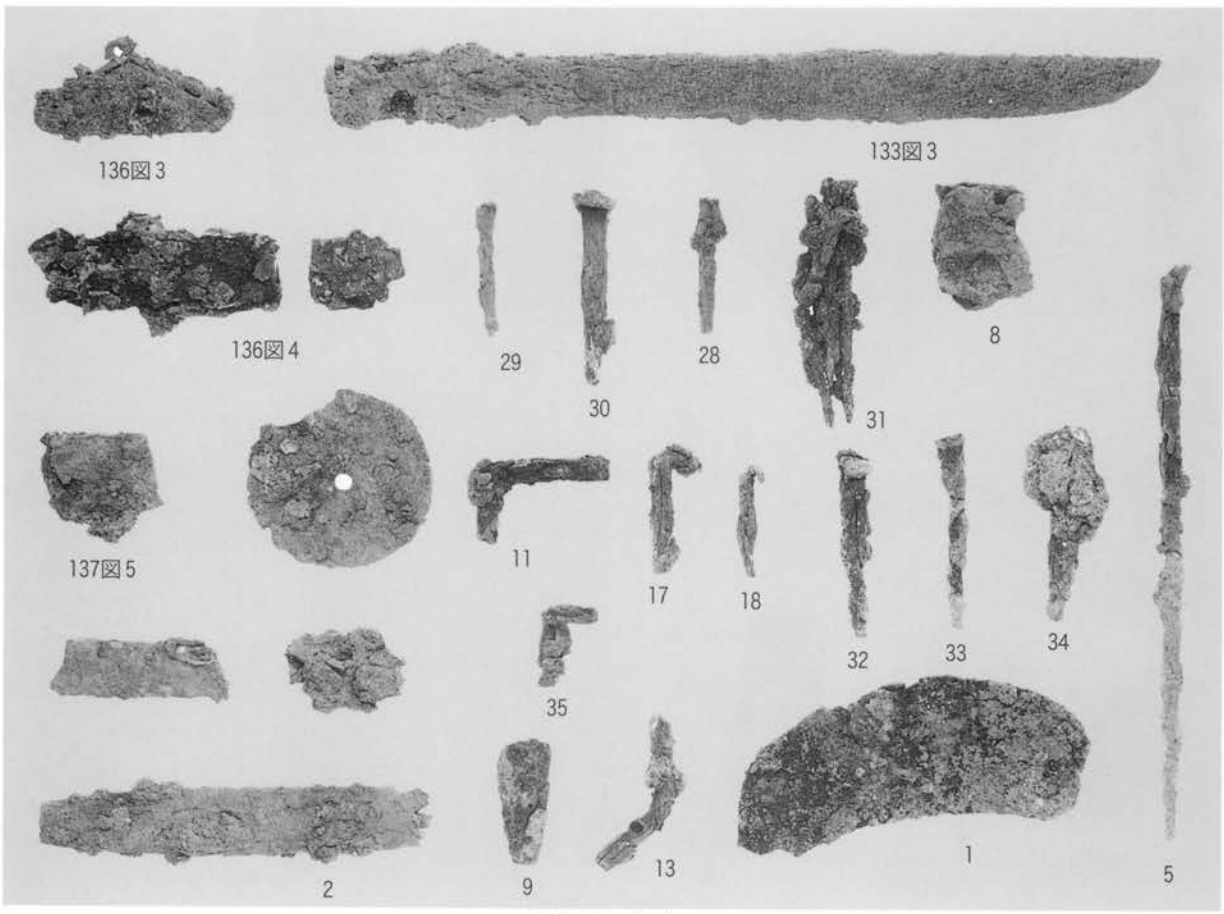

20図12
20図13
17図5
18図11
30図11
35図8
58図8
73図12
73図14
73図13
48図20
34図22
41図6
150図41
52図4
28図31
150図40
150図43
150図42
150図44
150図45
150図46

石製紡錘車，硯，玉類，土錘

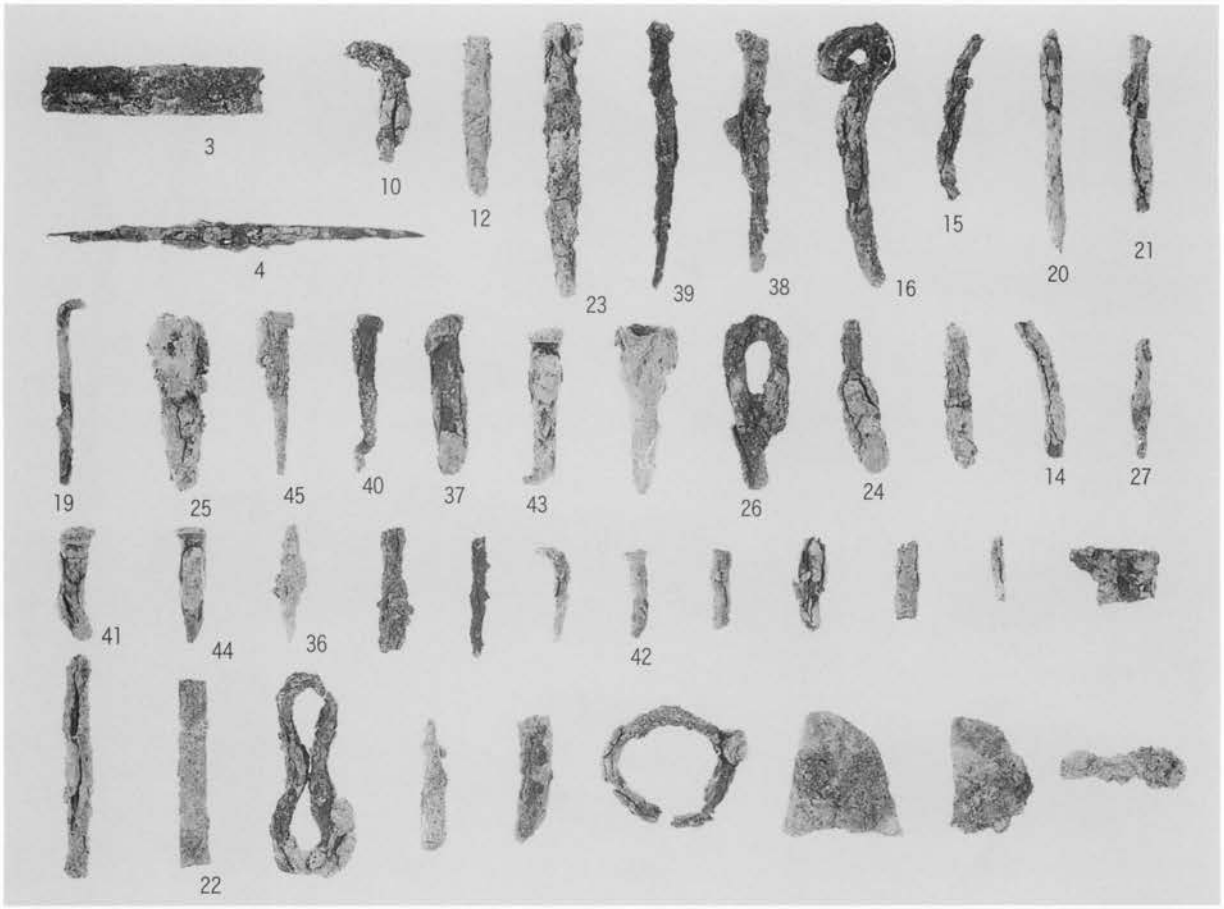

16図23
17図6
18図13
18図12
23図12
45図9
45図10
45図13
45図12
45図11
58図7
32図20
73図9
73図10
73図11
48図21
44図28
38図3
37図24
37図25
37図26
37図27
71図33
84図4
45図17
30図13
30図12
58図9
50図12
21図2
52図5
21図3
32図21
28図32
18図14
18図15
24図4
55図19
61図26

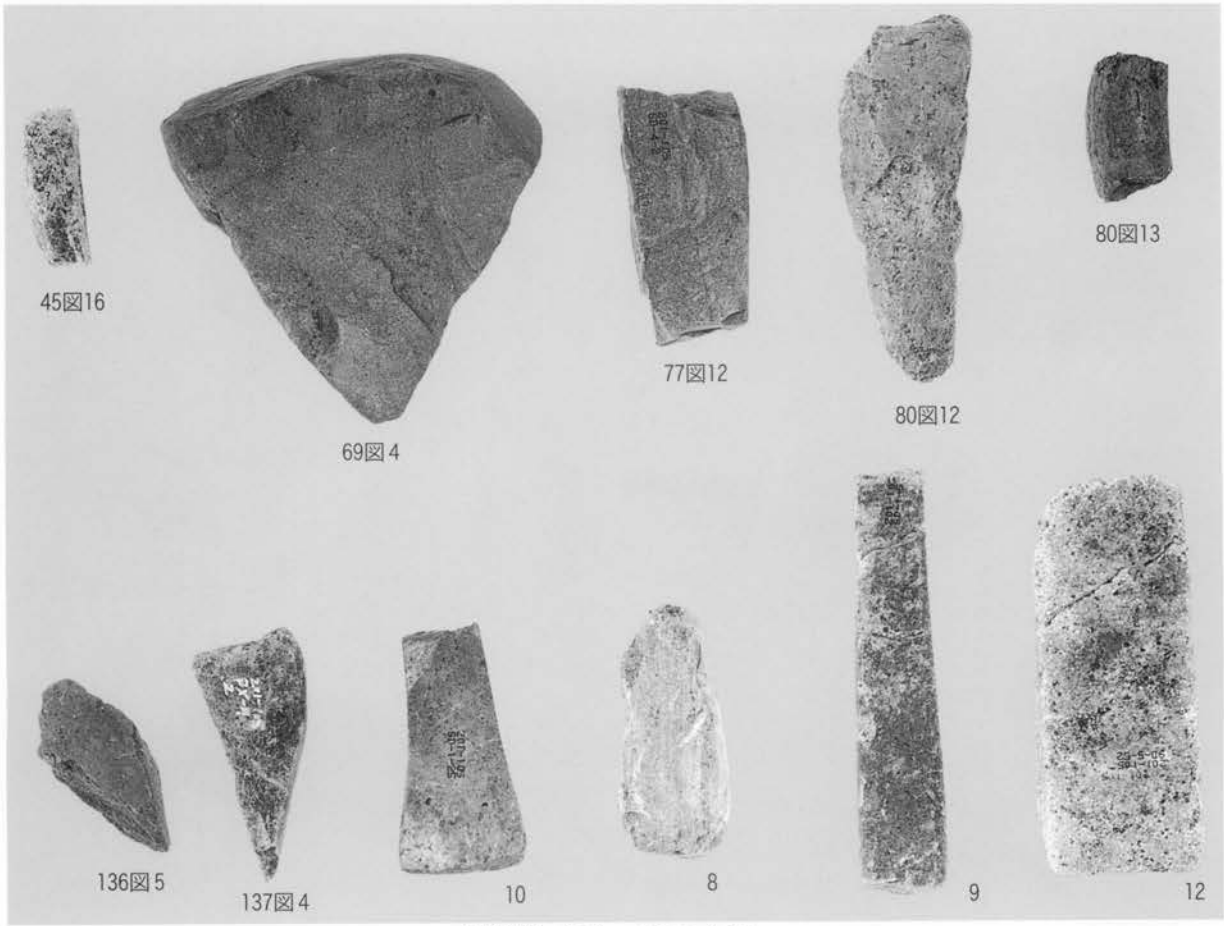
土玉，鉄製品（1）


79図11
81図12
87図15
87図10
83図8
84図5
94図61
94図62
97図4
82図7
79図10

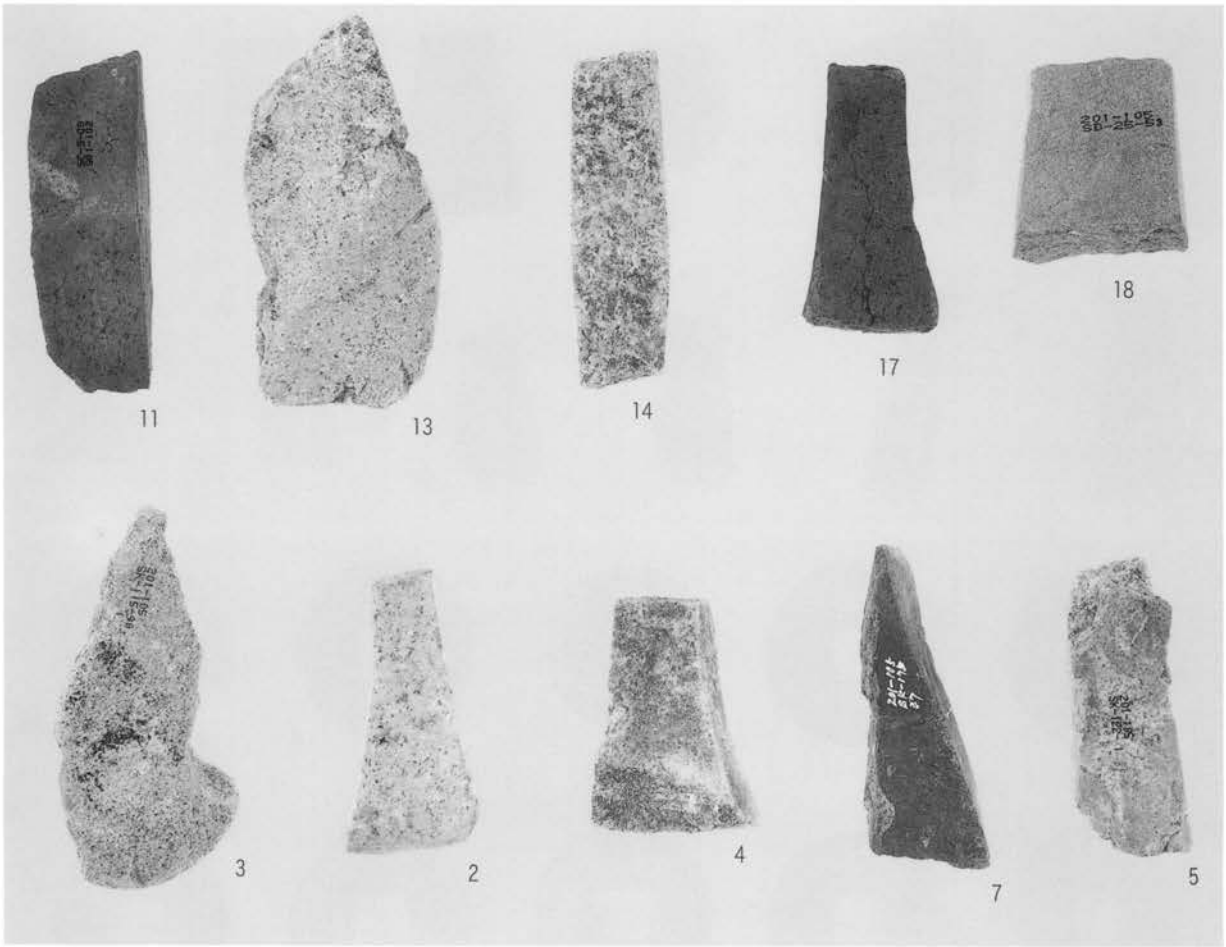

136図3
133図3
136図4
29
30
28
31
8
137図5
11
17
18
32
33
34
35
2
9
13
1
5

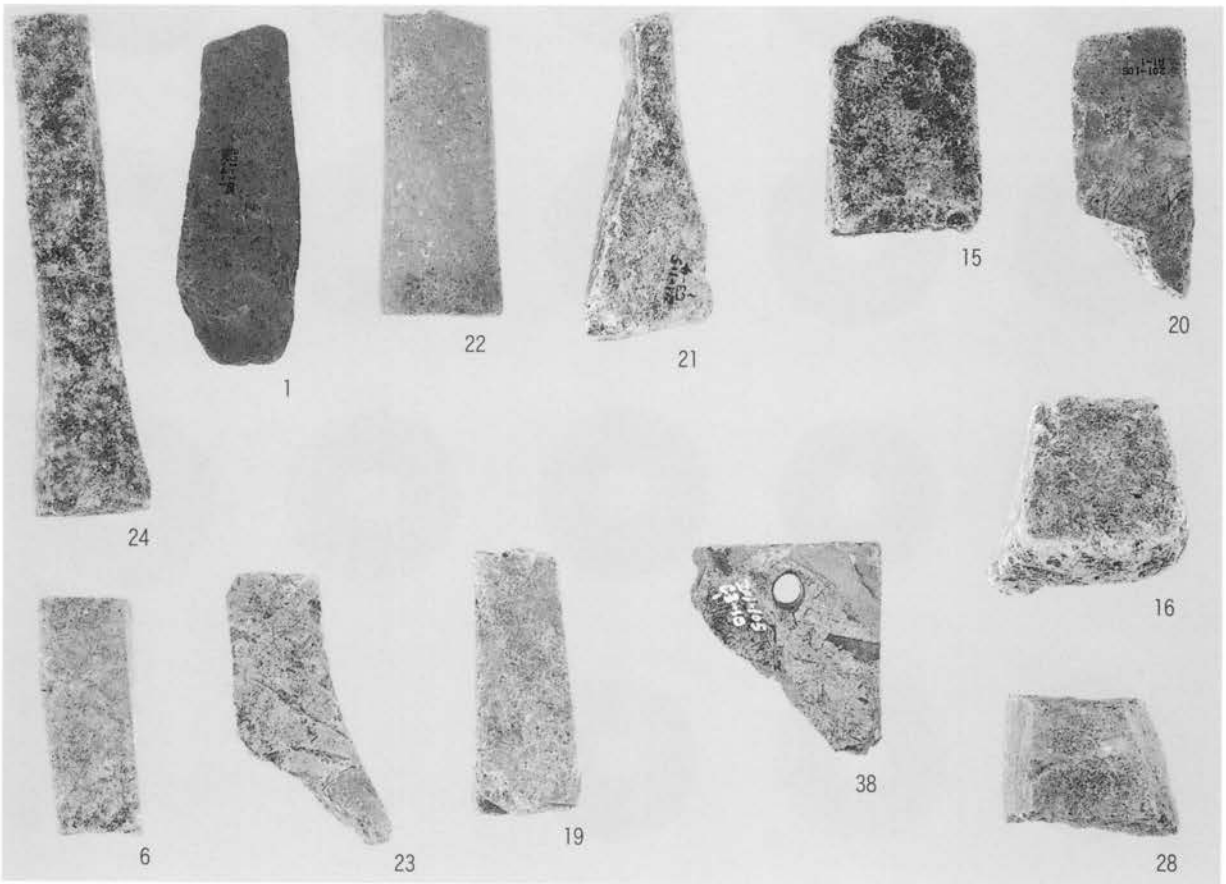
鉄製品（2）


3
10
12
23
39
38
16
15
20
21
4
19
25
45
40
37
43
26
24
14
27
41
44
36
42
22

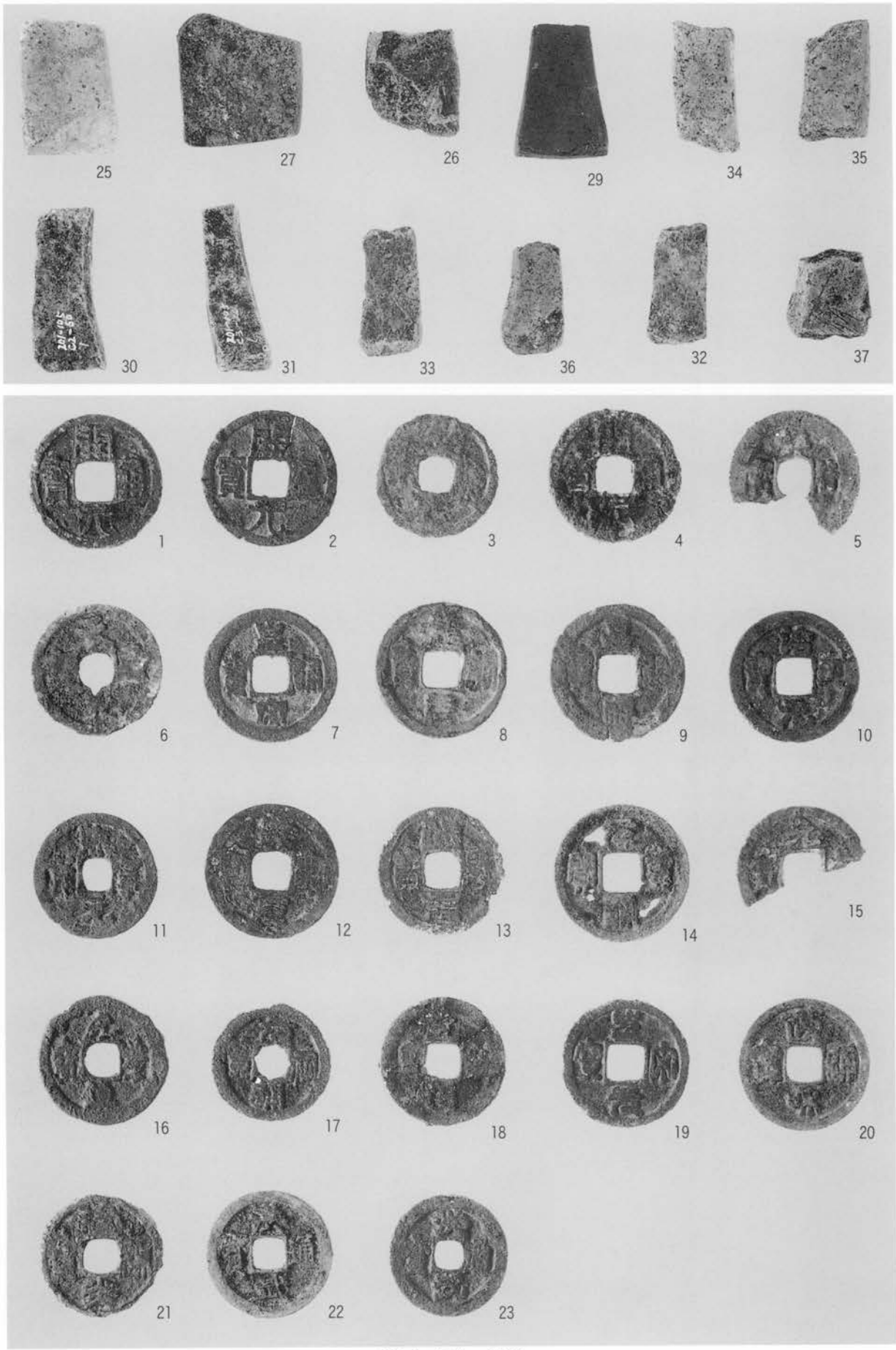

45図16
69図4
77図12
80図12
80図13
136図5
137図4
10
8
9
12

鉄製品（3），砥石（1）





砥石（2），石製品


25
27
26
29
34
35
30
31
33
36
32
37
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

砥石（3），銭貨

報告書抄録

ふりがな	ちばとうなんぶにゅーたうん30
書名	千葉東南部ニュータウン30
副書名	千葉市伯父名台遺跡
巻次	30
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第468集
編著者名	関口達彦，西野雅人
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2
発行年月日	西暦2004年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
伯父名台遺跡（おじなだい）	千葉県千葉市緑区おゆみ野南1丁目6番地他（ちばけんちばしみどりくおゆみのみなみちょうめばんち）	201	105	35度 32分 52秒	140度 09分 45秒	19930406～19930906 19940106～19940329 19940401～19940812	19,700㎡	千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伯父名台遺跡	包蔵地	縄文時代早期以降	竪穴住居跡1軒，陥穴7基，炉穴14基，土坑1基	縄文土器，石器	古墳時代後期の集落跡，平安時代の集落と土坑墓がまとまって検出された。 中世の台地整形区画が7か所検出され，方形竪穴遺構・土坑・地下式坑などが集中している。12世紀末頃から15世紀末の中世集落の様相が明らかになった。
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡51軒，古墳2基，土坑3基	土師器，須恵器，鉄製品(鋤鍬先・鎌・鏃・刀子)，玉類(勾玉・管玉・切子玉)，石製紡錘車，土玉，支脚	
	集落跡 墓跡	奈良・平安時代	住居跡19軒，掘立柱建物跡3棟，小鍛冶1基，土坑33基，円形周溝2基	土師器，須恵器，灰釉陶器，墨書土器，銅銙(丸鞆)，鉄製品(燧金・鎌・紡錘車・刀子)，砥石，支脚	
	集落跡 墓跡	中世	台地整形区画7か所，道路跡1条，堀1条，溝35条，地下式坑7基，火葬施設3基	貿易陶磁器(白磁・青磁・青白磁・鉄釉)，瀬戸・美濃，常滑，カワラケ，鉄製品，温石，砥石，硯，銭貨	

千葉県文化財センター調査報告第468集

千葉東南部ニュータウン30

— 千葉市伯父名台遺跡 —

平成16年３月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　都市基盤整備公団千葉地域支社

千葉市美浜区中瀬１－３

財団法人　千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809－2

印　　刷　　株式会社　東　プ　リ